

---

# 遊戯王GXへ、現実より

葦束良日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GXへ、現実より

### 【Nコード】

N6097W

### 【作者名】

葦束良日

### 【あらすじ】

タイトル通りです。といっても、シンクロを書きたかっただけだったりします。なので、GXのくせにシンクロします。ごめんなさい。ちなみに主人公は最新のOCGRルールを守っています。つまりアニメ効果カードやOCGで禁止のカードは使いません。まあそれは主人公だけで、十代達はバンバン強欲な壺と使いますけどね。そこ以外はテンプレっばいですが、よろしく願います。マナかわいいよマナ。

## 序章（前書き）

神様、GXでシンクロ、現実のカード持ち込み、というテンプレです。さすがに持ち込んだカードは本人が所持していた分だけです。

楽しんでもらえれば幸いです。

## 序章

唐突だけど、いま現在の俺の状況を話そうと思う。

名前は皆本遠也<sup>みなもと へんた</sup>、年齢はもうすぐ十六になる十五歳。公立の高校に進学が決まっていた、どこにでもいる普通の中学生だ。

そんな俺なんだが、今いる場所がどうにも普通じゃない。そして自分の持ち物もまた、なんだかあり得ない。

具体的に言うと、現在地の名称は“童実野町”であり、俺の左手についているのは“デュエルディスク”だ。もちろんデッキは既にセットされている。きつと、これは俺が使っていたデッキの一つなんだろうな、と確認もせずにそう思う。

あとは足元に置かれている少し小さめのジュラルミンケース。これもまた、なぜか俺が持っていたカードが入っているんだとわかる。

……さつと周囲を見渡し、そして近くのものに手を触れてみる。

現実のものかと思えない。ということは、やっぱりここは別の世界。遊戯王の世界、ということでもいいのだろうか。

うん……いやはや。なんというか、なあ。

まあ、この状況を見るに、納得せざるを得ないというか、しかし。

「神様って、本当にいたのか」

とりあえず、俺は茫洋とそんなことを呟いた。

さて、俺がこんな状況に置かれているのには、あるワケがある。

とはいえ、俺自身もそのことをしつかり理解しているわけではない。ただ聞かされただけであり、実感はこれっぽっちもないのだ。

まあ、なんにせよ。聞くところによると、俺はどうやら死んだらしかった。

そのことについては、特に異論はない。俺自身、突然心臓のあた

りに激痛が走ったのは覚えているからな。心臓麻痺か心筋梗塞かは知らないが、そんな感じの心臓に関する何かで俺は死んだのだろう。

だがしかし、どうやら俺の死は自然死ではなかったらしく。そのことについて、俺は謝られてしまった。

そう、神様である。

そう言っているのかはわからないが、とにかくとんでもない存在感を持った何者かだったのは確かだ。気押される、というのを初めて体験した。あれはすごかった、うん。

で、その彼……彼女？ まあいいか。ともかく神様いわく、死神とやらが悪ふざけで俺の名前を死者の一覧に書いたのが原因だったそうだ。

管理が行き届かず、申し訳ない。だそうだ。

……ここは怒ればいいんだろうが、未だに何が起こったのかも理解していなかった俺は、ああうん、と曖昧に頷くだけだった。仕方ないね。

で、神様はそんな俺にこう言ってきた。「お詫びに、違う世界でいいなら身体を再生して送ってあげる。もちろん、幾らかの要望は聞く」と。

この時点で、俺は思った。これはきつと夢か、あまりの痛みで気でも狂ったのだろう、と。

そう結論付けた俺は、くれるというなら貰っておこう、という考

えに至った。解せぬ（自分のことながら）。

で、俺は二つのことを要求した。俺が昔からずっとハマっているカードゲーム、遊戯王OCG。その現在作成中のデッキに足りないカードをくれ、と。

ちなみに俺が作っていたのは遊星のファンデッキ。もちろん、それなりに回るように作っているから、本来なら入っていないカードもいくつかある。いくらかはガチデッキからの流用だし。

で、足りない分というのは 調律 が一枚だ。いくら買っても最後の一枚が全然出なかったのだ。この機会に出来れば楽して手に入りたい。

そう言うと、神様はなんだか困った顔になった。いわく、それだけではあまりにも割に合わないとのことだ。夢か妄想のくせに、律儀である。

仕方ないので、俺はじゃあデュエルディスクをくれ、と要望を付け足した。もちろん、アニメ仕様だ。ソリッド・ビジョン、かっこいいよね。

しかし、神様はそれでも不服らしかった。が、所詮は夢か妄想。それ以上言ったところで空しくなるだけに決まっている。というわけで、俺はそれ以外は特にない、と告げた。

すると、神様は不服そうにしながらも、それでいいなら、と断っていた。

で、神様はこう言った。その作品がそんなに好きなら、そのよう

な世界に送ってあげよう、と。

はあ、どうも。と胡乱気にいう俺に、神様はすっと腕を一振り。それだけで、俺の意識は急速に遠のいていった。

最後に聞いた声は、申し訳なさそうに謝る声と、俺のこれからの幸せを願う言葉だった。

で、気が付いたらここにいた、と。

うーん、あの時はあんなのが現実だとは思っていなかったが、目の前に広がる街並みを見ると、とても夢とは思えない。

実際、あの痛みは洒落にならないぐらいのものだったし……やつぱり、これってあの神様の言うことが本当だったってことなのか？

「……まあ、心残りはそれほどないから、いいけど」



高校に通えなかったのは残念だが、それだけだ。

家族とはすでに死別しているし、お世話になっていた親戚の家も、あまり居心地はよくなかった。苛められたわけではないが……雰囲気  
気が邪魔だと言っていた、という感じが。

友人に別れを言えなかった、というのが人間関係では唯一の未練  
かね。……その友人自体、数人しかいなかったけど。

おっと、そんな悲しい記憶は置いておいて。

「うーん、とりあえず歩くか。わかりやすい目的地もあるし」

口に出して言って、歩き出す。

目的地とはもちろん、あそこ。主人公の家でもあるおもちゃ屋だ。

とりあえず、まずはそこに行ってみよう。

何といっても、あてが全くないのだ。一方的とはいえ、身元が確  
かな人物を訪ねたいと思うのは、仕方がないものと思いたい。

そんなわけで、俺はこの世界での一步を踏み出したのだった。



第1話 入学（前書き）

初デュエル。

## 第1話 入学

その一年後、俺は海馬ランドの施設にいた。

何故かと言うと、デュエルアカデミアの入学試験を受けるためである。俺、もうすぐ十七になるのに……。これでは、年齢的に中学でダブったことになってしまう。仕方ないとはいえ悲しいことだ。

とはいえ、この世界のことを体験から学んできてくだサーイ、と言われては断れないわけ。しかも、海馬ボーイ（俺がそう呼ぶとキれる）に話はつけてあるとか言うので、お世話になっている身としては頷くしかなかった。

その話をした時、遊戯さんは苦笑して頑張れと言ってくれた。あの人は本当にいい人だ。饒別に、と言ってカードを渡してくれようとしたけど、丁重に断った。

いや、好意は嬉しいのだが、俺はこの世界のカードを使うつもりが全くなかったからだ。

理由は簡単。俺はこの世界に元の世界で作った二つのデッキ含め、所持していたカード全てと一緒にやって来た。そして、それが俺の持つあの世界との関わりのも全てだ。未練がましいかもしれないが、それ以外のカードを使ってデッキを組む気には、どうしても俺はなれなかったのだ。

そのことを遊戯さんも知っている、だから、遊戯さんはハツとした顔になると、わかったと頷いてくれた。うん、やっぱりいい人だ。

そこで終われば綺麗に締められたのだが、「じゃあ私がついていきまーす」と言って精霊が一人ついてきた。解せぬ。

けどまあ、とんでもない美少女であったし、何よりよく話す仲で友人のように思っていたのでその申し出は嬉しかった。

誰しも、一人は寂しいものである。

ちなみに、そいつは今俺の二つ目のデッキのカードに宿っている。偶然、同じカードを持っていたから都合がよかったと言えばよかったのだろう。

「次！ 受験番号13番！」

おっと、気がつけば俺の番になっていたようだ。

ちなみに俺の受験番号が13番だったのは、単純に筆記でそこそこ間違えてしまったからだ。OCG通りだったりアニメでは効果が異なっていたカードだけなら良かったんだが、アニメでは触れられていないのにOCGとは効果が違うカードとかあったんだよ。そんなんわからんて。

それにしても13番……不吉な数字が不安をおおるぜ。

『がんばってね、遠也』

「おっ」

まあ、「こうして応援してくれる奴もいることだし、頑張るとしましようか。

そんなこんなで、俺はデュエルフィールドに立ち、対戦者となる試験官と向き合う。

「受験番号13番。皆本遠也です」

「よろしい。それでは実技試験を始める。リラックスして、普段の力を出せるようにしなさい」

「はい」

あちらがデュエルディスクを構え、こちらも同じく構える。

そして、互いに始まりの一言を叫ぶ。

「デュエル！」

遠也 LP:4000

試験官 LP：4000

互いに手札五枚を引き、デュエルディスクを確認する。先攻は…  
…向こうか。

「私の先攻、ドロー！」

試験官の先生が、シュピーンと効果音がつきそうなほどに勢いよくカードをディスクから引き抜く。いいけど、カードを傷めないのかねそれ。

「私は《神獣王バルバロス》を妥協召喚！ 更にカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

《神獣王バルバロス》 ATK/3000 1900 DEF/1  
200

おい、試験用デッキ使えよ。

しかも、バルバロスとか。元の世界でもそれなりに高価で有名だったが、この世界ではとんでもない高値がつく激レアカードだよ。くそんなカード持つてるなこの人。

っていうか、バルバロスとなると、あの伏せカードのどちらかが

《スキルドレイン》の可能性が高いな。妥協召喚では攻撃力1900だが、スキドレの発動下では元々の3000に早変わりだ。この世界では破格の攻撃力と言えるだろう。

まあ、とはいえ……。

「俺のターン、ドロー！」

実は俺の初期手札的に、すでに勝てるんだけど。

現在の手札はちなみに、

- ・クイック・シンクロン
- ・シンクロン・エクスペローラー
- ・ボルト・ヘッジホッグ
- ・くず鉄のかかし
- ・レベル・ステイラー
- ・サンダー・ブレイク

である。

そう、勝てるんだが……さすがに、このデッキの切り札を使うわけにもいかんしなあ。あのカード、LP4000の世界じゃ鬼畜すぎる。元々の攻撃力4000で複数攻撃可能かつ魔法・畏・効果モンスターの効果が効かないってどんだけだよ。

というわけで、今回は別の戦術でいく。というか、切り札には今後もずっと切り札のままでもいいからおうと思う、うん。



「俺は手札の《レベル・ステイラー》を墓地に送り、チューナーモンスター《クイック・シンクロン》を特殊召喚！」

まずは、テキサスのガンマンのような風体をしたモンスターがフィールドに降り立つ。

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

「クイック・シンクロン？ 見慣れないモンスターだな……」

まあ、そうでしょうね。ペガサスさんがシンクロ召喚を提唱したのはまだ一週間前のことですし。

おっと、それは置いておいて。今はデュエルデュエルっと。

「更に、クイック・シンクロンのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを墓地から特殊召喚する。来い、レベル・ステイラー！」

墓地のカードをフィールドに置く。同時に、背中に1つ星が描かれたてんとう虫が現れる。

《レベル・ステイラー》 ATK / 600 DEF / 0

「更に俺は《ボルト・ヘッジホッグ》を守備表示で通常召喚！」

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK / 800 DEF / 800

背中にボルトが刺さった、名前そのままなネズミが召喚された。  
うーん、チューと鳴くのが可愛い。俺の周囲には不評だったが……  
こいつ、可愛いよね？

しかし、やっぱり表側守備表示便利だな。特にこういう状況では、  
セットされてると意味がないし。

しかし、周囲は俺の行動に何やら疑問顔だ。攻撃力イコール強さ  
の風潮が強く、ビートダウンが大半なこの世界。低ステータスのモ  
ンスターを並べることに、あまり意味を見いだせないのだろう。

が、試験官の先生は反応が違った。

「待てよ、チューナー？ そういえば聞いたことが……まさか!？」

その反応に、思わずニヤリ。さすがは先生。発表されたばかりに  
もかかわらず、きちんと勉強していたみたいだ。

「そのまさかですよ、先生。俺はレベル1のレベル・ステイラーにレベル4となったクイツク・シンクロンをチューニング!」

クイツク・シンクロンが銃を抜き、現れたルーレットを打ち抜く。打ち抜かれたのは、ジャンク・シンクロンの絵だ。

そしてクイツク・シンクロンは四つの輪となり、レベル・ステイラーが一つの輝く星となってその輪をくぐる。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ!」

ひととき強い光がそれらを包み、その中から青い体躯を持った機械の戦士が現れる。

「シンクロ召喚! 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》!」

飛び出したジャンク・ウォリアーが力強く拳を突き出し、フィールドに降り立った。

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 DEF/1300

うーん、何度見てもかっこいい。さすがは遊星のエースモンスター!。最終回でクイツクがフィニッシャーになった時は感動したね。

そんな感想に浸る俺とは裏腹に、なんだかざわざわし始める会場の定、大騒ぎのようだ。たぶん、初めて見るだろうからね、みんな。

「し、シンクロ召喚!? それはまだ発表されたばかりで、実用はされていないはず……!」

先生も大変驚かれている様子。ふふふ、この周囲の反応がシンクロ召喚の楽しみの一つだね。何ととっても、この世界でシンクロ召喚を使うのは今のところ俺しかいないわけだし。ふっふっふ。

『悪い顔してるなあ、もう。それよりほら、説明しなくていいの?』

おっと、そうだった。発表されたばかりということとは、知らない人のほうが多いということ。一応、仕事として説明をしないわけにはいかない。

こほん、とひとつ咳払いをして話し出す。なぜなにシンクロ!の始まりである。

「シンクロ召喚とは、チューナーモンスターとそれ以外のモンスターを使って行われる召喚方法です。フィールド上に存在するチューナーとそれ以外の素材となるモンスターを墓地に送り、そのレベルの合計分と等しいレベルを持つシンクロモンスターを融合デッキか

ら特殊召喚する。それがシンクロ召喚です」

懐から取り出したマイクを使って、説明をする。なるほど、と頷いている姿を確認してから、さらに言葉を続ける。

「ちなみにこの新たな召喚方法は一週間ほど前にE?社のペガサス・J・クロフォード会長から発表されました。そして、私はそのテスター兼普及担当として選ばれたので、こうしてこの召喚方法を使ってデュエルしています。わからないことがあれば、ぜひE?社日本支部、KC社、あるいは最寄りのカードショップにお問い合わせください。また実装についてはもう少し先になりますので、あしからず」

よし、仕事終わり。

というわけで、さっさとマイクをしまい、改めてディスクを構える。続き、続きっと。

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！ シンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！ 《パワー・オブ・フェローズ》！」

現在の俺の場にいるレベル2以下のモンスターは、ボルト・ヘツジホッグ1体。その攻撃力がジャンク・ウォリアーに上乗せされる。

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 3100

「攻撃力が3000を超えた!？」

ギョツとする先生。攻撃力3000が最高水準の環境では、やはり驚きなのだろう。以前、これで青眼を殴り殺された時の海馬さんの顔したら、こっちが殺されるかと思っただもんだ。

さあて、これで攻撃力は十分。いくとしますか。

「バトル! ジャンク・ウォリアーで神獣王バルバロスを攻撃!

《スクラップ・フィスト》!」

これが決まれば、バルバロスは倒され、先生は1200のダメージを受ける。とはいえ、そう簡単にはいかないだろうけどね。

「畏発動! 《攻撃の無力化》! その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる!」

やっぱり。

さすがに伏せカードが二枚もあると、そう簡単に攻撃は通らない

か。

「メインフェイズ2に移行。俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドです」

しかし、バルバロスを倒せなかったのは痛いな。あの伏せカードが《スキルドレイン》だとしたら、ジャンク・ウォリアーの効果は意味がなくなる。発動しないってことは違う可能性もあるが……。

いずれにせよ、一応対策はあるし、大丈夫だろう。

俺のエンド宣言を聞き、先生にターンが移る。

「私のターン、ドロー！ 私は伏せていた永続罫、《スキルドレイン》を発動！ LPを1000払い、この効果で神獣王バルバロスの攻撃力は元に戻る！ それは、君のジャンク・ウォリアーも一緒だ！」

試験官    LP：4000    3000

《神獣王バルバロス》 ATK/1900    3000

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/3100    2300

あらら、やっぱりかぁ。ってか、なんで俺のターンで発動しなか

ったんだ。様式美だろうか。

「私は更に《ダーク・ヒーロー ゾンバイア》を召喚！ バトル！  
神獣王バルバロスでジャンク・ウォリアーに攻撃！ 《トルネー  
ド・シェイパー》！」

バルバロスが厳つい顔を更に険しくさせながら突進してくる。先生の思惑通り、スキルドレインのおかげでこちらの攻撃力は下がり、あちらは上昇した。このままでは破壊されるが……。

ま、そうは問屋がおろさないってね。

「畏発動！ 《くず鉄のかかし》！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にする！」

「くつ、防がれたか……」

キヤー、くず鉄センサー！

さすがはくず鉄先生。どんな攻撃だってお茶の子さいさいだぜー！

「更にくず鉄のかかしの効果、発動後このカードは墓地に行かず再び場にセットされる」

「なんだって！？ それでは……」



「はい。このカードを破壊するか、2体以上のモンスターで攻撃をするしかありません」

苦虫を噛んだような顔になる先生。

ふふふ、この場持ちの良さが先生と呼ばれる所以ですよ。なぜかアニメでは二回目が発動する前に破壊されてばかりだが、現実で実際に出すと地味に効いたりするんだよね。

「ゾンバイアの攻撃力は2100……僅かに及ばないか。では、私はボルト・ヘッジホッグを攻撃！」

さすがにこれはどうしようもない。ボルト・ヘッジホッグは破壊されて墓地に行った。ごめんよ、俺の癒し。

「一枚カードを伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードは《調律》。……やっぱり主人公級のチートドローは俺にはないようだ。まあ、このままでもいけるからいいけどな。

「まず伏せていた罫カード発動！ 《サンダー・ブレイク》！ 手札を1枚捨て、先生の場のスキルドレインを破壊する！」

「くっ……」

雷がフィールドに降り注ぎ、スキルドレインのカードを破壊する。これで、準備は整った。

「そして、俺はジャンク・ウォリアーのレベルを一つ下げ、レベル・ステイラーを墓地から特殊召喚！ 更に《シンクロン・エクスペローラー》を召喚！」

《シンクロン・エクスペローラー》 ATK/0 DEF/700

身体の真ん中に空洞を持つモンスターが召喚される。周囲は攻撃力0のモンスターを攻撃表示で出していることに驚いている。いや、さっき説明したでしょうに。

「シンクロン・エクスペローラーの効果発動！ 召喚成功時、墓地のシンクロンと名のつくモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！ 蘇れ、クイック・シンクロン！ そしてチューナーが場にいるため、墓地からボルト・ヘッジホッグを特殊召喚！」

というわけで、フィールドにはジャンク・ウォリアー、レベル・

ステイラー、シンクロン・エクスプローラー、クイック・シンクロン、ボルト・ヘッジホッグの五体が並ぶ。

これで墓地がすっからかんだ。墓地のモンスターを使いすぎである。

「一気にモンスターゾーンを埋めるとは……。チューナーを蘇らせた以上、またシンクロ召喚をするつもりか？」

その問いに返す答えは決まっている。

「もちろんです！ 俺はレベル1のレベル・ステイラーとレベル2のシンクロン・エクスプローラーに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが打ち抜いたのは、ジャンク・シンクロン。そして、光の輪となったクイック・シンクロンに続き、3つの星が輝きを放つ。

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》 ATK/2600 DEF/2500

光の中から現われるのは、4本の腕を持つスーパーロボットのよ  
うなモンスター。こいつもまた、ジャンク・ウォリアーとは違った  
意味でロマン溢れるモンスターだ。

そして、こいつの効果は強力だ。早速いくぜ。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ シンクロ召喚に成功し  
た時、シンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフ  
ィールド上に存在するカードを選択して破壊できる！ 素材とした  
チューナー以外のモンスターは2体！ 俺は先生のフィールドの伏  
せカードと、神獣王バルバロスを破壊する！ 《タイダル・エナジ  
ー》！」

「な、なんだって!？」

ジャンク・デストロイヤーからエネルギーの奔流が解放されたれ、  
それはフィールドを覆うように飲みこんでいく。

そしてその奔流が過ぎ去ったあと、先生のフィールドに残ってい  
るのはゾンバイアが1体だけだった。

「バトル！ ジャンク・デストロイヤーでゾンバイアに攻撃！ 《  
デストロイ・ナックル》！」

「くっ……!」

試験官 LP3000 2500

「更にボルト・ヘッジホッグとジャンク・ウォリアーでダイレクトアタック！ 《スクラップ・フィスト》！」

「うわぁあっ！」

試験官 LP:2500 0

先生のLPが0をカウントし、決着となる。

うん、終わってみれば開始2ターンで1ターンキルか。こっちのLPは削られていないし、まあ上等な結果だろう。

それに公の場で初めて行うシンクロ召喚でジャンク・ウォリアーを呼び出すという俺の夢も叶ったし。これでこっちの世界でもシンクロモンスターの代名詞になってくれるといいなあ。

『あ、遠也。試験官の人がこっち見てるよ』

おっと、なんだろう。何か連絡事項でもあるんだろうか。

「受験番号13番。合否は追って通知するから、今日はもう帰って

もよろしい。……あと、個人的にシンクロ召喚というものをこの目で見て楽しかった。ありがとう」

「あはは、いえいえ、どうも」

なんだかいい笑顔で満足げに言う先生に愛想笑いで返しつつ、俺は会場を後にする。周囲から聞こえるざわめきから、シンクロ召喚の実演としても上手くいったようだ。

この世界でお世話になったペガサスさんに、これで少しでも恩返しができるといいんだけど。

ちなみに俺がお世話になった人は、遊戯さん、海馬さん、ペガサスさんといったこの世界のそうそうたる顔ぶれである。

遊戯さんはこの世界で初めて頼った人であり、当時改めて現実を受け入れて色々混乱していた俺に根気強く付き合ってくれた人だった。彼の精霊も一緒に、いささか情緒不安定だった俺を支えてくれたのだ。ちなみに、精霊は何故か見えた。

そして遊戯さんの紹介で海馬さん、ペガサスさんに会った。そして二人にも俺の境遇を話し、海馬さんには戸籍の世話を。ペガサスさんには生活の世話を受けたのだ。

海馬さんも、普段なら俺ごとき気にもしないだろう。だが遊戯さんの紹介であることと、強制的に天涯孤独となった境遇に何か思うことがあったのか、破格の対価で手を貸してくれた。それでも対価をきっちり取るあたりは、さすがにしっかりしている。

そしてペガサスさんには保護者として生活を支援してもらった。代わりに俺は自分の世界のシンクロという概念の提供をした。他にも実際にOCGにあったカードの説明や、様々な情報の提供を行うことを約束し、俺はこの世界での基盤を手に入れたのだ。

ちなみに、シンクロ召喚がこの世界でも可能になったのは、海馬さんのおかげだ。俺の話を聞き、新たにデュエルディスクに改良を加えたのだとか。これによって、この時代のデュエルディスクでもシンクロ召喚が行えるようになったのだ。

俺のディスクは神様からもらった特別製で、時代的には5D'sかそれ以降のものだ。オートシャッフル機能も付いてるし。だからこそ俺はシンクロ召喚ができるが、通常のディスクではできない。それゆえの改良だった。

そしてペガサスさんがシンクロを実用できるようにしたのがつい最近のこと。ただし相当なレアカードという位置づけになるらしく、完全に普及するには数年以上かかることになるだろう。

とまあ、そんなこんなで何とかやってこれた俺だが、これからはついにアカデミアで学生をやることとなるわけだ。

さすがにあれだけやって不合格ということもないだろう。これで不合格なら泣くぞ。そして海馬さんに抗議してやる。一蹴されるだろうけど。

まあ、なにはともあれ。

「これで俺も高校生か。一年遅れだけど。ダブリだけど」

『まあまあ。その代わり、私に会えたと思って』

「それは確かに。ありがとう親友」

『親友かあ。いいけどね、別にー』

俺の横をふわふわ浮かぶいかにもな魔女っ子と話しつつ、俺はひとまず帰路につく。

これから始まる新生活。GXという名の人生の1ページに、自分がどのように関わっていくのかを考えながら。



## 第1話 入学（後書き）

うん、デュエルって書くの難しいね。  
遊戯王のSS書いてる方たちってホントに凄いと実感します。

第2話 十代（前書き）

やっと十代出てきた！  
主人公かっこいいよ、主人公。

## 第2話 十代

デュエルアカデミア、ライイエロー寮の一室。

オベリスクブルーの寮に比べれば貧しく、オシリスレッドと比べれば上等な、そんな間を取った普通な部屋のベッドの上で寝ていた俺は、呼びかける声に意識を覚醒させていく。

「ほら、遠也。朝だよもう」

「ご丁寧に実体化までしているらしく、布団越しに身体を揺さぶられてもいるようだ。」

比較的寝起きはいいと自覚している俺だが、しかしそれがイコール早起きに繋がるわけではない。むしろ寝られるなら好きなだけ寝ていたい。それが退屈な授業を控えた学生ともなれば、なおさらだろう。

だがしかし、授業があるからこそ起きなければならぬというもの、学生の悲しい定め。いささかならず抗いがたい魅力が布団にあるのは確かだが……ここは涙を飲んで起きるとしよう。

そんなわけでむくりと上半身を起こし、隣で「あ、起きた」なん

て呟いている奴に顔を向ける。そして、毎朝恒例の朝の挨拶。

「おはよ、マナ」

「うん、おはよう遠也」

にっこり笑って返すのは、俺についてきた遊戯さんのカードに宿っていたはずの精霊。

《ブラック・マジシャン・ガール》のマナであった。

俺とマナの出会いは、実に一年前にさかのぼる。当たり前だけど。

ともあれ、その時の俺は間違いなくこの世界が現実のものと思えざるを得ない現状に、軽度の鬱っばい感じになっていた。

いやだつてさ、現代日本に似ているとはいえ、いきなり違う世界だからね。家族、友人、親類縁者、その他十五年かけて俺が培ってきたものが全て消滅したわけですよ。

そりゃ、いくら同居人との仲が悪かったからといって、まったくシヨックを受けないなんてことはないわけですよ。

まして、この世界は常識まで俺の世界とは微妙に異なるのだ。何かあれば「おい、デュエルしろよ」の世界である。最初、上手くなじめずに気持ちが悪くなるのは仕方がないと許してほしい。

この世界でいきなり遊戯さんを訪ね、そして俺の事情を聞いて快く俺に宿を提供してくれた武藤家の皆さんには感謝してもしきれない。まして、そんな状態の俺に優しく接し続けてくれたのだから、その感謝度たるや天井知らずである。

そして、その時によく話しかけてきてくれたのがマナだった。一応同年代（見た目と精神年齢的に）であるし、マナが明るくつつきやすい性格だったからだろう。遊戯さんや彼女の師匠である《ブラック・マジシャン》のマハードも、積極的に俺と関わらせようとしていたと思う。

俺はそんなマナの性格に影響されたのか、だいぶ精神的に楽になったし、素の自分をさらけ出してこの世界を生きる気持ちも芽生えさせることができた。尤も、マナがかなりの美少女であったことが関係なかったかといえ、もちろんあつたりもするのだが。

まあそれは置いておいて。その結果、俺にとってマナはこの世界で一番親しい存在となったのだ。友人、親友、ちよっと照れ臭いがそんな関係だろうか。

向こうも俺の自意識過剰でなければ、俺のことをそれなりに親しく感じてくれているように思う。

それが俺とマナの関係だった。

言葉にこそしないが、俺はマナの存在に感謝している。俺についできてくれると言ってくれた時も、本当は嬉しかった。そんなこと、恥ずかしくて言えやしないけどな。

まあ、とはいえ……。

「普段は口やかましいだけだけどな」

『それ、誰のこと？ あ、もしかしなくても私でしょ！ もう、毎朝起こしてあげてるのは誰だと思ってるの！？』

「お黙りマナガール。誰かといえればお前のことだが、毎朝きちんと感謝している。ありがとう」

『え、うん、どうしたしまして？ ……あれ、ここは怒るところ？』

「笑えばいいと思うよ」

そんな複雑な言い回しでもなかるうちに、納得いかなそうに首をかしげるマナはなかなか愛らしい。言つと調子に乗るかもしれないから言わないけど。

授業も終わり、ぶらぶらと二人で歩く（片方は浮かぶ）散歩道。こうして二人きりになる時間は居心地がいい。

俺の事情を余すところなく知っている相手であるし、気を使う必要がない相手でもある。それがこの心地よさに繋がっているのだろう。

そう考えれば、やっぱりこうしてついてきてくれたのは良いことだった。一人だと、いろいろ考えてしまったかもしれないからな。

と、そんなことをつらつらと考えながら、マナと話していたその最中。

突然背後から大声が俺たちにかげられた。

「あー！ いたーッ！」

その声に二人して思わず振り返れば、そこにはこちらを指さしているオシリスレッドの制服を着た男子が一人。

髪の色は茶色。髪型はこれといった特徴はなく。しかし爛々と輝く生氣あふれるその瞳が、その男子の印象を非常に活気あるものになっている。

……うん、遊城十代だな。何度かアカデミアの中で見かけたことがあるから間違いないだろう。けど、なぜいきなり？

絶句している俺を見て、マナが「誰？ 遠也は知ってるの？」と聞いてくるが、俺はそれには答えなかった。いやね、まさかこんなにいきなり主人公に会うとは思わないじゃない。ちよつと、意識を飛ばしても仕方ないでしょ？

ちなみにこの俺、十代が主人公のGXのことをあんまり詳しく覚えていない。

初代は最初ということもあって印象深かったし、しっかり覚えてる。5D・sやゼアルも最近のアニメだったから覚えてる。

けど、GXは中途半端な時期だったためか、俺の中で記憶がうる覚えなのだ。それは、この一年間この世界で作品に全く触れずに過ごしたことでひどくなっていると聞いていい。

さすがに十代やメインキャラ、大きな事件や個人的に印象深かったことは多少覚えてるが……。あとは最終回までの大まかな流れや主人公にまつわる話ぐらいか。まあ、何でもかんでも物語通りに進むわけではないから、参考になる程度しか覚えていないのは変に気にしなくていい分ラッキーだとも思っておくことにしている。

と、そんなことを考えているうちに、十代がこちらに走り寄ってきていた。

そして、にかつと気持ちのいい笑顔を見せる。



「いやー、探したぜ！ お前だろ、入学試験でシンクロ召喚とかいうやつを使ってたの！」

「ああ、うん、まあ」

「俺の名前は遊城十代！ あとでその話を聞いてさ、その場にいなかったのが残念だったぜ！ だから、俺とデュエルしようぜ！」

なん……だと……。

今の会話は一体どうなっているんだ？

Q：シンクロ召喚使った？

A：はい。

Q：デュエルしようぜ！

A：…！？

こつである。まるで意味がわからんぞ！

いやまあ、新たな戦術であるシンクロ召喚を見たいから、というのはわかるのだが。しかし、文法におかしかったでしょ。その場にいなかったのが残念、デュエルしようぜ！ って。

確かにアニメでもデュエル馬鹿みたいな設定はあったが、現実で

も本当にこんな性格だったのか。あれはアニメだったからで、普通はもう少し抑えられてるだろと勝手に考えていたんだけど……そのままとは。

しかし、この真つ直ぐさが人を引き寄せ、そして確か世界すら救うというのだから馬鹿にはできない。しかし、その当事者に会うというのも妙な気分だな、やっぱり。遊戯さんたちでだいぶ慣れたとはいえ。

「で、どうなんだ？ デュエルしてくれるのか？」

そして目の前で目をキラキラさせながら俺の答えを待っている十代。うお、その視線が眩しいぜ！

しかし、デュエルか。まあ、してもいいか。俺も、やっぱりデュエルは好きだからな。断る理由も特にない。

「わかった。そのデュエル受ける！ それと、俺の名前は皆本遠也だ」

「やったあ！ サンキュー遠也！ んじゃあ早速……って、うわっ！ な、なんでここにブラマジガールが!？」

『あ、どうもー』

十代にひらひらと手を振ってこたえるマナ。

おいおい、いま気付いたのかよ。てつきり見えててスルーしているのかと思った。どれだけデュエル一直線なんだよまったく。

……ん？ そついやこの時つて、十代はまだ精霊見えてないんじゃないかったか？ もう詳しくは覚えてないからな……気のせいかもしれないけど……。

まあ、いいや。見えてるってことは見えてたんだろ。たぶん。

「驚くのはわかるけど、そっちは後でな。デュエルするんだろ？」

「お、おう。わかった、それじゃいくぜ！」

互いにデュエルディスクを構え、デッキをセット。ある程度の距離を開けたところで、同時に宣言する。

「デュエル！」

皆本遠也      LP：4000

遊城十代      LP：4000

よし、今回は先攻だな。

「先攻は俺だ、ドロー！」

さて、手札はというと……。

- ・チューニング・サポーター
- ・レベル・ステイラー
- ・ボルト・ヘッジホッグ
- ・死者蘇生
- ・調律
- ・速攻のかかし

の六枚です。

ちょ、チューナーが一枚もないとか。まあ、調律があるから何とかなるけどさ。

「俺はまず手札から魔法カード《調律》を発動する！ 自分のデッキから「シンクロン」と名のつくチューナー1体を手札に加え、デッキをシャッフル。その後デッキトップのカードを墓地に送る。俺が選択するのは、チューナーモンスター《クイック・シンクロン》！」

「チューナー？ そいつが噂のモンスターか！」

十代が驚きとともに表情を喜びに変える。自分の知らないモンスター、知らない戦術。そんなデュエルが出来ることを心底楽しんで

るって顔だ。

幸せな奴だと思つと同時に、そんな純粹さが若干羨ましくもあるな。まあ、そういうところが十代の魅力なんだろう。確かに、こんなに素直な奴はそういないだろうし。

そんなことを考えつつ、俺は調律の効果の処理をしていく。カードを手札に加え、デッキをディスクが勝手にシャッフル。その後、デッキの一番上のカードを墓地に送った。

「おお、すげえ！ デッキが勝手にシャッフルされてる！」

あ、そうか。この機能はまだこの時代のディスクにはないんだつた。

「俺のデュエルディスクは特別製なのさ。ふっふっふ、羨ましいだらう」

「ああ！ カッコイイぜ！」

なんと、このディスクがカッコイイと申すか。

さすがは十代。きちんとわかつてるじゃないの。この細かな動作をも可能にしたディスクの素晴らしさが分かるとは、できる。便利だし、カッコイイ。いいところだらけのこのディスク。一点物のためプレゼントできないのが残念だ。

「サンキュー十代。さて、俺は手札から《レベル・ステイラー》を墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！ 更にレベル・ステイラーを自身の効果で蘇生、この時クイック・シンクロンのレベルは1つ下がる。更に《ボルト・ヘッジホッグ》を守備表示で通常召喚！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

「一気に三体も……！ なんて展開力だ！」

慄く十代。しかし、本番はこれからさ。

「いくぞ十代！ 俺はレベル1のレベル・ステイラーにレベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！」

もちろんクイック・シンクロンが打ち抜くのは、ジャンク・シンクロンだ。

四つの光輪の中を輝く星となったレベル・ステイラーがくぐり、

光があふれる。その様を、十代は目を輝かせて見入っていた。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！ シンク  
口召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

おなじみ、シンク口召喚の代名詞。機械の身体を持った戦士が、  
その拳を高らかに掲げて飛び出した。

《ジャンク・ウォリアー》      ATK / 2300      DEF / 1300

出てきたジャンク・ウォリアーを見た十代は、興奮しきりのよう  
である。身を乗り出して見つめ、そして歓声を上げた。

「すっげえー！ めちゃくちゃカッコイイじゃん！ それがシンク  
口召喚かあ！」

なんだそんなに嬉しいのか。こやつめ、ははは。

飛び上がらばかりに喜んでいる姿に、俺もなんだか気分が良  
くなる。ジャンク・ウォリアーも心なしか得意げに見えなくもない。

「そつだろつ、そつだろつ。だが十代、こいつの本領はまだこれか  
らだぜ？」

「ん？」

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！ シンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上にいるレベル2以下のモンスターへの攻撃力分アップする！ 《パワー・オブ・フェローズ》！」

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 3100

「1ターン目から、いきなり3000越えのモンスターだって!？」

十代が盛大に驚くが、元の世界ではこれぐらい日常茶飯事である。つていうか、これぐらいでは後攻ワンキルくらいのことともザラだった環境だ。

今思うと、やっぱり相当に高速化してんだなあ。あの世界のデュエルはソリティアとか言われるデッキもあるくらいだからなあ。

「俺はこれでターンエンドだ！」

高攻撃力のモンスターに、壁モンスターが1体。伏せカードはないが、それでもボードアドバンテージとしてはそれなりだろう。

しかし、相手は十代だ。油断していたら速攻でやられそうな気がする。



とはいえ、伏せカードがない以外は特に心配することもない。とりあえず、これに対して十代がどう対応するのか。それからだな。

「すげえぜ、遠也！ 最初からそんな強力なモンスターを呼び出すなんてな！ こいつは俺も負けてられないぜ、ドロー！」

さて、チートドローの代名詞として有名な十代のことだ。手札的には相当いいものが揃っているとみて間違いはないだろう。問題は、それがどの程度なのか、だ。

手札を確認した十代は、自信満々にカードをディスクに置いた。

「俺は手札から《融合》を発動し、手札の《E・HERO スパークマン》と《E・HERO クレイマン》を融合する！ 現れる、《E・HERO サンダー・ジャイアント》！」

大きく丸い鎧に上半身を包まれた雷を操るHEROが場に現れる。バチバチと鳴る雷の音が実に力強い。

《E・HERO サンダー・ジャイアント》     ATK/2400  
DEF/1500

って、おい！ いったいどうなってるんだよアイツの手札は！

ただでさえ初期手札に融合素材と融合が揃ってんのに、出てくるカードがサンダー・ジャイアントだと!? 狙ってるんじゃないだろうな!?

『うわー、凄いねあの人。うちのマスターに負けず劣らずのドロー運みたい』

確かに、それほどまでに十代のドローは驚異的だ。十代の代名詞ともいえるぐらい、ドローの凄さは強調されていたようにも思うし。

「いくぜ、遠也! サンダー・ジャイアントの効果発動! 手札を1枚捨てて、相手フィールド上のこのカードより元々の攻撃力が低いモンスター1体を破壊する! ジャンク・ウォリアーは確か攻撃力2300だったよな?」

はい、その通りです。

「いけ、サンダー・ジャイアント! 《ヴェイパー・スパーク》!」

「くっ……!」

サンダー・ジャイアントから放たれた雷撃がジャンク・ウォリアーを直撃し、ジャンク・ウォリアーは為す術なく破壊されてしまう。

ちくしょう、これで俺の場には守備表示のボルト・ヘッジホッグが1体だけ……！

「更にサンダー・ジャイアントでボルト・ヘッジホッグに攻撃！  
《ボルティック・サンダー》！」

続いてボルト・ヘッジホッグも破壊される。守備表示だったからダメージこそないものの、これで俺のフィールドはガラ空きだ。

「よし！俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

エンド宣言をし、十代のターンが終わる。

これで十代の手札は残り1枚。とはいえ、それで安心できないのが遊城十代の恐ろしいところだ。

「つたく、よくもやってくれたな、十代。せつかく整えたフィールドがボロボロだ」

「へへっ、そいつが俺とHEROの力さ！けど、まだまだこれからだろ？デュエルは始まったばかりだぜ！」

隠すことなく笑いながら、十代はそう言って俺を促す。

まったく、その通りだ。早速してやられてしまったが、まだまだデュエルはこれからなのだ。こうして思う存分デュエルできるころは、この世界に来て本当によかったと思えるところである。

だからこそ、デュエルでは俺も全力を尽くす！

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードを確認し、これから行う動作を一瞬で組み立てる。

「俺は手札から《チューニング・サポーター》を守備表示で召喚して、ターンエンド！」

《チューニング・サポーター》    ATK/100    DEF/300

まだ上手く手札が揃わない。ここは、何とか耐えるしかない。

「よっしゃあ、俺のターンだ！ ドロー！」

ちびっ、びびくるっ…

「俺は《E・HERO フェザーマン》を召喚！ バトルだ！ フェザーマンでチューニング・サポーターに攻撃！ 《フェザー・ブレイク》！」

《E・HERO フェザーマン》 ATK/1000 DEF/1000

勢いよく飛んできた羽根がチューニング・サポーターに突き刺さり、破壊される。

「更にサンダー・ジャイアントでダイレクトアタック！ 《ボルテック・サンダー》！」

「悪いが、そいつは通さない！ 手札から《速攻のかかし》を捨て、効果発動！」

「手札からモンスター効果だって!?!」

そういえば、この時点では手札から効果を発動するモンスターってそんなにいないんだっけか。有名どころではクリボーぐらいしか俺も知らないもんな。

「相手の直接攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する！」

いやー、まさかピンで挿してたコイツが初期手札に来るとは思わなかったが、いてよかったぜかしさん。

「ちえ、止められたか。俺はこれでターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……。

「きたー！ 俺は手札からチューナーモンスター《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

眼鏡をかけたお馴染みのチューナー。遊星のデッキでも過労死組に分類されるアイツである。

「ジャンク・シンクロンの効果！ 墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効にして表側守備表示で特殊召喚する！ 来い、レベル・ステイラー！ 更に俺のフィールド上にチューナーがいるため、ポルト・ヘッジホッグを特殊召喚！ 更に手札から《死者蘇生》！ チューニング・サポーターを蘇生する！」

4体のモンスターがフィールドに並ぶ。

レベルの合計は8。スターダストといきたいところだが……この状況では、あいつしかいない。

「チューニング・サポーターの効果により、このカードはレベル2として扱う！ レベル2となったチューニング・サポーターとレベル2ボルト・ヘッジホッグ、レベル1レベル・ステイラーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

「レベル8……！ いったいどんなモンスターが出てくるんだ!？」

そして相変わらず好奇心丸出しな十代である。ホント、少年漫画の主人公みたいなやつだな。ある意味その通りなわけだが。

まあ、それはそれとして。

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》 ATK/2600 DEF/2500

またまた出ました、スーパーロボット！ どこからどう見ても機械族なのに戦士族！ しかし頼れる僕らのヒーロー、スーパーピン

……おっと、危ない危ない。

「うおー、ロボットかよ！ そいつもカッコイイなあ！」

「だけど、効果は結構えげつないぜ？」

「へえー、どんな効果なんだ？」

「今から見せてやるが、その前に。シンクロ素材として墓地に送られたチューニング・サポーターの効果。カードを1枚ドロウする」

うん、これでよし。

「そしてジャンク・デストロイヤーの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを選択して破壊できる！ その数は3体、よって3枚のカードを破壊できる！」

「げっ、マジかよ!？」

残念ながらマジである。

「俺は十代のフィールドのサンダー・ジャイアントとフェザーマン、そして伏せカードを破壊する！ 《タイダル・エナジー》！」



ジャンク・デストロイヤーによって、サンダー・ジャイアントとフェザーマンが破壊され、次いで伏せカードも墓地に送られる。伏せカードは……《ヒーロー・バリア》か。まずまずの戦果だな。

「そしてジャンク・デストロイヤーでダイレクトアタック！ 《デストロイ・ナックル》！」

「うわぁっ！」

デストロイヤーの剛腕が振りぬかれ、そのまま十代にたたきつけられる。ソリッドビジョンだから痛みも衝撃もないはずだが、あれだけリアルな映像に迫られた十代は、思わず膝をついた。

「ターンエンドだ」

十代 LP:4000 1400

ふう、ようやくライフを削れたか。よかった、ジャンク・シンクロン引けて。

まあ、クイツクと合わせて6枚も入ってるし、他にも何枚かチューナーは入ってるから引ける確率は高かったが……事故る時は本当に事故るからなあ。シンクロデッキなのに、3ターンの間チューナーも調律も来なかった時はホントに泣けた。

「くっそー、攻撃力2600でその効果かよ」

ライフを削られた十代が、なんつー効果だ、と呟きながら立ち上がった。

『でも十代くん、こんなの遠也のデッキでは序の口だよ？ 中にはもっと恐ろしい効果のモンスターも……』

「そうなのか？」

「なぜ敵に塩を送るか、お前は」

お仕置きしてやりたいが、精霊化してはごうにもならん。ぐ  
きゅ。

『しめんなさーい』

てへ、と可愛く謝って見せるマナ。コノヤロウ、可愛いから許す！

「なあ、さつきは後回しにしちゃったけどさ。お前の隣にいるの、ブラック・マジシャン・ガールの精霊だよな？」

『そうだよー。私はマナ、よろしくね!』

「ん、おう、俺は十代だ。で、コイツが俺の相棒、ハネクリボーだ  
」!

『クリクリ〜』

おお、あれがハネクリボーか。遊戯さんが自ら手渡したという、  
以後ずっと十代のデュエルを支え続ける相棒。

しかし、待てよ。もともとが遊戯さんのだとすると、ハネクリボーと  
マナって顔見知りなのか？ あの人のところ、精霊いっぱいいるか  
らハネクリボーもいたかなんて覚えてないぞ。

『あ、久しぶりだね。元気してた?』

『クリ〜!』

旧知の仲であることが判明しました。まあ、当然といえば当然か。

「相棒、知り合いなのか？ 待てよ……ブラマジガールは遊戯さん  
のデッキにしか入っていないはず。あれ、ってことは……」

「十代、気になるのはわかるけど、まずはデュエルだ。話なんて、  
終わってからも出来るさ」

「なんだか長くなりそうだったので、とりあえずデュエルしようぜ！  
である。」

さすがに長引くと寮での自由時間が削られるからな。デュエルは好きだが、それはそれ、これはこれだ。

「うーん、気になるけど……まあ、確かに後でもいいか。よし、俺のターンだ！ ドロー！」

さて、十代の手札は1枚。フィールドは空っぽ。この状態で引くものといえば……。

「俺は《強欲な壺》を発動し、2枚ドロー！ 更に《天使の施し》！  
3枚ドローし、2枚捨てるぜ！」

禁止カードの連続ラッシュきたー！ そして同時にこれは十代の勝利フラグだ！

なんだか雲行きが怪しくなってきたぜ。

「俺は《E・HERO バブルマン》を召喚！ こいつは召喚に成功した時、自分のフィールド上に他のカードがない場合、デッキから2枚ドローできる！ ドロー！」

《E・HERO バブルマン》 ATK/800 DEF/1200

ここであるのか、泡男！ しかもこいつはアニメ効果のほうかよ！ こいつこそまさにインチキ効果もいい加減にしろ、って言葉がふさわしい。

「俺は手札から魔法カード《E エマーゼンシーコール》を発動し、《E・HERO バーストレディ》を手札に加える！ 更に《O-オーバーソウル》！ 墓地のフェザーマンを特殊召喚！」

ここまでやって、十代の手札はまだ3枚残っている。そのうち1枚はバーストレディ、フィールドにはフェザーマンとくれば、残り2枚のうち1枚は決まっている。

「いくぜ遠也！ 俺は融合を発動し、手札のバーストレディとフィールドのフェザーマンを融合！ 現れるマイファイバリット、《E・HERO フレイム・ウィングマン》！」

右腕が赤い竜頭、左側の背中からは純白の翼を生やしたHEROが十代のフィールドに降り立つ。身体が緑色なのは融合素材となったフェザーマンの名残だろうか。

《E・HERO フレイム・ウィングマン》 ATK/2100

これで十代の手札はあと1枚。このままではジャンク・デストロイヤーに敵わない以上、手札にあるのはたぶんその補強カード。

ふむ……。

「なるほどな。だが十代、ソイツじゃあジャンク・デストロイヤーの攻撃力には届かない！」

なんとなくフラグを立ててみる。

まあ、こんなことしなくても結果は変わらないんだろうけど、なんとなくね。

そんな俺の言葉に、十代はにやりと笑った。

「慌てるなよ遠也。ヒーローにはヒーローに相応しい戦いの舞台がある！俺はフィールド魔法《摩天楼 - スカイスクレイパー - 》を発動！」

カードがセットされると同時に、フィールドにその名の通りの摩天楼が現れる。しかし、やっぱりあったか、攻撃力強化のカード。しかも摩天楼とは……もはや感嘆するしかないな。

「《摩天楼・スカイスクレイパー》が存在する限り、E・HEROの攻撃力が相手モンスターに攻撃力よりも低い場合、E・HEROの攻撃力をダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！」

摩天楼のネオンが煌めく中、静かに佇む二人のHERO。くそう、なんかカッコイイな。しかもこの摩天楼もアニメ効果じゃないか。

「フレイム・ウィングマンでジャンク・デストロイヤーに攻撃！この時スカイスクレイパーの効果で攻撃力が1000ポイントアップ！」

《E・HERO フレイム・ウィングマン》 ATK/2100 3  
100

「いつけえ！ 《スカイスクレイパー・シュート》！」

「うおっ」

その言葉に応じ、フレイム・ウィングマンが風属性のくせに火炎放射で攻撃してくる。

ジャンク・デストロイヤーは炎の渦にさらされ、そのまま破壊された。

遠也 LP：4000 3500

「まだまだ！ フレイム・ウィングマンの効果発動！ 戦闘でモンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「くっ、そうだった！」

遠也 LP：3500 900

「更にバブルマンでダイレクトアタック！ 《バブル・シュート》」

「ぐあっ………！」

遠也 LP：900 100

一気に合計3900のダメージが俺のライフから削られる。

あ、あぶねー！ ギリギリ残ったが、危うく1ターンキルされるところだったぜ、おい！

しかも、またしても俺のフィールドは空っぽ状態。ちくしょう、主人公勢のようなチートドロワーが俺も欲しいぜ……。



そんな涙がちよちよぎれそうな俺の内心とは裏腹に、十代は至極嬉しそうであった。

「よっしゃあ！俺はこれでターンエンドだぜ！」

「これはヤバイ……俺のターン、ドロー！」

手札は3枚。しかし、その中にまだ決着をつけられる手はない。

「俺はモンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド！」

これで、耐えられればいいんだが。

「これで決めてみせるぜ！俺のターン、ドロー！」

ちよ、そんなフラグ立てないでくれよ。

なんか実現しそうで嫌だぞ、そういうのは。

「俺は魔法カード《融合回収》を発動！墓地の融合とバーストレディを手札に加える。そして、バーストレディを召喚！」

《E・HERO バーストレディ》 ATK/1200 DEF/  
800

今度はフィールドに現れるバーストレディ。

性格キツそうではあるが、E・HEROの紅一点だ。だが残念ながら俺はレディ・オブ・ファイアのほうがイラスト的に好きである。

「いくぜ、フレイム・ウィングマンでセットモンスターを攻撃！  
《フレイム・シュート》！」

火炎放射がセットされたモンスターに襲いかかる。

反転され、現れたのは一人の人間の少女だ。

「《薄幸の美少女》の効果発動！ このカードが戦闘によって墓地に送られた時、バトルフェイズを終了させる！」

《薄幸の美少女》 ATK/0 DEF/100

いかにも幸薄そうな少女を前に、仮にもヒーローを名乗るフレイム・ウィングマンは勢い良く出していた炎を引っ込めて、小さな火の粉に切り替えた。それにあわあ言いながら涙ぐんで逃げていく

美少女。

その姿に同情を誘われたのか、バーストレディとバブルマンは攻撃する気をなくしたようだ。

……こういう意味でバトルフェイズが終了するのか、これ。

『……なんか、私も可哀想になってきちゃった』

確かに、半泣きで逃げに行った姿は、同情を誘うには十分だった。強く生きるよ、薄幸の美少女……。

ちなみに薄幸の美少女の攻撃力は0。フレイム・ウィングマンの効果でダメージを受けることもない。

「くそー、もう少しなのになあ。じゃあ、俺はバーストレディとバブルマンを融合！ 《E・HERO スチーム・ヒーラー》 守備表示で召喚して、ターンエンドだ！」

《E・HERO スチーム・ヒーラー》 ATK/1800 DE  
F/1000

最後に紫色をしたずんぐりとしたHEROを召喚して、十代のターンが終わる。それにしても、どこにもバーストレディの要素が見えないモンスターである。

攻めきれなかった十代は悔しそうだ。

しかし、俺もまさかアカデミアに行く前に時期的にまずいからと抜いたダンディライオンの代わりに、とりあえず入れておいたカードが早速活躍するとは思わなかった。

一応遊星のデッキにも入っていたことがあるカードだからこれにしたが……何でも、入れておくもんだな。

「さて。俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……来たか！

「俺は《シンクロン・エクスペローラー》を召喚し、その効果により墓地からシンクロンと名のついたモンスターを特殊召喚する！ クイック・シンクロンを特殊召喚！ 更に墓地の《グローアップ・バルブ》の効果発動！ デッキトップのカードを墓地に送り、デュエル中1度だけフィールド上に特殊召喚する！ 来い、グローアップ・バルブ！」

「そんなのいつ……まさか、最初に調律を使った時か！？」

「当たり前だ。そして更にクイック・シンクロンのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚！ そしてこの瞬間、リバーサイドオープン！ 畏カード《エンジェル・リフト》！ この効果で墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚する！ 俺はチューー

「ニング・サポーターを選択！」

クイック・シンクロン、グローアップ・バルブ、シンクロン・エクスプローラー、レベル・ステイラー、チューニング・サポーター。5体のモンスターがフィールドに並んだ。

「モンスターゾーンを0から一気に埋めるなんて……へへ、すげえぜ遠也！」

興奮しきりの十代に、俺はサンキューと返す。どこまでも憎めない奴だよ、ホント。

けど、だからこそ手加減はしない。このデュエル、ここでエンドマークだ！

「いくぞ十代！俺はレベル2のシンクロン・エクスプローラーとレベル4となったクイック・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は6。そして、クイック・シンクロンが打ち抜いたのは、ドリル・シンクロンだ。

「集いし力が、大地を貫く槍となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！砕け、《ドリル・ウォリアー》！」

《ドリル・ウォリアー》     ATK / 2400     DEF / 2000

右手に巨大なドリルを持ち、黄色いスカーフをたなびかせた赤い戦士が姿を現す。これまた男のロマン、ドリルである。

そして、更に！

「チューニング・サポーターをレベル2として扱い、レベル2となったチューニング・サポーターとレベル1レベル・ステイラーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

レベルの合計は4。遊星に唯一シンク口召喚のセリフを呼ばれなかった、ちよつと可哀想なアイツである。

「集いし勇気が、勝利を掴む力となる。光差す道となれ！     シンク口召喚！     来い、《アームズ・エイド》！」

《アームズ・エイド》     ATK / 1800     DEF / 1200

鋭い刃のような五本の指。それらを持った大きな人の手の形をした機械が、フィールドに降り立つ。

これで俺のフィールドには攻撃力2400と攻撃力1800のモ

ンスターが並んだ。いずれもアタッカーとしては十分な攻撃力を持つモンスターだ。モンスターが0の状態から考えれば、頼もしいことこの上ない。

「更に、素材となったチューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドローする」

引いたカードは《サイクロン》。いいカードだが、既にこの状況では意味がないな。

さて、ここまでの怒涛の召喚劇を見て、十代はこの新たな召喚方法にやはり大きく興味を持ったようだ。シンクロ召喚するたびに瞳が輝くのだから、わからないはずがない。

「やっぱ、すっげえ遠也！ レベルの低いモンスターが、力を合わせて強くなる！ そして、何度だって蘇って、また立ち上がるなんてな！」

十代のその言葉に、何とも嬉しくなってしまう。

そう、遊星のデッキ……そして俺のこのデッキは、まさにそれがテーマだ。

弱小ステータス、低レベルのモンスターは、役立たずということとイコールではないということ。それを証明することができるのが、このシンクロデッキ。

強いカードが強いんじゃない。どうその力を合わせるのか、どう活用するのが強さに繋がる。それこそがシンクロ召喚の魅力なのだ。

俺はそんなこのデッキが好きだ。そんなシンクロ召喚の代名詞であり、自身もまたそんな絆を大切にした男。不動遊星のテーマに則って作ったこのデッキが、俺にとってのフェイバリットなのだ。

だからこそ、嬉しくなるってもんだ。そんな俺のデッキを褒められて、嬉しくないはずがない。

そして、モンスターのステータスこそ強さと思いがちなこの世界で、まったくそんなことを意に介さない十代という男が、気持ちよく見えて仕方がなかった。

「……そうだろう、十代。俺のモンスターは凄いだろう！」

「ああ！ へへ、けどな、俺のHERO達も負けぢやないぜ！ それに、そいつらの攻撃力じゃ俺には届かない。次のターンが勝負だぜ！」

そう、十代の言うとおり。

フィールド魔法《摩天楼 - スカイスクレイパー - 》の効果によって、元々の攻撃力が上回っていても、ダメージ計算時にはあちらの攻撃力のほうが高くなってしまう。



ゆえに、今の俺のフィールドにいるモンスターでは戦闘ダメージを与えることができない。十代はそう思ったのだろう。

無論、額面通りに受け取ればその通りだ。ドリル・ウォリアーはフレイム・ウイングマンに届かないし、アームズ・エイドはバーストレイにも敵わない。

が、シンクロモンスターの力を舐めてもらっては困る。

「それはどうかな」

にやり、と不敵に笑う。逆転フラグ立てさせていただきました！。

「このターンが、ラストターンだ！」

「なんだって！？ この状況で、一体何を……」

まだ俺のメインフェイズは終了していない。そして俺のフィールドに、勝利へのピースは既に揃っている！

「俺はアームズ・エイドの効果発動！ 1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備できる！そしてその場合、装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする！ 装着しろ、ドリル・ウォリアー！」

アームズ・エイドの鋭利な指が限界まで開き、ドリル・ウォリアーのドリルを覆うように装着される。ドリルの側面に鋭い刃まで併せ持った、凶悪極まりない武装の戦士がここに現れた。

《ドリル・ウォリアー》     ATK 2400     3400

「攻撃力3400……！ フレイム・ウィングマンを上回った！  
けど、それじゃあ俺のライフは0にできないぜ！」

確かに戦闘破壊したところで、摩天楼によってダメージ計算時にフレイム・ウィングマンの攻撃力は3100になる。その差分は300であり、十代のライフは1100残る計算となる。

しかし、アームズ・エイドのもう一つの効果がその結果を覆す。

「いけ、ドリル・ウォリアー！ フレイム・ウィングマンに攻撃！  
《ドリル・シュート》！」

「くっ、迎え討て！ フレイム・ウィングマン！」

ドリル・ウォリアーがその巨大なドリルを高速回転させ、勢いよく振りぬぐ。

対するフレイム・ウィングマンも炎によってその攻撃を阻もうと

するが、それもやがてドリルの回転にかき消されて無防備な姿をさらすことになる。

そこにドリルが撃ち込まれ、ついにフレイム・ウィングマンは破壊された。

「くっ、フレイム・ウィングマンが……！」

十代   LP：1400   1100

十代が悔しげに顔をゆがめるが、まだまだ。まだ俺のターンは終わっていない！

「この瞬間、アームズ・エイドの効果発動！」

「まだあんのか!?!」

「アームズ・エイドを装備したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「ふ、フレイム・ウィングマンと同じ効果!?! ってことはつまり……」

「そう、フレイム・ウィングマンの攻撃力、2100ポイントのダメージを受けてもらおう！」

その瞬間、アームズ・エイドによって破壊されたフレイム・ウィングマンが持つエネルギーが十代に向かって解放される。その総量はもちろん攻撃力分の2100。それは十代のライフを削り取るには十分な量だった。

「うわあっ！」

十代   LP:11000

狙い違わず十代を直撃したエネルギーによって、十代のライフポイントが0をカウントする。

そしてこの瞬間、俺の勝利が確定した。

「あー、危なかった……。マジで負けるかと思った……」

フラグを立てたのは俺だが、迂闊にそんなことするもんじゃないな。残りライフ100とか、本当にギリギリだった。

『私も見ててハラハラしたよ。けど、十代くんって強いんだね。遠也のライフをここまで削るなんて』

「まあ、ドロ―運が俺とは天と地ほども差があるからな。しかし、強かったよ」

さすがは主人公の一人、とでも言っておこうか。それでなくても、あのドロ―力は驚異的だったが。遊戯さんを彷彿とさせる引きだったからな。

もし《速攻のかかし》や《薄幸の美少女》がなかったらどうなっていたことか。運がいいのか悪いのか、今日はピン挿したカードに助けられたな。

俺がそんなことを思っただけの結果に胸をなでおろしていると、離れていた十代がこちらに歩み寄ってきた。

負けたというのに、その顔は笑顔そのものだ。そこに悔しさはあっても、それ以外のマイナスの感情が見当たらない。本当にデュエルを心から楽しんでいる十代ならではか。

「くそー、もうちょっとだったんだけどな。けど、ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」

そう言って決めポーズを決める。その嫌みのない姿に、俺も笑みを浮かべた。

「こっちこそ。いいデュエルだったぜ」

『私も見ていて楽しかったしね。ね?』

『クリクリ〜!』

いつの間にかマナの腕に抱かれているハネクリボーも、マナの言葉に同意の声を上げた。しかしハネクリボー、ちよっと場所変われ。胸の前とか、全くもってけしからん。

そんな俺の視線に気がついたのか、マナは一瞬こちらを見ると、更に強くハネクリボーを抱く手に力を込めた。それを見て何だか悔しくなる俺。くそう。

しかし、マナは何故か嬉しそうだった。解せぬ。

「あ、そうだ！ 遠也、なんでブラマジガールがいるのか、話してもらっぜ！ このままじゃ気になってしょうがないぜ」

デュエルに夢中で忘れていたのだろうが、マナを見て思い出したようだ。武藤遊戯のデッキにしか入っていないといわれている《ブラック・マジシャン・ガール》。その精霊をなぜ俺が所持しているのか、遊戯さんを尊敬している十代としては、無視できないことなのだろう。

まあ、特に何か不都合があるわけでもないから、話してもいいか。

「わかったよ。実は……」

曰く、俺は遊戯さんとは顔見知りで一応友人（だと思う）。そして何故かマナに懐かれ、こうしてアカデミアについてきてくれた。マスターは変わらず遊戯さんであり、俺の精霊というわけではない。

とまあ、こんな感じ。俺の境遇とかは初対面で話せるようなものでもないしな。

というわけで、大方の話を終えると、十代はそういうことか、と頷いていた。

「なるほどな。俺はてっきり俺みたいに遠也も遊戯さんからカードを渡されたのかと思ったぜ。《ブラック・マジシャン・ガール》なんて、遊戯さんしか持ってないしな」

「いや、精霊は持ってなかったけど、俺もブラマジガールのカード自体は持つてるぞ」

「ええ！？ マジかよ！？」

ほれ、とカードケースから現在マナが宿っている俺の《ブラック・マジシャン・ガール》のカードを見せる。

それを手にとってしげしげと見つめた後、十代はすげえ本物だ、と何やら感動していた。

この世界では、やはりブラマジガールは相当に珍しいようだ。

「実戦で使うのが遊戯さんだけだっただけで、別にカードそのものは世界に1枚ってわけじゃないからな。レアではあるけど、世界を探せば持つてる奴は何人かいるだろ」

とはいえ、だいたいはコレクションとしてで、デッキに入れる人間はいないだろうけどな。なにしろ、上手く回すためには更に《ブラック・マジシャン》、他にも《賢者の宝石》、その他ブラマジのサポートカードと併せて、この世界では何十万とかそれ以上のカードばかりが必要となる。

とてもじゃないが、専用デッキを作るなんて普通は出来ないだろう。だからこそ、遊戯さんのデッキにしか入っていないと言われてるんだろうけど。っていうか、それらのカードを全部パックで引き当てた遊戯さんがすげえ。

そもそも、世界に1枚だとしたら《青眼の白龍》よりレアで、かつ単純なレアリティという意味ではかの《三幻神》と同じということになる。さすがにそれはないだろう。

「いやー、いいものを見せてもらったぜ。サンキュー、遠也。けど、マナだっけ？ わざわざお前についてくるなんて、よっぽど気に入られたんだな」

「だな。何がそんなにいいのかわからんけど」



最初の頃なんて話しかけてくるのをウザがってしまったこともあったし。今では仲が良くなったが、当時のことを思えばよくついてきてくれたもんだ。

と、そんな疑問顔でマナを見れば、マナは少し頬を膨らませて拗ねたような口調になった。

『いいの、私が好きでついてきてるんだから』

だそうだ。

なんか愛されちゃってるね、俺。ははは。

「なあ遠也。寮は違うけど、これからもたまにはこうして会おうぜ。相棒も顔見知りが来てくれて嬉しそうだしさ」

『クリ〜』

ハネクリボーが嬉しそうにマナの周りを飛び回る。

いくら十代がいてくれるとは言っても、それとこれとは感覚が違うのだろう。望郷の念と呼ばれるように、自分のルーツとなる場所は、どこまでいっても特別なのだ。マナの実在はそんな微かな寂しさを和らげてくれる、そうハネクリボーは感じているのかもしれない。

そして、そういうことなら、俺にその気持ちを否定することができるはずもない。

「もちろん、オーケーだ。これからよろしくな、十代」

「おう！ 今日には負けたけど、またデュエルしてくれよな！」

「まあ、それはおいおいな」

既に次のデュエルのことを考えている十代に苦笑しつつ、俺たちは握手を交わし新たな友情を通わせる。

この世界は遊戯王の世界だが、しかし何もかもがアニメ通りというわけではない。ここにいる人たちは確かに生きていて、だからこそ未来というものは不確定だ。

これから十代が歩いていくのが、どんな道なのか。たとえそれがアニメのような内容であったとしてもそれは現実の出来事であり、それに立ち向かうことになるということは、様々な危険と隣り合わせということだ。

勝利が確定しているわけではない。どうなるのかわからない、という恐怖が現実だからこそついてまわる。

だからこの時。十代と友達になったこの時、俺は自分にできることをしようと思った。

十代が危険に遭うなら、出来る限り助け、困っているなら、力を

合わせて乗り越える。それが友達ってもんだろっから。

ま、そうは言っても。俺に何ができるかなんて、今のところわからないんだけどね。

## 第2話 十代（後書き）

デュエルってこんな感じでいいんだろうか。

色々原作とはちよつと違うところもありますが、この作品の中では  
そういうことなんだと思ってもらえると幸いです。

### 第3話 覗き(前書き)

サイバー・ブレイダー……イラスト的には結構好きです。

### 第3話 覗き

入学以降、なんだかシンクロ召喚見たさに色んな人にデュエルを申し込まれて、ちょっと困ってる遠也です。ライイエロー、オベリスクブルーの生徒がその大半だ。オシリスレッドの生徒は、なぜかあまり挑んでこない。

中には三沢大地もいた。デュエルのあとにシンクロ召喚について根掘り葉掘り聞いてきたあたり、本当に勉強熱心な奴だと感心したもんだ。

ちなみに今のところすべて勝っています。そしてデュエルしながら、元の世界から持ってきたカードを使ってデッキ調整をする日々だ。持ってきたカードはそれほど多くないからな。細かな調整を繰り返して、この時代のデュエルに対応できるようにしないとイケない。

ただ、この世界では強欲な壺や天使の施しがまだ現役なのが痛い……。俺の世界では禁止カードだったから、持ってないんだよね。まあ、そのぶん他のドローカードやモンスター効果とかで何とかするわけだけど。

それに、少しはデッキも応えてくれるようになってきていると思う。1年以上共にこの世界で戦い過ごしてきたんだから、そんなこともあつたらいいなあ。カードゲームに、そこまで期待しちゃいけないのかもしれないけどさ。

ちなみに、それこそ一日に何度もデュエルを申し込まれているのだが、それを苦に思ったことはない。元の世界では遊戯王OCGはこの世界ほど一般的ではなかったからな。それに、ソリッドビジョンもなかった。だからこそ、今こうして思う存分デュエルできることが楽しくて仕方がない。

そこら辺で十代とは気が合うのか、あのデュエル以降頻繁に行動を共にしている。やれデュエルだ、やれあのメシが美味そうだ、やれこのカードを入れるべきだ、等々。違う寮のくせにかなり親交を深めていると思う。

翔曰く、「似た者同士っすね」だそうだ。まあ、デュエルは好きだからな。いいじゃない、別に。

ちなみにメインキャラでデュエルをしたことがあるのは、十代と丸藤翔、前田隼人と三沢大地だけだ。……オベリスクブルーにはねえ、あんまりこっちから近づきたくないんだよね。あそこ、居心地が悪いし。負けた後に捨て台詞とか言うし。

とはいえ、一応シンクロの概念の普及も頼まれている身。よほどのことがなければ挑まれたデュエルは受けるようにしている。ただ、こっちからは行かないというだけである。

さて、そんな日々を過ごす俺は、夜の自室でマナとおしゃべりに興じていた。部屋は一人部屋であるため、マナも気兼ねなく実体化している。なんでもお菓子やジュースを飲み食いしたいからだそう。まあ、精霊状態じゃ出来ないわな。

けど、それなら格好を普通の格好にしてほしい。あの服装って露

出が激しいんだよな。夜にそういう格好で実体化されるのは、困る。紳士的に。

しかし、本人はその姿が一番過ごしやすいらしく、滅多に服を着替えることはない。せいぜいが帽子を脱ぐくらいか。……布面積減ってるじゃん。

今日も今日とてそんな感じに過ごしていた俺たちだが、不意にマナが人の気配を感じたと言って精霊化する。ほどなく、俺の部屋のドアが突然開け放たれた。

……おい、ノックしろよ。

「遠也！ 翔がさらわれたんだ、力を貸してくれ！」

あー、なるほど、今日だったのか。



そういえば、別にかまわないけど、なんで十代はわざわざライイエローまで来たのか。オシリスレッドの誰かを連れていけばよかったですだろうに。

疑問に思っ て聞いてみたところ、なんでもオシリスレッドで声をかけた生徒は全員、二の足を踏んだからだそう。それというのも、ただでさえ後がないオシリスレッドなのに、夜に出歩くという校則違反を犯して退学になるのを避けたいからだとか。

まあ、そういう理由ならある意味で仕方がない。彼らにも目的があったり、お金を出してもらって学校に通えているのだ。それがフイになるかもしれないような選択を突然突きつけられて、即座に頷ける人間は少ない。当然のことだ。

というわけで、十代は時間が惜しいということでおシリスレッドを離れ、ライイエローで一番仲が良く、更に実力もしっかりしている俺のところに来たというわけらしい。

ふむ……そこまで高く買ってもらえるとはな。

『とーやー。顔が緩んでるよ』

おっと、いかんいかん。

マナに言われ、表情を引き締める。翔が拉致されたというのに、不謹慎だぞ俺。

ともあれ、そうまで頼りにされては応えるのが男というもの。まして、十代の頼みである。ここはこの皆本遠也、全力で翔の救出に力を貸そうじゃないか！

「……………って、思ってたのになあ。これはないわ翔」

「だから冤罪だよ！ 僕は覗いてないー！」

細かいところは覚えていなかったから、大したことじゃないんだろうと思っていたが、ある意味大したことだったな。犯罪的な意味で。

だがしかし、その翔自身はやっていないと言っている。……………容疑者本人の弁解って証拠能力あるんだろうか？

とはいえ、実のところ俺は翔がそんなことをやったとは全く思っていない。だって、ねえ？

「翔、わかっている。お前は無実だ」

「うう、信じてくれるんだね、遠也くん！ ありがとう」

「お前にそんな度胸はない」

「……う、ぐ、な、なんか複雑」

否定したいが、そうになると覗きをしたと間接的に認めてしまっ  
かといって、男の矜持として度胸がないというのは認めがたい。

そんな板ばさみにさらされた翔の気持ちは、推して知るべし。

ちなみに現在の状況は、翔が手を縛られた状態でオベリスクブル  
ーの制服に身を包んだ女生徒3人の傍にるところだ。それに相対  
する形で俺と十代が立っている。

時刻は夜、場所は湖オベリスクブルー女子寮の小さな港。こうい  
う状況でもなければ、それなりのロマンスが期待できるシチュエー  
ションなのになあ。向こうの女性は3人も美少女なのに。残念。

特に真ん中のリーダー格の女子。天上院明日香。さすがはメイン  
ヒロインだけあって、スタイルもよく美人だ。とりわけあの胸は同  
年代とは思えん。マナに匹敵するぞ。いや、全くもってけしからん  
な。おっぱい。

『と・お・や？ なにを見てるのかなー？』

「痛い、痛い！ 何をするだー！」

「……何やってんだよ、お前ら」

相手から見えない背中で部分的に実体化するという器用な技を使って、俺の背中をつねるマナ。しかも結構力こめやがって、痛いっの。

そして、精霊が見える十代には一部始終を見られ、呆れられてしまった。シリアスになれなくてごめんなさい。

「まあ、いいや。で、なんだっけ。デュエルすればいいんだったか？」

「ええ。あなたが勝てば翔君は解放するわ。覗きの件も今回は目を瞑ってあげる」

十代の問いかけに、明日香が答える。

覗き容疑で捕えられた翔だが、どうもこれは元々明日香が十代とデュエルすることが目的みたいだな。翔はその口実にされたようだ。

だって、明日香はもう翔のことなんか全く見ていない。十代だけを見ているからな。わかりやすいことで。

「俺は挑まれたデュエルからは逃げないぜ！ 受けて立つ！」

「そここなくちゃ」

というわけで、わざわざボートに乗って湖の真ん中まで移動する俺たち。そして互いのボートを離して距離をあける。そして十代と明日香はデュエルディスクを構え、互いに開始の宣言をした。

「デュエル！」

……で、結果は十代の勝ち、と。

どうやら基本的に明日香のデッキは戦士族、それも《サイバー・ブレイダー》を中心としたデッキ構築をしているようだ。しかし、サイバー・ブレイダーか。なかなかクセがあるモンスターを使う。その分、使いこなせれば強いだろうし勝った時の喜びもひとしおだろうが。

ただ、《ドゥーブルパッセ》のような使いどころの難しいカードを、そんなクセの強いデッキに投入するのは、ちょっとどうだろうか。《エトワール・サイバー》とのコンボだとしても、600ポイントの攻撃力上昇だけだとなあ。LP4000の場合、それでもいいのか？

ともあれ、十代のサンダー・ジャイアントがフィニッシュャーとなつて、十代は明日香に勝利した。これで翔は解放され、めでたしめでたし、か。

「よかつたな翔。十代と俺に感謝しろよ」

「遠也くんは何もしてないじゃないか。来てくれたのは嬉しかったけど」

確かに。

「よっし！ 遠也、翔、帰ろうぜ！」

デュエルが終わり、明日香と話していた十代がこちらに振り返る。何を話していたのかは知らないが、帰っていいなら帰るか。もう夜だし。教師に見つかったら事だしな。

「だな。それじゃあ」

「待って」

帰るか、と二人に言おうとしたところで、俺の言葉は突然遮られた。待ったをかけたのは明日香である。なんぞ私めにご用でも？

「本当は十代だけを呼んだつもりだったけど、あなたもいるのは嬉しい誤算だったわ。皆本遠也、私とデュエルしてくれないかしら？」

なぜ俺まで。

というのが、俺の正直な感想だった。目的はまあ、シンクロ召喚で間違いないだろうけど。だが、俺は挑まればデュエルは受ける。毎日そうしているのだから、知らないはずがないだろうに。

もっと明るく時間に余裕がある時を希望したい。今は夜だ。まだ眠くはないが、それでも外にいるよりは部屋に帰りたい気持ちが強い。

「明日じゃダメか？ 頼まれれば受けるぞ」

「けど、あなたはオベリスクブルーの生徒とのデュエルを極力避けられているでしょう？ ブルー生が近づく場所にはあまり来ないし……気持ちにはわかるけど」

「ブルーの生徒に負けたくないからって、情けない」

「もっと堂々となさったら？」

明日香に続き、ジュンコとももえ、だったか？ さっき聞いた限りだと。その二人も何か言いだした。

けど、明日香の言う「気持ちわかる」はそういう意味じゃないと思うぞ。事実、明日香は二人の言葉に溜め息をついてるし。

けど、やっぱりバレてたのか、俺がブルーを避けてるの。無論、見つかって挑まれれば受けているが、やはり気持ちよく終われないデュエルはあまり乗り気になれない。だから避けているのだが、明日香はその俺の心情を察していたようだ。

けどまあ、そういうことなら、いいか。よくよく考えたら、明日にして明日香との勝負を他のブルー生に見られるのも面倒だしな。勝っても負けても何か言われそうだし。

それぐらいならここで受けて、楽しいデュエルをしたほうが断然いいや。

そうと決まれば、やることはひとつだ。

「悪いな十代、翔。帰るのはもう少し遅れそうだ」

「俺は構わないぜ。遠也と明日香のデュエルを見るのも楽しそうだしな！」

「遠也くん、頑張るっす！」

十代と翔の応援を受けて、俺は明日香に向き直る。向こうは既に準備万端だったようで、既にディスクを構えていた。



「ふん、どうせ明日香さんには敵わないわ」

「ブルー生から逃げるような方ですもの。器が知れますわ」

そして口先が絶好調なお二人。あ、明日香に窘められてへこんでる。

『むう、あの二人感じ悪い。頑張ってね、遠也！』

「おう！ さて……」

デッキはもちろんいつものデッキ。そして、デュエルスタートボタンをぽちっとな。

デュエルディスクにライフポイントが表示され、準備完了！

「デュエル！」

遠也 LP：4000

明日香 LP：4000

「先攻は私ね。ドロー！」

ちなみに、この世界では先攻後攻はスタート時にデュエルディスクに表示されます。決して言った者勝ちなんていう不公平なルールではないので、あしからず。

「私は《エトワール・サイバー》を召喚するわ」

《エトワール・サイバー》     ATK / 1200     DEF / 1600

来たか。さつきも出てきていたし、3積みされているのかもしれない。ちなみに日本語版では裸のような格好だが、英語版では服を着たモンスターである。

「更にカードを2枚伏せて、ターンエンドよ」

ふむ。十代とのデュエルを見るに、伏せてあるカードには《ドゥールパッセ》がある可能性があるな。もしくは補助系の魔法、はたまたカウンター罠か。

まあ、考えてもわからん。思うままにプレイするのみだな。

「俺のターン、ドロー！」

……なるほど。いきなりいけそうだが、手札には優秀なりバース  
モンスターがいる。ここは様子を見るか。

「俺は手札から《おろかな埋葬》を発動！ 自分のデッキからモン  
スターを1体選択して墓地に送る。俺は《ジャンク・シンクロン》  
を墓地に送る。更にモンスターをセット、カードを2枚伏せてター  
ンエンドだ」

ひとまず無難に終える。最初だし、こんなもんでしょ。

「意外と堅実なのね。私のターン、ドロー！」

カードを見て、明日香は小さく笑う。何かキーカードでも引いた  
のか？

「私は手札からフィールド魔法、《フュージョン・ゲート》を発動  
！ このカードが存在する限り、《融合》を使用せずに融合召喚が  
出来る！ 私は場のエトワール・サイバーと手札の《ブレード・ス  
ケーター》を融合！」

いま引いたカードはフュージョン・ゲートかブレード・スケータ  
ーだったのか。しかし、結構すぐにエースを出すよな、十代も明日  
香も。まあ、それは俺もなわけだが、シンクロ召喚はそこらへん緩

いからなあ。融合召喚でこうもポンポン出すのは、流石としか言えん。

「《サイバー・ブレイダー》を融合召喚！　そして融合素材となった2体はフュージョン・ゲートの効果で除外されるわ」

《サイバー・ブレイダー》　ATK/2100　DEF/800

長い髪をなびかせ、赤いバイザーをつけた女性がフィールドを滑走するように現れる。モデルがフィギュアスケートだからこそその演出だろうか。

このモンスターは効果が厄介だからな。相手フィールドのモンスター数によって効果を変えろという特殊なモンスター。さて、どう攻略するか。

「更に私は永続魔法カード《地盤沈下》を発動！　あなたの使用していないモンスターゾーン2ヶ所を指定し、使用不能にする！」

「いい!？」

おいおい、まさか【トランス】デッキか？　いや、【トランス】に必要なおジャマは後の万丈目にとってのキーカードだったはず。だとしたら、おジャマなしの【トランス】？　にしても珍しい。まあ抜け道は結構あるから、そう問題ではないが。

「バトルフェイズに入るわ。サイバー・ブレイダーでセットモンスターを攻撃！《グリッサード・スラッシュ》！」

身体を勢いよく回転させ、そのまま近づいてくる。遠心力を利用した攻撃か。本当に、モデルになったスポーツならではの行動をするモンスターだ。

そしてそのまま繰り出された鋭い蹴りがセットモンスターに炸裂。カードが反転され、モンスターが現れる。

「セットしていたのは《ライトロード・ハンター ライコウ》だ。そしてそのリバー効果が発動！ フィールドに存在するカード1枚を選択して破壊できる。俺はサイバー・ブレイダーを選択する！」

《ライトロード・ハンター ライコウ》     ATK/200     DEF  
/100

ライコウの効果によって、攻撃を仕掛けたサイバー・ブレイダーがライコウと共に消滅する。サイバー・ブレイダーの効果は正直面倒くさいからな。早めに除去できたのは僥倖だった。

「更にライコウの効果。デッキの上からカードを3枚墓地に送る」

落ちたのは《ボルト・ヘッジホッグ》、《カードガンナー》、《死者蘇生》か。まあ、ボルト・ヘッジホッグが落ちてくれたからよしだな。

「くっ……、メインフェイズ2に畏発動！ 《リビングデッドの呼び声》！ サイバー・ブレイダーを復活させ、ターンエンド！」

再び明日香のフィールドに舞い戻るサイバー・ブレイダー。さすがはエース、そう簡単に墓地に行ってはくれないか。

だとしたら地盤沈下のほうを除去すべきだったかな。まあ、蘇生カードを早くから使わせられたと思っておけばいいか。

「俺のターン、ドロー！」

おお、そうきたか。下手したらこれで決まっちゃうぞ。

「俺は手札から《グローアップ・バルブ》を墓地に送り、チューナーモンスター《クイック・シンクロン》を特殊召喚する！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

俺のデッキではおなじみ、クイック・シンクロンさんです。

今日もよろしく頼みます、先生！

「チューナー……！　それがシンクロ召喚の要となるモンスターね」

「その通り！　そして場にチューナーがいる時、ボルト・ヘッジホッグはフィールドに蘇る。来い、ボルト・ヘッジホッグ！」

《ボルト・ヘッジホッグ》　ATK/800　DEF/800

俺のフィールドに2体のモンスターが並ぶ。地盤沈下の効果で3体までしか俺はモンスターを並べられないが、それだけスペースがあれば十分だ。

「フィールドに2体……。でもこれでサイバー・ブレイダーの第2の効果が発動！　相手フィールドにモンスターが2体いる時、サイバー・ブレイダーの攻撃力は倍になる！　《パ・ド・トロワ》！」

《サイバー・ブレイダー》　ATK/2100　4200

サイバー・ブレイダーの攻撃力が結構な高さ上がるが……問題ない。俺の手札に勝利の方程式は既に完成している……！

と、いうわけで。

「俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

合計のレベルは7！そして、クイック・シンクロンが代わりに務めるのは、ジャンク・シンクロンだ。

「集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光差す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、《ジャンク・アーチャー》！」

光の輪より溢れた輝きから、その名の由来となる弓矢を持った細身の戦士が現れる。

アニメで遊星もそこそこ使っていたが、なぜか大きな活躍を残したことがない不遇なモンスターである。除去には成功しても、なぜか直接攻撃をいつも防がれているんだよなあ。

だが、今日この状況では最も頼りになるモンスターだ。こいつが今日のキーカードだぜ。

《ジャンク・アーチャー》 ATK/2300 DEF/2000

「これがシンクロ召喚……。融合が必要ない融合召喚、というのは



「言いて妙だったわけね」

「誰が言ったのかは知らないが、そうだな。ただシンクロ召喚の場合、レベルを足すという特性上、モンスターをいったん表側表示でフィールドに出す必要がある。融合が必要なのは利点だが、そこが欠点でもあるな」

「なるほどね。さすがはペガサス会長、よく考えられた画期的な召喚方法だわ」

うん、ごめん。考えたのはペガサスさんじゃない、高橋先生なんだ。

ペガサスさんはむしろこれを話した時、「ワンダフル！ そんな召喚方法まったく思いつきませんでした！ アンビリーボォー！」って言ってたからな。素直に感心してる明日香には、言わないでおこう。

「俺の場のモンスターが1体になったことで、サイバー・ブレイダーの効果は第1の効果……戦闘破壊されない効果に変わる。けど、コイツの前では関係ないんだなこれが」

「どづいづこと？」

「どづいづことさ。ジャンク・アーチャーの効果発動！」

その言葉と同時に、ジャンク・アーチャーが矢を番える。そして、

その狙いをサイバー・ブレイダーに定めた。

「1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体をエンドフェイズまで除外する！ 《デイメンジョン・シユート》！」

「なんですって!?!」

ジャンク・アーチャーが放った矢がサイバー・ブレイダーに突き刺さり、そのまま次元の彼方へと消し去る。再びさらば、サイバー・ブレイダー。

そして、その効果を前にしたギャラリーからは驚きの声上がる。

「何よそれ！ 1対1ならほぼ確実にダイレクトアタックが出来るじゃない！」

「強力な効果ですわね……」

「俺も前にあれで直接攻撃食らったことあるぜ」

「僕もっす」

以上、周囲の反応でした。

しかし、俺のメインフェイズはまだ終わってないんだよね。つてなわけで、次だ。念のため、サイバー・ブレイダーの復活も阻止

しておく。

「更にリバーズカードオープン！ 速攻魔法《異次元からの埋葬》！ 除外されているモンスターを3体まで選んで墓地に戻す。俺が選択するのは1体！ いま除外したサイバー・ブレイダーを墓地に戻してもらおう！」

「そういうこと……！ ジャンク・アーチャーの効果はエンドフェイズまで除外する効果。ということは……」

「お察しの通り。その間に墓地に行ってしまったえば、エンドフェイズに復帰することはない」

アド的には微妙なコンボだが、それでも状況によってはそれが決まり手になることもある。もともと他の利用目的で入れていた魔法カードだが、こういう使い方も面白いっちゃ面白い。

「そしてもう1枚の伏せカードは速攻魔法カード《サイクロン》！ 天上院の伏せカードを破壊する！」

伏せカードがサイクロンによって墓地に行き、明日香のフィールドには対象がいなくなり、無意味に残ったりリビングデッドの呼び声と地盤沈下、そしてフュージョン・ゲートのみだ。ちなみに伏せてあったのは《攻撃の無力化》。ドゥーブルパッセじゃなかったのね。

伏せカードを破壊し、サイバー・ブレイダーの復活も潰した。念

には念を入れたんだ。これでもう怖いものは何もない。

このままダイレクトアタック！……する前に。まだ俺には出来ることがある。

「そして、俺はまだ通常召喚を行っていない」

「あ……」

明日香が思わず呆けたような声を出す。それは忘れていたのか、それともこの先の展開を予想したからなのか。

「俺は《シンクロン・エクスプローラー》を召喚！ 効果により、墓地のシンクロンと名のつくモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！ ジャンク・シンクロンを蘇生！」

《シンクロン・エクスプローラー》 ATK/0 DEF/700

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

そしてシンクロ召喚は特殊召喚。メインフェイズになら何度でも行える。

「レベル2のシンクロン・エクスプローラーに、レベル3ジャンク・

シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は5となる。来い、このデッキの切り込み隊長！

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！ シンク  
口召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

よくよく出てくるジャンク・ウォリアーさん。デュエルをする  
と六割以上の確率で出てきます。だって、出しやすいんだもん。

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 DEF/1300

さあ、これで準備は整った。今度こそ、バトルフェイズに入る！

「バトル！ ジャンク・ウォリアーとジャンク・アーチャーでダイ  
レクトアタック！ 《スクラップ・フィスト》！ 《スクラップ・  
アロー》！」

「きゃああっ！」

明日香 LP:4000 0

2体の攻撃、矢と拳がそれぞれ明日香自身に襲いかかり、そのライフポイントを削り取る。そして4000あったライフが一気に0を刻んだ。

うん、ワンキル達成だ。いや、今日はなかなか良かった。初期手札がサイクロン、ライコウ、バルブ、おろかな埋葬、異次元埋葬だった時はどうしようかと思ったが……。そこにエクスプローラーを引き、次のターンにクイックを引いたのだ。

その時点で墓地にはジャンク・シンクロンとボルト・ヘッジホッグがいた。相手の場にはモンスター1体、伏せ1枚、フュージョン・ゲート、地盤沈下、リビデ、である。これで負けるといのが無理だった。

まあ、あの伏せカードが《和睦の使者》とかだったら、まだわからなかったわけだが。けど、実際にはそうではなかった。一応サイバー・ブレイダーは墓地に送っていたが、このターンを過ぎれば何か逆転の手を引いたかもしれないからな。

とはいえ、それはもしもの話。勝ったから、何も問題はない。

「そ、そんな……。明日香さんが……」

「2ターン目で、それもワンターンキルだなんて嘘ですわ……」

そして何やら呆然としているジュンコとももえ。それだけこの結末は衝撃的だったのだろう。

ビートダウンが主流のこの世界では、こうして短時間で決着がつくことは稀だろうからな。だからこそ、こうしてワンターンキルが起ると騒がれるわけだが。

『ふふーん。思い知ったか』

そしてそんな二人を見て、なぜか得意げに胸を張っているマナ。何をやってるんだと思うものの、それだけ俺を馬鹿にされたのが気に入らなかつたのだと思えば嬉しく思う気持ちも湧く。可愛い奴め。

「マナ」

『うん？』

「サンキュー」

『あ、うん！ えへへ』

感謝の気持ちを素直に表せば、マナはなんだか照れて赤くなつた。

「おー、今日は上手く決まっ たな遠也！」

「まあな。運が良かったよ」

十代の言葉に苦笑して返し、少しだけ上げられている手に己の手を合わせ、パチンと小さなハイタッチを交わす。

明日香の伏せカードが鍵だったが、攻撃反応型のカウンター罠だったからな。上手いこと決まってくれたと俺も思う。同時に、そんなに上手くいくことなんか滅多にないとも思うわけだがね。

さて、その明日香だが。不満げに見てくるジュンコとももえを手で制し、真っ直ぐにこちらに顔を向けた。それに応えるように、俺も向き直って明日香と視線を合わせる。

「さすがね、遠也。最強のイエローの名前は伊達じゃないわね」

「……………は？」

え、なにそれ。二つ名とかついているの、俺？ 超恥ずかしいんですけど。

「知らなかったの？ オシリスレッドの遊城十代、ラーイエローの皆本遠也。強い新入生として有名よあなたたち」

おいおい、そんなことになってたのか？ 知らなかった……。

まあ、あれだけデュエルして一敗もしなければ、強いと思われるのも無理はない、のか？ 実際弱いつもりではないが、なんだかなあ。



ライエローでは筆記こそ三沢に負けているが、実戦では今のところ無敗だからな。それを考えれば、ライエローで最強というのは間違いではない。

実のところ、十代には勝ち越してこそいるが既に三度ほど負けた。さすがは十代と言うべきだろうが、今の時点で負けることになるとは。これでネオス手に入れたらどれだけ強くなるんだ……。

「おー、俺もかぁ。へへ、最強のレッドってのもカッコイイな！」

俺がそう呼ばれているらしい以上、セットで十代もそう呼ばれている可能性は高いな。

十代はそう称されることに満更ではないらしく、戸惑うどころか誇らしげですらあった。その単純さが羨ましいぜ、友よ。

明日香はそんな俺達を見つめ、ふっと小さく笑った。

「だから、私は興味を持ったの。そんなあなたたちとデュエルを試みたいって。特に遠也は知らない戦術を使うしね。こんな形になっちゃったのは、素直に謝らせてもらう。……けど、デュエルできて良かったわ」

穏やかな顔でそう言う明日香の顔を見て、俺と十代は一度顔を見合わせる。

そして、互いに笑って、明日香の言葉に答えを返す。

「ガツチャ！ 俺もだ、楽しいデュエルだったぜ！」

「もちろん俺もだ、天上院。いいデュエルだったぜ」

それぞれそう言って健闘を称えると、明日香はその言葉に同意を示すように頷いた。そして、再び口を開く。

「明日香でいいわ。十代はもうそう呼んでいるけど、遠也もね」

と、直々にお許しが出た。後で聞いた話だが、十代たちは明日香と初めて会った時、オベリスクブルー専用のデュエル場で万丈目に絡まれた時に名前を知り、それ以降そう呼ぶようになったらしい。

そして今許しが出た俺も、早速名前で呼ばせてもらう。

「了解。よろしくな、明日香」

「ええ」

そうしてデュエルを通じて友情を築くという、熱血漫画のような経緯で俺と明日香は友人となった。ま、それを言ったら十代も……

いや、翔も……いや、海馬さんも……あれ、城之内さんか？ ……この世界って、やっぱり何でもデュエルだよな……。

その後、明日香のとりなしもあってジユンコとももえも一応俺たちと挨拶を交わした。そして俺たちはそれぞれの寮に戻るために別れ、互いのボートを漕いで岸へと向かっていった。

そして岸についた俺は十代と翔と別れ、ラーイエローの自室まで戻ってきた。教師に見つかることもなく辿り着けて良かった。もう夜中に出かけるようなことはないだろうが、こういうのは心臓に悪いからな。

ふう、と知らず詰めていた息を吐き出し、俺は背中から倒れこむようにベッドに横になる。そして、その隣に実体化したマナが腰を落とした。

「お疲れ様、遠也」

「ホントだよ……。デュエルするのはいいけど、こんな時間に出歩く羽目になるとは思ってたからな」

いつどこでどんなイベントがあったかなんて、細かいところは覚えていない。今日の件も、十代が来なければ気付くことはなかったぐらいだ。

「ま、翔のためだ。こういうのもたまにはいいって」

十代、隼人と併せて、俺の数少ない同い年の友人なんだ。苦労は苦労だが、これぐらいなら許せる。もつとも、本当に覗いていたとしたらフルボッコだったが。

「やっぱり、遠也って友情に厚いよね」

「そりゃそうだろ。俺には前提がないんだから、友達が少ないんだよ。その分大事にしたいのは当然だ」

この世界で生きてきた、という生きていれば当たり前前の前提が俺にはない。それはつまり、この世界に来る瞬間まで俺は誰ひとりと関わりを持っていなかったということだ。

同じ故郷、同じ学校、同じクラス、血の繋がり……。そういった前提がない俺にとって、友人というのは作りづらいものだった。まして、俺はこの世界に来て早い段階で武藤家のお世話になり、その後ペガサスさんに保護者となってもらっている。

そして、この世界に慣れることやペガサスさんとシンクロギミックについての調整をしていたため、同い年と知り合う機会なんて全くと言っていいほどなかったのだ。

そのため、俺はこの世界で関わりを持った人　遊戯さん、海馬さん、ペガサスさんといった人たちを始め、友人関係となった十代たちのことを殊更大事に思っている。

ま、その気持ちが多分だけ切実なものなのかは……たぶん俺にし

かわからんだろうけどな。

「……ね、遠也」

「あふあ？ あ、悪い、欠伸出た。で、なんだ？」

声が掛けられると同時に出てきた欠伸を噛み殺しつつ言うと、マナはなんだかやるせない顔で溜め息をついた。いきなり失礼だなおい。

「空気読まないなあ、もう。慰めてあげようかと思ったのに」

不満げに口をすぼめて見せる。

なんだそりゃ。……ああ、俺が事情を思い起こして沈んでると思っただのか。俺がこの世界に来たばかりの頃を、マナは思い出したのだろう。一年前は確かにこうしてマナに話して、散々愚痴を聞いてもらったっけ。

今思えば気恥ずかしい黒歴史だが、おかげで気持ち整理できたのは良いことだった。そして、それはもう一年も前のことだ。今じゃ、そんなに沈みこんだりはせんよ。

「お生憎だな。もうお前にそんな迷惑はかけんさ」

にやりと笑って言えば、マナはちょっと寂しさを覗かせたものの、すぐにその表情を明るいものに変化させる。

「それは残念。せっかく、とっておきの手段だったのに」

そして、悪戯気に笑った。

ほう、とっておきとな。気になった俺は、知りたいという衝動のままに尋ねる。

「ちなみに、何をするつもりだったんだ？」

「ふふーん、添・い・寝」

「ぬぁにいつ！」

思わず跳ね起きた。

そして隣に座っているマナを見るが、マナは既に手を振ってじゃあねーと言いつつ精霊化していた。ご丁寧にもそのまま部屋の外に出て行ってしまふ。

後に残されたのは、驚きと僅かな期待で飛び起きた俺一人。……からかわれたと悟った俺は、とりあえずベッドに横になる。そして、心の中でシャウトした。

あ、あの野郎！ ……いや、女郎？ まあ、いいか。ともかくア  
イツめえ……！ 男の純情を弄びやがって！ 期待した自分が悔し  
いっ！

ぐぎぎと唸りつつ、帰ってきたらどうしてやるうかと考える。し  
かし、そんなことをベッドの上で横になって行ったのが良くなかつ  
た。

なぜなら、次第に眠くなった俺の意識はいつの間にか途絶えてし  
まったからである。

そして、気がついた時には翌日の朝。そのまま寝たために皺  
だらけになった制服を視界に映し、俺は起きぬけに大きな溜め息を  
つくこととなるのだった。

部屋を出たマナは、扉の前で立ち止まる。そして一つ溜め息をついた。

きつと遠也は今頃マナの言葉を冗談として受け取り、からかわれたと憤慨しているだろう。そういう人だ。一年間、ずっと近くで見ているマナにはよくわかっていた。

『……冗談つてわけでも、ないんだけどねー』

そこまで言ったところで、マナは口をつぐんだ。そして、そのままふよふよと寮の中を浮いて行く。

とりあえず、遠也が寝るまで散歩でもしよう。戻ってお仕置きされるのも嫌だし。

そんなことを考えながら。

ちなみに、翌朝。

いつものように遠也を起こしたマナは、昨夜のことを忘れていなかった遠也によるお仕置きを受けた。

遠也はマナの頬を八つ当たりと知りつつ引っ張り、そのためマナはその日頬の痛みが取れなかったそうだ。





### 第3話 覗き（後書き）

遊戯王ですけど、恋愛要素もあったほうが面白いですよね！  
ん。 たぶ  
私のBMGの好きっぷりは異常。

## 第4話 試験1（前書き）

月一試験。

長めになりそうなので、いったん分けました。

そのため、今回はデュエルなしです。ごめんなさい。

## 第4話 試験1

「よ、来たぞ十代」

「お、遠也！ 待ってたぜ！」

放課後。オシリスレッドの寮に向かった俺は、そのまま十代たちの部屋を訪ねた。

十代たち、というのはこの部屋を使っているのが十代一人ではないからだ。十代の他に、翔と隼人の三人で寝泊まりしているのだ。

一人部屋のほうが気楽なのは確かだが、そういう共同生活も醍醐味と言えば醍醐味だよなあ、と少し羨ましくも感じる俺であった。

そしてその同居人である二人だが、今は部屋の中にいない。特に隼人がいないのは珍しい。基本部屋にいる奴なのに。

「十代。翔と隼人はどうしたんだ？」

「翔はなんか棚を買ってくるってさ。隼人は散歩だってよ」

翔の理由はよくわからんが、隼人も進んで出かけるとは。留年を気にして出不精であることは気にかかっていたが、それも少しずつ改善されてきているってことか。

まあ、いつもどこでも一緒っていうわけではないのだから、こうして十代一人ということもあるだろう。

そう納得した俺は、部屋に上がって適当に座る。レッド寮にソファなんてものはないので、ま、床だな、床。

『やっほー、ハネクリちゃん。おいで〜』

『クリクリ〜』

そして横ではマナが十代のハネクリボーを招き寄せて撫でていよう。どう見てもペットかぬいぐるみの扱いだ。が、ハネクリボーよ、それでいいのか。……いいんだろうな、嬉しそうにしてるし。

そしてそんな精霊たちを横目に、俺は十代と向かい合う。

「で、今日は何する?」

「そうだなあ。あ、そうだ! お前のもう一つのデッキを見せてくれよ。いつつもシンクロナイズバツかりだろ?」

「確かにそうだけど……うーん、まあ、いいか」

あいよ、とデッキケースから常に持ち歩いている二つ目のデッキを十代に渡す。

ちなみに二つ目のデッキはマナの宿るカードが入っているデッキだ。そこまで言えば、どういうコンセプトのデッキかは言わずともわかると思う。

十代と交流を持って以降、俺はこうしてよく十代とカードについて話し合ったりデュエルをしたりしている。十代が「遠世のカードに興味がある」と言ってきた、別段隠すようなものでもなかったのに、デッキを見せ合ったりしたのは最初だ。

シンクロというものに興味があったのか、その時には翔と隼人、どこで聞いたのか明日香もいた。とりあえず《ダンディライオン》を始めとするこの時点で使うにはマズいカードや、あまり知られにくいカード、危険かもしれないカードは事前に抜いてあるので問題はなかった。

この時のメンツ、特に十代と隼人は俺のデッキを見て物凄く興奮していた。十代の場合は知らないカードを見たからで、隼人はそのデザインやギミックに注目していたようだった。

その後、隼人の描いた絵や考えたカードの案を見せてもらったのだが、驚くことに実際にOCGで存在するようなカードの案がその中にあったりした。何でも俺のデッキを見て、こういうカードは使えそうだと閃いたらしい。

実際にデュエルした時はプレイングミスが目立つイメージだったが、プレイをせず単体でカードの効果を吟味するのは得意らしい。

ちなみに、ペガサスさんに連絡しようか目下考慮中。未来において存在するカードを考えたとなれば、隼人はカードの制作のほうに適性があるのだろう。それを放っておくのはもったいない。

話が逸れたが、それを機に俺と十代たちの距離は一気に縮まった。放課後になると、十代とデュエルをし、隼人と話し、翔と遊ぶ。そんな関係を築くに至ったのである。

四人で一緒に飯を食ったり、ひたすら駄弁ったりと、学生生活を謳歌させてもらっている。

そんな中で、十代とは何か波長でも合ったのか、特に仲が良くなったと思う。よくデュエルするし、カードについても話し合ったり、今日のように二人でつるむこともある。

俺も十代といると気が楽だし、楽しいから文句はない。やっぱり、友達ってのはいいもんだね。

「うおお、すげえ！ めちゃくちゃレアなカードばかりじゃねえか！」

と、なにやら十代がデッキを見て大騒ぎしている。

それにハネクリボーもマナの傍から十代の背後の定位置に戻る。同じようにマナも俺の隣に戻ってきた。

「まあな。とりあえずコイツを組み込むからには、デッキ構成がどうしてもファンデッキになるのが欠点といえは欠点だけだ」

『失礼な。私だって強いんだからね』

俺が指で隣を指すと、マナがむっとした顔をして言い返した。

確かにリアルファイトになったら俺がボコボコにされるぐらい強いのは確かだが（腐ってもレベル6の魔法使いだし）、カードとしてみたら微妙と言わざるを得ない。ステータスもレベル6にしては低いし、効果も単体では意味ないし300ずつしか上がらないからなあ。

「でもすげえぜ！ まさかこんなデッキを持つてたなんてな……よし、遠也デュエルだ！ このデッキと戦ってみたくなったぜ！」

そう言っただち上がり、デッキを俺に返す十代。

デュエルねえ。まあ、俺も嫌いじゃないし、たまにはマナを使うのもいいかな。

シンクロを使っていかないといけない立場上、公の場でこのデッキを使うことはそうないだろうし。

「よし、いい」



「ただいまっす……」

と、俺も了承の返事をしようとしたところで、翔が帰って来た。

しかし、様子がおかしい。手にはおそらく十代が言っていた棚が入っているだろう袋を持ち、背中を丸めて俯く様はあからさまに暗い。その様子に、十代と俺はひとまず翔に声をかけた。

「どうしたんだ、翔。今日もそういえば元気なかったけど、今ほどじゃなかったろ？」

「なんかあったか？」

すると、翔はどんよりとした顔を上げ、大きな溜め息をついた。

「二人は余裕っすね……。明日はアレがあるのに……」

「アレ？」

「なんぞそれ」

十代と二人して首をひねる。その様子に、翔が焦れたように声を荒げた。

「アレといったらアレっすよ！ テスト！ 月一試験っす〜！」

そして、もうおしまいだー、と言いながら翔は買ってきた棚を自分の机に置き、その上に《死者蘇生》のカードを置くと、《オシリスの天空竜》のポスターを壁に張った。

何がしたいのかさっぱりわからんぞ……。

「ああ、そんなのあったな。すっかり忘れてたぜ」

十代が納得顔で手を打つ。いや、そんな暢気でいいのか、受験番号110番。

「それで十代。お前はテスト対策は万全なのか？」

「え、いやー、まあ、何となるんじゃねえか？」

わずかに逡巡するものの、結局あつけらかんと十代は答える。どう見ても何も対策してないな、こいつ。それでなんでこんなに気楽なんだ。ある意味すげえ。

しかし、そういえばそんなのあったな。そして十代たちのこの様子……。

ふむ、どうやら今日やることは決まったようだ。

「よし、十代、翔。テーブルを出せ」

目の前の十代、そして隅のほうで《死者蘇生》のカードを鉢巻きで額に巻こうとしていた翔に声をかける。お前は一体何をしようとしていたんだ。

言われた通り、テーブルを部屋の真ん中に設置した二人に、俺はよしと頷いて笑顔で告げる。

「今日はこれからずっと勉強だ。泣いて感謝しなさい」

「げ、マジ!？」

「嫌だー!」

「うつさいわ! お前らが勉強してないからだろ! 翔も祈るぐらいならちゃんと対策しろ!」

さすがに友人が揃って試験に落ちるといふのは忍びない。いくら実技の実力があっても、それだけで成績は良くないのである。

というか、翔は今のところ実技も微妙なのに、なぜ神頼みという発想になるんだ。

「とういうわけで、勉強だ勉強。なに、安心しろ。何を隠そう俺は、勉強を教える達人だ！」

そう言っつてビシツとポーズを決める。このブラボーな姿に、彼らもきつとやる気を出す。

『かつこわるーい』

「ポーズはカッコイイけど、勉強は嫌だぜ！」

「勉強を教える達人つて意味わからないっす！」

マナとはあとで話をするとして、二人はやっぱりやる気を出さない。ちよつとやるだけでも大分違うというのに、なんでそうも嫌がるんだ。

ああもつ、強引に行くしかないか。

「黙らっしやい！ とにかく神頼みするよりもきちん勉強したほうがマシだったの。ほら、やるぞ！」

「マジかよー」

「うう、仕方ないや」

しびしび、不満を述べつつも勉強する準備をする二人。それぞれやっぱりマズいという意識はあつたらしく、一度そうと決めれば以後は素直だった。わからないところは俺が教え、互いに助け合いながら勉強をしていく。

途中「ただいまなんだなー」と帰って来た隼人もその輪に加わり、四人での勉強会が始まる。

更にその最中、あのデュエル以降交流を持つようになった明日香から十代のPDAにメールが入るが、十代は勉強してるからとその誘いを拒否。

その理由に驚いてやって来た明日香が本当に勉強している十代たちを見て啞然としたなんてこともあった。この三人、授業も全然だからな。その驚きもむべなるかな。

その後、なぜか明日香も教える側に加わって五人での勉強会となる。五人ともなればレッド寮の一室では手狭だが、それも気にならなくなるぐらいに楽しかった。

嫌だ嫌だ言っていた十代と翔、隼人の三人も、こうしてわいわい仲間内で何かをやるのは楽しかったらしい。途中からは何も言わずともノートに向かい、勉強に取り組んでいた。

時に雑談をし、勉強もきちんとやる。なかなか良い時間だったと言える。

そして夜になり、別れる時。

明日香は笑顔で「楽しかったわ、試験頑張った」と言ってお帰った。

十代たちも「初めてこんなに勉強したぜ」とか「意外と楽しかったす」とか「今回はいける気がするんだな」とか言っていた。

それぞれ笑っていて、勉強をしていたとは思えない明るさだった。

それらの言葉に対して「なら良かった。試験頑張ろうぜ」と返し、互いの健闘を祈ってから寮に戻る。これで明日の試験も、少しは良くなるだろう。実技については、まあ頑張ってもらおうしかないが。

『 遠也も楽しそうだったね 』

寮に戻り休む時、ふとマナがそんなことを聞いてきた。俺はそれに、笑って答える。

「まあな。ここに来て良かったよ。気のいい友達が出来たからな」

ベッドに寝ころんでいた俺は、よつと身体を起こして端に腰かける。目の前で浮いていたマナは実体化して俺の隣に座った。

「うん、遠也があんなに笑ってるの見て、私もそう思った」

そう言って、マナはそのまま頭を俺の肩に預ける。

一瞬心臓がはねると同時に、邪な気持ちも湧きおこる。が、そんな雰囲気でもないのは明らかだったので、とりあえずそのまま動かないでおく。

「心配、だったのかな。結局、遠也はマスターたちにはどこか遠慮していたでしょ？ だから、ね」

マナは小さく苦笑をこぼして言い、それに俺もまた苦笑いで返した。

それはマナが言っていることが事実だからだった。

俺はお世話になった遊戯さん、保護してくれたペガサスさん、そして力を貸してくれた海馬さん、他にも城之内さんを始め気を使ってくれた人たちのことを慕っているが、遠慮の気持ちは抜けなかった。

それは彼らが全員俺より年上であり、同年代に対するような態度をとることがどうしても出来なかったためであった。

そういう意味では、本当に素の自分で接した相手というのはマナだけだったと思う。

しかしそこに、アカデミアに来たことで十代たちも加わった。真実俺と同年代である彼らは、俺にとっても気を使わないですむ対等な立場の人間だったからだ。

俺の事情を知らない、というのも良かったのかもしれない。素の自分であるという点では、今ほどそれが出来ていることもこの一年ではなかった。

俺はそれをただ当たり前に受け入れて過ごしていたが、どうやらマナはずっとそのことを心配していたらしい。まさか、そんなに心配かけていたなんて知らなかった。

そのことに、俺は感謝と嬉しさと申し訳なさが混じったような複雑な気持ちを抱く。そして俺は肩に乗つけられた頭に、少しだけ自ら顔を寄せた。

「あー……その、ごめん。あと、ありがとう」

それだけを呟くような小さい声で言う。顔を寄せているから、聞こえているだろう。声を大にして言うのは気恥ずかしかった俺の精一杯の結果であった。

それを受けたマナはと言うと、突然ぱつと顔を上げてこちらを見た。近づけていたせいで顔同士がぶつかりそうになり、俺は慌てて顔を離す。

そして、顔をそむけている俺の耳にマナの言葉が届く。どんな顔をして言ったのかは、見ていなかったからわからないが。

「うん。ありがとう」



なんでマナがお礼を言うのかはよくわからなかったが、その後再び俺の肩に頭を乗せたマナは眠るように目を閉じた。

俺はそんなマナを横目でちらりと盗み見て、あまりに近くにあるその姿にどきりとする。こうして見れば、やはりマナは美少女である。そんな子が近くにいて、気にならないほうがおかしい。

俺にとって一番気を許せて仲がいいのがマナなのは間違いない。マナも似たように思ってくれているとは思うが、だからこそこの距離感に時々戸惑うことがあるのも事実だった。

俺は極力気にしないようにしようと努め、同じように目を閉じた。

このまま寝てしまおう。そうすれば、この変な気持ちもテキトーに収まってくれるだろう、とそんなことを考えながら。

翌日。

ベッドに腰掛け、そのまま後ろに倒れた姿で寝ていた俺と、その腹の上に倒れ込むように寝ていたマナ。

俺たちは互いに変な格好で寝たために少々痛む身体に辟易しながら、何とか教室にたどりついていた。

マナはもちろん精霊化しているが、それでも痛みは残っているらしく『いたたた……』と寝違えた首をしきりに気にしている。

俺も同じく身体の痛みを気にしながらの着席となったが、それと同じぐらいに気になる事実に気がついてしまい、今は視線を教室中に走らせているところだ。

『あれ？ 十代くんがいない？』

うん、つまりそういうことなんだ。

マナが言ったように、十代の姿が教室のどこにもない。そろそろ試験が始まるというのに、どうしたというのだろうか。

十代は良くも悪くも真っ直ぐで、サボりなんて進んでする奴じゃ

……いや、サボりはするか。真っ直ぐな分、嫌授業なことからは素直に逃げるし。

けど、昨日あれだけ勉強したのだから、今日サボるとはさすがに考えづらい。というわけで、ボイコット説は却下。

寝坊という説が有力だが……と、そういえば翔と隼人は普通にいるじゃないか。同室のあいつらに聞けば手っ取り早い。

というわけで、おーい。二人に呼びかけ、話を聞く。

……結論、寝坊でした。

二人曰く、起こしたけど起きなかった。間に合わなくなりそうだったので先に来た。だそうだ。それなら仕方ないね。

『せっかく勉強したのに……』

マナも十代の失態に若干の呆れ顔だ。とはいえ、翔の話聞くに俺達が帰った後にも少し勉強していたようだから、慣れないことをした疲れと思うと憎みきれないがね。

やれやれと思っていると、ふいに明日香と目が合った。こちらを見ていたってことは、明日香も十代がいないことを気にかけていたのだろう。

俺はジェスチャーで寝坊だと伝える。上手く伝わってくれたようで、明日香も呆れたような顔になり、次いで苦笑に変化する。

ま、もう笑うしかないよな。ここまでくると。

「さて、それじゃあテストを始めるのにやー」

おっと、大徳寺先生が来たか。

結局十代は間に合わないまま試験開始、と。やれやれ……。

筆記試験が終わり、俺は十代、翔、隼人と一緒に購買に向かって  
いる。

なんでも新しいパックが入荷されているんだそうだ。他の生徒たちも実技試験前に強化できるカードがあるかも、と言って何人も買いに行っている。

十代もどんなカードがあるのかとワクワクしているようで、まるで強敵を前にした悟空のように目を輝かせている。

……そう、十代だ。こいつ、遅刻はしたけど、試験は途中参加という形で受けたんだよね。

遅れてやって来て、そのくせ翔と雑談に興じるといふ神経の凶太さを見せはしたが……万丈目に怒られ、そして大徳寺先生からも注意を受けて、テストを受けることとなったのだ。

とはいえ、終わり頃に席を見たら満足げに笑っていた。聞いてみると、俺と明日香のおかげでだいぶ解けたぜ、とのこと。そりゃ良かった。

そして十代は俺に礼を言い、席が少々離れている明日香には大声でお礼を言った。いきなり大声で呼ばれた明日香は、若干恥ずかしそうだ。それでも軽く手を振って応えるあたり、実際には嬉しいのだろう。

十代がこう言うのなら、昨日の勉強会の様子を見ても落ちているということはないだろう。一安心といったところかな。

さて、そんなこんなで俺たちは四人揃って行動している。

で、購買に着いたんだけど……。

「ええっ！？ 残り1個お！？」

購買のお姉さんに聞いてみると、どうやら新しいパックを買い占めていった生徒がいたとのこと。だから、残りのパックは一個だけ。

道理で購買に誰もいないと思った。先に行った奴らもこの話を聞いてさっさと帰ってしまったんだろう。

そして後に残るのは、当初の目的を潰されてしまった俺たち四人。俺は自分のデッキを改造する気はないからいいが、それが目当てだった翔なんかは少し落ち込んでいるようだった。

「うう、筆記はいつもより出来たと思うけど、実技はやっぱり不安だよ。どうしよう、アニキ……」

翔が弱々しく言うと、十代は仕方ねえ、と言って残っていたパックを取って翔に渡した。

「え、アニキ？」

「いいさ、それは翔が買えよ！」

「え！ で、でも……」

「俺はいいって！ 俺のHEROはそう簡単にはやられないからな

「！」

十代はそう言って笑い、次いで翔は俺に視線を移す。

「俺もいいよ。もともとデッキをいじる気はなかったし。隼人はどうだ？」

「俺もいいんだな。俺のデッキのテーマに入るカードは入ってないだろうし……」

隼人もそれほど成績は良くないが、翔の様子に気を使ったのだろう。

確かに隼人のテーマに合うカードは少ないが、それでも獣族のサポートカードは多いし、それ以外の魔法・罫にも有用なカードは数多い。それらが手に入る可能性もあるだろうに。

俺たちの言葉を聞いた翔は、涙ぐんで感動していた。

「アニキ、遠也くん、隼人くん……ありがとうっす……」

「気にするなよ！ それじゃ、早速戻ってデッキ調整だ！ 行こうぜ！」

ぱしっと翔の肩を叩いて、十代が促す。

「ちょっとお待ち！」

しかし、購買を出ようとしていた俺たちに声が掛けられる。奥から出てきた人は、髪を三つ編みにしたおばさんだ。その顔を見て、十代はあつと声を上げる。

「今朝のおばちゃん！」

え、知り合い？

話を聞くと、十代は朝寝坊した後道で困っているこのおばさんトメさんを助けていたとのこと。それが原因で、あそこまでの大遅刻になってしまったらしい。

いずれにせよ遅刻は遅刻だったわけだが、それでも自分の試験がかかっている中、迷わず人助けを選択できるあたりは素直に褒められるところだ。少なくとも、俺なら少しは迷ってしまうと思う。

『そんな事情が……それなら仕方がないね』

マナも遅刻してきたことは良くないと思っているようだが、それでもその十代の心根には文句はないのだろう。笑顔で十代のことを言外に褒めていた。



その後、トメさんによって俺たちにはそれぞれパックが与えられた。なんでもトメさんが予めいくつかとっておいたらしい。トメさんもデュエルするのかね。

そして俺たちはそれぞれパックを開く。

十代の手には《進化する翼》。ハネクリボー専用のサポートカード。なるほど、ここで手に入ったのか。

翔、隼人もそれぞれ自分のデッキに合うカードが手に入ったようだ。

さて、俺のパックには何が入ってるのかね。デッキに加える気がないとはいえ、カードパックを開く時のこの気持ちはやっぱり楽しいもんだ。

「さて、なにになに……《雷電娘娘》《RAI-MEI》《お注射天使リリー》《荒野の女戦士》《ハーピィ・クイーン》……なあにこれえ？」

翔は若干羨ましがしたが、これは完全に事故パックじゃないか。

というか、単なるエラーだろコレ……。5枚全部モンスターで、しかも女性型しかないとか。どういう確率？

「うわぁ、すげえな遠也」

「……ああ。まあ、こつこつともあるわ」

もともとトメさんの好意でもらったものだ。文句を言つつもりもない。

そう、これはトメさんの好意なのだ。決して、それを無駄にしておかない。はいけない。というわけで、このカードも使ってあげなければいけないだろう。

というわけで、少し離れて早速ディスクにセット。

いやあ、みんな可愛いカードばかりだからな。ソリッドビジョンで見たことないカードばかりだし、どうなるのか今から楽しみだ。特にハーピー・クインとか。おっばい。

『……私、ここにいるんですけどー』

おっと、そういえばマナが横にいたんだった。しかも何だか相当に不機嫌そうだ。仕方なくディスクからカードを外す。

そして俺たちはトメさんにお礼を言い、デッキの調整を行うためにその場を後にした。

……そしてその移動中。俺はずっと隣のマナからぐちぐちと文句

を聞かされていた。

曰く、遠也は女心がわかっていない、すぐ女の子に鼻の下をのばす、デリカシーがない、などなど。

翔と隼人はわからないからいいが、精霊が見える十代はずっとマナに責められている俺を見て、苦笑이었다。

『もう聞いているの、遠也。だいたい……』

……すみません、もう勘弁してください。

#### 第4話 試験1（後書き）

中途半端になってしまいました。

次回はきちんとデュエルしますので、お許しください。

マナ可愛いよマナ。

## 第5話 試験2(前書き)

連続更新はここまでです。

あとは時間を見つけて書いていきます。

## 第5話 試験2

そんなこんなで、始めました実技試験。

実技試験はどうか基本的には同じ寮の者同士で行うものらしい。しかし十代はなんでか万丈目と対戦していたんだが……そこら辺はどうなっているんだろう。

ひょっとして実力のある生徒は他寮の生徒をあてがう、とかそういうことなのだろうか。詳しく覚えていないからはっきりしない。

まあ、どうであろうと自分に出来ることをするだけ、と言えばそれだけだ。十代は万丈目にきっちり勝ってみせた。その後、寮の昇格の話が出ていたが、十代は断るつもりのようにだ。

観客席に帰って来て、いま隣にいる本人に聞いたから間違いない。ま、十代は赤色の制服のほうが似合ってるよな。そう言ってやれば、十代は「俺もそう思う」と言って笑った。

それより、果たして俺の相手は誰となるのか。誰が相手でも負ける気はないが……はてさて。

『あ、遠也。次みたいだよ』

と、そういって言うている間にどつちやら回って来たらしい俺の番。

やれやれと座っていた席から腰を浮かす。そして、一緒に観戦していた面々に顔を向けた。

「じゃ、行ってくる」

「頑張つてっす！」

「遠也なら大丈夫なんだな」

「ええ、頑張つてね」

上から順に翔、隼人、明日香である。何故かいつもの面子に明日香が加わっているのは、御愛嬌といったところか。

「勝てよ、遠也！」

「おつとも」

その言葉と共に上げられた十代の手に自分の手を合わせ、パチンと音が鳴る。

そして俺は観客席からデュエルフィールドへと足を向けた。

基本同じ寮同士とはいえ、やはり実力がそれなりに拮抗しなければ試験としては成り立たない。だから、ライイエローの中でも上位の人間が恐らく俺の対戦相手となるんだろう。

となれば、恐らく俺の相手は……。

そこまで考えていたところで、向かい側から誰かが歩いてくる。当然それはこの試験の対戦相手。その服装はやはりイエロー寮のものであり、その顔は俺が予想していた顔であった。

「やっぱお前か、三沢」

「ああ。デュエルをするのは久しぶりだな、遠也」

そう言って、三沢は口角を上げて笑った。

三沢大地。俺と同じ一年生でライイエローの筆記トップの男だ。当然入学試験も1番。単純に頭の良さなら恐らくこの学校でも1番なのではないだろうかと思う。

俺も頭では三沢に敵わない。だが、三沢はデュエルでは俺に敵わない。

筆記の三沢、実技の俺。ライイエローでは俺たち二人がトップに並んでいると言っても過言ではない。

「それで、三沢。こうしてここにいるということは、出来たのか？」



「ああ。まだ完璧とは言えん……せいぜい70%といったところだ  
がな」

そう言っつて、三沢はジャケットの裏からデッキを一つ手にとって  
ディスクに収める。

デッキを取る際に見えたジャケットの中。そこには何個もデッキ  
が用意されていた。

「お前のシンクロ召喚を封じるためのデッキ……試させてもらおう  
！」

三沢には一つの特徴がある。それは、相手のデッキごとに違うデ  
ッキを使うということだ。

つまり、いわゆるメタデッキという概念に近い。三沢はその頭脳  
を最大限に利用し、相手を封じ込める対策を練ったうえでデッキを  
作る。

そういう比較的この世界では珍しいタイプのデュエリスト。それ  
が三沢なのだった。

「ああ、受けて立つぜ！」

そんな三沢の挑戦に俺も応え、ディスクを構える。

そして先生の開始の声とともに、実技試験が始まった。

「デュエル！」

皆本遠也   LP：4000

三沢大地   LP：4000

「先攻は俺だな、ドロー！」

「くっ」

まずい、三沢が先攻か。

対策を組み込まれたデッキ相手に先攻を取られるのは非常にまずい。悪ければそのターンでロックが完成して身動きできなくなることもあるからだ。

隣ではマナも心配げに見ている。それだけ、メタというのは、特に俺のデッキにはマズい。

そして、現在の俺のデッキの元となっている【シンクロン】と呼ばれるデッキに対するメタといえば……。

「俺は《王虎ワンフー》を召喚！」

「やっぱりソイツかー！」

《王虎ワンフー》     ATK / 1700     DEF / 1000

表側表示でフィールドに存在する限り、お互いに攻撃力1400以下のモンスターを召喚できなくなるモンスター。正確には召喚・特殊召喚は出来るが、その瞬間に破壊してしまうモンスターだ。

自分もその効果を受けるというデメリットはあるが、それ以上にこっちのダメージがやばい。なにせ、このデッキのモンスターはほとんどが低レベル、低ステータスのモンスター。ワンフー1枚で、9割以上のモンスターカードが召喚できなくなったと言っていい。

「お前の戦術は研究してきた。シンクロ召喚はその特性上、いったんフィールドに表側表示でモンスターを出す必要がある。そして、低レベルのモンスターを多用する。そのステータスは低いものがほとんどだ。なら、その召喚を封じてしまえばシンクロ召喚も行えない！」

どや顔で言う三沢。それに成程と感心する周囲。そして、ぐうの音も出ない俺。

悔しいけど、その通りだよこんちくしょう！

「更に俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

「くっ……俺のターン、ドロー！」

一応、このデッキの弱点は俺自身が一番知っている。だからこそ、  
こういう状況を脱する手も用意してはあるが……。

それが手札に来なければ全く意味はない。一応、現状の手札でも  
対処は可能、か。足掻けるだけ足掻くが……。

「俺はモンスターをセツト、更にカードを1枚伏せてターンエンド  
だ！」

ここは耐えるしかない。けど、なんとかワンフーを対処しないと。

「俺のターン、ドロー！」

さて、三沢はここからどう来るか。

ワンフーときたからには、その後の展開もある程度は予想できる。  
だが、相手はあの三沢。どんな戦術で来るのかはわからない。

「俺は《異次元の女戦士》を召喚し、バトル！ 異次元の女戦士でセツトモンスターを攻撃！」

《異次元の女戦士》     ATK / 1500     DEF / 1600

金髪の女性、荒野の女戦士のその後の姿とも言われる鎧姿の戦士が、その剣を振りかぶり、裏側表示のカードに攻撃する。

それにより、カードが反転。

「セツトモンスターは《ライトロード・ハンター ライコウ》！ ライコウの効果、フィールド上のカード1枚を選択して破壊できる！ 俺が選択するのは、当然王虎ワンフー！」

これも一応、対策その1ではある。墓地肥やしのほうが主目的ではあるので、対策として入れたカードというわけではないが。

これで破壊されれば儲けもの、といったところだが……。

「甘いぞ遠也！ 罨カード発動、《天罰》！ 手札のカード1枚を墓地に送り、ライコウの効果が無効にして破壊する！」

ソリッドビジョンによって、天から雷がライコウに降り注ぎ、破壊してしまっ。

くそ、やっぱりそう簡単には行かないか。そのうえ異次元の女戦士も場に残っちゃってるし、墓地肥やしも出来ないし……。

「俺は更に王虎ワンフーで直接攻撃！」

「くっ……！」

遠也      LP：4000      2300

フィールドにモンスターを召喚できないってのは、やっぱり辛いな。

せつかくのライコウも不発に終わるし、散々だ。やっぱり、シンクロン主体のデッキにとってワンフーは鬼門もいいところだな。

俺のライフをいきなり大幅に削ることに成功した三沢は、それでも注意深く俺を見ている。ダメージを与えても油断しない姿は、さすがといったところか。

「よし、俺は更にカードを1枚伏せてターンエンド！」

「マズいわね」

「遠也くんのフィールドが、がら空きになるなんて……」

明日香の言葉に同意するように翔は、遠也の置かれた状況を沈んだ声で表した。

さっきまでは伏せモンスターがいたのだが、三沢により破壊。今遠也のフィールドにあるのは伏せカードが1枚だけ。ライフポイントも削られてしまった。

状況的に危ないの是一目瞭然だった。

しかしここで、翔は心に浮かんだ疑問を口にする。

「でも、遠也くんらしくないっすね。いつもならもうシンクロ召喚

してるのに……」

不思議そうに言う翔に、明日香はため息をつく。

いかにも呆れた様子に、翔は居心地が悪そうに身を揺らした。

それを見ていた隼人が、翔に対して解説をする。

「翔。三沢が出してる王虎ワンフーは、攻撃力1400以下のモンスター召喚を封じる効果があるんだな。遠也のデッキのモンスターは低攻撃力ばかりだから、モロにその影響を受けてるんだな」

「そういうことよ。あなたも前田君を見習って少しは勉強したほうがいいわよ」

「いやあ、俺は遠也のデッキについて知ろうとしているうちに詳しくなっただけなんだな」

明日香に褒められ、隼人は満更でもなさそうに謙遜する。

実際、勉強が得意ではなかった隼人だが、カードそのものは大好きであり興味もある。それはカードデザイナーに憧れを持つ面からも確かである。

そんな彼は、遠也が持つシンクロという新たな概念に大きな衝撃を受けていた。そして、事あるごとに遠也に尋ね、興味のままに知ろうとした。



その結果、意図せぬうちに隼人の知識は深まっていたのだ。基本知識が身に着いた程度のもものではあったが。

「うう、じゃあ遠也くんはマズいじゃないっすか!」

「そうね。どうにかワンフーに対処しないと、最悪このままってことも……」

「心配なんだな」

3人は遠也のデッキがシンクロを主力にし、それがなければ成り立たないデッキであることをよく知っている。故に心配する思いが滲み出てきていた。

しかし、同じく遠也のデッキをよく知りながら、十代はまったく心配する様子を見せていなかった。

「大丈夫だって、遠也なら」

そう十代は3人に言い、にやりと笑う。

「あいつと一番デュエルしてるのは俺だぜ! その俺が言うんだから間違いない! 遠也なら、どんな状況からでも、絶対に勝ってみせるさ!」

断言して見せる十代に、3人は強張っていた気持ちを緩める。

確かに、遠也と最もデュエルしているのは十代だ。その十代がこ  
う言うのだから、遠也には何か手があるに違いない。

「そうね、信じましょう」

「それなら、応援で元気づけるっす!」

「それはいい考えなんだな」

そして翔と隼人、十代はそれぞれ遠也に向かって声援を送り始め  
る。そんな賑やかな3人を見て、明日香は小さく笑った。

男の友情ってやつなのかしら。そんなことを思いながら、彼女も  
また遠也に心の中で声援を送るのだった。

うお、なんか十代たちが大声で応援してくれてるんだが。恥ずかしくないのか、あれ。周りから見られてるぞ。

だがまあ、応援される身としてはやはり嬉しい。なら、気合を入れていきますか。

「俺のターン、ドロー！」

よし、来たか破壊系のカード。待ってました。

「モンスターをセット、更にカードを1枚伏せてターンエンド！」

俺はエンド宣言をするが、三沢は訝しげにこちらを見ている。いや、そっちのターンですよ？

「遠也にしては、消極的すぎる……。本当に何も手がないのか？ まあいい。今は己を信じるのみ！俺のターン、ドロー！」

三沢は引いたカードを一瞥し、そのままディスクにカードを置く。

「永続魔法《強者の苦痛》を発動！ 相手フィールドに表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力はレベル×100ポイントダウンする！」

俺のフィールドに表側表示のモンスターはいない。だということに出したということは……。

「保険か。用心深いこつたな」

「ふっ、お前を相手に出し惜しみが出来るはずもないからな。なにせ、最強のラーイエローなのだから」

「お前まで言うのか、それ」

「そつ言つな。その称号は俺がもらつつもりだったんだからな」

確か、そしてゆくゆくは学年1位となつてオベリスクブルーへ、だったか？ 以前のデュエルでそんなことを言っていた気がする。

1位になることに執着している、というよりは自分の力を試して鍛え上げることが重要、という感じだったな。今時珍しい勤勉な奴だと思つたのを覚えている。

なるほどね、俺は図らずも三沢の前に立つ壁になつてること

か。

「だから今日、お前に勝って俺は更に強くなる！俺はもう1枚の《王虎ワンフー》を召喚し、バトル！異次元の女戦士でセットモンスターに攻撃！」

セットされたモンスターが反転し、姿が明らかになる。

俺が伏せたのは《ボルト・ヘッジホッグ》。当然破壊される。

「ボルト・ヘッジホッグ……それは確か墓地で効果を発揮するモンスター。なら、俺は異次元の女戦士の効果でこのカード自身とボルト・ヘッジホッグをゲームから除外する！」

三沢の言葉により、異次元の女戦士の効果が発動。2体のモンスターは次元の裂け目に飲み込まれてフィールドから消え去っていった。

「これでお前のフィールドはがら空きだ。1体目のワンフーで直接攻撃！」

「なんの！罨カード発動、《サンダー・ブレイク》！手札を1枚捨て、攻撃してきたワンフーを破壊する！」

「くっ……！！ならばもう1体のワンフーで攻撃するまでだ！」

これはさすがに防げん。ワンフーの攻撃が決まり、俺のライフが更に大きく削られる。

遠也      LP：2300      600

「メインフェイズ2に入り、俺は伏せていた《リビングデッドの呼び声》を発動！ 王虎ワンフーを復活させる！」

「そいつはさせせん！ 速攻魔法発動、《サイクロン》！ リビングデッドの呼び声を破壊し、そのワンフーはもう一度墓地に戻ってもらう！」

「……やはり、そう簡単には行かないか」

当たり前だっつもの。せつかく1体ワンフー潰したのに、復活されてはたまらん。対処出来るものも出来なくなってしまう。

「俺はターンエンドだ！」

三沢のターンが終わり、俺のターンが来る。

だが、まだ俺の手札に逆転の一手はない。ここで引けなければ、さすがにまずい。まったく、十代のようなドロー運が俺にもあれば

良かったんだがなあ。

そんな考えがよぎり、思わず十代がデュエルしている様子を思い出す。

万丈目とのデュエル、苦戦しているのかモンスターを破壊される十代。だが、その表情はそんなことを思わせないほどに清々しく、心からデュエルを楽しんでいるのがこちらにも伝わってくるようだった。

十代は遊戯さんたちのように、カードを信じ、その力に絶対の信頼を寄せるデュエリストだ。

それは主人公だから、というわけではない。心からデュエルを楽しみ、そしてデュエルが好きだからこそ、その力となってくれるカードたちを信じている。

それは、ただ十代がそういう人間だからだ。主人公も何も関係ない。デュエルが好きで、カードを信じているからこそ、デッキは応えてくれる。

そのことを、俺は誰よりも楽しそうにデュエルをする十代に教えられたような気がした。

……ここに来て、ずっと十代と一緒にいたからか、俺も影響されていたみたいだ。

デッキを信じる。口で言うには簡単だが、俺は果たして真にそれができていただろうか。

いや、出来ていなかったんだろうな。出来ていたなら、ドロー運がどうのと言うはずがない。どこかで、たかがカードゲームだと思っていたような気がする。

ここはもう前の世界ではないというのに。

なら、今この瞬間から。俺は俺の作ったこのデッキを心から信じる。俺が信じて作ったデッキ。その相棒達の力を信じて、カードを引く。ただそれだけでいい。

それが、いつも俺に力を貸してくれているこいつらへの礼ってものだろう。

『遠也、頑張れ!』

こうして、応援してくれる奴もいるんだ。なら、なおさら負けたくない。だから、力を貸してくれ俺のデッキ。

「俺のターン、ドロー!」

引いたカードを、確認する。

来たか!



「俺は手札から速攻魔法、《月の書》を発動する！」

「《月の書》だと!?!」

三沢もわかっているみたいだな。これでこのターン、俺は自由になる。

「月の書の効果により、フィールドに表側表示で存在するモンスターを1体、裏守備表示にする。俺が選択するのはもちろん、王虎ワッソー！」

月の書の効果が発動し、三沢の場に存在するワッソーが姿を消し、裏側表示のカードだけがその場に残る。

効果モンスターの効果は基本的に表側表示でなければ発動しない。それはワッソーも同じことだ。なら、裏側守備表示にしてしまえばその効果は発動しない。

これでこのターン、俺の行動に制限は何もなくなった。

「だが、お前の手札は1枚。フィールドには1枚もない。そこからどうするというんだ？」

確かに一気に決めるのは無理だ。だが、この手札にある1枚。これが、この状況を打破する一手となる。

俺の全てはこの手札の1枚だけ……。だが、だからといって、負けると決まっているわけじゃない。

月の書の効果はこのターンだけ。なら、その間に出来ることをやるだけだ。

「俺は手札の《調律》を発動！ デッキからシンクロンと名のつくチューナーを1体手札に加え、その後デッキトップのカードを墓地に送る。俺が選ぶのは《ジャンク・シンクロン》！ そして、そのまま召喚する！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 1000 DEF  
/500

そして墓地に落ちるカードを確認する。

よし、これならまだ何とかなる。少なくとも、あと1ターンでやられるということはないだろう。

「ジャンク・シンクロンの効果発動！ 墓地のレベル2以下のモンスターを効果が無効にして特殊召喚する！ 蘇れ、ボルト・ヘッジホッグ！」

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 600 DEF/8

「ボルト・ヘッジホッグの2枚目！ コストで墓地に送られていたのか！」

そういうことだ。

さて、これでようやくチューナーと素材モンスターを並べることが出来た。やっぱりワンフーって鬱陶しいな。特にシンクロン主体のデッキにとっては。

初手で来られると、除去するまで何も出来ないからなあ。

「レベルの合計は5……。来るか、ジャンク・ウォリアー」

三沢がこれまでの俺の対戦から、これから出すシンクロモンスターの予測を立てる。

だが、ちょっと違う。レベル5というのはそうだけだね。

「三沢。言っておくが、俺が持っているレベル5のシンクロモンスターはジャンク・ウォリアーだけじゃないぞ」

「なに!?!」

確かにレベル5のシンクロではあいつしか使ってなかったから、勘違いするのもわかるが。

これから出すのは、本来なら遊星は使っていないモンスター。だから、これは俺が選んだモンスター。シンクロ主体だった現環境で猛威をふるった1枚である。

「俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

既にアカデミアでは見慣れたものとなりつつあるシンクロ召喚のエフェクト。だがしかし、これから出すのは今日初めてお披露目となるモンスターだ。

「集いし英知が、新たな未来の扉を開く。光差す道となれ！」

一際強く光が放たれ、その中からモンスターが現れる。

「シンクロ召喚！ 導け、デック・ジーナス《TG ハイパー・ライブラリアン》！」

《TG ハイパー・ライブラリアン》 ATK/2400 190  
DEF/1800

白と黒の学士帽とマントを身につけ、近未来的な電子ブックのよ  
うな端末を手に、青いレンズの眼鏡をかけた長身の男。司書と言  
いつつも、どこか科学的な出で立ちのモンスターがフィールドに降り  
立った。

「TG ハイパー・ライブラリアン、新たなシンクロモンスター。  
一体、どんな効果が……」

「TG ハイパー・ライブラリアンで裏守備になっている王虎ワン  
フーに攻撃！」

ライブラリアンはその両手から本に似た波動を放ち、セット状態  
からリバースした王虎ワンフーを破壊する。

強者の苦痛により、レベル分、500ポイント攻撃力が下がって  
いるが、王虎ワンフーの守備力は1000。問題なく破壊された。

そして、三沢はライブラリアンの効果を警戒しているのか身構え  
ている。だが、俺に出来ることは既に何も無い。

「俺はこれで、ターンエンドだ」

「なに！？ ……何か効果があるわけじゃないのか？ まあいい。  
俺のターン、ドロロー！」

三沢はドローしたカードを見て、それをそのまま宣言して発動した。

「俺は《強欲な壺》を発動！ デッキからカードを2枚ドローする！」

出た！ GX時代のドローコンボだ！

デュエルモンスターズ最大のドローソースにして、OCGでは（たぶん）永久禁止カード。この時代では制限とはいえまさかの現役というトンドデモ仕様。発動条件もなく手札が1枚増えるとか、俺としては羨ましすぎる効果である。

貪欲な壺や闇の誘惑でさえ制限化されてんのになあ。早くこの時代もこのカード禁止にしてくれよホント。

俺のデッキには当然入ってないから、ちょっと羨ましいんだよコンチクショウ！

「そして俺は《魔導戦士ブレイカー》を召喚し、このカードに魔力カウンターを1つ乗せて攻撃力300ポイントアップ。更に速攻魔法《収縮》を発動！ ライブラリアンの攻撃力を半分にする！」

《魔導戦士ブレイカー》    ATK / 1600    1900    DEF /  
1000

《TG ハイパー・ライブラリアン》 ATK/1900 700

ライブラリアンの攻撃力が大幅に下がり、ブレイカーの戦闘破壊可能圏内に入る。

魔導戦士ブレイカーは魔力カウンターが乗っている時は攻撃力1900のアタッカー。それを取り除けば魔法・罠の除去も出来るという優秀なカードだ。

だからこそ三沢も入れているのだろう。この時代では制限だったか準制限だったか……どっちだったかな。

「バトル！ ブレイカーでライブラリアンに攻撃！」

ブレイカーがその剣を振りかぶり突進してくる。かつて遊戯さんというより王様のほうが羽蛾相手にバーサーカーソウルしたことで有名なカードだ。まさか俺がソイツに狙われる側になるとは想像もしていなかった。

まあ、それはいいとして。これを通せば大ダメージは必至だ。ここは防がせてもらう。

「俺は墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果を発動！ このカードを除外し、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

「そんなカードいつの間に……またあのコストの時か」

「そついつことだ」

三沢は、ふうと息をついて小さく笑った。

「抜け目ない奴だ、さすがだな。しかし、だからこそ超える価値がある！俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」

よし、このターンはしのいだ。

そして布石となりえるライブラリアンも召喚してある。

だが、それだけだ。相変わらず手札はゼロ、フィールドにモンスターが1体という危険な状況だ。

「俺のターン……ドロー！」

引いたカードを見て、俺はそれをすぐさまディスクの上に置いた。

「俺は《シンクロン・エクスプローラー》を召喚！効果により、墓地のシンクロンと名のついたチューナーを特殊召喚する！来い、ジャンク・シンクロン！」



《シンクロン・エクスプローラー》 ATK/0 DEF/700

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 1000 DEF  
/500

「またチューナーと素材となるモンスターが揃った……！ 来るか、シンクロ召喚！」

もちろんである。

三沢の期待に応え、俺は早速宣言する。

「俺はレベル2のシンクロン・エクスプローラーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は5だ。当然、呼ぶのはこのデッキの切り込み隊長。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 1800 DEF  
/1300

その拳をブレイカーのほうへと突きつけ、現れるジャンク・ウオリアー。

今日もよろしく頼みますぜ。

「更にシンクロしてきたか。だが、そいつでは魔導戦士ブレイカーの攻撃力には及ばない！」

その通りだ。

だから、俺はここで更に博打に出る！

「まだ俺のメインフェイズは続いている！　ここで、TG　ハイパー・ライブラリアンの効果発動！」

「なんだって！？　このタイミングで発動する効果だと！？」

驚きを見せる三沢だが、それに構わず俺はライブラリアンの効果を使う。

本来ならもつと余裕を持って使いたいのだが、上手くいかないもんだな。このデッキがもともあのカードを出すために作られたデッキ、というのも回りづらい原因かもしれないが。

ガチにすれば話は別だろうが、それはそれで嫌なんだよな。まあ、それは置いておいて。

「ライブラリアンの効果！ 自分か相手がシンクロ召喚に成功するたびにカードを1枚ドローする。ドロー！」

そう、この相手がというのが問題でもあった。かつての環境はシンクロ全盛だったからな。コイツがいれば手札に困ることがなかったのだ。更に2体いれば、色々出来たしな。

制限になってからは、その猛威もなりを潜めたが。

「ドロー補強の効果を持っていたのか。だがまだ……」

「俺は今引いた《サイクロン》の効果を発動！ 三沢のフィールドの《強者の苦痛》を破壊する！」

「まさか！ ここで除去カードを引いたのか！？」

三沢があまりのことに驚くが、それを言うなら俺も驚いてる。

俺のデッキに、こうして単体で相手の魔法・罠を破壊できるカードはサイクロン2枚と大嵐1枚の2種類3枚。1枚は既に使ったので、あと2枚あったわけだが、まさかここで引けるとは。

これも遊星の言うところの、カードたちとの絆が為せること、だろっか。本当にそうなら嬉しいけどね。

なにはともあれ、地味に鬱陶しかった強者の苦痛もこれで消えた。結果、俺のフィールドのモンスターは攻撃力が元に戻る。

《TG ハイパー・ライブラリアン》 ATK/1900 2400

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/1800 2300

「バトルだ！ ジャンク・ウォリアーで魔導戦士ブレイカーを攻撃！ 《スクラップ・フィスト》」

ジャンク・ウォリアーの拳がブレイカーを打ち砕く。その瞬間、三沢の声が上がった。

「永続罫カード発動！ 《スピリットバリア》！ 俺のフィールドにモンスターが存在する限り、俺は戦闘ダメージを受けない！」

スピリットバリア？ なんでもそんな微妙なカードを……。アストラルバリアとのロック狙いだったのか、それとも何か別の狙いがあったのか。

まあ、それはわからないが、これでブレイカーとの戦闘によって発生する超過ダメージは0となったわけだ。

「だが、モンスターは破壊される。続けてライブラリアンで直接攻

撃！」

「ぐあっ！」

三沢 LP：4000 1600

ライブリアンの両手から迸る波動が、三沢のライフポイントを削る。

しかし、ようやくこれだけライフを削れたか。これだからワンフーは嫌なんだ。あいつ、ホントなんとかして制限かからないかな。無理に決まってるけどさ。

「俺はこれでターンエンドだ」

俺の手札はゼロ、対して三沢は1枚だがフィールドはがら空き。ここから、どう手を打ってくるか……。

「俺のターン、ドロー！」

三沢はカードを引き、そしてそれをすぐさま発動する。

「俺は《天使の施し》を発動し、デッキから3枚ドローし2枚捨て

る！ くっ……《ライオウ》を召喚！ そして2枚目の《強者の苦痛》を発動する！」

《ライオウ》 ATK/1900 DEF/800

また出たGX時代のドロコンボだ！

しかし、一瞬三沢は表情を歪めたな。場に出されたカードを見れば、その理由は察しが付く。逆転の一手を引けなかったからだろう。俺としては助かったわけだが。

っていうか、またお前が強者の苦痛。デッキコンセプト的に積まれてるんだらうから当然だろうが、それでもやはり邪魔なものは邪魔である。

《TG ハイパー・ライブラリアン》 ATK/2400 1900

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 1800

「ライオウでジャンク・ウォリアーに攻撃！ 《ライトニングキヤノン》！」

「つつ……」

ライオウの胸部にある赤い宝玉が光を放ち、そこに集った雷が砲

撃となって撃ち出される。

ジャンク・ウォリアーは何とか耐えようとするものの、耐えきれずに破壊された。

遠也      LP：600    500

「俺はこれで、ターンエンドだ！」

これで、三沢のフィールドにはライオウ1体と強者の苦痛。そして俺のフィールドには攻撃力1900となっているライブラリアンがいて、手札はゼロだ。

つまり、ここで俺が苦痛の効力下で攻撃力1600以上となるモンスターを出せれば、三沢のライフを削りきることができるわけだ。

「俺のターン……ドロー！」

このカードで全てが決まる。

そして、俺が引いたカードは      。

「      《カードガンナー》を攻撃表示で召喚する！」

《カードガンナー》      ATK / 400      100      DEF / 400

子供が描いたオモチャのロボットといえば、それがぴたりと当てはまるようなモンスター。その攻撃力は元々が400という低ステータス。それを見た観客席からは、少々の落胆の声が上がる。

だが、十代たちのほうからは「あつ」とか「そのカードは！」とか聞こえてくる。翔、隼人、十代は俺とのデュエルでこのカードのことを知っているからな。

だが、その中で明日香だけはこのカードのことを知らなかったらしい。十代たちにカードの効果を尋ねていた。

そしてそんな中、十代は大声で俺にエールを送る。

「いけー！ 遠也！」

その声に押され、俺は三沢に視線を戻す。三沢は召喚されたカードガンナーのステータスを見て、少し安堵しているようだった。

「攻撃力100……チューナーもない。それならば、次のターンで逆転してみせる！」

意気込む三沢だが、そうは問屋がおりさない。このデュエルはこ



こでエンドマークだ。

「甘いぜ、三沢」

「なに!？」

「こいつにはある効果がある。普段は墓地肥やしに使うばっかの効果だけだな。俺はカードガンナーの効果を発動！」

かつて機械複製術などのコンボでワンキルすら可能だった優秀な効果。低ステータスであろうと、こうして一瞬で化けることもある。

「1ターンに1度、デッキの上からカードを3枚まで墓地に送り、エンドフェイズまでその枚数×500ポイントこのカードの攻撃力はアップする！俺は3枚のカードを墓地に送り、攻撃力アップ！」

「なんだと!？ ということは……」

そう、強者の苦痛で300ポイント下がった攻撃力に、500×3の1500ポイントが上乗せされることとなる。

よって攻撃力は……。

《カードガンナー》 ATK/100 1600

「攻撃力1600……！俺の負け、か……」

自身の敗北を悟った三沢に、俺はただバトルフェイズに入る宣言をして応えた。

「バトル！ライブラリアンでライオウに攻撃！」

ライブラリアンとライオウの攻撃力は互角。互いの攻撃がその間で拮抗するものの、やがてそれぞれの攻撃がともに直撃しあい、2体は相打ちとなって墓地に行った。

当然、三沢のライフに変動はない。だが、これで三沢への攻撃を遮るものは何もない。

「いくぞ！カードガンナーで直接攻撃！ダイレクトアタックこれで終わりだ！」

「うああっー！」

カードガンナーの両腕から砲撃が放たれ、それが三沢に直撃する。

そしてその攻撃は三沢のライフポイントを削りきり、この瞬間に俺の勝利が確定した。

決着がつき、審判役の先生が俺の勝利を告げる。

ふう、やれやれ……。この世界に来てから、どうもデッキが上手く回っていないとはずっと思っていたんだが、それはこの世界ではカードそれぞれに精霊のような意思があるからだったのかもしれないな。

俺は元々デュエルモンスターズをただのゲームだと思っていたわけだし。それがカードとの絆を弱めていたんじゃないだろうか。

カードそれぞれのことを尊重し、大切にすること。単純なことだが、あるいはそれこそがこの世界で一番デュエルを楽しむ道なのかもしれない。

……しかし、元の世界なら妄想乙の一言で片づけられそうなことを、俺も真剣に考えるようになったもんだな。

実際、カードの精霊が実在するこの世界だから俺も真面目にそう考えられるが、もし精霊のことを知らなかったらずっと考えも変わらなかっただろうな。

『ん、なに?』

思わず隣に浮かぶマナを見る。

……そうだな。マナもカードの精霊なんだ。カードには意思があるなんて、ある意味一番納得できる実例が目の前にいた。逆にそれを認めないということは、マナのこと間接的に否定しているってことになる。

つまり、簡単なことだったわけだ。マナのことを既に認めている俺が、今更否定するはずもない。ちょっと受け入れれば、それだけで済むことだったのだ。

(ま、そんなわけで。改めてこれからも頼むぞ、俺のデッキ)

ディスクにセットされたデッキを外し、手に持って思う。

そして俺はデッキをケースに収めて対戦相手である三沢のほうへと足を向けた。

「さすがだな、三沢。いいデュエルだったが、冷や冷やしたぜ」

これは本心だ。これで70%なのだから、完成したらどうなっているんだろう。苦痛ワンフーが弾圧ワンフーになるのだろうか。…そのデッキとはなるべく戦いたくないものである。

それに対して、三沢は悔しそうではあるものの苦笑を見せた。

「まだまだ対策が足りなかったみたいだ。見ている、次はお前に勝ち俺がトップに立ってみせる！」

そう言っつて三沢は手を差し出して来る。それに、俺も笑って応えろとしっかり握り返した。

「ああ。その時を楽しみにしてるぜ！」

互いの健闘を称え合い、握手を交わす俺たちに、観客席から拍手が起こる。先程の十代と万丈目に負けず劣らずといった規模のものだ。

俺と三沢はそんな万雷の拍手の中心に立たされ、誇らしいような気恥ずかしいようなといった微妙な心地である。

そしてその拍手の中、体育館を一望できる大きな放送室から放送が入る。鮫島校長からのものだ。

『皆本遠也君。シンクロ召喚という新たなシステムを使いこなす技量、そしてこのデュエルによって名実ともにライイエローのトップとなったその実力。君もオベリスクブルーへの昇格が決定です。おめでとっつ』

わお、俺もか。

まあ、元々ライイエローの実技でトップと言われていて、こうして筆記トップの三沢に勝ったんだから、こういう処置もアリなのか？

まさか俺まで昇格になるとは思わなかったが……。不都合は特にないし、まあいいか。ブルーというのは若干の不安ではあるが、くれると言つなら貰つておく。

校長の放送を聞き、更に大きく拍手をしてくれる同級生諸君。なんて暖かい連中なんだ。ブルー生があんまり拍手していないのは可愛嬌だが。

こうして俺の月一試験は終わり、俺は十代たちの元へ戻つてその場を後にした。

そして、途中から加わつて来たジュンコとももえ、三沢も加えて互いに今回のデュエルの反省をしながら過ごす時間は、なかなか楽しかったと追記しておく。

## 第5話 試験2（後書き）

相手は三沢でした。

三沢って相手ごとにデッキ変えたりするから、難しいです。

漫画版みたいに妖怪デッキ一択なら書きやすいのに……。

さすがにシンクロ相手にウォーター・ドラゴンでわざわざ来ないだろう、と行ってこういう形にしました。

また、ライブリアンの召喚時のセリフはアンチノミーのものではありません。

だって、いつもは「集いし〜」で統一しているのに、いきなり「リミッター解放!」とか言い出したら、周りの人が不思議に思うと思うんですよ。

なので、勝手に変えさせてもらっています。

そしてトントンの拍子で寮が変わる主人公。

次話からはオベリスクブルーになります。

## 第6話 悩み（前書き）

続きまで書いていたものを仕上げました。  
おかげで比較的早く投稿出来た……。  
今度の更新は、遅れるかと思えます。



## 第6話 悩み

「デュエル！」

皆本遠也 LP：4000

丸藤翔 LP：4000

「僕の先攻、ドロー！僕は《トラックロイド》を守備表示で召喚！カードを2枚伏せてターンエンドっす！」

《トラックロイド》 ATK/1000 DEF/2000

銀色のコンテナを積んだ赤いトラック。そうとしか表現できない、乗り物そのままの姿に、アメリカンコミックのキャラクターのようなデフォルメされた目をつけたモンスターが召喚される。

それがビークロイドの特徴だ。どこかディフォーマーに通じるような洒落っ気のあるシリーズである。

「俺のターン、ドロー！」

よし、手札は良い。……というか、良すぎるんですけど。

「いくぞ、翔！ 俺は手札の《ボルト・ヘッジホッグ》を捨て《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更に自身の効果でボルト・ヘッジホッグを守備表示で蘇生する！ そして《チューニング・サポーター》を通常召喚！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

《チューニング・サポーター》 ATK/1000 DEF/3000

一気に3体のモンスターが並ぶが、シンクロデッキではよくあることだ。

「チューニング・サポーターのレベルを2として扱い、クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、《二トロ・ウォリアー》！」

《二トロ・ウォリアー》 ATK/2800 DEF/1800

どこからどう見ても悪魔族なのに戦士族である。

なぜかシンクロモンスターには種族について考えさせられるモンスターが多い気がするな……。

「げげっ！ そいつっすか!？」

こいつっす。翔は前にも何度かコイツに痛い目見てるからな。嫌がるのもわかる。

「更にチューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！ そして俺は《死者蘇生》を発動！ 墓地のクイック・シンクロンを蘇生する！」

再び場にクイック・シンクロンが現れる。そして、それを見た翔は冷や汗を流した。

「ま、まさか……」

「俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！ 集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・アーチャー》！」

《ジャンク・アーチャー》 ATK/2300 DEF/2000

この時点で翔は何だか放心気味だったが、気を持ち直して力強くこちらを睨みつけてきた。

ふむ。

「そして俺は手札から《大嵐》を発動！ フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する！ 俺に伏せカードはないから、翔の2枚の伏せカードを破壊だ！」

「ぎゃー！ 遠也くんの鬼いー！ 僕の《魔法の筒》と《リビングデッドの呼び声》がー！」

恐らく魔法の筒を伏せてあったから、気力を取り戻せたんだろうな。それを破壊された翔は、叫び声を上げてこちらを非難してきた。

「初手に来たんだから仕方ないだろ！ 俺はジャンク・アーチャーの効果発動！ 1ターンに1度、エンドフェイズまで相手フィールドのモンスター1体を除外する！ 対象は当然トラックロイド！ 《デイメンジョン・シュート》！」

ジャンク・アーチャーの放った矢がトラックロイドに突き刺さり、

トラックロイドはフィールドから消え去ってしまっ。

……さて。これでフィールドはガラ空きだな。

「このターンに魔法カードを使用したため、ニトロ・ウォリアーは効果によりダメージステップの間、攻撃力が1000ポイントアップする！ ニトロ・ウォリアーとジャンク・アーチャーで直接攻撃ダイレクトアタック！ 《ダイナマイト・ナツクル》！ 《スクラップ・アロー》！」

炎を纏った拳と一本の矢が翔に向かって放たれ、それをそのまま食らった翔のライフポイントが一気に0を刻む。

うむ。自分でやったことながら、これはひどい。

翔 LP：40000

デュエルが終わり、周囲で見っていた十代と隼人、三沢、明日香、ジュンコとももえという面々が寄ってくる。

そして、当の負けた翔はというと……。

「うう……ひどいや。あんなの何も出来ないよ。やっぱり僕はダメな奴っす……」

めちやくちやへこんでいた。

ディスクも外さずそのまま体育座りでいじけてしまった翔を、十代と隼人と三沢が必死に慰めている。「あれは仕方ないんだな」「俺だって負けちまうよ」「こういう時もあるさ」と言っているのが聞こえる。正直、すまんかった。

そしてこちらには明日香、ジュンコ、ももえが近付いてくる。

そんな中、明日香が開口一番、呆れた声で言い放った。

「……えぐいわね」

「返す言葉もございません」

全力を尽くすのが礼儀だと思って臨んだのだが……さすがにあそこまで手札がいいとは思わなかった。そのうえで全力を尽くした結果がこれだよ！

明日香だけでなく、ジュンコとももえも呆れ顔だ。この二人、最近俺たちのグループと会うことにも抵抗がなくなってきたらしく、明日香がいない時にも会えば話ぐらいはするようになった。俺の場合、同じブルーになったというのもあるのか十代たちより話す機会が多い。

ちなみに俺の制服は万丈目みたいなじゃなく、カイザーのよう  
に白が主体のほうの制服だ。青一色はどうも着る気になれなかった。  
どごその雨に弱い大佐のコスプレみたいで。

「でも、あんたって最近調子いいわね」

「そうですね。この間もブルーの生徒に無傷のうえ数ターンで勝っていましたし」

一体なぜ、という言葉が透けて見えるような顔で三人が俺を見る。

ジユンコとももえの言葉は事実で、こここのところの俺の成績は良くなっている。以前から授業のデュエルなどでは無敗だったが、その内容が良くなっていると言っべきか。

それを自覚している俺は、頭をかいて何気なく体育座りをしている翔を見た。

「……なんか、引きが良くなったんだよな。こここのところ」

それが俺の成績が良くなった全てだ。そう、俺のドロークとでもいっべきものが向上したらしいのがその原因なのだった。

これについては、既にマナに確認を取っている。

俺としてはこんな現象を起こせる存在を精霊しか知らなかったし、このドローク力向上の切っ掛けとなるものといえば、先日の月一試験でこれまで以上にデッキに信頼を置くようになったことしか思い当たらなかったからだ。

となれば、カードの精霊であるマナならば何かわかるかもしれないと思って、俺はこのことをマナに尋ねたのである。

そして、マナは言った。その月一試験が切っ掛けだよ、と。

何でもカードたちはいつも俺に応えようとしていたが、所詮ゲームと心のどこかで思っていた俺は、その意思を受け取れていなかった。だからこそ回りづらかったのだと。

……それでもしっかりシンクロ出来ていたのは、精霊であるマナがついていることで元々のドロー運が上がっていたのとデッキの構成が良かったからなんだとか。

そんな裏事情があったとは。というか、精霊がいるとドロー運上がるとか全く知らなかった。加護みたいなものなのだろうか。

この世界に来てから一度だけ、このデッキの切り札を出したことがあるが、ある意味それはデッキ頼りだったというわけだ。

しかしあの月一試験以降、俺もカードたちに心を開き信じるようになったことで、カードたちとの間に絆とも呼ぶべきものが繋がったのだとか。

その結果、上手く回るようになったらしい。

なんつーファンタジー。思わずそう思った俺だが、それがこの世界の現実なのだから仕方がなかった。

そういうわけで、俺は十代ほどではないにしても十分なドローク



を手に入れたのである。

そして、その結果が今の翔である。

正直今回は特に上手くいきすぎたが、普段はこれほどでもない。なんでそれが翔とのデュエルで当たってしまったのか。出来ればもっと負けられないデュエルで当たってほしかったものである。

と、そんなことを考えていると明日香がため息をついた。

「羨ましいわね。あなたといい十代といい。そのドロ運を少し分けてもらいたいぐらいだわ」

「おいおい。いくらなんでも十代と一緒にするなよ。流石にあそこまでじゃないって」

あんな遊戯さんなみに引きたいカードを引く奴と一緒にされては困る。ああいうのをチートドロっていうんだ。俺のはそこまでじゃない。

「ま、明日香がそこまで欲しがるともわかるけどな。黄金の卵パン全然引けないみたいだし」

「っな！ な、なんで、あなたがそんなことを知ってるのよ！？」

突然表情を変えて食ってかかってくる明日香。

「おお、顔が赤い赤い。そんなに恥ずかしいもんかね、そんなことが。」

「いやー、知らなかったよ。黄金の卵パンを引けない度に落ち込むんだって？ 可愛いトコあるじゃんか」

「か、かわっ！？ そ、それより誰がそんなことを！？」

「こいつ」

「ちょ！？」

俺は即座にジユンコを指さす。

実際、以前ちよつと世間話をした時にこのことを俺に話したのはジユンコである。俺としてはそんなエピソードもあつたような気がする、とどこか懐かしい気持ちでその話を聞いていたのだが。

「ジユンコ……！ あなたねえ！」

「じ、ごめんなさい、明日香さん！」

明日香にとってはそういう問題でもなかったようだ。

明日香はまだ僅かに赤みが頬に残るまま、表情を怒らせて怯えるジュンコを精神的に追い詰めていた。

そしてその様子を見てにやにや笑う原因たる俺。いや、だって赤くなつて怒る明日香は可愛いのはホント。普段が強気な態度を取っているだけにね。そのギャップが良いのです。

『……………』

いてっ！ 誰だ、背中をつねった奴は！

「やれやれですわ。それより遠也さん。あちらのほうは、ひと段落したようですわよ」

「ん？」

ももえの言葉に促されて見てみれば、体育座りをしていた翔が立ち上がり、十代たちと話していた。そして連れだってこちらに近づいてくる。

翔ももう普段の様子に戻っているらしく、その顔には笑みも見える。まあ、ワンキルとはいえ、それ自体はこれまでもごく僅かにやったことがある。それを翔も知っているから、回復も早かったのだらう。

俺は手を上げて呼びかけ、四人と合流する。翔とも話をして、結

局「まあ、こういうこともあるよね」という結論に落ち着いた。実際、そうとしか言えんし。

そして四人は俺の後ろでジュンコにプライベートについて説教している明日香を見て、「あいつら何やってんだ？」と疑問を投げかけてくる。

もちろん俺の答えはノーコメント。ここで事情を話したら、次は俺がジュンコの立場になる。いくらなんでも、自分が怒られるのは勘弁である。

そんなわけで、俺たちは学生らしくカード談義に花を咲かせることにする。いつもは明日香について行くももえも、今はこちらに加わっている。さすがに今の二人と一緒にいるのは退屈だし嫌だったのだろう。

笑顔でおしゃべりに興じる俺たち。そして、説教が終わったのか消沈しつつ俺を睨むジュンコと、澄ました顔を取り繕っている明日香。

そんな二人も加わり、俺たちのまったりとした時間は過ぎていく。

なんとも穏やかに過ごす、アカデミアの放課後。実に楽しい俺たちの学園生活だった。

\*

……それ。

先日ライイエローからオベリスクブルーに昇格した俺であるが、はつきり言わせてもらおう。

この寮、居心地悪すぎである。

ちょっと寮の中を歩けば、

「ふん、成り上がりめ」

「なんだってこんな奴が新カードのテスターを……」

「ちっ、目障りな」

「さんだ！」

ばかりなのだ。

それはもう空気が悪いのなんの。お前ら心狭すぎだろ、と突っ込んだのは一度や二度ではない。

そしてそれに辟易しつつ教室に行けば、俺は十代や明日香たちと世間話。それがまた気に食わないらしい。ブルーのくせにレッドとつるむとは何事か、ということである。どないせいと。

加えて俺が明日香と下の名前で呼び合うほど親しいのも拍車をかけている。忘れがちだが、明日香は男子生徒から抜群の人気を得ているのだ。要するに嫉妬である。

俺が「十代だって明日香って呼んでるじゃん」と言えば、それは何故かスルーされた。解せぬ。

仕方ないので「ひがみemg (^ ^)」と指をさして半笑いで言っちゃったところ、俺を見る目が更に厳しいものになった。どないせいと。

どこに行ってもそんな目で見られ、悪口を言われるので、俺よりも隣にいるマナの堪忍袋の緒がヤバイ。俺が悪く言われる度に、ぶっすーと機嫌悪そうにしているのだ。

俺自身は気疲れするだけだし、まあそのうち慣れるなりなんなりして何とかなるだろうと思っていたのだが、さすがにマナの精神衛生上悪いとなれば対策を考えざるを得ない。

そういうわけで、ひとまず俺はレッド寮の十代の部屋に来ていた。翔と隼人には悪いが少し出ていってもらって、今ここにいるのは俺と十代。そしてマナとハネクリボーだけである。

『もう、ひどいんだから、あの人たち！ 遠也のことを散々悪く言つて！ あの人たちに遠也の何がわかるって言うの、もー！』

「あー……うん、そうだな。……おい、遠也。なんとかしてくれよ」

「すまん」

『クリ〜』

マナの愚痴に付き合わされている十代を見ながら、俺はハネクリボーを胡坐をかいた上に乗せて抱きかかえていた。

ちなみにハネクリボーはマナの力でこの時だけ実体化している。魔法万歳だ。

……しかし、こいつ。めちゃくちゃ手触りいいな。もふもふしてるし、羽も綺麗だし。

そう思って撫でまわしていると、クリクリ言いながら身をよじっ

た。どうやらくすぐったいらしく笑い混じりである。なにこの可愛い生き物、欲しいんですけど。

十代はマナの相手をさせられ、少々お疲れ気味である。かれこれ15分は続いているからなあ。申し訳ないが、精霊を見ることが出来る知り合いがお前しかいなかったんだ。どうか諦めてほしい。

そう、俺が十代の部屋に来たのはマナのストレス発散のためだ。いろいろ溜まっているものがあるだろうとわかってはいたのだが、いかんせん相手が当事者の俺では愚痴も言いつらい。

そこで、精霊が見える人間に相手をしてもらおうと思ったのだ。すると、候補が十代しかいなかった。つまり、そういうことである。

すっかり表情に元気がなくなった十代だが、それでも嫌だと言わないあたり本当に良い奴である。

けどまあ、さすがにそろそろ出ますか。これ以上十代に甘えるのも悪いしな。

「おい、マナ。そろそろ行くぞー」

俺がそう声をかけると、十代はほっとした表情を見せる。そして、マナが今度は俺のほうに詰め寄ってきた。

『遠也も遠也だよ！ なんにも言い返さないんだから！』



ずいっと身を乗り出して強く言ってくる。いや、だって否定したところで簡単に変わるもんでもないだろ、ああいうのは。ていうか近いよ。

しかし、まさかこっちにも飛び火するとは。やれやれ。

「いや、まあ。俺はいいんだよ、別に」

『むー……なんで？』

納得していない表情のマナ。頬まで膨らませて、子供か。

まあ、先に挙げたのも理由の一つだが、理由はもう一つある。

「だって、お前が代わりに怒ってくれてるだろ」

そう、だから俺まで怒ったってどうしようもないだろ。二人揃って腹立てたって馬鹿らしいじゃん。

それに、隣に怒っている奴がいるとこっちは案外冷静になれる。だから、俺はそこまで腹が立たないのである。

「他の奴が何を言ったって、いいんだよ。お前が怒ってくれてるから、俺はそれで」

俺はそう言っただけで目の前のマナを見る。すると、なんだかマナは照れていた。何故に。

『そ、そっか……。うん、それなら、まあ』

マナはどもり気味に言うと、そのままふよふよと俺の隣の定位置に戻ってくる。

よくわからんが、戻ってきたならいいや。迷惑かけちゃったし、さっさと邪魔すると思いますかね。

「悪かったな、十代。でも助かった。またな」

「お、おう」

ハネクリボーを手放すと、再び精霊化して十代のほうへと飛んでいく。それを見送ってから、俺は横で急に嬉しそうになったマナを連れて部屋を出た。

……しかし、なんでこんな急に態度変わってるんだこいつは。女心ってというのは、わからんもんである。

そして、俺とマナが出ていった後。

「……なあ相棒」

『クリ?』

「あいつら、やっぱり仲いいなあ」

『クリ……』

しみじみとそんな感想を述べる十代と、そんな十代をどこか呆れたような目で見るとハネクリボー。

そんな光景があつたとかなかったとか。

十代の部屋から出た俺は、翔と隼人にもう部屋に戻ってくれたい、とお礼とともに伝え、ぶらぶらと外を歩いていた。

「うーん……どうしようかなあ」

『イエロー寮の部屋は使っちゃダメなの？ そのまま空いてるんだし』

マナの意見に、ふむと考えを及ばす。

確かに、俺がブルーに昇格したことで、イエロー寮には現在一室の空きがある。そこに戻ることも恐らくは可能だろう。

だが、それは結局問題を先送りしたに過ぎない。来年になって新入生が入ってくれば、寮に空きはなくなる。その時またこうして悩むことになる、というのは意味がない気がする。

「というわけで、却下」

『むー、そっかあ。いい案だと思ったのになあ』

そしてまた二人して唸る。

こんなことなら、気軽に昇格を受けるんじゃないかな。元々ブルーの生徒は避けてたわけだし。

基本的に、もらえるものはもらっておく、というのが俺のスタンダード。そうやって生きてきた貧乏性な俺だが……今回はその性質が祟ったわけだ。その場のノリで決めるもんじゃないな、こういうのは。

しかし、マジでどうしようかな。

どうにか現状を改善してみる、とマナに言ったはいいものの、何も具体案が浮かんでこない。二人して知恵を絞っているのに、なんてこった。

これが本土だったら自宅通学という最終手段もあるのだが、アカデミアは独立した島だ。さすがにそこまで離れていては、その手も使えない。

うーん、これは本当に難しいぞ。最悪、諦めてブルー寮で暮らしていくしかない。

でもなあ。マナの負担になると思つと、嫌なんだよなそれは。ホント、どうしたもんか……。

「あら、遠世じゃない。どうしたの？」

うーん、と唸りながら歩いていると、不意に前から声がかけられた。そちらに意識を向ければ、ちょうどこちらに向かって歩いてくる明日香の姿があった。

「あー、明日香か」

気付いた俺は、気だるげに片手を上げて挨拶をする。

すると、明日香は少し眉を寄せて近づいてきた。

「なんだか元気がないわね。何かあったの？」

「んー……あつたといえばあつたかなあ」

突然何かが起こったわけではなく、ずっと続いていることだからなあ。あつたと言っていいものか。

そんな曖昧な回答に、明日香はため息をついた。

「よくわからないけど……悩みがあるなら、私でよければ相談に乗るわよ？」

俺の煮え切らない態度に、何かあつたと思つたのだろう。意外と面倒見がいいと評判（アカデミア中等部女子の声より）な明日香が気を使ってそう提案してきてくれる。

申し出はありがたいが……好意に甘えていいものかな。ブルー寮になじめないっていうのは、結局のところこつちの我儘なわけだし。それで手を煩わせるのもなあ。

『遠也、遠也。明日香さんに話してみようよ』

内心で逡巡していると、マナがそう促してくる。そして、その後  
にこう続けた。

『明日香さんは私たちよりアカデミアには詳しいはずだよ。もしかしたら、何かいい案を出してくれるかも……』

そういえば、明日香は中等部からの繰り上がりなんだよな。オベ  
リスクブルー所属ってことは、俺のような昇格じゃない限りは中等  
部の成績優秀者で構成されている……はずだ。

実際にデュエルすると、成績優秀？ となってしまう奴も多いが  
……。その点、明日香はそこら辺も折り紙つきである。

っと、話が逸れた。確かにマナの言うとおりだ。アカデミアに  
来て日が浅い俺より、明日香のほうが色々詳しいのは間違いない。

となれば、相談するといつのも一つの手、か。ふむ……。

「……すまん、明日香。ちょっと話を聞いてもらってもいいか？」

おずおずと切り出す俺。それに対して、明日香は快く頷いてくれ

た。

近くのベンチに場所を移し、そこで理由を話すことしばし。

聞き終えた明日香の反応は、謝罪から始まった。ちょ、頭上げてよ。

「本当にごめんなさい。同じブルー生として心から謝るわ」

言っで、顔を伏せる明日香。よっぽど自分と同じ寮の人間がとつた態度が気に入らなかつたらしい。まあ、明日香の性格ならそうだろうが、気にしすぎだと思っただが……。

隣でマナも困ったように苦笑を浮かべている。こっぴつところ、俺は結構好きだけど、将来いろいろ苦労しそうな損な性格だとも思



う。

「いや、明日香は何も悪くないじゃん。それに、そんなつもりで話したわけじゃないし」

「でも……」

「それに、謝るなら本人がしないと意味ないだろ？」

「それは、そうだけど」

至極まっとうな返しをすれば、明日香は納得いかなさげではあったが、頭を上げてくれた。

明日香曰く、ブルー生はイエローからの昇格だけに限らず、外から新しい者が入るたびに同じ態度をとっているのだとか。女子はそこまででもないが、男子は本当にひどいとのこと。

うん、それは予想してた。だって結託してるんじゃないかってぐらい、こつちを貶す奴ばかりだったからな。元からそういう土壌がないと、ああはならないだろう。

と、そんなブルーの気質はどうでもいい。それよりも現状を改善するにはどうすればいいかが重要だ。

「というわけでさ、明日香。何か良い案はないかね」

「そうね……たぶん、難しいと思うわ。今までにも昇格して来た人はいたけど、あなたのようなことを言い出した人っていないかったし」

「え、そうなん？　じゃあ、過去の方はみんなあの空気に耐えたわけ？」

「……というより、そのうちに染まったってところね。一緒になって他寮を貶し始めたことで、仲間として受け入れられたみたいよ」

「うわぁ……」

何その救いのない話。

「ここが教育機関とは信じられないな。今度、海馬さんに連絡しておこう。いくらなんでもこれはひどいだろう。」

でもあの人、変なところで常識に縛られないからなあ。全部「己のロードは己で切り開け！」（キリッ）で片づけられそうなのがする。

……いかん、そう考えると知っていて放置の線が濃厚になってきたぞ。いいのかそれで、海馬さん。

まあ、そのことについて考えるとなんか変なことになりそうだから、置いておこう。今は自分の現状をどう改善するかだ。

「しかし、そうなると困ったな。ああいう空気は精神的にキツいっばいしなあ。俺ならそこまで気にしてないのになあ……」

「え？ あなたの話ではなかったの？」

「え？ あ、あー……ちょっと事情があつてな」

まあ、いいかと判断して軽くその事情を話す。

つまり、俺の部屋によく来る友人がいて、そいつがブルーでの俺の扱いに俺以上に憤慨している。このままではそいつの精神衛生上よろしくないなので、何とかしたい。

俺が今の状況をつらいと思っているわけではない、というのがさっきの説明とは違う点。ブルーでの立場しか明日香には説明しなかったからな。きっと、明日香は俺が参っていると思っただんだけだ。

「なるほど、そういうことだったのね。私は、てっきり遠也が気にしているのだと思っただわ」

「やっぱり勘違いしてたか。俺は別に気にしてないよ。耳障りではあるけど、そのうち悪口言うのも面倒になって、静かになるさ」

『私は、そうなるのが嫌なの！』

マナにしてみれば、なんでこっちが耐えなきゃいけないのか、ということなのだ。その言い分は確かに正当だ。だからこそ、俺もこうして出来るだけのことはしようとしている。

耳障りだと言ったようにいい気分でないのは確かなので、なくなるにこしたことはない。

「遠也らしいわね。……でも、意外ね。遠也がいるとはいえ、十代がブルー寮に行くなんて」

明日香が表情に少し驚きを混ぜながら言うが……明日香は何を言っているんだ？

「いや、俺の部屋に来るのは十代じゃないぞ？」

「え？ なら翔くん、前田くん、三沢くんかしら？」

「や、全員違うから。そもそも男じゃなくて女だから」

「……………ジュンコ？ ももえ？」

「親しい女子といえはその二人もそうだが、違うぞ」

俺が全て否定すると、明日香は目をきょとんとさせて、再び口を開く。

「……………あなた、私たち以外の女子にも友達がいたのね」

「……………悪かったな」

憮然として返すが、明日香の言うとおりである。

アカデミアの女子で友達と言えるのは、明日香、ジュンコ、ももえの三人だけだ。明日香の言っていることは、間違いではない。だからこそ、癪なのだ。

けっ、どうせ友達少ないですよー。いつもの面子としか話しませんよー。

やさぐれて拗ねると、マナが精霊化したまま頭を撫でて『よしよし』と慰めてくる。嬉しいような、情けないような……なんとも微妙な気持ちになる俺なのだ。

そして、拗ねた俺を見て明日香も言葉が過ぎたと自覚しているのだろう、慌てて言葉を重ねてくる。

「ご、ごめんなさい。つい、というかその、あまり私たち以外の女子と一緒にいるのを見たことがなかったから……」

「いやー、いいさ別に。実際、一緒に行動してるわけじゃないからな」

言い繕うように言い訳してくる明日香に、俺は態度を改めて笑顔で返す。

マナは常に傍にいるものの、見えるわけではない。周囲からして

みれば、俺は一人でいるようにしか見えないのだ。

だから、明日香がわからないのは仕方がない。そのことで責めるほど、俺も常識がないわけじゃなかった。

そういうわけで、このお話はここまでにして。真面目にどうするのかを話し合う。

しかし、やはり生徒の身に出来ることは多くなく、大した案は出てこなかった。本来ならクロノス先生に相談するべきなんだろうが、ブルーを……というより中学からのエリート組を贖いまくっているあの先生がまともに取り合ってくれるかは微妙なところだ。

とはいえ、確か一年生のいつだったかにクロノス先生の差別主義はなりをひそめていたような記憶があるので、その後になら相談しても無碍にはされないと思う。

となると、その時まで待つのが一番かね。

明日香に、とりあえずは様子を見る、と結論を伝える。

大して力になれなくてごめんなさい、と言う明日香に話を聞いてくれただけでも助かったよ、と返して俺たちは寮に戻ることにした。別れ際に、俺と親しいその子の名前を教えてほしいと言われたが、それはやんわり断っておく。

生徒として存在していないマナが探して見つかるわけがないし、もし同じ名前の人がいたらその人に迷惑がかかるからだ。俺が名前を明かさないと、明日香は少し怪訝な顔をしたが、突っ込んでくることはなかった。

そうして自室に入った俺たちは、広い部屋に備え付けられたこれまた大きなベッドに身を投げ出す。マナも同じように実体化して寝転んだ。こら、服を気にしなさい服を。若い女の子がはしたない。

「むー、振り出しに戻っちゃったね」

「あー、まあなあ」

二人してベッドの上でだらけながら、今日の成果を端的に表す。この部屋を出て、歩き回り、結局戻ってくる。まさに振り出しに戻るだ。

「十代のところが三人部屋じゃなかったら、転がり込む手もあったんだけどなあ」

「遠也が入ったら、許容量オーバーだもんね」

あそこは三人で既にギリギリだ。俺が入る余地はないだろう。

「イエローもなあ。また戻るのも、なんか恥ずかしいしなあ」

「ずっといられるわけじゃないしねー」

一年先に、絶対出ていかなければならないのなら、最初から入るべきじゃない。

「やっぱり、ここで過ごすしかないって」

「むむむ……はあ、仕方ないかあ」

溜め息をついてマナがごろりと寝がえりを打つ。

そして、何故か俺の腕をとりそのまま胸元に抱え込んだ。むによん、と柔らかい感触が腕全体に広がる。うん、素晴らしいおっぱいだ。

「じゃない！ 何してるんだ、お前は!？」

「えー、いいじゃない別にー」

言いつつ、更に身を寄せてくるマナ。

「こ、これは一体なにが起こっているんだ!？ 孔明の罠か？ それとも夢を見ているのか？ 俺の煩惱が見せる幻だと言うのか？ 何がどうなったらこうなるってんだ!？」

驚きのあまり身動きが取れない俺に、気を良くしたのかそのまま身体ごとひつついてくるマナ。男にはない心地よい感触と甘い匂いに、思わず頭がくらりとする。



十七になろうという童貞の男に、間違っても取っついでいい態度ではない。色々真つ盛りな年齢である俺には、刺激が強すぎる。

この島に来てから、いつもよりマナからのスキンシップが多いとは思っていたが、それでもここまでのものはなかった。それ以前のもでもドギマギしていた俺に、いきなりのこれはレベルが高すぎる。せめて手を繋ぐところから始めてもらわないと……！

いや、問題はそこじゃないぞ俺。気持ちはわかるが混乱するな。そうではなく、どうしてこうなったってことだ。

確かに俺はマナに対して大きな友情と感謝を感じているし、それとは異なる感情も持ち合わせてはいるが、しかしそんなことをおくびにも出してはいないはずだ。なのに何故こうなっているのか。まったく理解できない。

いかん、慣れない事態に冷や汗が出てきた。っていうか、汗かいてるのマナにバレてないかな？　ここで汗臭いと言われたら、俺もう立ち直れないんですけど。

「ありがとね、遠世」

と、そんなことを延々と考えていた俺の耳に、マナの声が届く。

「私のこと、気にしてくれてたんでしょ？　ありがとう」

なんだか神妙な声で言うマナ。きつと、俺がマナのためにも現状を改善したほうがいいと思って、今日行動したことを言っているのだろう。

だけど、これぐらいのこと今日が特別なわけじゃない。俺は結構マナには甘いと自分で思っているし、実際マナのことになれば前々から色々行動していたように思う。

マナに頼まれれば、よほどのことでなければ請け負うし、そうでもなくても俺から気を使うこともある。要するに、俺に対するマナの対応と同じだ。言ってしまうえば、お互い様ってやつである。それぐらい、マナもわかっていると思うんだが。

だから、俺はいつものように返す。気にするな、と。好きでやっているんだから、と。

「き、気にするなって。それより、身体をくつつけられると、ちょっと……」

最初にどもったうえ、最後はなんだか情けない感じになってしまったが、言いたいことは言えたと思う。

これで離れてくれないかな。この感触は確かにもつたいないが、それよりも俺の精神がそろそろヤバイ。童貞の沸点の低さを舐めないでもらいたいものだ。

そんな俺の返答に、マナはくすりと笑った。そして、そのまま抱

えていた腕に顔を寄せる。い、息がかかる！　なんで離れずに更に近づくんですかちょっと！

そんな俺の内心を知ってか知らずか、マナは寄せていた顔を僅かに上げて俺を見上げる。

その頬は上気して赤みを帯びており、現在の体勢と相まって俺の理性をがりがり削って余りある破壊力を秘めていた。

やっぱり、マナって可愛いよな。ふと、そんな感想が頭をよぎった。

そして、マナはどこかうるんだ瞳で俺を見つめ、ゆっくりと唇を動かして言葉を紡いだ。

「　遠也。あの、私ね……」

『すまない、丸藤亮という。部屋にいるか？』

ノックの音と共に聞こえてきた声に対する俺たちの反応は、筆舌に尽くしがたいものがあった。

互いに心臓が限界まで脈打ち、思わず上げかけた声を抑え、その拍子にマナと俺は離れ、勢い良くその場を退こうとした俺は、ベッドから飛び落ちて背中を床に強打。轟音を響かせてのたうちまわる羽目になった。

対してマナは小さく高い声を上げ、そして照れと焦りからか顔を

真っ赤にさせた。思わず離してしまった腕も気にせず、俺とは反対方向に飛びのいていた。ベッドからは落ちていないようだ、ぼーっと胡乱な目をし、そうかと思うと扉のほうを睨みつけた。

珍しくかなり強い目つきで、相当怒っているのだとわかる。俺は痛む背中を抑えながら立ち上がると、ギロリという擬音がつきそうなほど扉を睨むマナに話しかけた。

「マナ！ 精霊化、精霊化！ このままじゃヤバイって！」

「う、ぐ、むうう……うん」

なんだか物凄く不満そうにマナが精霊化する。

後が怖そうな気がビンビンするが、今は気にしないことにしておく。そして、俺は扉に近づき鍵を外すとそのまま開けた。

そこに立っていたのは、カイザーの通り名で知られるデュエルアカデミア最強のデュエリスト。俺の友人でもある丸藤翔の兄、カイザー・丸藤亮がそこにいた。

「大丈夫か？ 中から凄い音がしたが……」

「あー、大丈夫です。ちょっとベッドから落ちただけなんで」

俺がそう返すと、カイザーは「そうか、気をつけたほうがいい」

とのたまった。

……うん、お前が言うな。原因はあんただぞ、カイザー。

そしてマナよ。見えないからって、手に持った杖をカイザーに向けるんじゃない。何がそんなに気に入らないんだ。あれか、話を遮られたのがそんなに嫌だったのか。

確かに、その……なんだ。ああいう話を遮られて腹が立つのはわかるが……。俺としては、ちょっとホツとしたところもあるので何とも言えない。

「それで、いま大丈夫か？ 急で申し訳ないんだが、時間があるなら、デュエルをしてほしい」

「俺と、ですか？」

「ああ」

頷くカイザーに、驚く俺。

なんと、カイザーから直接の指名とは。噂では、カイザーとのデュエルは予約が必要で、それもかなり先まで埋まっていると聞いたことがある。

そのカイザーが自らこうしてやって来るなんて。カイザーもよほどシンクロのことが気になっていると見える。

幸い今はまだ夕方にもならない時間。余裕はある。けど、マナの様子がおかしいし、そちらが気になる。そうになると、ここは断ったほうがいいかもしれない。カイザーとのデュエルは、また機会があるだろうし。

『遠也、受けて』

「へ？」

「どづした？」

「あ、いや何でもないです」

断ろうと思ったところで、急にマナが話しかけてきたので驚いた。ちらりと横を見ると、マナがカイザーを睨みつけて頬を膨らませていた。うわぁ。

『遠也、この人やっつけちゃって！』

そう言っつて、杖をカイザーに突きつけるマナ。

これは……相当怒ってるな。俺でもそんなに見たことがないぐらいに怒ってる。よっぽど今のことが気に食わなかったようだ。

けど、当のマナがこう言うんだ。俺に断る理由はなくなった。というより、ここで断ったらマナに何をされるかわからん。むしろ受

けるしかない。

「わかりました。それじゃあ、行きましよう。出来るだけブルー生が行かないところを希望します」

「なるほど……わかった。デュエルを受けてくれて感謝する」

こうしてカイザーとのデュエルが決まり、カイザーは俺を先導しつつ歩いて行く。

さて、この学校最強の実力者と名高いカイザー。サイバー流、つまりサイバー・ドラゴンを中心に使うデッキだったはず。

その実力はどれほどのものなのか。後ろにいるマナが怖いのはあるが、それでも楽しみみである。

俺はさながら十代のようにこの後のデュエルに思いを馳せながら、カイザーの後を追うのだった。





## 第6話 悩み（後書き）

明日香はギャップ萌え。異論は認める）、．．．（キリッ  
そしてマナは可愛い。異論は認めない！

今回はブルー寮に変わった遠也の悩みの回。

そうしたら、カイザーとデュエルすることになった。

な、何を言ってる）ry

というわけで、次回はカイザーとのデュエルの予定です。

## 第7話 帝王（前書き）

カイザーとのデュエルです。

難産でした……。

思い通りの結末まで持っていくのは難しいですね。

あと、最後にちょっとご意見を伺いたい旨書いてあります。もしよければ、ご確認ください。

## 第7話 帝王

カイザー亮とデュエルをすることになり、人目の少ない場所に移動した俺とカイザー。

だというのに……。

「……なんているの？」

その言葉に対して、即座に答えが返される。

「私は偶然あなたたちを見かけたからよ。十代にはメールしたけど」

「へへ、明日香から聞いたぜ！ カイザーってのはこの学園最強のデュエリストなんだろ？ そのカイザーと遠也のデュエルを、見逃すわけにはいかないぜ！ 教えてくれた明日香には感謝だな！」

「僕は、その時その場にいたから、一緒に」

「俺もなんだな」

「十代たちに途中で会って、誘われたから」

「同じくですわ」

明日香、十代、翔、隼人、ジユンコ、ももえ。それぞれがこの場にいる理由を話す。それによれば、大半がほぼ偶発的に俺たちのデユエルを知り、この場に来たということになる。

なるほどね。

「つまり、明日香が悪いのか」

「なんでそうなるのよ!？」

「お前が十代にメールしたからじゃん。まあ、ギャラリーがいつもの面子だけだから、いいけどさ」

俺が人目を避けたかった理由は、ブルーの人間に見られてまた何か言われるのを避けるためである。

そう考えれば、今いるメンバーは特に問題ない。わざわざ吹聴して回るような人間はいないからな。よくつるむだけあって、そういう信用は抜群である。

「……悪かったわ。あなたの事情は知っているけど、私と十代ぐらいならいいかと思ったのよ。ちょっと、予定より多くなってしまったけど……」

「いって、このメンツなら。それより、三沢は？」

「ん？ 会わなかったから誘ってないぜ。よくわかんないけど、人は少ないほうがいいんだろ？」

「うん、まあ……そうだな」

会っていたらこの場にもいたのに、三沢だけハブられる形になってしまったのか。なんか申し訳ないが、ここは運がなかったと思って諦めてもらおう。

……さて。気になっていたこの場にコイツらがいる理由もわかったことだし。これで気兼ねはなくなった。

俺はギャラリーに向けていた視線を、対戦相手となるカイザーへと移した。

「……もういいのか？」

律儀に待っていてくれたカイザー。いい人だ。

「はい。待たせてすみません」

「いや、いい。元々頼んでいるのはこちらだからな。こうしてデューエルできるだけで、ありがたい」

そう言って、カイザーはふっとニヒルに笑う。性格も良く、クルとは。このイケメン、かなり高性能である。

しかし、カイザーの言葉はちと妙だ。俺はそんなに中々デュエルできないほどレアなキャラではない。頼まれれば、受けていたはずだ。入学してからこっち、だいぶ時間があつたのだから、その機会はあつたはず。

そのことについて問うと、カイザーは苦笑した。

「俺を慕ってくれる生徒がな、なかなか時間を作らせてくれなかつたんだ。無視するわけにもいかないからな」

つまり、カイザーの取り巻き連中がひつつきまわり、カイザーの自由時間を侵害したため、俺に会いに行く時間を作れなかつた、と。

なるほど、学園最強というのも大変だな。カイザーも苦勞しているようである。

「なるほど。じゃ、その分まで今回はたっぷりデュエルをしましよー！」

「ああ、そうしてもらえると助かる。新たな戦術、シンクロ召喚の力、楽しみにしている」

「では」

「ああ」

互いにディスクを構え、視線を絡ませる。

「デュエル！」

皆本遠也 LP：4000

丸藤亮 LP：4000

「先攻は俺のようだな。ドロー！」

カイザーの先攻でデュエルが始まる。

ドローフェイズ、カイザーは引いたカードを確認すると、それをそのままディスクに置いた。

「俺は手札から《融合》を発動！ 手札のサイバー・ドラゴン2体を融合！ 現れる《サイバー・ツイン・ドラゴン》！」

《サイバー・ドラゴン》 ATK/2100 DEF/1600

《サイバー・ツイン・ドラゴン》     ATK / 2800     DEF / 2100

……ふっ。十代と何度もデュエルしてきた俺は、もうこの程度では驚かないさ。初期手札に融合素材と融合が揃っているだって？  
あるある。よくあることさ。

半分諦めの境地に至っている俺と違い、ギャラリーは賑やかである。

「そんな、いきなり融合!？」「本気ですわね」「それも亮のエース、サイバー・ツイン・ドラゴン……!」「お兄さん……やつぱり凄い!」「さすがカイザー!俺もデュエルしてえ!」「遠也、頑張るんだな!」

誰が何を言ったのか、すぐにわかるところはいいことだ。それにしても、応援してくれているのが隼人だけとか。他の皆さんはカイザーに気を取られていらっしやる。

けど、気持ちわかる。よく先攻ターンでこんな重いモンスター出せると思うもんな、ホント。十代といい、正規融合を初手から行うのが普通だからなあ。一体どうなってるんだか、まったく。

『むむ……凄い。でも、遠也だって負けてないもん。頑張ってる、遠也!』

「お、おう」



俺の横で、いつもより気合の入った応援をしてくれているマナ。っていうか、さっきから妙に距離感近くないですか、キミ。今も寄り添うぐらいの距離なんですけど。

それがちょっとばかり気になるが、別段嫌なわけでもない。というわけで、気にしないことにして、カイザーの一挙手一投足に意識を向ける。

「俺は更にカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

カイザーがエンド宣言をし、こちらに視線を寄こす。その目が、お前の力を見せてみる、と言っている気がした。

ここは、それに応えるのが男というもの。幸い、手札にはその材料が揃っている。これなら、いけるだろう。

「俺のターン、ドロー！」

カードを1枚引き、俺はカイザーの視線に笑みを浮かべて返す。それに、カイザーもまた小さく笑みを浮かべた。

「いくぞ！ 俺は手札からモンスターを墓地に送り、チューナーモンスター《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ そして、《チュ

「ニング・サポーター」を召喚！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《チューニング・サポーター》 ATK/100 DEF/300

2体のモンスターが並び、カイザーはそのステータスに僅かに眉を寄せた。

「レベルの割に攻撃力が低い……それが噂のチューナーモンスターか」

その言葉に、俺はにやりと笑った。

「ステータスが低いなら、力を合わせればいい。俺は、チューニング・サポーターをレベル2として扱い、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

シンクロ召喚おなじみのエフェクト。5つの輝く輪を、2つの星が潜り抜ける。レベルの合計は7だ。

「集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

現れるのは緑の体躯に、威つい顔をした鬼のようなモンスター。  
ことバトルという面では、俺の持つモンスターの中でも屈指の力を  
持つモンスターである。

《ニトロ・ウォリアー》      ATK / 2800      DEF / 1800

「それがシンクロ召喚か。ステータスが低くとも、強力なモンスター  
へと姿を変える。なるほど、これまでにない画期的な手法だ」

感心したように呟くカイザーだが、こいつの効果を知ってたらそ  
んな顔は出来ないだろうな。

「チューニング・サポーターがシンクロ素材になったため、効果に  
よりカードを1枚ドロウ。更に俺は《おろかな埋葬》を発動。デッ  
キから《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送る」

この俺の行動に、後ろで十代と翔、隼人の三人が「おっ」「あっ」  
「だな」と声を上げる。俺のデュエルをよく見ている三人だからな。  
当然こいつの効果も把握している。

それを受けて、こいつの効果を思い出したのか、明日香たちもあ  
っ、と声を上げた。

カイザーはそんな外野の反応に首をかしげているが、すぐにその理由を知ることになる。

「二トロ・ウォリアーでサイバー・ツイン・ドラゴンに攻撃！」

「なに？ 攻撃力は同じ……相打ち狙いか？」

カイザーがそう予想して言うが、残念ながらそうではない。

「二トロ・ウォリアーの効果発動！ 魔法カードを使ったターン、1度だけこのカードの攻撃力はダメージ計算時のみ1000ポイントアップする！」

「なに！？」

《二トロ・ウォリアー》 ATK/2800 3800

二トロ・ウォリアーの攻撃力がサイバー・ツイン・ドラゴンを上回り、戦闘破壊可能となる。二トロ・ウォリアーの身体にエネルギーがみなぎり、それがそのまま力となる。

「いけ、二トロ・ウォリアー！ 《ダイナマイト・ナックル》！」

ニトロ・ウォリアーの拳が勢いよくサイバー・ツイン・ドラゴンの銀色に輝く機械の身体に叩きつけられ、ほどなく大爆発を起こして爆散する。

そしてその余波がカイザーを襲い、そのライフポイントを削っていった。

亮 LP:4000 3000

「くっ……やるな。いきなりサイバー・ツイン・ドラゴンがやられるとは思わなかった」

「ふっふっふ。これが、シンクロモンスターの力ですよ」

そして、ニトロ・ウォリアーの攻撃力は元の2800に戻るつと。

さて、自信満々にカイザーに言った俺だが、実はかなり不安だった。

カイザーが伏せたあのカードがもし《リミッター解除》だった場合、やられていたのはこっちだからだ。

エンドフェイズに破壊されるとはいえ、次のターンはカイザーだ。モンスターを召喚して速攻されて、終了となる可能性もあったのだ。

だから、ある意味賭けだったと言える。まあ、違ったから良かったが。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

俺がエンド宣言をすると、後ろで十代たちが声を上げ始めた。元気だな、みんな。

「すげえ! 遠也がカイザーから先制したぜ!」

と、十代は素直に喜んでくれているが、その他の面子は驚きのほうが大きいらしい。

「まさかカイザーのライフを先に削るなんて」とジュンコとかももえ辺りが特に驚いている。

そして、翔は今朝のデュエルを思い出したのか、「ワンキル怖いっす」と虚ろな目で言っていて、それを隼人が慰めていた。

そんな中、明日香だけは厳しい顔をしている。

「いいえ、亮はカイザーとまで呼ばれる実力者よ。このままとはいかなければだわ」

さすがは明日香。俺もそう思う。

学園最強のデュエリストが、この程度で揺らぐはずもない。それに、カイザーと十代の引きの強さはチートレベルだったと記憶している。

なら、油断できるはずもない。次のターンで、恐らく何かをしてくるはず……。

「俺のターン、ドロー！」

カイザーがカードを引き、そして手札に加える。

一体何をしてくるのか。俺は固唾をのんでその動向を見つめた。

「俺は《強欲な壺》を発動し、デッキからカードを2枚ドローする。そして、相手フィールドにモンスターがいて、自分のフィールドにモンスターがいない時、このカードは手札から特殊召喚できる。《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！」

《サイバー・ドラゴン》     ATK/2100     DEF/1600

「更に伏せ<sup>リバース</sup>カードオープン！ 《リビングデッドの呼び声》！ 墓地の《サイバー・ドラゴン》を蘇生する！ そして手札から《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚！ このカードはフィールドに存在する場合、サイバー・ドラゴンとしても扱う！」

《プロト・サイバー・ドラゴン》 ATK/1100 DEF/600

「更に《融合》を発動！ フィールドのサイバー・ドラゴン2体とサイバー・ドラゴンとして扱うプロト・サイバードラゴンで融合召喚！ 来い、《サイバー・エンド・ドラゴン》！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK/4000 DEF/2800

サイバー・ドラゴンのように機械で作られた銀色の巨体。その頭は3つあり、鋭い眼光はこちらを威圧してやまない。両翼と胸に青く輝く宝玉が、銀色の中で美しく輝いている。

カイザー丸藤亮の切り札、サイバー・エンド・ドラゴンのおでましだった。

……ええー……。

「あ、あの状況から1ターンで……」

「す、すげえ……」

ギャラリーもあまりといえはあまりな展開に、思わず声を失って



いる。

気持ちはわかる。俺も今まさにそんな気持ちだから。

先攻ターンにサイバー・ツイン、2ターン目にサイバー・エンド。しかも、どちらも正規召喚。どうやったならそんな神業が出来るというんだろ。いや、今まさに見せられましたけども。

『う、うわぁ………』

あれだけ勢いこんでいたマナも、この状況にはさすがに勢いが失せていた。無理もない。俺だって、なあにこれえ、って思ってる。

「バトル！ サイバー・エンド・ドラゴンでニトロ・ウォリアーに攻撃！ 《エターナル・エヴォリューション・バースト》！」

その指示を受け、サイバー・エンド・ドラゴンのそれぞれの口に光が収束していく。

そして、三つ首から同時に放たれた圧倒的なまでのエネルギーの奔流は一つに重なり、輝く光の渦となってニトロ・ウォリアーを一瞬で飲み込んだ。

もちろんニトロ・ウォリアーに対抗できるはずもなく。ニトロ・ウォリアーは哀れ一撃で粉碎された。すまん、ニトロ・ウォリアー。

遠也 LP：4000 2800

「俺はこれでターンエンドだ」

カイザーがエンド宣言をし、ターンが俺に移る。

しかし……あれだな。カイザーのフィールドを見て、俺は思う。

サイバー・エンド・ドラゴン。GX版青眼の究極竜とも言われただけのことはある。その威容は見る者を圧倒し、戦意を失わせるには十分な迫力を持っていた。

正直、攻撃力4000のモンスターが出てきたところで、ある意味でそれよりひどい状況が普通だった経験を持つ俺は、それだけでは特に感想はない。まあ、よく正規召喚でいきなりこんな出せるなとは思つが。

だが、攻撃力3000が最高ライン、ビートダウンが大勢を占めるこの世界の環境の人間には、きっと俺以上にコイツは恐ろしく感じるに違いない。

なにしろ攻撃力だけを見れば神と同格だ。通常の手段で倒すのが難しいのは間違いないのだから。

が、倒す手段がないわけではない。しかし、今の手札ではどうしようもない。全ては、これからのドローク次第ってことか……。

「俺のターン、ドロー！」

最善ではないが……これなら凌げる。

ここはどっにか食らいついて行くしかないな。

「俺は《ゼロ・ガードナー》を守備表示で召喚し、カードを1枚伏せてターンエンド」

《ゼロ・ガードナー》 ATK/0 DEF/0

俺がターンエンド宣言をすると、後ろで翔が大声を上げた。

「ダメだ、遠也くん！ それじゃあ、負けちゃうっす！」

その声に、隣にいた十代が反応する。怪訝な顔で、翔に問いかけた。

「なんでだよ？ 壁になるモンスターが出せたんだ。悪いことじゃないはずだぜ」

「うっん、アニキ。サイバー・エンド・ドラゴンには、それじゃダ

メなんだ」

「十代、サイバー・エンド・ドラゴンには……貫通効果があるのよ」

翔に続き、明日香がそう説明する。

すると、状況を理解した十代が驚きと共に俺を見る。

「遠也が出したゼロ・ガードナーの守備力は0……ってことは、ダイレクトアタックと同じってことか!？」

現在の状況を理解した面々が、俺たちのフィールドに目を向ける。

あちらには攻撃力4000で貫通持ちのモンスター。そして俺の場には守備力0のモンスター。単純な計算だ。みんなには俺が負ける未来が見えているに違いなかった。

「俺のターン、ドロー」

カイザーがドローし、そのカードを手札に加えた後。カイザーはゆっくりとその視線を俺に向けた。

「シンクロ召喚、素晴らしいものだった。これでデュエルはまた一つ変わるだろう。そして、このデュエルを受けてくれた君に敬意を

表し、全力を尽くそう」

そして、カイザーは高らかに宣言する。

「バトル！ サイバー・エンド・ドラゴンでゼロ・ガードナーに攻撃！ 《エターナル・エヴォリューション・バースト》！」

再びサイバー・エンド・ドラゴンから放たれる巨大な光の波動。それがゼロ・ガードナーに届くか、という瞬間。みんなの俺の負けを確信したかのような諦めの声が聞こえた、その瞬間。

俺はその光の奔流に向かって、真っ向から叫んだ。

「ゼロ・ガードナーの効果発動！」

「この状況で、何を……」

カイザーの驚きの声に被せ、俺はさらに言葉を続ける。

「このカードを生贄に捧げ発動！ このターン、自分のモンスターは戦闘で破壊されず、相手モンスターとの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0となる！」

効果の発動を宣言すると、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃はゼロ・ガードナーが提げていた巨大な0の形をしたオブジェに防がれて、こちらには届かない。

もちろん、俺のライフポイントには何の変動もない。

「誘発即時効果により、自身が攻撃対象になって生贄にした場合でも戦闘ダメージは0になる」

これが生きた和睦の使者と呼ばれる所以である。召喚権を使用するというデメリットはあるものの、その効果は和睦の使者と完全な相互互換。効果そのものは非常に優秀なモンスターなのだ。

そして俺が生き残ったことを知ると、十代たちのほうからホッと安堵のため息が漏れていた。やはり、これで終わりだと思っていたらしい。

「お、おどかすなよ遠也！ そんなモンスターがいたなんて、聞いてないぜ！」

「悪い悪い。こいつは、昨日調整した時に試しに入れた奴なんだ。だから、お前が知らないのも当然だぞ」

基本、俺が持っているカードは遊星が使ったカードが多く、OC G化されているものは殆ど持っている。

ファンデツキ作るために、集め回ったからなあ。こうして普段入れないカードを突っ込んで、このカードを使った時を思い出してデュエルするのが小さな楽しみだったりもするのだ。

心臓に悪い、と十代と同じように文句を言ってくる皆に軽く謝り、俺は再びカイザーと向かい合う。

そして、にっと笑った。

「カイザー。このデュエルは、まだ終わらないぜ」

凌いでみせた俺に、カイザーは僅かに瞠目していたが、すぐにその表情が楽しげなものに変わる。

さっきまでのどこか超然とした態度ではない。自信を感じさせる点は変わらないが、雰囲気異なっていた。

例えるなら、十代を相手にしているような感覚だろうか。……そう、デュエルを心から楽しんでる、そう感じさせる雰囲気だった。

「……やるな、皆本遠也。このデュエル、やはり申し出てよかった」「そう思ってくれたなら、光栄だよ」

肩をすくめてそう言えば、カイザーは再び笑った。

「ふっ……俺は手札から魔法カード《タイムカプセル》を発動する。デッキからカードを1枚除外し、2ターン後のスタンバイフェイズにタイムカプセルを破壊。そのカードを手札に加える。ターンエンドだ」

「おっと、そのエンドフェイズに伏せカードをオープンリバース。《サイクロン》を発動させてもらう。タイムカプセルを破壊する！」

「ならば俺はそれにチェーンして伏せカードオープンリバース！ カウンター罠、《マジック・ドレイン》！ サイクロンを破壊する！ この時、相手は手札から魔法カード1枚を捨てることでこの効果は無効に出来るが……」

「いや、その破壊は通す」

ちえ、あの伏せカードマジック・ドレインかよ。そんなカード入ってたんだなカイザー。

それにあの手札、モンスターじゃなかったのか。まあ、全力を出すと言って召喚権を使わなかった時点で、そうだとは思っていたが。

さて、あのタイムカプセルで除外したカードは何なのか。順当にいけば《パワー・ボンド》かアニメオリジナルカードの《異次元からの宝札》か。前者は既に場にサイバー・エンドがいるから優先度は下がっている。後者は、手札が少ないことから可能性は高い。

他にも死者蘇生という可能性もあるしなあ……ま、考えてもわからないか。



「俺のターン、ドロー！」

……来たか。こいつを使えば、このデッキの中で唯一カイザーに  
対して圧倒的なアドバンテージを得られるモンスターが呼び出せる。

シンクロモンスターの中でも単純だが強力な効果を持つカード。  
そのくせ素材指定なしというモンスター。こいつが制限に全く引つ  
掛からない時点で、あっちの世界の環境の凄さがわかる気がする。

けど、こいつを使うのは気が引ける。なぜなら、どう言ったとこ  
ろでこいつはメタカードみたいなもんなのだ。十代とのデュエルで  
だって使ったことはない。だって、戦闘が一気に単調になってしま  
う。

それはカイザーにも言える。特にカイザーのデッキは属性縛りが  
結構あったはず。サイバー流の使い手だし。それに、このカードは  
この時代に本来は存在していないカードだ。だからこそ、躊躇われ  
るが……。

「どうした、皆本。長考か？」

長い間黙っていたからだろう、カイザーがそう問いかけてくる。

だが、こんなこと言うわけにはいくまい。まさか、このカードは  
未来のカードだからちよっと効果がアレなんだよ、なんて。

「いや、その……」

だから、思わず口ごもる。カイザーとのデュエルは迫力があつて、これまでとは違った楽しさがある。だからこそ、もつと続けたい。しかし、勝ちたいのも事実だ。そうになると、こいつを使うのが一番いい。

無論、いきなり勝敗に結びつくほどのカードではないが、それでも優位には立てるだろう。どうしたものか……。

うんうん唸っていると、カイザーが再び口を開いた。

「なにを悩んでいるのかは俺には分からない。だが、どうやら打つ手がないというわけではないようだな」

「うっ」

凶星をさされ、思わず呻く。

だが、カイザーはそんな俺を気にせず更に続ける。

「ならば、俺たちデュエリストに出来ることは1つしかない。ただ全力を尽くすことだ。持てる力を余すことなく相手にぶつけ、勝敗を競う。相手の力を認めるからこそ、全力を尽くして戦う。それが、

リスペクトするということだ」

「カイザー……」

俺の後ろで全員がカイザーの言葉に感銘を受けている。

特に翔は、深くその言葉を心に刻んだようだ。自信がイマイチ足りないあいつには、きつと殊更特別に聞こえたのだろう。

そして、それは俺も同じだった。

この時代にまだない筈だったシンクロモンスター。そして、未来のカード群。それらを持つているからといって、俺は我知らず驕っていたのかもしれない。

このモンスターを出してもいいものか。必死なら、そんなことを考えない。ただ出来る限りの力を以ってぶつかっていったはずなのだ。

カイザーの言うとおりだ。……俺はもうデュエリストとしてこの世界で生きると決めた。なら、どんな時でも全力でぶつかっていかなければ、デュエリストの名が廃る。この世界で、そう生きると決めたなら、そのために全力を注ぐべきなのだ。

「マナ、カイザーをボコボコにするぜ」

『う、うん。いいの?』

俺がさっきまで妙に悩んでいたのを横で見っていたからだろう、マナはどこか躊躇いがちに俺の顔を見る。

それに、俺は頷いた。

「なんか、ふつきれた。俺はデュエリストだ。そう生きていくと決めた以上、全力全開でやってやるさ」

結局、一年経ってもまだまだ俺は未練だらけだったってわけだ。それも悪くないが、その気持ちをデュエルに持ち込むべきではなかった。

デュエルでは常に全力で。脇目も振らずに駆け抜けていけば、それでいい。単純なことだ。気づかせてくれたカイザーには感謝だな。

そんな意志を持った俺の表情を見て、マナは俺の心は読めないにしろ何かを察したのか嬉しそうに頷いた。

『うんっ。じゃあ、やっちゃって、遠也！』

「あいよ。……いくぜ、カイザー！」

「ふっ、来い！」

笑みを浮かべて、カイザーは受け止めようと泰然と立つ。

俺はそれに対して手札から1枚のカードを引き抜き、ディスクにセツトした。

「俺はチューナーモンスター《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

へこんだオレンジの鉄帽子、丸い眼鏡に、小柄な機械仕掛けの身体。

おなじみのチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンが俺のフィールドに現れる。

「更に、俺のフィールドにチューナーが存在する時、ボルト・ヘッジホッグは墓地から特殊召喚できる。来い、ボルト・ヘッジホッグ！」

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

背中からいくつものボルトを生やした、ボルト・ヘッジホッグが墓地から蘇り、フィールドに立つ。

これで、レベルの合計は5。それを見たギャラリーが、予想を語

る。そういう話が出るのは、俺が何度もシンクロ召喚をしているところを見た人間ばかりだからだろう。

「レベル5ってことは、《ジャンク・ウォリアー》か？」

「《TG ハイパー・ライブラリアン》という可能性もありますわよ？」

「けど、どちらにせよサイバー・エンド・ドラゴンは倒せないんだな」

十代、ももえの言葉に隼人が突っ込み、二人は揃って確かに、と呻いた。そんな後方の様子に気持ちを少し和ませながら、俺はカイザーに向けて告げる。

「遠慮はしないぜ、カイザー！俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

2体のモンスターが飛び立ち、それぞれ光の輪と星にその身を変え、シンクロ召喚が行われる。

「集いし狂気が、正義の名の下動き出す。光差す道となれ！」

一際強く光が溢れ、徐々にその中からモンスターの姿が現れる。

「シンクロ召喚！ 殲滅せよ、アーリー・オブ・ジャスティス《A・O・J カタストル》！」

現れたのは、その全てを科学技術で製造された四足のロボット。白銀の装甲で覆われた全身、身体を支える足の先全てで金色に輝く鋭い爪。頭部には同じく金色の装甲が、眼球代わりとなる青く丸いレンズを囲っている。

装甲に覆われ、腹部にかけて黒と赤で彩られたその姿は、どこか不気味さを感じさせる。

物言わぬ機動兵器。それがこのカタストルという存在であった。

《A・O・J カタストル》 ATK / 2200 DEF / 1200

「新しいレベル5のシンクロモンスターですって!？」

「すげえ。こんなモンスター見たことないぜ！」

明日香と十代が声を上げ、後に続いて他の面々もこの初披露のモンスターに、驚きをあらわにする。

俺が今融合デッキに入れているレベル5のシンクロモンスターは、こいつを含めての3体だ。これでレベル5のシンクロモンスターは全て召喚されたことになる。

「新たなシンクロ召喚か。だが、そのモンスターではサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力には到底届かないぞ」

「新たなシンクロモンスターに興奮していたギャラリーは、カイザーの至極まっとうな言葉に「あ」と動きを止める。

「そういえばそうなんだな！ 新しいモンスターに興奮して忘れてたけど、それじゃ負けちゃうんだな！」

隼人が叫び、周囲も俺にどうするのかと視線で問いかけてくる。

だが、その答えは決まっている。

「それはどうかな」

「どづいうことだ？」

「答えはこうさ。バトルだ！ カタストルでサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！」

俺の攻撃宣言を受け、自爆するつもりか、とカイザーは困惑と驚愕に見開く。



それに対してにやりと笑って、俺は口を開いた。

「この瞬間、A・O・J カタストルの効果発動！ このモンスターが閻属性以外のモンスターと戦闘を行う時、ダメージ計算を行わず、そのモンスターを破壊する！」

「な、なんだと!?!」

カタストルが機械的な金属音を響かせながらサイバー・エンド・ドラゴンに接近し、その鋭く強固な爪を振り上げてサイバー・エンド・ドラゴンに突き刺す。

その瞬間、カタストルの爪から黒い闇色のエネルギーが現れ、それがじわりとサイバー・エンド・ドラゴンの体内に注ぎ込まれていく。

サイバー・エンド・ドラゴンはその攻撃に苦悶の咆哮を上げ抵抗したが、やがて消滅してしまった。

「サイバー・エンド・ドラゴンが……」

「たった一撃で破壊されるなんて……」

明日香とジュンコの二人がその光景を呆然と見つめ、思わずいっような気のない口調で呟きが漏れた。他の面子も、驚きをあらわにしている。

その中でも特に明日香は、相当に驚いているのが見て取れる。確か明日香は兄経由でカイザーとも親交が深かったはず。そうだとすれば、カイザーの強さもよく知っているはずだ。その切り札があっさり破壊されたのだから、驚くのも無理はないのかもしれない。

攻撃力4000、貫通効果持ちの特大モンスターにして、アカデミア最強であるカイザーの切り札。それがこんな方法で破壊されたとあれば、やはり驚愕すべきものなのだろう。

「閻属性以外のモンスターを問答無用で破壊かよ……。俺のデッキとは相性最悪だぜ」

十代がため息交じりに呟く。まあ、十代が持つてる閻属性のHE ROは攻撃力がこいつより下だからな。

十代の場合、サンダー・ジャイアントのような破壊効果を使って除去するしかない。まず戦闘では除去できないだろう。

「相性……そうだ！ お兄さんのデッキは……！」

翔のはっとしたような言葉に、明日香も我に返って思考を働かせる。

「サイバー・ドラゴンを主軸とするサイバー流のデッキ……！ そ

の属性は、殆どが光属性だわ！」

明日香が叫び、その事実を認識したみんながカイザーを見る。

そこには、サイバー・エンド・ドラゴンを破壊され、目を見張っているカイザーが立っていた。

そう、サイバー流はサイバー・ドラゴンを主体としている。そして、サイバー・ドラゴンの派生モンスターはその全てが光属性なのだ。それを主力としているカイザーにとって、このカードは天敵となる。

これ1枚で、上手くすればサイバー・ドラゴンデッキは止まってしまうのだ。キメラテックがあるなら話は別だが……カイザーが持っていないなら、単純に戦闘で破壊するのは相当に困難になる。除去カードを使うしかないからな。

それを理解したのだろう、翔はうー、と小さく唸って俺を見た。

「ずるいつすよ遠也くん！ そのモンスターの効果、強すぎるよ！」

痛いところを突っ込まれ、思わず一歩下がる俺。

いや、俺もこいつを出すのはどうかなーとは思ってたんだよ？ ただ、色々とカイザーの言葉で吹っ切れたっていうか、全力を出す以上コイツを使ってもいいかな、と思っただけっていうか……。

そう内心で言い訳するも、それが翔に届くはずもなく。翔は、ずるいつす！　と言っている。いや、なんかゴメン。

しかし、そんな翔に諫める声が掛けられた。

「……翔、それは違う」

「え？」

翔はその言葉を受けて、俺に向けていた視線をその声の主　カイザーへと向ける。

カイザーはその視線を真っ直ぐ受け止め、翔の顔を正面から見つめた。

「皆本は、俺の全力を出してデュエルするという意思に伝えてくれただけだ。カードの効果は確かに強力だろう。だが、皆本は反則を犯したわけではない。これが、皆本の全力だというだけのことだ。ならば、そこにズルなどない。あるのは、互いの全てをかけることで相手とわかちあうリスペクトの気持ちだけだ」

「相手とリスペクトしあう気持ち……」

カイザーの言葉に、翔は勢いをなくして噛みしめるように声に出す。

「翔、お前にはそれが足りない。弱いから卑屈になるのではない。強いから驕るのではない。たとえどうであっても、全力で相手に対すること。それが、相手を尊重するということなのだ」

「お兄さん……」

翔が、なんだか決意を込めた目でカイザーを見ている。そして、それにカイザーはふっと満足げに笑った。

……え、どうなってるのこれ。

「待たせたな、皆本」

そうカイザーが言う。いや、むしろまだ俺のターンなんで待たせてるのは俺なんですが……。

「お前のおかげで、翔に一つ教えてやることが出来た。こんな機会でもなければ、恐らく出来なかつただろう。感謝する」

「ど、どうも」

なんて言えばいいのさこれ。

「お前の全力、受けて立つ。このデュエル、負けられん」

そう言ってこちらを強く見据えるカイザーに、俺も応える。

このゴタゴタはとりあえず置いておこう。今はただ、このデュエルに集中するのみだ。

「俺だって、負けるつもりはない。俺はこれでターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

さあ、どってくるカイザー。カタストルを破壊するのは、容易じゃないぜ。

「俺は《サイバー・ヴァリー》を守備表示で召喚！ ターンエンド！」

《サイバー・ヴァリー》 ATK/0 DEF/0

サイバー・ヴァリーか……。また何とも厄介なモンスターを出してくれたもんだ。

「俺のターン、ドロー！」

ふむ、そう来たか。これならまだ希望は繋がる。

「俺は魔法カード《闇の誘惑》を発動！ カードを2枚ドロし、その後手札の闇属性モンスターを除外する。俺は手札から《クリッター》を除外する。そして《調律》を発動！ デッキトップのカードを墓地に送り、ジャンク・シンクロンを手札に加え、召喚！ 更に《ボルト・ヘッジホッグ》を自身の効果により蘇生する！」

《ジャンク・シンクロン》      ATK / 1300      DEF / 500

《ボルト・ヘッジホッグ》      ATK / 800      DEF / 800

再び俺の場にモンスターが揃う。そのレベルの合計は5だ。

「くるか……」

カイザーの呟きに応えるように、俺は口を開く。

「俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

空中に飛び立った二体のモンスターが、やがて光に包まれ一つになる。

「集いし英知が、新たな未来を切り開く。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 導け、《TG ハイパー・ライブリアン》！」

テック・ジーナス

《TG ハイパー・ライブリアン》 ATK/2400 DEF  
/1800

未来的な出で立ちをした司書が現れ、カタストルと共に相手のフィールドに向かい合う。

「バトルだ！ 俺はカタストルでサイバー・ヴァリーに攻撃！」

「この瞬間、サイバー・ヴァリーの効果発動！ 攻撃対象となったこのカードを除外し、カードを1枚ドロウ。そして、バトルフェイズを終了させる！」

やっぱり、その効果を使うか。バトルフェイズが終了し、メインフェイズ2となる。しかし、今の俺に出来ることはこれ以上何もない。

「ターンエンドだ」



「俺のターン、ドロー！」

カイザーがドローし、手札に加えた後、フィールドに置かれていたタイムカプセルに罫が入る。

「このスタンバイフェイズ、タイムカプセルに入れられていたカードが手札に加わる。《異次元からの宝札》を手札に加え、除外されていたこのカードが手札に加わったことによりお互いに2枚ドロウする！」

俺の手札が2枚に。カイザーの手札が一気に4枚にまで回復する。これだけ引いた以上、何かキーカードを引いた可能性が高そうだ。

「俺は手札からプロト・サイバー・ドラゴンを召喚！ 更に魔法カード《エヴォリューション・バースト》を発動する！ このカードは、サイバー・ドラゴンが自分の場に表側表示で存在する時に発動できる。このターン、サイバー・ドラゴンの攻撃権を放棄する代わりに、相手の場のカード1枚を破壊する！ プロト・サイバー・ドラゴンは場にいる限りサイバー・ドラゴンとしても扱う。俺が選ぶのは、A・O・J カタストル！」

「くっ………！」

プロト・サイバー・ドラゴンから放たれる光の砲撃が、カタストルを飲みこみ消滅させる。

やっぱり引いていたか、除去カード。カイザーほどの実力者なら、絶対に引いていると思っていた。カタストルが破壊されたのは痛いな……。

「更にカードを1枚伏せ、魔法カード《天よりの宝札》を発動！  
互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにドローする！」

ここで原作最強のドローカードかよ！ 俺の手札も6枚になるとはいえ、このカードを使うということは、勝負をかけたか来たか。

「俺は《死者蘇生》を発動し、墓地からサイバー・エンド・ドラゴンを復活させる！ 更に《二重召喚》を発動し、もう1体のプロト・サイバー・ドラゴンを召喚！ そして《パワー・ボンド》を発動！  
サイバー・ドラゴンとして扱う場のプロト・サイバー・ドラゴン2体を融合し、再び現れる、サイバー・ツイン・ドラゴン！ この時、パワー・ボンドの効果によりサイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力は元々の攻撃力分アップする！」

《サイバー・エンド・ドラゴン》      ATK / 4000      DEF / 2800

《サイバー・ツイン・ドラゴン》      ATK / 2800      5600  
DEF / 2100

三つ首の巨大な竜、そして双頭の一回り小さな竜。それでも、それぞれ俺なんかちっぽけに見えるほどに巨大な身体だ。そんな大きさのドラゴンにギロリと睨みつけられて、マナはさつと俺の後ろに隠れた。

その怒涛の召喚劇、そして2体のモンスターがそれぞれワンキル圏内の攻撃力ということに、さすがに俺の顔もひきつる。

全力を尽くすと言ったカイザーの言葉は本気だったと証明しているかのようだ。これ、普通ならトラウマになるんじゃないだろうか。

だがしかし、カイザーは容赦しない。間違いなくこれで決めにかかると。パワー・ボンドを使ったのがその証拠だ。

「バトル！ サイバー・ツイン・ドラゴンでハイパー・ライブラリアンに攻撃！」

サイバー・ツイン・ドラゴンの二つの口からエネルギーがビームのように一直線に襲いかかる。

これが通れば、俺のライフはゼロになる。だが、まだ終わらせん！

「<sup>リバース</sup>伏せカードオープン！ 速攻魔法《収縮》！ サイバー・ツイン・ドラゴンの元々の攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！」

「なに！？」

《サイバー・ツイン・ドラゴン》      ATK / 5600    1400

サイバー・ツイン・ドラゴンから放たれたビームが細くなり、ライブラリアンに直撃する。

攻撃力は収縮によりライブラリアンより下がっている。ツイン・ドラゴンの攻撃はただの自爆特攻となり、カイザーのライフポイントを削る結果となって終わった。

亮    LP : 3000    2000

「だが、まだサイバー・エンドがいる。ライブラリアンに攻撃！  
《エターナル・エヴォリューション・バースト》！」

「くっ……！」

ライブラリアンが破壊され、俺のライフが削られる。

遠也    LP : 2800    1200

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドだ」

カイザーのライフを削ったのはいいが……こっちも食らって、結局下回ってるのか。

まあ、サイバー・ツイン・ドラゴンを通していたら負けていたんだ。この程度で済んだなら恩の字だろう。

しかし、あのパワー・ボンドはアニメ効果のほうだったんだな。アニメだと、融合召喚されたモンスターがエンドフェイズまで残っている時だけダメージを受けるという効果だったはずだ。

OCGでは例え場から離れてもダメージを受けるので、この時点でカイザーは負けている。

まあ、OCG効果だとしたらこの場で使ってないよな。負けちゃうんだし。アニメ効果だからこそか、今使ったのは。

「俺のターン、ドロー！」

手札は7枚、選択肢は多い。

だがだからといって油断はできない。全力で行くぜ。

「俺は《調律》を発動！ デッキからクイック・シンクロンを手札に加え、デッキトップのカードを墓地に送る。そして、モンスターカードを1枚墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！ 更にチューニング・サポーターを通常召喚する！ 更にコストとして墓地に送られたボルト・ヘッジホッグの効果発動！ 場にチューナ

「がいる時、特殊召喚できる！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《チューニング・サポーター》 ATK/100 DEF/300

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

「レベル1のチューニング・サポーターとレベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》 ATK/2600 DEF/2500

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！ そしてジャンク・デストロイヤーの効果発動！ チューナー以外の素材としたモンスターの数まで、フィールド上のカードを破壊できる！ 素材となったのは2体、よって2枚まで破壊できる！ 俺はサイバー・エンド・ドラゴンと左の伏せカードを選択する！ いけ、ジャンク・デストロイヤー！ 《タイダル・エナジー》！」

ジャンク・デストロイヤーから轟音と共に現れた光の波動が、雷のようになって2枚のカードを直撃する。サイバー・エンド・ドラ

ゴンはしばし咆哮を上げて抵抗していたが、やがて破壊されて消えていった。

そして破壊した伏せカードは、《ダメージ・ポラリライザー》かうん、微妙。

けどまあ、これでカイザーの場にモンスターはいない。これが決まれば、俺の勝ちだ。

「いくぞ、カイザー！ ジャンク・デストロイヤーで直接攻撃！  
《デストロイ・ナックル》！」

「甘いぞ、皆本！ 伏せカードオープン！ 《聖なるバリアー - ミラーフォース - 》！ ジャンク・デストロイヤーを破壊する！」

「げっ！」

カイザーが発動したミラフォは、カイザー自身を守るように薄い半透明の膜を形成する。そして、ジャンク・デストロイヤーの拳はそのバリアーに跳ね返され、自身がダメージを受けることとなって自壊してしまった。

あちゃー。まさかそんなカード伏せてたなんてな。真ん中のカード選んどけばよかった。

まあ、済んだことは仕方がない。それより、場にモンスターがないことのほうが問題だ。

幸い、手札は豊富で《くず鉄のかかし》と《ガード・ブロック》が来ている。今はこれで耐えるしかないな。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド!」

エンド宣言をすると、不意にカイザーは口元に笑みを浮かべた。

「楽しいな、皆本。やはり、デュエルはこうでなくては」

「ああ。こんなデュエルができて、俺も楽しいぜ」

お互いに笑みを交わし、そして再びデュエルへと戻る。

互いに全力を出しているのがわかる。それだけのことが、これだけ楽しいデュエルに繋がる。

次は一体どんな手をつかってくるのか。そのことに胸を躍らせながら、俺はカイザーがドロウする姿を見据えるのだった。



「凄い……どっちも一進一退の攻防だ」

翔が二人のデュエルを見て、思わず感嘆の声を漏らした。

カイザーとまで呼ばれるほどに強い兄を、あと一步まで追い込んでいる遠也。そして、遠也に対して圧倒的な力を見せつつ、決してあと一步は譲らないカイザー！

目を奪われるとはこのことだろうか。翔は二人の全力を賭けたデュエルから目が離せなかった。

「ああ。遠也もさすがだぜ。……どうも手加減されてたつてのは悔しいけど、あのカタストルって奴もいつか攻略してやりてえなあ」

カタストルを、十代は一度も見ることがない。それは、あの効果を見る限り遠也自身が十代とのデュエルで使用するのを避けていた

と見るべきだろう。

確かに、十代のデッキにあのカードに対抗する手段は少ない。だが、遠也にそんなことを思わせてしまっていることが、十代は悔しかった。

一番よくデュエルをする仲間。親友だと思うからこそ、十代は遠也をいつか本気にさせてやりたかった。

「亮をあそこまで追い込むなんて、並みじゃないわ。新カードのデスターに選ばれたというのは、伊達じゃないということね」

明日香が感心したように頷き、二人の姿を見つめる。互いに全力を尽くし、それぞれ真剣に、だがどこか楽しそうにデュエルしている。その姿が、一人のデュエリストとして少し羨ましくも感じる。

「いったい、どっちが勝つのかしら……」

「わかりませんわ、ここまでくると……」

「遠也もカイザーも、凄すぎてもうわからないんだな」

ジュンコ、ももえ、隼人もそれぞれの思いでこのデュエルを見つめる。

全員がそれぞれの気持ちで二人を見つめる中、このデュエルにも

いよいよ終焉が訪れようとしていた。

「俺のターン、ドロー！」

カイザーはカードを引き、僅かに眉を動かすと、一度静かに目を伏せる。

そして、手札から一枚のカードを手に取り、宣言した。

「速攻魔法、《サイバネティック・フュージョン・サポート》を発動！ ライフポイントを半分払い、自分のフィールドか墓地から融合モンスターカードによって決められたモンスターを除外し、光属性・機械族の融合モンスターを融合デッキから特殊召喚する！ 俺は墓地のサイバー・ドラゴン3体を除外し、現れる《サイバー・エンド・ドラゴン》！」

亮 LP：2000 1000

カイザーの言葉に従い、除外領域から次元の狭間をぐり抜けて1体のドラゴンが現れる。

せつかく倒したつてのに、また出てくるのかよ。カイザーが最強つてのは、冗談でも何でもないつてのがよくわかるなこりゃ。

《サイバー・エンド・ドラゴン》 ATK/4000 DEF/2800

「この効果で召喚された融合モンスターの効果は無効化され、このターン攻撃宣言できない。俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードを確認する。そしてその瞬間、俺は思わず笑みを浮

かべる。

自分の勝利を確信したからだ。

サイバー・エンドが現れようと、何も問題はない。なぜなら、俺が今引いたカードは《死者蘇生》。これでカタストルを復活させればサイバー・エンドは脅威ではなくなるからだ。

あの伏せカードが気にならないと言えば嘘になるが、この状況で使われなかった以上、逆転の一手というわけではないのだろう。

いずれにせよ、俺は全力を出すだけだ。でなければ、カイザーが言ったように相手にも失礼だろう。

「俺は《死者蘇生》を発動！ 墓地の《A・O・J カタストル》を復活させる！」

《A・O・J カタストル》 ATK/2200 DEF/1200

「そしてジャンク・シンクロンを召喚！ そして効果で墓地からシンクロン・エクスペローラーを復活させる！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《シンクロン・エクスペローラー》 ATK/0 DEF/700

このシンクロン・エクスプローラーもまた、コストで墓地に行ったモンスターである。

そして、2体のレベルの合計は5だ。全力を出すと言った以上、出来ることは全てやる！

「レベル2シンクロン・エクスプローラーに、レベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

光を放ち、一つになっていくモンスターたち。その結集させた力が、このデュエルを制する拳となる。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！」

そして現れるのは、シンクロ召喚の代名詞。

「シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 DEF/1300

青く輝く鉄の身体、赤く光るガラスの瞳。しかし、その姿は何よりも頼もしいジャンクで作られた戦士。

フィールドに立ったその後ろ姿に、俺は力強さを感じて笑みを浮かべた。

このデュエル、これで決める！

「今度こそ最後だ、カイザー！　まずカタストルでサイバー・エンド・ドラゴンに攻撃！」

カタストルにとって、光属性であるサイバー・エンドは敵にはならない。問題なく破壊されると俺が確信していると、ふっとカイザーの口元が緩んだ。

「皆本。一つ聞くが、その効果はダメージステップ開始時に発動するものようだが、どうだ？」

「そうだけど……」

カイザーの唐突な質問に、俺は怪訝に思いながらも答える。

確かに、カタストルの効果はダメージステップの開始時に発動する効果だ。しかし、それが今何の関係があるというのだろうか。

しかし、俺の答えを聞いたカイザーは不敵に笑った。

「俺も、ただで負けるわけにはいかないんでな。  
ーブン！」

リバーズ  
伏せカード

「なに!？」

まさか、攻撃反応型のトラップ!? いや、カウンタートラップの何かだろうか? ここで耐えられると少々マズい。

いや、だがまだチャンスがなくなるわけじゃない。

まだライフのアドバンテージはあるし、モンスターも2体残っている。ミラフォは既に潰しているし、全滅するという事もないだろう。

ならば、次のターンに繋がろうとも、必ず勝ってみせる。

カイザーの声にそう考える俺だが、しかし 現実はその斜め上を行っていた。

「畏カード《決戦融合・ファイナル・フュージョン》！」

「なッ、なにいいッ!？」

なにそのカード!? いったいどういう効果……なんつーカード発動させてんだー!?

俺はディスクで確認したそのカードの効果に、心底から驚愕の声



を上げた。しかしそんな俺にかまうことなく、更にカイザーは言葉を続ける。

「このカードは攻撃宣言時に発動できる！ この効果により、互いのモンスターによる戦闘を無効にする！ そして互いのプレイヤーはバトルを行うモンスターの攻撃力の合計分のダメージを受ける！」

カタストルの攻撃とサイバー・エンド・ドラゴンの迎撃がぶつかりあい、それは一瞬拮抗した後エネルギーを生み出す。そしてそのエネルギーは大きな爆発を起こした。

その爆発は収まるところを知らないほどに荒れ狂い、やがて互いのプレイヤーまでも巻き込み、フィールド全体に大きな衝撃を撒き散らすことになった。

その余波は容赦なく俺たちにも襲いかかる。ソリッドビジョンとは思えない迫力を持った激震が迫り、直後、俺たちの身に降りかかった。

「ぐあああッ！」「

衝撃波は一気に俺たちのライフポイントを削り、2体を合わせた攻撃力 6200のダメージをそれぞれに与えたところで、フィールドは静寂を取り戻す。

引き分け、という結末だけを残して。

遠也 LP:12000

亮 LP:10000

おいおい、こんなのありかよ……。

あまりといえばあまりな結果に、俺は呆然としたまま心の中で  
う呟くことしか出来なかった。

『うわー、引き分けなんて久しぶりに見たよ』

俺の後ろにいたマナが、感嘆の声と共に顔を出す。

確かに、デュエルモンスターズにおいて引き分けという事態はそ  
うそうない。

互いに強制ドローする効果でデッキ枚数が足りずドローできない  
時や、《自爆スイッチ》とか《破壊輪》などでライフが互いに0に  
なった時、そして今回のように《決戦融合・ファイナル・フュージ  
ョン》や《ラストバトル!》といった効果によって引き分けとなる  
時。思いつく限りではそんなところか。

しかし、《自爆スイッチ》はあまり実際のデュエルで使われるこ  
とはないし、《ラストバトル!》を始めとする多くのカードは禁止  
カードだ。OCGにおいて、引き分けという事態は本当に珍しい。

だからこそ、予想外だった。カイザーがあんなカードをデッキに入れていたなんて。OCG化されていないカードだから、余計にわからなかった。

まさか、引き分けとはなあ。

っていうか、そんな展開的に重要そうなカードをこんなところで使わないでくれよ……。

俺は意気込んでいただけに、この結末に思わずがっくりと項垂れるのだった。

「おーい、遠也あー！」

デュエルが終わり、項垂れる俺と佇むカイザー。そこに十代を先頭にこのデュエルを見守っていた面々が走り寄って来る。

十代は笑顔。しかし、その他の奴らは揃って驚いた表情のままであり、こんな終わり方を想像もしていなかったということが容易に読み取れる。みんな安心してくれ、俺もだから。

だがしかし、そんなことを全く思わないのが十代クオリティ。十代はひたすら笑顔で俺に駆け寄ると、項垂れている俺の肩をバシバシと叩いた。

「すっげえぜ遠也！ あのカイザーに勝っちゃまうなんて！」

「勝ってないって。引き分け引き分け」

すかさず訂正する。有利だったのは認めるが、結果は結果だ。尤も、あのあと逆転されていた可能性もあったわけだけでも。

「あ、そうか。けど、引き分けでもすげえよ！ これで遠也はこのアカデミアで1番ってことだろ？ くー、俺も負けてられないぜ！」

そう言っつて身を震わせる十代。こいつは本当にデュエル脳だなあ、とその様子を生温かく見守る。俺もデュエルは好きだが、こいつは輪をかけてこれだ。ま、この世界ではこれぐらいのほづが楽しめていいのかもしれない。

いや、さすがにここまでだと困るか。一緒にしたら明日香とかに心外だとか何か言われそうな気がする。

「驚いたわ、まさか亮と引き分けるなんてね……」

その明日香が、興奮している十代の横から声をかけてくる。その声音に信じられないという響きがこもっているのは、やはりそれだけカイザーという存在は大きな存在だったのだろう。

まあ、攻撃力4000とか8000とか5600の連続攻撃とかされたら、そりゃ普通は勝てない存在だと思うようになるわな。

「勝てたらよかったんだけど。何事も上手くないかないな」

俺が姿勢を正し、ため息をつきつつそう言つと、明日香は呆れたように肩をすくめた。

「あのカイザーと引き分けて、そんなことを言うのはきつとあなたがぐらいよ」

そうかねえ。勝つ気でデュエルしているんだからそう思つのは当たり前だと思っただけだな。

そう言葉を返せば、明日香は「あなたらしいわ」と笑った。それにつられて、俺も笑顔を返す。そして、マナは何故か俺の背中をつねった。おい、やめろ。

「皆本」

と、そこに件のカイザーがやって来る。俺は話していた明日香から離れ、カイザーの前に立った。

そして、俺は先んじて右手を差し出す。

「いいデュエルだったぜ、カイザー」

笑ってそう言えば、カイザーもすぐにふっと相好を崩した。

「ああ。俺もデュエルできてよかった。ありがとう」

そうしてガツチリ握手を交わす。デュエルを通じて芽生える絆。実にいいね。友達になるの、凄く簡単。名前を呼ぶよりデュエルしようぜ！

ふむ、そう考えるとデュエルもある意味OHANASHIと言えなくもないな。魔砲少女的に考えて。

「あれだけ緊迫感のあるデュエルは久しぶりだった。引き分けという結末にも、満足している」

どこか清々しい表情でそう言うカイザー。……ふむ、と言うと？

カイザー曰く、学園最強という名前の大きさをゆえか、せつかくデュエルしてもそれだけで満足する生徒が多いということらしい。つまり「勝つ」ことが目的ではなく「カイザーとデュエル」することを目的としている嫌いがある、と。

それゆえ、負けても当たり前と考えている輩も多いらしく、カイ

ザーとしてはデュエルの緊張感がなく少々困っていたらしい。たまに勝とうと意気込んで来る者もいるが、実力が及ばず健闘も難しいという始末。それでも後者のほうがずっとマシとはカイザーの談。

そんな中で、自分をここまで追い込み、引き分けにせざるを得ないほどに迫った俺が現れた。カイザーはこのデュエルで久しく忘れていた勝負への緊張感を取り戻すことが出来た、と嬉しげに語った。

同時に、新たなライバルが現れたことも嬉しいと言っていたが。うーん、カイザーという名前を持つことも楽じゃないってことが。

「皆本。君さえよければ、これからもデュエルをしてくれないかなかなかこういう相手に恵まれなくてな……」

話を聞いた後では、確かにとその言葉には同意する。そんな状況では、納得のいく対戦相手、まして実力が拮抗した者などそう見つかるものではないだろう。

そんなカイザーに同情するわけではないが、俺としても特に断る理由はない。

「もちろん、オーケーだ。これからもよろしく頼むよ、カイザー」

「ああ、ありがとう」

さて。こうしてデュエルが終わり、ひと段落がついたところで。

俺たちはそれぞれ帰ることになった。が、ここで小さな問題が起こる。

またあの寮に戻るのか、と考えて少し憂鬱になる俺とマナ。そんな俺の様子を見た明日香が、やっぱりまだ解決していないのね、と口にしたことが周囲の興味を促した。

何のこと？ と目で訴えてくるこの場にいる全員に、俺は仕方なく事情を説明した。

すると、十代は呆れ、翔と隼人は、やっぱりと頷き、ジュンコとももえは以前の自分を思い出したのか、うっと胸を押さえていた。

今のところ解決策がない、と話して全員が一緒に考えてくれるのだが……やはり良い案は出てこない。

まあ、明日香にも聞いたうえでのことだから、そんなに期待はしていなかった。力になれなくて悪い、という彼らに「いいって」と苦笑を返し、俺はブルー寮に足を向ける。

ちょっと憂鬱だが、耐えられないほどじゃないし、一生続くわけでもない。ただ問題なのは、マナが我慢できるかどうかだな……。

横で若干ご機嫌斜めになりつつある相棒の姿を認め、俺はため息をついた。



と、その時。

「……事情はわかった」

お？

「なら、俺に考えがある」

そんな頼もしい言葉が、カイザーの口から聞こえてきたのだった。

数日後。

俺の周囲はそれはもう平穩になっていた。

悪口も収まり、面と向かって舌打ちする奴もいなくなり、格段に過ごしやすくなった。

陰口なんかは今でも続いているみたいだが……まあ、それはどうしようもないだろう。表立って言われなくなっただけマシである。

それどころかむしろ、俺のことを畏怖の目で見る者もいるぐらいだ。マナは喜ぶどころか、その手の平の返しっぷりに呆れ顔だったが、それでも疎まれていた空気はだいぶ薄らいだので文句はないらしい。

いや、最初はどうなる事かと思ったけど、何とかなって良かった良かった。

これも、カイザーのおかげだね。

「やー、ホント助かったよ。ありがと、カイザー」

「大したことをしたわけじゃない。それに、事実をそのまま話しただけだ」

一流ホテルのように広々としたブルー寮の食堂、というかホール。そこで俺はカイザーと一緒に飯を食いながら雑談に興じていた。

ちなみにこの寮の夕食はフルコースという贅沢極まりないものだが、俺は頼みこんで一般的な定食のようなものを作ってもらっている。

フルコースはもちろん美味しかったのだが……毎日だと飽きるし重たいのだ。そのため、中には俺のように食事を変えてほしいと言ってくる者もいるらしい。

それにきちんと対応して要望通りのものを作ってくれるあたり、フルコースではなくたっても贅沢は贅沢なのかもしれないが。

対してカイザーは普通に出された夕食を食べている。まあ、今日とはというだけでカイザーもシェフに要望を出していることもあるから、別段何か言うほどのことでもないのだが。

「しかし、数日前からは信じられないな。カイザーと毎日メシを食うことになるなんてさ」

「ふっ、それは俺もだ」

言つて、互いに笑う。今ではブルー寮で一番仲のいい同性の友人だ。変われば変わるものである。それもこれも、数日前カイザーの提案した解決策が上手くいったおかげだ。

そう、あのデュエルの後。カイザーがとつた手段は簡単なものだった。俺とのデュエルの結末を話す。それだけだった。

つまり、「皆本遠也とのデュエルは引き分けだった」とカイザー自身が口にしたのだ。

カイザーはブルー寮男子全体から慕われている。それは、プライドが強いブルー生にとって、最強の名を冠するカイザーを擁していることが自慢だからである。

つまり、カイザーはブルーの中でも特別な存在であり、そのカイザーと同じ寮にいることが、彼らにとってのステータスともなっているのだ。

そのカイザーが、新参の俺と引き分けた。その情報は、ブルー生の中に驚愕を伴い瞬く間に広まっていった。

カイザーはその噂を積極的に肯定し、いかに俺が強かったか、いかに自分が苦戦したかを事実に出して話して聞かせる。

その結果、ブルー生は俺をカイザーと渡り合う強さを持つデュエリストだと認識を改めた。いくら彼らでも、自分たちより格上であるカイザーの言葉を批判することは出来なかったのだ。

そして、その俺はその日以降よくカイザーと食事を共にしたりし、

寮内ではほとんどの時間を一緒に過ごすようになった。これも、カイザーの案なのだが。

それを見たブルー生は俺がカイザーと非常に親しくなったと考え、表立って批判することをパタリとやめたのだ。この寮最強の実力者であるカイザーを敵に回してはたまらない、ということである。

付け加えると、女性人気も高いカイザーと敵対して、女子に嫌われるのが嫌だったという理由もあるだろう。

とまあ、そんなわけで。冷遇されていた俺は、一転してブルーの実力者として数えられることとなったのだった。

今では普通に話しかけてくる奴も徐々にだが出てきている。一度受け入れる箇所を見つけてしまえば、あとはそれぞれ自分の中で適当に折り合いをつけてしまう。そうなれば、嫌い続けることは難しい、というわけだ。

うーん、ホントに良く出来た案だよ。おかげで面倒なことに頭を悩ませなくてよくなったし、万々歳だわ。

『……うー、でもこの人のお世話になったのが、なんか納得いかない』

だが、マナは口先を尖らせてちよつと複雑そうだ。

もちろんカイザーには感謝しているし、その人柄が善良であることもマナはわかっている。ただ、あの時に言葉を遮られてしまった

ことが、なんとなく尾を引いているらしかった。

だがまあ、それもそのうち気にならなくなるだろう。今だって、別にカイザーのことを嫌っているわけではないのだから。

「ま、なんにせよ。過ごしやすくなって良かったよ」

「何よりだな」

ちなみに俺がカイザーとタメ口を聞いているのは、特に理由は無い。デュエル中、途中からいつの間にかタメ口になっていたらしく、それがそのままになっているだけだ。

カイザーも別に構わないと言ってくれたから、直すこともしていない。

「あとで、またデュエルでもする？」

「ああ。望むところだ」

俺の提案に、カイザーが嬉しそうに笑う。

十代もそうだけど、カイザーも大概デュエル馬鹿だよなあ。

カイザーと友達つきあい始めてから、まだ短い。だが、その間に俺のカイザーに対する印象は、クールになった十代、という本人

にしてみれば甚だ不本意かもしれない評価となっていたりするのだ  
った。

## 第7話 帝王（後書き）

な、長い……。

カイザーとのデュエルでやりたいことを詰め込んだ結果がこれだよ！  
ともかく、最後は引き分けにしたいなあ、というのが今回の目標でした。

カイザーは良くも悪くも学園最強なので、勝っても負けても何かしらの変化が出ちゃうんですよね。遠也の立場やカイザーの立場的にカイザーを最強のままにしつつ、遠也とカイザーの間を取り持つためには、遠也の実力が上回るとまでいかなくとも拮抗していることを表現するために引き分けにしたい、と思ったわけです。

そのため、あのカードを使ってもらいました。きっとOCG化はしないでしょうね。効果が効果ですし。

ところで、この作品のヒロインはマナなんですが、他にもヒロインっていたほうがいいですかね？

明日香かレイ、あるいは両方、もしくはマナ一筋、という選択肢になります。

複数人お相手というSSはこれまで書いたことがなかったのですが、この作品はテンプレを冠したSSですし、そういう要望があれば考えてみようと思っています。

何かご意見があれば感想で言ってもらえるとありがたいです。

それでは、また次回で。

ありがとうございました。

「決戦融合・ファイナル・フュージョン」ですが、融合デッキか



ら召喚されたモンスターが対象である、というふうに考えてもらえれば幸いです。

本来は融合モンスター限定っぽいですが、私の拙い頭ではこれ以外に引き分けの方法が思いつかなかったので……orz  
どうか、そういうことでよろしく願います。

## 第8話 廃寮（前書き）

タイタン戦です。

これでついに書いていたストック……というか、書き途中だったものも底をつきました。

あとは……書きあがることには上げていくだけです。

あと、ヒロインの件に関してのご意見、ありがとうございました。

色々とアドバイスをいただきましたので、そういった意見も考慮し、皆様のご意見を参考にしつつ私のほうで決めていきたいと思えます。今後の展開をどうか、楽しみにしていただければ幸いです。

マナがヒロインということについては、変わりませんけどね。

## 第8話 廃寮

夜も更けたレッド寮の食堂。

決して広いとは言えず、少々汚れも目立つ薄暗いその室内に、一つの光源がゆらりと微風によって揺れ動く。

食堂の片隅。そこに置かれたテーブルの一つ。その上に乗せられた一本の蝋燭。それだけが、今この時、唯一頼りになる光であった。

そして、その光を囲むように座り、顔を突き合わせている四人の男。

その一人が、ゆっくりと口を開く。

「 というわけで、その入江で欲しいカードを願い、水の中を覗きこんでしまった人は、水中に引き込まれてしまっつてわけっすー！」

最後のほうにはぐええ、と自分で首を絞めて苦しむような動作までつけるおまけつきだ。

これは、俺が言わなければいけないだろう……。

「翔、その小芝居のせいで台無しだぞ」

「ってゆーか、俺はその入江に行ってみたいぜ！」

「二人とも、今回の趣旨ホントにわかってるんすか!？」

翔の話に素面で突っ込む俺と、むしろ良い話を聞いたとばかりに目を輝かせる十代。

そんな俺たちに翔が思わず憤るのも無理はなかった。

「まったく、アニキと遠也くんも隼人くんを見習ってほしいっす」

そう言って翔が視線を自分の背後に向け、俺と十代も同じようにその視線をなぞる。

そこには、壁に張り付いて身体を震わせている隼人の姿があった。

そのあまりにわかりやすい姿に、俺は思わず嘆息する。

「あのなあ、隼人。いくら怪談とはいえ、そんなに怖かったか今の？」

「こ、怖いんだな」

震える声で言う隼人に、もはや何も言えなくなる俺。やれやれ、せつかく寮を抜け出してきたのに、この程度の怪談じゃあなあ。期待とは裏腹な現状に、俺は少しだけがつかりしていた。

そう、俺たちは今レッド寮の食堂で怪談をしていた。

机の上には蠟燭と、一つのデッキ。そこからカードを引き、引いたモンスターカードのレベルに応じた怖さの話をする、という一種のゲームである。もちろん、デッキは全てモンスターカードだ。

その話を聞き、面白そうだと思った俺はブルー寮を抜け出して参加することにしたのだが……。これなら、寝ていたほうが良かったかもしれない。

とはいえ、今の翔の話はレベル4の話だ。もっと上級のモンスターを引けば、多少はマシになるのかもしれないが。

「よし、次は遠也の番だぜ」

「ん、そうか。よし……」

十代に促され、俺もデッキからカードを引く。引いたカードは…  
…《ハネクリボー LV10》か。

「お、俺のカードだな。しかもレベル10……楽しみだぜ」

笑う十代、じつところちらを見る翔、そして怖いもの見たさなのか震えながら戻って来る隼人。

とはいえ、期待されてもなあ。怖い話なんてそうそうしないし、レパトリーなんて全くない。元の世界にあった怖い話はこっちにもあるし、有名どころはみんな知っているだろう。

となると、知らないような話となるが……難しい。うーん、ここは一つ、元の世界の漫画に乗っていた話をちょこつと変えてするか。

「じゃあ、話すぞ。それは、ある暑い夏の日のことだった」

話し始めると、翔と隼人が唾を飲み込み、十代がわくわくとこちらに注目し始めた。

「その日、男は少し用事があつて出かけていた。友人に呼び出されたためだ。男はこの暑さを和らげようとアイスコーヒーを作っていたのだが、結局それを飲むことはなく出かけてしまった」

ここまでは普通の話。皆の顔にも変化はなかった。

「男は、10分ほどで帰ってきた。本当に大した用事でもなかった

んだ。男はこの暑い中外に出たので、幾らかの汗をかいていた。そして、喉も乾いている。……水分が欲しい。そう思った男は、ふと台所のテーブルに目を向けた。そこには、さつき自分が作って置いて行ったアイスコーヒーがそのまま置かれていた」

さて、オチはこの次だぜ。

「男が出たのは10分。まだ冷たさを残すそれに、男は飛びついた。結露したコップを掴み、手が濡れるのも構わず、その真つ黒なコーヒーを一気に口に含む。……しかし、男は唐突に動きを止めて目を見開く。口の中に違和感を感じたためだ。男はその異状にすぐさま大きく口を開き、口の中にある違和感をぺっと吐き出した。するとそこには　！」

黒く光沢を放つゴキブリが　……。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙。

一瞬の後、弾かれたように翔と隼人が椅子から転げ落ちた。

「ぎゃああああ！ こっこ、怖すぎるっす！ 嫌すぎるっすー！」

「も、もうアイスコーヒーを作り置き出来ないんだなー！」

身体全体で恐怖心を表す二人。鳥肌が立ったのか、両腕をさすっているあたり、かなり具体的に想像してしまったのだろう。

そして、その二人ほどではないが、十代もまた頬をひきつらせていた。

「そ、それはさすがに俺も嫌だぜ。よくそんな話思いつくな」

「まあ、考えたのは俺じゃないけどな」

しかし、十代も思わず引くほどとは。恐るべしだな、あの黒い奴は。

「なーにをしているのかにゃ〜？」

その時、俺と十代の後ろから声と共ににゅっと誰かが顔をのぞかせる。



あまりに突然のことに、俺と十代は思わず飛びのいて距離をとった。

「だ、大徳寺先生!？」

「せ、先生か。あー、ビックリした」

十代が叫んだように、そこにいたのは大徳寺先生だった。腕に大きな飼い猫フアラオを抱き、いつもの猫のように細い目で俺たちを見つめる。

「消灯時間は過ぎてるにや。それに皆本君はブルー寮のはず。抜け出すのは感心しないにゃー」

「う……すみません」

完璧に悪いのはこちらなので、素直に謝る。それを受けて、大徳寺先生は少し溜め息をつくものの強くは言ってこなかった。

見逃してくれる、ということだろうか。ありがたいが、今度からは注意することによよう。

「それで、結局何をしてたのかにゃ？」

大徳寺先生の質問に、翔が自分たちが行っていたことを説明する。

それを聞き終えた先生は、おもむろにデッキからカードを引く。引いたカードはレベル12のモンスター《F・G・D》。……おいこれ誰のカードだ。結構なレアカードのはずだろコレ。

そして、レベル12の話をし始める大徳寺先生。

先生によると、この学校には廃寮となった元特待生寮というものが存在するらしい。そこでは過去何度も生徒が行方不明になっているとか……。

いや、学校それ公表しろよ。なんで世間に流れてないんだよ、ホントだとしたら。海馬さん知ってんのかな、これ。

ともあれ、そんなふうにあちを脅かした大徳寺先生は、早く寝るように、と言い残して去っていった。

しかし大徳寺先生。それはちょっと、十代の好奇心を舐めすぎだぜ。

「よっし！ その廃寮に探検しに行こうぜ！」

勢い込んで立ち上がり、俺たちに提案する十代。

やっぱりこうなったか。

そんなわけで、廃寮に出向くことになった俺、十代、翔、隼人の四人。島のはずれにあるというそこに向かうため、薄暗い森の中を懐中電灯を頼りに進んでいく。

そういえば思い出したけど、これって若本が出てくる時の話だよな。確か、タイタンだったっけ名前。声のインパクトもあって何とか覚えてるぞ。

あれ？ そういえばタイタンって最後……。

「お、着いたぜ！」

俺が過去を思い出している間に、いつの間にやら目的地に着いていたらしい。

木々に隠れるように見えてくる古ぼけたレンガ造りの門。その奥

に目を向ければ、洋風の館が生えすぎた雑草に囲まれてそびえていた。

壁ははがれ、窓は割れ、とにかくひどい見た目だ。廃寮、というのは確からしい。こんなボロボロの建物、人が住んでいるはずもない。早く撤去しろよ、と思ってしまふ俺はきつと間違っていないと思う。

「うわー……いかにもだね」

「ああ、面白そうなんだな」

びくつく翔と、どこか楽しそうな隼人。隼人は怖がりのくせにホラーが好きらしい。難儀な嗜好を持つてるな。

「ワクワクするなあ。早速入ってみようぜ！」

十代がそう促し、俺たちは「立ち入り禁止」と書かれた札が付けられた鎖を乗り越えようとする。

と、その時。

「そこにいるのは誰!?!」

突如響く誰何の声。明らかに若い女性のものだが、突然のことに俺たちは一瞬身を強張らせた。

しかし、十代はすぐさま反応し、懐中電灯を声がしたほうに向け  
る。

「誰だ!？」

その声に反応するかのように、草むららがガサガサと音を鳴らす。そして、次第にその奥から人の姿が見え始め、十代の懐中電灯によってその姿がはっきりと俺たちの目に映しだされた。

そして、俺たちは全員ほっと息をつく。なぜなら、そこにいたのは知っている人物だったからだ。

「あなたたち……どうしてここに？」

「それはこっちの台詞だけ、明日香」

驚きに目を丸くしている明日香に、俺は大きく息を吐きながら言葉  
を返した。

知り合いでよかった、というのが正直な気持ち。暗い夜の森で、いきなり女性に大声で声をかけられたら、普通は飛び上がるほど驚いても仕方ないんじゃないだろうか。

その明日香は、しかし俺の質問には答えなかった。

「ここは危険よ！ この廃寮で過去に何人も生徒が行方不明になっているのを知らないの？」

あくまで善意からだろう。明日香はそう俺たちに忠告するが。

「へへ、そんな迷信、信じないね」

十代はその忠告を一笑に付した。ま、普通は信じないよな。もし本当なら、学校側が既に対処していると考えるのが普通だし。十代がそう考えているかはわからないが。

しかし、十代のそんな態度は明日香の不興を買ったらしく、明日香はかなりきつい口調で俺たちに再度注意を促す。

どうにも、妙に興奮していつもの明日香じゃない。そのことを俺が思うのと同時に、十代が明日香に「どうしたんだよ、今日はなんか変だぜ」と問いかけていた。

それに対する明日香の答えは、意外にも結構シリアスであった。

なんと、明日香のお兄さんがここで行方不明になったのだそうだ。身内が消息を絶った場所。神経質になるのも無理はない。

しかし、確か明日香のお兄さんって一年生の最後のほうで敵とし

て出てきていたような気がするんだが。ここで敵にさらわれたのだからつか。一年生は確か……幻魔と理事長が黒幕だったような……。

『ねえ、遠也。もう明日香さん行っちゃったよ?』

マナの言葉に、はっと意識を戻すと、本当に明日香がいなくなっていた。俺が記憶をたどっている間に、行ってしまったらしい。

「ま、いいや。行ってみようぜ」

軽くそう言う十代は、明日香の言葉を聞いてもこの探検をやめるつもりはないらしい。

さっさと廃寮に入っていく十代を追って、俺と隼人、翔の三人は薄気味悪い館に足を踏み入れるのだった。

で、どうしてこうなった。

「待っていたぞお、遊城十代い……」

「何者だ！ 明日香と遠也を離しやがれ！」

うん、こういうこと。捕まっちゃったんだ、すまない。

あの後、探索をしていると明日香の兄と思しき人物の写真を見つけた俺たち。それから少し経った後、廃寮中に明日香の悲鳴が響き渡った。

慌てて声が聞こえてきた方向へと向かった俺たちは、随分とボロボロになったホールで明日香のカードを発見する。



そう、そこにはエトワール・サイバーを始めとする明日香のデッキが散らばっていたのだ。そして、それらを十代たちが拾う間に、俺は先行して様子を見てくることになった。

ダッシュで明日香がいると思われる岩壁に囲まれた部屋、というか洞穴？ に入った途端……隠れていたタイタンにとっ捕まって今に至る。

たぶん、入ってきたのが十代ではなく俺だったからだろうな。おぼろげな記憶によれば、コイツ、確か十代を狙ってたはずだし。

ちなみに棺桶が用意してあったらしいが、既に意識のない明日香がそこに入っているため、俺は手足を縛られてその下に転がされている。扱いの差がひどくないだろうか。

『もう……でも、どうしたの？ 助けなくてもいいなんて』

「いや、ちょっと思い出したことがあってさ」

小声でマナと会話しつつ、俺たちの解放を賭けたデュエルをすることになった十代たちのほうを見る。正確には、その相手となる俺たちを捕まえた張本人 自称闇のデュエリスト・タイタンを、だ  
が。

俺が思い出したのは、このタイタンがやはり若本の声だったということと、服装が妖怪人間ベムに酷似していること、そしてセブンスターズという一年生最後の事件における敵キャラの一人だったと

いうことだ。

そして、セブンスターズで闇にとらわれて姿を消してから、その後が一切わからない男。結局最終話までいっても何のフォローもなく、生死不明で終わったような……気がする。記憶があやふやだけど。

最終話を見た後にふとこいつの存在を思い出し、そういやタイトルって死んだの？ と疑問に思ったことがあった気がするのだ。そういうわけで印象に残っていたため、どうにか思い出すことが出来たわけだが。

本当に闇に飲まれて放置だったのかは覚えていないが、少なくとも闇のデュエルで敗北して、闇に飲み込まれていったのは確かだったと思う。

まあ、俺としては思い出すことが出来た、というか思い出してしまっただけ……。忘れたままなら気にならなかったのだろうが、思い出してしまっただけはそうもいかない。

人が一人、生死不明になるかもしれないのだ。それも、若本の声であり、囚われたとはいっても今のところ酷い目にはあっていない。

さすがにこのままスルーするのは後味が悪すぎる、と思わざるを得なかった。せめて生きているのが確定されたくない、絶対に今後気にしてしまう。

そのため、俺はマナに言ったのだ。今は助けられなくていい。このデュエルが確か闇のゲームになるのは覚えているから、その時に上手くやればタイタンもセブンスターズにはならないはず。たぶ

ん。

そういうわけで、俺は大人しく縛られているのだった。

「先手は私が貰おう……ドローお」

タイタンが先攻でデュエルが始まる。しかし、どう聞いても日曜夕方に出てくる唇の厚いサラリーマンにしか聞こえない。

「私はあ……《インフェルノクインデーモン》を攻撃表示で召喚する」

《インフェルノクインデーモン》     ATK/900   DEF/1500

クイーンというだけあって、豪華な装いに身を包んだ女性型の悪魔が現れる。悪魔といっても、顔つきはガイコツに似ていてどっちかというとアンデッドっぽい。

そして、その召喚を見た十代がタイタンのデッキを【デーモン】デッキだと予想する。まあ、ほぼデーモン専用と言えるカードだけに、その予想は大当たりだろう。

代償としてライフコストを要求する代わりに、高攻撃力、対象を取る効果をダイスによって無効化する能力を有するカードたち。

いかにも闇のデュエリストを思わせるデッキだ。

「つまり、お前のライフは勝手に減っていくってことだぜ！」

十代が笑ってそう言うと、タイタンはにやりと口元を歪ませた。

「甘いなあ、遊城十代。私は手札からフィールド魔法《バンディモニウム万魔殿 - 悪魔の巣窟 - 》を発動お！ この効果によって、デーモンたちはライフを払わずに済む。加えて、デーモンが破壊された時に、そのモンスターよりレベルが低い「デーモン」と名のつくモンスターを手札に加えるのだあ。……私はカードを2枚伏せ、ターンエンドお」

「くっ……俺のターン、ドロー！」

黒魔術のミサよろしくな悪趣味きわまりない装いになってしまった室内に立ち、どや顔で言うタイタン。十代はデーモンのデメリックを帳消しにする効果を知って呻く。

そしてドローによってターンを開始した十代だが、それに被せるようにタイタンが口を開く。

「そのスタンバイフェイズ、インフェルノクインデーモンの効果発動お！ デーモンと名のつくモンスターの攻撃力をお、エンドフェイズまで1000ポイントアップさせる！」

《インフェルノクインデーモン》 ATK/900 1900

「そんな！ 攻撃力が一気に1000も！？」

翔がぎよつと目を見開いて叫ぶ。デーモンは高い攻撃力も特徴の一つだ。だから不思議なことではないが、やはり1000というのは大きい。

「俺は《E・HERO クレイマン》を守備表示で召喚！」

《E・HERO クレイマン》 ATK/800 DEF/2000

粘土でその身体が構成された巨体のHEROが、身体を丸めて防御の体勢を取る。

「更にカードを2枚伏せてターンエンドだ！」

十代のスタートは堅実で、まずまずだな。クレイマンの守備力は2000ある。下級モンスターではそうそう突破されない。突破されたとしても伏せカードがあるし、たぶん大丈夫だろう。

エンドフェイズ、クインデーモンの攻撃力が元の900に戻った。

「私のターン……ドローお！」

タイタンがカードを引く。

そしてスタンバイフェイズに入ったことで、エンドフェイズに戻ったクインデーモンの攻撃力が再び上昇する。

《インフェルノクインデーモン》     A T K / 9 0 0     1 9 0 0

「私はあ、《ジェノサイドキングデーモン》を新たに召喚！ このカードは場にデーモンというモンスターがいなければ召喚できないが、私の場にはクインデーモンがいるため問題はなあい。更に装備魔法《デーモンの斧》をジェノサイドキングデーモンに装備だあ。これにより、キングデーモンの攻撃力が1000ポイントアップするう！」

《ジェノサイドキングデーモン》     A T K / 2 0 0 0     3 0 0 0  
D E F / 1 5 0 0

げげ！

「攻撃力3000だって!？」

さすがにこの攻撃力には十代も焦りを見せる。

クレイマンの守備力を容易に超える高攻撃力だ。そのため、十代から離れた場所にいる翔と隼人も目を見開いて心配そうに十代の名前を呼んだ。

「食らえい！ 我がデーモンたちの怒りを！ ジェノサイドキングデーモンでクレイマンに攻撃い！ 《炸裂！ 五臓六腑》う！」

タイタンが勢い込んで宣言すると、ジェノサイドキングデーモンの筋繊維剥き出しの胸部が開き、そこから内臓が夥しい数の虫に変化してクレイマンに襲いかかった。

な、なんて受けたくない攻撃なんだ。十代には悪いが、対戦しているのが俺じゃなくて良かった……。

そして、手に持った斧を使えよ。トンファーキックじゃねえんだから。

「畏発動！ 《ヒーローバリア》！ ジェノサイドキングデーモンの攻撃を無効にするぜ！」

「ほっ……危なかったっす」

十代が防御系の罫カードを発動したことで、翔はほっと息を吐く。けれど、ヒーローバリアだと、まずいぞ。

「ふふふ……この瞬間、ジェノサイドキングデーモンの効果を発動するう！」

「なに！？」

タイタンがその言葉を発した途端、タイタンの横に1から6の数字が刻まれた六つの拳大の珠が浮かぶ。

「サイコロの目が2か5を示した時、ジェノサイドキングデーモンを対象にした魔法、罫、効果モンスターの効果を無効にし、破壊できるのだあ」

そう、これがチェスデーモンに共通する効果だ。

自身を対象にする効果が発動した時、サイコロの目によって不確定ながらその効果を無効に出来る、という厄介な効果。

ヒーローバリアは対象を取る効果だから、こうしてその効果が適用される。

当たる確率は3分の1。逆を言えば、当たらない確率は3分の2



だ。確率的には十代が有利だが……。

六つの珠に炎が灯り、回転していく。そしてその炎が止まった場所……。

「2だあ。よってヒーローバリアの効果が無効にし、破壊するう！」

「ぐあっ！」

ヒーローバリアの恩恵がなくなり、虫の大群がクレイマンに殺到する。そしてその虫が一斉に爆発を起こし、クレイマンは為す術なく破壊された。

「つく……けどこの瞬間、もう1枚の罫カードを発動するぜ！ 《ヒーローシグナル》！ こいつは俺のデッキからレベル4以下のHERO1体を特殊召喚させる！」

「ほう……」

タイタンも、場をがら空きにはしない十代の用意の良さに感心している。さすがは十代だ。初手の引きの良さもかなりのものである。

そして、十代がちらりと俺を見た。ん、なに？

「遠也。お前からもらったこのカード、早速使わせてもらおうぜ！」

「俺からもらった……って、あのカードか!？」

俺のデッキには合わないが、お気に入りのカードとして持っていたカードたち。その中に数枚混ぜていたHEROのうち、2枚を十代にあげたのはつい最近のことだ。

まさか、そいつを使うというのか。俺があげたからだが、変なところでコラボレーションが起こったもんだ。

「いくぜ！俺はデッキから《E・HERO エアーマン》を特殊召喚！」

青い体躯に青いバイザー。白い機械仕掛けの翼には、両翼ともにファンのような回転する羽がついている。

漫画版GXで初登場し、その後OCG化して猛威を奮った唯一の制限HERO。そのあまりの活躍っぷりに“空気を読まない男”とまで言われたトンデモHEROである。

《E・HERO エアーマン》 ATK/1800 DEF/300

ちなみに俺のお気に入りカードの中に入っていたHEROは、エアーマン、ネオス、ジ・アース、ZEROの4枚だった。こいつらはデッキに使うためのカードではなく、好きだから手に入れたカー

ドたちだ。

しかし、使わないとはいっても、まさかネオスを渡すわけにはいかないし、ジ・アースは単体で渡しても意味がない。そのため、エアーマンとZEROを渡したというわけだ。

ちなみに、俺も十代から1枚カードをもらっている。十代は同じように2枚を渡そうとしたんだが……欲しいカードがなかったのだ。なので、1枚だけもらった。十代は不満げだったが。

いずれにせよ、デッキに入れることは俺のポリシー的でないだろうが、まあトレードなのだから受け取って大切に保管している。

「こいつは遠也との友情の証だ！ エアーマンの効果発動！」

なんか十代が恥ずかしいことを言っている。マナ、にやけてこっちを見るんじゃない。

「このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキからHEROと名のついたモンスター1体を手札に加える！ 俺は《E・HERO バブルマン》を手札に加える！」

「それがどうしたあ。私はインフェルノクインデーモンでエアーマンに攻撃い！」

クインデーモンの攻撃力は1900。1800のエアーマンでは

敵わない。

エアーマンは両腕をクロスさせてガードするものの、耐えきれずに破壊された。

「くっ……エアーマン！」

十代 LP：4000 3900

だが、削られたライフポイントはたったの100だ。掠り傷と言ってもいいレベル。大きな影響はないだろう。

しかし、タイタンは不気味に笑うと懐から金色に輝く四角錐を取り出した。

って、おい……う、ウソだろ！？

『そ、そんな……！？』

俺たちは驚愕もあらわにその四角錐から視線を外すことが出来ない。その手にあるものが、あまりにも衝撃的すぎて。

そう、それはどこからどう見ても千年パス……ル？

……あれ？

「……なあ、マナ。あれよく見たら継ぎ目なくね？」

『そういえば……。それに、どこことなくデザインも違う……。』

二人で目を凝らして確認する。その後マナがタイタンの近くまで飛び、詳細を確認。その結果、マナは手をクロスさせて×の字を作る。

な、なんだ、偽物かよ。

「……肝が冷えたぞ、おい」

『ホントだよ……。あれは、エジプトの大地にファラオと一緒に消えていったんだから……。』

マナが少しだけ表情を陰らせて言う。

ある意味ではマナの本当のマスターともいえる、闇遊戯。己の名を取り戻し、この現代から去っていった古代エジプトの王、アテム。その還っていった時のことを思い出しているのかもしれない。

その間に、タイタンはその偽千年パズルと巧みな話術によって、十代たちに催眠術をかけていた。タイタンは高笑いして闇のデュエルだと言っているが、意識して見れば催眠術以外の何物でもなかった。

だって、煙が出ている以外何も変わってないのに、息苦しいとか十代の身体が消えている、とか騒いでるんだぜ。催眠術以外の何だというのだろうか。

翔と隼人は消えていつているらしい十代に慄いているが、十代は少し動揺を見せたものの、すぐにデュエルに集中する。

やるな。最強のレッドはうるたえない。

「俺のターン、ドロー！」

タイタンは攻撃後は催眠術以外何もせずターンを終え、十代のターンとなった。

「俺は《E・HERO バブルマン》を召喚！ そしてバブルマンの効果発動！ 召喚に成功した時フィールド上に他のカードがない場合、デッキから2枚ドローする！ ドロー！」

十代の手札が6枚まで回復する。そして、十代はそこからカードを1枚手に取った。

「俺は《融合》を発動！ 手札の《E・HERO スパークマン》と《E・HERO エッジマン》を融合！ 現れる、《E・HERO プラズマヴァイスマン》！」

金色に輝く装甲を纏ったHEROがフィールドに降り立つ。

両腕には特に大きな装甲がついており、攻撃力の高さがかげえる。スパークマンの名残だろう、青いスーツが金色の装甲から見え、コントラスト的にも綺麗なHEROである。

《E・HERO プラズマヴァイスマン》 ATK/2600 D  
EF/2300

「プラズマヴァイスマンの効果発動！ 手札を1枚捨て、相手フィールドの攻撃表示モンスターを1体破壊する！ ジェノサイドキングデーモンを破壊するぜ！」

「ぐおお！？ だが、この瞬間手札の《デスルークデーモン》の効果発動お！ このカードを手札から墓地に送りい、今破壊されたジェノサイドキングデーモンを復活させるう！」

プラズマヴァイスマンから放たれた雷が、ジェノサイドキングデーモンを一瞬で破壊するが、しかしすぐさま場に復帰する。デスルークデーモンとのコンボか。単純だが、上手くはまれば恐ろしい。

「ちえ、駄目だったか。なら俺は《戦士の生還》を発動するぜ！  
効果で墓地からエアーマンを手札に加える」

おお、回収されたかエアーマン。まあ、もう召喚権は使ったし、また出てくるのは次のターンかな。

「そしてもう一枚の《融合》を発動！ 場のバブルマンと手札のエアーマンを融合し、現れる、極寒のHERO！ 《E・HEROアブソルトZERO》！」

白銀に煌めく身体。鋭利な突起が多いのは氷をイメージしているためだろう。白いマントをたなびかせ、颯爽とフィールドに降り立ったのは、これまた俺が渡したHERO。漫画版十代のエースの1体である。

《E・HERO アブソルトZERO》 ATK/2500 D  
EF/2000

エアーマン……次のターンどころか早速役に立って墓地にとんぼ返りか。さすが、HEROデッキの過労死代表。制限となっても使い回されようとしているのか。相棒のオーシャンもいないのに。

ちなみにエアーマンを持っていた理由は、さんざんネタにされまくって面白かったからだ。

そして、ZEROは単純に強いうえにカッコイイからというのが持っていた理由。OCG化して名実ともに最強のHEROとなったカードだ。



漫画版はデザインがいいHEROが多いから困る。アニメ版ではネオスも好きだけどね。

「いくぜ！ プラズマヴァイスマンでインフェルノクインデーモンに攻撃だ！」

「そう簡単に通すわけがなあかろう。畏発動、《ヘイト・バスター》！ 攻撃モンスターと攻撃対象にされたモンスターを破壊しい、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージをお前に与えるう！」

「なにっ！？ ぐああッ！」

伏せられていたカードが明らかになり、その効果によってプラズマヴァイスマンと、インフェルノクインデーモンが互いに爆発。その衝撃を十代が浴びる。

十代 LP:3900 1300

まずいな。これでライフポイントが半分を切ってしまった。

「けど、まだZEROが残ってるぜ！ アブソルートZEROでキングデーモンに攻撃！ 《瞬間氷結・Freezing at Moment》！」

「ぐうおおっ！」

タイタン    LP：4000    3500

アブソルートZEROの起こした吹雪がキングデーモンを凍結させ、破壊する。

しかし、もう一枚の伏せカードが発動しなかったな。攻撃反応型ではないってことか？

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「そのエンドフェイズに、私は《リビングデッドの呼び声》を発動するう。ジエノサイドキングデーモンをお復活させる！」

《ジエノサイドキングデーモン》    ATK/2000    DEF/1500

これで十代の手札はゼロ。しかし、場には攻撃力の高いモンスターが残り、伏せカードもある。だが、あちらはキングデーモンを復活させてきた。

次のターン、タイタンがどう動くかが鍵だな。

「アニキ……頑張れ！」

「も、もう十代の左腕がほとんどないんだな！」

「え、右腕でしょ？」

「え？」

「え？」

なにそれこわい。

どうやらあの二人も、違和感に気がついたらしい。そして、その言葉を受けて十代も少し気にするそぶりを見せる。そして、横を飛んでいるハネクリボーを見た。

そして何事かを話し、その後によりと顔に笑みを浮かべさせた。

「私のターン、ドオロー！」

そんな周囲の様子を気にせず、タイタンがデッキからカードを引く。

そして、そのカードをそのままディスクに置いた。

「私はジェノサイドキングデーモンに2枚目の《デーモンの斧》を

装備するう」

《ジェノサイドキングデーモン》     ATK / 2000     3000

まずい。これでキングデーモンの攻撃力がZEROの攻撃力を超えてしまった。

っていうか、デーモンの斧を二枚って、なんつー構成してやがる。が、それによって十代が追い詰められている以上、何も言えないわけだが。

「ジェノサイドキングデーモンでアブソルートZEROに攻撃い！

《炸裂！ 五臓六腑》う！」

キングデーモンが放った臓器の虫達がアブソルートZEROに直撃し、ZEROは氷の欠片を飛び散らせながら砕け散る。

だから斧で攻撃しろと何度言えば、以下略。

十代    LP : 1300     800

十代のライフを更に削り、場をがら空にしたことにタイタンは笑みを浮かべるが、十代もまたこの状況で笑っていた。

ま、なんの対策もなくZEROを破壊するのは自殺行為だからな。知らないだろうから、無理もないけど。

「この瞬間、アブソルートZEROの効果が発動するぜ！」

「なにい？」

「E・HERO アブソルートZEROがフィールドを離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」

「な、なんだとぉ!？」

フィールドに飛び散っていた氷の欠片が、タイタンのフィールドのジェノサイドキングデーモンに張り付いて凍結させる。そして、徐々に氷に罅が入り、キングデーモンは砕け散ってしまった。

数あるHEROの中でも極めて汎用性が高く、かつ強力な効果だ。フィールドを離れた時、という緩い条件でサンダー・ボルトと同じ効果を使えるというのだから、恐ろしい。

「す、すっ……」

「とんでもなく強力な効果なんだな……」

さすがに疑似サンダー・ボルトは衝撃的だったらしい。二人ともZEROの効果には驚いているようだった。

「ぐぬう……デーモンが戦闘以外で破壊されたことでえ、私はデッキから《インフェルノクインデーモン》を手札に加えるう。ターンエンドだあ」

タイタンもまさかそんな効果を持っているとは思ってもいなかっただろうな。

そもそもこのHEROは俺しか持っていなかったんだから、たとえ事前に十代のデッキを調べていたとしても、初めて使ったこのカードはわからなかっただろう。

そしてエンド宣言をしたタイタンは、再び懐から偽パズルを取り出して、十代の身体が消えていっているという暗示をかけている。ご丁寧に光を放ったり煙を出したりするあたり、細かい奴である。

翔と隼人は消えていく十代に怯えている。しかし十代には何も変化はない。さきほどまで息苦しそうにしていたというのに、それもなくなっていた。

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードを見た十代はにやりと笑う。

そして、びしっとタイタンを指さした。

「タイタン！ 読めたぜ、あんたのやったインチキのカラクリが！」

「……ふん、なにをお言っているっ？」

そして始まる名探偵十代！

タイタンの言っていることは嘘であり、消えていつている身体や息苦しさはただの勘違いの幻であること。恐らくは千年パズルから出している光とタイタンの言葉、そして煙がその原因であること。

タイタンは闇のデュエリストではなく、恐らくはマジシャンか催眠術師のようなものであること。それらを十代が指摘していく。

そういえば、と翔たちもはっとしたところで、タイタンが「私は真正銘闇のデュエリストだぁ！」と主張する。

それに対し、十代は言った。

「なら、千年アイテムが何個あるか答えてみる！」

俺たちは既に館の中でそれを知っている。まあ、俺の場合はその前から知っているが。

そしてそれを知らないタイタンは、案の定言葉に詰まった。しかし、ゆっくりと口を開く。

「そ、それは……な、フ……」

「あ、合ってるんだな」

隼人が思わず肯定した瞬間、タイタンはにやりと笑う。どう見ても当てずっぽうが当たってホッとした顔であった。

「ふふ……なあなあ……」

その言い方はやはり面白いが、十代は苦虫をかみつぶしたような顔だ。ここでタイタンが間違うと確信していたのだから。俺も間違えると思っていたが、まさか適当に答えて当てるとは。

やれやれ。ここは俺がフォローするのでしょうか。

「なら、その千年アイテムの名前もそれぞれ知ってるよな？」

「な、なにい？」

縛り付けられて座りこんでいる俺から発せられた言葉に、タイタンがこちらを見る。

十代も俺に視線を寄こすが、目で任せておけと告げた。頷く十代。よくわかったな今ので。



「さあ、どうなんだ？」

「ぐ、ぐ……そ、それは……千年……千年……」

「あと5秒。4、3……」

「なあ！？ ま、待てえ！」

「1、0……はい、残念でした」

「ぐ、ぐぬう……！」

答えられず、呻くタイタン。

ちなみに千年アイテムは、千年パズル、千年錠、千年輪、千年杖、千年眼、千年秤、千年タウクの七つである。

っていうか、別に全部知っている必要はないのだが。王様だって最初の頃はパズル以外のアイテムのこと知らなかったけど闇のゲームしてたし。

つまり、ここで適当に「闇のデュエリストは自身のアイテムのこ  
としか知らないのだ」とか強引に言っしまえば、俺たちに確認の  
術はないのだから、その時点で話は終わりだったのだ。

下手に付き合いがいいのが仇になったな、タイタン！

「へっ、これでハッキリしたぜ！ お前は闇のデュエリストなんかじゃないってことがな！」

そう十代に改めて指摘されると、タイタンが表情を苦いものにして、やがて今まで以上の煙を放出し始めた。

「ふん……バレたからにはあ、もう用はない……。貴様とデュエルするなど、無意味なことお！」

言ってタイタンは偽パスルを地面に叩きつける。すると、パスルが爆発して噴煙を撒き散らす。おい、なんつー危ないもん懐に仕込んでんだ。

「やっぱ偽物か！ 待て！」

背を向け、立ち去ろうとするタイタンに向かって、十代が走り寄りつとする。

が、その瞬間、突然部屋の床中央部分に巨大な一つ目が現れる。

それはある意味で非常に見覚えがあるものだ。かつて、漫画の中で何度も登場した印象深いマーク。

各千年アイテムにも共通して描かれているウジャト眼。それが光を放ってそこにあった。

そして、室内だというのに強い風が起こり始め、振動と土埃が部屋の中を覆い始める。十代とタイタンはその中心地にいるため、さらされる強風に腕で顔を隠してこらえていた。

『そんな……まさか本当に……？』

「ちっ、マナ！」

『遠也！ これは本物の闇のデュエル……危険すぎるよ！』

当初に話してあった通り、マナの協力によって乱入するつもりが、マナがここで否を唱えてきた。

マナはデュエルモンスターの精霊であり、遊戯さんとずっとデュエルしてきた仲間の一人だ。闇のデュエルも、何度も経験している。だからこそ、本物の闇のデュエルがどれほど危ないものなのかも理解しているのだ。

だからだろう。俺を止めようと言いついてきてくれる。さっきまでは恐らく、本当にこうなるとは思っていなかったのだろう。千年パズルも偽物だったし。

「マナ、言い合ってる余裕はないんだ。今すぐ行かないと」

『でも、闇のデュエルは命のやり取りなんだよ？ そんなことを…』

マナはやはりしびる。俺としても、タイタンのその後が気になるから始めたことだったが、自分の命がかかるとなれば、さすがに躊躇する。

けど、今この瞬間。無視できない理由が出来たのだ。やっぱり、目の前で見ちゃうとダメだ。わかっていても不安になる。

「マナ、十代は俺の友達なんだ。なら、放っておけないだろ！」

自分の前で、友達が危険にさらされようとしているんだ。いくらたぶん大丈夫だろうと思っけていても、ここは物語の世界じゃない。先がどうなるかなんてわからないし、何かあつてからじゃ遅いんだ。

俺がそう言うと、マナはぐっと押し黙る。そして、一瞬の逡巡。その後、俺を縛っていた縄を解いてくれた。

「サンキュー、マナ！」

『もう！ 私の傍から離れちゃだめだよ！』

それに、勿論！ と答え、マナと共にすぐさま十代の下に駆け寄

る。そして風が巻き起こすその場所に足を踏み入れた途端。

周囲の景色が一変した。

岩壁はなくなり、床と呼べるものも存在しない。だというのに、足が地面についている感触はある不思議な感覚。

上下四方全てを闇色で覆われた空間、と表現するしかない。そんな場所に、俺と十代、タイタンは隔離されていた。

「な、なんだ一体？」

「こ、これは……何が起こったのだあ？」

十代とタイタンが辺りを見回しているが、どこにも何も変化はない。

そのうち、十代がインチキではあったがタイタンが闇のデュエリストを名乗っていたこともあり、この原因をタイタンだと判断したようだった。

「お前、また性懲りもなく！」

「ち、違う！ 私は何もしていない！」

「ま、だろつな」

そんな二人の会話に割って入る俺。よかった、何とか間に合って。

「貴様は……」

「遠也！ いや、それよりどういうことだ？」

突然の俺の登場に、二人はそれぞれ視線を俺に向ける。

そして十代は明らかに事情知ってます的な発言をした俺に対して、質問を投げかけてきた。

それに俺も真面目に答える。さすがにこの状況でふざけられるほど俺も馬鹿じゃない。

「どうもこうも、こいつは本物の闇のゲームだ。闇のデュエリストじゃないタイタンには、こんなこと出来はしないさ」

俺がそう言うと、十代は少しだけ呆れたような顔をした。

「お前までそんなこと言うのかぁ？ 闇のゲームなんてあるわけないだろ？」

「いや、あるんだよ。闇のゲームは実際にな」

俺が十代の認識を改めさせようと更に言葉を続けようとしたところで、上から何かが降ってきた。

「ん？」

「なんだ？」

見ると、悪魔のような鋭い目と牙を持ったクリボーほどの大きさの黒い軟体動物がいた。ハッキリ言って、めちゃくちゃ気持ち悪い。

すると、次第にそれは一気に降り注いでくる。それを察したのか、十代のデッキからハネクリボーが現れて、俺たちのほうに寄って来ようとしていたソイツらをハネクリボーが追い払ってくれた。

ほっと息を吐く俺たち。そして、タイタンのほうに顔を向ける。

「な、なんだ一体い！ く、来るなあ！」

精霊のカードなど持っていないタイタンに防ぐ術はなく、悪魔たちは次々に服に取りついていて。それを見て、俺は慌ててマナに指示を出す。

「やばい！ 頼む、マナ！」

『うん！』

俺の声を受け、マナがタイタンの元まで飛んでいき、そのコミカルな杖を構える。

『せーのっ！』

そんな掛け声とともに杖先から光が迸る。その光はタイタンの全身を覆うように降り注ぎ、やがてその身体に群がっていた小さな悪魔たちを残さず消滅させた。

よし、これですぐさまタイタンがどうこうはならないだろう。

そして、それをされたタイタンはというと、物凄く驚いているようだった。

「ぶ、ブラック・マジシャン・ガールだお！？ どうなっているのだあ！？」

あれ、タイタンなんで見えてるの？

ひょっとして闇のゲームの空間って精霊も見えるようになるんだろっか。



まあいい。そんな考察は後回しだ。

「おい、タイタン！ 死にたくないなら、早くこっちに来い！」

俺が呼びかけると、タイタンがこっちに目を向ける。そして、俺たちの周囲には悪魔たちが寄ってきていないことに気がついたのだろう。一目散に走ってきた。

だが、その途中にも悪魔たちは執拗にタイタンを狙う。そのたびマナが落としているが、諦める気配がない。

どうにも、奴らはタイタンの胸から顔辺りを目指しているようだ。デッキと、顔を狙っているのか？

なら、顔はどうにも出来ないがデッキならどうにか……。

「タイタン！ そのコートを捨てるんだ！ そいつらはカードに執着してるらしい！」

俺の言葉に、タイタンはぎょっとした。

「なんだとお！？ 私にい、デッキを捨てるというのかあ！？」

「気持ちはわかる！ だけど、それ以外にないんだ！」

続けて言うと、タイタンは強く歯をかみしめて唸る。

そして、悪魔たちを振り払うようにコートを脱ぐと、デッキが入ったコート型デュエルディスクを遠くに放り投げた。

「すまん！」

その言葉を最後に、タイタンはコートを脱いだスーツ姿になってこちらに走って来る。相変わらず悪魔たちはタイタンを目指していたが、幾分かはデッキのほうに流れている。

そのことと、マナの協力もあって、どうにかタイタンは無事に俺たちの元に辿り着くことが出来た。

「はあ、はあ……一体、何が起こっているというのだあ……」

息も荒く呼吸を整えているタイタンには答えず、俺はひとまずマナをねぎらった。

「サンキュー、マナ」

『どういたしまして。でも、気をつけて。これからだよ』

「ああ」

マナの言葉に、俺は頷く。そう、問題はこれからなのだ。

「なあ、遠也。いい加減どういふ状況なのか教えてくれよ。これ、本当に闇のゲームなのか？」

十代が訳のわからない状況に焦れてきたのか、再び問いかけてくる。ハネクリボーが十代の隣にいるが……まあ、ハネクリボーは言葉がしゃべれないからなあ。話せるなら、ハネクリボーが説明しているんだろうが……。

そして十代の横では、タイタンもまた俺のほうをじっと見ていた。何かしらの説明を求めているのは確かだ。さっきも指示をしていたのは俺だったしな。何か情報を持つてると思っただろう。

時間はあまりないだろうが……簡単に説明しておこう。

「簡単に言つとだ。まず闇のゲームは実在する。これは精霊であるマナが証人だから、間違いないぜ」

「マナが？　そうか、精霊ならそういうことも知ってる……のか？」

「さあな。けど、こいつは遊戯さんと多くのデュエルをしてきているんだ。その中には闇のゲームもあったらしい」

「げ、マジか。じゃあ、ホントにあったってことかよ」

『そう。闇のゲームはあるんだよ。お互いの命を賭けた危険なゲーム。その中ではね、ライフポイントが0になることは、死を意味するんだよ』

「な……」

さすがにはつきり死ぬと言われて、さすがの十代も言葉を失う。

十代にしてみれば、デュエルとは楽しいもので、楽しむためにやるものだ。だからこそ十代はデュエルが好きだし、カードのことも大切にしている。

そんなデュエルで、人が死ぬ。それは、十代にとってはかなり衝撃的な事実らしかった。

「まさか、実在したとはあ……っお、おい！ あれを見るお！」

さすがにこんな状況に陥っては信じざるを得ないのか、頷くタイタン。しかし、すぐさまその声は焦りのものに置き換わる。

そしてタイタンが指で示す先を俺たちは見る。そこは、さっきタイタンがデッキを投げた場所だ。

そこで、黒いスライムのような悪魔たちがタイタンのデッキに群がっている。すると、やがてそれらはくっついて一つになっていき、タイタンの背格好と全く同じ姿へと変貌していく。

そしてその上からデュエルコートを羽織り、佇む。明らかにデュエルをしようとしているその姿に、タイタンは唸り声を洩らした。

「私のデッキをお……おのれえ……」

その言葉が合図だったというわけでもないだろうが、その瞬間。タイタンの姿を模した黒いスライムは手札を1枚手に取り、十代の場には伏せカードが1枚現れる。

そう、デュエルの続きが始まったのだ。

「な、どういうことだ!？」

いきなりソリッドビジョンが復帰したことに、十代は困惑する。しかし、ハネクリボーが十代の目の前を飛び、落ち着かせようとすると、十代は徐々に落ち着きを取り戻す。

「そうか……デュエルの続きってことか」

十代は俯いてそう言う。

たった今これは闇のデュエルだと知ったばかりで、この勝負に命がかかっているというのは、十代には重荷なのかもしれない。楽し

いデュエル、というのを信条にデュエルをしてきた十代には。

だから、俺は十代に声をかけていた。

「十代。お前がデュエルしたくないなら、俺が引き継ぐ。本当なら闇のデュエルは始まったら決着がつくまで終われないが、デュエルの続きとはいえ闇のデュエルそのものはまだ始まってない。今なら俺に代わることも出来る筈だ」

『遠也……』

マナが心配そうな声を出す、この場合は仕方ないだろう。

このデュエルには命がかかっているのだ。それを、十代が嫌がるならやらせるわけにはいかない。

そして、十代がやりたくないなら俺がその代わりに務める。それは俺が十代の友人だからでもあるし、この場で十代以外にデッキを持っている唯一の人間だからでもある。

闇のデュエル自体は俺も初めてだが、話自体は聞いているし、その存在はずっと信じていた。事前知識もあることだし、十代よりは俺のほうが適任なはずだ。

だから、いざという時は俺が代わりになる。

俺がそう決断して十代に問うと、十代は伏せていた顔を上げた。

その表情は、恐怖ではない。不敵という言葉がふさわしい笑みだった。

「……へへ、遠也。気持ちは嬉しいけど、こいつは俺のデュエルだぜ！ 譲るわけにはいかないって！」

「けど、お前……こいつは本当に命を賭けるんだ。楽しいデュエルにはならないぞ」

俺が改めてその事実を突き付けるが、十代は表情を変えなかった。

「それでも、このデュエルにはお前やタイタンの命もかかっているんだろ？ だったら、俺は逃げないぜ！ それに……あっちも逃がすつもりはないみたいだしな」

十代が黒い人型をとったスライムに目を向ける。

そいつは明らかに十代しか見ていない。……俺が代われるかもと思ったが、やはり闇のデュエルということだろうか。どうにも交代は許してくれなさそうな雰囲気だった。

再び十代を見る。そこには、強い視線で俺を見る友達の姿があった。

俺も、まだ短い期間かもしれないが十代のことは把握している。溜め息をつく、十代の前に拳を突き出した。

「わかった。負けるなよ」

「おう！ 当然だぜ！」

十代もそれに拳を合わせ、あの偽タイタンに向き直る。

それを見届け、俺は後ろに下がった。必然、タイタンの横に立つことになる。

「いいのなあ、あれでえ。このデュエルには、我々の命がかかって  
いるのだろお」

タイタンがそう問ってくるが、俺は肩をすくめて応える。

「仕方ないだろ、十代がやるしかないんだから。それに、心配はい  
らないさ」

「んん？」

「十代は強い。見ていればわかるさ」

本当は心配だが、あえてそう言う。そう、十代は引きの強さはもちろんだが、単純にデュエルに強い。なら、ここは信頼して任せ



のが俺の役目だ。

いざという時には、マナにも協力してもらって何とかするぞ。

「その時は、よろしくなマナ」

『十代くんが勝ってくれるのが一番なんだけどね』

マナは苦笑して言うと、浮かんでいた身体を地面に下ろし、俺の隣に立った。どうやらそのまま観戦するつもりらしい。

タイタン、俺、マナの三人がそれぞれ十代を後ろから見つめる。

このデュエル、どうか勝ってくれと思いつながら。

「デュエルは俺のメインフェイズからだぜ！俺は《ホープ・オブ・ファイフス》を発動！墓地の「E・HERO」5体をデッキに加え、その後2枚ドロウする！俺はアブソルートZERO、プラズマ・ヴァイスマン、エッジマン、スパークマン、バブルマンをデッキに戻し、2枚ドロウ！」

ちなみにこのカード、十代は持っていたらしいが何故かデッキに入れていなかったカードである。しかし、俺の進言によりデッキに投入されたカードだ。

というのも以前十代とデッキ調整していた際に、なんと十代が融

合HEROを死者蘇生で復活させられると勘違いしていることが判明したのだ。

俺が融合でしか特殊召喚できない、と指摘してやると、十代はシヨックを受けた顔をしていた。

なんでも、万丈目と以前戦った際、十代は死者蘇生でフレイム・ウイングマンを蘇生して勝利宣言をしようとしたことがあったらしい。実際にやってたら発動しなかっただろうから、恥ずかしい思いをしていたことだろう。

そのため、十代は一度使った融合HEROを蘇生あるいは融合デッキに戻す方法を探し始めた。その時、俺が十代の持っていたカードの中からこのカードを勧めたのだ。

戻した上にドローできるこのカードは十代には相性がいい。それに、そもそもE・HERO専用カードだし。

十代は何で入れていなかったんだろう。ミラクル・フュージョンと相性が悪いからだろうか。それとも、これよりも入れたいカードがあったのかもしれない。

まあ、それについては今はいい。しかし、この局面でドロー補強カードを引くとは、やっぱり凄いな十代は。

「俺はバブルマンを召喚！俺の場に他のカードが存在しないため、バブルマンの効果で2枚ドロー！」

おいおい、戻したカードを今引いたのか？ 凄いな、さすが十代。そして、さすが強欲なバブルマン。ここにきて、十代の手札が潤っていく。

「よし、俺は《融合回収》フュージョン・リカバリーを発動！ 墓地の融合とエアーマンを手札に加え、そのままフィールドのバブルマンと融合！ 再び現れる、E・HERO アブソルトZERO！」

バブルマンとエアーマンが飛び立ち、徐々に一つの姿へとその姿を変えていく。

それはやがて氷の粒子を伴ってアブソルトZEROの形をとる。白銀に輝く極寒のHEROが再度十代のフィールドに降り立った。

《E・HERO アブソルトZERO》 ATK/2500 D  
EF/2000

「いくぜ！ アブソルトZEROで直接攻撃！ダイレクトアタック 《瞬間氷結・Freezing at moment》！」  
「……………」

偽タイタン LP:3500 1000

「俺はこれでターンエンドだ！」

ライフポイントが大きく削られるが、偽タイタンに反応はない。それが一層不気味だが、デュエルをする気はあるようで、自分のターンになった瞬間、デッキからカードをドローした。

そして偽タイタンは手札から、インフェルノクインデーモンを召喚する。アブソルートZEROに敵わないのはわかっているのだから。守備表示だった。

《インフェルノクインデーモン》     ATK/900     DEF/1200

そして更にカードを1枚伏せたところで、ターンを終了したようだ。言葉を発さないから、俺たちにはわからない。だが、デュエルディスクにはしっかりターンの移行などが表示されているらしく、十代は問題なくデュエルを行える。

「ドロー！ 俺は《強欲な壺》を発動するぜ！ 2枚ドロー！」

ここで更にドローか。さっきからどれだけドローしてるんだ、いったい。

そして、十代はすぐに次の行動に移らず逡巡を見せる。恐らく、偽タイタンの場に伏せてあるカードが気になっているのだろう。ド

ローしたカードの中に、除去カードがなかったようだ。

悩んだ十代は、手札から3枚のカードを手にとった。

「俺はカードを2枚伏せ、《E・HERO フェザーマン》を守備表示で召喚。更に伏せていた永続魔法《悪夢の屋気楼》を発動するぜ！ ターンエンドだ！」

《E・HERO フェザーマン》 ATK/1000 DEF/1000

攻撃はしない、か。ここは慎重になってもすぎるといふことはない。その選択も、悪くはない。

しかも伏せてたのは悪夢の屋気楼かよ。となれば、もう一枚の伏せカードも予想できるな。

「……………」

偽タイタンがカードを引く。

そしてその瞬間、十代が声を上げた。

「ちょっと待った！ そのスタンバイフェイズに悪夢の屋気楼の効

果で俺は4枚ドロするぜ！ 更にもう1枚の伏せカードは、速攻魔法《非常食》だ！ 悪夢の蜃気楼を墓地に送り、ライフを1000回復する！」

十代 LP：800 1800

きたな、凶悪コンボ。このコンボが発覚してから、速攻で制限、禁止となった永続魔法だ。ドロには緩いこの世界では、まだ現役なのか。

おそらく、十代はこのカードを伏せていたからあえて無理に攻撃しなかったのだろう。確かに、ここで除去カードを引ければ、それが最善だ。本当に引けるかは別にして。

しかし、それを受けても偽タイタンには何の変化もない。そして偽タイタンは手札から《強欲な壺》を発動して2枚のドロ。その後、インフェルノクインデーモンを生贄に捧げ、《迅雷の魔王・スカル・デーモン》を召喚した。

《迅雷の魔王・スカル・デーモン》 ATK/2500 DEF/  
1200

そして、そのままターンを終了する。

手札にいいカードが来なかったのだろうか。あるいは単純に人間のようなタクティクスを行うだけの脳みそがないのか……。

いずれにせよ、そのほうが十代にとって有利であることは間違いない。そうであるとするなら、十代の勝機が広がるのだから願ったり叶ったりだ。

「俺のターン、ドロー！」

そしてカードを引いた瞬間、十代は笑みを浮かべた。

「いくぜ！ 俺はまず速攻魔法、《サイクロン》を発動！ その伏せカードを破壊する！」

お、きたのか除去カードが。

サイクロンによって伏せられていたカードが明らかになり、次いで墓地に送られる。伏せていたのはミラフォか。危ないもん伏せてるな。攻撃していなくて良かった。

「更に《死者転生》を発動！ 手札を1枚墓地に送り、俺は墓地のバブルマンを手札に加え、そのまま召喚する！」

《E・HERO バブルマン》 ATK/800 DEF/1200

「そしてアブソルートZEROの効果発動！ 自分フィールド上に存在する自分以外の水属性モンスターの数×500ポイントこの力ドの攻撃力はアップする！」

《E・HERO アブソルートZERO》 ATK/2500 3000

バブルマンの発する水がアブソルートZEROに降りかかり、それはアブソルートZEROの氷の身体を更に鋭利なものへと変化させていく。

そして十代は勢いよく宣言した。

「バトル！ アブソルートZEROでスカル・デーモンに攻撃！  
《瞬間氷結・Freezing at moment》！」

ZEROの絶対零度の攻撃によって、デーモンの召喚は一瞬で凍りついて砕け散る。

そしてその差分のライフが偽タイタンから引かれた。

偽タイタン LP:1000 500

「これで最後だ！ バブルマンで直接攻撃！  
ダイレクトアタック 《バブル・シュート



》！  
「

バブルマンが腕に着いた銃を構え、そこから放たれた泡を含んだ水流が偽タイタンに直撃する。

そして、その攻撃で偽タイタンはライフポイントがゼロになり、このデュエルは十代の勝利で決着となった。

「……………」

偽タイタン   LP：5000

ライフがゼロになったのだが、偽タイタンに動きはない。ただ流動する黒い身体をタイタンの形のまま保っているだけだ。

…俺たちはその様子を勝利に喜ぶことなく、注意して見ていたが…変化がない。

どういうことだ？ 闇のデュエルで十代が勝った以上、あちらは何か罰ゲームというか、ペナルティを受けるはず。いくらなんでも、何も起こらないのはおかしい。

俺がそう考えていた、その瞬間。

突然偽タイタンの身体がはじけ飛び、黒い細かな弾丸となって周囲に散らばる。さながら散弾銃のようなそれは、こちらにまで飛ん

で来ていた。

「マナ！」

『うん！』

俺が呼びかけ、しかしそれよりも早く行動に移していたマナは、その魔力で俺たちを包むバリアーを張る。飛んできた黒い欠片は、その全てが障壁に阻まれて俺たちには届かなかった。

そうして、残ったのはタイタンのコート型デュエルディスクとデ  
ツキだけ。

さっきまで十代とデュエルをしていた黒い異形の姿は既にどこに  
も存在していなかった。

「……………ぬう、終わった……………のかぁ？」

タイタンが警戒したまま声に出す。

俺はマナに確認をとるが、マナはもう先程までのような力は感じ  
られなくなったと言う。ということとはつまり、終わったということ  
でいいのだろう。

それを悟り、俺もようやく肩から力を抜いた。

「……みたいだな。サンキュー、十代。いいデュエルだったぜ」

「へへ、まあな。でも、遠也がいてくれて助かったぜ」

俺たちはハイタッチを交わし、互いに笑みを浮かべる。

闇のデュエルを乗り切れて、本当に良かった。十代もタイタンも無事なんだ。誰かが怪我を負うこともなかったのだから、上出来だろう。

『クリ〜』

その時、不意にハネクリボーが俺たちの後ろを指さした。

俺たちがその示された先を見ると、そこには光があった。闇色の空間に走った一筋の亀裂、そこから差し込む外の光だ。

人間一人が通れるほどの大きさのそれは、よくよく見ればさつきまでいた洞窟のような室内を映し出している。

つまり、あれは出口ということだろう。俺と同じ結論に至ったのか、十代とタイタンもホッとした顔をしていた。

「さっさと帰るに限るな。こんなとこ、もう二度と来たくないね」

「だな。行こうぜ！」

俺と十代が走り出し、タイタンは残されていたコートとデッキを素早く回収すると、俺たちの後をついてくる。

ここから亀裂までの距離はそう遠くない。俺たちはすぐにその亀裂の元までたどり着き、それぞれ順番に勢いよく飛びこんでいった。

「おっ？」

「うえ？」

「ぬあっ」

『あー……』

上から順に、俺、十代、タイタン、マナである。

説明をするとするならば、出てきたところが空中であったため、となるだろうか。

まさかいきなり空中に放り出されるとは思っていなかった俺たちは揃って変な声を出し、そんな俺たちを見たマナはこの後に起こる事態を想定して、あんな声を出したのだろう。

そしてその想定に沿うように、俺たちは重力の働くまま地面に落下した。

「いってえー！」

「おっと」

「ぐぬああっ！」

背中から落ちた俺。上手く体勢を整えて立った十代。頭からいったタイタン。

大した高さじゃなかったから良かったものの、これがもう少し高かったら危なかったかもしれない。

特にタイタンが。頭からいくとか、死因が変わるだけになるところだった。原作で死んだかどうかは知らないけど。

俺は自分たちが今までいたソレを見る。外から見たら、闇色なのは同じだが球形になっていたのか。こんな気味の悪いところ、出来ればもう来たくないものだ。

「アニキ！ 遠也くん！」

「二人とも、大丈夫なんだな！」

そして、出てきた俺たちを見つけた翔と隼人がこちらに走り寄って来る。

それに俺たちが手を上げて応えたところで、全員があることに気がついた。

というのも、この闇色の球体。いきなりバチバチと紫電を纏って危なげな雰囲気を醸し始めたのだ。

今にも爆発でもしそうなソイツに対し、俺たちの行動は早かった。

隼人が「伏せるんだな！」の言葉と共に翔をひつつかんで床に伏せ、十代も同じく地面に伏せ、俺も伏せると同時に片膝をついていたタイタンを無理やり下に押しつけてやり過ぎを図る。

そして、次の瞬間。

球体は凄い勢いで収縮を始め、それに併せてダイソンもびっくりな吸引力を発揮して俺たちを吸いこもうとしてきたのだ。

爆発ではなかったが、床に伏せていたのが幸いした。あらかじめ備えていたため、どうにか耐えることが出来たのだ。

途中、明日香の入った棺桶が動くというヒヤリとした場面もあったが、そこは一番近くにいた十代がしつかり押さえてくれた。

その後、球体は点のような小ささになるまで収縮した後、消滅する。そして、その場には静寂だけが残されることになった。

俺たちは脅威がなくなったことを注意深く確認する。そして何もないと確信したところで、ゆっくりと立ち上がって合流を果たした。

そして、翔と隼人は俺たちと共にいるタイタンを見て、叫び声を上げるのだった。

「あー！ インチキ闇のデュエリスト！」

「なんで、お前も一緒にいるんだな！？」

「ぬう……」

二人の当然の指摘に、タイタンは唸るしかなかった。

中で何があつたかを知らない二人には、いきなり十代と一緒にいるタイタンは不思議でしようがないだろう。

それでなくとも、さっきまで散々脅しをかけてきた相手なのだ。印象も当然良くない二人は、タイタンを警戒して睨みつける。

しかし、そんな二人に対して十代の態度はあっけらかんとしたものであった。

「いいじゃねーか、別に。このおっちゃん、そう悪い奴でもないと思っぜ」

「ええ！？ 何言ってるの、アニキ！？」

「どうしちゃったんだな、十代！？」

さつきまで敵意むき出しで相對していた十代のまさかの発言に、翔と隼人は動揺を隠せないようだった。

まあ、いきなり明日香と俺を拘束した揚句、どう見ても悪役なこ  
とばかりしているのだ。っていうか、拘束は普通に犯罪です。

二人には、十代がそう言う根拠が全く分からなかったのだろう。

しかし、十代はそんな二人から視線をタイタンに移して、問いか  
ける。

「明日香に危害は加えてないんだろ？」

「あ、ああ。眠らせたただけだあ」

そして俺は手足を縛られただけ、と言えばそれだけである。十代  
は続けて俺に視線を向けたので、気にしていないという意味を込め  
て苦笑する。

それを見てから、十代は再度二人に向き直った。

「明日香には悪いけどさ、俺はこのおっちゃんのこと嫌いになれな  
いぜ。だって、カードを大切にするデュエリストに、悪い奴はいな  
いもんな」

「な……」



十代の言葉に、この中で最も驚いたのは他でもないタイタンだった。

言葉をなくし、明るく笑う十代を見ている。

きっと翔と隼人には何の事だかわからないだろう。しかし、俺たちはあの闇の中で見ていたのだ。命が危ないという時にも関わらず、タイタンが己のカードを犠牲にすることに躊躇し、投げる時も「すまん」と謝っていたのを。

そして自らのデッキを勝手に使われることに怒り、あの場から出る際にはまずデッキを回収してから出口に向かった。一刻も早く出たかったに違いないのに、だ。

その姿を俺たちは知っている。そのせいか、十代と俺はどうにもタイタンを憎みきることが出来なくなっていたのだった。

だから、俺はそう言った十代の肩を叩き、同じように笑みを浮かべた。

「俺も同じだ。ただ縛られただけだし、目くじら立てるほどでもないさー」

「普通は立てるよー」

翔が鋭く突っ込みを入れる。

まあ、普通は怒るだろうね。俺だってそう思う。

けど、まあいいじゃない。当事者の俺や、狙われてた十代が許すって言うてるんだから。明日香には……なんとか誤魔化そう。ダメだった時は説得する方向で。

俺と十代は二人がかりで納得いつていない二人をなだめ、そして改めてタイタンに向き直った。

「つーわけで、タイタン。アンタにも事情があるんだろうし、何も聞かないから、このまま帰ってくれない？ この場は目を瞑るからさ」

「……貴様はあ、それでいいのかあ」

とっ捕まって縛られた件だろうか。それについては気にしていないので何も問題はありませんよ。暴力振るわれてたら、さすがに許さなかったと思うけど。

「いいよ別に、それぐらいなら。気にしないでいいって」

それに、マナの手を借りればいつでも抜け出せたし、そもそも捕まることもなかっただろうし。仮に危害を加えようとしたなら、マナにボコってもらおう予定だったしね。他力本願万歳！

俺が内心でそんなことを考えている間、タイタンは押し黙ってその場に立ったままだった。何か他に用でもあるんだろうか。出来るなら、このまま帰ってほしいんだけど。

訝しんでいると、突然タイタンが口を開いた。

「……名はあ、なんという？」

「……俺？」

突然の質問に、一応自らを指さして問うと、タイタンは頷いた。

「皆本遠也だけど」

名前ぐらい隠すこともないので、普通に話す。

すると、タイタンは「そうか」と頷いた。なんなんだ。

「遊城十代、皆本遠也あ」

「なんだ？」

俺たち二人の名前を呼び、タイタンは更に言葉を続けた。

「お前たちにはあ、借りが出来たあ。私は闇のデュエルから足を洗い、ただのデュエリストに戻ることにしよう」

そこまで言うと、タイタンは手に持っていたコートを再び羽織り、俺たちに背を向けた。

「……………助けてもらったことに、感謝するう。そして、その少女にも謝っておいてくれえ。この借りはあ、いずれ必ずお前たちに返すと誓おう……………さらばだあ」

言いたいことを言いきったのか、そのままタイタンはこちらを振り返ることなく立ち去っていく。

その黒い背中を見つめ、十代と俺は同じ危機を体験したせいだろうか、タイタンに奇妙な連帯感を感じていた。隣の十代と顔を合わせ、互いに同じく小さく笑う。

あばよ、タイタン。次に会う時のお前とのデュエル、楽しみにしているぜ。

そんな思いを胸に抱き、俺たちは去っていくタイタンの背中を、ただ見つめ続けるのだった……………。

「……………訳がわからないよ」

「……まるで意味がわからないんだな」

そして、そんな俺たちを翔と隼人は胡乱気な目で見つめるのだった。

その後、俺たちも廃寮を出たが、そのまま寮には帰らず、いったん森の中で腰を落ち着ける。

理由は簡単。明日香がまだ目を覚ましていないからだ。

明日香を十代と俺の二人がかりで運んできたはいいが、どうにも目を覚まさないので帰るに帰れないのだ。

このまま寮に届けでもしたら、俺たちにあらぬ疑いが掛けられること必至である。それは勘弁願いたかった。

ちなみに二人がかりで運んだのは、単純に重かったからだ。起きているならともかく、意識のない同年代の人間を一人で抱えるのは、相当にキツイ。

いくら体重の軽い女性といえど、これは人間共通のことなので関係ない。意識のない人間の身体は、驚くほどに重いのである。おかげで、少し腕が痛かった。

そんなわけで、俺たちは明日香が目覚めるのを待っているところなのである。

幸い四人もいるので、話していれば時間なんてそう気にならない。

とりあえず駄弁つて時間を潰していた俺たちだったが……流石にそろそろ帰りたいたいと思えてくる。

と、そんな時。ようやくというべきか、明日香の目がゆっくりと開いた。お目覚めのようである。

「……………」

眩きをこぼす明日香。その顔を覗き込むように、十代が近付く。

「おっ、起きたか。お前を襲った奴なら、追っ払っておいませ」

正確には自発的に帰っていったのだが、明日香はずっと意識を失っており諸々の事情を知らない。

下手に説明して話をこじらせるより、単純に解決したということだけ伝えてしまおう。それが俺たちで出した結論だった。

明日香はさして疑問に思うこともなく、その答えを受け入れる。

そして十代は懐にしまってあった例のブツを明日香の前に差し出した。

「っこれ！間違いない、兄さんの写真！」

目を見開き、それを手に取った明日香は、驚きの表情で十代を見る。その視線を受け、十代はあの廃寮の中で見つけたんだと説明をした。

やはり明日香のお兄さんはあの廃寮でいなくなったのかもしい。こんな写真があること自体怪しいことではあるが、それでもこの写真が少しでも慰めになればいいと思う。

それにしても……。

「随分、変わったお兄さんだったんだな。サインが特徴的すぎるぞ」

俺が思わずそう突っ込むと、明日香は笑顔を見せた。

「兄さんのクセだったのよ。天上院をふざけて10JOINって書くのはね」

写真に書かれた「FUBUKI 10JOIN」の文字。これがクセとは、本当に変わった人だったようだ。

けど、明日香の笑顔や一人でこんな所まで来る姿を見れば、お兄さんを大切に思っていることは十分に伝わってくる。

敵なんかやってないで、早く戻ってきてほしいもんだ。慕ってくれる妹を、安心させてやってほしいね。せっかくの家族なんだから。

「げ、もう夜が明けるぜ」

ふと、十代が空を見上げて声を上げる。

つられるように見てみれば、確かに太陽の光が夜空の闇を侵食しているのが見えた。



……これは、さすがに寮に戻らないとマズイよな。

「早く帰るぞ、翔、隼人！ おっと、遠也、明日香！ またなー！」

言うが早いか既に駆け出していた十代に、翔と隼人が遅れまいと慌てて走り出す。

待つてよー、という翔の声を最後に三人の姿はすぐに木々に隠れて見えなくなった。

そんな姿を見送り、明日香がふいに呟く。

「……お節介な奴」

それに、俺は肩をすくめて口を開いた。

「でも、悪くないだろ？」

すると、明日香は既に浮かべていた笑みを一層深くした。

「……ええ」

そのまま十代たちが去った方向を見つめる明日香に苦笑しつつ、  
俺は明日香に再び声をかける。

俺たちも帰らないと怒られるぞ、と笑いながら。

## 第8話 廃寮（後書き）

十代のカードについてはごめんなさい。

漫画版のGXが好きなだけなんです。

あと、実際にデッキとは別に皆さんそれぞれ好きなカードとか持っていますか？ 遠也は自分が持っているカード全てとこの世界にやってきたので、そういうカードも入っていたということですか、どうか、お許しただけだと思います。

そして、書いていたらなんだかタイタンがいい奴みたいになっただけです。

## 第9話 怒り（前書き）

制裁デュエルです。

なのに、なぜか全く違うデュエルの話になってました。

とりあえず、今日はお休みだったので一気に書き上げました。

そして気づけばPVが12万を超えていました。

この場を借りてお礼申し上げます。

皆さん、読んでくださってありがとうございます！

## 第9話 怒り

「は？ 退学？」

「ええ」

廃寮から帰り、幾許かの睡眠をとった数時間後の朝。

わざわざ俺を訪ねて男子寮にまで来た明日香の口から放たれた衝撃的な言葉に、俺は目を丸くするしかなかった。

思わず問い返してしまっただが、明日香は頷くだけである。

それはつまり、今の言葉が真実だということだ。

「廃寮に入ったのって、そんなにマズいことだったのか？」

「そうよ。だから言ったでしょう、やめておきなさいって」

明日香は、それなのに話を聞かないんだから、と続けるが……その表情はいかにも納得いつていないものであり、十代たちを心配しているものだった。

さすが素直になれない明日香。本当はこの決定に異を唱えたいと丸わかりだ。

そして、俺も当然ながら納得いかない。そもそも同じく廃寮に入った俺と明日香、そして隼人には何も無いというのが、あまりにも公平性を欠いていると思う。

よって、これからやることは決まっている。俺は表情を正すと、明日香に言った。

「じゃ、行こうか」

「行くなって……どこに？」

突然のことに、明日香が驚きを声に含ませながら聞いてくる。

どこに、ってこの状況じゃひとつでしょ。

「とーぜん、校長室だ」

もともと、明日香もそのつもりだったんだろうに。

そう返せば、明日香はそっぽを向いて僅かに頬を赤くした。

やっぱりな。俺が思い至ったのと同じく、校長に直訴しに行くつ

もりだったのだろう。明日香は真面目だし、こういうことに妥協できないだろうことは短い付き合いでもよくわかる。

制裁タッグデュエル……だったか。迷宮兄弟が相手だった、という記憶がある。それについては大丈夫だろうとは思うが、それとこれとは話は別。何故俺たちには何もないので納得できない。

その気持ちは俺も同じだ。

そういうわけで、俺たちは一緒に校長室に向かう。アカデミアの本校舎。そこにある校長室の前に立つと、なにか話し声が聞こえてくる。外まで届くとは、それなりに大きな声を出しているとわかる。

この声は……隼人か。その内容を僅かながらも拾った俺たちは、頷き合って校長室に入った。

「校長、その時廃寮にいたのは十代に翔、隼人だけじゃないんです」

「私たちも現場にいました」

俺たちがそれぞれ口にしながら入室すると、隼人と鮫島校長が話をやめてこちらを見る。

その間に隼人の隣まで行き、校長の正面に立つ。そして、俺がまず口を開く。

「なのに、俺たちだけ何もないうのが納得いきません。公平

にするなら、俺たちにも制裁タッグデュエルというものを課すべきじゃないですか？」

「私も、同じ考えです。十代たちだけというのは、あまりにも不公平です」

俺たちがそう訴えると、校長は難しそうに唸る。

そして、そこに隼人の声も加わる。

「……俺、今まで自分が駄目な奴だって思ってました。でも、十代会って、翔に会って、遠也に会って……。色々な人と会って、みんなのデュエルを見て、思ったんです。もっと、デュエルにしっかり取り組みたいって！」

その言葉に、明日香が微かに表情を崩した。

「私も、彼らと交流してもっとデュエルを楽しみたいと思いました。十代、それに遠也。あなたたちといると、みんな変わっていくみたい。こっぴつこっぴつにね」

「……俺も？」

十代なら俺も同意見だが、なぜ俺まで。



「あなたは、思っている以上に影響しているわ。十代、前田君、翔君、ジュンコ、ももえ、亮も。あなたに影響されたところは少なくともいはずよ」

「そうなんだな。俺は、遠也のおかげで自分の夢が持てそうなんだな」

そう、なのだろうか。確かに、ジュンコやももえはブルー特有の嫌みったらしいところはなくなっているが、それは俺たち全員と友達になったからだろう。

カイザーについては……何かあっただろうか。確かに寮内でつるむことは多くなったけど……。

疑問ではあるが、今はその答えを出すのは後にしよう。

「……二人はこう言ってくれますが、俺も十代に影響を受けた一人です。あいつのデュエルは人を明るくさせる。それに、一緒にいると楽しい奴です。それは翔も一緒です。だから、俺たちにも何か罰を。もしくは、あいつらの罰を軽くしてやれないでしょうか」

俺は言いたいことを言った。二人も、追随するように頷いて校長を見据える。

俺たち三人の眼差しを受けた校長は、少しだけ笑みを見せるが、すぐに表情を厳しくさせる。

「……君たちの気持ちは、よくわかった。私としても、そうまで言ってくれる友人を持つ彼らを助けたい気持ちはある。……だが、これは倫理委員会で決まったことなのだ。私では、もうどうにも出来んのだよ」

そう言つと、校長は机に肘をつき両手を顔の前で組んで押し黙った。

校長がそう言つたということは、そうなのだろう。もうこの時点で俺たちは無罪放免。十代と翔は制裁デュエルというのは決まりということだ。

俺たちが納得いかないかどうかは関係ない。そういうものと割り切るしかないのだ。

俺たちは黙ってしまった校長に頭を下げ、校長室を後にするのだった。

そして、その後俺たちはレッド寮に出向く。

これから制裁デュエルを受けるとなった十代と翔はどうしているのか。それが気になったからだ。

隼人が自室の扉を開き、俺と明日香が続いて顔を出す。

打たれ弱い翔が落ち込んでいないかと気を揉みつつ中を覗くと、そこには十代と翔が二人でカードを大量に床に広げて、あーでもないこーでもないと言い合っている姿があった。

「やっぱりアニキとは種族じゃシナジーしないから、無理に合わせられないね」

「だな。それより、お互いにガツと攻めていったほうがよさそうだし」

「合わせられるところだけ合わせるってことっすか？」

「そう、それだ！ 無理して合わせて、お互いのいいトコ潰したら意味ないもんな！」

じゃあ、そういう方向で……、と翔と十代は順調にタッグデュエルに向けて準備を整えているようだった。

俺たちが心配していた翔も、前向きに十代とデツキの調整について話し合っている。どう見ても落ち込んでなんかいない。

もちろんそれはいいことなんだが、こういう時は大抵テンションが下がっていたイメージがあるから、不思議に感じてしまう。

だからだろうか。俺たち三人は少々呆けてしまっていたらしい。その間に、翔が俺たちの存在に気がつき、こちらに顔を向けた。

「あ、隼人くんも遠也くん、明日香さんも。どうしたんすか、そんなところに突っ立って」

「ん？ なんだ、ドアも閉めないで。入って来いよ」

翔の声で十代も俺たちに気づいたのだろう。ひょいひょいと手招きをしてくる。

俺たちも好きで玄関先に立っているわけではないので、そのお誘いに乗って部屋に上がり込む。

そうして床に広げられていたカードを見ると、そこには十代のHEROのカードと、翔のビークロイドカードがある。他にも魔法カードや罠カード……どうやら、持っているカードをひっくり返して検討しているようだった。

「早速やってるな。タッグデュエル用の調整か？」

「おう！ けど、結局俺たちのデッキのままでいこうって決まったけどな」

「僕とアニキのデッキじゃ、色々違いすぎるからね」

翔が苦笑して十代の言葉に続ける。

確かに、十代のHEROと翔のビークロイドでは、種族も属性もかぶらないことが多い。

共に融合を主体にしていることは共通しているが、そもそもお互いに専用サポートカードを多用するデッキ構成だ。共存は難しいだろう。

そう考えると、二人が出した結論は間違っていない。

無理に合わせてダメになる、というのはタッグデュエルでは本当によくあることだからだ。

俺が二人の言葉に頷いていると、明日香が笑みを浮かべて翔を見

た。

「ごめんなさい、翔君。私、てっきりあなたが落ち込んでいるんじゃないかと思っていましたわ。こうして立ち向かおうとしているのにな」

「俺もなんだな。翔がやる気なのに、余計な事をしちゃったんだな」

二人の言葉に、翔はキョトンとする。そして、俺に「どういふこと？」と聞いてきた。

俺は翔にさつきまでのいきさつを説明する。

俺たちが校長に直談判に行ったこと。それは俺たちだけ無罪なのに納得いかないというのも理由だったが、こういう場面に弱い翔が心配だったから、というのもあったこと。

俺たちは最初から翔がプレッシャーで落ち込んでるんじゃないかと思っていた。そのことを、謝っているのだと。

それを聞き終えた翔は、あはは、と乾いた笑いをこぼした。

「それは仕方ないっすよ、僕はいつもそうだったから。……それに、今も怖くないわけじゃないんだ。僕がアニキの足を引っ張らないか、不安でしようがないよ」

翔は顔を伏せる。しかし、すぐにその顔を上げる。

その表情には、どこか力強さを感じさせるものがあつた。

「けど、遠也くんとお兄さんのデュエルで知つたんだ。僕は、ずっと怯えて逃げていただけだつたんだつて。自分の身を守ることだけ考えて、何も考えずに逃げてたんだつて。……だから、今回のデュエルはそんな自分と決別するチャンスだつて思つたんだ」

翔はぐつと拳を握る。

その姿を、十代が頼もしそうに見ていた。

「だから、僕は自分の持てる力を全部使つて、挑戦するつて決めたんだ！ お兄さんの言葉に応えるためにも、頑張つてみせる。アニキと一緒に、逃げずに戦うよ！」

「よっしゃ！ よく言つたぜ、それでこそ俺の弟分。俺のパートナーだ！」

十代がバシツと膝を叩いて、立ち上がる。広げていたデッキを揃え、それをデュエルディスクにセットすると、翔の肩を掴む。

「お互いのカードはこれで把握したぜ。次はデュエルだ！ 実際に戦つて、戦術なんかも確かめないと！」

ついていい、翔！ そう言いながら、十代はさっさと部屋を出ていく。

それを目で追って、しばし。翔も急いで散らばっていたカードをまとめてデッキを手に取ると、デュエルディスクをひつつかんで部屋を出ていった。

待ってよ、アニキー！ という叫びを響かせながらの騒がしい外出である。

そして部屋に残ったのは、俺、明日香、隼人の三人だけだ。

俺たちは出ていった二人を見送り、次いで互いに顔を見合わせる  
と、誰からともなくふつと笑みを漏らした。

「……やれやれ。いらない心配だったか」

「ふふ、そうみたいね」

「翔も、成長してるんだな」

三人それぞれ、翔の決意を聞いて自分たちの心配が的外れだった  
と思いきる。

翔は確かに、気弱で何かあればすぐに落ち込む奴だった。けど、  
ふとした切っ掛けで今のように頼りになる姿を見せるほどになった。



もつと、俺たちは翔の強さを信じてやるべきだったのかもしれないな。

「これも、あなたの影響かもね」

「ん？」

明日香が、笑いながら俺に言う。

「だって、あなたが亮と戦ったから今の翔君があるわけでしょう？  
ほら、しっかり影響しているじゃない」

「確かにそうなんだな」

「む……」

言われてみれば、そうかもしれない。

あの時俺がカイザーとデュエルしていなければ、翔は変わらない  
ままだったかもしれないのだ。だとすれば、俺がいたから、という  
のもあながち間違いじゃないのだろうか。

もし俺が翔のいい変化に対して力になっていたなら、俺としても  
嬉しいことだ。

「そうだと、いいな。……それより二人とも。あの二人のデュエル、もちろん見に行くだろ？」

「もちろん」

「だな」

頷く二人に、俺も頷きを返す。

そして、俺たちは部屋を出ていった二人の後を追って外に出ていく。

どうやら、タッグデュエルは心配しなくてもよさそうだ。二人の様子を見るに、そう思う。そんな信頼にも似た安堵感を感じながら、俺たちは二人のデュエルを見届けに向かうのだった。

まで。

十代と翔が制裁デュエルを受けることが決まり、数日が過ぎた。

なんでもクロノス先生がわざわざ二人の相手をするデュエリストを用意すると言っているらしく、その相手の到着を待つために数日の時間がかかるということらしかった。

そして今日、いよいよその当日である。

この数日の間、隼人のお父さんが突然訪ねてきたりといったことはあったが、十代と翔のコンディションに問題はないと言えるだろう。

まさに万全の態勢という奴だ。確か相手は迷宮兄弟だったと思うから、向こうはゲート・ガーディアンを使うデッキだろう。

確かに高攻撃力のモンスターだが、あの二人なら絶対に勝つ。あとはそれを信じて俺たちは見守るだけである。

ちなみに、隼人のお父さんはどうも留年している隼人を連れ戻しに来たらしいのだが、隼人の「大事な話があるんだな」の言葉と共に二人で話し合った結果、何もせずに帰っていった。

理由は簡単。隼人の言葉に思うことがあり、その言葉を尊重することにしたからだそうだ。

隼人はただひたすら真剣に、自分には「カードデザイナーになるという夢ができた」とお父さんに話したただけだった。

ずっと、何を言われても、ただ一心にそのことを訴えた。俺のカードを見て、自分もこんなカードを作ってみたいと思ったこと。ああいうカードがあったら楽しそうだ、と考えるのが何より好きであること。

俺たちに出会って、自分が何を得たのか。どんなに睨まれようと、隼人は決して後ろには退かなかつたのだ。

その姿に、お父さんもついに隼人の決意を認めたらしく。ただ、やり遂げて見せる、とだけ言い残して帰っていったのである。

俺たちは隼人の言葉に感動していた。俺たちの存在を、そんなに大切に思ってくれていたとは……。

これにより、俺たちの仲は一層深まった。そして、十代と翔は何が何でも退学にはならないと決意を新たにしたのだ。

ここまで隼人が意思を固めてこの学園に残ってくれたのだ。それに応えなきゃ男が廃る、というのが十代の主張だ。

ここにきて、モチベーションは最高潮にあるといえるだろう。

だからこそ、俺は大丈夫だと確信しているのだ。そして、その確信を現実にするためにも、今日は精いっぱい応援しよう。

俺はそんなことを考えながら、校舎の廊下を歩く。

すると、不意に前方から大きな声が聞こえてきた。

「クロノス教諭！ 十代たちの相手を俺にやらせてください！」

この声は……万丈目か？

そして相対しているのはクロノス先生だろう。俺は万丈目の後ろに何歩か下がった距離から、壁に隠れるようにして様子を窺う。

『うわぁ、相変わらず凄い化粧』

こら、マナ。言ってやるんじゃない。あれきつと本人はオシヤレだと思ってるから。

「今度こそ、この手で奴を叩き潰してみせます！」

そういや、万丈目は十代に執着しているんだっただな。その後は仲間になっていたはずだが、なんで最初は嫌ってたんだっけ。確かに月一試験では負けてたけどさ。

「その必要はありませんーノ！ 既に強力な相手を用意してあるノーネ」

しかしクロノス先生はその要求をきつぱり断る。まあ、わざわざ呼んだんだし、言っちゃあなんだがたかが生徒一人の意見を通すわけもないよな、普通。

「それヨーリ、君は自分の心配をしたほうがいいでスーノ。このままだと、ライイエローに降格することもあり得まスーノ」

最後にそう言うと、クロノス先生は去っていった。

きつつい一言を残していくなあ。ブルーの生徒にとって降格するのは、相当に屈辱的だろう。事実、万丈目は後ろから見てもわかるほどに肩を震わせている。

まあ、なんとか頑張って成績を上げるしかないんだから、俺に出

来ることは何もないわけだが。そもそも、あんまり話したこともないし。

それより、俺もあっちに用があるんだからさっさと行こう。

俺は物陰から何食わぬ顔で歩き出し、万丈目の横を通る。

その時、俺はちらりと万丈目を見た。なんとなく気になったからで特に意味はなかった。

すると、偶然なのか何なのか。万丈目もちょうど顔を上げたところで、目が合ってしまった。

しかも睨んでくるし。感じ悪いぞ、それ。

「お前は……皆本遠也かつ」

「いかにも。何か用か、万丈目」

無駄に胸を張って言うが、万丈目がそれについて突っ込むことはなかった。

「さん、だ！俺のほうがブルーの先輩なんだ、きちんとさんをつける！」

「いや、同級生だろ」

なぜにさん付け強要。名字を呼び捨てるくらいいいじゃん、同性なんだし。

しかし、そんな俺の答えはお気に召さなかったらしい。万丈目はちつと舌打ちした。明らかにカルシウムが足りてないな。典型的なブルー生徒だ。

『なんか、嫌な人だね』

マナの印象もだいぶ悪くなったようだ。まあ、初対面でいきなりこれだからな。良く思っわけもない。

「ふん、そういえばお前は、たしか遊城十代やレッド生とよくつるんでいるんだっとな」

「……まあ、そうだけど」

肯定を返せば、万丈目は明らかに嘲りを込めて鼻で笑う。

こいつ、何が言いたいんだ？

「ふん、誇り高きブルーがレッドのクズなんかとつるむとは……所詮成り上がりか。なぜ貴様のような奴に新カードを渡したのか、ペガサス会長の気が知れないな」



「……………」

『うわ…………』

「ふん、まあいい。どうせ遊城十代は今日でこの学園を去るんだ。貴様も大人しくテスターを辞退して行って行ったらどうだ。クズはクズらしく」

「おい」

万丈目が、俺が突然上げた声に言葉を止めた。

「デュエル、しろよ」

「なに？」

疑問の声が聞こえるが、俺はそんな答えは聞いていなかった。

「聞こえなかったか？ デュエルしろって言ってんだ。大人しく聞いてりゃピーチクパーチクうるせえな。囀るしか能がないんなら、お前こそさっさと降格でも退学でもすればいいだろうに」

「貴様つ…………！」

万丈目が怒りを込めて睨んでくるが、全くもって足りていない。

俺は、その十倍は怒っている。

「……俺はな、自分の友達や恩人を馬鹿にされて黙ってられるほど人間出来てないんだよ。来いよ、三下。格の違いってのを教えてやる」

既に、言われている万丈目の顔は怒りで赤くなっている。噛みしめた歯は、その怒りのほどをよく表していると言えた。

「皆本、遠也あ……！」

「さんをつけるよ、デコ助野郎。俺はお前の年上、人生の先輩だぞ。先輩には、さんをつけるもんなんだろ？」

きつと言われたら頭に来るだろう言葉を選んで言い、今度は俺が鼻で笑ってやる。

すると、一気に怒りのゲージが振りきれたのか、万丈目は叫ぶように言い返してきた。

「貴様、そこまで言ってただで帰れると思うなよ……！」

はん、何を言っただかこの野郎は。

「余計な心配ありがとう。安心しろ、お前は、俺に勝てない」

「ッ……もう許さん！ デュエルだッ！」

互いにデュエルディスクを装着、デッキをセットし、準備は整った。

廊下というのは味気がないが、そもそも今回のデュエルにそんな情緒は必要ない。

距離をとり、ただ淡々とデュエルディスクの開始ボタンを同時に押した。

「デュエルッ！」

皆本遠也      LP：4000

万丈目準      LP：4000

「先攻は俺みただな。ドロー！」

カードを一枚引き、手札に加える。

しかし、まさか「おい、デュエルしろよ」なんて実際に言うことになるとはな。本当に口をついて出てくるとは、それだけ俺もこの世界に染まったってことなのかもしれない。

さて、と……デッキも俺の感情に応えてくれているのだろうか。手札はなかなかいい。

だが、先攻は最初のターンに攻撃をすることが出来ない。なら、準備をしっかりと整えてから、万丈目にターンを渡そう。

十代たちどころか、ペガサスさんまで馬鹿にしゃがったんだ。本気でやってやる。

ペガサスさんは、身寄りのない俺の保護者になってくれた人だ。生活の世話をしてくれ、明るく笑顔で接してくれた。戸籍上でそうなだけじゃない、俺のこの世界の家族なんだ。その人を馬鹿にされて、怒らないでいられるわけがない。

「俺はカードを3枚伏せてターンエンドだ」

「くっ、はははっ！ 威勢の割には大したことないなあ！ 貴様は、所詮その程度ってことだ！ 俺のターン！」

万丈目が嘲笑を響かせながらカードを引く。

そして、にやりとその口が弧を描いた。どうやら、いいカードを引いたようだ。

「くくつ……いやいや、これはいい。いい手札だ。これは、俺の勝ちかな。まあ、当然と言えば当然の」

「囁るな、と言っただろ。デュエリストなら、カードで語れよ」

「くつ……！ その減らず口を、すぐに叩けなくしてやる！ 俺は永続魔法《異次元格納庫》を発動！ デッキからレベル4以下のユニオンモンスター3体を選択しゲームから除外する！ そして自分フィールド上にモンスターが召喚された時、そのモンスターがこのカードの効果で除外したユニオンモンスターカードに記されているという条件を満たした場合、そのユニオンモンスターを特殊召喚する！ 俺は《W・ウイング・カタパルト》、《Y・ドラゴン・ヘッド》、《Z・メタル・キャタピラー》を選択して除外する！」

「なら、俺はこの瞬間手札から《増殖するG》を捨てて効果を発動する」

俺がカードを墓地に移すと、フィールドに黒い靄が現れ両目を光らせた何かが無数に蠢く。しかしそれは一瞬で消え、フィールドは元の静寂に戻った。

「なに？ なんだ、そのカードは」

「増殖するGの効果により、このターンお前が特殊召喚に成功するたびに、俺はデッキからカードを1枚ドローする」

「ちっ、面倒なカードを……！　だが、無駄なことだ！　俺は《X  
・ヘッド・キャノン》を召喚！　異次元格納庫の効果により、Y・  
ドラゴン・ヘッド、Z・メタル・キャタピラーを特殊召喚！」

《X・ヘッド・キャノン》　ATK/1800　DEF/1500

《Y・ドラゴン・ヘッド》　ATK/1500　DEF/1600

00　《Z・メタル・キャタピラー》　ATK/1500　DEF/1300

「増殖するGの効果。2体特殊召喚されたので、2枚ドローする」

「ふん！　更に《おろかな埋葬》を発動！　デッキから《V・タイ  
ガー・ジェット》を墓地に送る。そして《死者蘇生》を発動！　V  
・タイガー・ジェットを特殊召喚！　異次元格納庫の効果により、  
W・ウイング・カタパルトを特殊召喚！」

《V・タイガー・ジェット》　ATK/1600　DEF/1800

00　《W・ウイング・カタパルト》　ATK/1300　DEF/1500

「2枚ドロー」

「そして融合デッキの《XYZ・ドラゴン・キャノン》と《VW・

タイガー・カタパルト』の効果により、フィールド上のそれぞれ指定されたカードを除外することで、特殊召喚できる！ V Wを除外してタイガー・カタパルトを！ X Y Zを除外してドラゴン・キャノン等特殊召喚！」

《V W - タイガー・カタパルト》     A T K / 2 0 0 0     D E F / 2 1 0 0

《X Y Z - ドラゴン・キャノン》     A T K / 2 8 0 0     D E F / 2 6 0 0

「2枚ドロ！」

「まだまだ！ そしてこの2体を除外し、融合デッキから《V W X Y Z - ドラゴン・カタパルトキャノン》を特殊召喚する！」

《V W X Y Z - ドラゴン・カタパルトキャノン》     A T K / 3 0 0 0  
0     D E F / 2 8 0 0

怒涛の召喚。

そして、その末に万丈目のフィールドに現れたのは巨大な合体ロボットであった。召喚するためにはかなりの手間とアドバンテージを失う非常に重いモンスター。

それを1ターンで出すとは、万丈目もさすがにブルーというわけ

か。

「1枚ドロ……それで終わりか？」

一応、確認のために尋ねる。

それに、万丈目はやりと笑うことで応えた。

「更にVWXYZ - ドラゴン・カタパルトキャノンの効果発動！  
1ターンに1度、相手フィールド上のカード1枚を除外する！ 3  
枚のうち、真ん中のカードを除外しろ！」

万丈目の声を受け、ドラゴン・カタパルトキャノンがその胸部に取り付けられている長い二本の砲身を動かし、照準を真ん中の伏せカードに合わせる。

そして弾丸が噴煙と共に発射され、それは過たず伏せカードを直撃する。そして伏せられていたカードがオープンになり、その後現れた時空の渦に吸い込まれるようにして消えていった。

「ふん、《聖なるバリア - ミラーフォース》か。くくつ、残念だったな。運も俺に味方しているようだ」

「御託はいい。さっさとしろよ」



「……だったら、お望み通り食らうがいい！ V W X Y Z - ドラゴン・カタパルトキヤノンで直接攻撃！<sup>ダイレクトアタック</sup> 《V W X Y Z - アルティメット・デストラクション》！」

ついさっきカードを破壊した砲身が、今度は直接俺に狙いを定める。

そして、再び弾丸が発射される。万丈目はそれを愉快そうに見ているが、その油断が命取りだということを、身をもって教えてやる。

「手札から《速攻のかかし》を捨て、効果発動！ 相手の直接攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「ちっ！ しぶとい奴め！ カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

既に手札に必要なカードは全て揃っている。

このターンがラストターンだ。

「俺は《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ そして場にチューナーがいる時、ボルト・ヘッジホッグは蘇る！ 更に《チューニング・サポーター》を墓地に送り、もう1枚のクイック・シンクロンを特殊召喚！ 更に伏せ<sup>リバーズ</sup>カードオープン、罨カード《エンジェル・リフト》！ チューニン

グ・サポーターを復活させる！」

《クイック・シンクロン?》 ATK/700 DEF/1400

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

《クイック・シンクロン?》 ATK/700 DEF/1400

《チューニング・サポーター》 ATK/1000 DEF/3000

「レベル2ボルト・ヘッジホッグに、レベル5クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・アーチャー》！」

《ジャンク・アーチャー》 ATK/2300 DEF/2000

「更に、チューニング・サポーターをレベル2として扱い、レベル5のクイック・シンクロンとチューニング！ 集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、《二トロ・ウォリアー》！」

《二トロ・ウォリアー》 ATK/2800 DEF/1800

2体のシンクロモンスターが並び、うち1体はジャンク・アーチャー。そして、相手の場にはモンスターが1体で伏せカードも同じく1枚。

この時点で、既に勝負はほぼ決まっている。あの伏せカードがミラフォなどの攻撃反応型や和睦の使者のようなカードだったり、あるいは万丈目の手にバトルフェーダーがあれば話は別だが、持っているわけもない。

「ふっ、なんだ！ どちらも攻撃力が届いていないぞ！ 計算も出れないのか？」

そうとは知らず、偉ぶっている万丈目。

これで決めることは出来るが……この際だ。とことんまでやらせてもらおうか。

「誰がメインフェイズの終了を宣言した？」

「なに？」

「まだ、俺のメインフェイズは続いている。チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！ 更に俺は《調律》を発動！ デッキからクイック・シンクロンを手札に加え、デッキトップのカードを墓地に送る。そして《レベル・ステイラー》を墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚！ 更にニトロ・ウォリアーのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚する！ チューニング・

サポーターを通常召喚！ レベル1レベル・ステイラーとレベル2となったチューニング・サポーターに、レベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は8。クイック・シンクロンの銃が、ロード・シンクロンを撃ち抜いた。

「集いし希望が、新たな地平へ誘う。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 駆け抜ける、《ロード・ウォリアー》！」

全身に薄く金色がかつた鎧を着こんだ姿は、戦士でありながら高貴な印象を見る者に与える。

さながら統治者であるかのようにフィールドに現れ、2体のウォリアーを従えるように先陣に立つと、その鋭い目で真っ直ぐに敵を見据えた。

《ロード・ウォリアー》 ATK/3000 DEF/1500

「攻撃力3000だと……！？」

慄く万丈目だが、まだ俺のターンは終わっていない。

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！　そしてロード・ウォリアーの効果発動！　1ターンに1度、デッキからレベル2以下の戦士族または機械族モンスター1体を特殊召喚できる！　俺は機械族の《チューニング・サポーター》を特殊召喚！」

《チューニング・サポーター》　ATK/100　DEF/300

「更に《死者蘇生》を発動！　コストで墓地に送ったジャンク・シンクロンを蘇生させ、レベル2として扱うチューニング・サポーターにチューニング！　集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！　シンクロ召喚！　出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》　ATK/2300　DEF/1300

これで、俺の場にはジャンク・アーチャー、ニトロ・ウォリアー、ロード・ウォリアー、ジャンク・ウォリアーの四体が並んでいる。壮観と言っていい光景だろう。

そしてその四体は、それぞれ鋭い目つきで万丈目を睨み、俺の命令を待っているように見えた。

だが、まだ準備は整っていないからな。もう少し我慢してもらおう。

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ。そして、手札から《サイクロン》を発動し、お前の伏せカードを破壊する！」

「くっ……」

伏せられていたカードがサイクロンの風によってめくれ上がり、その後破壊されて墓地に行く。

伏せてあったのは《攻撃の無力化》。なるほど、ここで破壊しておけてよかった。

これで、何の憂いもなく攻撃することが出来る。

「ジャンク・アーチャーの効果発動！ 1ターンに1度、相手モンスター1体をエンドフェイズまで除外する！ 《ダイヤモンド・シユート》！」

ジャンク・アーチャーの放った矢が、ドラゴン・カタパルトキャノンに突き刺さり、次元の彼方へと吹き飛ばす。

これで、本当に万丈目を守るものは何もない。ただ、身一つでそこに立っているだけだ。

「いくぞ、万丈目。覚悟はいいか」

「ば、馬鹿な……そんな馬鹿な！ こ、この俺が、十代だけでなく、

お前などにまでッ!？」

「そんなことを言ってるから、お前は勝てないんだ! ジャンク・アーチャー、二トロ・ウォリアー、ロード・ウォリアー、ジャンク・ウォリアーで直接攻撃!」  
ダイレクトアタック  
《カルテット・フォーエス・ブレイク》!

「う……嘘だ、嘘だあああッ!」

万丈目 LP : 4000 0

総計11400ポイントものダメージが万丈目を襲い、そのライフポイントを瞬く間に0にする。

万丈目はライフがなくなると同時に膝から崩れ落ち、四つん這いとなって下を向いている。よほどショックだったのだろう、身体が小刻みに震えていた。

俺としては、今の一撃でだいぶ怒りも収まった。そのため、熱くなっていた気持ちもいくらか落ち着きを取り戻している。

むしろ、今の俺の中にあるのは万丈目に対する哀れみにも似た思いだ。

1ターンでVWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノンを出すほどの運と技量と知識。それらを持っているのに、なぜ他人を貶すことでしか自分を保てないのか。

それが、なんだか残念で仕方なかった。

「……お前が吐いた暴言は、これで無しにしてやる。今度は、もっと楽しいデュエルをさせてくれよ、万丈目」

「遠也、貴様……！俺が弱いと言いたいのかッ！相手にならぬいともおッ！」

睨みつけてくる万丈目の表情は、恐ろしく歪んでいる。

きつと、今のこいつには俺が言った言葉の意味は伝わっていないだろう。楽しいデュエルをしたいと言ったのは、万丈目とでは実力差があつてつまらない、という意味ではない。

それがわからない以上、もう何を言っても今は無駄だろう。

だから、俺は首を横に振り、最低限のことだけを言う。

「違う。それがわからないなら、今のお前はきつと十代や俺どころか翔にも三沢にも勝てないだろうぜ」

「この俺が、あんなザコに劣るだと！貴様、どこまで俺を馬鹿にすれば……ッ！」

俺は、もう何も言わず背を向けた。

横にいるマナも怒ることなく、それどころか悲しげな顔で万丈目



を見ている。そして、振り向くことない俺に、後ろから万丈目の声  
が投げかけられる。

「遠也ッ！ この屈辱、忘れんぞ！ いずれ必ずこの屈辱の礼をし  
てくれる！ 必ずだッ！」

俺は努めてなんの反応も返さないようにし、廊下の角を曲がって  
いく。

しばらく歩いたあと、マナがぼつりと呟いた。

『あの人にとって、デュエルってなんなのかな……』

それはきつと、万丈目にしか分からないことだろう。

故にその質問に答える術を俺は持っていない。

だから、俺はマナの言葉に「さあな」とだけ答えるのだった。

十代と翔のタッグデュエルは、二人の勝利で終わった。

相手はやはり迷宮兄弟。ゲート・ガーディアンを召喚される前、翔は緊張していたのかブレイングミスもあったが、やがて調子を取り戻したのか、ぎこちなさがなくなっていく。

ゲート・ガーディアン の出現にも怯まず、十代のサポートを行い、時には自分で攻めてチャンスを探っていく。

そして十代がゲート・ガーディアンを守備表示にしたチャンスを引きつちりものにし、翔がドリルロイドでゲート・ガーディアンを攻略したのだ。

その後、ダーク・ガーディアンという更に高い攻撃力に加え戦闘

破壊耐性を持つモンスターが召喚されるも、十代と翔のモンスターを翔が《パワー・ボンド》で融合。

攻撃力8000の《ユーフォロイド・ファイター》を召喚し、そのままそいつがフィニッシャーとなった。

だが、このデュエル。見るべきは翔の成長だったと思う。

翔はプレイングミスをしたし、そのせいでピンチになる時もあった。しかし、一度も挫けることなく、前を見ていたのだ。

諦めない、やってやる、という意味がこちらにも伝わってくるようだった。

その姿を見ただけで、このデュエルには価値があったと思えたほどだ。尤も、会場の上のほうで立ち見していたお兄さんは、俺以上にそう思っていただろうけども。

ちらっと見れば、クールにふつと笑っていたのが見えたので間違いない。素直じゃないお兄さんだこと。

その後、俺たちは十代たちの勝利を祝って、身内で簡単な食事会のようなものを開いた。

またこのメンツでつるむことが出来る。

その喜びをかみしめながら、笑い合う。ふと、万丈目にもこんな仲間がいたら、今とは違っていたんじゃないか。そんな考えが頭をよぎる。

その時表情が暗いものになっていたのか、十代が「どうした？」と声をかけてくる。

俺はそれに「なんでもない」と答えて、再び喧騒に戻っていく。

今更IFの話をしたって仕方がない。同じブルーなんだ。気になるなら会いに行けばいいだけなんだし、今はそれよりもこの瞬間を楽しむべきだろう。

そして友達と喜びを分かち合うこの宴は夜遅くまで続き、結局大徳寺先生に怒られることになるのだった。

くそ、俺も明日香たちにならって途中で帰ればよかった……。

「遠やくーん、本当に反省しているのかにゃー？」

「は、はい！ してますしてます！」

疑わしげに見てくる大徳寺先生の視線を交わし、説教に四人で耐えること20分。

ようやく解放された俺は、ふらふらとブルー寮の自室に戻る。

そして、そこで気持ちよさそうにベッドで寝ているマナを見て、俺はなんだかやるせなくなつて溜め息をつくのだった。



## 第9話 怒り（後書き）

お休みだったので、一気に書きました。

増殖するGって、ああやって使えばいいんですかね。

まだ実戦で使ってないので、なんとも言えないのですが。

代行天使にも刺さるいいカードですよ。ジャンドにも刺さりませんが。

そして、なんだかうちの万丈目が嫌な奴に。

でも私は万丈目好きなので、勘違いはなさらないでくださいね。

そして何気にこのSSでクロノス先生初登場でした。

第10話 平穩（前書き）

今回はデュエルなしとなっております。  
ごめんなさい。

タイトル通り、平穩かつのんびりなお話です。

## 第10話 平穩

「あー……平和だなあ」

『そっだねー』

制裁デュエルが終わり、いつもの日常に戻ってきた。

なんだか入学からずっと忙しかったせいか、こういう平穩が何とも貴重に感じられる。

既にシンクロ召喚もこの学園に限り珍しいものではなくなり、俺に挑んでくる生徒もかなり減っている。まあ、カイザーと同格だと思われているというのもあるんだろうけど。

あ、ちなみにこの学園で珍しくないっていうのは、単純に俺がいるからだ。シンクロモンスターが実用化されたわけではないので、あしからず。

そんなわけで、今日は久しぶりにマナと二人であっちをうろつろ。こっちをうろつろ。ただひたすらに適当に過ごす時間となっている。

実に平和な一時だ。闇のデュエルがあったとか嘘みたい。



『ねー、遠也』

「んー？」

マナが話しかけてきたので、適当に相槌を打つ。

『見て見て』

次いで、そんなことを言うてくるので、俺は隣のマナのほうに顔を向けた。

そして、

「ぶはぁっ!?!」

噴いた。

「どう? 似合う?」

そう言って、実体化したマナがその場でぐるりと一回転。

ミニスカートがふわりと浮かび、あわや見えそうだった。惜しい。

「って、そうじゃない！　なんでお前が制服を持ってんだあ！？」

そう、そうなのだ。

今のマナの格好はアカデミア、ブルー女子生徒用の制服なのである。もちろん入手するにはアカデミアに入り、専用の業者から購入しなければならぬ一品だ。

精霊であるマナに入学できるわけもなし、そもそも持っているはずがない代物なのだ。持ち運びは魔法で何とかしていたんだとして、どこでこんなものを手に入れたのか。

はっ！　ま、まさかどこから盗んできたというんじゃない……。

「これ？　売店で売ってたから買ったんだよ」

「ごっそり財布の中身が減ってたのはそれかよ！」

使った覚えがないからおかしいと思ってたんだ。でも俺が覚えてないだけだろうと思って気にしてなかったのに、お前が勝手に使ってたんかい！

まさか売店にそんなものがあつたとは。確かに制服が駄目になることがないわけじゃないし、その際にいちいち業者まで問い合わせるのも効率が悪い。

だから売店に常備するというのもわかるが……おかげで俺の財布が大打撃だよコンチクショウ！

内心で涙を流す俺。それに対して、マナは手を合わせて謝りながら近づいてくる。

「ごめんね、遠也。でも……こうでもしないと、遠也とこうして会えないし、ね？」

言いつつ、俺の腕に自らの腕をからませてくる。

そして、どう、可愛い？ と何かを期待する顔で聞いてくるマナ。

文句を言おうと思っていたのに、ぐっと言葉に詰まってしまう俺。怒りたい気持ちはあるが、それよりも腕に当たる気持ちいい感触にばかり意識が行ってしまう、悲しき男の性。

そして、俺の口から出てくるのは、文句とは程遠い言葉だった。

「うん、可愛い」

「えへへ、やったあ！」

それに、嬉しそうに笑うマナ。

くそっ！ 文句なんか言えるわけないだろう！ だって制服を着たマナは予想以上に可愛いんだよ！ 可愛いんだから、何も言えるわけがないじゃないか！

そう心の中で誰に対してというわけでもな言いつく事を繰り返す俺。財布から消えていった諭吉さんを惜しむ気持ちはあるが、それもこの姿を見るためだと思えば許せそうになってしまつから不思議だ。

やはり、男ってのはどこまでいっても男なんだなあ。

達観したように俺は遠くを見つめる。ああ、腕の感触サイコー。

「さ、いこー！ 遠せ」

「へ？ 行ってくて、どこに」

俺の腕をとり、引っ張るように前に出たマナに、俺は素朴な疑問を投げかける。

それに、マナは何を当たり前前のことを、と前置きをしてから、こう言った。

「決まってるじゃない。デートしようよー」

「デートねえ……デートお！？」

明るく言い放たれた言葉に、俺は思わず素っ頓狂な声を上げた。

しかし、そんな俺にはお構いなし。マナは俺の腕をとったままどんどん歩を進めていく。

つられるように歩く俺だが、楽しそうにしているマナの顔を見ているうちに、なんかだんだんどうでもよくなってきた。

これだけ楽しそうにしてくれているんだ。それに付き合っぐらい、わけないこと。

それに、別段俺だって嫌なわけじゃない。

俺は一つ息を吐くと、引きずられるような形だった状態から自分の足で一歩進み、マナの隣に並んで歩く。

横に来た俺の顔を見上げるマナに苦笑を返し、俺たちは並んでぶらぶらと歩き始めるのだった。

さて。今日は一日マナとのデートと決まったわけだが、特に何か目的があるわけではない。

そのため、俺たちは気の向くままに歩くということを腕を組んだまま続けている。

アカデミアの中にショッピングモールがあるわけでもないのに、仕方ないと言えば仕方ないが……。つまらなくはないのだろうか、と俺でも思ってしまう。

しかし、そんな俺の心配に、マナはきょとんとした顔を見せるだけだった。

「うーん、私は遠也と一緒にいれば、それだけで結構楽しいよ?」

そうだったのか。

まあ、俺もマナと一緒になら特につまらなく感じるということもないので、案外そんなものなのかもしれない。

ならいいか、と結論付けて、俺たちは敷地内をゆっくり歩いて回る。

そうして歩いていたらと、なんだか小さな港に出た。

そこにはあまり大きくないながらも灯台が建っており、絵に描いたような港の風景である。雰囲気も悪くなく、情緒のある場所と言えるだろう。

こんな場所あったんだな、と思いながら見ていると、灯台の下に誰かがいるのが見えた。数は二人……一人は男、一人は女。

っていうか、よくよく見れば、カイザーと明日香だった。何してるんだ、あんなところで。

見つからないように通り過ぎようとしても、既にかなり近づいてしまっている。

どうしたものが、と思っっているうちに、あちらも俺たちに気がついたらしい。なんだか二人とも凄く目を見張っているんだが、なんだというのだろうか。

ここまできて、無視するというわけにもいくまい。

俺はカイザーを見てちょっとだけ拗ねた様子を見せるマナを連れて、二人の元に向かった。

「よっす、カイザー。明日香も。どうしたんだこんなところで」

「……やはり遠也、か」

「見間違いじゃなかったのね」

相変わらず二人が俺を見て驚いているんだが。挨拶まで無視して、どういふことなの。

疑問に思っただけ二人の視線をたどってみれば、その先には俺の腕にひつついているマナの姿。

……ああ、それか。

「マナ、ちょっと離れよう。ブレイクブレイク」

「はい」

素直に頷き、マナが俺の腕を解放する。

久しぶりに帰って来る、腕に触れる空気の感触。それを確かめながら、俺は二人に向き直る。

「よっす、二人とも。こんなところでどうしたんだ？」

テイク2である。

「ああ……」

「ちょっと、ね」

しかし、それよりも二人は俺の隣にいるマナが気になるようで、俺よりもマナのほうばかり見ている。



その視線にマナがにっこり笑顔を返すと、二人はその視線を俺のほうへと戻した。

「遠也、あの……紹介してもらえないかしら？」

明日香が困惑した表情で俺に聞いてくる。

まあ、俺も挨拶ぐらいは先に、と思っただけだからな。それも済んだ今、さっさとマナのことを紹介しておいたほうがいいだろう。

「ああ。こいつはマナ。俺の……相棒、かな」

「兼、恋人もね」

さらりとマナがとんでもないことを付け足した。

俺はすかさず笑顔でのたまったマナの頬を引っ張る。

「ははは、何をおっしゃるウサギさん。まだそんな関係じゃないでしょーに」

「いひゃい、いひゃい！ ほづろくひゃんたーいー！」

ばしばしと引つ張る俺の手を叩いてくるマナ。

ふふん、やめてよね。本気じゃないマナが、俺に敵うわけないじゃないか。

にやにやしていると、さすがに痛かったのか、にわかにはマナの手が魔力らしき輝きを纏い始めた。

ちょ、やめてよ。マナが本気出したら、俺が敵うわけないじゃないか。

俺はぱつと手を離し、マナは頬をさすりながら口先を尖らせる。そんなマナに悪かったと謝り、俺は二人の顔を見る。

「まあ、そういう関係だ」

「……そ、そう」

そうか細く返答をする明日香の表情は、なんだか何とも言えないものであった。気になるが、今は気にしないことにしよう。

それよりも、俺の最初の質問に答えてもらっていない。仕方ないので、もう一度問いかけてみることにする。

「それより、こんなところでどうしたんだよ」

しかし、その問いに二人は揃って苦笑いを浮かべた。表情に少しの悲哀を混ぜたそれは、何も言われずとも訳ありなのだと思察することが出来るものだった。

「ちょっと、な」

あのカイザーでさえ、口ごもり判然としない反応を示す。

さすがに、この問題が好奇心で突っ込んでいい問題ではないと俺も悟る。

そのため、俺はこの話題に関して打ち切ることを決めた。

「そうか。……それよりカイザー、今度から負けたからって文句言うのはやめろよ」

「なっ……!」

俺の突然の言葉に、カイザーが寝耳に水だとばかりに驚きをあらわにする。

いきなり何の話だ、とその顔にありありと書いてあった。この重い空気をどうにかしようという、俺の気遣いじゃないか。

そして、俺の言葉を聞いた明日香は、僅かに呆れを含んでカイザ

ーを見た。

「亮……あなた、そんな子供みたいな……」

「違う！ 遠也、一体何を言っているんだ！」

明日香の中でのカイザーのイメージが危うい。

それを察してなのかは知らないが、カイザーは普段の泰然とした姿とは違う年相応の姿を見せる。俺たちしかいないからだろうが、普段から普通にしていればいいのに。

「間違っではないないだろ？ 俺に負ける度に、もう一度だ！ って突っかかって来るくせに」

にやにや笑って言えば、カイザーは凶星だけに押し黙った。

そう、このカイザー。意外と負けず嫌いなのである。何度そのまま押し切られて連戦したことが。

「くっ……それは、お前も同じことだろう。お前も俺に負ける度に、あの時のアレがどうだったと文句を……」

「俺はいいんだよ、次ではきっちり勝ってるし」

「だが、戦績はほぼイーブンだろう」

「俺の勝ち越した」

「ふっ、たった2勝だがな」

「……………」

「……………」

「「デュエルッ！」」

「平和ね……………」

「そうですねー」

結局、その場を離れたのは三十分後でした。

カイザーとのデュエルを勝利で終わらせ、3勝目の勝ち越しを得た俺と、明日香と三十分間談笑していたマナ。そんな俺たちは、再び当てのない散歩へと戻った。

今度は腕を組まず、代わりに手を繋いでいる。一応マナ曰くデートらしいので、俺のほうからマナの手を取ったのだ。

しかし、何故かマナはいきなり顔を赤くしていた。さっきは自分から腕を組んできたくせに、よくわからん奴だ。

だが、そんなものは最初だけ。次第に慣れてきたのか、今では繋いだ手を歩く振動に合わせて振るぐらいには、慣れたらしかった。

上機嫌なようなので、俺も何も言わずされるがままにしている。そうしてなんだか周囲の男子生徒から恨みがましい視線を受けながら進むことしばし。

ふと、とあるベンチに座り一枚の紙を見つめている人影を発見した。こんなところで見かけるとは珍しい、と思わずそちらに目を向ける。目立つ人だというのも原因かもしれないが。

あ、こっち見た。

そして目が合った。

……無視するわけには……いかないよな、やっぱり。曲がりなりにも、目上の人間なんだ。

仕方なく、俺はマナを連れて、その人の元へと足を進めた。

「……こんにちは、クロノス先生」

「これは、シニョール皆本。んー、そっちの生徒は、見覚えのない子なノーネ」

「あ、あはは、さすがにクロノス先生も全生徒は覚えていないでしょう？ 仕方ないですよ」

「んー、それもそうでスーノ」

大仰に肩をすくめてみせる、クロノス先生。その出で立ちと相まって、なかなか芝居がかった仕草だった。

そう、そこにいたのはクロノス先生だった。オシリスレッドに厳しいことで有名なこの先生が、俺はあまり得意ではなくそれほど話すことはない。

が、向こうはどうも違うらしく、会うと話しかけてくることがたまにある。

恐らく、俺のバックにいるペガサスさんなどのことがそういう態度をとらせているのだろうが……、その積極性をもっとオシリスレッドにも向けてほしいものだ。

「ところで、クロノス先生。一体何を見ていたんですか？」

会ってしまった以上、すぐにさよならとはいかない。俺は会話の糸口とする意味も込めて、クロノス先生が手に持っている一枚の紙について尋ねた。

すると、クロノス先生は途端に嬉しそうな顔に変化した。……いささか、キモかったが。

「これでスーノ？　ぬふふふ、聞きたいノーネ？　知りたいノーネ？」

「……ええ、まあ」

ちよつとつざい。

「あなたもなノーネ？」

「あははー、私も知りたいですー」

えらく棒読みになっていたマナだったが、さすがクロノス先生は気にしない。

妙に根性だけはある人なのだ。

「そこまで言うなら、教えてあげるノーネ！　これは、プロのデユ



エリストになった私の元教え子からーの手紙なノーネ！」

ベンチから立ち上がり、胸を張って自慢げに言うクロノス先生。

だが、言っていることは確かに凄い。この世界はデュエルが生活に根付いているだけあって、プロデュエリストは花形の職業だ。アカデミア卒業生とはいえ、プロになるのは容易なことではない。

それを成し遂げたというのだから、教えたクロノス先生が胸を張りたくなる気持ちもわかる。

「へえ……」

「すごいですねえ」

俺もマナも、それについては素直に感心した。

それだけ、プロになるということは難しく。そして、まだ残っているというのは更に難しい。

クロノス先生は、俺たちの反応に対して満足そうに大きく頷く。

「それでシヨーウ！ この生徒は私の自慢なノーネ！ 在籍当時から努力を欠かさない優等生でスター。あまり強くなかった頃から、私がつちり指導し、そしてここまで成長してくれた、素晴らしい生徒だったノーネ！」

そう言いつつ、にやりと不気味な笑みを浮かべる。あれ、きつと心底笑っているんだろうな。不気味なのは化粧のせいだろう、きつと。

しかし、クロノス先生にこんな一面があつたとは。

俺の中ではブルーの生徒を鼻屑し、レッドを貶める嫌な先生というイメージしかなかったから、意外と言えば意外だ。

しかし、こういう一面があるなら、なんでレッドにあんな風に当たるんだか。

「先生、レッドのみんなには、そうして指導してあげないんですか？」

はい、とマナがわざわざ手を挙げてクロノス先生に問いかける。

今まさに俺が思ったことを聞いてくれるとは、さすがマナ。以心伝心だぜ。

そのマナの質問に、クロノス先生はいきなり顔をしかめた。そして、ぐぬぬ、と怒りのうめき声を上げ始める。

「ドロッパアウトボーイたちは論外なノーネ！ せつかくアカデミアに留まらせてあげているノーネ、一向に努力しようという気配が見られないノーネ！ どいつもこいつも、どいつもこいつも、オシ

リスレッドは全く成長しないでスーノ！ そんな生徒にかける情けなんて、持ち合わせていないノーネ！」

ハンカチを取り出し、キーッとそれを噛んで怒りを発散させるクロノス先生。

それを見つつ、俺はその言葉を聞いてふと思考を巡らせた。

オシリスレッドは、卒業のための単位が他寮に比べてかなり緩い。そのため、レッドの生徒はあまりやる気がなく、なあなあで、ひとまずこの学園を卒業さえ出来ればいいと考えている生徒も多いのだ。

かつての隼人がそうだったと本人から聞いている。

なぜオシリスレッドがそれだけ緩いかというと、端的に言って最後のチャンスだからだ。デュエリストになりたいという若者の夢を出来る限り尊重したいという考えのもと、ある程度成績が悪くてもチャンスを与えようという理由で作られた制度らしい。

ここを背水の陣として踏みとどまり、デュエリストを目指す機会を残すために作られたと海馬さん、の弟のモクバから聞いたことがある。

それ以後も続くクロノス先生の愚痴曰く、もう何年間もずっと、オシリスレッドの気風は変わっていないようだ。

そういう目的で作られたというのに、肝心の生徒は入学以後、必要単位が超少ないという気楽な環境にだらけきっている。

寮や修学旅行をグレードの低いものにしたりして、この環境を抜け出そうという気概を持つ生徒が現れるようにもしたらしいが、逆に順応し始める始末。

それを見続けて、ほとんど嫌気がさしたどころかむしろムカつてきたノーネ、というのがクロノス先生の気持ちらしい。

そこでムカついちゃったのが、現状に繋がるわけか。

そうしてレッドを嫌っていくうちに、やがて嫌がらせが趣味みたいになったのだろうか。いやー、途中までは成程って感じだったけど、最後に普通に意地悪な先生になってしまった。

けどまあ、レッド生にも反省点はあるってことかな。やる気出してない生徒が多いのは、本当に事実だしなあ。

「……おっと、生徒に愚痴るなんて、いけないノーネ、ミネストロイーネ。シニョール皆本、ここでの話は内密にしてほしーノ」

「はあ、まあ。それは構いませんが」

「シニョールもドロップアウトボーイと仲良くするーのは止めるノーネ！ あなたのためになりませーノ！ そしてこのクロノス・デ・メデイチのことをペガサス会長にぜひよろしく。それでは、失礼すルーノ」

最後にちゃっかり自分の宣伝を忘れなかったクロノス先生が、手紙を懐にしまいつつ去っていく。

あの人の場合、ドロップアウトボーイって十代を呼んでも何故か憎めない。あんな話を聞いた後だと余計に。十代も全然気にしてないし、これについては俺がどうこう言うことではないだろう。

うーん、しかし何て言うか……。

「人に歴史ありってことかな」

「そういうことかもねー」

マナと二人、そんなことを呟くのだった。

そして、俺たちはデートを再開する。

とはいえ、この閉鎖された島の中で出来ることなどたかが知れている。というか。することがない。

学園である以上遊ぶための施設はなく、簡単な買い物出来る程度の設備しかないのだ。

それこそデュエルぐらいしかすることがないのである。

しかし、デートでデュエルというのも違うだろう。さすがにこんな時にまでデュエルをしようとするほど、空気を読めないわけではないつもりだ。

そういうわけで、俺たちは散歩を終えて自室に戻って来た。本当にすることがなかったのだから仕方がない。

戻ってきてすぐ、マナは実体化したままベッドに飛び込んでいった。もちろん制服のままです。

ばふつと音を立てて布団が揺れ、スプリングの反発によってマナの身体も上下にふわりと揺れる。

そしてそんなことをミニスカートでやるとどうなるかなど自明の理。大変いいものを見させていただきました。

「うーん、よく歩いたねー」

寝転がったまま伸びをしつつ、マナが楽しそうにそんなことを言う。

その様子に気持ちを和ませつつ、俺もベッドに近づくと、その端に腰を落とした。

「まあ、普段行かないコースを意図的に選んでたからな。余計にそう感じるだろうさ」

いつも歩いている道を歩いてもつまらない。そう思って、行ったことのない場所を目指したのだから、知らない道を歩いたことで疲れも多少はあっただろう。

そう考えれば、例え距離的にはそう多くなくともよく歩いたとも感じられるだろう。実際、寮には比較的早く帰ってこれた。そう遠くまで行ってなかった証拠だ。

とはいえ、この島で遠くとなると森のほうになってしまつので、近くで妥協せざるを得ないというのも確かだが。

俺がそんなことを考えていると、マナがふいに俺の腕をとった。

そして、

「えい」

「うおっ!」

身体を支えていたその腕をいきなり引かれ、支えを失った俺の身体がそのままベッドに落ちていく。

重力に従い、俺はベッドの上に寝転ぶ形となった。そして、それを横で見つめて笑っているマナ。なんだってんだ、いったい。

そして、マナはそのままベッドの上を移動し、俺の顔を上からのぞき込む形をとる。ちょうど俺の左側頭部にあたる位置だ。そこで、マナが膝を揃えて正座をした。

「ん」

そして、ぼんぼんと自分の膝を叩く。

……これは、まさか。

思わずマナの顔を見ると、にこにここと笑っているだけだった。しかし、その態度が俺の予想が間違っていないだろうことをより強く感じさせる。

「ん、ってば。ほら」

そう言って、殊更に揃えられた白い太ももをアピールしてくるマナ。



間違いなく、膝枕をしようとしているのだろう。っていうか、それ以外にこの状況をどう取ればいいというのか。

だがしかし、どうしても素直に太ももに頭を乗せる気にはなれない俺。

すると、一向に動こうとしない俺に、マナは小さくため息をついた。

「もう、いいじゃない。初めてじゃないんだし」

「それを言うなあああ！」

マナの言葉に、俺は両手で顔を覆う。ちくしょう、嫌なこと思い出させやがって……！

マナの言うとおり、確かに俺はかつてマナに膝枕をしてもらったことがある。

そして何故そうなったかというと、めちゃくちゃ恥ずかしいことに俺が大泣きしてしまったからだ。

まだこの世界に来たばかりの頃。そして、ここがどれだけ似ていようと俺が過ごした世界とは全く違う場所だと理解した時のことだ。

違うんだな、とふとした拍子にそう思った時があったのだ。何故

か、ストンといきなり心の中に入って来た、その実感。それを自覚した瞬間、俺が感じたのは狂おしいほどの望郷の念だった。

いいことよりも、悪いことのほうが多い世界だった。決して過ごしやすい環境にいたわけではなかったし、日常なんて退屈でしかたがなかった。

それでも、あそこは俺の世界だった。俺が生まれ、両親が俺を愛し、その両親が生まれ、連綿と続く時間の中、俺という存在を形作ったものを生み出した世界だったのだ。

それら全てを一気にごっさり奪われた感覚。手足の先が一気に冷えて、異常なまでに心細くなったのを覚えている。

そして、思い起こしたのはかつての世界での暮らし。既に亡き両親、好きではなかった親戚、友人たち。

それら全てが無くなったという実感に、俺は自分でも理解できないうちに涙を流していたのだ。それも、声をあげての大泣きだった。

……今思い出しても恥ずかしい。十五にもなって、大泣きとか。穴があつたら入りたい。

そしてその時、真っ先にそんな俺に気づいてやって来たのがマナだった。

泣いている俺を抱きしめ、そのままずっと付き合ってくれた。そして、泣き疲れた俺に膝枕をし、その膝の上で俺は寝てしまったのだ。

……おわかりいただけるだろうか。正気に戻り、目を覚ました時の衝撃を。

大泣きした揚句、女の子にすぎり、さんざん迷惑をかけたうえで、その膝を拝借していたのだ。

……死にたくなっても仕方ないだろうか？

俺はそれはもう赤面し、床を転がりまわり、悶絶というものを十分間は延々と繰り返した。

マナが笑って許してくれたから良かったが……。それで降、その時の記憶は俺の中の黒歴史の一つとして封印されたのであった。

そして、それをいま掘り返されたのだ。ああもう、恥ずかしいっ  
たらない。

「あの時とは違つてでしょ？ 今は私がやりたいから、だよ」

ね、と笑うマナに、俺は覆っていた手をどけてその顔を見上げる。

そして、その視線を太ももに移す。偶然、その奥も見えた。その瞬間、頭上に降って来る拳骨。いてえ。

殴られた頭を押さえながら、俺はのそりと起き上がってベッドの上を動く。そして、ひとつ息を吐くと本格的に寝そべった。

頭の位置は、マナの膝の上へ。柔らかい太ももが枕代わりとなっ

て俺の頭を支える。

「……重くない？」

「ちょっとはね。でも、それがいいの」

言って、マナは俺の髪の毛に手をやり、ゆっくりと撫でるように梳いていく。

何が楽しいのか、ふふーん、と調子っぱずれな鼻歌までする始末だ。

いったい今どんな顔をしているのか。盛り上がる二つの丘に阻まれて正確にはわからないが、たぶん笑っているのだろうとは思う。

俺は、ふう、と溜め息をこぼす。

「よくわからん」

「あはは、そうかもね」

マナはただ笑って、俺の髪をなでる。

俺には分からないが、マナにとってはきつとこじつすることが楽しいのだろう。

そのためなら、過去の恥ずかしい記憶や今の照れ臭さも我慢しようじゃないか。それに、膝枕をするほうの楽しさはよくわからないが、されるほうは確かにちよっと楽しい。

女の子の太ももが頭の下にあるのだ。そうそうあるシチュエーションではない。

俺だって年頃の男なのだ。これだけ女の子と接近して、嬉しくないわけがない。まして、好意を持っている相手なのだからなおさらだ。

そのため、今この時に俺がとる行動など一つしかない。ああ、そうだとも。

……ゆっくり、ゆっくり頭を動かして回転させていく。気づかれぬように、そーっとだ。上を向いていた頭が、徐々に横向きに変わっていく。

そして、ついに顔が太ももの付け根のほうへと……！

「はい、そこまで」

「ぐぐむっ！..?」

強引に首を回して戻された。

「お、おまつ、無茶するなよー！」

「もう、遠也が変なことするからでしょ？」

呆れたように言われ、黙るしかない俺。

男なんだもん、仕方ないじゃん。

俺があまりに慥然としていたからだろうか。マナは小さく笑みをこぼすと、その手の平を俺の目の上に置いた。

「……寝ていいよ。たまには、こういうのもいいでしょ？」

手の平で覆い隠された暗闇の中。俺は、優しげに言われたその声を思う。

この一年、ずっと傍で聞いてきた声。きっと、この世界の誰よりも俺の心に響く不思議な声だ。

マナは俺にとって、色々と迷惑をかけてきてしまった相手だ。同時に、それでもこんな孤島にまでついて来てくれた大切な相棒だ。

そして、俺としても憎からず思う女の子でもある。

……まったく。男つてのは本当に現金なものだと、心の底から実感する。

だって、マナの声を聞くだけで、こんなにも心が緩んで安心して

しまうのだから。

「……そうだな」

こづついうのも……たまには悪くないや。

俺は弛緩していく感情と身体に抗うことなく、その安堵を受け入れていく。

そして目を閉じると、そのまま緩やかに眠りの世界へと意識を旅立たせていくのだった。

制服ではなくいつもの格好で精霊化しているマナと共に、俺は教室に入った。

「はよー」

十代と翔、隼人たちを見つけたので、いつものように挨拶を交わす。

その瞬間、翔がものすごい勢いでこちらを振り向き、ギラついた目で俺を見た。

「……とーやくうーん」

「な、なんだよ。どうした、翔」

得も言われぬ恐怖を感じ、俺は思わず後ずさる。

しかし、翔はその距離を埋めようと更に近づいてくる。な、なんだこの迫力は。

俺は助けを求めて翔の後ろにいる十代と隼人を見る。しかし、二人は首を振るだけだった。助けてくれないのかよ！

「昨日……遠くくんがブラマジガール似の可愛い女の子と腕を組ん



で歩いてたって情報があるんすけど……」

「う」

そういや、翔ってブラマジガールの熱狂的なファンだったな。アイドルカードって公言しているぐらいだし。

っていうか、ブラマジガール似って、そいつはどこを見て判断したんだ。確かに本人なんだから似てはいるだろうが。

俺が思わず冷や汗を流すと、対して翔はにっこりと笑った。

「僕、遠也くんを信じてるよ。きっと、嘘だよ。そんな可愛い彼女がいるなんて」

「あら、マナの話？」

そこにやって来る明日香。

余計なことはしゃべらないでくれよ、と俺が心の中で願っても、どうやらその祈りは天に届かなかったらしい。

「昨日はその……驚いたわ。前に話に出た子が、あの子なんですよ？ けど、いい子だったわ。また楽しくおしゃべりしたいから、よろしく言うておいてちょうだい」

「お、おう」

それじゃあ、と明日香は去っていく。おいおい、ブルーの女子寮で探したりしないだろうな。ここの生徒じゃないってバレそうで怖いんだが。

まあ、そこはなるようになるしかないだろう。それより……。

残された俺と翔が問題だった。

「お、おい。翔……？」

明日香の言葉によって顔を伏せてしまった翔に、声をかける。

その瞬間、翔ががばつと顔をあげた。

「彼女が本当ってことは……やっぱり、ブラマジガールにそっくりって話も……本当なんすか？」

嘘は許さない、と翔の目が言っていた。

今日の翔は一味違うな。まったくもって嬉しくないが。

「あ、ああ。まあ、ある程度は……」

そしてその眼光にやられ、つい答えてしまう俺。

「ご本人なんですが、言ったところで信じないだろう。よって、微妙に曖昧な表現にとどめておく。」

しかし、それを聞いた翔は目をくわつと見開き、俺の腰にしがみついていた。な、何しやがる!?

「遠也くん、会わせてほしいなあ、その子に。一目でいいからあ」

「猫撫で声を出すな、気持ち悪い！ ってゆーか、離せ！ 男に抱きつかれても嬉しくない！」

「友達に対してひどいよお。ねえ、遠也くんってばあ」

「十代！ 隼人！ 何とかしてくれ！」

しかし、二人は肩をすくめてみせるだけ。この野郎どもめ！

「遠也くん」

「離せ、翔！ 兄貴にチクるぞ！」

しかし一步も引かない翔。なんでこんなところで根性を見せるんだこいつは！

迫る翔と、引き剥がそうとする俺。教室の一角で行われる奇妙な光景に皆が視線を向ける。

そんな中、マナもまた笑って俺たちを見ているのが見えた俺は、元凶ともいえる相棒を恨めしげに睨む。

その間も翔は俺にひつついてくるので、俺はひとまず翔を引っぺがすほうに専念することにした。

そんな俺たちを見て、苦笑いの十代たち。そして、にこにこ楽しそうにしている元凶でもあるマナ。

今日もまた、平穏な一日であることを告げる朝のニコマであった。

## 第10話 平穩（後書き）

マナとのお話が書きたかっただけなんだ。ごめんなさい。

クロノス先生、全然このSSに出てこないの、ここでちょっと出してみました。

そしたら、なんだか変なことに。

自分なりにレッドのひどい環境に理由をつけようとした結果がこれだよ！

さて、今書いていて冬休みのお話のことをすっかり忘れていたことに気がつきました。

冬休み……今から一から考えないと……。

追伸

カップリングの件ですが、今のところはマナ単独ヒロインの路線で書いています。なぜなら、初期がそういう設定で書き始めているからです。

ヒロインが増えるか増えないかの件については、レイも登場した後で本格的に答えを出そうと思っています。

そちらについては、そのあとまでお待ちいただきたく思います。

それまでは、基本的にマナとのいちゃいちゃをお楽しみいただきたいと思います。

よろしく願います。

## 第11話 離脱（前書き）

冬休みに入る手前、お猿の話です。

漫画版の万丈目はカッコイイですが、アニメ版の万丈目は味がある。そんな風を感じている私でした。

## 第11話 離脱

アカデミア校舎へと続く正門。その間を埋める滑らかに舗装された道の上を、一人の男が歩いてくる。

だが、アカデミアに向かうためではない。むしろその逆、そいつはアカデミアから去るためにこの道を歩いていた。

その歩みの先は、正門の先。肩に担いだ荷物がその変わらない事実を物語る。

そして、そいつは自身が出てきたアカデミアの校舎を振り返る。見おさめ、ということなのかもしれない。

「さらば、デュエルアカデミア……」

「……そいつは、ちょっとカッコつけすぎじゃないか、万丈目」

突然かけられた声に、男 万丈目が振り返る。

その視線の先には当然、声をかけた俺がいる。そして、それを認めた万丈目の顔が、怒りに歪む。

「貴様……！ 俺を笑いに来たのか、遠也！」

その視線を受け、俺は少々離れていた位置から万丈目の傍へと歩み寄った。

その間も、万丈目は俺に怒りの目を向けることをやめなかった。

「そうじゃない。ただ、誰の見送りもないっていうのも寂しいだろ？」

俺が言うと、万丈目はしかしその顔を嘲笑に変えた。

「ふんっ、お前たちのような群れるしか能のない奴らと一緒にするな。俺は、一人でもやっていける。……そうだ、そんなものは弱者の考えだったのだ。俺は、強者にならなければならない。誰よりもだ！」

叫ぶようにして、吐き捨てる。

ならなければならない、ね。こいつは、何か事情がありそうだな。

とはいえ、それが俺にどうこうできるわけでもない。万丈目の問題である以上、コイツ自身のことだし、今の万丈目が俺の話の聞くとも到底思えなかった。



だから、俺はその言葉に肩を竦めてみせるだけだった。

「そうか。今度はお前と楽しいデュエルをするって約束、守れなくなっちまうな」

万丈目は、その言葉を聞いて再び表情を歪めた。

「その上から視線も今のうちだけだ！俺は、強くなる！そして貴様たちに雪辱を果たしてみせる。この俺が、このままだで終わると思うなよ……！」

言って強く睨んでくる万丈目に、俺も正面から視線をぶつけて頷いた。

「ああ。その時は、俺も全力で迎え討つ」

「ふん……」

それが最後であった。

万丈目は再び踵を返し、アカデミアの正門を抜けて港のほうへと歩いて行く。いずれ帰って来るだろうことは覚えているが、その間、どうしていたのかを俺はよく覚えていない。

それに、俺の記憶通りに戻って来るのかも定かではない。

俺はそんな心配を抱いていたのだが、どうやらそんな心配はなさそうだ。

プライドの高い万丈目のことだ。自分でああ言った以上、あいつは帰って来るだろう。俺と十代に雪辱を果たすために。

三沢との退学を賭けたデュエル。

その時に三沢のカードを海に捨てるという、デュエリストとして許しがたい行為を行った万丈目だったが、その根っこのほうはきつと変わっていない。

あいつは力をつけて、強さを求めている。汚い手を使うのではなく、デュエリストとして俺たちに勝とうとしているのだ。

三沢に負け、この学園を去ることになってしまったのは、ひょっとしたら万丈目にとっていいことなのかもしれない。

慣れ親しんだ場所ではないほうが、きっと得られるものはあるだろうからだ。

そして、俺に出来ることは、そんな万丈目が帰って来たときに全力で勝負をすることだけなんだろう。

俺は遠ざかっていく万丈目の背中に、そんなことを思うのだった。

万丈目の見送りは早朝のことだったので、俺はその後再び自分の寮に戻った。

今回は俺の我儘であるので、マナには起こしてもらっていない。そのため、部屋に戻ればマナがまだ寝ていた。しかし……。

「なんで実体化してるんだ……」

いつもは精霊の状態のまま寝ているマナ。そりゃまたには実体化して寝ることもあるが、場所をとる心配がないため精霊化していることが多い。昨日もそうだったし、今日部屋を出ていく時もそうだった。

だというのに、戻ってみれば何故か実体化して俺が寝ていたベッドで寝ている始末。

なんでこうなったのか、と疑問に思う。そして、俺はじーっとマナの寝顔を見つめてみる。

うーむ、気持ちよさそうに寝おつてからに。典型的な寝言を口にしたりしないんだろうか。もしそんなことがあれば、起きた時にからかってやれるのだが。

俺がそんなことを考えながらマナの顔を見ていると、突然部屋のドアがノックされる。

いきなりのことに、俺は思わずその場を後ずさり、そしてガツンと身体をテーブルにぶつけた。

比較的大きな音だったためか、マナの顔が少々歪む。そして、その音は扉の向こうにも聞こえたようだった。

『起きているのか？ 入るぞ、遠也』

「カイザー！？ ちょ、ま……」

ガチャリ、とノブが回される。

その瞬間、俺はマナを隠そうと布団をひつつかんで頭からかぶせるようにしてマナを覆う。

そして、部屋に入って来るカイザー。なんとか誤魔化せたかと俺は胸を撫で下ろすが……それは一時の安堵でしかなかった。

布団の中から、俺の名前を呼び、何が起こったのかと騒ぐマナ。そりゃ、いきなりこんなことをされたら動揺するよな、普通は。

そして、扉を開けて、布団を押さえながら冷や汗を流す俺と不自然に盛り上がり動いているつえにしゃべる布団の塊を見つめるカイザー。

沈黙が流れ、カイザーはやがて何かを悟ったようにふつと微笑んだ。

「……邪魔をしたな」

「待て待て帰るなカイザーせめて言い訳くらいはさせろお!？」

足早に部屋を出ていくカイザーと、それに追いつがる俺。

上から押さえていた俺がいなくなったことで、被せられた布団から、ぷはあ、とマナが顔を出す。そして、慌てた様子で出ていく俺を見て、マナはこんなことを呟いていた。

「……ありゃ？ 私、なんかマズった？」

……その後、どうにかカイザーに口外しない約束を取り付けたことを記しておく。

俺が女を部屋に連れ込んだと思っているのはバレバレだったが、それはもうこの際仕方あるまい。

ああもう、朝からドツと疲れた……。

『ねー、遠也。授業はいいの？』

「んー……」

既に太陽がすっかり空に昇り、今頃教室では授業が行われているだろう時間。

俺はなんとなく授業に出る気になれなくて外をさまよっていた。

そんな俺にマナが本当にいいのかと聞いてくるが、俺の答えは茫洋としたままだ。

……まあ、あえて理由を探すならば。朝から万丈目がこの学園を去るといふ事態に、少し思うところがあったともいえる。

ああして、慣れ親しんだ場所を離れていく気持ちは俺もわからないから、そりゃ考えもする。ただ、万丈目は退学となってるわけだが、そこにきちんと自分なりの目的を見つけている。

そこに含まれる感情がどうあれ、それ自体は立派だなと思ったりもするのだ。だからこそ、俺はああまで言われても万丈目のことを嫌いになれないわけだが。

そして、そんな中に朝のあの騒動である。

なんていうか、気疲れに近いものを感じて授業に出る気が起きなかったのだ。

幸い、一度くらい授業をさぼったところで困るような成績でもない。それに、生徒の自主性を重んじるためなのはわからないが、授業をさぼったとしても、あまり強く言われないのがこの学園の特徴だ。

それを知っているため、なおさら教室に足が向かなかった俺は、こうして外に出ているのだった。

ぶらぶらと歩き、なかなか行く機会がない森のほうにも行ってみたり。もちろん、以前行つた廃寮とは逆の方角だ。同じ失敗をして今度は俺が制裁デュエルとなつたらたまらないからな。

無論、迷つたりしても洒落にならないので、あくまで入り口付近の森林浴をする程度の距離にとどめている。たまには自然に囲まれるのもいいもんだ。

「どうだ、マナ。たまにはこうやって羽をのばすことも必要だと思わないか？」

俺が両腕を広げてそう言うと、マナが小さく笑う。

『あは、そうだね。遠也がいいなら、たまにはこういうのもいいかもね』

マナの言葉に、俺は頷く。

「そうだろう。授業は明日も続くんだ。だからこそ、こうして静かな森の中で英気を養うことも」

「万丈目君！ デュエルに負けたぐらいで雲隠れなんて、情けないわよ ツー！」

わよーっ！ わよーっ、わよー……。

突如どこから響きわたった大声がこだまする。驚いた鳥が一斉に木々の中から飛び立っていった。

『……静かな、森の中？』

「静かだった、森の中……かな」



っていうか、今の声って明日香じゃないか？

なんなんだいったい。明日香がいるってことは、十代もいるような気がするし。まあ、なんかに巻き込まれてんのか、あいつら。

マナもまた俺と同じことを考えたのだろう。何とも言えない顔で声がした方向を見ていた。

やれやれ。森林浴もここまでだな。

「じゃ、行くか」

『あはは。そう言うと思ったよ』

楽しげに笑うマナに、笑うなよと言いつつ声のしたほうに走り出す。

この時期って何があったかなあ、と頼りにならない記憶を手繰り寄せながら。

空を飛べるマナに先攻偵察をしてもらい、誘導に従って全力疾走することしばし。

森を抜けた崖にて、俺は十代たちに合流することに成功していた。

「遠也！？ お前、なんでここ、に……大丈夫か？」

「ちょ、ま……っ！ き、っつ……！」

元々森の入口に近いところにいた俺だ。マナのおかげで最短距離だったとはいえ、走り続ければ息も上がる。

十代が驚きの声を心配のそれに変えるほど、俺はちよつと限界だった。

しかし、いつまでもヘタれているわけにもいかない。どうにか強引に呼吸を整えると、俺は周囲の状況を見る。

十代、翔、明日香、ももえの四人と、黒服を着た男二人に目つき  
の悪い爺さんが一人。そして、崖を覗くように生えた一本の木の上  
に、やたらメカメカしい装いの猿と、ジュンコがいた。

状況的に見れば、十代たちがさらわれたジュンコを助けようとしているというところだろう。あの黒服たちは……動物園の人とか？

「で、どういう状況？」

「ああ、実は……」

十代の話を聞くと、行方不明になった万丈目を探して森の中に入ったところ、突然現れたあの猿にジュンコがさらわれ、それと同じくして現れたあの黒服たちがあの猿を追っていったとのこと。

十代たちも放っておくことは出来ず、後を追う。そして、今ここで追いついた、というところらしい。

どうやら闇のデュエルがどうこうとか、危険な話ではなさそうだし、どうにも要領を得ない状況になっているようだ。

「つまり、あの黒服が何者なのかも、あの猿がなんでデュエルディスクつけてるのかも、わからないわけか」

「あ、ホントだ！」

翔がはっとしたように猿の左腕を見る。いや、アカデミアの支給品だし、あんなに目立ってるだろ。

そして、話を聞いていた爺さんがあの猿の正体を話し始める。

なんでもあの猿はデュエルができるように彼らが調整した、被験体の猿なのだそうだ。ということは、あのおっさんたちは動物園の人じゃなくて研究者なのか。

そしてその猿の名前は、英語での名称の頭文字をとり、S A L …なるほど、惣流（Sorry）・アスカ（Asuka）・ラングレイ（Langley）と申したか。

と、冗談はさておき。ジュンコの怖がり具合は洒落になってないな。

あんなに頼りない足場で、下が崖なのだから、それも当然といえる。まして、自分の命を握っているのが言葉の通じない猿なのだ。それは恐怖を煽られもするだろう。

そして、説明を終えた爺さんと黒服たちが、手に持った銃を構えて猿に狙いをつける。恐らくは麻酔銃なのだろうが、さすがに銃で撃たれる場面など好んで見たくはない。

ゆえに、俺は自然と声を出していた。

「ちょっと待った」

「んん？」

振り返る黒服たちに、俺は自らを指さして言う。

「俺がデュエルであいつを倒す。それで、ジュンコを助ける。だから、そんな危ないもんはしまっておいてくれ」

「君がデュエルで、だと？ ……ふむ、そういえば君は見たことがある。なるほど、良いデータがとれるかもしれん。いいだろう」

爺さんが顎の長い髭をさすりながら、黒服たちに待つように指示を出す。それを受けて、俺は持ってきていたデュエルディスクを腕に着け、スタンバイ状態にした。

「大丈夫なの？ デュエルといっても、猿が相手なのよ」

明日香の言葉は、猿相手にデュエルが出来るのか。あるいは意思の疎通なんて出来るのか、ということだろう。

だが、問題ないだろう。十代曰く。

「デュエルをすれば、お互いの心がわかる。……だろ、十代」

「おう！ 任せるぜ、遠也！」

「どつでもいいから、早く助けてよー！」

っと、いい加減ジュンコも限界が近そうだ。

俺は黒服たちの前に出て、猿に相対してディスクをつけた左腕を掲げた。

「聞いてたろ？ デュエルしようぜ。俺が勝ったら、ジュンコを離すんだ」

「あ、アンタが負けたら？」

あ、ジュンコ。わざわざ喋るなよ。猿が気付かず受けてくれれば儲けものだったのに。

「その時は……お、お前の望みを一つだけ叶えてやろう」

「遠也くん、ドラゴンボールじゃないんすから……」

う、うっさいな、考えてなかったんだから仕方ないだろ。

しかし、猿はその約束に了承を返すようにジュンコの傍を離れて前に出てくる。そして、同じようにディスクを構えた。

ありがたい。なら、あとは俺が勝つだけだ。

「いくぞ、デュエル！」

『デュエル!』

遠也 LP:4000

SAL LP:4000

うお、喋った。バウリンガルも目じゃないな。デュエルよりこの技術を研究すればいいのに。

が、後ろの話を聞くとこのシステムはデュエルの言葉しか喋れないらしい。残念だが……それだけでも十分凄い気がする。

先攻は、向こうか。

『私のターン、ドロー』

カードを引き、猿は手札から一枚を選んでディスクに置く。

『私は《怒れる類人猿<sup>バーサークゴリラ</sup>》を召喚! カードを1枚伏せて、ターンエンド!』

《怒れる類人猿<sup>バーサークゴリラ</sup>》

ATK/2000

DEF/1000

怒れる類人猿だと……。ジエネティック・ワーウルフにすっかり存在感を持って行かれた昔のアタッカーじゃないか。

いや、それ以前になんてお似合いのカードを使いやがる。研究者連中は、わざわざこいつのために獣族のデッキを作ったのだから。

「俺のターン、ドロー！」

さて、手札もそんなに悪いわけじゃない。

早速いくぜ。

「俺は手札から《調律》を発動！ デッキから「シンクロン」と名のつくチューナーを手札に加え、その後デッキトップのカードを墓地に送る。俺は《クイック・シンクロン》を手札に加える！」

そして落ちたのは《カードガンナー》。墓地肥やし要員なのに、お前が落ちるんかい。

「そして手札から《グローアップ・バルブ》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更に《レベル・ステイラー》を召喚！」

《クイック・シンクロン》     ATK/700     DEF/1400



《レベル・ステイラー》 ATK / 0 DEF / 600

「レベル1のレベル・ステイラーにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！ 集いし力が、大地を貫く槍となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 砕け、《ドリル・ウォリアー》！」

そして現れる、赤を基調とした身体に右手の大きなドリルが目立つ戦士。首に巻かれた黄色いスカーフがイカす、ドリル・ウォリアーである。

《ドリル・ウォリアー》 ATK / 2400 DEF / 2000

シンクロンのデッキにとって、最初のターンで高レベルモンスターが出ることなどよくあること。っていうか、出てこないほうが珍しいくらいだ。

上手く揃っている時はワンキルも出来るくらいだからな。

「それがシンクロ召喚………実に興味深い」

後ろで爺さんがなんか言っているが、何度も聞いた言葉なので無視する。

「バトルだ！ ドリル・ウォリアーで怒れる類人猿に攻撃！ 《ドリル・ランサー》！」

ドリル・ウォリアーの右手のドリルがぎゅんぎゅん回転し、それを振りかぶって怒れる類人猿へと突き進んでいく。

しかし、怒れる類人猿に直撃する前に、猿の伏せカードが起き上がる。

『速攻魔法《突進》！ 怒れる類人猿の攻撃力をエンドフェイズまで700アップする！』

《怒れる類人猿》     ATK / 2000     2700

怒れる類人猿の攻撃力がドリル・ウォリアーを上回り、迎撃に回る。

そして、ドリル・ウォリアーのドリルを両手でひつつかんで強引に止めると、そのままドリル・ウォリアーを持ちあげて地面に叩きつけた。

耐えきれず破壊され、攻撃力の差分300ポイントが俺のライフから引かれる。

遠也 LP：4000 3700

あの伏せカード、突進だったのか。確かにイラスト的にも獣族にはぴったりだ。

「ふっ、やるな」

「やるな、じゃないわよー！ こ、怖いんだから早く助けてよー！」

ジュンコが猿の後ろで木にしがみついたまま叫ぶ。

本気で怖がっているようで、もう涙声だ。こりゃ、急がないとまずいな。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

『私のターン、ドロー！』

手札を見た猿は、更にモンスターゾーンにカードを置いた。

『私は《アクロバット・モンキー》を召喚！  
ダイレクトアタックそしてバトル！  
怒れる類人猿でプレイヤーに直接攻撃！』

怒れる類人猿が拳で胸を叩きながら、こちらに走って来る。

突進の効果は既に切れているので、攻撃力は2000に戻っているが、これを食らうとライフが半分になってしまう。

ここは防がせてもらうぜ。

「畏カード発動、《ガード・ブロック》！ 俺への戦闘ダメージは0となり、俺はデッキからカードを1枚ドロースする！」

怒れる類人猿の攻撃は見えない障壁に阻まれ、逆に猿のフィールドまで押し戻す。そして、俺はデッキから1枚引いて手札に加えた。

『ならば、アクロバット・モンキーで攻撃！ 《アクロバット・ウツキー》！』

《アクロバット・モンキー》      ATK / 1000      DEF / 1800

機械で身体を覆われた猿が、その名の通り身軽な動きで迫り、その拳で俺を殴りつける。

「くっ……」

遠也      LP : 3700      2700

『私はターンエンド!』

うーん、意外とやられてしまった。

ちょっと、突進が効いたかな。

「遠也くん、大丈夫なんすか!？」

「遠也、本気で早くして〜!」

翔の心配も当然だが、ジュンコからの声はかなり切迫していた。

俺は大声で二人に聞こえるように「大丈夫だ、任せろ!」と叫んで、再び猿と向き合った。

確かにいきなりライフを削られているが、負けるつもりは毛頭ない。ジュンコもかなり限界なようだし、どうにか一気に行くしかないだろう。

「俺のターン、ドロ〜!」

……よし、来てくれたか。

これならこのターンで決められる。

「俺は手札から《シンクロン・エクスプローラー》を召喚し、効果発動！ 墓地の「シンクロン」と名のつくチューナーを特殊召喚する。クイック・シンクロンを蘇生！ レベル2のシンクロン・エクスプローラーにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

クイック・シンクロンが、ニトロ・シンクロンの絵柄をピストルで撃ち抜いた。

「集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上げなれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/2800 DEF/1800

緑色の身体に厳しい顔。戦闘面において遊星を強く支えるエースの1体が、咆哮を上げながらフィールドに現れた。

そして、俺は更に言葉を続けていく。

「更に墓地の《グローアップ・バルブ》の効果発動！ デュエル中1度だけ、デッキトップのカードを墓地に送ることで墓地から特殊召喚できる！ そして《死者蘇生》を発動！ 墓地のカードガンナーを蘇生する！」

一つ目が球根の中から覗く不気味な植物族のモンスターと、次いで墓地から子供が好みそうなデザインのデフォルメされた戦車のよ  
うな機械が蘇った。

《グローアップ・バルブ》 ATK/100 DEF/100

《カードガンナー》 ATK/400 DEF/400

これで手札はゼロだが、準備は整った。

猿には悪いが、ジュンコをあんなところに放置するのは、こっち  
の心臓にも悪いからな。

「レベル3のカードガンナーにレベル1のグローアップ・バルブを  
チューニング！ 集いし勇気が、勝利を掴む力となる。光差す道と  
なれ！ シンクロ召喚！ 来い、《アームズ・エイド》！」

金属的な光沢を放つ、鋭い爪を持った腕。赤い爪が鈍く光を放ち  
ながら、ニトロ・ウォリアーに並ぶ。

《アームズ・エイド》 ATK/1800 DEF/1200

「アームズ・エイドの効果発動！ 1ターンに1度、このカードを装備カードとしてモンスターに装備できる！ 俺はニトロ・ウォリアーを選択！ 更にこの効果で装備されたモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする！」

アームズ・エイドがニトロ・ウォリアーの右腕に装着され、ニトロ・ウォリアーの姿が更に凶悪なものとなった。

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/2800 3800

『うき！？』

さすがにこれだけの高攻撃力には驚くみたいだな。

さあ、このデュエルはここまでだ！

「ニトロ・ウォリアーで怒れる類人猿に攻撃！ 更にニトロ・ウォリアーの効果により、魔法カードを使ったターンのダメージ計算時に1度だけ、このカードの攻撃力は1000ポイントアップする！」

よって、更に攻撃力が1000加わる。

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/3800 4800



「いけ、ニトロ・ウォリアー！ 《ダイナマイト・ナックル》！」

アームズ・エイドの鋼鉄の装甲に、ニトロ・ウォリアーの炎が宿る。

燃え盛る拳を振りかぶり、ニトロ・ウォリアーの攻撃は怒れる類人猿を一撃のもとに破壊した。

『うきうき』

SAL LP: 4000 1200

「更に、アームズ・エイドの効果発動！」

『うきうき！？』

まだあるの！？ とでも言いたそうに驚きの声を上げる猿。

あるんだな、これが。

「アームズ・エイドを装備したモンスターが戦闘によってモンスターを破壊した時、その破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージ

を相手に与える！ つまり、怒れる類人猿の攻撃力2000ポイントのダメージをお前に与える！ これで終わりだ！」

二トロ・ウオリアーが右手から炎の塊を作りだし、それが猿に向けて放たれる。

それは狙い変わらず直撃し、猿のライフポイントを容赦なく削り取った。

『うつきいー！？』

S A L L P : 1 2 0 0 0

デュエルの勝敗が決したことでソリッドビジョンも切れ、フィールドに出ていたモンスターが全て消えていく。

そして、後には項垂れる猿とその前に立つ俺だけが残される形となった。

「やった！ 遠也くんが勝った！」

「これでジュンコも助かりますわ！」

後ろのはしゃぐ声に押されるように、俺は一歩足を進める。

そして、負けたショックを受けているだろう猿に向き合う。こっ  
いう時に声をかけることはあまりしたくないが、こっちもジュンコ  
の身の安全がある以上、ここは許してもらおう。

「約束だ。ジュンコを返してもらおうか」

その言葉に、猿は顔を上げて俺を見る。

そして、ゆっくりと立ち上がるとジュンコのほうへと走り寄り、  
ジュンコを抱きかかえて戻って来た。

『うきい』

そして、そのままそつと地面に下ろす。意外と紳士的な猿だ。

肝心のジュンコはというと、崖の上で放置されるという恐怖から  
脱したせいなのか、その場にへたり込んでいた。

まあ、無理もない。もしジュンコが高所恐怖症だとすれば、それ  
こそ想像も出来ない恐ろしさを味わったに違いないだろうからだ。

そして、ジュンコのもとに明日香や十代たちが駆け寄って来る。

どうにも自力で動けそうにないジュンコを気遣ってのことだろう。  
ジュンコはみんなが傍まで来ると、慰めるために肩に手を置いた明

日香にそのまま抱きついた。

よほど怖かったのだらう。ももえもそんなジュンコを慰めるように、声をかけている。

「あの、助けてくれてありがとう」

「いって、友達だろ」

ジュンコにそう言って返し、俺は再び猿のほうに視線を向ける。

これで、ジュンコのほうは解決した。

あとは……。

「猿。聞きたいんだが、俺が負けた時。お前は何を望むつもりだったんだ？」

この賢い猿が望むこととは何なのか。

それが疑問だった俺が問いかけると、猿がすっと森のほうを指さす。その指の先を、俺たちは一斉に見た。

森の終わり、その草むらにそいつらはいた。野生の猿なのだらう、少々身体が小さいが、恐らくはこの猿と同種と思われる集団が、隠れるようにしてこちらの様子をうかがっていた。

なるほど、脱走したという話だったが、どういふことか。

「お前、仲間のところに帰りたかったのか」

『しぎ……』

「くり、と首肯で答える猿。

そのために、猿は必死の思いで脱走したのだろう。そのあまりといえはあまりな境遇に、俺たちはジュンコをさらったということを引きにして、同情してしまう。

そのジュンコですら、猿の境遇には思うところがあるようで、猿のことを悲しげに見ていた。

しかし、あの爺さんたちにとってそんなことは関係ないらしい。

こちらに歩を進め、にやりとした笑顔で口を開く。

「よくやってくれた。さあ、あとは我々に任せる」

そうするのが当然、という顔で言う爺さん。

さっきまでなら、俺も渡していいかと思っていた。が、コイツの事情を知った今では話は別だ。

そうなるとう当然、俺の答えなんて決まりきっている。

「だが断る」

「なに？」

「この俺が最も好きなことの一つは、YESと言うかと思っっている相手にNOと言って断ってやることだ」

俺がそう言っつて猿と彼らの間に立ち塞がると、それに続いで十代と翔も声を上げる。

「そうだ！ 遠也は猿と約束はしたが、それはアンタ達に返すつて約束じゃあなかつたはずだぜ！」

「そつつす！ このままじゃ、この猿が可哀想だよ！」

女子はジュンコのことがあるのでその場から動かないが、それでもその視線は彼らに批判的だ。

俺たちも猿を背にして三人で守るように彼らに相対する。

しかし、そんな俺たちを爺さんたちは嘲笑うだけだった。

「子供が何を……構わん、捕まえる。ついでに、あの仲間の猿どももだ。実験動物は、多いに越したことはない」

「お前！」

そのあまりの言葉に、十代が怒りをあらわにする。

しかし、その隙に彼らが放った捕獲用のネットが俺たちの横をすり抜けて猿の上へと広げられてしまう。

しまった、と思う俺たちだったが、ネットは空中で突然大きく横にずれ、猿の上にかかることはなかった。

その明らかに重力を無視した動きに、爺さんたちも「何が起こった!？」と慌てている。

だが、俺と十代にはそうなった原因が見えていた。

「ナイス、マナ！」

「助かったぜ！」

『私も、このお猿ちゃんの力になりたかったただけだよ』

杖を回しつつ、マナが微笑む。

さっきはマナが杖の先から魔法を飛ばし、ネットにぶつけて軌道

を変えてくれていたのだ。それのおかげで、猿は捕まることがなかった。

その間に、俺はマナに指示を出す。

「閃光、頼む！」

『うんっ』

俺の言葉に応え、すぐさま杖の先から光を放つ。

それは的確に彼らの視力を奪い、その行動を大きく阻害する。

突然襲い掛かって来る不可思議な事態の連続に、彼らは混乱しきりである。そしてもちろん、その機会を逃すはずもない。

「十代、翔、みんな！」

「おう！」

「うん！」

「ええ！」

ジユンコを明日香とももえが担ぐように支えている。その姿を確認して、俺は頷く。



俺たちの思いは今まさに一つだ！

「全力で逃げるぞ！ 猿も来おい！」

『うき！？』

言っが早いか、既に駆け出している俺たち。

出遅れた猿は、どうにか翔が腕をひつつかんで連れて来ていた。

仲間の猿たちも俺たちの後を追うように森の中へとついてくる。

後ろから聞こえてくる「このクソガキどもがー！」なんて怒声は知ったことではない。

ははは、あばよ、とつつあーん！ 武装した大人に挑むほど俺たちは強くないんだよ、満足同盟じゃあるまいし！ アリーヴェデルチ！

そうして、俺たちは一目散に森の中へと消えていくのだった。

途中、ジュンコを十代が背負うことになり、森の中に行くことしばし。

追ってこないことを確認したうえで、俺たちは腰を下ろして一息つくこととなった。

その間に俺と十代はどうかこうにか猿につけられた機械類を外している。幸い上から装着するタイプのもだったようで、比較的簡単に取り外すことが出来た。

デュエルディスクは猿自身が気に入っているらしく、外していない。

それが終わったところで、ようやく人心地を吐くことが出来た。周りを大量の猿に囲まれながら、俺たちはふうと息を吐く。

「あいつら、また懲りずにやって来るかなあ」

翔がふとそんな疑問をこぼす。

確かに、あの執着心だと探し回りそうだ。

「さあな。けど、こいつも仲間のところに行ったほうがいいに決まってるぜ。その時は、また助けてやるさ、な！」

そう十代が猿に向かって言えば、猿は嬉しそうに手を叩いた。

「その必要はないんだにゃー」

いきなり飛び込んできた人の声に、俺たちは一瞬腰を浮かすが、その声が慣れ親しんだ人の者だとわかると、再び座りなおした。

「お、おどかさないでくれよ、大徳寺先生」

「にゃはは、すまないにゃ十代くん。けど、君たちの心配は杞憂だから安心するといいにゃ」

「大徳寺先生？ どういうことですか？ それに、どうしてさっきのことを……」

その大徳寺先生の言葉に疑問を抱いた明日香が先生に尋ねる。

大徳寺先生は胸に抱えたファラオを撫でながら、その質問に落ち着いて答えていった。

どうも、大徳寺先生は十代たちが万丈目を探して出かけていったことを知っていたらしく、その居所を知っている先生は十代たちを

探していたらしい。

そして森の中に入っていったという話を聞き、なんとファラオの案内で森の中を進んだところ、こうして合流できたのだそうだ。

「そうしたら途中で怪しい三人を見かけたんですにや。アカデミアの教員として事情を聞き、彼らにはアカデミアとしてきっちり処分が下されることになりましたにや。だから、安心するといいいんだにや」

「そういうことだったんですか……」

「さっすが大徳寺先生だぜ！　ありがとうございます、大徳寺先生！」

「ありがとうございます！」

大徳寺先生がこの猿たちのためにしてくれたことを聞き、俺たちは次々に先生に対して感謝を述べていく。

それに、大徳寺先生は照れたように頭をかき、「気にしないでほしいのにやー」と笑っていた。

そして、俺たちは憂いが無くなったところで猿たちと別れることにした。

既に機械を外してあるため、デュエルディスクでしか他の猿と区別が出来ない。群れに戻った猿に、俺たちは手を振って最後の別れ

を惜しんだ。

「じゃあなー！ 今度は俺とデュエルしようぜ！」

十代のその言葉に、猿はデュエルディスクを掲げることのでんえ、仲間たちと共に森の中へと帰っていく。

それを姿が見えなくなるまで見送り、俺たちは森から出るためにアカデミアに向かって歩き始めた。

その途中、大徳寺先生が当初の目的だった万丈目の行方について口を開いた。

「そうそう、万丈目君なんですけど……彼はもうこの島にはいないのにゃ」

「え！？」

大徳寺先生の突然の告白に、十代たちは声を失って驚いていた。

そして、俺は先生の言葉に続けて話し始める。

「万丈目が言ってたぞ。俺と十代に雪辱を果たすために、強くなつて帰って来るってな」

「遠也！ お前、万丈目のこと知ってたのか？」

十代の質問に、俺はもちろんと答える。

「あいつを見送ったのは俺だからな」

「マジかよ！ じゃあ、遠也に電話しておけばよかったのかあ」

森の中にまで探しに来る必要はなかったと知り、十代は溜め息を吐く。

まあ、その代わりにあの猿たちを助けたと思えばいいじゃないか。

「それより、あなたって万丈目君と親しかったの？」

「いや、全然。一度デュエルしてコテンパンにしたぐらいかな」

ああ、だからあなたにも雪辱を果たすって言ってるのね……。

質問してきた明日香は、そんなことを呟いて得心がいった顔をしている。

いや、あれは上手く手札が揃ったのもあったけど。初手で増殖Gがきて、万丈目の戦略が異次元格納庫だったからな。特殊召喚だけだったから、こっちは取れる戦術が増えたんだ。

まあ、運も実力のうちと言えばそれまでだけど。

「けど、どうしてそれなのにお見送りに行かれたんですの？」

ももえが不思議そうに聞いてくるが、俺としては気になっていたからとしか言えない。

気になるにも色々があるが、まあ俺にも十代にも共通して言えることと言ったら、一つだろうな。

「あいつはライバルみたいなもんだからな、俺にも十代にも」

「ライバル？」

あの万丈目君が？ と疑わしげな明日香。

おいおい、1ターンでVWXYZを出したのは正直凄かったぞ。万丈目は絶対に強くなる。今でさえあれだけやれるポテンシャルがあるんだから、あいつが抱える何らかの問題を乗り越えた後なら、たぶん化けるぞ。

「それに、アイツとは楽しいデュエルをするって約束があるからな。それもあって、行ったただだよ」

「へえ、そいつはいいな！ 俺も万丈目が帰ってきたら、またデューエルがしたいぜ！」

俺がそう答えると、十代がおおいに賛同して笑う。

万丈目も、次に会う時には強くなっているだろう。俺と十代は期待と根拠のない自信を下地に、そう告げる。

その言葉に少々疑わしい顔になっている皆だが、積極的に否定する気もないようで、そうかもしれない、と曖昧に納得していた。

万丈目がどうなり、どれほど強くなるのか。俺たちはそんなことを話しながら、アカデミア校舎へと戻っていくのだった。



## 第11話 離脱（後書き）

SAL……アスカの頭文字ってまんま当てはまりますよね。  
くだらないこと書いてすみません。

冬休みに入る前に、どうしても万丈目を書きたかったので、無理やり出しました。

三沢とのデュエルはハブリです。

原作でもあんまり尺がなかったですし、このSSでは取り立てて変わったことを起こすこともできなさそうだったので……ごめんなさい。

次回は冬休みの予定です。

行き当たりばったりながら、頑張って書いていこうと思います。

第12話 休み・海馬1・（前書き）

冬休み編です。

なに書こうか考えていたら、手が勝手に書いて海馬とデュエルしていた。

な、何を言って（ry

ちなみに私、青眼の白龍大好きです。

第12話 休み - 海馬1 -

既に季節は冬になり、窓の外にはうつすらと雪雲の姿が見られるようになっていた。犬が庭を走り回り、猫がこたつで丸くなる季節。

ただし、ファラオは犬と同じように元気に走り回っている。意外と冬にアグレッシブになるタイプらしかった。

そして学生にとっての冬の定番である冬休み。それもまた、アカデミアに迫って来ていたのである。

「そういえば、遠也は冬休みどうするんだ？」

そんな少々冷える日のレッド寮の一室。十代たちの部屋で駄弁っていた折、不意に十代が俺にそう問いかけてきた。

「俺は本土のほうに帰るよ」

俺はそう返し、アカデミアを離れることを告げる。

島に残らないことに、十代に翔、隼人たちは残念がってくれたが、

もともと決まっていたことだっただけに、今更どうしようもない。

そんなわけで、数日後。俺は荷物をまとめてブルーの寮を出た。見送りに来てくれた十代たちに手を振って、本土へ向かうフェリーに乗り込む。

十代たちにはばらく会えなくなるのは正直寂しい。しかし、長く会っていないかった人たちに会うことも大切である。

俺はフェリーの中の一室で、マナと戯れながら時間を過ごす。

久しぶりに踏む本土の土。そして、数か月ぶりに顔を見ることになる人たちに思いを馳せるのだった。

\*

俺には、この世界の戸籍がない。

当然身寄りもなく、また生活の基盤なんてものもあるわけがなかった。

そんなないづくしの俺が頼ったのが、一方的とはいえ見知った存在であった武藤遊戯さん。そして遊戯さんの紹介で戸籍のお世話をしてもらった海馬瀬人さん。更に、二人の紹介で引き合わせてもらったペガサス・J・クロフォードさんである。

一時期は遊戯さんの家でお世話になっていた俺だったが、半年を過ぎた頃にペガサスさんのもとへと場所を移すことになる。

それは、俺が彼らに提示した自分の世界のカードたち。シンクロ、エクシーズと呼ばれるこの時代にはない概念のカードの開発についての協力を求めたのであった。

これらのカードに非常に高い興味を示したペガサスさんは、忙しい合間を縫ってその開発に力を注いでいた。ペガサスさんとしては俺を招聘して協力してほしかったらしいが、俺はそれを断っていた。

当時は自分の置かれた環境に対する戸惑いがひどい時期であり、マナや遊戯さんたち以外とあまり積極的に交流を持つとうという気力が湧いてこなかったのだ。

そのため、ペガサスさんは直接俺を呼ぶのを諦めてくれた。その代わり、時折りネット通信という形での協力は行っていたのだが。

しかし、半年も過ぎると俺の状態もかなり良くなり、自発的に出かけることも多くなっていった。

その時、ペガサスさんから協力の申し出を受けた俺は、それを了承したのだ。

半年前に断ってしまっていたことだが、その時にはむしろ進んで協力したいという前向きな気持ちで溢れていた。

ペガサスさんは、俺の世界のカードを再現することで、この世界でも同じように楽しく過ごしてくれることを望んでいた。俺が塞ぎこんでいるのを心配してのことだろう、と遊戯さんがこっそり教えてくれたのだ。

そんなペガサスさんに、俺が何かお返しをしたいと思うのは当然のことだった。既に気持ちも落ち着いていたため、一層その気持ちは強かった。

そうして、俺はその日から一カ月間I?社の本社へと出向くこととなった。

カードの開発に協力する間、俺はペガサスさんのところへとお世話になり、ペガサスさんは俺に本当によくしてくれた。

一緒に食事をし、同じ家に泊まり、ペガサスさん自身のこれまでのことや、逆に俺自身のことを話したりした。

いったい、俺の何がそんなに気に入られたのかはわからない。ただ、ペガサスさんは本当に楽しそうに俺に笑ってくれていたのは印象深く覚えている。

そして、俺にとってその時間がとても楽しいものであったことは

確かなことだった。

きつと、その時からペガサスさんは考えていたのだろう。

一ヶ月後、日本に帰る時。

ペガサスさんは、いつもの笑顔で俺に手を差し伸べてこう言った。

「もし遠也がいいなら、私と家族になりまシヨウ」と。

俺はその手をすぐにとれず、一旦帰国することとなる。

……そして、その二週間後。俺はその手を取り、ペガサスさんは俺の保護者となった。

それから、ペガサスさんは童実野町に一軒の家を建て、俺はそこに住むようになった。

遊戯さんの家から徒歩で五分という、非常に近い場所。それはき

つとペガサスさんの気遣いだったのだろう。ペガサスさんの本拠である海外ではなく、慣れた場所で俺が暮らせるように配慮してくれたのだ。

大富豪のペガサスさんが建てたとは思えない、ごく一般的な一階建ての4LDK。白い壁が明るさを際立たせる、シンプルながらセンスのいい家だった。

まあ、こんな若造が豪華な家に住んでもしょうがない。そこらへんはペガサスさんも一般的な感性だったということだろう。

ちなみに、マナが入り浸りまくっていたため、ところどころにマナの私物がある。俺の寝室にまで浸食しているそれは、もはや同棲と言っても過言ではないレベルだ。

それに対し、遊戯さんは苦笑。マナの師匠であるマハードは苦い顔をしつつも何も言わず。そして、そのとき偶然帰国していた杏子さんが何故かマナとハイタッチをしていた。

あ、ちなみに杏子さんとは遊戯さんの彼女のような存在（まだ付き合っていないらしい）の人だ。今は海外でプロのダンサーとして活躍しているらしく、日本にはたまに帰って来るんだとか。

遊戯さんとはよく、杏子さんのことが話題になる。俺が遊戯さんに告白を促すと、遊戯さんも俺に告白を促してくる。

そして結局、お互いに何も行動に移さないまま、普通に次の日を迎えるのだ。

そのため、マハードに溜め息を吐かれることもしばしば。少々呆



れたようにこっちを見るその目は主である遊戯さんにも向けられているが、俺たちはその視線に縮こまるしかなかった。すみません、ヘタレで。

まあ、それは置いておいて。

つまり、俺には童実野町にれっきとした自宅があるのだ。そここそが、今の俺にとって帰るべき場所である。

家族になってくれた上、こうまで俺のことを考えてくれるペガサスさんには感謝してもしきれない。

本当に、俺は恵まれている。この世界で出会った人たちのことを思ったび、俺は心の底からそう思うのだった。

「あー……疲れた」

『やっと着いたねー』

キャリアバッグをガラゴロ引きながら歩き、立ち止まった一軒家。表札に「皆本」と書かれたそこは、紛れもない俺の家だ。

ペガサスさんに保護者になってもらった時、我儘を言って残してもらった俺の名字だ。やはり前の世界の家族のことも忘れ難かった俺は、名字を残しておきたかったのだ。幸いペガサスさんは笑って許してくれたので、俺は変わらず皆本遠也を名乗っている。

しかし、あれだ。本土に着いてから、移動を続けていたため、流石に疲労がたまっている。

俺はその疲れを押し出すように一度深呼吸をする。

「ふう……じゃ、入るか」

『うん、久しぶりに帰って来るよね、ここにも』

正確にはマナの家ではないのだが、俺は空気を読んで「そうだな」と答える。

歯ブラシや衣類まで完備してあるのだ。マナも殆ど住人みたいなものなのを否定しがたい事実だからなあ。

そんなことを考えつつ、俺は鍵を取り出して鍵穴に差し込みくると回す。

がちゃん、と鍵が開いた音を聞き、玄関の扉に手をかけた。

やれやれ、ようやく落ち着くことが出来る我が家に帰ってこれ

「おかえりなサーイ！ マイブラ」

ボタン。

いかん、つい閉めてしまった。

『ねえ、遠也。今のって……』

「……ああ。なんでいるんだろう」

この世界ではトップの企業の会長だろう。なんでこんなところで出待ちしている時間があるんだ。

甚だ疑問だが、それについては後回しだ。

ひとまず、素直に家に入るしかないだろう。

俺は一度閉めた扉に再び手をかけ、同じように開け放った。

「ひどいデース。せつかく弟に会いに来たというのに、悲しくて涙が出てきマース」

「……仕事はいいんですか、ペガサスさん」

玄関先でわざとらしく泣き崩れる銀色の長髪が特徴的な男性。どこからどう見てもE？社の会長にして俺の義理の兄でもあるペガサスさんに他ならなかった。

あ、義理の兄っていうのは、保護者となった時に俺を文字通りに家族としてペガサスさんが迎えたためだ。養子にするのが一番やりやすかったらしいのだが、そこはペガサスさんが渋って、結局このように落ち着いた。

なんでも、お父さんと呼ばれるのはまだ嫌だったそうだ。いや、呼ばないですよ俺は。

「仕事は心配いりませーん」

すっく、と立ち上がったペガサスさんは、にっこり笑って俺を見る。

「それよりも、積もる話もありマース。早速上がってください」

言って、俺の肩を叩きどつどつと中へ手招きしてくる。

「ここ、俺の家なんだけど。名義は確かにペガサスさんだけだよ。」

おっと、そうだ。言い忘れてた。

「ペガサスさん」

「ホワッツ？」

「ただいまです」

俺がそう言うと、ペガサスさんはもう一度微笑み、おかえりなさい、とあの独特な口調で返してくれるのだった。

その後、荷物を自分の部屋に置き、ラフな格好に着替えてからリ

リビングへと向かう。

ちなみにマナは違う部屋で着替え中だ。ペガサスさんは精霊を感じることは出来るものの見ることはできないため、マナはそういった人と会う際には実体化する必要があるのだ。

そして、その時にブラマジガールの格好をしているというのもどうかというわけで、私服に着替えている。出かける時とかにも必要となるので、マナはそれなりの数の私服を持っている。そのほとんどが俺の家にあるのは、何とも不思議な話なのだが。

リビングに入ると、ペガサスさんが手ずから紅茶を淹れて食卓で優雅にくつろいでいた。

ティーセットを買った覚えはないんだが……わざわざ持ってきたのだろうか。イギリス人のような趣味の人だ。アメリカ力出身なのに。

ペガサスさんはリビングに入ってきた俺を見つけると、すぐにカップに紅茶を注ぎ、俺が座る席に置く。同じように、俺の後ろから顔を出したマナのものだろう、もう一杯の紅茶を注いでいる。

ありがとう、とお礼を言って俺たちはテーブルに座る。

ちょうど俺とマナが並んで座り、対面にペガサスさんが一人で座る格好となった。

「マナガールはお久しぶりデース。わざわざ実体化までしてくれて、ありがとうございマース」

「いえいえ」

マナが謙遜すると、ペガサスさんは微笑んだ。

そして、どこかコミカルにぼん、と手を打った。

「Oh! そうデース、まずは遠也の近況を聞きたいですネ。お友達は大くさん出来ましたか？」

にこにここと笑って聞いてくる姿に、俺は素直にアカデミアでの生活話を話す。

時折りマナからの補足があったり、互いに見聞きしたことを交えながら、ペガサスさんにここ数カ月で俺が得てきたものを伝えていく。

十代や翔、隼人といった友人たち。アカデミアで起こった事件。その時に俺がどうしたのか。そしてシンクロ召喚のアカデミアにおける普及状況について、などなど。

俺は自分でも驚くほどに饒舌に語る。ペガサスさんという頼れる家族に久しぶりに会ったことで、きつと我知らず浮かれているのだろう。そんな風に思う。

けど、それが不快というわけではない。むしろ、俺自身もこうして自分のことを聞いてくれる人がいることを、嬉しく感じていた。

だから、俺はいかに自分が楽しくやっているかを、ペガサスさんに思うままに伝えていく。それに、義兄はただ微笑んで相槌を打っていた。

そうして俺はノンストップで話し続け、ようやく話も終わりに近づく。その時ふと喉の渇きに気づいた。

ペガサスさんが淹れてくれた紅茶を口に含もうとカップを手に取り、その間隙を見計らって、ペガサスさんが口を開いた。

「……なるほど、やはり、遠也にアカデミアに行ってもらったのは正解だったようデース。とても大切なことを体験できているようで、私としても嬉しい限りデース」

そう言って、ペガサスさんもお茶を飲む。

そして、その表情をすつと引き締めて足元から小ぶりのジュラルミンケースをテーブルの上に置いた。

なんだろう。俺は隣のマナと思わず顔を見合わせた。

「以前、遠也から聞いたカードを作りました。未来において、とても重要なカードだと言っていましたネ。ですから、これは社員に任せず、私自身が一から作り上げたカードたちなのデース」

そして、ペガサスさんはケースを開く。



中には黒い緩衝材が敷き詰められており、その緩衝材にはカードの形のくぼみがある。その数は5枚分。そして、そのくぼみには既にそれぞれカードが収められていた。

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》

《ブラック・ローズ・ドラゴン》

《エンシェント・フェアリー・ドラゴン》

《ブラックフェザー・ドラゴン》

《パワー・ツール・ドラゴン》

黒の中でひとときわ輝く白いカードたち。

未来において、シグナーと呼ばれる人間たちが相棒とするそれぞれのカードが、新品まっさらな状態でそこに存在していた。

俺は思わず顔を見上げてペガサスさんを見る。ペガサスさんは、そんな俺を見て口を開いた。

「不思議なカードたちデース。このカードたちは、生まれながら特別でした。このカードたちは、決して破損しない。いえ、破損しても復活すると言っべきでシヨウ」

「そんなバカな……」

いくらシグナーのカードとはいえ、所詮は紙で出来たものだ。そんなことがあるのだろうか。

しかし、俺の否定の言葉にペガサスさんは首を振った。

「本当デース。一度だけ端が折れてしまったことがありますが、次の日には真っ直ぐになっていました。まるで、自らの意思で来るべき日に備えているかのように」

その言葉に、俺は思わず5枚のカードを見る。一瞬、カードが光を放つ。

目をこすり、もう一度見るが、そんなことはなかった。見間違い……だったのだろうか。だとしても、不思議なカードたちだ。

「これらのカードに加え、あなたの持つ《スターダスト・ドラゴン》は特別なカードデース。私は遠也が持っていたカードのほとんどをコピーしました。しかし、スターダストとその派生のカードについては作っていません。いいえ、作れなかったのデース」

作ろうと思ったことはあったが、何故か次の瞬間にはそれはダメだと感じていたのだという。

それをペガサスさんは、赤き龍と呼ばれる存在の力なのかもしれません、と言った。

「だから、あなたのスターダストを加えた6枚のカードは、正真正銘世界に1枚しか存在していません。……そして、私はこれらのカードを世に放つことにしました。そうすれば、いずれ相應しい者の手に渡ってくれることでしょう」

そう締めると、ペガサスさんは一度目を伏せた。

原作において、シグナーのカードを誰が作ったのか、俺は知らない。不動博士が当時の海馬コーポレーションに頼んだのか、それとも以前から存在していたカードの中から選んだのか……。

どちらにせよ、これらのカードはそうなるべくして生まれたということだろう。そして、この世界においてはデュエルモンスターズの生みの親であるペガサスさん自身が、一から作り上げたカードとなった。

それはまさに特別なカードだろう。シグナーの竜、というだけでなくあのペガサスさん自身が手掛けたカードなのだ。

それを、世に放つ。恐らく、善悪問わずに多くの人間の手を渡っていくことだろう。

しかし、もしこの世に宿命とでも呼ぶべきものがあるとするならば。

カードはきつと、過たずに正統な持ち主の手に渡るに違いない。

このカードたちが放つ不思議な感覚。それを思うと、俺はそれが根拠のない妄想で終わるとは、何故か思えないのだった。

「そう、ですね。俺も、それでいいと思います」

だから、俺はペガサスさんの言葉にこう返す。

ペガサスさんは、満足そうに頷いた。

「遠也なら、きつとそう言うと思っていまシタ」

予想通りだったと笑うペガサスさんに、なんだかわかりやすい奴みたいに思われているのを感じて、わずかにむっとする。

そのことに、小さな悪戯心を刺激された俺は、更に言葉を付け足した。

「でも、スターダストは俺のですからね」

いささか意地を張ったような言い方になってしまったその言葉を受けて、ペガサスさんは一時きよとんと呆気にとられる。

しかし、次の瞬間には大きく口を開けて笑い始めた。

……なんか、そうまで笑われるとかなり恥ずかしいんですけど、ちよつと拗ねたような感じになってしまったのは自覚しているが、それでも大笑いはひどくないだろうか。

俺は、気恥ずかしさも相まって一層むっとした表情を作る。

それを見たのだろう、ペガサスさんは笑いを引つ込めて俺を見た。

「もちろんデース！ そのカードは、遠也にしか似合いまセーン」

笑みと共に心底そう思っている声音で、ペガサスさんは言う。

俺は、それに強がって「当然です」と返すことしか出来なかった。そして、そんな俺を見てペガサスさんとマナは小さく笑うのだった。

それから一時間ほど俺たちは歓談していたが、部下から電話を受けたペガサスさんは慌ただしく帰っていった。

やはり仕事は忙しいままだったらしく、こちらに来るのも少々無理をしていたようだ。

迎えの車が来ると、ペガサスさんは別れをとて惜しんでいた。が、俺が部下の人に迷惑をかけないように、と言うと大げさに手を振りながら去っていく。俺に「いずれアカデミアにも視察で行かせてもらいマース」と残して。

ペガサスさんがいなくなり、俺たちは家の中で一服する。帰って来てからすぐにペガサスさんといたから、結局まだ休めてなかったんだよな。

俺たちは二人してリビングのソファに身体を預け、ひたすらにリラックスした時間を過ごす。

そんな中、俺はデッキケースから一枚のカードを取り出した。

《スターダスト・ドラゴン》……遊星のエースであり、赤き龍の力を備えるシグナーの五龍の1体。

ペガサスさんはそれぞれ一枚ずつ作り、しかしスターダストは俺が持っているから作らなかつた。

ということは、だ。

「このカード、将来遊星の手に渡ることになるのか……」

そう、この世界にスターダスト・ドラゴンのカードは俺が持ち込んだこの1枚だけ。それはつまり、俺が元の世界から愛用してきたこのカードが、そのままいずれ遊星のデッキに組み込まれることを意味している。

そう考えると、何とも感慨深いものを感じずにはいられない。本来この世界のものではないこのカードが、遊星のエースになる。そんなこと、考えもしなかった。

俺も、いつの間にかこの世界の歯車の一つになってるんだなあ。それはきつと当然のことなのだろうが、起源が他の人とは異なる俺としては、やはり感慨深い。

「ん？」

今、スターダストの眼が光ったような……。いやまあ、ウルトラレアのカードだし、光の加減か。

俺は大して気にせずカードをデッキに戻し、ソファに寝転ぶ。

ぼつつとそんな取り留めもないことを考えたり、冬休みの過ごし方をどうするかについても考えを巡らせる。

ああ、そうだ。帰って来たんだし、遊戯さんのところにも顔を出さなきゃ。

そう思い至るも、このソファの感触は実に惜しい。

しばし悩んだ後、俺は隣のマナに聞こえるように声を出した。

「……遊戯さんの家に行くの、明日でもいいかあ」

「そっだねー……」

互いにだらけきった声で、そうしようと同意し、俺たちはソファに寝転がるとゆっくりと瞼を閉じるのだった。

「え、遊戯さんはいない？」

「ええ。来てもらったのに、ごめんなさいね遠也くん」

翌日、遊戯さんの自宅を訪ねると、遊戯さんのお母さんが出てくれた。



それによると、遊戯さんは今いないらしい。どうも、旅に出たそうでいつ帰って来るかもわからないとのこと。

このご時世に旅で。遊戯さんもなかなか自由な人である。

それじゃあ、また来ます。そう返して、俺は遊戯さんのお母さんに頭を下げる。

そして歩き出すが、これで今日の予定が一気にパーになってしまった。

『どうしようか、遠也』

「そうだなー、杏子さんのところか城之内さんのところにも顔を出してみるか?」

『あ、じゃあ私、杏子ちゃんに会いたい!』

はいはい、と手を挙げて主張してくるマナは、嬉しそうに笑っている。

よほど友達と会うのが嬉しいんだろう。

マナと杏子さんはどこで気が合ったのか、かなり親しい関係だ。杏子さんは精霊を見ることは出来ないが、マナの場合は実体化できるので問題ない。

お互いに同じような悩みを持っているらしく、それで気が合うのだと何故かマハードから聞いたことがある。まあ、友達がいるのはいいことだ。なら、いま日本にいるのかは知らないが、訪ねるだけ訪ねてみますか。

「それなら、まず家に帰って着替えないとな」

『うん、そうしよう！』

結論が出たところで、俺たちは自宅に向けて歩き出す。

数分とせず自宅まで辿り着き、その玄関先を見た瞬間……俺はマナに声をかけていた。

「マナ、杏子さんに会うのは諦めなさい」

『……うん、仕方ないね』

マナも俺がそう言った理由を悟ったのだろう。はあ、と溜め息をついていた。

そして、俺は覚悟を決めて玄関先へ向かう。

そこに立っていた人物が、こちらを振り返った。

「ふうん、この俺を待たせるとはな」

約束をしていたわけでもないのに、相変わらず自分本位な人である。

「……お久しぶりです、海馬さん」

俺の返答に、ふん、と居丈高に反応を返してくる。

そう、海馬コーポレーション K C社の社長にして遊戯さんの宿命のライバル。海馬瀬人さんがそこにいた。

しかし、なんだってわざわざ俺の家に？ 人を呼び出すんじゃない、自分から訪ねて来るなんて、珍しいにもほどがある。

シンクロやオートシャツフル機能搭載のデュエルディスクの開発など、俺の持つ完成品が必要となる段階は既に過ぎているはず。何か用があるとも思えないんだが……。

俺がそう思索していると、静かなエンジン音と共に立派な白いリムジンが家の前に停まる。フロントのライトが異様に尖っていて青く塗ってあるうえ、車体のところどころに翼のような装飾がある。

相変わらず、海馬さんの青眼愛は留まるところを知らないようだ。

「本来なら、貴様ごときを迎えになど来ないがな。貴様はモクバと

仲がいい。感謝するんだな」

そう言って、海馬さんはさっさと車に乗り込み、次いで俺にも乗れと告げる。

俺は逆らわずに乗り込み、扉を閉める。そして、それを確認した途端に走り出す車。向かう先は当然、海馬コーポレーションだろう。ちなみに、隣には精霊化したマナも座っている。

しかし、一体全体なんの用なんだ。心当たりが全くないため、一層気になる。そして、その疑問に耐えきれなくなった俺は、対面に座る海馬さんに尋ねるのだった。

「……結局、なんの用なんですか？」

それに対して、海馬さんはふん、と鼻を鳴らした。

「新カードのテストだ」

どこか得意げに言う海馬さんに、俺は首をかしげる。

それで、なんでわざわざ俺を呼ぶ？

しかし、それ以上は何も言わずに海馬さんは黙る。

結局俺もその後何か言うことはなく、そのまま車は海馬コーポレーションへと向かっていくのだった。

KC社に着き、社長と別れて社員の方に案内されることしばし。

新しいソリッドビジョンのシステムなんかを確かめるための広い殺風景な部屋に案内された。

壁は装飾というものが一切なく、下地の灰色一色。四方がそんな感じだが、ある一方の壁だけ天井付近に窓が取り付けられている。その向こうから研究者らしき人たちがこちらを見下ろしていた。

まあ、いかにもな感じの実験部屋だと思ってもらえばいい。とはいっても、実験台のようなものはない。あくまでデュエルの実験なのだ。

俺は既にデュエルディスクとデッキを付けてその部屋の中に立っている。隣には精霊化したマナもいるが、それはこの際置いておこう。

ともかく、俺が言われたのはここでデュエルをすること。それだ

けだ。

相手のことも何も聞いていないが、社長の指示ですと言っただけで何も答えてくれなかった。

そういつわけで、俺はただひたすら相手が来るのを待っている。

そして、いい加減もう帰っていいかなと思いついた頃。俺の対面側の扉がスライドし、そこから対戦相手が現れた。

「準備は出来ているようだな。では、始めよう」

「うすうす予想はしてましたけど、やっぱりあなたですか海馬さん」

俺が若干の呆れを込めて言うと、海馬さんはにやりと笑った。

「貴様ほど新カードのテストに相応しい人物はいない。それに……」

「それに？」

直後、海馬さんが俺を睨んだ。

「この俺に泥をつけた貴様を、この手で叩き潰さねば気が済まん！」

「まだ根に持つてるんですか!?　っていつか、何度か叩き潰されてるでしょ俺!」

「ええい、黙れ!　とりわけ貴様との最後のデュエル……貴様のジャンクごときにこの俺の青眼ブルーアイズが倒されるなど、許しがたい屈辱だった。ここで、それを晴らしてくれるわ!」

拳を握り込み、力説する海馬さん。

確かに、俺と海馬さんが行った最後のデュエルは、俺のジャンク・ウォリアーが青眼を殴り殺して俺が勝った。

あの時の海馬さんは本当に怖かったが、まさかそれを未だに気にしていたとは……。

しかもどうやら海馬さんは本気である。これは、逃げられそうにない。

俺は溜め息をつき、デュエルディスクを構えた。

「ふうん、そうでなくてはな」

対して、海馬さんもディスクを構える。

「手加減はしませんよ、海馬さん」

「ふん、我が最強の青眼が、全て打ち砕いてくれるわ！」

ブルーアイズ

そして、同時にスタートボタンを押した。

「デュエルッ！」

皆本遠也 LP：4000

海馬瀬人 LP：4000

「先攻は俺ですね。ドロォ！」

手札の6枚を早速確認。

……ふむ。まあ、無難とっていい手札だ。

まずはチューナーを呼び込むことが先決だな。

「俺は手札から《調律》を発動し、デッキから《ジャンク・シンクロン》を手札に加え、その後デッキトップのカードを墓地に送ります。よし、ジャンク・シンクロンを召喚し、場にチューナーがいるため墓地の《ボルト・ヘッジホッグ》を特殊召喚！ レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」



レベルの合計は5となる。さて、出てきてもらおうかな、海馬さんにも刺さるあのカードに。

「集いし狂気が、正義の名の下動き出す。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 殲滅せよ、アーリー・オブ・ジャスティス《A・O・J》カタストル》！」

白銀の装甲に、金色の爪。青く光を放つ一つ目のレンズを持つ四足の機動兵器が、フィールド上にて起動した。

《A・O・J カタストル》 ATK / 2200 DEF / 1200

544

「更にカードを1枚伏せて、ターンエンドです」

俺がエンド宣言をしてターンが海馬さんに移る。

しかし、海馬さんはまだドローせず、俺が召喚したモンスターを見て、ほう、と興味深そうな声を漏らした。

「ジャンク・ウォリアーでも、ライブリアンでもない。貴様、まだそんなカードを持っていたのか」

「ええまあ。ただ、コイツは効果がアレなんで、今まで使っていない

「かつたんですけどね」

「興味深い。その能力、俺が見定めてやる。ドロー！」

いや、効果を確かめたいならデュエルディスクに相手の場にあるカードの効果を知る機能あるでしょうに。

しかし、この世界のデュエリストは基本的に相手のカードの効果を確かめることはしないので、俺は言わない。

確かにいちいち「この効果はこうだから云々」と言わずに、ノリで勢いのままにデュエルしたほうが楽しいのは事実だからだ。

単に、面倒くさがっているという意見もあるが、それについては触れないでおく。

「ふうん、いいカードだ。俺はまず《手札抹殺》を発動する」

「《手札抹殺》？」

互いに手札を全て捨て、その後捨てた枚数分ドローするカード。

海馬さんがこのカードを使ったという話は聞かない。新たに投入された可能性が高いが、いったい何故？

疑問に思いつつも、俺はカードの効果を処理していく。互いに手札を全て捨て、捨てた枚数ドローしたところ、海馬さんが口を開い

た。

「墓地に送られた《伝説の白石》ホワイト・オブ・レジェンドの効果を発動。デッキから《青眼ブルーアイズの白龍》ホワイト・ドラゴンを手札に加える。墓地に送られた《伝説の白石》は2枚だ。よって、2枚の青眼ブルーアイズを手札に加える」

「なっ、ほ、ホワイト・オブ・レジェンド伝説の白石!？」

なんでそのカードがここに？

俺はそんなカードこの世界に持ってきてないぞ!？

動揺する俺。そして、その姿を見て、海馬さんが口角を上げた。

「驚いているようだな、遠也。これは、貴様の話に出てきたカードを俺が作らせたものだ。青眼のサポートカードは、この俺にしか使うことの出来ない特別なカード。俺がそれを持たない道理はないからな」

自信満々かつ満足げに頷く海馬さんは、実に得意げだ。

なるほど、それで俺がテスターとして適任というわけか。伝説の白石は、俺の世界に存在したカードであり、この時代にはまだ存在していない。

いや、この世界では青眼は3枚しか存在しない以上、未来におい

ても作られないかもしれない。

そういった意味では、伝説の白石は本当に新カードと言えるのか  
もしれなかった。

しかも、伝説の白石はチューナーモンスターだ。ということとはつ  
まり、海馬さんはシンクロモンスターを手に入れたということだろ  
うか。

俺がそう海馬さんのデッキについて考察していると、海馬さんが  
更に言葉を続ける。

「だが、俺はシンクロなどという寄せ集めの結束になど頼らん。我  
が力は最強の代名詞たる青眼ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンの白龍でのみ示される！ 貴様の世界  
ではシンクロ召喚が主流だったようだが……」

そこで、海馬さんは俺を見て、自信に満ちた笑みを見せた。

「低レベルモンスターの力など借りずとも、我が青眼ブルーアイズは最強のモン  
スター！ そのことを証明してくれるわ！ フハハハハハ！」

海馬さんお馴染みの高笑いが室内に響き渡る。

なかなかテンションが高い海馬さんだが、しかしその自信家つ  
ぶりはある意味尊敬に値すると思う。

そもそも、ここまで特定のカードを愛し、心の底から信頼するデュエリストに俺は出会ったことがない。

ことその点に関しては、おそらく遊戯さんでも敵わない。遊戯さんにとつてはマハードが海馬さんで言う青眼に当たるかもしれないが、アテムの人格が既に存在しない以上、その信頼はアテム以上とはいかないだろう。

だからこそ言える。海馬さんこそ、この世界で最もカード（ただし青眼に限る）を愛しているデュエリストだと。

青眼だけ、という点が海馬さんの性格を如実に表していると言える。言い方は何だが、質の海馬さん、量の遊戯さん、みたいな。

カードへの信頼に質も量もないと思うが、わかりやすく例えるならそんなところだろう。

海馬さんはこと青眼に関してはこの世界の誰よりもカードを信頼しており、きつと並ぶ者はいないと思う。

だからこそ、海馬さんのデュエルは気高く、見ていて爽快なのだと思う。最も信頼するカードを生かし、そのカードのために作られたデッキで勝ち続ける。

いふなれば、海馬さんは世界最強のファンデッキ使いなのだ。

そりゃ見ていて爽快にもなるし、海馬さんに憧れる人も出てくるわけだ。ファンデッキで最強の座に限りなく近い位置に居続けるのは、並大抵のことではないとデュエリストならば誰にでもわかる。

そして、海馬さんが使うのは世界に3枚しかない青眼の白龍のデッキ。海馬さんを特別視する人間が出てくるのは、そう考えると当然だとも思える。

そんな海馬さんにとって、やはり青眼は特別なのだ。

だからこそ、この言いようもいかにもらしいと感じられて、俺は感心すらしそうだった。

が、しかし。

「寄せ集めの結束とは、言ってくれますね」

「ふん、事実だろう」

海馬さんは自身の言葉を訂正せず、言外に覆すつもりはないと言いつつ放つ。

この野郎、このデッキに負けたこともあるくせに。

さすがに俺の相棒たるカードたちのことを、そんなふうに言われて黙っていられるほど俺も温厚なつもりはない。

俺は先程とは違い、力のこもった眼で海馬さんを見据えた。

その視線を受け、しかし海馬さんは気にしていないかのように自身のターンを進めていく。

「俺は手札から《古のルール》を発動する。この効果により、手札からレベル5以上の通常モンスター  
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン  
《青眼の白龍》を特殊召喚する！」

逆巻く風を伴い、海馬さんのフィールドに純白の体躯が眩しく煌めく、美しいドラゴンが舞い降りる。

その青い両眼がこちらを見据え、威嚇するように咆哮する。その姿は伝説と呼ばれるのも納得できるほどの迫力を持っており、真っ直ぐにその視線を受けるだけでも気合を入れねばならぬほどだった。

《青眼の白龍》 ATK/3000 DEF/2500

「そして更に！ 《正義の味方 カイバーマン》を召喚し、効果を発動！ このカードを生贄に捧げ、手札の青眼の白龍を特殊召喚する！」

そして場に現れる、仮面をかぶった海馬さん。

本人が目の前にいるという何とも言い難い状況だったが、俺は突っ込みたい気持ちをぐっところえて推移を見守る。

カイバーマンはやがて光の粒子となって場を離れ、そして代わりに現れたのはまたもや最強のドラゴン、青眼の白龍。

2体がそれぞれ海馬さんの前に立ち、鋭い眼で今か今かと攻撃の瞬間を窺っている。

《青眼の白龍？》     ATK / 3000     DEF / 2500

いきなり2体の青眼の白龍……さすがは海馬さん、といったところだろう。

なかなか迫力のある光景に、俺もソリッドビジョンだとわかっていながら、思わず冷や汗が出そうになるほどだ。

「フハハハハ！ どうだ、これこそ我が最強の下僕しもへ、青眼の白龍だ！ 貴様のチンケな結束とやらも、この圧倒的な力で叩き潰してくれるわ！」

……カッチーン、ですよこの野郎。

海馬さんめ、調子に乗りやがってえ。

いいぜ、そうまで言うなら、まずはその最強をぶち殺す。

低レベルであろうと、低ステータスであろうと、力を合わせれば大きな力を生み出すことが出来る。

それこそがシンクロ召喚だ。まさにカードたちがその絆を深めて力を得ていく、最高にカッコイイ戦術。



まして、俺の信頼するデッキを小馬鹿にするとは、海馬さんにとってはデフォルトであろうとも許せん。

実は毎回デュエルするたびに同じようなことを言われて、そのたびに俺はこうして反発しているのだが……それは蛇足というものでろっ。

何はともあれ、そうまで言われた以上絶対に勝ってやる。

毎回のことだが、俺は意地のようにそう決心し、ブルーアイズ2体の青眼の視線を真っ向から受け止めるのだった。

## 第12話 休み・海馬1 - (後書き)

この世界ではシグナーの竜はこうしてペガサスさんの手でこの時点で生まれたことになりました。

それぞれ世界に一枚という、漫画版でいうプラネット・シリーズみたいな感じですかね。

ライフストリームさんは、パワーツールがワープ進化することによって生まれるので、この場では出てきていません。

しかし、冬休みは何を書けばいいのか。

アカデミアにいないと、オリジナルな展開になってしまうので、何を書いたらいいか迷います。

どうにかこうにかやっていきますので、次も是非読んでやってください。

第13話 休み - 海馬2 - (前書き)

眠い……。

そんな中書き上げて即座に載せました。

これにて海馬戦は終了です。

間違いだらけでしょうが、またよろしくお願いします。

冬休み編もあと1話。

頑張ります。

## 第13話 休み - 海馬2 -

海馬さんのフィールドには2体の《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン。さすがに元の世界でも超がつくほど有名かつ人気のカードだけに、ソリッドビジョンとなった姿には、桁違いの迫力があつた。

対して、俺のフィールドにはモンスターが1体。恐らく、この世界の人間なら、これだけで俺の不利だと悟るに違いない。

だが……。

「いくぞ、遠也！ ブルーアイズ 青眼よ、あのガラクタを粉碎しろ！ 《滅びの爆裂疾風弾》！」

海馬さんが召喚した1体目の青眼が、口を大きく開けてその口腔に凝縮されたエネルギーを形成し始める。

それはやがて紫電を伴う光の玉となり、青眼は首を振るようにしてそのエネルギーを一気にカタストルに向けて解放した。

一筋の光となって、それは狙い違わずカタストルに突き刺さる。

海馬さんは自身に満ちた笑みを見せているが……次の瞬間、その

表情は崩れ去った。

なぜなら、海馬さんの青眼こそが消滅し、カタストルは健在だったからだ。

「馬鹿な……俺の青眼が……！ いったい何が起こったのだ！」

泡沫の幻のように消えゆく青眼を前に、さすがの海馬さんも動揺を隠せないようだ。

俺は、海馬さんに対して口を開く。

「《A・O・J カタストル》の効果です。このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う時、ダメージ計算を行わずにそのモンスターは破壊されるんですよ」

「な、なんだと！？ それでは俺の青眼は……」

「はい。コイツの前では無力ですねー」

ふふん、と得意げにしてみる。

まあ、あれだ。相手のカードの効果を確かめないといつこの世界独特の風習が生んだ弊害つて奴だな。

そんなことを思っていると、射殺さんばかりに睨みつけてくる海

馬さん。調子に乗ってすみませんでした！

「おのれ……！ ターンエンドだ！」

青眼が全く齒が立たなかったことが、よほど腹に据えかねたらしい。

海馬さんの顔に先程までの余裕はなく、メラメラと燃える怒りがそこにはあった。それこそ、背後に炎が見えそうなほどだ。

やっぱり、一部の人にとってこのカードは天敵だな。

「俺のターン、ドロー！」

手札を見て、ざつと確認。

よし、今のうちに出来るだけこちらも態勢を整える。相手はあの海馬さんだ。すぐに何か対策を施してくるに違いない。

「俺は《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更に畏発動、《エンジェル・リフト》！ 墓地のレベル・ステイラーを蘇生します」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

「レベル1レベル・ステイラーにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は6。そして、クイック・シンクロンはドリル・シンクロンをその銃で撃ち抜く。

「集いし力が、大地を貫く槍となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 砕け、《ドリル・ウォリアー》！」

黄色いスカーフをたなびかせ、颯爽と現れるのはロマンあふれる戦士。ドリルだけにね。

《ドリル・ウォリアー》 ATK/2400 DEF/2000

「ドリル・ウォリアーの効果発動！ 自分のメインフェイスに1度手札を1枚捨てることで自身をゲームから除外します！」

その指示を受け、ドリル・ウォリアーがそのドリルで次元の壁に穴を掘り、そこに潜って姿を消す。

次のターンまで、さらば、ドリル・ウォリアー！

「そしてバトル！ カタストルで青眼の白龍に攻撃！」

すると、カタストルは青いレンズがはめ込まれた一つ目をカッと輝かせ、細いレーザーが一瞬空間を走り、青眼に突き刺さった。

本当に細いレーザーだったというのに、たちまち悶え苦しみ、やがて消滅していく青眼。

遠距離戦ではレーザーを使うカタストル。武器は何もその鋭い爪だけではないのだ。

さすがは機動兵器ということか。こいつもまたロマンのある攻撃方法を持っているものである。

「フルーアイズまたしても俺の青眼を……！！」

そして海馬さんの堪忍袋の緒がヤバイ。それに伴い、俺の胃もヤバイ。ストレス的な意味で。

「ターンエンドで」

「俺のターンだ！ ドロー！」



被せるようにしてカードを引く海馬さん。そんなに頭にきていたのか。

「……モンスターをセットしてターンエンドだ！」

さすがに海馬さんもカタストルを突破するのは骨、ということだろうか。海馬さんにしては珍しく、消極的なターンだったと言える。

「俺のターン、ドロー！　そしてこのスタンバイフェイズ、除外されていたドリル・ウォリアーを特殊召喚し、墓地のモンスターカードを1枚手札に加える。俺は《クイツク・シンクロン》を手札に加えます」

《ドリル・ウォリアー》　ATK/2400　DEF/2000

さて、どうしたもんか。

カタストルでセットモンスターを排除し、その後ドリル・ウォリアーの直接攻撃が決まれば、大ダメージが見込める。2400ポイントものライフ差があれば、それはかなりのアドバンテージとなるだろう。

しかし、海馬さんには伏せカードがある。それを除去するカードが手札に来なかった以上、どうしてもあのカードが気になってしま

う。

それに、海馬さんがただ座して待つ人だとは思えない。不用意に攻撃するのは危険すぎるか……。よし。

「俺はドリル・ウォリアーのレベルを1つ下げ、墓地からレベル・ステイラーを守備表示で特殊召喚します。そしてドリル・ウォリアーの効果発動！メインフェイズに1度、攻撃力を半分にしてダイレクトアタックができる！海馬さんに直接攻撃！《ドリル・シュート》！」

「ぐっ！おのれえ……！」

海馬 LP：4000 2800

「更にカストルでセットモンスターを攻撃！」

カストルのレーザーがセットされたモンスターを襲い、カードが反転してその姿があらわになる。

現れたのは、二足歩行をする竜。しかし、その姿は異様であり、首があるところに首がなく、その代わり両腕に当たる部分それぞれに竜の頭がついていた。

「セットしていたのは《ドル・ドラ》だ。よって、破壊される」

ドル・ドラか。また、面倒な効果を持つカードだなあ。

「メインフェイズ2に入ります。俺はドリル・ウォリアーの効果が発動し、手札を1枚捨てて自身を次のスタンバイフェイズまで除外します。更にカードを1枚伏せて、ターンエンドです」

ダンディライオンがいなくとも、これぐらいのことはやってみせるドリル・ウォリアー！

これまでは特に効果を使うこともなかったが、さすがに海馬さん相手にはそれこそ出来ること全てを出さなければ、敵わない。

この世界のライフは4000ポイント。ドリル・ウォリアーの直接攻撃だけでも、4回で勝負が決まる値だ。

できるなら、このまま上手く行ってほしいもんだ。無理だろうけど。

「そのエンドフェイズ、ドル・ドラの効果が発動する！ デュエル中1度だけ、破壊されたターンのエンドフェイズに攻守を1000ポイントにして特殊召喚できる！」

《ドル・ドラ》 ATK/1500 1000 DEF/1200  
1000

墓地から蘇り、再度現れる異様な竜。壁にしてよし、生贄にしてよし。俺の場合はシンクロ素材にしてもよし、と意外と汎用性の高いモンスターだ。

タイムラグがあるのが少々難点だが、それでも効果自体は優秀と言えるだろう。

「そして俺のターンだ、ドロー！ ……ふん」

海馬さんは引いたカードを見つめ、僅かに笑みを見せる。

なんだ、何を引いた？

「まずは、その忌々しいガラクタを消し去ってやろう。ガラクタごときに、この俺のロードを阻むことなど、出来ないと知れ！ 手札から《クロス・ソウル》を発動！」

海馬さんは手札から魔法カードを手にとって見せつけるようにそれを掲げる。

「このカードによって、俺は貴様の場のモンスターを生贄に使用できる！ 貴様の場のA・O・J カタストルと俺の場のドル・ドラを生贄に捧げ……現れる、我が最強の下僕しもへ《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン！」

《青眼の白龍》 ATK/3000 DEF/2500

うおお、またきたよ海馬さんの嫁……。さっき2枚墓地に行っているから、これで3枚目、最後の1枚か。

青眼を召喚出来た海馬さんは満足そうだ。俺の場には守備表示のレベル・ステイラーが1体。ここはクロス・ソウル自身の効果で耐えられるが、次が問題だな。

「クロス・ソウルを発動したターン、バトルフェイズを行うことは出来ない。メインフェイズ2に移行だ。俺は《強欲な壺》を発動し、2枚ドロー！ ふうん、カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

再び青眼ブルーアイズが現れ、海馬さんのほうへと流れが向いているような気がする。

「こっちらで何とか、こっちへといい流れを持ってきたいところだ。

「スタンバイフェイズ、ドリル・ウォリアーがフィールドに帰還。効果により、コストとして捨てた《シンクロン・エクスプローラー》を手札に加えます」

ようし、いきますか。

「シンクロン・エクスペローラーを召喚！ 効果により、墓地からクイック・シンクロンを蘇生します！」

《シンクロン・エクスペローラー》 ATK/0 DEF/700

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

この2体に加え、場にいるレベル・ステイラーのレベルを合計する。

「レベルの合計は8か」

海馬さんが呟いた言葉に頷き、俺は続ける。

「レベル1レベル・ステイラーとレベル2シンクロン・エクスペローラーにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

光の輪と輝く星々が飛び上がり、やがて一つの光へと収束していく。

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

地響きと共にスーパーロボットもかくやといった鉄の巨体がフィールドに馳せ参じる。その巨大な姿は迫力満点であり、青眼にも迫る威圧感があった。

《ジャンク・デストロイヤー》 ATK/2600 DEF/2500

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ このカードのシンクロ召喚に成功した時、素材となったチューナー以外のモンスターの数までフィールド上のカードを破壊できる！ その数は2体、よって2枚のカードを破壊します！ 俺が選ぶのは……！」

海馬さんのフィールドに指を突き付け、宣言する。

「青眼の白龍とその伏せカードです！ いけ、ジャンク・デストロイヤー！ 《タイダル・エナジー》！」

ジャンク・デストロイヤーの胸部から光の波動が放たれる。それが海馬さんのフィールドに届こうかという、その瞬間。

海馬さんの口元がはつきりと笑みの形をかたどった。

「ふんっ、貴様の手など読んでいるわ！ 伏せカードリバーオープン！  
カウンター罠《天罰》を発動！」

「げっ!？」

「手札を1枚捨て、効果モンスターの効果を無効にし、破壊する！  
そのデカブツの効果は厄介だからな。即刻消えてもらおう！」

海馬さんが発動した天罰により、ジャンク・デストロイヤーの頭上に雷が落下する。発していたエネルギー波ともどもジャンク・デストロイヤーは消滅し、結局、俺の場にはドリル・ウォリアーが残るのみとなってしまった。

しかも、このターン既に召喚権を使っているので、これ以上通常召喚は出来ない。

出来ることといえば、墓地のレベル・ステイラーを壁として特殊召喚するぐらい。

そうすればドリル・ウォリアーの効果で除外しても、壁は残る。だが……海馬さんの場には青眼ブルーアイズがいる。そして、次のターンではもう1体何がしかのモンスターが出てくると見ていいだろう。

となると、かなりギリギリの綱渡りになる。そもそもレベル・ステイラーは守備力がゼロなので、貫通効果を付与された場合どうしようもない。



普通ならそんな心配はしないんだが、海馬さんをはじめとするお人たちはピンポイントでこっちが嫌がるカードを引くことがよくある。

ドローは運だ、と言い切れない何かがある以上、警戒はしなければいけないだろう。

幸い、手札には攻撃を防ぐカードもあることだし、ここは様子を見るべきか。

よし。

「俺はドリル・ウォリアーの攻撃力を半分にし、海馬さんに直接攻撃！ 《ドリル・シュート》！」

「ぐう……臆せず向かってきたか」

海馬      LP：2800      1600

「カードを1枚伏せて、ターンエンドです！」

さて、俺のライフポイントは未だに削られておらず、4000ポイントだ。

だというのに、なんだろうこの押されてる感は。やっぱり、デュ

エルに限らず勝負事においては、その場の流れというものが重要だということなのだろう。

この感覚に晒されていると、なおのことそれを実感する。

「俺のターンだ、ドロー！」

海馬さんはカードを引き、そしてすぐさま次の行動に移った。

「俺は手札から《ブレイドナイト》を召喚する！ このカードは、手札が1枚以下の時攻撃力が400ポイントアップする。俺の手札は1枚、よって攻撃力がアップ！」

《ブレイドナイト》    ATK/1600    2000    DEF/1000

銀色の全身鎧に鋼の剣と鉄の盾。まさに完全武装という言葉がふさわしい騎士が、その持てる力を漲らせてグツと剣を握る手に力を込めた。

そして、その切っ先をこちらに向ける。

「バトル！ ブレイドナイトでドリル・ウォリアーに攻撃！ 《ブレイド・アタック》！」

ブレイドナイトがドリル・ウォリアーに接近し、その剣を上段から一気に振り下ろす。それを右手のドリルで受け止めるドリル・ウォリアーだが、力を増したブレイドナイトに押し切られ、そのまま叩き斬られてしまった。

「くっ……」

遠也    LP：4000    3200

ドリル・ウォリアーの本来の攻撃力は2400。だが、直接攻撃の際にはその攻撃力が半分になる。

そういった効果を持つモンスターは他にもいるが、大抵はエンドフェイズに攻撃力は元に戻ったりするのが普通である。

その点、ドリル・ウォリアーは珍しく半減させたらずっとそのままというモンスターだ。例えば自身の効果で除外するなどしてしまえば元に戻るが、この状況でそうすると場が空きになってしまつたため出来なかった。

そのため、ブレイドナイトの2000から半減した1200を引き、800ポイントが俺のライフから引かれる。

これは、仕方がないものだと思って諦めるしかない。

「ふん、これで邪魔するものはいなくなつた。覚悟はいいか、遠也。  
ブルーアイズ  
ゆけ、青眼！ 《滅びの爆裂疾風弾》！」  
バースト・ストリーム

青眼の攻撃が放たれる。

さっきの攻撃は甘んじて受けたが、さすがにこれは通さない！

「畏発動、《ガード・ブロック》！ 俺への戦闘ダメージはゼロとなり、デッキから1枚ドロウします！」

放たれた攻撃は不可視の壁に阻まれ、俺には届かない。

そして、俺はデッキからカードを1枚引く。

「ほう、防いだか。ならば俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

ふふん、と得意げにターンを終える海馬さん。

確かに今のところ俺のほうが不利だ。何の効果も持たない通常モンスターといえど、やはり攻撃力3000は大きい。ブレイドナイトだけならどうとでもなるが、青眼もとなると、手は限られてくるだろう。

「俺のターン、ドロー！」

とはいえ、ハンドアドバンテージでは俺のほうが圧倒的に有利。海馬さんは0枚だが、俺は4枚もあるのだ。

当然、取れる手段は多くなる。

ここはとりあえず、青眼を除去しなければ話が始まらない。というわけで、まずは青眼に的を絞ろう。

「俺は《ジャンク・シンクロン》召喚し、効果により墓地のシンクロン・エキスプローラーを特殊召喚します。更に、場にチューナーがいるため、墓地からボルト・ヘッジホッグを守備表示で特殊召喚！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《シンクロン・エキスプローラー》 ATK/0 DEF/700

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

「レベル2シンクロン・エキスプローラーにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》      ATK / 2300      DEF / 1300

お馴染み、紫がかった青い鋼鉄の身体に、赤く光る二つのレンズがイカす、ジャンク・ウォリアーである。

拳を突き出し、フィールドに立ったそいつに、海馬さんは眉をかめた。

「ふん、そいつか……」

機嫌が悪そうだけど、この後の展開はそれに更なる拍車をかけそうで怖い。

まあ、やるしかないわけですけども。

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！ シンクロ召喚に成功した時、自分の場のレベル2以下のモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力をアップする！ 《パワー・オブ・フェローズ》！」

俺の場にいるボルト・ヘッジホッグのエネルギーがジャンク・ウォリアーに送られ、それを得たジャンク・ウォリアーの攻撃力が上昇していく。

《ジャンク・ウォリアー》 ATK / 2300 3100

攻撃力が3100となり、青眼を戦闘破壊可能圏内に収めた。

「更に手札から《光の援軍》を発動します。デッキトップから3枚のカードを墓地に送り、デッキからレベル4以下の「ライトロード」と名のつくモンスターを1体手札に加えます。俺は《ライトロード・ハンター ライコウ》を選択」

墓地に落ちたカードは、おろかな埋葬、サンダー・ブレイク、貪欲な壺……どうしてこうなった。

けどまあ、仕方がないと思うしかない。こればかりは運だからなあ。

「そして、バトル！ ジャンク・ウォリアーで青眼の白龍に攻撃！  
《スクラップ・フィスト》！」

ジャンク・ウォリアーが勢いよく飛び出していき、強く握り込んだ右拳を振りかぶる。推進力をそのままに渾身の力で叩きこまれた一撃に、さしもの最強のドラゴンも耐えきれず、その身を光の粒子へと還元されてしまう。

そして、海馬さんのライフポイントに攻撃力の差分、100ポイントがマイナスされた。

海馬 LP:1600 1500

しかし、そんなことなど気にならないらしいのが今の海馬さん。

わかりやすく表情を歪め、ジャンク・ウォリアーを睨みつけている。

「許せん……！ 果たしてもその鉄屑の寄せ集めに、この俺の青眼フルーアイズがやられるなど……！」

憤怒を表し、握った拳をワナワナと震わせる海馬さん。

確かに以前は今と同じく、ボルト・ヘッジホッグで攻撃力が上昇したジャンク・ウォリアーに青眼を殴り殺され、それがそのままフイニッシュとなったことがあった。

俺がアカデミアに向かう前、海馬さんとした最後のデュエルでの話だ。

あの時の海馬さんも怖かったが、同じことを再びやられた今は、それ以上に怖い。

俺は海馬さんの様子に冷や汗を流すことしか出来なかった。



『うーん、相変わらずプライドが高いなあ、海馬くんは』

そして、暢気にそんなことを言っているマナ。驚くことに、こいつ、海馬さんのことを君付けである。

本人に聞こえていないから何も問題はないが、聞こえていたら文句を言ってきそうだ。

きつと、遊戯さんの言い方が移ったのかもしれない。マナが直接海馬さんと接することなんてないだろうし。

「俺はターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！」

怒りの表情のままカードを引いた海馬さんは、手札に加わったカードを見て笑みを浮かべる。

よほどいいカードを引いたのだろう。挑発的な笑みと共に俺を見た。

「俺は手札から《命削りの宝札》を発動！ 手札が5枚になるようデッキからカードをドローし、5ターン後に手札を全て捨てる。ドロー！」

勢いよくカードを引き抜いた海馬さんは、そのカードたちを見て肩を震わせる。

くく、と漏れ聞く声からして、笑っているようだ。これは……やばいかもしれない。

「フハハハハ！ どうやら、貴様の命運も尽きたようだ。その鬱陶しい鉄屑もろとも、引導を渡してくれるわ！ まずはブレイドナイトを生贄に捧げ、《エメラルド・ドラゴン》を召喚する。そして、手札から魔法カード《龍の鏡》ドラゴンズ・ミラーを発動！」

《エメラルド・ドラゴン》 ATK/2400 DEF/1400

全身がエメラルドで構成された美しいドラゴンが降り立ち、更に海馬さんのフィールドに大きな鏡が現れる。ドラゴンを象った装飾が施されたそれは、鏡面が何故か波紋のように歪んでいる。

「っていうか、龍の鏡ってことは、まずいな。これで海馬さんが出すカードなんて、限られてるじゃないか。」

内心で焦りを感じている俺とは対照的に、海馬さんはテンションも高く言葉を続けていく。

「俺のフィールド、墓地から融合モンスターカードによって決められたモンスターを除外し、ドラゴン族の融合モンスターを融合召喚する！ 俺が選択するのは当然、墓地に眠る3体の青眼の白龍！」ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン

そう宣言すると、鏡に3体青眼が映り込み、それぞれが混ざり合  
って一つの姿へと変化していく。

そして、鏡面からゆっくりと融合後の姿がフィールドに実体化し  
ていく。

「3体の青眼フルーアイズを融合し、現れる究極の下僕しもへ！  
《青眼の究極竜》！」フルーアイズ・アルティメットドラゴン

龍の鏡が砕け散る。その圧倒的な力に鏡が耐えきれなかったのだ  
ろうか。

そう思えるほど、鏡面から姿を現したそのドラゴンは威容の一言  
に尽きる。

光を照り返し美しく輝く白銀の巨体。その身体からのびる首は三  
つあり、それぞれの頭部でその名の通りの青眼が風格を伴って煌め  
いている。

最強のモンスターである青眼の白龍。この世界に存在するわずか  
3枚の全てを使ってでしか召喚できない、文字通り世界で1枚しか  
存在しないカード。

海馬さんにしか召喚できない最強のドラゴンが、その翼を大きく  
広げて威圧するように俺の目の前に降り立った。

《青眼の究極竜》 ATK / 4500 DEF / 3800

「バトルだ！ フルアイズ・アルティメットドラゴン 青眼の究極竜でジャンク・ウォリアーに攻撃い！  
《アルティメット・バースト》オ！」

究極竜の持つ三つの頭それぞれの口腔に光が集束していく。それらはやがて三つの大きな光玉となり、それだけではなく三つの首は寄り添ってその光を一つに纏め、より巨大なエネルギーへと変化させていく。

そして、三つ首の中心で一層威力を増したその光玉が、一筋というにはあまりにも太く大きな光線となって、ジャンク・ウォリアーに向けて放たれる。

その暴力とあっていい圧倒的な力に、ジャンク・ウォリアーは抵抗することも出来ずに破壊されるしかなかった。

遠也 LP : 3200 1800

「フハハハハ！ これこそ強靱、無敵、最強、三拍子そろった究極の一撃だ！ まだまだ安心するのは早いぞ！ 速攻魔法、《エネミーコントローラー》を発動！ その1つ目の効果を選択し、貴様の場のネズミを攻撃表示に変更する！」

「なっ!?!」

エネミーコントローラーの第一の効果は、相手フィールドのモンスター1体の表示形式を変更する効果。

これで、低攻撃力のポルト・ヘッジホッグが無防備にその姿を晒すことになってしまった。

「ゆけ、エメラルド・ドラゴン！ その貧弱なネズミを薙ぎ払え！  
《エメラルド・フレイム》！」

「ぐあつ……！」

遠也 LP：1800 200

一気にライフが持っていかれた。加えて、モンスターも全滅。

これは、本当にやばい。

「更に、伏せカードオープン！ 《異次元からの帰還》！ ライフポイントを半分払い、除外されている自分のモンスターを可能な限り俺のフィールドに特殊召喚する！ 戻って来い、3体の青眼よ！」

「くつ……！ そいつはさせないぜ、海馬さん！ チェーンして伏せカードオープン！ 速攻魔法《異次元からの埋葬》！ 除外されているモンスターを3体まで選んで墓地に戻す！ 俺は海馬さんの青眼の白龍3体を選択する！」

「ふん、上手くかわしたか。俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

海馬 LP:1500 750

危なかった……。最初にこのカードを伏せてなかったら、今で完全にやられていた。

海馬さんのライフはこれで更に減ったが、気休めでしかないな。既に俺のライフもたったの200しかない。一撃で吹き飛ばすような値だ。

このターンで何か対策を施さなければ、次のターンで俺は負ける。

「俺のターン……ドロー！」

手札に来たのは、《クイック・シンクロン》……その他の手札は、《チューニング・サポーター》、《ライトロード・ハンター ライコウ》、《クリッター》で、全てモンスターカードだ。

一応、シンクロ召喚は出来る。だが、できるのは墓地を考慮してもレベル5、6、7、8のモンスター。そして、ジャンク・ウォリアー、カタストル、ドリル・ウォリアー、ジャンク・デストロイヤーが既に墓地に行っているのだ。

アーチャーは、除外してもエンドフェイズに戻って来てしまえば次のターンでやられてしまうし、エメラルド・ドラゴン不倒せない。二トロ・ウォリアーならエメラルド・ドラゴンを倒せるが、ライフポイントを削りきれない。ロード・ウォリアーもわかりだ。それに、伏せカードもある。迂闊に攻撃するのは危険すぎるだろう。

俺には伏せカードも既にないだ。せめてジャンク・デストロイヤーのような除去効果のあるカードがあれば話は別だったんだが……。

ん、待てよ。チューニング・サポーターを使えば、1枚ドロイできる。俺はまだ1枚も除去カードを引いていないから、デッキにはサイクロンが2枚と大嵐が1枚、残っているはずだ。

墓地にもそれなりにカードがあり、手札はモンスターだらけ。次で引く可能性が全くないわけではない。

それに、ジャンク・デストロイヤーで思い出したが、まだ対抗できるモンスターが俺にはいた。

ここは、それに賭けるしかない。頼むぞ、俺のデッキ。

「いくぞ、海馬さん！ 俺は手札から《クリッター》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更に《チューニング・サポーター》を通常召喚する！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《チューニング・サポーター》 ATK / 100 DEF / 300

「チューニング・サポーターの効果により、このカードのレベルを2として扱います。レベル2となったチューニング・サポーターにレベル5クイック・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計が7となり、2体のモンスターが飛び上がる。

やがてエフェクトにより光があふれ、その中から1体のモンスターが現れる。

「集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 吼えろ、《ジャンク・バーサーカー》！」

赤い鎧を纏い、自身の身の丈を超える巨大な斧を持った戦士。顔つきはほとんど鬼のようで、強面である。そのうえ、身体も大きく、それより巨大な斧を片手で担いでいる時点でその膂力の強さが窺える。

狂戦士の名は伊達ではないということだろう。

《ジャンク・バーサーカー》 ATK / 2700 DEF / 1800

「ほう、初めて見るカードだ。だが、俺の青眼の究極竜には遠く及

ブルーアイズ・アルティメットドラゴン



ばんな」

ふふん、と得意げに言う海馬さん。だが、それはフラグだぜ。

「シンクロ素材となったチューニング・サポーターの効果でカードを1枚ドロウします。……ドロウ！」

このドロウで全てが決まる。

引いたカードをゆっくり表に向け、その名前を確認する。

そこに記された名前は……《サイクロン》！

「よしっ！ 俺は手札から《サイクロン》を発動！ 海馬さんの伏せカードのうち……俺から見て右側のカードを破壊します！」

宣言すると同時に、サイクロンのカードから竜巻のような強風が起こり、それは俺が指定した伏せカードを表向きにしてそのまま破壊される。

伏せてあったのは《聖なるバリア -ミラーフォース-》。いいカードを破壊出来た。

これで、恐れるものはない。

「ジャンク・バーサーカーの効果発動！ 墓地の「ジャンク」と名のついたモンスター1体を除外し、相手フィールドの表側表示モンスター1体の攻撃力を除外したモンスターの攻撃力分ダウンさせる！ 俺は《ジャンク・デストロイヤー》を除外し、その攻撃力分2600ポイント青眼の究極竜の攻撃力がダウンします！」

「なに！？」

《青眼の究極竜》 ATK/4500 1900

ジャンク・デストロイヤーの幻影がジャンク・バーサーカーに乗り移り、ジャンク・バーサーカーが悲哀の雄叫びを上げる。すると、その切迫した叫びに究極竜は僅かに怯む。

仲間であるデストロイヤーの無念を糧にしたバーサーカーが、ゆつくりとその巨大な斧を振りかぶった。

「いけ、ジャンク・バーサーカー！ ブルーアイズ・アルティメットドラゴン 青眼の究極竜に攻撃！ 《スクラップ・クラッシュ》！」

口元から唸り声を洩らしながら、地響きと共に究極竜に迫る。そして、振りかぶった斧を容赦なく振り下ろした。

しかし、その瞬間。ジャンク・バーサーカーと究極竜の間に時空の渦が出現し、バーサーカーの攻撃はその渦に阻まれて究極竜に届

かない。

驚いて海馬さんを見れば、ちょうど伏せてあったもう一枚のカードがゆっくりと起き上がるところだった。

「ふ、カウンター罠《攻撃の無力化》が発動した。お前のモンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

伏せられていたのは、ともに攻撃反応型の罠カードだったのか。

バトルフェイズが終了した以上、俺に出来ることはもう何も無い。

「……………ターンエンドです」

相手の場に、ジャンク・バーサーカーを超えるモンスターはいない。

だが、相手は海馬さんだ。恐らく……………。

「俺のターン、ドロ―！」

手札が0から1へ。そして、引いたカードは　　。

「魔法カード《死者蘇生》！ 墓地の《青眼の白龍》ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンを復活させる  
！」

《青眼の白龍》 ATK/3000 DEF/2500

手札がゼロかつこの状況で引くカードが《死者蘇生》とか。

もう、ここまでくると感嘆するほかないな。

再び場に現れた青眼の白龍を、俺はそんな心地で見つめる。俺の  
ライフに引導を渡す伝説のドラゴンが、光をその身に集めていった。

「ゆけ、ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン青眼の白龍！ ジャンク・バーサーカーに攻撃！ 《滅び  
バースト・ストリームの爆裂疾風弾》！」

集束した光が帯状の光線となってバーサーカーに降りかかる。狂  
戦士にそれに耐えきる力は残されておらず、やがて光の奔流の勢い  
に吞まれてその姿を消していった。

遠也 LP:2000

デュエルに決着がつき、ソリッドビジョンも消えていく。幻のよ  
うに消え去った青眼たち。やっぱり、ソリッドビジョンって凄いわ。  
再び殺風景に戻った部屋を見ながら、俺はそう思っていた。

しかし、くっソー。あれだけ馬鹿にされたから何としても勝ちたかったが、やっぱりそう上手くはいかないか。

いいところまではいったんだが、あと一歩が足りなかった。すまん、俺のデッキ。海馬さんも悪気はなかったと思うから許してやってくれ。

俺が内心でそんなことを考えていると、向こうから海馬さんがこちらに向かって歩いてくる。そして、俺の目の前に立つと、腕を組んで胸を張った。

「ふん、よくやったと褒めてやるぞ。我が青眼フルフェイスに臆さぬのは、貴様や遊戯ぐらいのものだ」

「はあ、ありがとうございます」

城之内さんとかはどうなんだろうか。あの人が怯えるとも思えないんだけど。

まあ、名前を出して不機嫌になられても困るから言わないけども。

しかし、やっぱり負けたのは悔しい。せめて引いたカードがサイクロンではなく《大嵐》だったなら、話は違っていたのに。そう考えれば、紙一重といえそうさ。負けた以上、言い訳でしかないけどさ。

「だが、本気を出せぬようではデュエリストとしては未熟だ」

続けて言われた言葉に、俺は思わず海馬さんの顔を凝視する。

「知ってたんですか？」

「ふん、ペガサスから聞いている。この俺相手に不快極まりないが、奴にも釘を刺されているからな。貴様がどういつデッキを組もうが、俺の知ったことではない」

いや、不快極まりないって言ってるじゃん。

突っ込みは内心でするだけに留めて、俺は海馬さんに言われたことについて考える。

実際、俺はこのデッキに制限を自ら課している。

出すまいと決めたこのデッキ最強のドラゴンのことや、ダンディライオンを始めとするこの世界では使いつらいカードたち。

そもそも、俺の本来のデッキは遊星デッキをベースにしたガチに近いデッキだ。それを調整しなおし、【シンクロン】ベースの遊星デッキにしたのは、この世界に来てからのことだ。

それは強すぎるから、という理由ではない。事実、そのデッキでも遊戯さんには負けている。

ただ、それとは異なる俺の趣味全開で作ったデッキでデュエルがしたかった。それだけだったのだ。

だが、確かに俺が本気を出すということはそのデッキを使うことになるし、当然切り札も出すことになる。

それをしない以上、本気じゃないと言われても反論はできない。

だが、あくまで今の俺の本気はこのデッキだ。せつかくソリッドビジョンなんてものもあって、迫力満点のデュエルが出来るんだ。楽しまなきゃ損ってもんだろう。

「まあ、そっちについては、いずれということだ。それで、俺はこれからどうすれば？」

「ふん、テストが終わった以上、もう貴様に用はない。一応、今回の謝礼は出してやる。あとは好きにしろ」

そう言って、海馬さんは背を向ける。フリーダムな人である。

あ、そうだ。最後に気になったことを一つ。

「海馬さん」

呼び止め、足を止めてくれる。その背中に声をかけた。

「今回のデュエルなんですけど……ぶっちゃけ、新カードのテストよ  
り、俺にリベンジしたかっただけなんじゃ……」

最後まで言い終わる前に、海馬さんは鼻を鳴らして颯爽と歩き去  
っていった。

あれは、なんだろう。凶星ととればいいんだろうか。

『あはは、相変わらず面白い人だね、海馬くん』

「……あの人にそんな評価が出来るのは、お前だけだと思う」

可笑しそうに笑うマナに、俺はそう素直な感想を述べる。

海馬さんもまさか裏で面白い人だなんて言われているとは思って  
もないだろうな。それを聞いたときにどんな顔をするのか見てみ  
たい気もしないでもないが……後が怖いからやめておこう。

俺は海馬さんが出ていったドアから外に出て、KC社の人から謝  
礼をもらう。バイト代みたいなものだろう。

受け取ったそれを財布の中にしまい、俺は社員の人に見送られて  
ビルから出る。

行きは迎えの車が来たが、帰りはそういうものはなさそうだ。



仕方なく、俺は近くの駅に向かうことを決めた。

あの謝礼、交通費も込みなのかな、とそんなことを考えながら。

### 第13話 休み・海馬2・（後書き）

これにて海馬戦は終了です。

あとはもう1話だけ冬休みのお話を書きます。  
それでアカデミア編へと戻る予定です。

明日は休みだし、出来るだけ書いておきたいなあ。

遠也は一つ大きなプレイングミスをしています。

修正しようとする大変面倒なことになりそうですので、ひとまず  
プレイングミスとしておきます。  
ごめんなさいでした。

## 第14話 休み・星屑・（前書き）

冬休み編最後のお話です。

これを最後に、次回からは再びアカデミアに舞台が移ります。

今日のデュエルのキーカードは……《スターダスト・ドラゴン》です。

## 第14話 休み・星屑・

冬休みの中頃、マナと二人でグータラ過ごしていたそんな最中。

突然家の電話にペガサスさんから連絡が入り、俺はその内容に驚くことになる。

「シンクロ召喚の実演？」

『そうデース。今度童実野町で我が社がイベントを開くのですが、遠也にはそれにシンクロ召喚を行う手本として参加してほしいのデース』

どうも先日ペガサスさんが家にいたのは、そのイベント関係で仕事があったかららしい。仕事で童実野町にいたからこそ、ああして時間が作れたということだったようだ。

ペガサスさんによると、童実野町で開かれるそのイベントで、そろそろ実装も近いシンクロ召喚についての説明を行う予定のようだ。

ただ、やはり口頭だけよりも実演したほうが理解しやすく、お客さんの受けもいい。最初は社員が行うことも考えたのだが、場所が童実野町ということもあって、俺にも一応聞いてみたのだとか。

暇だとすれば、いい時間つぶしになるだろう、とペガサスさんが気を利かせてくれたようだ。

実際問題、それほどやることもないし、参加するのも面白そうだ。

「わかりました。引き受けますよ」

『WAO！ 助かりマース！ ぜひマナガールも誘って、一緒に来てくだサーイ』

「そのつもりですけど……なんで、わざわざ？」

俺としては当然そうする気でしたが、ペガサスさんが指定するということとはマナにも何か用があるのだろうか。

俺がそう訝しんで聞くと、ペガサスさんは『オーノー！』とオーバーにリアクションを取った。

『鈍いですネー、遠也。デートで彼女にカッコイイ姿を見せるのは、基本中の基本デース！ このイベントを利用して、もっとマナガールと親密』

ガチャン。

俺は無言で電話を切った。

「恩人であり家族だが、ここは言わせてもらおう。余計なお世話だバカヤロウ。」

すると、こちらの様子をつかっていたマナが寄って来る。あまりにも俺が唐突に受話器を置いたのを、不思議に思ったのだろう。

「どうしたの、遠也。ペガサスさんはなんて？」

「あの人、どんどん世俗にまみれていくな」

明らかに質問の答えになっていないそれに、マナは「どういふこと？」と首をかしげている。しかし、わざわざ説明するのもアホらしい。

俺はカレンダーに近づき、冬休みも終わりが近いその日にをつける。

そして、イベントの日、と書き込んだ。

「イベント？」

「ああ。今度やるカードのイベントで、シンクロの実演やってくれってね」

俺はマナにそう答えると、さっき切ってしまった電話をもつ一度

手に取る。

細かい打ち合わせなんかもあるからだ。まったく、今度は余計なことは言わないでもらいたいものだ。

そうして、電話をかけるとすぐに繋がった。

「もしもし」

『遠也は照れ屋さんですネー。もっと』

ガチャン。

もう少し時間を空けてからまたかけよう。そう思った。

\*



そして、イベント当日。

童実野町の街中にある広場を貸し切って行われるそのイベントには、多くの人が訪れていた。

テーブルが並べられたデュエルスペースや、食事などが出来る出店の数々。カードのパックも当然売っており、ここでしか買えない限定パックをエ？社が用意したため、非常に賑わっている。

ちなみにその限定パックには、レアカード扱いでシンクロモンスターが入っている。入っているものの中には、ペガサスさん曰く《ジャンク・ウォリアー》もあるらしい。

シンクロ召喚の代名詞といえばこれだけに、実に嬉しいことだ。無論、それ以外の種類も入っているが、この世界でのレアカード扱いなので、かなり出づらいそうだ。

具体的には10箱に1枚あるかどうかの確率になったらしい。それでもこの世界では出やすいレアカードに分類されるんだから恐ろしい。

実際に公式のデュエルに使用できるのは俺が二年に上がったころ以降になるらしい。俺はテスターという立場もあって公式の大会でも使えるようだが、一般ではそれぐらいになるようだ。

まあ、俺が大会OKなのは、学生だから授業もあつて出られないと向こうもわかつているからだろ。確かに、そんなものに出ている暇はない。

とはいえ、チューナーを含め全てそろえてデッキを組む以上、それ以上に時間はかかるだろうな。いきなり慣れないデッキで公式大会に臨む人も少ないだろうし、本格的な普及はだいぶ先になりそうだ。

……あと、ペガサスさんは膨大に用意したカードの中に一枚だけ《パワー・ツール・ドラゴン》を混ぜたらしい。

今どこにあるのかはペガサスさんでももうわからない。

他のカードは大会の賞品にしたり、と様々な方法でそれぞれ手放していくようだ。

こうして、シグナーの龍は来る日に備えて転々としていくことになるのだろ。できるだけ、良い人の手に渡ることをカードのためにも祈っておこう。

……しかし、さすがはカードが社会に浸透している世界だな。人々の関心の高さが半端ない。

バックを買いに来る人も国籍様々だし、わざわざ来日したんだろ。テレビカメラもあるし、かなりの気合の入れようだ。

そんなイベントをこんな小さな町でやろうというのだから、無茶

である。これも決闘王<sup>デュエルキング</sup>である遊戯さんが暮らす街であり、KC社があり、かつE？社の支社もある、というのが影響しているんだろう。それでもたいして大きな混乱がないのは、頻繁に行われるカード関係のイベントに慣れたということらしい。もちろん開催する側も、客側もだ。

童実野町って、もうこの世界の中心でいいんじゃないだろうか。そんなことを思う俺だった。

「えい」

そして、今何故か俺はリンゴ飴を頬に突きつけられている。

人生の中で、そんな経験をする日が来るとは露ほども思っていなかっただけに、非常に衝撃的である。

「……なにやってんの、マナ」

リンゴ飴を頬にくっつけたまま、それを手に持ち差し出しているマナをジト目で睨む。

それに、マナはちょっとだけ気まずそうに笑った。自分の分のリンゴ飴をなめながら。

「うーん、その……緊張してるんじゃないかなと思って」

テレビカメラとかもあるし、と付け足して、マナはぺろりと飴をひと舐め。

そして、まさにマナの言うとおりだった俺は「うっ」を声を漏らして言葉に詰まった。

確かに俺は緊張していた。さすがに、テレビカメラの前で何かをする経験なんて、前の世界を通じて一回もない。緊張するなというほうが無理だと思う。

そのため、つらつらと無意味に現状を思い起こしてみたりして誤魔化していたのだが、どうやらマナにはバレバレだったようだ。

俺は溜め息をつき、頬にくっついたリンゴ飴を受け取る。

「……ありがとう」

「えへへ、どういたしましてー」

照れ隠しに俺はリンゴ飴を舐め、マナは頬についた飴をウェットティッシュで拭いてくれている。

少々恥ずかしいが、別段いまさら気にしたりはしない。俺はマナにされるがままになりながら、周りに視線を巡らせる。

こちらに恨めしげな視線を向ける男たち。そして、なんだかキヤーキヤー言っている女性陣。どう見ても晒し者です、本当にありがとうございました。

やはり、人前ですることではなかった。そう思っていると、その人ごみの中で、知り合いの姿を発見する。こちらを驚愕の目で見ているそいつに、俺は声をかける。

「おい、三沢ー！」

すると、声をかけられた三沢は一瞬肩を震わせ、そして恐る恐るこちらに近づいてくる。

隣のマナも俺が呼びかけたことで気がついたようで、「あ、本当だ」と呟いていた。

近づいてきた三沢は、俺の隣を気にしつつ俺に対して口を開く。

「や、やあ遠也。君なら、きっと来ていると思ってたよ」

そう言って少々ぎくしゃくした態度を見せる三沢に、俺はマナに手を止めさせてから向き直る。

「シンクロの実演があるからか？」

「ああ。シンクロ召喚といえば君だからな。……それで、そっちな子は？」

三沢が気になっていたのだろう、すぐにそう聞いてくる。

それに対して答えたのは俺ではなく、マナだった。

「はじめまして、三沢くん！ マナっています、よろしくね」

「こ、こちらこそ。よろしく」

互いに小さく頭を下げ、挨拶を交わす。

俺は三沢にマナとの関係を簡単に説明し、その後は少しだけ場所を移動する。

そして、腰を下ろせる場所で雑談を始めた。

「なに！？ 遠也が実演をやるのか！？」

「ああ。ペガサスさんから頼まれてさ」

それぞれ適当に買ったジュースを飲みながら、俺はここにいる理由を三沢に話す。

その理由に、三沢は大層驚いていた。やはり、こういうのは社員やプロデュエリストなどがやるものだとはかり思っていたようだ。

「なんだか知り合いの口から世界的有名人の名前が出てくるのは変な気分だな……しかし、遠也が実演か。ある意味納得だな」

「どついう意味だ？」

突然頷いた三沢に、俺は尋ねる。

三沢は、それに少しだけ笑って答える。

「なに、だって君が一番シンクロナ召喚には詳しいじゃないか。テストターとして実際に使っているんだから」

「まあ、なあ。けど、これだけカメラなんかもいるんだぜ。緊張するよ……」

言って、目の前に広がる雑踏に目を向ける。

絶え間ない人の声と足音に紛れて、カメラとマイクを携えた人たちが何人も見える。間違いなく、世界初公開となるシンクロナ召喚の実演を撮りに来ているのだろう。

つまり、必然的に俺が映るということ。ああ、気が重い。

頂垂れる俺に、三沢は苦笑を浮かべる。

「おいおい、いつもの強気な姿はどうしたんだ。アカデミアでは、既にカイザーに並ぶ実力者なんだから、もっと自信を持ってもいいだろう」

「デュエルとは違うだろー……まあ、やるからにはしっかりやるけどさ」

俺は三沢の言葉にそう返し、ジュースの残りを煽るようにして一気に口に含む。そのヤケ食いならぬヤケ飲みのような姿に、三沢はやれやれと肩をすくめた。

「あ、明日香さんだ」

突然、マナが口を開く。

あまりにも唐突なそれに、俺と三沢は揃ってマナを見て、次いでその視線の先を目で追う。

すると、そこには確かに私服姿の明日香がいた。そして、なんだか男の人に絡まれている。どう見てもナンパだった。

あ、眉を怒らせて何か言った。そして男が固まっている間に、その前から離れる。その時、こちらを見ている俺たちに気づいたらしく、驚いた表情を浮かべた。



しかし、すぐに笑みを浮かべてこちらにやって来る。マナが大きく手を振り、それに明日香は小さく手を振って応えていた。

「お久しぶりね、遠也、マナ、三沢君」

「おっす」

「うんっ」

「久しぶり、天上院くん」

にこやかに俺たちに合流してくる明日香。

そして、「天上院くんも来ていたんだな」「デュエリストとして見逃せないイベントでしょう?」と会話を始める。

それを見つめながら、俺はさっきのナンパ男とのやり取りが気になっただけで仕方がなかった。

だから、興味のままに聞いてみる。

「なあ、明日香」

「なに?」

「さっき、あの男に何を言ったんだ?」

俺の言葉に、明日香は「見てたの？」と聞いてきたので、俺は頷く。すると、気まずげに目を逸らして「助けてくれてもよかったじゃない」と文句を言ってくる。

いやいや、その前に自分で解決してたじゃん、と言えば溜め息を吐かれる。更に小声で「遠也といい、十代といい、うちの男はもう……」と呟く明日香。何故だ。

まあいいや。俺はもう一度明日香に尋ねる。あの男に何て言ったのか、と。

すると、明日香は笑顔になった。何故だか背筋が寒くなるというオマケつきである。

「聞きたい？」

と、その顔で言うものだから、俺は即座に首を横に振った。

隣では三沢も思わず腕をさすっている。きっと、今の俺と同じ気分を味わったのだろう。

そして、向こうでは何故かマナが明日香の肩をポンポンと叩いている。今までのやり取りに、そんな何か共感するものでもあったか？ まあいいや。

その後、俺、マナ、三沢、明日香という何とも珍しいメンバーで

雑談に興じる。明日香にも俺の今日の役割を話すと、初めは驚いていたが、すぐに「なら、楽しみにさせてもらおう」と言って笑う。

他人事だと思って……。そう思うが、こうして四人で話しているとき、なんだか緊張もほぐれてきたような気がするから不思議だ。

俺の気分が和らいできたのをマナも察したのか、俺の横でニコニコと笑っている。そしてその笑顔を見てまた気持ちを緩ませる俺は、きつと相当単純に違いない。

我がことながら、わかりやすいことだ。だが、まあそれはそれでいいのだろう。そう思い、俺は笑みを見せるマナに同じく笑顔を返すのだった。

そんなこんなで件の時間がやってまいりました。

偶然会った三沢と明日香に頑張れと送りだされ、マナと俺は指定されたステージのほうへと向かう。

もちろんただの広場にステージなんてものがあるはずはないので、

これはI?社の人がこの日のために用意した特設ステージだ。特設とはいっても、とてもそんな即席のものとは思えない立派なものだ。野外コンサートのステージにも見劣りしない大きく豪華なものとなっている。そこらへんは、やはり見た目も宣伝には大事だからだろう。その狙い通り、大型のモニターをバックに据えたステージは、会場でも一際目立っていた。

俺はそのステージの裏に回り、ひとまず待機している。マナは精霊化して俺に寄り添うように浮いている。

緊張はするが、だいぶ気持ちは落ち着いてきたし、マナがいるから一人じゃない。そう思えばだいぶ気は楽になる。

ちなみに今ステージにいるのはペガサスさん。会長自ら進行を務めるとは誰も思っていなかったようで、会場の視線はしっかりステージに注がれている。

さすが、と言うべきなのだろう。本人は果たしてこれを仕事と思っているのか分からないほどにノリノリで予定をこなしているが。

『あ、遠也。 出番だつて』

と、ペガサスさんがこれからシンクロ召喚の実演を行うと宣言する。

それを同じく聞いていたマナが俺にそう促す。

それに頷き、俺は腰を浮かせてステージのほうに向かう。

愛用のデュエルディスクを左腕に着け、しっかりとデッキもセツトする。それを確認して、俺はステージへと上がった。

ステージから見る景色は、全く経験したことのないものだ。

見渡す限りの人の群れ。広い会場に敷き詰められた大勢の人の姿は、それだけで気圧されるほどだと言っても過言ではない。

しかし、よくよく考えてみれば大勢の前に立つのって初めてじゃないことを思い出した。入学試験や月一試験……あれは生徒ばかりだったがそれでも、かなりの大人数だった。

さすがにここまで多くはなかったが、それを思えば今更必要以上に緊張を感じることもない。

それに……最前列には明日香と三沢もいる。ペガサスさんが俺の友人だと知り、特別にその席に招待してくれたのだ。

知った顔が傍にいることもあり、俺は幾分リラックスしてペガサスさんの隣に立った。

『皆サーン！ 彼がシンクロ召喚を実演してくれる、皆本遠也君デース！ 彼は我が社が選んだシンクロ概念のテスターでもありマース。いわば、この世界で最もシンクロ召喚に長けた人物デース』

そうマイクで話しつつ、俺の肩に手を回す。

その紹介を受け、俺はぺこりと頭を下げる。そして何故か沸き起こる拍手。なぜ今拍手なのかはわからないが、とりあえずもう一度頭を下げた。

『では、これからシンクロの実演を行います……やはり相手がいなくては皆さんもつまらないでショウ。というわけで、こちらで相手を用意していマース！』

え、聞いてないんですけど。

俺は驚いてペガサスさんを見る。しかし、ペガサスさんはウインクするだけで何も答えてはくれなかった。

対戦する俺が知らないってどういうことなの。観客は盛り上がってくれてるけど、俺としては相手が気になってそれどころじゃないんですが。

『それでは、どうぞデース！』

そうして、ステージの奥に向けて下からスモークが噴き上がる。もちろんその煙によって奥は全く分らない。

そして、やがて煙が晴れていく。会場中がその向こうから現われるであろう人物が誰なのか、固唾をのんで見守る。

そして、煙が晴れきった先には。

「……誰もいない？」

そこには、誰もいなかった。

ただ煙が噴き出しただけで、その奥の景色には何の変化もない。このことに、俺はもとより会場も困惑に包まれる。

しかし、そんな中で一人笑みをこぼす人物がいた。

『フフ……イツツ、ジョーク！ 今のは冗談デース。そして、その対戦相手は既にこの場にきています。そう、遠也の目の前に、ネ』

両手を広げ、大げさにポーズを取った後。ペガサスさんは意味深な顔で自らを指さす。

それが意味することがわからぬほど、俺も馬鹿ではない。

「相手は、ペガサスさんってことですか」

『ザツツライト！ 私もこう見えてデュエリストなのデース！ というわけで、会場の皆サーン！ ここは一つ、私と彼のデュエルをぜひ楽しみ、そしてシンクロモンスターの力をその目に焼き付けていってくださいー！』

そうマイク越しに呼び掛けたペガサスさんは、その直後、俺に向き直る。

『もちろん、社のためとはいえ勝ちを譲るつもりはありませーん。デュエリストとして、全力でお相手させていただきまショウ！』

ペガサスさんがそう宣言した途端、ワツと歓声上がる。

それもそのはず。今でこそペガサスさんはデュエルから離れているが、もともと最強のデュエリストとして君臨していたこともある実力者なのだ。

その事実はまだあまりにも有名であり、また経営に専念するためにデュエルを止めたことも皆知っている。そして、一線から退いたからこそ、そのデュエルを見る機会は既にゼロに近い。

それをここで見る事が出来るというのだから、興奮もしようという事なのだ。



そして、それは観客だけでなく俺も同じことだ。

これまでの一年。接する機会が多かったペガサスさんだが、シンクロのことや俺自身のこともあって、デュエルをしたことは一度もない。

この場でそういうことになるとは予想外だったが、デュエルモンスターズの生みの親 ペガサス・J・クロフォードとデュエルできるなんて、デュエリストとしての血が黙っていない。

俺は我知らず浮かんでくる笑みを抑え、社員の人からデュエルディスクを受け取っているペガサスさんを見る。

それに気づいたのか、その視線を合わせてペガサスさんは小さく笑った。

「フフ、こうしてデュエルするのは初めてですネ、遠也。年甲斐もなく、ワクワクしてしまいマース」

「それは、俺の台詞ですよ」

既に緊張なんてどこにもない。

こうしてデュエルをする以上、それだけに集中すればいいのだから。

ペガサスさんはデュエルディスクをひと撫でし、俺と距離をとる。司会進行として持っていたマイクは既に社員の方に渡しており、そ

の手は既にカードを引くためだけにあった。

互いに向かい合い、デュエルディスクを構える。

「それじゃ、よろしくお願いします。ペガサスさん」

「こちらこそ。まだまだ現役でもいけることを教えてあげマース」

その様子を見てとってから、マイクを受け取った社員が掛け声をかけた。

『それでは、開始!』

「デュエル!」

皆本遠也   LP:4000

ペガサス   LP:4000

「先攻は私デース。ドロー!」

カードを引いたペガサスさんは、手札を見てふつと微笑んだ。

そして、カードたちを愛おしげに見つめる。

「……この感覚、久しぶりデース。こうしてまた、このカードで戦うことに、喜びを感じマース」

そして、その視線を俺に向ける。

「私にとって、素晴らしい世界。きっと、遠也もこの愛らしいカードたちの魅力を知ることになるショウ。……私は、手札から魔法カード《トウーンのもくじ》を発動し、デッキから「トウーン」と名のつくカードを手札に加えマース。《トウーン・キングダム》を手札に加え、そのまま発動デース！」

ペガサスさんが発動を宣言すると、フィールドにポンツとコミカルな音を伴って一冊の本が現れる。

そしてそのページが勝手にめくられていき、やがて西洋の城が本の上に現れる。それはまるで、子供のころに見た“飛び出す絵本”をそのまま持ってきたかのような光景だった。

「デッキの上からカードを5枚除外して発動しマース！ このカードはフィールドに存在する限り「トウーン・ワールド」として扱います。そして更に《トウーン・マーメイド》を守備表示で特殊召喚デース！」

《トウーン・マーメイド》 ATK / 1400 DEF / 1500

現れたのは、《弓を引くマーメイド》がトウーンと化して、デフォルメされたモンスター。

ペガサスさんしか使わないカードだからか、ソリッドビジョンではあるが、ゆらゆらと身体を揺らし、こちらを見て笑うなどの演出つきである。

トウーン・マーメイドは通常召喚できず、トウーン・ワールドがなければ特殊召喚できないモンスター。更に、トウーン・ワールドが破壊されれば自壊し、攻撃の際もライフを500ポイント払わなければ攻撃できない。

その代わりに、トウーン・ワールドが存在する限り、直接攻撃が可能である。

いわゆる“初期型トウーン”というやつだ。同じモンスターに《ブルーアイズ・トウーン・ドラゴン》《トウーン・デーモン》《トウーン・ドラゴン・エッガー》がある。

ちなみにトウーンには更に2種類あり、それぞれ“後期型トウーン”“例外型トウーン”と分けられる。

そしてそれぞれに共通するのが、トウーン・ワールドが破壊された時に自壊する効果。また、トウーン・ワールドがある限り直接攻撃できるという効果だ。

前者はデメリット効果だからいいが、後者はかなり厄介だ。どうにかして、それを防ぎつつ攻略していかなければならない。

「更に私はカードを1枚伏せてターンエンドデース」

ペガサスさんのフィールドに1枚の伏せカードが浮かび上がり、そのターンを終える。

そして、ペガサスさんは俺に呼びかけるように声を出した。

「さあ！ 私に見せてください！ シンクロモンスターの力を、その姿を！」

ペガサスさんのノリノリな姿に、俺は苦笑を浮かべる。

これもきつと、エンターテイメントの一つなのだろう。お客さんにアピールをして、その期待感を煽っているのだ。

まあ、本人が楽しみに行っているのもあるだろうが。実際に対戦相手として見るのは初めてだろうから。

そして、そんなペガサスさんの言葉に、俺が返す答えなんて決まっている。

「言われなくても！ こいつらが俺のデッキの要ですからね！ ド

ロー！」

引いたカードを加え、手札を確認する。

そして、俺はただいつものように手札からカードを選んでディスプレイに置いた。

「俺は、手札からモンスターカード《レベル・ステイラー》を墓地に送り、チューナーモンスター《クイック・シンクロン》を特殊召喚します！」

《クイック・シンクロン》      ATK/700      DEF/1400

テキサスのガンマンのような風体、大きめのカウボーイハットをくいつと銃で上げる動作を見せるモンスターの登場に、会場がざわめいた。

ところどころから、「あれが例の……」「さっきペガサス会長が説明していた……」という声が聞こえてくる。

先程俺がステージに出る前に、ペガサスさんが説明していたシンクロ召喚に必要な新たな区分のモンスター。チューナーというそれを見て、観客は興味深そうにクイック・シンクロンを見ている。

俺はその視線を感じながらも、ペガサスさんを見つめ続ける。

そして、俺は更に言葉を続けていく。

「墓地の《レベル・ステイラー》の効果発動！ レベル5以上のモンスターを1つ下げ、墓地から特殊召喚できる！ クイツク・シンクロンのレベルを1つ下げ、蘇れ、レベル・ステイラー！」

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

墓地から背中に1つ星を背負ったテントウ虫がフィールドに戻る。

これで、レベルの合計は5。こうして、この場に出すモンスターなんてアイツしかないだろう。

「俺はレベル1のレベル・ステイラーに、レベル4となっているクイツク・シンクロンをチューニング！」

クイツク・シンクロンが虚空に現れたルーレットからジャンク・シンクロンを撃ち抜く。

そして、2体のモンスターがフィールドから飛び立ち、空中でその姿を変えていく。

クイツク・シンクロンは4つの光る輪へ。レベル・ステイラーは輝く1つの星へと。

そして、その星が4つの輪を潜り抜ける時、眩いばかりの光があふれる。会場中が、そのどこか幻想的な光景をじっと見つめていた。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！」

瞬間、一際光が強くなり、その中から1体のモンスターが飛び出してきた。

「シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

光を切り裂き、紫がかった鋼の身体を持った戦士がフィールドに立つ。赤く光る二つのガラスの瞳が相手フィールドを見据え、そちらに向かってその右拳を力強く突き出した。

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 DEF/1300

そして、ジャンク・ウォリアーは一旦拳を下ろして俺のフィールド上にて静止する。

そこまでが過ぎたところで、シンとなっていた会場から一気に歓声が上がった。



『きゃっ』

思わずマナが驚きの声を上げてしまっただけ、それは爆発的なものだった。

その歓声は大半が「すごい」「かっこいい」というものであり、非常に好意的なものだということがわかる。

中にはジャンク・ウォリアーの姿を見て微妙、と言っている人もいるようだが……その人とはきつとわかりあえないに違いない。こんなにカッコイイのに。

そして、そんな人たちに対し、ペガサスさんからマイクを渡された人が、再びシンクロ召喚の説明を行っている。今の召喚がどのように行われたのか、丁寧に説明していた。

「フフ、シンクロ召喚。これまで見向きもされなかったカードにも手を差し伸べる戦術、ですネ？」

俺はペガサスさんの言葉に頷く。

「ええ。低レベルだろうと、低ステータスだろうと、力を合わせれば大きな力になる。それがシンクロ召喚です。むしろ、シンクロ召喚にとって低レベルであることはメリットでしかない場合がほとんどですからね」

レベルの調整がきく、という理由だけでシンクロ召喚にとっては大きな助けだ。たった1枚のレベル1モンスターの存在が、戦況をひっくり返すことだってあるのだから。

さて、話もいいがまずはデュエルも続けなければ。せつかくのペガサスさんとのデュエル、楽しまなければ損だ。

「いくぞ、ペガサスさん！ ジャンク・ウォリアーでトゥーン・マーメイドを攻撃！ 《スクラップ・フィスト》！」

ジャンク・ウォリアーが飛び上がり、勢いをつけてトゥーン・マーメイドに迫り拳を突き出す。

しかし、その瞬間ペガサスさんがふつと笑みをこぼした。

「トゥーン・キングダムの効果発動デース！ デッキトップのカードを1枚墓地に送り、トゥーンモンスターの破壊を無効にしマース！」

ペガサスさんがデッキトップのカードを墓地に送り、それを受けたトゥーン・マーメイドは背後の貝が蠢いて両腕を形成する。そして、その腕をクロスさせ、ジャンク・ウォリアーの拳を受け止めてしまった。

破壊できず、俺の場に戻るジャンク・ウォリアー。やはり、トウ

ーンは相手にすると厄介だな。だが、今はまだ序盤だ。これぐらいのことは当然と思うべきだろう。

「俺はこれでターンエンドです！」

ターン終了を告げ、ペガサスさんにターンが移る。

「私のターン、ドロー！」

カードを引き、ペガサスさんはすぐに行動を起こした。

「私は《トウーン・キャノン・ソルジャー》を守備表示で召喚します！」

《トウーン・キャノン・ソルジャー》    ATK/1400    DEF  
/1300

これまたデフォルメされたキャノン・ソルジャーが現れる。

こいつは“後期型トウーン”に分類され、通常召喚が可能かつその際に《トウーン・ワールド》が必要ない点で初期型トウーンと分けられる。つまり、トウーンの専用デッキ以外にも組み込めるモンスターということである。

っていつか、それはこの際関係ない。こいつ自身が持っている効果  
果が厄介だ。面倒なモンスターを召喚してくれたもんである。

「そして《クロス・ソウル》を発動しマース！ このターン私はバ  
トルフェイズを放棄し、代わりに自分の場のモンスターの代用とし  
て相手の場のモンスター1体を生贄に利用できるのデース！」

なんてカードを使ってくれやがるんですか！

この間の海馬さんといい、このカード伝説のデュエリストの間で  
流行ってんのか？

「そしてトゥーン・キャノン・ソルジャーの効果を発動デース！  
自分フィールド上のモンスター1体を生贄に捧げ、相手ライフに5  
00ポイントのダメージを与えマース！ 私はクロス・ソウルによ  
り遠也の場のジャンク・ウォリアーを生贄に捧げ、遠也のライフに  
500ポイントのダメージを与えマース！」

ジャンク・ウォリアーが光を放ち、ペガサスさんの場へと移動す  
る。そして、トゥーン・キャノン・ソルジャーはそのジャンク・ウ  
ォリアーを引つつかみ、光の玉へと変換させると、それを口に含ん  
で、背を反らした。

そして、反らしていた背を戻す反動を利用して、口から一気にそ  
れを撃ち放つ。

それはみごとに俺自身に命中し、俺のライフを削っていった。

遠也      LP：4000      3500

「私はこれでターンエンドデース」

ターンを終えたペガサスさんのフィールドを見る。

あちらの場にはモンスターが2体に伏せカード1枚。対して、こちらはガラ空き。まったくもって厄介な状況である。

周囲も俺の劣勢を見て若干拍子抜けのようだ。まあ、これだけ最初のほうでこうなっちゃなあ。

だが、俺は気にしない。そもそも観客のためにデュエルをしているんじゃないんだ。もちろん、シンクロの実演のことは忘れていないが、俺がデュエルをすればそれは自然と出来ている。

なら、俺はただデュエルに真剣に臨めばいいだけだ。

『頑張れ、遠也！』

こうして、横で応援してくれている奴もいるんだ。

頑張らなきゃ、男が廃るってもんだらう。

「俺のターン、ドロー！」

手札を確認し、取るべき手段を頭の中で思索する。

そして、俺はカードを一枚手に取った。

「手札から《おろかな埋葬》を発動し、デッキから《ボルト・ヘツジホッグ》を墓地に送ります。そして《ADチェンジャー》を墓地に送り、2枚目のクイツク・シンクロンを特殊召喚！ 更にチューナーが場にいるためボルト・ヘツジホッグを特殊召喚！ 更に《チューニング・サポーター》を召喚！」

「その瞬間、畏カードが発動しマース！ 《トゥーンのかばん》！ 「トゥーン・ワールド」がある時、相手がモンスターの召喚に成功した場合、そのモンスターをデッキに戻しマース！ ここでレベル1のモンスターは危ないですからネ。チューニング・サポーターにはデッキに戻ってもらいましょウ」

カードから大きなカバンが飛び出し、チューニング・サポーターを飲みこんで消えてしまう。ああ、これでデストロイヤーを召喚出来ればトゥーンを破壊出来たのに。

しかし、さすがはペガサスさん。ここでそんな畏カードとは。

「くっ、でもチューナーと素材モンスターは確保できた」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

2体のモンスターが俺のフィールドに並ぶ。

このターンでトゥーンを攻略出来なくなったのは残念だが、それならそれで出来ることをやるだけだ。

「俺はレベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

結果として伏せカードが無くなった。ある意味でそれはありがたい。これで、安心して行動できるんだからな。

「集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

全身が緑色で、顔が厳しい鬼戦士。ニトロ・ウォリアーが咆哮を上げて場に現れる。

そのいかにも強そうな姿に、会場も息を飲んで推移を見守る。

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/2800 DEF/1800

「更に手札から《闇の誘惑》を発動！ デッキから2枚ドロし、その後手札の闇属性モンスターを除外します。2枚ドロ！ よし、俺は《ジャンク・シンクロン》を除外します」

周囲は、何故このタイミングで魔法カードを？ と疑問に感じる人もいる。

だが、このモンスターにとっては、このタイミングこそ重要なのだ。

「更に墓地の《ADチェンジャー》の効果発動！ このカードを除外し、フィールド上に存在するモンスター1体の表示形式を変更します！ 俺はトゥーン・キャノン・ソルジャーを選択！」

ADチェンジャーの効果により、キャノン・ソルジャーが攻撃表示になる。普段は入れないこのカードだが、今回はシンクロの実演ということ、いささか遊星のファンデッキ的なカードも投入されている。そのカードがこうして活躍してくれて、嬉しい限りだ。

「バトル！ ニトロ・ウォリアーでトゥーン・キャノン・ソルジャ



ーに攻撃！ 《ダイナマイト・ナックル》！」

ニトロ・ウォリアーの拳に炎が生まれ、それを維持したままニトロ・ウォリアーがトウン・キャノン・ソルジャーに向かって突進する。

「この瞬間、ニトロ・ウォリアーの効果発動！ 魔法カードを使ったターンに1度だけ、ダメージ計算時に攻撃力が1000ポイントアップする！」

よって、攻撃力は、

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/2800 3800

周囲から、3800！？ と驚きのざわめきが聞こえてくる。

そして、それに應えるかのようにニトロ・ウォリアーの拳を覆う炎が勢いを増す。ニトロ・ウォリアーは大きく振りかぶって拳を叩きつけようとすると、その瞬間。

トウン・キャノン・ソルジャーの身体から二本の腕が生え、その拳をがちり防御した。

「トウン・キングダムの効果発動デース！ デッキの上からカー

ドを1枚墓地に送り、破壊を無効にしマース！」

もちろん、防ぐことは予想していた。しかし、その効果はあくまで破壊から守るだけだ。

「けど、ダメージは通ります！」

二トロ・ウォリアーは力任せに拳を振り抜き、それは腕の防御を打ち破ってキャノン・ソルジャーに突き刺さる。

そして、その分のダメージがペガサスさんのライフポイントから引かれる。

「オーノー！」

ペガサス    LP：4000    1600

一気にペガサスさんのライフを削ったことに、どよめきが起こった。

トゥーンじゃなかったら、ここでもう1体を攻撃表示にして追加攻撃できたんだけど……まあ、仕方ない。

そして、攻撃を終えた二トロ・ウォリアーの攻撃力が2800に

戻る。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドです」

「私のターン、ドロー！」

カードを手札に加え、ペガサスさんは口を開く。

「遠也のフィールドにいるニトロ・ウオリアーはとても強力なカードデース。しかし、トゥーンの特実能力を忘れたわけではないですよ。私は、トゥーン・マーメイドを攻撃表示に変更デース！」

トゥーン・マーメイドが弓に矢を番え、つられるようにトゥーン・キャノン・ソルジャーも勢いよく拳を打つ仕草をとる。

トゥーンの特実能力とは、当然直接攻撃のことだ。2体のモンスターの総攻撃力は2800。そこにキャノン・ソルジャーの効果フルに使えば3800にもなる。一気に俺の負けというわけだ。

「いきます、遠也！ トゥーン・キャノン・ソルジャーとトゥーン・マーメイドで直接攻撃！」  
ダイレクトアタック

ペガサスさんの宣言に則り、2体のトゥーンが笑みを浮かべながら攻撃を仕掛けてくる。

その瞬間、俺は叫ぶように言葉を返す。

「畏カード発動！ 《ガード・ブロック》！ 戦闘によって発生するダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドロウします。ドロ  
ー！」

「しかし、それは1体との戦闘だけですネ？ トウーン・キャノン・ソルジャーの攻撃は防がれましたが、トウーン・マーメイドの攻撃は通りマース！」

「くっ……」

トウーン・マーメイドの放った矢が刺さり、俺のライフが更に削られる。

遠也      LP：3500      2100

だが、同時にトウーン・マーメイドが攻撃宣言したことにより、ペガサスさんのライフからも500ポイントが引かれることになる。

ペガサス      LP：1600      1100

「更にトウーン・キャノン・ソルジャーの効果を発動しマース！」

トウーン・マーメイドを生贄に捧げ、遠也に500ポイントのダメージデース！」

遠也 LP：2100 1600

「カードを2枚伏せてターンエンドデース」

自分のライフも犠牲にしたとはいえ、俺のライフを一気に削り、2枚の伏せカードで守りも万全。さすがに元最強デュエリストは伊達ではないってところか。

俺の場にはニトロ・ウォリアーがいるとはいえ、安心はできない。あの伏せカードは恐らく《トウーン・キングダム》を守るカードか、攻撃を防ぐカードのどちらか、あるいは両方だろう。

トウーンの特徴とキャノン・ソルジャーが攻撃表示で残っていること、そしてこちらの場にいるニトロ・ウォリアーの効果を考えれば、その線が濃厚だ。

もしこのまま俺が何も出来なかった場合、逆転する可能性はだいぶ下がる。キャノン・ソルジャーがトウーンの効果で直接攻撃し、その後自身を生贄にバーン効果を使えば、それだけで俺のライフはなくなるからだ。

加えて、ペガサスさんの場にモンスターが増えたりすればその脅威は更に増す。

つまり、ここが一つの正念場。

だから、ここはデッキの力を借りるしかないだろう。

俺はデッキの一番上に指をかけ、カードを掴む。……頼むぜ、俺のカードたち。

「俺のターン……ドロー！」

キーカードではない。だけど、これなら。

「俺は《異次元からの埋葬》を発動！ 除外されている《ジャンク・シンクロン》と《ADチェンジャー》を墓地に戻します。更に《貪欲な壺》を発動！ 墓地の《ジャンク・ウォリアー》、《クイック・シンクロン》、《レベル・ステイラー》、《ジャンク・シンクロン》、《ADチェンジャー》をデッキに戻し、2枚ドロー！」

結果的にはただの手札交換。だが、最高のカードが来てくれた。

「俺は手札から《サイクロン》を発動！ 《トゥーン・キングダム》を破壊します！」

「そうはさせませーん！ カウンター罠、《魔宮の賄賂》！ 魔法カードの発動を無効にして破壊し、相手は1枚ドローしマース！」

俺がサイクロンを発動させた瞬間、ワツとあがった歓声だったが、防がれた途端、その勢いもしぼんでいく。

まあ、せつかく盛り上がるどころだったんだからな。無理もない。

「頑張れ！」「まだよ、遠也！」と友人二人の応援が飛ぶ。それに内心で感謝しつつ、俺はカードをドロし手札のカードに手をかけた。

確かに今のは防がれたが……まだ消沈するには早いってもんだぜ。

「俺は2枚目の《サイクロン》を発動！」

「なんデスって!?!」

「今度こそ《トウーン・キングダム》を破壊する！」

カードから生まれた暴風がペガサスさんのフィールドに届き、トウーン・キングダムのカードを破壊する。

そして、その瞬間消えていく、アミューズメントパークのようだった飛び出す絵本。それに併せて、フィールドに残っていたトウーン・キャノン・ソルジャーも悲しげにその姿を薄れさせていった。

トウーンモンスターは、トウーン・ワールドが破壊された時、共に自壊する運命にある。常に直接攻撃が出来る強力な効果に対する、代償というわけだ。

「私のトウーンが……」

思わずペガサスさんが天を仰ぐ。

「バトルです！ ニトロ・ウォリアーでペガサスさんにダイレクトアタック直接攻撃！  
《ダイナマイト・ナックル》！」

これが決まれば、俺の勝ち。

しかし、それは問屋がおろさないとばかりに、ペガサスさんが声を上げる。

「カウンター罠、《攻撃の無力化》を発動デース！ その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させマース！」

やっぱり、攻撃反応型の罠カードだったか。まあ、ミラーフォー  
スじゃなかっただけマシと思うべきだろう。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドです」

「私のターンデース、ドロー！」



さて、手札は1枚しかない状況でペガサスさんは何ができるだろうか。

トゥーンは基本的にトゥーン・ワールドがなければ召喚すらできないものがほとんどだ。後期型なら通常召喚できるが、ニトロ・ウオリアーにやられるのが目に見えている。

その状況で、どうするのか……。

「私は《強欲な壺》を発動しマース！ デッキから2枚ドロー！」

ここで強欲な壺か。となれば、何か対抗策が出来たことも考慮に入れなければなるまい。

事実、ペガサスさんは小さく笑みを見せたのだから。

「フフ、さすがは私の愛するカード達デース。手札から更に《壺の中の魔術書》を発動！ お互いのプレイヤーはデッキからカードを3枚ドローしマース！」

これによって俺の手札も3枚増える。だが、ペガサスさんの手札がここに来て潤うとは。果たして、どうくるのか。

「私はデッキの上からカードを5枚除外し、《トゥーン・キングダ

《ム》を発動デース！ 更に《トウーン・アリゲーター》を召喚！  
そしてトウーン・アリゲーターを生贄に捧げ、《トウーン・ブラッ  
ク・マジシャン・ガール》を特殊召喚しマース！」

《トウーン・ブラック・マジシャン・ガール》 ATK/2000

DEF/1700

うん、小さくなったマナだ。それ以外にどう言えばいいというの  
だろう。

『わ、なんか恥ずかしいなあ。子供になった私みたい』

マナが同じようなことを言っている。すると、ふいにトウーンの  
マナが俺を見てウィンクしてくる。そこらへん、小さくなくても女  
の子ということなのだろうか。実に楽しそうにふよふよ浮いている。

あー、小さいマナも可愛いなあ。そう思って、トウーン・マナを  
眺めていると、横から声が聞こえてきた。

『…………ふーん。遠也は、小さい子のほうがいいの？』

今の俺に出来ることは、首を横に振ることだけだった。

「トウーン・ブラック・マジシャン・ガールも、もちろん直接攻撃能力を持っていマス。そして、このカードは召喚されたターンに攻撃できないという制限を唯一持っています」

そう、三つの分類があるトウーンの最後の区分。“例外型”に分けられるのが、このトウーン・ブラック・マジシャン・ガールだ。

このカードだけは、トウーンの中で唯一召喚されたターンに攻撃できないというデメリットを持たない。ゆえに、召喚されてすぐに直接攻撃を行うことが出来るのだ。

攻撃力2000の直接攻撃は、この世界では脅威の一言だ。まして、今の俺のライフポイントでは耐えきるなんて出来ようはずもない。

「トウーン・ブラック・マジシャン・ガールで、遠也に直接攻撃デース！ 《トウーン・ブラック・バーニング》！」  
ダイレクトアタック

小さなマナの杖が光り、そこから稲妻を伴った閃光が放たれる。

周囲もこれで終わりか、と息を飲む。

しかし、その瞬間。俺は壺の中の魔術書によって手札に加わったカードを一枚手に取っていた。

「手札から《速攻のかかし》を捨て、効果発動！ 相手の直接攻撃

を無効にし、バトルフェイズを終了させます！」

一瞬俺のフィールドに現れたかかしが、トゥーン・マナからの攻撃をその身を以って防ぎ、やがて消えていく。

バトルフェイズはこれで終わり、ペガサスさんの手札は1枚。ペガサスさんはそのカード手に取る。

「カードを1枚伏せて、ターンエンドデース」

「俺のターン、ドロー！」

壺の中の魔術書によって、俺の手札も増えたのは大きい。

俺は取るべき手段を頭の中で組み立て、そしてそれを実行に移す。

「俺は手札から《グローアップ・バルブ》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更に《チューニング・サポーター》を召喚！」

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

《チューニング・サポーター》 ATK100 DEF/300

再び俺の場にチューナーと素材モンスターが揃う。しかし、今回はこれで終わりじゃないぜ。

「そして墓地の《グローアップ・バルブ》の効果発動！ デッキトップのカードを墓地に送り、デュエル中1度だけ特殊召喚できる！ 守備表示で特殊召喚！」

《グローアップ・バルブ》 ATK/100 DEF/100

一つ目の球根がポンツとフィールドに生まれ、これで俺の場には新たなモンスターが3体。

これで、全ての準備は整った。

「チューニング・サポーターの効果、シンクロ素材とする場合レベル2として扱うことが出来る。レベル2となったチューニング・サポーターにレベル5のクイック・シンクロンをチューニング！ 集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 出でよ、《ジャンク・アーチャー》！」

《ジャンク・アーチャー》 ATK/2300 DEF/2000

オレンジ色をした細身の身体に弓を携えた戦士が、片膝をついた状態でフィールドに現れる。

そう、今回は守備表示で召喚したのだ。

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！　そして、ジャンク・アーチャーの効果発動！　1ターンに1度、相手フィールドのモンスター1体をエンドフェイズまで除外する！　《ディメンジョン・シュート》！」

守備表示であろうと、表側表示である以上問題なく効果は使える。

ジャンク・アーチャーは膝をついた状態から狙いを定め、番えた矢を一直線にトゥーン・ブラック・マジシャン・ガールへ向けて撃ち放つ。

それは変わらず命中し、トゥーン・ブラック・マジシャン・ガールを次元の彼方へと消し去った。

『ああつ、私が……』

いや、お前じゃないだろ、という突っ込みは内心でするだけに留めておく。

少々隣の発言に呆れつつ、ともあれ、これで壁となるモンスターは全て消えた。この攻撃が決まれば俺の勝ちだ。

「バトル！ ニトロ・ウォリアーで直接攻撃！ 《ダイレクトアタック  
ナックル》！」

しかし、その瞬間。ペガサスさんのフィールドの伏せカードが起き上がる。

「畏カード発動、《聖なるバリア -ミラーフォース-》！ 攻撃表示の相手モンスター……ニトロ・ウォリアーを破壊しマース！」

ペガサスさんが一瞬言葉を詰まらせるが、問題なくその効果は発動されてニトロ・ウォリアーが破壊される。

高攻撃力のニトロ・ウォリアーがいなくなるが、しかし俺の顔に動揺はない。

この状況で伏せられるカードということで、ミラフォは警戒していた。その危険を感じたからこそ、俺はグローアップ・バルブもジャンク・アーチャーも守備表示で出したのだ。

ミラフォの破壊効果は相手フィールドの攻撃表示モンスターに限られる。守備表示ならば、破壊されることはないからな。

ペガサスさんが言葉を詰まらせたのは、俺のフィールドのモンスターがニトロ・ウォリアー以外は軒並み守備表示だったからだろう。

「さすがデース、遠也。まさかミラーフォースを読んで、守備表示

にしているとは。しかし、それではこれ以上の追撃は出来ませんネ。次のターン、私の引くカードで全てが決まりマース」

ペガサスさんがそう言うが、しかしそれに返す俺の答えはその予想を覆す。

「いいえ、ペガサスさん。このターンで終わりです」

「ホワッツ?」

ペガサスさんが疑問の声を出すが、何か忘れていないだろうか。そう、俺の場に伏せられているカードのことを。

俺はデュエルディスクを操作する。それによって、伏せられていたカードが起き上がっていく。

俺が伏せていたカード。それは、

「罠カード発動! 《緊急同調》!」

「Oh! 《緊急同調》!?!」

今回、シンクロの実演ということを使うこともあるかもしれないと、特別に入れていたこのカード。それがまさかここで決め手になることは。



見ているお客さんはシンクロを初めて見る以上、このカードの効果も当然知らない。俺は、きちんとその効果を説明していく。

「このカードはバトルフェイズ中のみ発動できる！ シンクロモンスター1体をバトルフェイズ中にシンクロ召喚します！」

俺の場にはレベル7のジャンク・アーチャーと、レベル1チューナーのグローアップ・バルブ。

そのレベルの合計は8。

そして、チューナーと素材に指定のないレベル8のシンクロモンスターを、俺は1枚しかこのデッキに入れていない。

エクストラデッキ……いや、今はまだ融合デッキか。そこに収められている15枚のカード。そのうちの1枚に触れる。

本当に、本当に久しぶりに召喚することになるこのカード。決してこのデッキの主力というわけではない。だが、それでも絶対に外すことが出来ないエースモンスター。

シンクロを世に広めるこの場で召喚することになるなんて、これもまた運命だろうか。

かつての世界においても、シンクロモンスターで随一の知名度を誇ったこのカードが、大勢の人で溢れるこの場で姿を現す。

そのことに、奇妙な感慨すら覚える。俺自身非常に特別に思っているこのカードを、こうして召喚できることが嬉しいのかもしれない。ほぼ一年近く、まったく召喚していなかったから。

俺は、自分が向こうの世界の人間なんだ、と思っていたかった。このカードを召喚するのは、不用意にこの世界に干渉することになってマズインじゃないか、なんて。昔は生意気なことを考えていたものだ。

そもそも俺はこの世界で今を生きているんだから、今更そんなの関係ない。そう思えたのはつい最近のこと。

しかし、そう思えるようになって以降、このカードを召喚する機会は訪れなかった。

だからこそ、デュエルの場でこのカードに触れるのは本当に久しぶりだ。

その感覚に不思議な高揚を感じつつ、俺は気合を入れて宣言していく。

「レベル7ジャンク・アーチャーに、レベル1グローアップ・バルブをチューニング！」

2体のモンスターが飛び上がり、グローアップ・バルブが1つの光の輪へと姿を変え、ジャンク・アーチャーが7つの星となってそ

の輪を潜り抜けていく。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！」

そうして、一か所に互いが集まった瞬間。

爆発的な光がステージを覆った。

「シンクロ召喚！ 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

瞬間、光を切り裂き、翼を畳んだ状態で上空へと駆け上がっていき、白銀の流星。

会場中の視線が全て屋外ステージの上空へと注がれていた。屋根のないステージ。その上に広がる青い空。それを背景に、重力に反して空に昇った流星がぐるりと弧を描く。

そして畳まれていた翼を勢いよく広げ、直後、その身体から煌めく光の粒子が降り注ぐ。

その様は、まさに名前の通りの星屑<sup>スターダスト</sup>。その神秘的な光景を生み出したドラゴンが虚空に向かって嘶<sup>いなな</sup>き、その姿を見る者全員の目にその美しさを刻みつけた。

「……………綺麗……………」

それは、誰が呟いたものだったのか。

定かではないその声に、誰も否を発することはしなかった。

それはきつと、今この場にいる者全員が共に抱いている、共通した思いであったからだろう。

それほどまでに、そのドラゴンの姿は美しいものだった。

《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500 DEF/2000

「……私も久しぶりに見まシタ。やはり、美しいモンスターデース」

ペガサスさんも例外ではなく、スターダストに見とれている。

ソリッドビジョンとは思えない、異質な迫力すら感じさせるその姿には、精霊を感じられるだけに感じるモノもひとしおなのだろう。

上空へと昇っていたスターダストが、ゆっくりと降りてきて俺の上へ浮かぶ。

そして、俺はスターダストに指示を出す。このデュエルを終わらせるための一言を。

「久しぶりだな。早速で悪いけど、頼りにさせてもらうぜ。ス  
ターダスト・ドラゴンの攻撃！」

再び甲高い声で鳴き、首をしならせて頭を僅かに後ろへ。

そして、その口元に向かって集束していく大気の渦。それはやが  
てつつすらと白色を帯びるほどに凝縮され、ぴたりとそこに留まる。

それを受けて、俺は最後の宣言を行う。

「響け！ 《シューティング・ソニック》！」

その声に応えるように、スターダストは集められたエネルギーを  
一直線に解放する。

それは音速すら超える、姿のない砲弾となって突き進む。

無論それを避ける術などあるわけなく。ペガサスさんはその直撃  
を受けて、ついにそのライフポイントを0にするのだった。

ペガサス LP：16000

デュエルに決着がつき、ソリッドビジョンも終了に伴って解除さ

れていく。

消えゆくスターダストに、俺は一言声をかける。ただの立体映像だとしても、やはり思い入れが強いカードだったから。

「サンキュー。また頼むよ」

消える瞬間、応えるように鳴いて、スターダストは宙に溶けるようにしてその姿を消していった。

……さて。こうしてペガサスさんの勝負に勝ったわけだが、なぜ周囲は静まり返ってしまい、何の反応もない。

その様子に不気味さを感じ、俺はどうしたものかと不安になる。その時、いつの間にか俺の傍へと歩み寄っていたペガサスさんに右腕を掴まれた。

驚いてその顔を見上げれば、にっこりと笑って俺を見ていた。そして、すぐにその顔を観客席のほうへと向け、その後掴んでいた俺の腕を高く掲げた。

そして、手に再び収められていたマイクを通して宣言する。

『遠也の勝利デース！ 皆さん、拍手をお願いしマース！』

明るく大きな声で言い放ったその言葉に、静まり返っていた会場も我を取り戻し始める。

そして、どこからかポツポツと拍手が起こり始め、それはすぐに会場中を巻き込む大きな轟音となって響きわたる。

俺はペガサスさんの横で、それに嬉しいやら恥ずかしいやらといった複雑な気分で手を振って応える。

そうしてなかなか鳴りやまない拍手が、ようやく下火になって来た頃。今度は再びシンクロ召喚の説明や今のデュエルのおさらいが始まり、そうして今回の実演の時間は過ぎていったのだった。

その後、俺は会場の子供たち相手に社員の人やペガサスさんと一緒に、来場者特典などを渡す仕事を仰せつかった。

子供の来場者には、特典としてカードパックが一つ、それからI社のグッズが渡されるんだとか。そのため、子供たちは群がるように俺たちのほうに寄って来る。

特に、俺とペガサスさんにはかなりの子供がやって来ていた。ペガサスさんは当然として、俺はどうやらさっきのデュエルで興味を

持たれたからのようだ。

まあ、子供嫌いというわけでもないから別に問題はない。時おり、デュエルの質問やシンクロの疑問などを聞かれるので、後がつかえない程度に話して順調にさばいて行く。

中には俺のデュエルを評価してくれる子もいて、嬉しかったり。

たとえば「デュエルかつこよかったです！ 私、絶対シンクロ召喚使います！」とか、「シンクロモンスター、かつちよいー！俺も絶対兄ちゃんみたいになるからな！」なんていう子供がいたりして。微笑ましいもんだ。

変わったところでは、低ステータスモンスターを主力に使っているという男の子が来て、新しい可能性に感動したという感想もあった。

その子には、低ステータス＝弱い、じゃない。効果が強力かもしれないし、他のカードとの組み合わせで化けるかもしれない。もしくは、シンクロのように力を合わせる方法もある。

要するに、低ステータスなんて気にするだけ無駄。それより、わざわざそのカードを使うってことは、そのカードが好きってことだ。なら、好きなカードで勝てるように努力したほうが建設的だし楽しいぞ、と伝えた。

ポケモンみたいな言い方になってしまったが、本心だったので問題はないだろう。その子も、目をパツと輝かせて「ハイ！」と頷いてくれた。うーん、いい子だ。俺は帽子の上からその子の頭を撫でた。



実際、その子はそのモンスターが好きで、だからそのためのデッキを作ったんだそうだ。いいね、デュエルモンスターの楽しさはそこが原点と言ってもいい。ぜひ、そのまま頑張っしてほしいものだ。

興奮冷めやらぬのか顔を赤くして、大きく手を振って去っていく小さな男の子。それに手を振り返し、思う。まさか、この俺が憧れの視線を受けることになるとはね。いいことした。

マナには何故かにやにやと鬱陶しい目で見られていたが。くそ、俺だつてクサイこと言った自覚はあるんだ。あまりそこに触れてくられるんじゃない。

そんなこんなでイベントは全て終了し、長かった一日もようやく終わる。

イベント後は俺の家にペガサスさんが帰って来て、俺もせっかく会ったんだからと三沢と明日香を招待した。

二人は生で会ったペガサスさんにガチガチに緊張していたので、思わず笑ってしまい睨まれてしまった。まあ、伝説の人といっても過言じゃないし、カードの生みの親だもんな。

二人がああいう態度になって、サインをねだるのもこの世界では当然の対応なんだろう。

それからは二人も徐々に打ち解けてきたのか、食事の席では自分たちから話をすることもあり、賑やかな食事になっていく。

俺、実体化したマナ、ペガサスさん、三沢、明日香。そんな普通は有り得ないような五人で過ごした冬休みの一時は、とても楽しめるものだったことをここに記しておこうと思う。

もうすぐ冬休みも終わる。

アカデミアに戻り、そこでまた十代たちに会うことを楽しみに思っているながら、その夜は更けていくのだった。

## 第14話 休み・星屑・（後書き）

冬休み編しゅーりょー！

冬休みにスタダを出すことになるとは、誰も思わなかったに違いない！

私も思ってたませんでした！

なんだか筆が進むうちに、どうしてもこの場で初召喚したくなって、やってしまいました。

スタダはやっぱりカツコイイです。

一時期は裁定が揺れて、色々と大変だったりもしましたけど。

さて、明日香と三沢の登場は、ある意味必然ですね。

あのメンツの中で本土に帰っており、こういうイベントに参加しそうなのはこの二人でした。

最後の食事会……ある意味凄いメンバーです。きっと、二度とこの五人だけで集まることはないでしょうね。

次は再びアカデミアの予定です。

また休みの時や夜などにちよこちよこ書いて更新していきたいと思っています。

## 第15話 青春（前書き）

あの部長、私は嫌いじゃありません。  
声がいいので。

しかし、サブタイトルがこれ以外に思いつかなかった。  
いかにも使い古されていそうですが、仕方ないですね。

だって、青春って感じなんですし。

## 第15話 青春

「アカデミアよ、私は帰って来たーッ！」

『それ好きだよなー、遠也』

本土からアカデミア島へと航行するフェリーに揺られること数時間。

少々酔ってしまったものの、それもこの大地に降り立ったことでスッキリ解消だ。

とりあえず、帰ってきた際には言わなければならぬ定番の言葉を言うことが出来て、とりあえずは満足だ。さて、早速俺の部屋に行くとしますかね。

俺は荷物を手に持つと、逃げるようにその場を走り去る。だって、俺を見る視線が凄かったからね。諸々の理由から。

そして、荷物を置いた俺はオベリスクブルーの制服に着替えてレツド寮へと赴く。

懐かしき木造モルタル2階建て。一度も住んだことはないのに、奇妙に親近感を感じてしまうのは、入り浸りすぎたせいだろう。

まあ、友人が三人もこの寮の所属だから仕方がない。おかげでブルーの生徒なのに、レッド生徒にはすこぶる評判がいい俺である。そのレッド生も、今は遠巻きに俺を見ているが。

それは気にせず、俺は十代たちの部屋の扉を叩く。そして、返事を待つことなくドアを開ける。良い子はマネしちゃいけない行為だが、どうせ中にいるのは男三人なんだ。それほど問題でもないだろうな。

「よーっす、三人とも。久しぶりー」

言いつつ玄関先から中を見れば、そこには見慣れた十代と翔、隼人の姿。

三人は突然開いたドアに驚いていたが、そこに立っているのが不審者ではなく俺だとわかると、表情を崩して駆け寄って来てくれた。

「おー、遠也！ 帰って来てたのかよ！ 随分久しぶりな気がするぜ！」

そしてそのまま、バシバシと俺の肩を叩く十代。

それに続き、翔と隼人も声をかけてくる。

「おかえり、遠也くん！　なんだか新鮮だなあ、遠也くんの顔を見るの」

「そうなんだな。もうかれこれ2週間は会ってなかったからなあ」

そうか、もうそんなになるのか。

隼人の言葉に頷きながら、俺は十代の頭を軽く殴る。バシバシ叩きすぎだ。痛いっての。

しかし、へへ、と笑ってへこたれない十代。「冗談で済ませられるからこそ俺も殴ったわけだから、まあその態度は予想通りだ。

しかし、その次の言葉はさすがにちょっと予想外だった。というか、そうでないことを願っていたというか。

「お、そうだ遠也！　デュエルしようぜ！　あのスッゲーカッコいいドラゴンさ、あれ見せてくれよ！」

ぎゃー、やっぱり見てましたか十代も。ということは、翔も隼人も見たということだろう。ああ、船の中から視線が鬱陶しかったか

ら、ひょっとして十代たちも見てるかもとは思ってたけど……。

そんな俺の心の中の眩きを露知らず、十代は楽しそうに笑う。

「まさかテレビで遠也を見るとは思わなかったぜ！ しかもペガサスさんとデュエルだもんなあ！ 羨ましいぜ！」

心底そう思っていると思われる顔で言う十代と、同じく隣で羨ましそうにしている翔と隼人。

やはり、ペガサスさんは誰にとっても特別な存在なのだろう。

「けど、ビックリしたよ。突然大徳寺先生に呼ばれるから行ってみたら、テレビに遠也くんが映ってるんだから」

「だな。でも、シンクロ召喚はやっぱり凄かったんだな。さすが遠也だったぞ」

「いやあ、ははは……」

三人のそんな言葉に、苦しげな笑みを見せる俺。

あの時は周りに何があるのかとかを、一切無視してデュエルに集中してたからなあ。まさかそんなことになるとは思ってなかったんだよね。



説明すると簡単なことだ。あのイベント会場には、テレビカメラがあった。つまり、そういうことである。

あの時には観客の存在こそ意識にあったものの、テレビのことなどすっかり忘れていた俺である。

つまり、俺はテレビの前でペガサスさんとデュエルし、その中でスターダスト・ドラゴンも召喚したことになるのだった。

それもあの時のテレビ、全国放送だったらしく、それはもう広い範囲に広がってしまったている。そのせいで、アカデミアに向かうフェリーの中では俺を見る目が多いのなんの。やっぱり、あのイベントはかなり影響があったようだ。

事実、次の日に新聞やニュースを見ると、あのイベントのことが取り上げられ、シンクロ召喚についての特集まで組まれていた。元の世界では考えられなかった事態である。

しかもどこから情報を掴んだのか、《スターダスト・ドラゴン》が世界に1枚しかないカードということまでデカデカと表示しやがってからに。その他にも5体の龍があるらしく、それらと併せて“特別なドラゴン”である、と書かれていた。喋ったの誰だ。

そして、そういった特集の際に使われるのは、当然スターダスト

を実際に召喚し、アカデミア以外の公の場で初めてシンクロ召喚を使った俺の映像となるわけで。

結果、俺が自宅のテレビの前でお茶を嘔くことになったわけである。

気管に詰まり、マナに背中をさすられ、10分を費やして落ち着きを取り戻したことが懐かしい。

起きてしまったことはもう仕方がないので、それからは極力気にしないようにして過ごしていたわけなのだが。やはり、デュエルの専門学校ともいえるアカデミアに近づくにつれて、視線が増えるったらなかった。

アカデミア残留組は見ていないかも、とちょっと期待していたのだが……がつつり見ていたようで、残念である。

『カッコよかったから、いいじゃない。あ、言ってなかったけど、ちゃんと録画もしてあるからね!』

「なにしてくれとんじゃ、お前はあああ　ッ!」

「なんで急に怒鳴られるんすか!?!」

偶然正面にいた翔がビツクリしつつ疑問を呈す。

正直スマンが、それよりもマナがしでかしてくれたことのほうが大問題である。

俺は一旦三人から距離をとり、小声で会話する。

『いいでしょー。カッコよかったから、残しておきたかったんだもん』

「子供の学芸会を撮影する親かお前は！ 恥ずかしいから帰ったら消しなさい！」

『えー……。交換条件を飲んでくれたら、考えてあげるよ』

「交換条件？ ……言ってみなさい」

『本棚の奥と机の引き出しの下に隠してあるやつ処分して？』

「……………」

『……………』

「……………よし、消さなくてもいい」

『そつくるのはさすがに予想外だったよ！？』

「ばっか、お前。高校生男子にとってアレは何物にも代えがたい価値を持つんだぞ。」

いくらなんでも処分することなど出来るはずもない。苦労して手に入れてきたお宝達に申し訳が立たないだろうが。

『うわぁ。最低だよ、遠也……』

ふん、何とでも言う方がいい。

男という生き物は、エロのためなら時に自身を犠牲にすることすら厭わないものなのだ。

ふふん、と一人虚空に向かってドヤ顔をしているように見える俺に、翔は呟く。

「……ペガサス会長と知り合いで、テレビに出ててもさ。変わってないね、遠也くん」

「なんか、安心したんだな」

「ああ。相変わらず仲がいい二人だけ」

二人？ と翔と隼人が十代の発言に首を傾げている間。

俺とマナは変わらずそのやり取りを続けていた。

『まあ、今度帰った時は家族会議だけだね』

「結局！？ それに家族じゃないし、突っ込みどころ多いな！」

……そんなわけで、アカデミアに帰って来た俺たちであった。マ  
ル。

さて、帰ってからはしばらくはまた注目の的となった俺だったが、  
前回の経験からスルースキルを磨き上げた俺は、そんな追求をこと  
ごとくスルーしていた。

視線の鬱陶しさはどうにもならないが、それ以上入りこんでくる

なら、俺はシカトすることすら厭わないぜ。

幸いカイザーと同等の実力と思われていることと、あのペガサスさんに勝ったということと、無理なアンティールを迫られることもない。世界に一枚しかないカードに興味はあるようだが、俺が召喚した時に見るぐらいで我慢してほしい。

そんなこんなで、そこそこ平穩を保てるようになっていた、そんなある日。

その日は、体育の授業でテニスをしていた。どういう理由からテニスを授業内容に選んだのかは謎だが、とにかくそうなのだから仕方がない。

ちなみにオシリスレッドとブルー女子、ブルー男子とライエロ―でスタジアムを二分する形で行っている。まあ、生徒数がそこまですくないからこそできる芸当だと言える。

そんなわけで、俺は三沢とネットを挟んで向かい合い、適当にパコーン、ポコーンとラリーをしていた。やる気がないのがバレバレだが、教師の目が届いているわけでもないし、ちよつとぐらいいいだろう。

「へえ、意外と運動神経もいいんじゃないか遠也」

「お前ほどじゃないよ。さっきの本気サーブ、なんだよあれ。波動球？」

「ふつ、自分の身体の全てをコントロールし、その力を無駄なく行き渡らせ、その軌道と相手の動きをデータに基づいて計算すれば、容易いことだよ」

……もうお前、なんでデュエリストやってんだよってレベルだぞソレ。

計算であんな球を打って正確にコントロールできるとか。変汁大好き眼鏡のノツポか、ベイビーなステップの優等生じゃないんだからぞ。

そんなくだらない会話をしつつラリーを続けていく。すると、にわかにはレッドとブルー女子のほう騒がしくなってきた。

何かあったのか、と顔を向ければ、何故かクロノス先生が倒れて悶えていた。

何が起こったんだ一体。誰かが打った球でも当たったのか？

しかし、クロノス先生が被害をこうむる原因となると、俺の頭には一人しか出てこないんだが。まさか、今回もそうじゃないよな？

と思っていると、起き上がったクロノス先生が肩を怒らせて十代に詰め寄っていた。おいおい。

「ははは、話題に事欠かないな1番君は」

「確かに」

俺は三沢の言葉に苦笑し、あとで話を聞きに行こうと考えるのだ  
った。

「完全にとぼちりだぜ、まったく!」

そう言ってトレーニング・ウェアを着てスタジアムに向かうのは、  
不満たらたらの十代である。



「まあ、聞く限りでは確かに十代に非はないよな」

「だろ！？ くっそー、クロノスめえ」

ぐぬぬ、と唸る十代に俺はまあまあと慰めに回る。

話を聞いたところ、十代が打ったボールが明日香に当たりそうになっただけが切っ掛けだったらしい。

それを割り込んできた先輩が見事に打ち返し、明日香への直撃は防いでくれた。しかし、そのボールは咄嗟だったためかコントロールが甘く、結果として偶然クロノス先生に命中した、というのが真相だったようだ。

切っ掛けは確かに十代かもしれないが、直接の原因はその先輩だ。とはいえ、それも明日香を守ろうとした行為なわけで。だからこそ、クロノス先生は目の敵にしている十代に的を絞ったのだろうが。

しかし、十代本人にしてみればたまったものではない。まして、そのせいでこうしてテニス部にしごかれて来いと言われてはな。

「はあ、もういいや。遠也、これが終わったらデュエルしてくれるって約束、忘れんなよ」

「わかってるって」

「よし！ そうと決まれば、少しはやる気が出るぜ！ じゃあな、待っていてくれよ！」

「いつてら〜」

ぶんぶん腕を振り回してテニスコートのほうに向かっていく十代を見送り、俺はそのコートにほど近い席に腰をおろして見学者となる。

やる気が感じられなかった十代だが、これで少しは気持ちも楽になるだろう。嫌々やり続けるより、これが終われば……と考えたほうがまだマシになるはずだ。

そう思っ、十代には抜群に効果を発揮する工サデュエルを用意したのだ。さすがに何も無しじゃ可哀想だったからな、被害者みたいなもんだし。

そんなことを考えていると、不意に俺の横に現れる気配。横目で見れば、またしてもブルー女子の制服を着たマナがそこに実体化していた。

「おいおい」

「いいでしょー、あんまり人もいないしね」

悪戯気に笑って言うと、マナは俺に肩を寄せ、テニス部の部長にしごかれる十代を見る。

俺も、まあいいかと思って同じく視線をコートに戻した。

なんだか嫌に暑苦しい台詞を連発しながら、十代にボールを打ちこんでいく部長さん。……なんか、元の世界にもいたな。妙に暑苦しいテニスプレイヤー。地球温暖化の原因とまで言われるほどの人が。

どこことなく、その人を彷彿とさせるなあと、昔を思い出しながらその様子を見やる。すると、見学者が俺しかないのが目立ったのか、こっちに目を向ける部長。

無難に会釈を返す俺と、につこり笑顔を見せるマナ。そして、明らかにマナを見てだらしなく表情を緩める部長。……まあ、気持ちわかるけどさ。

それはさておき、十代はもうヘトヘトだというのに、手を止める気配がない部長さん。

あの人はアレだな。指導者に向いていないタイプだ。その人にとってどんな方法が一番有効なのかを考えずに、自分が提示した方法が最高だと思い込んで突っ走るタイプ。十代も、厄介な人に当たっちまったもんだ。

なんて思いながら見ていると、コートにほど近い入口から知り合いが入って来るのが見えた。翔とジュンコ、ももえか。珍しい取り合わせだな。

っていつか、翔がいるしマナは精霊化してもらったほうが良さそうだ。見つかったらきつとしつこく絡まれる。冬休みに入る前の騒動を俺は忘れていないぞ。

「つてなわけで、時間になりました」

「はい。ちえー」

いささか残念そうに口を尖らせ、精霊化するマナ。それを見届け、俺は観客席からコートに降りるべく、一旦スタジアム内の通路に入る。

そして一階に降りたところで、偶然明日香とはち合わせた。

「あれ、明日香？」

「遠也じゃない。どうして……ああ、十代の付き添いかしら？」

思い当たることがあったのか、明日香は途中まで続けてから言い直した。

「その通りだよ。十代に用か？」

「ええ。……そうね、遠也にも話しておいたほうがいいかも。一緒に来てくれる？」

「あいよ」

明日香の横に並び、一緒にコートの方を目指す。

その途中、一体どんな話があるのかその触りだけ聞いてみた。なんでも大徳寺先生からの情報で、万丈目を見かけたという目撃情報が入ったのだとか。

なるほど。それは確かに俺と十代に知らせようと思っただろうな、明日香なら。

俺たちが特に万丈目のことを気にしていた二人だというのは、周知の事実だろうしな。

そんな話をしつつ、スタジアムのグラウンドに出る。そこでは翔とジュンコ、ももえの三人がしごかれていた十代を見ていた。

「あ、遠也くん。アニキと一緒にじゃなかったの？」

「一緒に来たんだけど、俺は観客席で見学してた。で、お前らを見かけたから降りてくるところで、偶然明日香と合流したのさ」

隣に立つ明日香に視線を移し、そう説明する。

それに成程と頷く翔を一瞥し、ジュンコとももえに尋ねる。

「そろそろ終わりそうか？」

「まあね。あと10球もないんじゃないかしら」

「ベストタイミングでしたわね」

二人の言葉を受けて、コートに目を向ける。

するとその言葉は正しかったようで、1分するかしないかというところで、ちょうどひと段落したようだった。

部長も手を止め、十代がもう限界とばかりにその場に大の字で寝転んだ。

しかし、部長としては一旦休み、というだけのつもりのように、未だにラケットを握っている。

これは、また再開される前に手早く用事を済ませたほうがいいのかもれない。疲れきっている十代には悪いことをしてしまうが……。

明日香も同じ考えに至ったのだろう、俺の顔を見て、確認するかのような目を向ける。俺はそれに頷きを返し、揃って十代の元へと向かった。

そして部長の傍を通る時。明日香に気づいた部長が、声をかけてくる。

「やあ、明日香君！ 嬉しいな。僕に会いに来てく」

しかしそこは安定の明日香。ガン無視である。部長哀れ。

まあ、そう言いつつ俺も申し訳なく思いつつもスルーさせてもらうのだが。

そして倒れ込む十代に近づき、明日香が声をかける。

「ねえ、十代。話があるんだけど……」

「んあ？ なんだよ、話って」

寝ころんでいた状態から起き上がり、俺たちの顔を見る十代。

そして、実は、と明日香が話し始めたその時。後ろから大声が上がった。

「君！ 皆本遠也君！」

「はい？」

いきなり背後から名前を呼ばれ、驚きながら振り返る。

横にいる明日香や十代も、どうしたのかと話を中断させて部長のほうに顔を向けた。

「君は、一体明日香君とどんな関係なんだい！」

「どんなって……友達？」

「ええ、そうね」

友達ですけど、と部長に再度向き直る。

しかしこの部長、全く聞く耳持たずである。勝手に熱くなっていつているのが、手に取るようにわかる。

「君はさっきまで、違う女の子と一緒にいたじゃないか！ そのうえ明日香君とまでとは……紳士として、許しがたい！」

あー、なるほど。マナと一緒にいたところを見られた上に、明日香と隣り合って来れば、そうともとれるのか。

俺自身が特に何とも思ってたから気付かなかった。確かに、二股しているように見えなくもないかもしれない。が、例えそうだとしてみいきなり関係ない第三者から責められるのは、お門違いだと思うのだが。

あら、マナもいたの？ と聞いてくる明日香には肯定を返す。隣で『いましたよー』とマナが手を挙げているが、明日香には見えてないだろうからな。

しかし、俺に二股をしている事実はないので、何て言えばいいのかわからん。結局、俺は口を閉ざした。すると、それをどう受け取



ったのか、部長がラケットを俺に突きつけてくる。

「デュエルだ！ 僕と、明日香君を賭けたデュエルをしようじゃないか！」

「ひょ？」

「勝ったほうが明日香君とフィアンセになる！ どうだい、受けるかい？」

得意げに言う部長だが、どうしてそうなるの？

受けたとしても俺に特にメリットがないし、そもそもフィアンセって勝手に決められるもんでもないし。そこらへん、わかっているんだろうかこの人。

対して、勝手に自分の名前を出された挙句婚約までさせられそうな明日香は、抗議の声を上げた。

「ちょっと！ 勝手に人を賞品のように扱わないでちょうだい！」

「明日香君……オベリスクブルーの妖精のような君に、二股をするような男は似つかわしくない」

訳知り顔で首を振る部長。しかし、なかなか面白い単語が出てきたな。

「オベリスクブルーの妖精ね。へー」

「な、何よ」

「いいや、何も」

やはりそんな名前をつけられるのは本人としては嫌なのだろう。俺が復唱して明日香を見れば居心地が悪そうに明日香は顔をそむけた。

微かに顔が赤いのは、恥ずかしさゆえか。俺がそれを悟ってにやにやしていると、再び部長の声が響いた。

「僕の目の前でイチャつくのはやめたまえ！ 遠也君！ 受けるのか、受けないのか！ 怖いなら、逃げてもいいんだよ？」

「ふうん」

挑発的に言ってくる部長に、さすがに俺も黙っていられなくなってきた。

そうまで言われて、受けないなんて選択肢はない。別段イチャついていたわけではないが、ここで嫌だと言ったら逃げたと判断するだろう。そして、なんだかこの人の性格的に喜んで吹聴して回りそ  
うだ。

さすがにそれは御免こうむる。そういうわけで、俺はデュエルデイスクを取り出して答えた。

「いいぜ。そのデュエル、受ける」

「そここなくちゃね」

そして俺たちはテニスコートのネットを挟んで向かい合う。

明日香と十代がコートから下がっていく時、明日香が俺に注意を促してきた。

「遠也。彼、ああ見えて亮に勝るとも劣らないデュエルの腕という噂よ。油断しないでね」

「マジか。ああ、サンキュー」

明日香からのアドバイスを受け、俺は改めて部長を見る。

危ない危ない。見た目と言動に騙されるところだった。カイザーと同等とも噂されるとするなら、それなりの腕だと見るべきだろう。少なくとも、油断はするべきじゃない。

手を抜くつもりはなかったが、ここは気を引き締めて全力で臨まなければ足元をすくわれるかもしれない。

カイザーを相手にする、というぐらいの気持ちで挑むべきだろう。

「頑張れよ、遠也！」

「負けるなっすー！」

「……フィアンセってそんな簡単に決めるものなの？」

「同感ね」

応援する十代と翔に、呆れ顔のジュンコ。そしてジュンコの言葉に賛同の意を示す明日香。ちなみにももえは「顔が良ければOKです、それにそれもまたロマンですわ」と二人の言葉に返していた。訳がわからないよ。

そんなギャラリーの声を聞きながら、俺はデュエルディスクの開始ボタンを押す。向こうもまた同じくボタンを押し、勝負が始まる。

「デュエル！」

遠也 LP：4000

部長 LP：4000

「先攻は僕だよ。ドロー！」

さて、どんな手で来るのか。カイザーに勝るとも劣らないということからは、初手でいきなりの展開もあり得る。もしくは様子見に徹するつもりなのか。

注意深く見ていると、部長は手札から一枚のカードをデュエルデイスクに差し込み、更にもう一枚手に取った。

「僕は魔法カード《サービスエース》を発動するよ！ このカードは僕が手札から選んだカードを君が当てるギャンブルカード。魔法・罠・モンスターから選択し、当たれば効果は無効。だけど、外した場合は1500ポイントのダメージを受けてもらうよ」

いきなり高い火力を持つバーンカードか。

初期手札にそんな採用率が低そうなカードを引くとは、引きもそれなりにあると見たほうがいいのかもしれない。先攻ターンは攻撃できないことを考えれば、初期手札にこうしたカードがあることは、効率的ともいえるからだ。

だが、こうしたバーンカードは特化デッキでもない限りは積まれることは少ない。カイザーに迫るというデュエリストなら、バーン特化というわけでもないだろうから、引きの強さで引いたということだろう。

なるほど。全力で臨んだほうがいいみたいだな。

ともあれ、まずはこのカードの処理が先か。

「なら、俺は罫カードを選択する」

「本当に、それでいいのかい？」

「ああ」

どうせ確率は三分の一なんだ。なら、何を選んだって変わらない。俺はあつちのデッキを何も知らないんだから。

部長は指で挟んでいたカードをひっくり返す。カードに記された名前は《ホーリーシャイン・ボール神聖なる球体》。

「残念、モンスターカードだ。君が外したことで、このカードを除外し、君には1500ポイントのダメージを受けてもらうよ!」

「くっ……」

魔法カード《サービスエース》から光るボールのようなものが打ちだされて、直撃する。

先攻ターンにいきなり1500ダメージとは。これは、本当に油断ならない相手だ。

遠也 LP:4000 2500

「ファイフティーン・ラブ15-0。僕は更にカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

モンスターはあのカード1枚だけだったのか？ それとも誘っているのか……。

なにはともあれ、俺のターンだ。せつかくこの学園でも上位らしい人を相手にしてるんだ。ここは俺も持てる力を出しきるつもりで挑むぞ。

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードを見て、俺は思わずげっ、と声を出す。

うっかり、ペガサスさんとデュエルしたあとデッキを調整していなかったのを忘れていた。おかげで、このデッキにはシンクロにちなんだカードが様々入ったままになっている。

くそ、ショッキングなことがあったせいだ。ガッテム。

その中の1枚、普段のデッキに入れていないカードを引いてしまった今、そのことを思い出したのだから救いがない。

まあ、全くシナジーがないカードがあるわけではないから、そう

大きな問題ではないだろう。気持ちを切り替えることにする。

さて、厄介なのは相手のあの伏せカードだろうな。あれが何なのかで話はまた変わって来る。

そして、相手の場にモンスターがいないというのも油断ならない点だ。初期手札6枚にモンスターが1枚というのもあり得ることはあるが、実力がある人の手札がそうとは考えづらい。

つまり、攻撃を誘っている。またはあの手札には何かしら対策カード……《冥府の使者 ゴース》のようなカードがあるのかもしれない。あるいは、《クリボー》のようにダメージを無効にするカードか。

そうになると、状況もいろいろ変わって来るだろう。だが、今の俺はまだ最初のターン。手札はいいんだし、その中で可能なことをやりきるだけだ。

「俺は手札から《おろかな埋葬》を発動！ デッキから《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送る。そして《レベル・スティーラー》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更に場にチユナーがいるため、ボルト・ヘッジホッグを墓地から蘇生！ 最後に、《チューニング・サポーター》を通常召喚！」

《クイック・シンクロン》     ATK/700     DEF/1400

《ボルト・ヘッジホッグ》     ATK/800     DEF/800



《チューニング・サポーター》 ATK / 100 DEF / 300

3体のモンスターが一気に並び、その状況に部長も表情をひきつらせる。本当ならここでレベル・ステイラーを加えることも出来るんだが、この状況では意味がないからやらない。

ここまで高速展開するデッキは、確かにこの世界ではあまり見かけないだろうから、そんな表情になるのもわかる。

「相変わらず、凄い展開力だぜ」

「ええ。レベルの合計は8……何が来るのかしら」

十代と明日香の声、それに応えるかのように俺は更に言葉を続けていく。

「いくぞ！ レベル1チューニング・サポーターとレベル2ボルト・ヘッジホッグに、レベル5クイツク・シンクロンをチューニング！」

3体のモンスターが飛び上がり、シンクロ召喚のエフェクトが行われる。

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》 ATK/2600 DEF/2500

相手に伏せカードがある時には非常に頼れるナイスガイ。それがこの、デストロイヤーさんである。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ シンクロ召喚に成功した時、素材となったチューナー以外のカードの数まで、フィールド上のカードを選択して破壊できる！ 俺は部長の伏せカードを選択する！ 《タイダル・エナジー》！」

ジャンク・デストロイヤーから放たれたエネルギーが部長のフィールドに炸裂し、伏せてあったカードが起き上がって破壊される。

伏せられていたのは、罠カード《レシブエース》。効果は相手の直接攻撃を無効にし、更に1500ポイントのダメージを与えるカード。コストとしてデッキトップから3枚墓地に送るらしいが……なにそのカード。俺のデッキやライトロード等にとっては、メリットしかない。

しかし、このカードがあったからモンスターを出さなかったのかもしれないな。1500のダメージはかなりの痛手だ。返しのターンで決めることすら可能になっていただろう。

ま、こうして破壊した以上、その心配はないわけだけど。

「チューニング・サポーターの効果により1枚ドロ！　そしてバトル！　ジャンク・デストロイヤーで直接攻撃！ダイレクトアタック　《デストロイ・ナックル》！」

「ぐっ……やるねえ」

部長　LP：4000　1400

一気にライフが減ったというのに、あまり動揺の感じられない態度をとる部長。

何か隠し玉でもあるのだろうか？　一応警戒は忘れないようにしよう。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「僕のターンだ、ドロ！」

引いたカードを見た部長は、一枚のカードを手にとった。

「僕は魔法カード《スマッシュエース》を発動！　デッキの一番上のカードをめくり、それがモンスターカードだった場合、相手に1000ポイントのダメージを与えるよ！」

またバーンカードか。

こりゃ、本当にバーン特化なのだろうか。だとすれば、カイザーに勝るとも劣らないってのは、デュエルタクティクスの話じゃなく、単純に勝率のことだったのかね。

ライフ4000でバーンに専念すれば、そりゃある程度は勝率も稼げるだろうし。

「一番上のカードは《ゴキボール》！ モンスターカードだ！ このカードを墓地に送り、そして君に1000ポイントのダメージを与える！」

再び魔法カードから弾丸のように飛んでくるボール。それが俺に当たり、更にライフが削られる。

遠也      LP：2500      1500

しかし、やるな部長。まさかゴキボールなんていう、超レアカードを持っているとは。もしあれを破り捨てていたら、危うく俺に勝ちフラグが立つところだった。

しかし、元の世界ではゴキボールって絶版だから、本当にちよつとしたレアカード化してるという。まあ、手に入れても使いどころ

がないけど、珍しいカードであることは確かだったりした。

もちろん、この世界では何の特徴もなく手に入れやすい通常モンスターでしかないが。

「更に僕は《伝説のビッグサーバー》を召喚！ そしてその効果を発動だ！ このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる！ いけ、伝説のビッグサーバー！ 《ビッグ・サーブ》！」

《伝説のビッグサーバー》      ATK/300      DEF/1000

ビッグサーバーが右手と一体化しているラケットを振りかぶり、取りだしたトゲつきのボールを打ちつけた。そしてそのボールは狙い変わらず俺に命中する。

それを受けて、俺のライフは再び減少した。

遠也      LP:1500      1200

「更に伝説のビッグサーバーの効果を発動するよ。このカードが相手にダメージを与えた時、デッキから魔法カード《サービス・エース》を加え、相手は1枚ドロウする。さあ、ドロウしたまえ」

歯を光らせながら、爽やかに促してくる部長。

まあ、引かせてもらえるならありがたいがたく引かせてもらおう。

俺は1枚ドロし、そのカードを手札に加えた。

「いくよ、遠也君。僕は更に魔法カード《サービスエース》を発動する！」

「さっきの1500ダメージを与える魔法カードね……！」

「そんな……これが通ったら遠也くんの負け……！」

部長が発動させた魔法カードを見て、明日香と翔が思わずといった声を上げる。

他の面々も、このままでは俺が負けるという状況にそれぞれ驚きの表情を見せている。

負けなし、というわけではないが、俺の勝率はそれなりに高い。こつも早くにここまで追い込まれるとは思ってもいなかったのだらう。

だが、何も問題はない。俺は動揺もなくディスクを操作して、伏せてあったカードを発動させる。

「その発動にチェーンして罠カード発動！ 《シンクロ・バリアー》！ 自分フィールド上のシンクロモンスター1体を生贄に捧げ、

次のターンのエンドフェイズまで俺が受けるあらゆるダメージを0にする！」

俺の場のジャンク・デストロイヤーが光の粒子となり、それが円盤状に広がって障壁を形作る。それは俺を守るように前面に展開され、俺はその庇護下に入る。

普段は他の罠カードを優先するため入っていないカードだが、シンクロ召喚を見せるためには、それなりにヴィジュアルエフェクトもカッコイイので投入していたカードだ。

効果も決して弱くはない。次のターンまであらゆるダメージを防ぐというのは、優秀だろう。

ただ、シンクロモンスターをリリースしなければいけないのが少々重く、俺の普段のデッキにはあまり合わないため抜いてあったカードだ。

それがこうして、きちんと俺を助けてくれるとは。やっぱり、無駄なカードなんてないってことだな。

「くっ……僕はターンエンドだ！」

部長がここで決められなかったことに、悔しげな顔をしてエンド宣言をする。

相手の場には伝説のビッグサーバー1体。手札は1枚。

恐れるものは何もないな。

「俺のターン、ドロー！」

手札にも必要なカードは全て揃っている。

俺はカードを手についた。

「《ジャンク・シンクロン》を召喚！ そしてその効果を発動し、墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！ チューニング・サポーターを蘇生！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《チューニング・サポーター》 ATK/100 DEF/300

「レベル1チューニング・サポーターにレベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし勇気が、勝利を掴む力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 来い、《アームズ・エイド》！」

《アームズ・エイド》 ATK/1800 DEF/1200



鋭く尖った赤い指を持つ機械の右手。それがフィールドに飛来する。

装備カードとして扱う効果が優秀なため忘れがちだが、このカードもレベル4としては高い攻撃力を持っている。アタッカーとして十分に機能するだけのステータスはあるのだ。

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！ バトル！ アームズ・エイドで伝説のビッグサーバーを攻撃！ 《ハンス・オブ・ヴィクトリー》！」

ハンス・オブ・グローリーだと、アームズ・エイドがとてもグロイ存在になってしまうので、自重しました。霊力のほうならカッコイイのにね。

そして指示を受けたアームズ・エイドがふわりと浮かび上がり、そのままビッグサーバーの元へと飛んでいく。そしてその赤い指を広げ、一気に振り下ろしてビッグサーバーを引き裂いた。

無論、攻撃力に歴然とした差があるビッグサーバーにそれを耐えることはできず。為す術もなく破壊されると同時に爆発し、その爆風が部長を襲う。

それによって、その差分のポイントが部長のライフに刻まれることとなった。

「うわぁあぁっ！」

部長 LP:14000

ライフポイントが0になったことにより、これで俺の勝ちだ。

「よっしゃ！ 部長、いいデュエルだったぜ！」

実際、追い詰められたのは確かなので、その言葉に間違いはないだろう。

ダメージ・イーターもない状況だったし、シンクロ・バリアーがあっただのは運が良かったと言う他ない。

そう考えれば、俺にとってはなかなか緊迫したデュエルだったと言える。バーンであれ、それは人それぞれの戦略だ。アンチデッキでもないんだし、そこまで嫌うことでもないだろう。

しかし、俺がその言葉をかけた部長はというと、何故か両目から大粒の涙を垂れ流しにしていた。

思わずぎよつとし、目を見張る。大の男が、いきなりどうしたんだ。

「う、うわああああーん！ この僕が負けるなんてええええーっ！」

そして、大声で叫びながら走り去っていく。

さつきまで自信満々に歯を光らせていた人と同一人物とは思えん。そのいきなりの出来ごとに俺は何も言うことが出来ず、固まることしかできなかった。

それは俺だけでなく周囲も同じだったようで、しかしそんな硬直もももえが放った「幻滅ですわ……」の一言をきっかけに復活を果たすこととなった。やはり、いくらももえでも、負けて大泣きして逃げるといふ行為には受け入れがたいものがあつたようだ。

やれやれ、と思いつつデュエルディスクを片づけて皆のところに向かう。

そして合流すると同時に、ジュンコが思い出したようにこのデュエルで賭けていたものに言及する。すなわち、フィアンセの一件へ。完全に忘れてましたよ、それ。

「それで、どうするのよ遠也。フィアンセよ、フィアンセ」

「これまたロマンチックですわね！」

女子二人、好奇心丸出しな顔でこっちを見るな。全く興味がなさそう……というか、理解していなさそうな十代を見習うといいよ。隣の翔に「フィアンセってなんだ？」と聞いているぐらいだぞ。

けど、流石に十代はいきすぎか。あいつはまず常識について学ぶことから始めるべきなのかもしれない。フィアンセを知らないって……普通はありえないと思うんだが。

なにはともあれ、そういう条件でデュエルしていたのは事実だからな。一応はそっちについても落とし前がいるってことか。

仕方なく、俺は明日香の前に立つ。

「明日香」

「な、なに？」

俺のほうが僅かに背が高いただけなので、ほぼ同じ目線で見つめ合う。さすがに目を合わせ続けることには慣れていないのだろう、微妙に正面を向いていない。

後ろからキヤーキヤー聞こえる声は無視。どうせ、そんな色っぽい話でもないんだ。

俺は明日香の肩に手を置いた。びっくりと反射的に動いたその身体を気にせず、俺は手を動かして肩を叩く。

「気にしなくていいぞ」

「はい？」

「あんなの、あの部長が勝手に言ったことだからな。本人の了承もないのに、そんなものが成立するわけないだろ」

言いつつ、もう一度気にするなと言う意味を込めて肩を叩いた。

すると、明日香は途端に表情を変えて、大きな溜め息をついた。

「……そうね。気にしないことにするのが、一番よね」

「そうそう」

朗らかに言う俺に、後ろの女子二人からブーイングが飛ぶ。「期待させといてそれはない」「もう少し乗ってくれてもいいですけど」とか。ええい、うるさい。なんでお前らを楽しませにやなんのだ。

俺は二人の文句に耳を塞ぎ、十代と翔に声をかける。

「じゃ、帰ろうぜ」

「おう！ 次は俺とデュエルだからな！」

「はいはい」

「ホントにデュエル好きだよね、二人とも」

その翔の言葉に、俺と十代は顔を見合す。そして、互いに肩を組

んで翔の前に立った。

「そんなの」「当然だろ！」

につ、と笑って言ってやれば、翔も二人らしいや、と笑った。

そしてそのまま俺たちはスタジアムを後にする。後に残った明日香が俺たちの後ろ姿にもう一度溜め息をついたことには気づかず。

「はぁ……ホントにもう」

それが何に対してで、どういう意味なのかは明日香本人にしか分からない。

結局その後女性陣三人もすぐにスタジアムを出て寮に戻ったらしい。

その頃、俺は十代に捕まっていたから、詳しくは知らないけどね。

「もう一回！ もう一回デュエルだ、遠也！ 今度は勝つ！」

「離せ十代！ 夕食に間に合わなくなるだろ！ いくらデュエルが

好きでも、メシ抜きは嫌だ！」

そんな俺と十代の攻防を、翔と隼人、マナは生温かい目で見ていた。いや、お前ら助けるよ！

最終的に。俺はきちんと夕食に合った。しかし、息を切らしての滑り込みセーフだったため、その場にいたカイザーにかなり怪訝に思われたのは言うまでもないことだった。

## 第15話 青春（後書き）

アカデミアに舞台が移った直後の、リハビリのような話でした。

部長って全然重要なキャラじゃないんで、慣らしにはちょうどいい存在でした。

これまでは海馬とかペガサスとのオリジナル話ばかりでしたからね。本編に絡んだ話の、慣らしの犠牲になってもらいました。

しかし、レシーブエース……本当に欲しいカードです。

めっちゃくちゃ便利だと思うのは私だけでしょっか？

次回はおそらくデツキ盗難事件。

何とか時間を見つけて書いていきます。



## 第16話 盗難(前書き)

今回は遊戯デッキとの対戦回……の手前です。

ちょっと短いかもしれませんが、お付き合いいただけると嬉しいです。

あと、序盤の展開について一言。天井って大事ですよ。

## 第16話 盗難

アカデミアの生徒は今、誰もがどこか浮ついた雰囲気を見せていた。

それもそのはず、近いうちにこのアカデミアで武藤遊戯のデッキが展示されることになったのだ。

デュエリスト・キングダム  
決闘者の王国、バトルシティ、KCグランプリ……いずれの大会でも優勝を果たした、文字通り最強の名を持つ初代決闘王・デュエルキング武藤遊戯。

この世界においては、知っている有名人と聞けば真っ先に出てくるほどに名の知られた人物であり、また全デュエリストの憧れの的である。

だからこそ、皆が浮かれる気持ちも理解できるといふものだ。それを知ってからのアカデミア生の浮かれっぷりったら本当にすごかった。誰も彼もがそわそわしていて、遠足前日の小学生のような有様だ。

こればかりはどの寮の生徒でも変わらず、その日が来るのを心待ちにしているのはこの島にいるデュエリストならば、全員と言っても過言ではないだろう。

しかし、遊戯さん本人はそんなことにこだわらない気さくな人だ

し、杏子さんとの関係に微妙に悩んでいたりする普通の人だったりするんだが、カリスマってのは凄いもんだと実感する。

きつと遊戯さんがこの状況を見たら、困ったように笑って「参ったな」とでも呟くことだろう。決闘王デュエルキングとはいつても、人間なのだから、そんなものだ。

そうそう、当然ながら十代たちもまたこのイベントを楽しみにしていた。

さつき十代と翔が来て、整理券が手に入ったことを報告していたからな。よほどその喜びを誰かに伝えたかったらしい。翔に至ってはそれを入手する際にイエロー生徒に勝つたらしいのだから、やるものである。

ちなみに、俺は即座に手に入れてますよ。っていうか、一番最初に並んで手に入れました。シャッターの前に陣取っていた俺に、トメさんも驚いていたぐらいだからな。

まあ、実のところ実際にデュエルした身としては、彼らほどに熱狂できないんだが……それでもやはり遊戯さんの名前は別格だ。こういう場で改めて見てみるのもいいだろう。

これも一種のお祭りみたいなものだ。それに乗らない手もない。

……それに、約一名もの凄く楽しみにしている奴もいることだしな。

『マスターのデッキかあ。久しぶりにお師匠様にも会えるかなあ』

ワクワクという擬音がここまで当てはまる奴も珍しい。

それほどまでにマナの浮かれっぷりが半端ない。恐らく、今このアカデミアで一番浮かれているのはマナで間違いないだろう。生徒でもないのに。

これで俺が行かないとでも言おうものなら、何をされるかわかったものではない。俺がこのデッキ展示会に行こうと決めた理由の一つである。

『みんなも元気かなあ。あー、楽しみ！』

この間帰省した時に遊戯さんに会えなかったから、それが響いているのかもしれない。ぬか喜びしたぶん、ここでそれが爆発したのだろう。

「まあ、喜んでくれたなら良かったよ」

夜も遅くから並んだ甲斐があったというものだ。朝早くではないところがミソである。

まあ、俺としてもマナのために、確実に手に入れたかったのだ。今回のこれは普段の感謝を示すのに、いい機会だった。それが俺が

並んでまで手に入れた一番の理由である。

ま、そのためなら、それぐらいの苦勞はさほど問題じゃないって  
ね。

『うんっ、ありがと遠也!』

笑顔で俺にそう言って、マナが近付いてくる。

そして、実体化してがばっと後ろから抱きついてきた。

「うわっ!?!」

突然背中に重み加わるが、幸い俺は立っていたから、咄嗟でも  
踏ん張って耐えることができた。

必然、俺に背負われるような格好になっているマナ。ふふーん、  
と何故だか得意げに笑っているのが声からわかる。

バランスを取ろうと身体がまだ揺れているというのに、マナは一  
向に離れる気配もなく肩から前に腕をまわして俺に捕まっている。

「うらっ、危ないから離れろっ!」

背中感触、背中感触、背中感触……！

しかし言葉とは裏腹に素直な俺の心の内。仕方ないね。

きっと世の男性諸氏は俺がそうなってしまふ理由もわかってくれるだろう。見た目だけでも、男はカッコよくありたい生き物なのさ……。

「いいでしょー。嬉しいくせにー」

なぜバレた！？

俺が思わず驚愕すると、そんなのバレバレだよー、と笑われた。なんだ、バレバレだったのか。死にたい。

そんなことを思っていると、マナの位置が少しずつずれてきて、いつの間にやら肩から顔を出していた。

つまり、俺の顔の横に、マナの顔が来ていた。近い近い！

「おまつ………！　少しは恥じらいをだなあ………！」

「遠也が気にしすぎなんだよ。それに、私だって恥ずかしくないわけじゃないんだよ？」

なんだと！？　くそ、そんなことを言われると、色々と期待して

しまっ………！

俺は一体この状況でどうすればいいんだ。もはや本能の赴くまま流されるしかないのか………！

あわやそう思ったところで、扉を叩くノックの音。一瞬静止する俺たち。

そして扉越しに聞こえる声。『すまない、入るぞ』と言う声と共にドアが開かれる。

「遠也。武藤遊戯のデツキ展示会だがお前も ……」

瞬間、入って来たカイザーと俺たちの視線が交わる。

俺、マナ、と顔がくつつくほど近くにいた俺たちをそれぞれ見て、カイザーは悟ったように笑った。

「フツ、邪魔したな………」

「待て待てカイザーせめて言い訳くらいっていつか前にもあったなこんなことおっ！」

素早く部屋から出ていったカイザーを、マナを振りほどいて追いかける俺。これでは女を部屋に連れ込みまくっている上にコスプレまで強要しているという誤解を与えかねない。俺が社会的に死んで

しまう！

そして、結果的に部屋に残されたマナ。

頬を膨らませて、呟く。

「……うー……やっぱり、あの人嫌い……」

そして枕をボツツと叩き、やり場のない怒りをぶつけるマナだった。

そんなこんなでデッキ展示会の前日。



いよいよ明日ということ、一層期待感を増して笑顔を見せるマナと共に、俺はブルー寮の自室にいた。

楽しそうにベッドに寝転がっているマナを微笑ましく見ながら、俺はデッキの調整を続けていく。先日のようにデッキ調整を忘れるなんてことがないよう、毎日絶対に行くことを改めて決めた俺の日課である。

そして、今調整しているのは、シンクロデッキと併せてこの世界に持ってきたもう一つのデッキのほうだ。

俺が新カードのテスター兼普及担当という名目上、シンクロデッキを積極的に使っていないのは不審である。そのため、このデッキでデュエルをしたことはこのアカデミアに来てからは一度もない。

それでも、このカードもまた俺と一緒に来てくれた大切なデッキ。こうして欠かさず調整をしたりして、デッキに触れる時間は作るようにしている。

カードも水ものみたいなもので、不意にいいコンボが思いついたり、デッキに触れていると気がつくことがあったりして、常に変化していくものだ。

だからこそ、たとえ使うことがなくともこうして触れることは大事だ。特に実際にカードたちとの絆が勝敗に影響することも考えられるこの世界では。

ま、それでなくても元の世界にいた頃からカードに触れてデッキを見るのは趣味……というかクセみたいなものだったから、苦にす

ることでもない。

そんなわけで俺もマナほどではないが、鼻歌交じりに穏やかな時間を過ごしている、と。

突然俺のPDAに電話が入る。画面に表示された文字は“十代”だった。

「もしもし」

通話ボタンを押し、応答する。

と、十代は前置きもなくいきなりこう言った。

『遠也！ 一足先に見に行こうぜ！』

……なにを？ と思わず思った俺は間違っていないだろう。

詳しく聞けば、十代は遊戯さんのデッキが明日公開されるかと思うと居ても立ってもいられなくなったようだ。それに賛同して翔と隼人も十代と一緒に一足早く会場のほうに出向くとのこと。

なるほど、とその電話に頷き、俺は言葉を返す。

「けど、まずいんじゃないのか、それ」

『おいおい、遠也。あの遊戯さんのデッキなんだぜ！一秒でも早く見たいと思わないのか？』

「俺はなあ……」

見たいか見たくないかと聞かれれば、そりゃ見たい。

けど、整理券持つてるんだし、明日見れるわけで。わざわざ睡眠時間削ってまで、という気持ちもある。俺の場合、かつてデッキを実際にこの目で見ているからそう思っただろうが。

そう思っていると、横からマナがずっと顔を出して、PDAに顔を寄せてきた。しかも、いつの間にか実体化までして。

「行く行く！今から遠也と一緒に行くからね！」

『お、マナか？ よっしゃ、じゃあ待ってるぜ！』

プツツと音がして、十代が通話を切る。

そしてPDAから顔を離れたマナに、俺はジト目を向けた。

「……おい」

「だ、だってえ。お師匠様に会うのとか、もう何カ月ぶりなんだよ

「？」

「忍び込んだって知ったら、マハードは怒りそうだけどな」

「うっ……そ、そこは美しい師弟愛で許してくれるよ！……たぶん」

力説するものの、最後は結局自信なさげに肩を落とす。

まあ、マハードは真面目で厳格だからな。奔放な性格のマナを叱るのはいつものことだ。きっと、今回もそうなるだろう。

やれやれ。

「……さて、じゃあ行くか」

「え、いいの？」

立ち上がった俺に、座り込んだ状態のマナが顔を向ける。

何をいまさら。

「行きたいんだろ？　なら、付き合おう」

部屋着だったから、制服に着替えなきゃいかんのは手間だけどな。

洋服ダンスを開き、制服を取り出す俺。

「おわっ!？」

だが、急にマナが座った状態のまま俺の腰に抱きついて来て、思わずバランスを崩しそうになった。

「ありがとー、遠也ー!」

「わかったから、ひとまず離れる! 着替えられんだろ!」

腰にへばりつくマナをどうにか離し、俺は素早く制服に着替える。

そして部屋を出ると、十代たちが待つレッド寮に向かった。……  
が、ふと思いついてPDAを取り出す。

「あ、もしもし?」

俺は電話をかけながらレッド寮への道を小走りに進んでいくのだ  
った。

レッド寮に着くと、寮から少し離れた位置に十代たち三人が既に待機していた。

「待つてたぜ遠也！ ん？ 三沢、お前も来たのか！」

「遠也に誘われてな。俺も、決闘王のデッキデュエルキングを見に行こうかと思っ  
ていたから渡りに船だった。そういうわけで、ご一緒させてもらっ  
よ」

「おう！ もちろん、いいぜ！」

肩をすくめて話す三沢に、十代がその同行を快諾する。

そう、俺がさっき電話したのは三沢だった。勉強熱心かつ真面目な三沢であるが、興味があることについては時に大胆なことを行うこともある奴だ。

寮の部屋に計算式を書きまくっていたのがいい例だ。普通、借り

物の部屋にそんなことはしない。興味が自制を上回ってしまうというのは、この男にはよくあることだ。

だから、きつと今回三沢も同じく行こうとすると考えたのだ。十代が思いついたのだ。三沢が同じことを考えつかないはずがない。

そう思って電話をかけてみたら、ビンゴだったというわけだ。

目的が同じなのだから、一緒に行ったほうがいいだろう。そう考えて、俺は三沢も誘ったのだった。

「アニキ、そろそろ行こうよ。閉められちゃったらどうしようもないよ」

「そうなんだな。まだ先生か誰かが中にいるうちに行かないといけないんだな」

「おっと、そうだったな。それじゃ、行こうぜ皆！」

二人に促されて、十代が先頭切って歩きだす。

俺と三沢、翔と隼人は、そんな十代の背を追って、逸る気持ちは表すような早歩きになって、会場となる場所へと向かうのだった。

まだ閉め切られていない入り口から侵入し、人の目を盗むようにして道を進んでいくこと数分弱。

遊戯さんのポスターが両脇に貼られた通路と、その奥に繋がる重厚な扉が見える場所へとやってまいりました。

此処こそが今日の目的地。既に遊戯さんのデッキが明日のためにスタンバっている会場なのだ。

俺たちはついにその場所へと辿り着き、十代を始め翔と隼人、三沢もその顔に抑えきれない興奮を表している。俗に表現するならば、ワクワクしているというのが最も当てはまるだろう。

恐らくマナも、仲間たちとの邂逅を目前にしてさぞ浮かれているだろう。そう思って横を見ると、精霊化しているマナは怪訝そうに眉を寄せていた。

「……………どうしたんだ？」

あまりに予想とは違ったその表情に、俺は不思議に思って問いたです。

すると、マナはうーん、と唸ってから口を開いた。

『……………おかしいなあ。あの扉の向こうから、みんなの気配がしない



んだけど……』

「へ？ じゃあ、ここには……あ！」

そつだ、あつたじゃんこのイベント！

なんでこんな印象的な出来事を忘れてんだ俺！？

『マンマミーヤァ ツ！』

俺の思考がある記憶に辿り着いた瞬間。扉の向こうから叫び声が響く。

「あの声は……」

「ああ、クロノス教諭だ！」

翔の疑問の声に三沢が答え、俺たちは走り出して扉を一気に開け放つ。

そして視界に飛び込んできたのは、暗がりの中でライトに照らされた中央部分のガラスケース。無残に割られたその中に、本来収められているべきデッキはない。

更に、その横には青い顔で表情を引きつらせているクロノス先生

が立っているのだった。

「まさか、クロノス教諭……」

「ち、ちち違うノーネ！ 私じゃないノーネ！」

三沢が思わずつぶやいた言葉に、いつそ過剰に反応して必死に首を横に振るクロノス先生。まあ、この状況では疑ってくれと言つて  
るようなもんだからな。第一印象があまりにも悪すぎる。

だからこそ、冷静に結論を出した十代すげえ。クロノス先生は鍵  
を持つているはずだから割る必要がない、つて瞬時に判断するとか。  
その思考力をなぜ勉強に傾けないのか。

ともかく、クロノス先生が犯人ではないと確信したところで、俺  
たちは次の行動に移る。すなわち、真犯人捜しだ。

早く探し出してこの一件の落とし所を見つけなければ、クロノス  
先生には間違いなく何らかの処分が下るだろう。そのために、とい  
うのと、もう一つ遊戯さんのデッキを盗むとは許せん、というデュ  
エリストならば当然の怒りで俺たちは手分けして探すことを決めた  
のだった。

まあ、それ以前に窃盗は普通に犯罪である。盗んだ……確かイエ  
ローの生徒は、警察に追われて逃げられると思つていのだろうか。  
まあ、デュエルで勝つたら見逃せ、とか言つのかも知れないが。

この世界では普通に通りそうで怖いな、その方法。未来で実証さ

れてるし。

「……それで、マナ。デッキがどこにあるか分かるか？」

『うーん……気配が感じられる距離には、たぶんいないよ』

皆と別れた後、俺はマナの間を頼りに探索をしている。とはいえ、まだ気配を感じられないようで、なかなか結果が出ていないのが現状なのだが。

それでも、当てずっぽうよりは全然マシだ。今はマナの間を信じるほかない。

『うー……許せないよ、みんなを盗むなんて！ 見つけたら、絶対

あ！』

「見つかったか!？」

マナが突然上げた声に、俺は勢いこんで問いかける。

『うん！ あっちの崖のほう！ たぶん誰かとデュエルしてる!』

なるほど。デュエルによって表に出てきたことで、マナも感じ取りやすくなったのかもしれない。

俺はマナが指し示す方角に全速力で向かっていく。

誰がデュエルをしているのかは知らないが、遊戯さんのデッキを使っている以上、苦戦は必至だろう。本人のドローク力があってこそデッキとはいえ、単純に強いカードも多く入っているのだ。

途中みんなに連絡をしようかとも思ったが、正確な場所はわからないし、時間も惜しい。まずは自分の目で確認することが先決だと判断して、ただひたすらに俺は走った。

そして、いざ海岸付近。ゴツゴツとした岩場が目立つその場所に来た時、俺の耳が叫び声をとらえた。

「ッ、今の！」

『うん、翔くんの声だよ！』

その声はかなり近くから聞こえてきていた。

俺はその声に向かってまっすぐ進む。

そして、岩場の中でも大きく海側にせり出した岩の上。そこに立って地面の翔を見下ろすライエローの生徒の姿を見つけたのだ。

「翔！ 大丈夫か！」

「ふう、遠也くん……」

恐らくデュエルをしていたのは翔だったのだろう。

デュエルディスクをつけた翔は、岩場から足を滑らせたのか地面に背中をつけて倒れ込んでいた。

駆け寄って来た俺に、翔は弱々しく表情を陰らせる。

「デッキを返してもらおうと思ってデュエルを挑んだんだけど……負けちゃったす」

「ふんっ、当然だろう！ このデッキは決闘王武藤遊戯のデッキだぞ！ お前ごときに勝てるわけがない！」

悔しげに言う翔に、岩場の上に佇む男が高飛車に言い放つ。

俺は翔に向けていた視線をそいつに向けた。

「お前か、遊戯さんのデッキを盗んだ犯人は」

「お前は……ブルーの皆本遠也か！ そうだ、俺が決闘王のデッキを拝借したのさ！」

「遠也くん。あいつは、ライイエローの神楽坂君っす。三沢君によ

ると、相手のデッキをコピーして、本人顔負けのデュエルをする優秀な生徒……らしいんだけど」

翔は、この間僕が勝ったのが神楽坂君だった、と続けた。

俺はそれに頷く。翔はあの制裁デュエルを皮切りに、めきめきとデュエルの腕を上げている。ライイエローに勝ったことはそう不思議なことではない。

しかし、コピーデッキか。遊戯さんのデッキを盗んだのも、そのためか？

「そいつの言う通り。俺はどれだけデッキを作っても、必ず誰かのデッキに似てしまう。……だから、本人になりきることで、俺はそのデッキを十全以上に使いこなすことが出来るようになったのさ！」

得意げに言う神楽坂に、俺は言葉を返す。

「どれだけ似せたって、お前が組んだ以上それはお前の……デッキだろ。本人になりきろうなんて、無茶なことを」

「……っ貴様に！ 貴様に何がわかる！」

だが、俺がそう言った瞬間。神楽坂は顔色を変えて怒声を上げた。

「わざとやっているわけではないのに、他人の猿真似と蔑まれ！  
それで負ければ、真似をしても勝てないクズと罵られ！ そんな気  
持ちが、シンクロモンスターなんていう反則を使ってるお前に、わ  
かるものか！」

『つな、なに勝手なことを！ 遠也が好きでそんな ！』

隣で俺の代わりに激昂しかけたマナを、俺は腕をその前に出すこ  
とで抑える。

そして、溜め息を一つ吐いて神楽坂に向き直る。

「……確かに、俺の持つシンクロモンスターは反則かもしれない。  
けど、それはお前が盗みをしていい理由にはならないぜ」

「ぐ……」

正論だと神楽坂自身も理解はしているのだろう。

呻くだけで、反論が来ることはなかった。

『遠也……』

心配げな声を出すマナに、俺は苦笑を返す。

確かに、神楽坂の言う通りだ。俺の持つシンクロモンスターは、文字通りの意味で反則だ。他の世界から持ち込んだものなのだ。これ以上の反則があるだろうか。

俺だって、別に好きでこの世界に来たわけじゃない。行かせてくれと頼んだわけでもないのに、なぜか俺はこの世界に来させられていた。

だから俺に責任がないと言えば、そうなのだろう。でも、きつと神楽坂にとつてそれは関係ないことだ。俺は、シンクロモンスターという反則をしている。それがきつと、アイツにとつての真実だ。俺の事情を知らない以上、それは仕方がないことだ。

反則、と言われることに少々心が痛んだのは事実だが、それもまあある意味ではその通りである以上、甘んじて受け入れるべきなのだろう。

そもそも、今の俺はこの世界で生きている。俺の代わりに、俺の気持ちを汲んで怒ってくれる奴もいることだし、今はそれだけでいいさ。

「神楽坂。俺とデュエルしろ」

「なに？」

俺はデュエルディスクを構え、神楽坂を見る。デッキケースから取り出したのは、いつもとは違うデッキ。



「俺はお前が言う反則であるシンクロデッキを使わない。だから、その代わりにお前は負けたらそのデッキを大人しく返せ」

「お前……ナメているのか？ 本気を出さないで、この決闘王のデッキに勝てるだど！？ ……いいだろう、このデッキの力、思う存分味わわせてやる！」

ナメられていると感じて、怒りをあらわにする神楽坂だったが、遊戯さんのデッキに勝てるわけがないと踏んだのだろう。強気にデュエルクを構える。

まあ、シンクロしか使つてこなかった俺が、それを使わないと言うのだ。本気じゃないと判断され、甘く見られるのも当然っちゃ当然か。

「そんな！ 遠也くん、無茶だよ！ 相手はあの武藤遊戯のデッキなんだよ！ シンクロを封じて勝てるわけが……」

「なに、でも使ってるのは遊戯さんじゃないだろ」

「それはそうだけど……」

「なら、安心しろって。ついでにお前の仇討ちもしてやるからさ」

そう不安げな翔に言い残し、俺は神楽坂が立つ大岩と同じ高さの

岩に登る。互いに視線を合わせ、その間には適度な距離がある。

そうして向かい合う俺たち。不意に下から「遠也くん、負けるなっすー!」と応援の声が聞こえて、俺はそれに小さく片手を上げて応えた。

「さて、いくぞ神楽坂」

「デュエルキング決闘王に挑むことが、どれほど愚かなことだったか、教えてやるぜ!」

ディスクのボタンを押し、ディスクの液晶に初期ライフポイントが表示される。

これで準備は整った。

「「デュエルッ!」」

遠也 LP：4000

神楽坂 LP：4000

「先攻は……俺か。ドロー!」

手札に一枚加え、その内訳をみる。さて、どうしたものか……。

「遠也！」

「遠也に……神楽坂だと!？」

「な、なんでデュエルしてるんだな!？」

その時、岩場に犯人を探しに出ていた十代と三沢、隼人の三人が姿を現す。

恐らく翔の叫び声を聞いて来たのだろう。そちらを見れば、ちょうど三人は下の翔と合流し、翔が三人に何やら話している。事情を説明しているんだろう。

「なっ、遠也がシンクロを使わないだって!？」

「馬鹿な、それであの武藤遊戯のデッキに挑もうというのか……!」

「無茶なんだな遠也！」

三人の驚きの声を聞き、俺は我知らず苦笑する。

特に隼人なんかは、翔と同じこと言いやがって。

それだけ俺がシンクロを使わないというのが衝撃的なのだろう。

まあ、この学園に来てからはシンクロしか使っていないし、この間はシンクロ召喚の実演でテレビに出たぐらいだ。

それほどまでに俺とシンクロ召喚のイメージは直列的に結びついているのだろう。

それはそれで嬉しいことだが、俺がシンクロ召喚を使わなければ勝てないと思われているのはいただけない。

心配してくれるのは嬉しいが、こりゃ負けられない理由が増えたな。

「三人とも、心配するなって！ 相手は遊戯さん本人じゃないんだぜ！」

「それはそうだが……勝算はあるのか？」

三沢がそう言うが、それこそ愚問だ。

「おいおい、三沢。どんなデッキだろうと、常に勝つ確率はゼロじゃないんだ。なら、俺が精魂込めて作ったデッキが、借り物のデッキに負けるわけないだろ」

「貴様……!!」

神楽坂が睨みつけてくるが、俺は何も間違ったことは言っていない

い。

そいつは、遊戯さんのデッキだ。最低限お前自身が組んだ、コピーデッキですらない。

なら、そいつは絶対的にお前のデッキじゃない。

そんな相手には負けないし、負けられない。

「わかった……負けるなよ、遠也！」

「おう」

三沢に答え、十代たちにも任せると目で訴える。

どうにか頷いてこちらを応援する声を出してくれるあいつらから視線を外し、俺は再び自分の手札に目を落とす。

そして、その中からカードを選び手に取った。

「俺はモンスターをセツト。更にカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

「偉そうなことを言った割には、消極的だな。そんなんじゃないこのデッキには勝てないぜ！俺のターン、ドロー！」

引いたカードを見て、神楽坂はにやりと笑みを浮かべる。

そして、挑発的な目でこちらを見てきた。

「ふっ……決闘王デュエルキングの力を見せてやるぜ。俺は《融合》を発動！

手札の《幻獣王ガゼル》と《バフォメット》を融合し、《有翼幻獣キマイラ》を融合召喚する！」

《有翼幻獣キマイラ》    ATK / 2100    DEF / 1800

いきなり融合召喚、それも有翼幻獣キマイラか……。

相変わらず遊戯さんのデッキはロマンに溢れている。ブラマジをエースに置いているデッキとは思えないな、ここだけ見ると。

「有翼幻獣キマイラ……あの武藤遊戯が、特攻隊長として起用していたエースの1体だ」

そしてよくわかる三沢の解説。

しかし、キマイラを特攻隊長に据えて、ブラマジのような魔法使い族、戦士族、更に上級モンスターも多用しているというのに、ホントによく回るよあのデッキは。

だからこそ、こうして1ターンでキマイラを召喚した神楽坂は結

構凄い。本人になりきる、というのもここまで作用するならばもはや才能だな。

「行くぞ、皆本遠也！ 有翼幻獣キマイラでセットモンスターを攻撃！ キマイラ・インパクト・ダッシュ《幻獣衝撃粉碎》！」

神楽坂の言葉に従い、こちらに突進してくる二頭を持つ幻獣種。

牙の並ぶ口を大きく開き、獐猛という言葉そのままに乱暴な直進をしてくるその攻撃によって、俺のセットしたカードがめくれあがる。

そして、それと同時にカードから青い服を着た金髪の魔術師が飛び出した。

「セットしていたのは《見習い魔術師》だ。このカードが戦闘で破壊されたことにより、効果発動。デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体をセットする。俺は《執念深き老魔術師》を選択する」

見習い魔術師がキマイラの突進に耐えきれずに破壊され、代わりに皺だらけの顔をした老魔術師がどこからともなく現れる。

そして、モンスターゾーンに膝をついた状態のままカードが裏返りその姿を消していく。

一連の流れを見て、三沢が声を上げた。

「シンクロ召喚ではない遠也のデッキは、【魔法使い族】か！」

三沢の言葉に、俺は内心で肯定を返す。

俺のもう一つのデッキ。それは魔法使い族によるビートダウンだ。

いつものシンクロデッキが勝つために作ったデッキをこの世界用に調整したものとすれば、こちらは完全に趣味のデッキ。俺は数ある種族の中で魔法使い族が最も好きで、一番最初に作ったデッキも魔法使い族だった。

だから、元の世界の環境でもシンクロデッキと併せて魔法使い族デッキは常にいじって更新し続けてきた。

それでもキーカードやお気に入りカードは絶対に抜かなかつた。一応勝てるようなギミックも突っ込んでいるものの、やはり一番は好きなカード達を使いたいという理由で作ったデッキなのだ。そこから辺は、こだわりと言っていい。

そして、このデッキの主軸を担うのは言うまでもないあのカードだ。

俺は自分の隣に目を向けた。

そこには精霊化したマナが俺と神楽坂のデュエルを見守っている。

マナにとっては、このキマイラも仲間の1体だろう。それが他人の手によって動かされているのを見るのはどんな気分なんだろうか。



俺が神楽坂にデュエルを挑んだのは、これがあつたからだ。

無論俺自身のこともあるし、神楽坂のスタイルが気に入らなかつたこともある。だが、それ以上に他人のデッキ……それもマナの仲間たちを盗んで使い、得意げにしているのが、どうにも気に入らなかつたのだ。

だから、俺はこうしてこのデッキで戦うのだ。シンクロが反則だと言われたから、それだけではない。

このデッキならば、マナは自分の力を振るうことが出来るからと、というのが理由の一つだった。

「ふん、面倒なモンスターだ。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「俺のターンだ、ドロー！」

手札にドローカードを加え、俺は横にいるマナに目を向ける。

そして、その目をしっかりと見つめて小声で話す。

「いくぞ、マナ」

『うんー！』

その力強い返事に頷き、俺は攻勢をかけるための口火を切る。

「セットモンスターを反転召喚！　そして執念深き老魔術師のリバース効果発動！　相手フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する！」

神楽坂のフィールドにはキマイラしかない。当然、対象はキマイラだ。

老魔術師が闇色の魔力を放出し、それが杖の先へと収束していく。そして、それをキマイラのほうへと向けると、エネルギーが迸り、キマイラの身体を闇へと飲み込んでいく。

為す術なく破壊されたキマイラはいなくなり、神楽坂のフィールドが空になる。

「ちっ、この瞬間、有翼幻獣キマイラの効果が発動するぜ！　このカードが破壊された時、墓地の「幻獣王ガゼル」か「バフォメット」のどちらかをフィールドに特殊召喚する！　俺は《バフォメット》を守備表示で召喚するぜ！」

《バフォメット》　ATK/1400　DEF/1800

山羊の角と白い翼を持った悪魔が、翼を折りたたみ、その中に身

を潜めるようにしてフィールドに姿を現す。

これがキマイラの厄介なところだ。倒しても、必ず壁を1体残していく。ガゼル、バフォメット、共にステータスはあまり強くないとはいえ、追撃を防ぐという面では優秀なカードだ。

だが、俺は気にせずに続けていく。

「罨カード発動！ 《サンダー・ブレイク》！ 手札を1枚捨て、相手フィールドのカードを1枚破壊する。バフォメットを破壊！」

「なにっ!？」

頭上から降り注いだ雷により、墓地より蘇ったバフォメットだったが早々に退場とあいなった。

それに計算を狂わされたのか、忌々しげな表情を見せる神楽坂。

その様子を一瞥し、俺は更に手札のカードに手をかける。そして次の行動に移る前に、神楽坂に向かって口を開いた。

「……神楽坂。俺の、相棒の姿を見せてやるよ」

「なに？ シンクロモンスターでもないのに、相棒だと？」

神楽坂が、俺の言葉に怪訝な顔になる。

相棒とは、すなわち最も信頼を寄せるカード。

ならば、それは俺が最も使うシンクロデッキにあってしかるべき。そう考えたのだから、そう考えるのが当然だ。

無論、俺が信頼を寄せるカードはシンクロデッキにも沢山ある。

だが、俺が本当に心の底から信じているのは、何だかんだ言っただけ……たとえ普段のデッキに入っていないなくとも。やっぱり、こいつなんだよな。

「お前がそのデッキを使うことに、言いたいことがあるそうだ。…

…俺は、執念深き老魔術師を生贄に捧げ」

手に取ったカードをディスクに置く。

そして、執念深き老魔術師の姿が消えて墓地へと行き、入れ替わるように徐々にフィールドに溢れる光の渦。

「《ブラック・マジシャン・ガール》を召喚する！」

渦巻く光が消え、ポンツとコミカルな音と共に現れる黒魔術師の少女。

俺にとっては、もはや見慣れたという言葉では足りないほどに、俺の生活すべてに浸透する、身体の一部のような存在。

俺の相棒ことブラック・マジシャン・ガールのマナが、その杖を神楽坂に真っ直ぐ向けて俺のフィールドに降り立った。

《ブラック・マジシャン・ガール》    ATK/2000    DEF/  
1700

「なっ……！　ぶ、ブラック・マジシャン・ガールだと！？　それは武藤遊戯の……このデッキにしか入っていないはずだ！　な、なぜそれをお前が……！？」

驚愕もあらわに動揺する神楽坂だが、俺はその質問には答えなかった。

ただマナに向けてだけ声をかける。

「いけ、マナ」

『うんー』

頷きを返すマナに無言で応え、俺は指で神楽坂のフィールドを指

し示す。

「ブラック・マジシャン・ガールで、神楽坂に攻撃！  
《ブラック・パ  
ニング黒魔導爆  
裂波》！」

俺の指示に応え、その杖の先端に紫電を纏った闇の魔力が集って  
いく。

それは徐々に丸みを帯びた形となり、杖先で安定する。それをマ  
ナは一度軽く振りかぶり、そして一気に神楽坂へと向けて解き放つ  
た。

バチツと音が鳴り、閃光が辺りを照らす。そして、その魔力砲撃  
は過たずに神楽坂へと突き刺さった。

「ぐあああつ！」

神楽坂    LP：4000    2000

攻撃を終えたマナが、その杖をトンと肩に担いで俺の隣に立つ。

そして、2000ポイントの大ダメージを受けた神楽坂が思わず  
膝をついた。

その姿を視界に収めた後、俺はマナと視線を合わせる。そして、

神楽坂に向けて言葉を放つ。

「デュエルキング決闘王のデッキがあつて、シンクロがなければ勝てると思つたか？ 甘いぜ、神楽坂」

その言葉に顔を上げ、睨みつけてくる神楽坂に、俺は更に続ける。

「俺と、俺の相棒をなめるなよ」

言葉と同時に、ふふ、と隣でマナが満足げに笑つて、俺を見る。

それに俺も小さく笑みを見せながら、俺は再び神楽坂に向き合つたのだつた。

## 第16話 盗難（後書き）

魔法使い族ビートは個人的にロマン溢れていて大好きです。

現実でも昔に作ったものを、今でもたまに調整しています。BMGとかヴァルキリアはもちろん入っていますよ？ 私の場合は趣味デッキですしねw

そして初手、有翼幻獣キマイラはテンプレというより様式美。異論は認めます。

しかし、これ以後の展開を考えているんですが、VS遊戯デッキが意外に難しい。

もう少し次話は時間がかかるかもしれません。

まあ、既にストックが切れている時点で、不定期なんですけどね^  
^ ;

それでもどうにか頑張りますので、どうか見捨てないでよろしくお願ひします。



第17話 夜闘（前書き）

更新遅れるかもと言いましたが……。

すまん、ありや嘘だった。

いえ、すみませんタメ口聞いて。

そついうネタ台詞なんで許してください。

途中までは詰まっていたんですが、何故か急に筆が乗って最後まで  
書いちゃいました。

家に缶詰めした甲斐がありましたよ。

というわけで、盗難事件の結末へどうぞ。

## 第17話 夜闘

遠也 LP：4000

手札3 場・《ブラック・マジシャン・ガール》

神楽坂 LP：2000

手札2 場・伏せカード1枚

マナの直接攻撃が決まり、これで神楽坂のライフポイントは一気に減って半分の2000になった。これで、俄然俺が有利になったと見ていいだろう。

序盤ながら、いい始まり方だと言える。

そう思っている俺だったが、十代たちがいる岩の下あたりからざわざわとした声が聞こえる。どうやら、ブラック・マジシャン・ガールの召喚に驚いたのは、神楽坂だけではなかったようだ。

「ええっ！？ なんで遠也くんがブラマジガールを持ってるんすか！？」

「あのカードは決闘王である武藤遊戯のデッキにしか入っていないはず……」

「どうということなんだな!？」

翔、三沢、隼人の三人が面白いぐらいに取り乱してくれている。

さすがに武藤遊戯ゆかりのカードを俺が持っているとなれば、相  
当に衝撃的なことなのだろう。この世界では。

そして、眼下の騒ぎに気付いたマナが、常日頃からマラマジガールのファンだと公言してはばからない翔に、ウィンクをする。自分のファンだと言われて、悪い気はしていなかったらしい。

「ああつ！ いま僕にウィンクしたよ！ ……僕もう死んでもいい……」

「偶然じゃないか？」

残念、三沢。偶然じゃありません。

そんな風にブラマジガールが遊戯さんのデッキからではなく俺のデッキから現われたことに驚く面々。

その中で、唯一十代だけがどこか得意げな様子を見せて驚いていなかった。

「へへ、俺は知ってたぜ！ 遠也がブラマジガールを持ってるってな」

「ええ！？ そうだったんすか！？」

「じゃあ、なんで武藤遊戯しか持っていないカードを持ってるんだな？」

「それはだな！ ……えつと……悪い、遠也。なんでだっけ？」

隼人に問われ、答えようとした十代が答えられずに俺に放り投げてる。

それに思わず勢い込んでいた体勢を崩して、ずっとこけそうになる翔と隼人。三沢は苦笑してそんな十代を見ていた。

そして、放り投げられた俺も、十代が苦し紛れに浮かべている笑い顔を見ながら、肩をすくめて口を開く。

「確かにブラマジガールはレアカードだけど、別に世界に1枚つてわけじゃないだろ？ もしそうなら、フルーアイズ・ホワイト・ドラムン青眼の白龍よりもレアで、神のカードと同じレアリティってことになっちゃっただろ」

「そう言われれば……」

「確かにそうなんだな」

十代にしたのと同じような説明をし、得心がいった様子の二人。そこに、俺は更に補足する。

「遊戯さんのデッキにしか、つていうのは実戦で使ったのがあの人がだけだったからだろ。上手く回すためには、それこそ何十万、何百万するカードが大量にいるからな」

それらを買うのも困難、パックで当てるのはなお困難。そもそも絶版になったカードもあるのだ。実戦で使うなんて普通に考えれば夢のまた夢だろう。

「なるほどな……。そういう理由なら納得できる。なら、遠也はなんでそんなレアカードを持ってるんだ？」

「俺の場合は昔パック買ったら出たんだよ」

嘘は言っていない。元の世界でだが、パックを買って出したのは確かだ。この世界とはレアカードの封入率に天と地ほどの差があるけど。

「とんでもない強運だな、お前は……」

どこか呆れたようにそうこぼす三沢。いや、この世界レベルの封

入率なら、さすがに当てられないと思うぞ。いくらなんでも。

さて、説明はこのあたりでいいだろう。

俺は四人に再び背を向け、神楽坂と向かい合う。恐らく俺の話を聞いていたのだろう。その顔にはさつきまであった動揺が見られなくなっていた。

「ふん、たとえブラック・マジシャン・ガールを召喚しようとも、このデッキを操る俺が有利であることに変わりはない」

「さて、どうかな。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターンだ、ドロー！」

デッキからカードを手札に加え、自信ありげに笑みを見せる神楽坂。

「いくぜ、遠也。今度は俺の相棒を見せてやる」

「お前のじゃないだろ」

思わず突っ込むが、神楽坂は気にしないことにしたのが無視だった。

なりきっているからこそかね。そして、遊戯さんの……というよ

り、王様の相棒と言えば一人しかいない。

「俺は《古のルール》を発動し、手札からこのモンスターを特殊召喚するぜ。出でよ、我が最強の下僕しもへ！ 《ブラック・マジシャン》」

黒く渦巻く闇がフィールドに現れ、そこから徐々に一人の魔術師の姿があらわになる。

最上級に数えられる魔術師の一人。もはや遊戯デッキの代名詞と言ってもいいほどの知名度を誇るモンスター。ブラック・マジシャンの登場だった。

《ブラック・マジシャン》    ATK/2500    DEF/2100

『お師匠様……』

『まさか、こんな形で再会するとは……』

無論、遊戯さんのデッキである以上、あのブラック・マジシャンは紛れもないマハード本人だ。

呼び出されたマハードは、憂いを帯びた顔で弟子であるマナと俺を見る。マナも師匠との再会がこういう形になってしまったことに、少々表情が陰っていた。

「久しぶりだな、マハード」

『遠也殿……。まさか、あなたにこうして杖を向ける時が来るとは  
思いませんでした』

「気にするなよ、お前は悪くない」

申し訳なさそうなマハードに、俺は明るくそう返す。

武藤家の客人であった俺に、真面目なマハードはいつもこうして  
礼儀正しく接してくれていた。そんなマハードに最初はお固い印象  
を持っていた俺も、一年近く経てばそれがマハードの良いところな  
んだと気づく。

こういう場では、その真面目さが裏目に出てしまっているようだ  
が、マハードは何も悪くないのだ。そんな顔をされるのは俺として  
も不本意である。

「まあ、マナの成長を見てやるぐらいの気持ちでいいんじゃないか  
」？

『ちよっと、遠也ー!？』

『……なるほど、それはいいかもしれませんがね』



俺が冗談交じりにそう言えば、マナは驚愕して俺を見、マハードは一瞬目を見張るもののすぐに追従してくる。

恐らく、今の俺なりの気遣いなのだ判断したのだろう。まあ、間違いいではないから俺も何も言わない。その代わり、マナには犠牲になってもらおうじゃないか。師匠のためなら本望だろう。

『さあ、マナ。お前が遠也殿の下で修行を怠っていなかったか、見てやるっ』

『はい、わかりましたあ。うう……恨むよ、遠也』

すまん、マナ。

「何をごちゃごちゃ言っているんだ？ まだ俺のブラック・マジシヤンの力に慄くには早いぜ！」

神楽坂にとっては、俺が独り言を言っているようにしか見えなかっただろう。痺れを切らせ、口を開く。

そして、俺のフィールドに指を向けた。

「いけ、ブラック・マジシヤン！ ブラック・マジシヤン・ガールに攻撃だ！ 《ブラック・マジック黒・魔・導》！」

神楽坂の指示に従うように、マハードが杖を構えて魔力を充填させていく。

その規模は、やはり師匠だけあってマナのものよりも幾分か大きい。

『いくぞ、マナ！』

『うう……折角の再会がなんでこんなことにい』

マハードに比べ、泣き言を言いつつ杖を構えるマナ。

そしてマハードから放たれた魔法に対抗するようにマナも魔力を放出するが、やはり地力の差はいかんともしがたく、徐々に押され始め、マナは破壊されてしまった。

遠也    LP：4000    3500

「俺は更に《強欲な壺》を発動し、2枚ドローするぜ。カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

「そのエンドフェイズ、罫カード発動！ 《奇跡の残照》！ このターンに戦闘で破壊されたモンスター1体を特殊召喚する。蘇れ、ブラック・マジシャン・ガール！」

天から光が差し、その道筋を辿って墓地からマナが再び現れる。

それを見て、マハードが僅かに笑みをこぼし、対して神楽坂は口惜しそうに顔を歪めた。

「ちっ、さすがにやるな」

「そりゃどーも。俺のターン、ドロー！」

さて、どうするか。

手札は3枚。場にはマナが一人だけ。対してあちらは、伏せカード2枚にブラック・マジシャンのマハードがいる。

ボード・アドバンテージは完全に持っていかれてるな。しかも、手札に逆転の手はないと来た。とりあえず、今できることは一つだけだな。

「俺は《魔導戦士 ブレイカー》を召喚する！ このカードが召喚に成功したことにより、このカードに魔力カウンターを1つ置く。そしてこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除き、フィールドに存在する魔法・罠カード1枚を破壊する！ 俺が選ぶのはお前の場の俺から見て右の伏せカードだ！」

《魔導戦士 ブレイカー》 ATK/1600 DEF/1000

魔力カウンターが乗っていれば、攻撃力1900のアタッカーともなるこいつだが、今の状況では相手の場を少しでも崩すほうが肝要だろう。

ブレイカーから放たれる魔力が伏せカードを直撃し、破壊に成功した。

「くっ……《攻撃の無力化》が……」

カウンター罠、しかも攻撃の無力化か。なかなかいいカードを破壊出来た。

「俺は更にブラック・マジシャン・ガールを守備表示に変更。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！……ふ、このデッキの力をお前に見せてやるぜ」

意味ありげに口元を歪める神楽坂。

いったい何をしてくるつもりなのか……。

「バトル！ ブラック・マジシャンでブラック・マジシャン・ガール

ルに攻撃！ 《ブラック・マジック黒・魔・導》！」

「くっ………！」

再びマハードの手によって墓地に送られるマナ。すまんな、二人とも。あんまりいい気分はしないだろうに。

「まだだ！ リバー伏せカードオープン！ 速攻魔法《光と闇の洗礼》！  
これにより、場のブラック・マジシャンを生贄に捧げ、手札から  
《混沌の黒魔術師》を特殊召喚する！」

マハードが闇にとらわれ、やがてその姿を消していく。

そして、僅かばかりの間を置いてフィールドに現れた時。その姿は大きく様変わりしていた。

全身のスタイルを強調するようなレザースーツ。それを留める無数のベルト。そして、頭にかぶった帽子は縦に長かったものが横に広がるものへと変化している。

デュエルモンスターズ界の魔術師としては、ブラック・マジシャンを超える大魔術師。混沌の黒魔術師の登場だった。

《混沌の黒魔術師》      ATK / 2800      DEF / 2600

「混沌の黒魔術師……！ 最強の魔法使い族にして、魔法使い族の切り札だ！」

三沢が驚きを込めてそう言えば、翔と隼人も、そのステータスを見て驚愕する。2800という値は、容易に越えられる数値ではない。加えて効果も凶悪だから、洒落にならん。

「このカードの召喚に成功したことで、俺は墓地から魔法カードを1枚手札に加えることが出来る。俺は《強欲な壺》を手札に加えるぜ」

これだ。これこそがある意味でこのカードの最も厄介な能力。

墓地からの魔法サルベージ自体は他のカードにもあるが、しかしこのカードにはその発動に対してコストがない。更に、自身は特殊召喚方法が豊富な閻属性の魔法使い族だ。ぶっちゃけ、やろうと思えばいくらかでも回収でき、使っては回収し、というのを繰り返すことすら可能となる。

そのため、OCGでは現在禁止カードに指定されている。これが禁止を食らったことで、いったいいくつの魔法使い族デッキが涙を飲んだことか……。

「バトルフェイズ中の特殊召喚だから、まだこいつには攻撃権が残ってるぜ！ バトル！ 混沌の黒魔術師で魔導戦士 ブレイカーに攻撃！ 《滅びの呪文》！」

閃光のように走る闇色の光がブレイカーを直撃し、苦悶の表情で墓地へと消えていく。

くそう、まさかここで混沌の黒魔術師が出てくるとは……。

遠也 LP:3500 2300

「混沌の黒魔術師に破壊されたモンスターは、墓地へは行かず除外される！ 俺は更に《強欲な壺》を発動！ デッキから2枚ドロし、ターンエンドだ！」

まずい……。ここで何かキーカードを引かなければ、このままやられることもあり得る。

やはり担い手が違えど、王様のデッキか。回りづらささえ何とかなれば、これほど怖いものもないな。

だが、ここで負けるわけにもいかない。特に、マナの仲間をさらったコイツには。

「俺のターン、ドロー！」

これは……きたか！

「俺は《見習い魔術師》を召喚！ 更に手札から速攻魔法、《ディメンション・マジック》を発動！ このカードは自分フィールド上に魔法使い族モンスターがいる時に発動出来る！ 自分フィールドのモンスター1体を生贄に、手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚する！」

人型をした棺が現れ、そこに見習い魔術師が収められていく。そして、その代わりにフィールドに出すことになるモンスターを、俺は手に取った。

「俺は見習い魔術師を生贄に捧げ、手札から《氷の女王》を特殊召喚する！」

《氷の女王》

ATK/2900

DEF/2100

その名を示すように氷でできた槍のように大きな杖を持ち、白く美しいドレスに身を包んだ女性が棺からするりと降り立つ。氷結した前髪に隠れ表情は見えないが、僅かに覗く口元が小さく微笑みを浮かべた。

「キレイな女性っす。それに攻撃力も高いなんて、凄いや！」

「攻撃力2900……これほどの攻撃力を持つ魔法使い族モンスター



「がいたとはな」

翔と三沢の声が届く。

まあ、魔法使い族の中では《コスモ・クイーン》と並ぶ高攻撃力モンスターだ。加えて破壊された時に墓地に魔法使い族が3体いれば墓地の魔法カードを手札に加えるというその効果も優秀であり、魔法使い族の中では混沌の黒魔術師に次ぐ切り札と言えるだろう。

「更にディメンション・マジックの効果、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊できる！俺は混沌の黒魔術師を選択する！」

氷の女王が出てきた棺が相手の場に移動し、混沌の黒魔術師を閉じ込める。そして、そのまま爆発して棺はその役割を終える。

無論、中に入っていた混沌の黒魔術師の姿はどこにもない。

神楽坂のフィールドは、全くの空っぽになっていた。

「くっ………！」

「いくぞ、神楽坂！バトル！氷の女王で直接攻撃！ダイレクトアタック」  
《ド・ブリザード》「！」

氷の女王が杖を一振りし、そこから発生した猛吹雪が神楽坂に襲

いかる。

「よし！ これで遠也の勝ちだ！」

十代がそう拳を握り込み言ったその瞬間。

神楽坂が手札のカードに手をかけた。

「手札から《クリボー》の効果を発動！」

「なに！？」

「このカードを手札から捨てることで、この戦闘によって発生する俺への戦闘ダメージは0になる！」

神楽坂の場にクリボーが現れ、その身で吹雪を受け止める。

小さな身体ながら、その身を削って神楽坂を守り、そしてその役目を見事に果たしたクリボーは墓地へとその姿を消した。

まさか手札にクリボーがいたとはな。そういえば、王様のデッキの中でもブラック・マジシャンと同じぐらいに有名なカードだった。

「ありがとう、クリボー。お前には何度も助けてもらったな。さすが俺が数千枚の中から選んだカードだけ。このチャンス、無駄には

しないぜ！」

……突っ込み待ちなのだろうか？

「盗んだデツキで何言ってるんだろ……」

「ま、まあ、神楽坂は武藤遊戯になりきっているということだろうな」

その前に翔が呆れたように突っ込み、それに三沢が苦しい解説を加える。

「……そういう問題か？」

「……なんだな」

更に十代と隼人からも言われ、三沢も何も言うことが出来ないのか、乾いた笑いを洩らすだけだった。

しかし、精霊が見えるつても面白いもんだな。墓地でクリボーが苦笑いしているのが見えるなんて。

やっぱり、クリボー自身も戸惑ってたんだな、今のは。

「やれやれ。俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターンだ、ドロー！」

カードを引いた神楽坂は、手札のカードに手をかけた。

「俺は《光の護封剣》を発動！ この効果で、お前は3ターンの間攻撃宣言をすることが出来ない！」

「これまた面倒なカードを……」

3ターンは意外に長い。まして、手札がない俺にとっては、対策もない。

高攻撃力モンスターが俺の場にいる今、神楽坂にとっては最善に近いカードだろう。

「更に俺は《翻弄するエルフの剣士》を守備表示で召喚し、ターンエンドだ」

《翻弄するエルフの剣士》    ATK/1400    DEF/1200

これまた懐かしいカードが出てきたな。効果は確か攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない、だったか。

上位デュエリストの多くがハイビートを好むこの世界では、それなりに有用な壁モンスターだ。

「俺のターン、ドロー」

除去カードではない、か。攻撃も封じられているし、今は何も出  
来ないな。

「カードを伏せ、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードを見て、神楽坂が笑みを見せる。そして、手札から  
カードを指に挟むと、それを俺に見せて宣言する。

「俺は《天よりの宝札》を発動！ 互いのプレイヤーは手札が6枚  
になるようにドローする！」

ここで天よりの宝札だと？ 俺の手札は0枚。俺にとっても、最  
大級の恩恵をもたらすここで使うとは……。今のドローでよほどい  
いカードを引いたと見える。

「更に《ワタポン》を特殊召喚！ このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果で手札に加わった時、特殊召喚できる！ そしてワタポンを生贄に捧げ、《ブラック・マジシャン・ガール》を召喚する！」

《ブラック・マジシャン・ガール》      ATK / 2000      2300  
DEF / 1700

今度は神楽坂のフィールドに現れるブラック・マジシャン・ガール。墓地に1体のブラック・マジシャンがいるため、攻撃力が300ポイントアップする。

そして、その姿を見た翔が再び歓声を上げた。

「出たあ！ ブラック・マジシャン・ガールっす！ ……でも、遠也くんのはちょっと違うよっな……」

翔が首をかしげるが、その言葉を受けて更に俺は首をかしげる。

どちらも同じカードだし、違いはないはず。どちらかというと、本物と言っているのはあっちのほうだから、俺のカードが何かおかしいんだろうか？

そう思っていると、十代が翔の言葉に返答していた。

「その答えは簡単だぜ。遠也のブラック・マジシャン・ガールは生き生きしてたけど、神楽坂のほうは何て言うか、生気が感じられないのさ」

「言われてみれば、ずっと静止してるっすね。遠也くんのほうはよく動いてたのに……」

「ソリッドビジョンの差で、そんな風に見えるだけじゃないか？」

その会話を聞き、俺は成程と内心で頷く。

俺のカードには現在マナが宿っているが、あちらのカードに今マナはいない。精霊が宿っているかそうでないか、というのが十代の言いたい違いということだろう。

そして、そんな外野の声には気を払うことなく、神楽坂はすべきことを続けていく。

「そして、俺は墓地の闇属性の《クリボー》と光属性の《ワタポン》を除外する」

……おい、その召喚条件には嫌な予感しかしないんだが。

俺が心当たりを思い浮かべて冷や汗を流していると、神楽坂はお構いなしに手札から一枚のカードをディスクに置いた。

「こいつがこのデッキ最強の切り札だぜ！ 出でよ、デュエルモンスターズ界最強剣士！ 《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》  
！」

神楽坂の宣言と共に現れる青い全身鎧に身を包んだ一人の剣士。

右手には一振りの剣を携え、左手には頑強な盾を持つ。深くかぶった兜の隙間から射抜くようにこちらを見つめる視線が、否応なしにそのカードが持つ力を俺に感じさせた。

《カオス・ソルジャー - 開闢の使者 -》 ATK / 3000 D  
EF / 2500

「カオス・ソルジャー……！ 公式大会での使用が禁止となった《カオス・エンペラー・ドラゴン》  
混沌帝龍 - 終焉の使者 -》と並び称される絶大な力を持ったモンスターだ！ まさかこの目で見る日が来るとは……」

三沢が驚愕の表情で神楽坂のフィールドを見つめる。その説明を聞いた十代たちも同様だ。

カオス・ソルジャー - 開闢の使者 - ……元の世界では、実に6年間禁止カードとして扱われてきた強力カードだ。最近になって制限復帰したものの、その能力はやはり脅威の一言に尽きる。

1ターンに1度、自身の攻撃権を放棄することで相手モンスター1体を除外する効果。相手モンスターを戦闘破壊した時、続けても



う1度攻撃できる効果。

そのどれもが破格と言っているいい強さを誇る。2つ目の効果は戦闘で破壊するという条件があるものの、このカードは召喚しやすいうえに攻撃力が3000もある。この条件は特に何もせずともクリアできる条件なのだ。

味方であれば心強いが、それが向こうにあるとなると恐ろしい。

俺は思わず息を飲んで神楽坂の次の行動を見守る。

「いくぜ！ カオス・ソルジャーで氷の女王に攻撃！ 《開闢双破斬》！」

指示を受けたカオス・ソルジャーが剣を持った右手を引き、弓を引くような体勢をとる。

そして、そのまま弾丸のように駆け出し、その剣を素早く氷の女王に向かって突き出した。

「畏発動！ 《くず鉄のかかし》！」

が、その瞬間。俺が発動したカードによって場に現れた1体のかかしが、その剣をかるうじて受け止める。

カオス・ソルジャーは、攻撃を止められたため自陣へと退いてい

った。

「このカードは、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。そして、発動後このカードは再び場にセットされる」

起き上がったたくず鉄のかかしのカードは、そのまま伏せられて先程と同じ状態に戻る。

それを見て、神楽坂が舌打ちをした。

「ちっ……決められなかったか。他に氷の女王の攻撃力を超えるモンスターはいない。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂としては、今の攻撃で氷の女王をどかし、その後連続攻撃、あるいはブラマジガールの攻撃で勝負を決める腹積もりだったのだろう。

だからこそ、天よりの宝札をここで使った。

だが、俺の伏せカードによりその計算は崩壊。逆に俺の手札を潤沢にしたままターンを譲ることになってしまったわけだ。

だが、恐らく次のターンでは対処してくるだろう。それぐらいは、あのデッキならばやってのける。

なら、俺はそれをされる前にどうにかするだけだ。

俺の手札まで回復させたのは、失策以外の何物でもない。おかげで、手札には最高のカードが揃った。

「いくぞ、神楽坂！ 俺は《死者蘇生》を発動！ このカードの効果で、俺は自分かお前のどちらかの墓地からモンスターを選んで俺の場に復活させることが出来る！ 俺が選ぶのは、お前の墓地に眠る《ブラック・マジシャン》だ！ 蘇れ、マハード！」

《ブラック・マジシャン》 ATK/2500 DEF/2100

マハードが神楽坂の墓地から飛び出し、俺のフィールドに立つ。こちらに背を向け悠然と神楽坂に向き合う姿には、やはり風格のようなものが漂っていた。

マハードは王様にとって最高の相棒。あのまま墓地で過ごさせるのはもったいないってものだろう。

それにしても、マハードが俺の場にいるのは何とも珍しい。俺に着いて来たマナとは違い、マハードはずっと遊戯さんの傍にあり続けていたからだ。

『そういえば、こうして遠也殿と共に戦うのは初めてでしたね』

徐にこちらに振り向き、そう笑みを浮かべて言うマハード。

まさに同じことを考えていた俺は、同じく小さく笑みをこぼして頷いた。

「ああ。今回限りだけど、よろしく頼むぜ」

『無論！』

力強く答えてくれたマハード。それに応えるためにも、俺は更に手札のカードを手に取った。

「更に魔法カード《ブラック・マジック黒・魔・導》を発動！ このカードは自分の場に「ブラック・マジシャン」がいる時のみ発動できる！ 相手の場の魔法・罠カードを、全て破壊する！ いけ、ブラック・マジシャン！」

俺の言葉を受けて、マハードが飛び出していく。

そしてその杖先に膨大な魔力を込め、それは徐々に魔法となって現れる。

その強大な力を持ったそれを、マハードが杖ごと振りかぶる。そしてそのまま俺に対して視線を向け、俺は頷いて声を出す。

「ブラック・マジック《黒・魔・導》！」

その宣言と同時に、マハードが杖先からその魔法を解放する。

それは黒い雷のような閃光となって、神楽坂の場を駆け巡り、そこに伏せられていたカードと光の護封剣を破壊していった。

伏せられていたのは、《聖なるバリア - ミラーフォース -》。逆転の一手は、既に神楽坂の場にあったことになる。危ないところだった。

「く、くそっ！」

場の伏せカードと光の護封剣を破壊された神楽坂は、表情を歪める。

これで、神楽坂の場にはモンスターが3体。そして手札が1枚だけとなる。クリボーが既にいない以上、攻撃を防がれるということも恐らくないだろう。

「やった！ 光の護封剣がなくなったってことは……」

「遠也が攻撃できるんだな！」

「いつけえ、遠也ー！」

外野の四人、翔と隼人と十代が逸るように俺に声援を送る。三沢もまた、腕を組んだ状態でこちらを見ている。

俺はそちらに一度だけ目を向け、神楽坂に向き直った。

「更に、《千本ナイフ<sup>サウザン</sup>》を発動！ 自分の場に「ブラック・マジシャン」がいる時、相手の場のモンスター1体を破壊する！ 対象は……《翻弄するエルフの剣士》！」

「な、なに!？」

マハードの後ろの空中に無数のナイフが浮かび上がる。

そして杖を翻弄するエルフの剣士に向けると、ナイフはその意に沿うように真っ直ぐ飛んでいき、エルフの剣士を串刺しにして破壊させた。

「くっ……馬鹿な、なぜカオス・ソルジャーを破壊しなかった!？」

「そんなの簡単だ。翻弄するエルフの剣士の効果のほうか、今は厄介だからだよ」

あいつは攻撃力1900以上のモンスターには破壊されないうえ、守備表示だった。もし何らかの方法で次のターンにまで残った場合、

除去するのが難しい壁になるところだったからな。

「そんな馬鹿な……翻弄するエルフの剣士のような弱小モンスターより、最強剣士であるカオス・ソルジャーを破壊したほうがいいに決まってる！」

「神楽坂……お前、もう物真似すらできてないぜ」

「……なに？」

俺が嘆息しつつ言うと、神楽坂は訝しげな眼を俺に向けた。

俺は、言葉を続ける。

「遊戯さんは、絶対に自分のカードのことを“弱小”だなんて言わない。さっきお前自身も言ってただろ。数千枚の中から選んだカードだってな。そのカードを、馬鹿にする真似を決闘王がデュエルキングすると思うか？」

「なっ……！？」

絶句する神楽坂に、俺は更に言い募る。

「結局、そいつはお前のデッキじゃない。だから、一緒に戦うカードに対してそんなことが言えるのさ。お前も、お前自身でデッキを

組んで戦えよ。誰かのデッキに似るのなら、そのデッキ同士を合わせたりして工夫すればいい。それで負けたとしても……他人の姿を借りたままより、よっぽどいいと思うぜ」

「けど、俺は……！」

「俺は、神楽坂自身とデュエルしたいけどな」

その言葉に、神楽坂がはっとした顔をして俺を見る。

しかし、俺はもうそのことについて話すつもりはなかった。代わりに、にやりとした笑みを浮かべて見せる。

「さっきの話に戻るけどな。カオス・ソルジャーを破壊しなかったのは、それだけが理由じゃない。……戦闘でも、十分破壊できるからだ！」

その言葉に目を見張る神楽坂と、驚きの声を上げる後ろの面々。

それを受けながら、俺はカードを手を取った。

「俺は氷の女王を生贄に捧げ、手札からレベル6モンスターを召喚する！ もう一度来い、相棒！ 《ブラック・マジシャン・ガール》！」



再び手札から現われる俺の相棒。

2枚目のブラック・マジシャン・ガールが俺の場に降り立った。

《ブラック・マジシャン・ガール》     ATK / 2000   DEF /  
1700

「ええ！？ 2枚目のブラック・マジシャン・ガール!？」

「まさか、あんな超レアカードを2枚も持っているというのか!？」

翔と三沢が後ろで面白いぐらいに驚いている。

そりゃこのデッキの主軸なんだから、2枚ぐらいは入っていると  
もさ。ブラマジと併せて、こいつがいなければこのデッキはデッキ  
としてのテーマをなくすぐらいだからな。

そして墓地のブラマジガールに宿っていたマナが、再び場に復活  
する。同じカードが現れたことで、移動して来たのだろう。

『あー、窮屈だったあ。ありがと、遠也!』

ぶはあ、と息をつき、背中を丸めて疲れた様子で現れたマナに、  
俺は苦笑する。

「どういたしました。それより、隣を見て言うことはないのか？」

『隣？ ……あ！ お、お久しぶりです、お師匠様！』

マハードの姿を認めた途端、しゃきつと姿勢を直すマナ。それを見て、マハードは指で額を抑えると、溜め息をついた。

『まったく……さっきはしっかり遠也殿を守る姿勢を見せていたかと思えば……。あとでお前には言わねばならないことがありますうだな』

『え、あ、う……そのお……あははは！』

結局なにも言い訳を思いつくことが出来なかったマナは、笑って誤魔化す手段に出たようだった。

が、そんなものがマハードに通用するはずはなく。むしろただ余計な怒りを買っただけのようだった。

「まあまあ。それは後にして、今はこっちのほうを頼むよ」

『む………そうですね。マナ、どうせ展示会には来るのだろう。その時にまた話をしよう』

『はあい……ああ、憂鬱………』

いきなり説教確定のマナのテンションの下がりっぷりがヤバイ。

が、それも僅かの間のこと。すぐさま表情を真剣なものにして、マハードと隣り合って神楽坂の場に向かい合う。

こういうところは、やはり二人の間にある絆が為せることなんだろう。

「……だが、攻撃力2900の氷の女王を生贄に、攻撃力2000のブラック・マジシャン・ガールを召喚するとはな。900ポイントの差は大きい。ミスをしたな」

「さて、それはどうかな」

俺も、何の意味もなくマナを呼び出したわけじゃない。もちろん、氷の女王のままでも問題なかったのは事実だ。

だが、このデュエルはマナが決めるべきだということこだわりがあった。そして、それが出来るカードは既にここにある。

残りの手札3枚。これが、勝利に繋がるピースたちだ。

「まず俺は永続魔法《一族の結束》を発動する！」

そのカードをディスクに置くが、それを聞いていた三沢が首をか  
しげる。

「《一族の結束》？ 聞かないカードだな……」

勉強熱心な三沢が知らない以上、十代たちにもわかるはずがない。  
神楽坂も含め、五人の人間が初めて見るカードに、どんな効果なの  
かと俺に目線で問いかけてくる。

「このカードは、自分の墓地に眠るモンスターの種族が1種類だけ  
の時、自分フィールド上にいる同じ種族のモンスターの攻撃力を8  
00ポイント上昇させる。俺の墓地には魔法使い族だけだ！ よっ  
て2体の攻撃力が800ポイントずつアップ！」

《ブラック・マジシャン》 ATK/2500 3300

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK/2000 2800

「種族統一デッキにとっては、とんでもなくありがたいカードだな。  
一気に800ポイントもの上昇とは……」

三沢が冷静にカードの効果进行分析する。

そう、種族統一デッキではこのカードがあるだけで戦闘面での心

配がほぼなくなるお手軽ながら高性能なカードだ。下級モンスターの攻撃力が上級を超え、上級の攻撃力が最上級を超える。

特に元々の攻撃力に恵まれている魔法使い族や戦士族では、非常に効果を発揮するカードである。

「だが……それで攻撃されても、まだ俺のライフは残る！」

確かに、神楽坂の言う通りだ。カオス・ソルジャーをマハードが倒し、マナがブラマジガールを倒しても、ダメージの合計は1100ポイント。900ポイントのライフが残る計算になる。

だが、俺の手札がまだ2枚あることを忘れていないだろうか。

「俺はもう1枚の《一族の結束》を発動！ このカードの効果は、複数枚発動した場合重複する！ よって2体の攻撃力を更に800ポイントアップ！」

《ブラック・マジシャン》 ATK / 3300 4100

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK / 2800 3600

「なに！？ 効果が重複するだ！？」

神楽坂が驚きの声を上げる。まあ、相対する側にしてみれば、悪夢のような上昇率だからな、これ。

「1体だけではなく、味方全体の800ポイント攻撃力増加。加えて効果を重複させられるとは……。発動条件は厳しいものの、なんて強力なカードだ」

三沢がわかりやすくこのカードの利点と欠点を述べる。

このカードは元の世界でも種族を統一するならば100%投入されていたカードだ。むしろ、投入されなければ、種族を統一する意味も薄れると言っているほどだ。

このカードの登場により、種族統一デッキは大幅に見直されたと言ってもいい。なにしろ3枚積んで発動させた場合、一気に2400ポイントの上昇だ。下級モンスターが最上級モンスターを殴り殺せるような火力になるのだから、その恐ろしさがわかるうと言っているものである。

これで、神楽坂のライフは削りきれぬ。だが、最後にもう1枚。残った手札のカードを発動させる。

「最後に装備魔法《魔術の呪文書》を発動。このカードは「ブラック・マジシャン」か「ブラック・マジシャン・マジシャン・ガール」しか装備出来ない。俺はブラック・マジシャン・ガールを選択し、攻撃力を700ポイントアップさせる」

《ブラック・マジシャン・ガール》     ATK / 3600     4300

マナの手元に現れた一冊の本。それを開き、マナが目を通していく。

そして魔術書の効果なのか、本を閉じたマナは魔力を更に充実させ、その攻撃力を一層強固なものへと変化させていた。

「攻撃力、4300……！」

その圧倒的な魔力の奔流に、神楽坂は息を飲んだ。

元々の攻撃力が2000とは思えないほどに、マナから溢れる魔力は空気を揺らしてフィールドを駆け抜ける風を作り出す。

神を超え、究極の名を冠するドラゴンにすら迫る黒魔術師の少女。その絶大な力を得たマナを残し、まず俺はマハードに指示を出す。

「いくぞ、神楽坂！ ブラック・マジシャンでカオス・ソルジャー  
- 開闢の使者 - に攻撃！ 《ブラック・マジック黒・魔・導》！」

マハードが一つ頷き、自身の魔力を集束させていく。

それは常のものとは比較にならない、巨大な球体をその頭上で形

作る。マハードの等身ほどもあるかというところまで膨らんだそれを、マハードは杖を操ってカオス・ソルジャーへ向けて解き放った。それはフィールドを抉るように進み、カオス・ソルジャーの元へと到達する。盾を構えて防御態勢を取るものの、巨大すぎる魔力球に対抗するには、それはあまりに弱々しいものだった。

一気に飲み込まれたカオス・ソルジャーは、その魔法によって消滅させられ、その余波が神楽坂を襲った。

「ぐああっ!」

神楽坂      LP：2000      900

そして、その間に既にマナは攻撃準備を完了させている。

バチバチと紫電を纏った魔力がマナを包むように展開される。それをマナは杖を水平に神楽坂の場に向け、杖の先へと一気に力を傾ける。

途端に形成される闇色の魔力砲。その砲弾となるそれを、マナはゆっくりと神楽坂の場のブラック・マジシャン・ガールに向けた。

あちらの攻撃力は元々のままの2000。対して、こちらのマナは4300にまで上昇している。

そして神楽坂の場に伏せカードはなく、手札も1枚。更にクリボ



「は既に使用済みだ。つまり、神楽坂を守るものは、もう何もない。」

俺はマナに目を向け、マナもまた俺を見る。

そしてお互いに頷き、俺は神楽坂に向けて口を開く。

「これで終わりだ、神楽坂！ ブラック・マジシャン・ガールで、  
神楽坂の場のブラック・マジシャン・ガールに攻撃！ 《ブラック・ハーニ黒魔導超  
ンゲ・バスター爆裂砲》！」

マナが巨大な砲弾をその場に置いたまま、一度杖を振りかぶる。

そしてそれが振り抜かれ、押し出すように目の前の砲弾に触れた。

その瞬間、爆音と共に高速で発射される魔力砲。空間を削りながら直進するその絶望的な力の奔流に、攻撃力が圧倒的に及ばない神楽坂の場のブラック・マジシャン・ガールは、抵抗すら出来ずに飲み込まれる。

そして、それでもその勢いは衰えることはない。そのまま突き進んだそれは、後ろにいた神楽坂に直撃して、そのライフポイントを一気に削り取っていった。

「うわああああッ！」

神楽坂 LP:9000

魔力砲が神楽坂の後方へと過ぎ去り、神楽坂が膝をつく。

余すことなくライフポイントを食らい尽くした今の攻撃によって、神楽坂の敗北がデュエルディスクに表示される。

これにて、このデュエルの決着はついたのだった。

ソリッドビジョンが解除され、マハードの姿が消えていく。マナも身体から溢れていた魔力を霧散させ、俺の隣へと戻って来た。

そして岩の上に頽れる神楽坂と、向かい合う俺だけがそこに残るのだった。

「神楽坂……いいデュエルだったぜ」

俺がそう声をかけると、神楽坂は顔を上げた。しかし、そこに浮かぶのは自嘲の笑みだった。

「はは、決闘王デュエルキングのデッキを使っても、このザマさ。猿真似なんて言われるのも、当然だな。俺にはやっぱり、才能がないんだ……」

「神楽坂……それは違うぜ」

俺がそう言うと、神楽坂は俺を見る。

「遊戯さんのデッキは、重いモンスターが多く回りにくい。その中で、あれだけ上級モンスターを繰り出し、運用したお前に才能がないわけがない。お前には、一つだけ足りないものがあつた、それだけだ」

「足りないもの、だと？ それは一体……」

「デッキを信じる気持ちさ」

俺はそう言い、自分のデッキに手を乗せる。

それはさながら慈しむように。マナも、そんな様子を見て優しく微笑んでいる。

「俺たちは、試行錯誤しながらデッキを組む。そして、満足のいくデッキを作るんだ。だから、勝てたら嬉しいし負けると悔しい。お前は、心のどこかでどうせ真似になると思って、そこで諦めていたんじゃないか？」

神楽坂が、思い当たる節があるようにはっとする。

俺は、更に言葉を続ける。

「似たデッキになつたって、いいじゃんか。そこに、使えそうな力

ードを厳選して入れればいい。似ていたって、それはお前が自分で組んだ、強いと信じたデッキだろう。なら、お前はそれをただ信じればよかつたんだよ」

「俺は……」

「それに、もうお前を馬鹿にする奴なんて、誰もいないぜ」

「え？」

俺は後ろを振り返る。

神楽坂も、つられるように俺の背後に目を向けた。

視線の先には岩場に隣接した崖がある。その上、木々の隙間から次々と姿を現すアカデミアの生徒たち。

ブルー、イエロー、レッド。寮に関係なく多くの生徒が笑顔で崖から見下ろすように俺たちを見ていた。

「これは……」

驚きの表情を浮かべている神楽坂。そして、そんな神楽坂に矢継ぎ早に声が降って来る。

「すげえぞ、神楽坂ー！」

「デュエルキング決闘王のデッキを、あんなに使いこなすなんてな！」

「最高だったぞ、二人ともー！」

「今度は俺とデュエルしてくれー！」

わーわー、と絶えることない好意的な声。

マナはどうも周りで見ている生徒に気が付いていたらしく、俺はついさつきそれをマナから知らされた。その皆の表情が、一様にこのデュエルを楽しんでいるものだったことも。

だからこそ、俺はこうして神楽坂に告げたのだ。もう、誰もお前を蔑む奴なんていない、と。

その大量の言葉を受け、神楽坂は再び顔を伏せる。震えている肩から見て、泣いているのかもしれない。その理由を察せないほど馬鹿じゃない俺は、黙って崖の下に目を向けた。

そこには、隅から出てきたカイザーと明日香がいる。俺は二人に手を上げて声をかけた。

「よ、来てたのか二人とも」

「ええ」

「俺たちも一足先にデッキを見たくてな。クロノス教諭がデッキを

盗まれたと言っていたから探していたんだが……」

そこまで言っつて、カイザーは俺と神楽坂に目を向ける。

「そこで、止めるにはあまりに惜しいデュエルを見かけたんでな。悪いが、観戦させてもらっていた」

それに、神楽坂が顔を上げてカイザーを見る。

カイザーは、神楽坂に向けて声をかけた。

「素晴らしいデュエルだった。俺も、今度はお前自身のデッキでお前が存分にその力を振るう姿を、見たいものだ」

「か、カイザー……！」

学園最強の実力者であるカイザーにまでそう言われ、神楽坂は驚きと共にその言葉を受け取る。

「デッキを盗んだのはよくない。だが、おかげで俺たちは最高のデュエルを見ることが出来た。……お前の罪が軽くなるよう、俺たちも出来るだけ努力しよう」

カイザーがそう言うと、周りの生徒がわっと盛り上がる。

「そうだ！ 署名ぐらいならいくらでも書くぜ！」

「武藤遊戯のデッキが戦う姿を見れたんだ！ 安いもんだ！」

そう言う生徒の中には、ブルーの生徒までいた。

その沢山の声を受けて一層涙腺を緩ませる神楽坂。それに背を向け、俺は岩から降りた。もう俺に言うことは何もないと思ったからだ。

だが、そんな俺を神楽坂が呼び止める。

「遠也！ 色々言って、すまなかった！ 今度……今度俺が俺自身のデッキを作ったら、もう一度デュエルしてくれ！」

涙声でそう訴える神楽坂に、俺が返す答えなんて決まっている。

「もちろん！ 楽しみにしてるぜ！」

笑顔でそう答えて、今度こそ俺は岩から降りる。

そして十代たちのところに合流し、まずは翔に声をかけた。

「よ、仇は取ったぜ」

「そういえば……。すっかり忘れてたよ」

あはは、と笑う翔にその場の全員が笑う。

十代とも、お疲れの意味を込めてハイタッチを交わし、隼人や三沢からも労いの言葉をもらおう。

これで、この騒動も終わりだろう。あとはきつと、カイザーやクロノス先生辺りが上手くやってくれるに違いない。クロノス先生も事を大きくはしたくないはずだからな。

と、ここで終わっておけば綺麗に纏まったのだが……。

「ね、遠也くん」

「ん？ どうした翔」

不意に呼びかけられ、俺は振り返る。

そこには、ものっそい笑顔の翔がいた。



「遠也くん、ブラマジガールのカード持ってたんだネ。それも2枚……」

「な、何が言いたい……」

その笑顔があまりに恐ろしく、俺は思わず後ずさる。マナも身の危険を感じたのか腕をさすっていた。

「やだな、簡単だよ。……僕のカードと交換してよ遠也くんッ！」

飛びかかって来た翔をすんでで避け、俺は駆け出す。

「嫌に決まってるだろ、何言ってるんだ！」

「お願いだよ！ 何枚でも出すから！ だから、僕にブラマジガールプリーズッ！」

追いかけてくる翔。逃げる俺。

俺はカイザーのほうへと逃げた。こうなったら、カイザーに全部押しつけてやる。兄貴なんだから、翔を抑えるぐらいなんでもないだろう。

「カイザー！」

「遠也か、どうし……ああ、なるほど」

俺と翔の姿を見て、一瞬で納得するカイザー。さすがは兄貴。理解が早い。

ならば、俺が求めていることもわかるはず。そう期待を込めてカイザーを見ると、カイザーはふつと笑みを浮かべてこう言った。

「すまん、逃げ切ってくれ遠也」

「おおーい！ 友達を見捨てるのかよ、カイザー！ っていうか、お前の弟だろ！」

「ああなったら、そう簡単には止められん。友として、応援はしよう。頑張れ、遠也」

「てめえ、この役立たず帝王！ あとで覚えてろよ！」

「遠也くん！ 交換してくれるまで、僕は諦めないからね！」

そして岩場から去っていく俺たち。

それを、十代たちは何とも言えない表情で見送っていたそうである。

その後、何故かブラマジガールを賭けたアンティデュエルをする  
ことになった俺と翔。

もちろん全力で叩き潰した。

しかしながら、翔相手に初めてヤバイと思った場面が何度もあっ  
たことを追記しておく。

執念つてのは、恐ろしいもんだな……。

そして迎えた次の日、デッキ展示会の当日。

俺は十代たちと一緒に展示会場に来ていた。既に割られたガラスケースなども新しいものと交換され、多くの生徒がそのデッキを眺めて何事かを語り合っている。

その様子を入り口付近から見ながら、俺と十代は言葉を交わす。

「やれやれ、どうにか開催されてよかったな」

「だな。俺なんか、ポスターまで貰っちゃったぜ！　へへ、トメさんに感謝だぜ！」

ポスターを抱え、歯を見せて笑う十代に、俺は肩を竦めて応えた。

ちなみに一緒に来た翔と隼人の二人は、周りと同じようにデッキを見ている。三沢はさっきまでいたんだが、デッキを満足するまで見終わったのか、寮に戻ったようだった。

昨夜の一件の後。神楽坂には鮫島校長から処分が下った。

本来なら窃盗という事実だけで倫理委員会が動くには十分だったが、本人が非常に反省していること。事を大きくしたくないクロノス先生が減罪を願ったこと、そして生徒たちの署名がされた嘆願書によって、どうにか謹慎一週間で手打ちとなった。

今頃は寮の自室でデッキ構築でもしていることだろう。次に戦う

時が楽しみである。

「なあ、遠也」

「ん、どうした十代」

そんなことを考えていると、ふと十代に呼びかけられて返事を返す。

顔を向ければ、十代が指でアレアレと何かを指し示している。俺は当然気が付いていたが、あえて触れずにいたそれ。

指摘されれば仕方がない。俺はそこに顔を向けた。

展示会場の片隅。そこに正座しているマナと、その前に立って何事かをずっと語りかけているマハード。マナの表情はもはや憔悴という言葉がふさわしい。

俺たちが会場に入った時には既にああだったから、一体いつからああしているのやら。

「なあ、何やってんだアレ？」

「気にしてやるな、十代」

俺は、ぼん、と十代の肩を叩いてそう言う。

ま、あえて言うとするならば。

「サボってたのが、バレたってただだ」

こっちに来て、最低限のことはしていたものの、本格的な修行はずっとしていなかったことが判明し、マハードの逆鱗に触れたのが事の真相である。

注意しなかった俺も悪いが、マハード曰く「自分を律することができていないマナが未熟なだけ、お気になさらず」だそうだ。

そう言われてしまつては俺に出来ることは何もない。こうして見守ることしか出来ない俺を許してくれ、相棒。

その夜。

足も痺れてほうほうの体だったマナを、今度は俺が膝枕してやった。マナからの要望だったのだが、あまりに哀れみを誘う姿だったから、素直にその願いを聞き入れたのだ。

「うう〜お師匠様〜許して〜」と苦しげに寝言を漏らす膝の上のマナ。その定番の様子に苦笑しながら、その髪を梳くように頭を撫

でる。

そうして、その夜の夜は過ぎていくのだった。

## 第17話 夜闘（後書き）

これでキリがいいところまでいくことができました。  
遊戯デツキ盗難事件はこれにて終了です。

あとマナの攻撃名とかには突っ込まないでくれると助かります。  
あそこまで攻撃力あげといて、普通の攻撃名だと何か締まらないと判断して、ああんりました。  
どうかお許しを。

ちなみに遠也はカイザーに仕返しとして、その日の夕食でカイザーのステーキにタバスコをぶっかけて渡しました。  
悶絶する姿を見て、復讐は完了したらしいですよ。

次はおそらく恋する乙女、かな。

まだまったく着手してないので、何とも言えませんが。

明日から仕事も始まりますし、今度こそ更新は遅れると思います。  
それでも待っていてくれたら嬉しいです。



第18話 乙女（前書き）

風邪をひいていました。

というか、今もまだ完治していません……。

それでも私の手は少しずつ書いていっていたようです。

なにぶん風邪のなか書いたので、間違いがあったらごめんなさい。

そして始めました、恋する乙女。

レイの口調とかこれでよかったのか、不安に思いながら書いています。

## 第18話 乙女

ある日。俺はレッド寮に向かっていた。

もちろん十代たちに会うためであり、いつものようにマナもついで来ている。

あのデツキ盗難事件から大きな事件もなく、ここ数日は平和そのものだ。十代たちと駄弁り、カード議論に花を咲かせ、デュエルをして過ごしていく。

なんて素晴らしい学生生活！ やっぱ、普通はこうだよな。闇のデュエルがどうか、そういうのって普通はないよね。

事件が起こるというのも刺激的な生活ではあるけど、やはり何度も続くと少々飽きも来るといふもので。

たまにはのんびり過ごす日が続いてもいいと俺は思う。

そんなこんなで、今日もまた俺は十代たちと穏やかな時間を過ごすためにレッド寮まで出向いて来た。

既に慣れた道を通り、辿り着いた木造モルタルの2階へと上がっていく。

そしていつものように、十代たちの部屋の前に立ち、その扉を開けた。

「よーっす、来たぞ十代」

「……………え？」

その瞬間、俺の目に飛び込んできたのは小さな白い背中。

そしてその背中を隠すように広がる長い黒髪だった。

どう見てもオシリスレッドにはいないはずの女子である。それも、上半身裸の。

そのあり得ないはずの光景に、思わず固まる俺。そして、突然現れた俺に驚いているのか、同じく硬直しているその女の子。

すると、マナがいきなり俺の腕をひつつかんで引っ張り出し、すぐさま扉を閉めた。

が、いきなり身体を後ろに持っていていかれた俺は、勢い余って二階の柵を乗り越えるところだった。どうにかバランスを取って踏みとどまり、そのまま座り込む。

「……………あ、危なかった。……………マナ？」

「し、ごめん遠也。咄嗟でつい。でも、あのままってわけにもいか

なかつたし……」

「それは、確かに」

いくらなんでも、あのまま覗き続けるような趣味は持っていない。

それに、今の子はぱっと見でも小学生ぐらいに小さかった。なら、なおさら見ようとは思わない。

まあ、なんだ。もう五年……七年は育っていたら話は別だったかもしれないが……。

「いま不埒なこと考えたでしょ？」

「な、なにを馬鹿な！」

俺が即座に否定すると、マナは溜め息をついた。なんだ、そのしよつがないなあ、的なる反応は。俺がいかにも駄目な奴みたいじゃないか。

無然としていると、マナが精霊状態に戻って耳元で囁く。

『それより、外から声をかけてみたら？ 女の子なんだから、きちんと謝らないとダメだよ』

「わ、わかつてるよ。……んんっ」

俺は何とはなしに呼吸を整え、コンコンと扉をノックする。

一拍置き、弱々しい声で「……はい」と返って来る返事。俺は扉の外から中のいるだろうその少女に向かって声をかけた。

「あー……さつきは悪かった。ここは、俺の友人の部屋で、いつもの調子で入ろうとしたんだ。……それでそのー、ここに女の子はいなかったと思うんだけど、君は一体？」

と、そこまで自分で口にした時。

俺は、はたと気がついた。

そういえば、記憶にある。そう、そうだ。この時期だったじゃん、そうだそうだ。

これって、あれだ。早乙女レイの編入事件もとい恋する乙女事件。

これがあって、途中からアカデミアの生徒として登場したんだっけ。そういえばそうだった、そういうことが。

確かカイザーに恋心を抱いて、アカデミアまで編入してきちゃう凄い子だったはず。ということは、まさにその真っ只中。カイザーへのアプローチの最中なのだろうか。

部屋も確か十代の部屋、だったかな？ そこら辺は曖昧だが、こ

れでようやく女子がこの部屋にいる理由がわかった。

編入生は一度必ずレッド寮に所属することになる。だから、レイもこの部屋にいるのだろう。

俺が内心でこの事態に得心を得て、落ち着きを取り戻していると、扉の奥から物音がする。

そして、次の瞬間。ドアががちゃりと開いて、さっきの子が顔を出す。その長い髪は丸く大きな帽子によって隠されていたが。

そして、ちらりと辺りを窺うと、すぐに俺の腕を掴んで中に引っ張り込んできた。

なかなかアグレッシブな子である。

そんな感想を抱く俺をよそに、その子はすぐに扉を閉めると、ホツと手を胸にやって安堵の息をつく。小さな女の子がそういう仕草をすると、妙に絵になる気がするの俺だけだろうか。

そんな様子を微笑ましげに見てから、俺は部屋の大部分を占拠している、恐らくこの子用のベッドの端に腰をかけた。だって、座る場所がないんだもん。

「……まあ、聞きたいことはあるけど、ひとまず自己紹介と行こうか。俺の名前は、皆本遠也。オベリスクブルーの生徒で、この部屋の3人とは友達だ。君は？」

「えっと、ボクは早乙女レイ……って、え？ み、みなもと、とお

やさん？」

名前を言った次の瞬間、俺を指さして片言になるレイ。

どうした、いったい。

「あ、あの……シンクロ召喚の？」

「そうだけど……」

不本意ながら、テレビ放映されたことで、俺の名前はかなり知れ渡っている。それを考えれば、俺の名前を知っていることは不思議ではない。

しかし、だからといってこつも驚くものだろうか？

俺がそう訝しんでいると、レイは暫く俺を根気よく見つめていたが、何故だか急にがっくり頂垂れた。驚いたり落ち込んだり、忙しい奴である。

とはいえ、レイはすぐに復帰してきた。そして、そりゃそうだよね、と咳いてから事情を話し始める。

聞いた話は、俺がさっき思い出した記憶にあるものと大差ない内容だった。

本当は小学五年生だが、編入生として、オシリスレッドにやって

来た。男装しているのは、男のほつが生徒数が多く潜り込みやすい  
と思ったから。そして、やって来た理由は、カイザーに会いたかつ  
たから。

どうも、雑誌などのメディアでアカデミアが特集された際に、カ  
イザーを見て惚れ込んだというのが、その会いたい理由らしい。

それが単なる憧れなのか、本当の恋なのか、その判断は俺にはつ  
かない。だが、その一心だけでこの年齢の女の子が一人で遠い島に  
までやって来ることが、相当に凄いいことだというのはわかる。

『ふわー……行動力にあふれた子だねえ』

マナもこうして驚きの声を上げるほどだ。まして、性別と年齢を  
偽ってまで来ているのだ。並大抵のことではなかつたろうに。

やっていることは褒められたことではない。幼いから罪には問わ  
れないだろうが、普通に駄目なことだ。そう駄目なことなのだが…  
…その心意気は買ってもいいんじゃないだろうか。

こういつ一本気な奴は、俺は嫌いじゃない。

俺がそうレイのことを評していると、レイはなんだか上目づかい  
でモジモジと言いくそうに俺を見た。

「それで、その……皆本さん、にはボクのことを黙っていてほしい  
んです。女だつてバレると、きつと追い出されちゃうし……」



気まずげに言うレイに、俺はふむと腕を組んで考える仕草をとる。それを否定的な態度ととったのか、レイの肩が緊張で揺れる。だが、俺が口にするのは、彼女が想像したであろう言葉ではない。

「よし、いいだろう」

「へ？ い、いいんですか？」

「なんだ、喋ってほしかったのか？」

俺がからかうようにそう言うと、レイが凄腕で首をぶんぶんと横に振る。

「ま、ここまで一人で来た覚悟に免じてな。んじゃ、早速行くか」

「行くなって……どこに？」

よっこらせ、とベッドかた立ち上がった俺に、レイが疑問の顔を向ける。

この場で行くと言うからには、レイの目的を果たすために決まっているだろうに。俺はきょとんとこっちを見るレイに、笑いかけた。

「決まってる。カイザーのところだよ」

「え……ええええ!？」

その言葉に盛大に驚きの声を上げたレイの手をとり、俺は十代の部屋を後にする。

途中、実はカイザーと俺が友人であることを告げ、俺は目を白黒させたレイを引きつれてブルーの寮に向かう。

善は急げの言葉通り、出来ることは早いうちにやってしまったほうがいい。俺はそう考え、目的地へと歩いて行くのだった。

さて。ブルー寮に着いた俺たちだったが、カイザーのもとにそのまま向かうことはせず、現在は俺の自室にいる。

そして俺はデッキをいじり、レイは部屋の中でマナとお喋りに興じているようだ。俺も混ぜろうとしたんだが、女の子同士のお話だから、とマナに追い出されてしまった。

なので、俺はしぶしぶ机に向かってその上でカードを広げている。二人はテレビの前に置かれたソファにいるようで、時折り聞こえてくるきゃいきゃいと楽しそうに笑う声が、実に俺の寂寥感を刺激する。

何故こうなったのかというと、精霊化していたマナが突然俺に苦言を呈したからだ。

曰く、「女の子の告白には準備がいるんだから、そんな性急に事を進めちゃダメ」とのこと。

そう言われた俺はとりあえずカイザーに会いに行くのを自重し、マナに言われたことをレイに確認してみることにしたのだ。

すると、レイはごくごく頷いてマナの言葉に同意。そのため、俺は即座にカイザーの元へ向かうのを取りやめた。だが既にレッド寮を出てしまっているし、そもそもあそこでは腹を割って話せないだろう。

そう判断し、一旦ブルーの自分の部屋に招いたのだ。レイもカイザーが住む場所に興味があったのか、それを了承。そして、先に部屋に戻って制服を着て実体化したマナに出迎えられて、今に至る。

俺の部屋から出てきたマナにレイは驚いたようだったが、すぐにレイはマナに気を許した。どうもマナの底抜けに明るい性格と、初見で実は女の子だと見破られたことが原因らしい。

本当は俺の傍で話を聞いていたからなのだが、それがレイに分かるはずもない。レイは最初こそ戸惑ったが、俺が人様の秘密を口外する奴じゃない、と口添え。更にマナ本人の性格に触れ、気持ちを

緩ませたのだ。

やはり、男の中に女が一人、というのは意識せずとも堪えていたのだろう。バレた途端、すっかり安心しきってマナに笑顔を見せていた。

そして、言葉を交わすうちにすっかりマナになつたレイは、二人で実に楽しそうに話しているというわけだ。

マナも純粹に慕ってきてくれるレイに悪い気はしないようで、レイに抱きついてじゃれあいながら笑っている。満更でもなさそうなレイも、少々恥ずかしそうにしているが楽しそうだ。

……ふん、いいさいいさ。俺は一人寂しくデッキでもいじってるよ。そうさ、カードは友達。翼君も言ってたじゃないか。

そんな若干拗ねた状態でカードを触っていると、不意に後ろから肩に手が置かれ重み加わる。何事かと思うが、こんなことをしてくるのは一人しかない。

案の定、耳元で聞き慣れた声が耳朵を打つ。

「ごめんね、遠也。拗ねちゃった？」

「……いいや、べつにー」

いじっていたカードを揃え、トントンと机を叩いて細かなズレを直す。綺麗に整ったデッキを持ち、俺は椅子から立ち上がった。

嘘だー、と笑っているマナをそのまま放置し、俺はソファに座っているレイのほうに赴く。

「さて、レイ。カイザーに会いに行くか？」

俺がそう問うと、レイは少しだけ笑顔を曇らせてぎこちなさを見せる。

まだ緊張が抜けないのだろう。だとすれば、今は行かないほうがいいか。

「よし、わかった。なら、また後にしよう」

「うん、ごめんね遠也さん。せっかく機会を作ってくれてるのに……」

「いいさ、別に。まあ、色々偽ってまでこの島に突貫して来たにしては、意外だったけど」

ちなみにレイが俺を名前で呼ぶのは、俺がそう要求したから。名前で呼ぶ奴が周りに少ないから、違和感があるんだよね。

「う……だ、だって……」

レイはそう言って、「」によ「」によと言いつきを呟きながら頬を染めて目を泳がせる。

その様子は、後先考えずに島にやって来たとは思えないほどだ。本当に、そこらへんにいる女の子にしか見えない。事情を知る俺たちの前だからということ、帽子をとっていることもあるのだろうが。

そんな姿に、やれやれと呟いてから、俺はレイとテーブルを挟んで座った。

そして、テーブルの上にデッキを置く。それを見て、レイは我に返って俺を見た。

「せつかくだ。デュエルでもして時間を潰そう。デュエルをするこ  
とで、気持ちの整理もつくかもしれないからな」

デュエルで気持ちの整理？ という感じだが、そこはこの世界安  
定のクオリティ。デュエルすれば心が通じ合っちゃうような世界な  
のだ。そういうこともあるかもしれないだろう。

俺がそう思って発言し、デッキをシャッフルする。すると、途端  
にレイの瞳が輝いて身を乗り出してきた。

「い、いいんですか!?!」

そのあまりの剣幕に俺は驚いた。とりあえず、鼻先まで乗り出してきたレイの頭に手を置き、後ろに押す。

はっとして下がったレイは、気恥ずかしそうにしてもう一度俺に尋ねてきた。

「本当に、その、デュエルしてくれるんですか？」

「ああ、デュエルしたくない気分だったか？ それなら無理強いはしないけど」

俺がそう言えば、レイはぶんぶん首を横に振って否定する。さっきも同じような反応をしていたが、オーバーな子だ。

だが、デュエルしてもいいというなら、早速やろう。俺がそう思っ  
てデッキをテーブルに置くと、レイがおずおずと進言してくる。

「あの……外でデュエルしちゃダメ？」

「外で？」

つまり、デュエルディスクでということだろうか。

まあ俺はどっちでもいい。単に机の上でやるうとしたのは、レイが正体を隠していることから外に出るのは極力避けたいんじゃない

かと思ったからだし。

レイ本人がそれでいいというなら、俺に断る要素はない。

俺が頷くと、レイは表情をぱっと明るいものにして喜びをあらわにした。

そしてマナと手を取り合って、嬉しそうにしている。なんで、そんな反応？俺が訝しんでいると、マナが人差し指を自身の唇にあてた。

「女の子同士の秘密だよ、ねー」

「う、うん」

照れ臭そうに頷くレイを見て、俺は聞かないほうがいいことかと判断して立ち上がる。そして、ポンと軽くレイの肩に手を置き、促した。

「じゃ、行くか。デュエルディスクは……そこらのを使えばいいだろ」

「うんー！」

レッド寮からディスクまで持ってきていなかったレイにそう告げ、嬉しそうにするレイを伴って部屋を出る。



そしてあまり人が来ないだろう場所を脳内にピックアップしながら、俺はゆっくりと移動を始める。敬語も別に使わなくていいぞ、とレイと話しながら。

人があまり来ない場所、ということ。俺はカイザーと初めてデユエルした場所に来ていた。

そこはブルー寮から離れすぎているわけでもなく、森や崖のように危ないわけでもない。ただ、小さな林のようなものを間に挟むため、居住区から少々見えづらい場所にある草原のような場所だった。

崖や森の傍でもよかったが、レイの年齢を考えてあまりそういう場所に連れて行くのも、と考えた結果だった。

そしてそこで俺たちは距離を開けて向かい合っている。ちなみにマナは俺たちの間から少し離れるように立ち、ジャッジのような立ち位置で俺たちを応援している。

「よし、やるか」

そう言っつてデュエルディスクを腕に着けると、レイも同じようにデュエルディスクを左腕に着ける。

ちなみに今このディスクに収められているデッキは、シンクロデッキだ。レイに二つのデッキを選ばせるところ、シンクロがいいと言われたのでそうしている。

「う、うん！ よろしくお願いします！」

肩を張り、何故か直立して九十度に身体を曲げて一礼するレイ。

何をそんなに緊張しているのかは知らないが、俺は苦笑し意図して明るく声をかける。

「ほら、ちょっとデュエルするだけなんだ。楽しくやらないと損だぞ」

「は、はいっー！」

駄目だこりゃ。

俺は固さを残したままのレイに嘆息し、とりあえずディスクを掲

げる。デュエルしていれば、自然と緊張もほぐれてくるだろうと期待しての行動である。

つられてレイもそれに追従し、そして互いに開始の宣言を行った。

「デュエル！」

皆本遠也 LP：4000

早乙女レイ LP：4000

すぐさまディスクの液晶を確認。先攻は……俺か。

「俺の先攻だな。ドロー！」

カードを引き、手札に加える。

いきなりいける手札ではないな。……まあ、時間潰しだと最初から言っているわけだし、そうガチでいくこともないだろう。

そう考えれば、こういう始まりのデュエルも楽しいものだ。俺は緊張しつつもどこか嬉しそうに見えるレイを見つつ、カードを一枚引きぬいた。

「俺は《カードガンナー》を召喚。このカードは1ターンに1度デッキの上からカードを3枚まで墓地に送ることで、エンドフェイズまでその枚数×500ポイント攻撃力がアップする。俺は3枚墓地に送り、攻撃力をアップ!」

《カードガンナー》 ATK/400 1900 DEF/400

墓地肥やしに最適なカードガンナー。こいつを先攻ターンで出すと、この世界の大抵の人間は「攻撃できない先攻で、なんで?」という顔になる。

エンドフェイズまでしか効果が持続しないので、結果的に攻撃力400のモンスターを攻撃表示で残すことになるからだ。表側守備だとしても、守備力も紙。現行環境では利点が見いだせないのだから。

まあ、それも最初のほうだけで、シンクロ召喚が認知された現在ではそれほどでもない。こいつをシンクロ素材にしてしまえばいいことを皆理解したからだ。それでも、墓地肥やしについてはイマイチ納得しきれていないようだが。

アカデミアの生徒でさえそうなのに、レイにはそういった困惑が一切見られない。つまり、こちらの意図をしっかりと理解しているということだ。

その点を見て、俺はレイの評価を上方修正した。これは、油断できないかもしれないな。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ。そしてこのエンドフェイズ、カードガンナーの攻撃力は元に戻る」

再び400という数値に攻撃力がダウンする。

それを見届けて、レイのターンになる。

「ボクのターン、ドロー！」

引いたカードを見て、レイの顔がほころぶ。

有利となるカードを引いた、という顔ではない。そういう、戦いに臨む顔ではなく……そう、好きなカードを引いた、という感じの嬉しさのように思える。

「ボクは《恋する乙女》を攻撃表示で召喚するよ！」

長い栗色の髪を波打たせ、花飾りのついたカチューシャをつけた女の子。淡い黄色のドレスという格好も相まって、非常に女の子しているキャラクターといえれば伝わるだろうか。

くりつとした大きな目をこちらに向け、睨むというよりは微笑んでくる。これまた、なんとも和むモンスターだな。

《恋する乙女》 ATK/400 DEF/300

そして、こいつを召喚したレイは、とてもいい笑顔を見せている。俺は、笑みを浮かべてレイに話しかけた。

「なるほど。察するに、このモンスターがレイのフェイバリットか？」

「うん！ 恋する乙女は、ボクの大好きなカードなんだ！ でも遠也さん、あんまりこの子のことをモンスターって言わないでね」

恋する乙女が現れたことで緊張がほぐれたのか、レイが少し悪戯気にそう言ってくる。

少々その発言に気を抜かれる俺だったが、その可愛らしい内容に思わず口元を緩めた。

「ああ、了解。確かに女性に使う言葉じゃなかったか」

「えへへ、ありがとう。じゃあ、いくよ！ バトル！ 恋する乙女でカードガンナーに攻撃！」

「なに？」

攻撃力は共に400だ。このままでは相打ちになるだけだが……。

俺がそう思っていると、恋する乙女がトトト、と駆けてきてカードガンナーにぶつかってしまった。

当たり所が悪かったのか、ガラガラと音を立てて崩れるカードガンナー。それに恋する乙女は申し訳なさそうにしている。

だが、壊れたのはカードガンナーだけ。恋する乙女はピンピンしていた。

「恋する乙女の効果！ このカードは攻撃表示でいる限り、戦闘によつては破壊されない！」

レイが得意げにそう説明する。

なるほど、それで迷わず攻撃して来たのか。俺のライフに変動はないが、素材を消されたというのは俺の不利に働く。俺がシンクロ召喚を使うということを知っていたことから、ある程度の知識はあるということか。

さすが、その年齢で編入して来ただけのことはある。

「カードガンナーが破壊されたことにより、俺はデッキからカードを1枚ドロウする。……やるじゃないか、レイ。シンクロ召喚は素材をフィールドに揃えなければ成立しない。それを狙ったのか？」

そう問いかけると、レイは満足げに頷いた。

「へへ、そうだよ。ボクのデッキの主力も低レベルカードだから、ちゃんと勉強したんだ」

なるほどな。レベル2の恋する乙女をフェイバリットだと宣言してみせたんだ。その補助となりうるシンクロ召喚のことも、すでに押さえているというわけか。

思った以上に勉強熱心なようだ。まあ、そうでもないとアカデミアに編入なんて、出来るはずもないか。

「更にボクはカードを2枚伏せて、ターンエンド！ さあ、遠也さんのターンだよ！」

「おうとも。俺のターン、ドロー！」

やれやれ、さっきまではあんなに緊張していたというのに。恋する乙女を召喚して、だいぶ心が楽になったらしい。

フェイバリットカードを持つということは、こういう点で有利になることが多い。たとえ押されていても、ソイツがいるだけで気力が湧いてくる。それがフェイバリットカードであり、またそういう気持ちを持って持つというのは、とても大切なことだ。



まして、そういった気持ち、絆が奇跡を起こすこの世界ではね。

さて、さっきは墓地になかなかいいカードが落ちてくれたし、手札も潤沢だ。これならこのターンで充分シンクロすることができ

る。あちらがフェイバリットを出した以上、こっちも相応のモンスターを出さないとな。

「俺は《ジャンク・シンクロン》を召喚！ その効果により、墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。《ライトロード・ハンター ライコウ》を特殊召喚！ 更に場にチューナーが存在するため、《ボルト・ヘッジホッグ》を守備表示で特殊召喚する！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《ライトロード・ハンター ライコウ》 ATK/200 DEF/100

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK/800 DEF/800

並ぶ3体のモンスター。それを見たレイは、警戒するどころか目を輝かせてこちらを見ている。

シンクロ召喚はまだこの島以外の場所では珍しいシステムだ。だからこそ、興味も強いのだろう。

いささか子供っぽいその様子に少しだけ心を和ませながら、俺は  
行つべきことを行つていく。

「レベル2ライトロード・ハンター　ライコウに、レベル3ジャン  
ク・シンクロンをチューニング！」

飛び立つ2体。それぞれが光る星と輪になり、シンクロ召喚独特  
のエフェクトがフィールド上で展開されていく。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！　シンク  
ロ召喚！　出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

そして、光の中から飛び出す機械の戦士。

赤く光るレンズの瞳をレイに向け、ジャンク・ウォリアーが威嚇  
するように拳を突き出してフィールドに降り立った。

《ジャンク・ウォリアー》　ATK/2300　DEF/1300

俺の場に立つモンスター。それを見て、レイは興奮したように声  
を上げた。

「わぁ！　こんなに近くで、シンクロ召喚を見られるなんて！　や

「つぱり、遠くから見るより全然迫力が違うや！」

どこか上気した顔を見るに、よほど嬉しかったらしい。手を胸の前で合わせてこちらを見つめる姿はとても可愛らしいが、今は帽子をかぶって一応の男装をしているので、まんま男の娘にしか見えない。

それに苦笑しつつ、俺はさらに言葉を続けていく。

「ジャンク・ウォリアーの効果発動！ シンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力はアップする！ 《パワー・オブ・フェローズ》！」

俺の場に存在するレベル2以下のモンスターはボルト・ヘッジホッグだけ。

よって、その攻撃力800ポイントがジャンク・ウォリアーに加算される。

《ジャンク・ウォリアー》     ATK / 2300     3100

「攻撃力が3000を超えた!？」

そして初見の人が必ず驚く攻撃力3000超え。青眼ブルーアイズの影響力はやはり大きいと実感する瞬間である。

「バトル！ ジャンク・ウォリアーで恋する乙女に攻撃！ 《スクラップ・フィスト》！」

攻撃表示なため、恋する乙女は戦闘で破壊できない。だが、そういった効果のモンスターの大抵に共通するのが、ダメージは通るというものだ。

恋する乙女もご多聞に漏れず、その特性を持っている。OCG化されていないカードっぽいので、どんな効果を持っているのかいまいちわからないが、それでも大ダメージが期待できるんだしここは攻撃を行う。

そして俺の指示通りに攻撃に移ろうと、ジャンク・ウォリアーが拳を振りかぶった瞬間。

レイの声が上がり、それと同時に伏せられていたカードが起き上がっていく。

「畏カード発動！ 《ホーリージャベリン》！ 相手の攻撃宣言時に発動し、その攻撃モンスター1体の攻撃力だけ自分のライフポイントを回復する！」

「なにっ!?!？」

恋する乙女の手に似合わぬ厳つい槍が握られる。その先端付近につけられたデフォルメされた天使の翼が、唯一可愛らしいと言えるかもしれない。

そして、ジャンク・ウォリアーの拳が槍の先端に激突する。槍はその攻撃をどんな理屈なのか全く意に介さず、それどころか穂先の反対側から回復エネルギーをプレイヤーに送る始末。

戦闘自体は無効にならないため戦闘ダメージをすぐに受けるものの、優秀なカードである。

レイ LP: 4000 7100 4400

「更に、恋する乙女がジャンク・ウォリアーに攻撃されたことで、ジャンク・ウォリアーに乙女カウンターが1つ乗るよ!」

「乙女カウンター?」

聞いたことのない区分のカウンターだが……。いったいどういう効果なのか。

ただでさえ本編の記憶も怪しいというのに、カードの効果……。それもアニメオリジナルカードの効果まで覚えていないぞ。

首をかしげるが、知らない以上考えても分かるはずもない。俺はそのことについて考えるのはひとまず置いておくことにした。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

しかし、ホーリージャベリンとはまたマイナーなカードを使うもんだ。

俺自身、そんなカードがあったことをほとんど忘れていたぐらいだ。何故なら、同じ攻撃力分の回復を行える罫カードに、《ドレインシールド》という攻撃自体を無効にする上位互換のカードが存在するためだ。

ホーリージャベリンを採用したのは、バトル自体を無効にせず乙女カウンターを乗せるためだと推測できる。だが、そうまでして乗せた乙女カウンターとは一体何なのか。

俺はその疑問から、注意深くレイのターンを観察する。

「ボクのターン、ドロー！」

カードを引いたレイが、僅かに笑って1枚のカードを手取る。

「いくよ、遠也さん！ ボクは装備魔法、《キューピッド・キス》を恋する乙女に装備！ そしてバトル！ 恋する乙女でジャンク・ウォリアーに攻撃！ 《一途な想い》！」

「なんだって？」

キューピッド・キスとは、これまた聞き覚えのないカードだ。しかし、恋する乙女の攻撃力が400から変化していないところを見ると、攻撃力増加効果がない装備魔法だというのがわかる。

だとすれば、ジャンク・ウォリアーの間にはそれこそ絶望的なまでの攻撃力差が存在するままだ。

俺がそう思っていると、案の定というべきか、恋する乙女はジャンク・ウォリアーの鋼鉄の身体に弾かれて尻餅をついてしまう。

戦闘で破壊されないから墓地にはいかないものの、ダメージは食らう。

レイ LP:4400 1700

一気にレイのライフが減少する。そうまでして、何をしたかったのか。

そう怪訝に思っても、しかしレイは不敵に笑っていた。

「ここで、キューピッド・キスの効果が発動するよ！ 乙女カウンターが乗っているモンスターを装備したカードが攻撃して戦闘ダメージを受けた時、その戦闘ダメージを与えたモンスターのコントロールを得る！」

「な、なにいい!?!」

「えへへ、ジャンク・ウォリアーはもらっていくね、遠也さん!」

レイがそう宣言した瞬間、フィールドに現れるお花畑。周囲の間すらピンク色に染まり、何やらハート柄の模様まで散りばめられ始めた。

な、何事ですか!?!

そう思っていると、不意にフィールドから声が聞こえてくる。思わずそちらを見ると、尻餅について座り込んだ恋する乙女が泣いているところだった。

『うう……ひどい、ひどいわ……』

『……………』

そんな恋する乙女を前に、どこか困惑した様子を見せるジャンク・ウォリアー。

言葉こそ話せないものの、申し訳なく思っているのだろうことは何となく伝わってくる。

そして、ジャンク・ウォリアーはそっとその片手を差し出す。助け起こそうというのだろう。



そしてそれを受けた恋する乙女は、その手をそつと取り、次いでふわりと微笑んだ。

『ありがとう、ジャンク・ウォリアーさま』

『……………！』

何やら衝撃を受けた顔になり、頬らしき部分を赤く染めるジャンク・ウォリアー。

……………おい、まさか。

『ジャンク・ウォリアーさま……………よければ、私と一緒に戦ってくださいませんか？』

『……………』

無言で頷き、恋する乙女と手を繋いでレイのフィールドまで軽快にスキップしていくジャンク・ウォリアー。

おいコラ、ジャンクううううう！ お前なにしとんじゃあああああ  
あ！

「いっくよ、遠也さん！ ジャンク・ウォリアーでボルト・ヘッジ

ホッグに攻撃！ 《スクラップ・フィスト》！」

『お願い、ジャンク・ウォリアーさま！』

『……………！』

ちよつとすまなそうにしながらも、恋する乙女の指示に従って攻撃してくるジャンク・ウォリアー。

普段なら頼もしい限りの鉄の拳が、今ばかりは脅威となって俺のフィールドに向かってきた。

「くっ……………！」

ボルト・ヘッジホッグが破壊され、がら空気になる俺のフィールド。だが、守備表示で召喚していてよかった。

攻撃表示だったら、一気に2300もライフを持って行かれるところだったぜ。

「ボクはこれでターンエンドだよ！」

レイが意気揚々といった様子でターンの終了宣言をする。

よし、これで俺のターン……………あれ？

エンドフェイズなのにジャンク・ウォリアーさん帰ってこないんですけど。

……ってことは、まさかあのコントロール奪取って、一度奪っちゃうえば永続的に向こうにコントロールが移るのか？

うわー、戦闘ダメージ＋装備魔法が必要と、リスクとアドこそ膨大だが、結構なリターンじゃないか。

「俺のターン、ドロー！」

カードを引き、手札に加える。そして、俺はレイに向けて口を開いた。

「なかなか考えてるな。戦闘ダメージを受けなければいけない点を、上手くカバーしてる」

俺がそう言うと、レイは嬉しそうに答える。

「うん！ 恋する乙女は、ライフポイントを犠牲にして相手のコントロールを奪う。……けど、恋する乙女は攻撃力が低いから、受けるダメージが膨大になることが多いんだ。だから、一度コントロールを奪うと後が続かないこともあって……」

「そこで、ホーリージャベリンか」

俺がそう言っていると、レイはうんつと頷いた。

「戦闘ダメージを0にして、乙女カウンターも乗せられるこのカードは恋する乙女と相性抜群！ 遠也さんに言われて、もっと恋する乙女を生かす方法を考えて……そして見つけたボクなりの答えだよ！」

「俺に言われて……？」

レイの言葉に違和感を感じ、俺は少々首をかしげる。

まるで以前に会ったことがあるような言い方だが、俺にこんな小さな女の子と交流をした記憶はない。そもそもまだこの地に来て1年余りだ。知り合いはそう多くないはずなのである。

そう頭を捻っていると、レイがちよつと不安げな顔になり、帽子を強調するようにぐいっと引っ張る。

「覚えてない、かな？ あの、シンクロのイベントで特典をもらいに行った時なんだけど……」

「イベント……」

どうにか思い出そうとするが、なかなか出てこない。

うんうん唸っていると、痺れを切らしたマナがレイの言葉に付け足すように言葉を投げかけてくる。

「ほら、遠也。自分も低レベルのモンスターを主力にしてるって言うってた、帽子の男の子だよ。遠也が色々言ってたでしょ？」

マナに言われ、俺は更に頭の奥の引き出しを開けていく。

イベント後の特典を子供に渡している時……帽子の男の子……。そこまでキーワードを並べられて、俺はようやく思い出すことができた。

思わず拳で手のひらを叩き、そういえば、と声を上げる。

俺が、好きなカードで勝てるようにしたほうがいい、って言った子だ。そうだそうだ。ってことは、あれか。あの時は男装の練習でもしていたってことか。そう考えれば、俺がすぐに思い出せなかったのも納得できる。男の子だと思ってたし。

つつかえがとれたように、すっきりとした顔になった俺を見て、レイも俺が思い出したことを悟ったのだろう。

さらに言葉を続けてくる。

「ボク、デュエルはそれなりに出来たけど……やっぱり恋する乙女

はデメリットも強いから、馬鹿にされることもあったんだ。けど、遠也さんの言葉で吹っ切れたんだよ。ボクはこのカードが好きだから、このカードと戦うデッキを作っていくって！」

ぐつと小さな握り拳を作って決意を述べるレイを見て、俺は小さく笑みをこぼす。

自分がこうして誰かに影響を与えているというのは、照れくさいものだ。けど、同時に嬉しくもある。

そして、影響を与えたからこそ、俺はレイにその手本を示していかなければいけないだろう。どれだけ低ステータスだろうと、要はやりようだということを示していく。

俺のシンクロしかり、融合しかり。そして、レイにはレイのやり方がある。それはきつと、これから更にレイが自分で伸ばしていくことになるだろう。

そのためにも、俺は俺なりのやり方で、レイに対峙しなければ示しがつかないというものだ。

「レイ」

呼びかけ、カードに手をかける。

こちらを見たレイに、俺は笑いかけた。

「カードをそこまで好きになれるなんて、それだけでお前は最高のデュエリストだ。だから、俺も本気でお前に応える！」

それに対して、レイは少しだけ驚きを見せる。が、すぐにはにかなだ笑顔を見せてくれた。

「うん！　ありがとう、遠也さん！」

その答えを聞き、俺は自分の手札に視線を落とす。

そして、その中からまず1枚を選んでディスクに置いた。

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しないため、手札から《テック・ジーナス TG ストライカー》を特殊召喚！　そしてレベル4以下のモンスターの特殊召喚に成功したため、《テック・ジーナス TG ワーウルフ》を特殊召喚する！　更に《リビングデッドの呼び声》を発動し、コストで墓地に送られていた《チューニング・サポーター》を蘇生！　最後に《レベル・ステイラー》を通常召喚！」

《TG ストライカー》　ATK/800　DEF/0

《TG ワーウルフ》　ATK/1200　DEF/0

《チューニング・サポーター》 ATK/100 DEF/300

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

フィールドに並ぶ4体のモンスター。

一気に展開されたそれらを見て、レイは小声ですごい、と呟いていた。だが、まだまだ。凄くなるのはこれからである。

俺はレイに好戦的な笑みを見せ、口を開いた。

「チューニング・サポーターはシンクロ素材とする時、レベルを2として扱うことができる！ レベル2となったチューニング・サポーターとレベル3のTG ワーウルフ、レベル1のレベル・ステイラーに、レベル2のTG ストライカーをチューニング！」

4体のモンスターが飛び立ち、そのレベルの合計は8になる。

シンクロ素材を指定しないレベル8シンクロモンスターは、遊星デッキにおいてはスターダストしか俺は入れていなかった。

しかし、今のデッキは違う。ここのところ調整していた際に、いくつかのカードを交換して、単純な遊星デッキではないデッキへと調整していたのだ。

それはTGシリーズが僅かながら入っている点でもわかるだろう。



そして、当然エクストラデッキも弄っており、今では素材に指定のないレベル8シンクロモンスターは、スターダストだけではなくなっている。

つまり、今回召喚するのは、まだこの学園に来てから使っていないシンクロモンスターである。

「集いし孤独が、瓦礫の骸に命を宿す。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 猛れ、《スクラップ・ドラゴン》！」

光の中から現れるのは、ガラクタがただ凝り固まったただけのような、鈍色に光を反射する巨大な身体。

鉄板やネジ、スプリングや鉄柱が剥き出しで集まり、辛うじてドラゴンのような外見をかたどっている。無論そこにデザイン性など介入する余地はなく、ただただ無骨な印象を与えるソイツが、金属が擦れる音とともに首と思われる部分を持ち上げた。

次いでソイツは甲高い独特の音を上げる。一拍おいてようやくそれが鳴き声だとわかり、それを発した口が、レイのほうへと向けて威嚇するように開かれた。

《スクラップ・ドラゴン》     ATK/2800     DEF/2000

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ。さて、コイツは強力だぜ、レイ」

俺がそう言つと、応えるようにスクラップ・ドラゴンも甲高い音を響かせる。

その威容に一瞬ひるむも、レイは果敢に言い返してきた。

「け、けど、ジャンク・ウォリアーのほうが攻撃力は高い！ だから、まだ……」

「それはどうかな」

俺はにやりと笑い、こちらを見つめるレイに向けて声を放つ。

「スクラップ・ドラゴンの効果発動！ 1ターンに1度、自分の場と相手の場に存在するカードを1枚ずつ選択し、選択したカードを破壊する！ 俺は自分の場の《リビングデッドの呼び声》と、レイの場の伏せカードを選択する！」

スクラップ・ドラゴンが俺の指示に従い、カパツと開けられた口に電気のようなエネルギーが集まっていく。

おそらく身体を構成している鉄屑の中に、バッテリーのようなものが生きたまま存在していたのかもしれない。

そして、その電気の塊がそれぞれのフィールドに向けて走る。そ

の電光は、俺の場では意味もなく残っていたリビングデッドの呼び声を破壊。レイの場では伏せカードを破壊する。

レイが伏せていたのは、《ディフェンス・メイデン》。相手が攻撃宣言した時に攻撃対象を強制的に恋する乙女にする、という永續罠カード。

乙女カウンターを乗せるための罠カードということだろう。まあ、破壊した以上、特に問題にすることもない。

「更に伏せ<sup>リバース</sup>カードオープン！ 速攻魔法、《イーजीチュウニング》！ 自分の墓地に存在するチューナー1体を除外し、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を、除外したチューナーの攻撃力分アップする！ 俺はジャンク・シンクロンを除外し、その攻撃力1300ポイントをスクラップ・ドラゴンに加える！」

よって、攻撃力は2800+1300となる。

《スクラップ・ドラゴン》 ATK/2800 4100

「ええ！？ こ、攻撃力が4000を超えた!？」

ふふふ、今ならサイバーエンドも殴り殺せます。

やはりあまり見かけない攻撃力の値だからだろう、レイは目を見開いて驚いている。

しかし、攻撃力4000超えはこの学園では割とよく見かけるけどなあ。まあ、主に俺とカイザーのせいなわけだが。

なにはともあれ。今はデュエルの続きである。

「いくぞ、レイ！ バトル！ スクラップ・ドラゴンでジャンク・ウォリアーに攻撃！」

さつきは二手に分かれた電気の塊が、今度は一つに固まったままジャンク・ウォリアーに向けて放たれる。

それに対して両腕をクロスしてガードするものの、最後には感電して爆発してしまうジャンク・ウォリアー。

レイ LP:1700 700

すまないジャンク……。お前の恋を応援してやれない俺を許してくれ……。

消えゆくジャンクにそう心の中で謝る俺。それに対して、ジャンク・ウォリアーは気にするなとばかりに、最後の力でサムズアップをしてくれる。

くうっ、ジャンク・ウォリアー……！

『ジャンク・ウォリアーさま……』

俺が心で涙を流すと同時に、なんだかしょんぼりしてしまった恋する乙女。いや、ごめんねマジで。

うん、まあ、あれだ。気を取り直して次へいこう。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「ボクのターン、ドロー！」

カードを手札に加え、レイはよし、と頷いた。

「《強欲な壺》を発動し、2枚ドロー！ ボクはカードを4枚伏せて、ターンエンド！」

「むう……」

そうきたか。

まあ、恋する乙女の効果を考えれば、レイのデッキはどうしても受けならざるをえない。

乙女カウンターは、恋する乙女を攻撃したモンスターに乗るカウンター。能動的に乗せることができないからだ。

だからこそ、こうしてガン伏せにならざるを得ないのだろう。

手札に《大嵐》がない現状、攻める側としては厄介極まりないわけだが。

「さあ、遠也さんのターンだよ！」

自信ありげに言うレイは、気持ちが高ぶっているのか、帽子を取ってその長い黒髪を風になびかせている。

楽しそうに笑いこちらを見つめるその視線に、俺も口角を上げて視線を絡ませ、デッキからカードを引いた。

「俺のターン、ドロー！」

大嵐は来ない、か。まあ、そう都合よく来るはずもないし、仕方がない。

代わりになるカードも来てくれたことだし、これでどうにか出来るといいけど。

「俺は《サイクロン》を発動！ レイの場の……俺から見ても一番左のカードを破壊する！」

カードから現れた暴風が、レイの伏せカードを直撃する。そして風に煽られるようにひっくり返ったのは、《ホーリージャベリン》。当然、破壊されて墓地へ行く。

残る伏せカードは、あと3枚か。

「俺はスクラップ・ドラゴンのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚！ そしてスクラップ・ドラゴンの効果発動！俺の場のレベル・ステイラーと、レイの場の俺から見て右の伏せカードを破壊する！」

「なら、ボクはそれにチェインして速攻魔法《ご隠居の猛毒薬》を発動！ ライフを1200回復するよ！」

再びスクラップ・ドラゴンから放たれる電撃の波が俺の場のレベル・ステイラーを破壊する。そしてレイの伏せてあったカード……《ご隠居の猛毒薬》が発動した後に墓地へ行く。

レイ LP：700 1900

今の伏せカードは回復のものだったのか。バーンにも使えて回復量も多いカードだし、確かにレイのデッキにはいいカードかもし

れない。

となると、残りの2枚が気になるが……俺にはもうあれを除去する手段がない。あとはもう、野となれ山となれ、か。

「よし、バトルだ！ スクラップ・ドラゴンで恋する乙女に攻撃！」

紫電が走る電気がスクラップ・ドラゴンの口腔に集まっていく。

その瞬間、レイが待つてましたとばかりに声を発した。

「伏せカード<sup>リバー</sup>オープン！ 速攻魔法《収縮》！ スクラップ・ドラゴンの元々の攻撃力をエンドフェイズまで半分にするよ！」

「なに！？」

《スクラップ・ドラゴン》      ATK / 4100      1400

ああ、せっかくの高攻撃力だったのに見る影もなく……。収縮は、こういう後付けの上昇効果を打ち消すところが厄介だな。イージーチューニングの効果も消えて、たった1400になってしまおうとは。

そして、バトルはそのまま続行される。スクラップ・ドラゴンの電撃が恋する乙女を直撃し、レイのライフを削っていった。



レイ LP：1900 900

「よしっ、これでスクラップ・ドラゴンにも乙女カウンターが1個乗ったよ！」

どうだとはかりに言ってくるレイ。その姿を見ると、デュエルが始まる前までガチガチに緊張していたとは思えないほどだ。

俺はそれに苦笑しつつ、エンド宣言を行う。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

そしてエンドフェイズを迎えたことで、スクラップ・ドラゴンの攻撃力が元々の値である2800に戻る。

「ボクのターン、ドロー！」

レイはカードを手札に加えると、すぐさま行動に移る。

「ボクは速攻魔法、《サイクロン》を発動！ 遠也さんの場の右側の伏せカードを破壊する！」

「くっ……!!」

破壊されたのは、《くず鉄のかかし》。ついさっき伏せたカードである。

「更に伏せカードオープン！ 永続罫《女神の加護》！ 効果でライフを3000回復！」

レイ LP:900 3900

ライフの消費著しいレイのデッキだからこそか。

女神の加護は回復量こそ膨大だが、フィールドを離れた際に3000のダメージを受けるデメリットがある。普通は採用しないが、恋する乙女では確かに有用な回復カードかもしれない。

レイのことだし、当然そのデメリットを無効にするカードも用意していることだろう。手札的に見て、今は持っていないだろうが。

「バトルだよ！ 恋する乙女でスクラップ・ドラゴンに攻撃！ 《一途な想い》！」

攻撃宣言により、恋する乙女がスクラップ・ドラゴンに笑顔で走り寄ってくる。

そしてやはり攻撃力が及ばないため、恋する乙女はスクラップ・ドラゴンに弾かれて地面に倒れこんでしまう。同時に、レイのライフポイントも削られる。

レイ LP：3900 1500

『きゃあっ！』

そして、倒れこんだ恋する乙女に心配そうに擦り寄るスクラップ・ドラゴン。

そんなスクラップ・ドラゴンに、恋する乙女はそっと微笑み、その首元に抱き着いた。

『心配してくださるのね。ありがとう、優しいドラゴンさま……』

その後一声鳴くと、スクラップ・ドラゴンが申し訳なさそうに俺に対して頭を下げる。そして恋する乙女と一緒にレイのフィールドに向かって行った。

まあ、そうなるだろうとは思っていましたよ。

「これで、遠也さんの場はがら空きだよ！ バトル！ スクラップ・

ドラゴンで遠也さんに直接攻撃！  
ダイレクトアタック

「そいつは通さないぜ、レイ。畏カード発動、《ガード・ブロック》  
《！ 戦闘ダメージを無効にし、俺はカードを1枚ドロウする！》」

スクラップ・ドラゴンの攻撃は見えない壁に阻まれて、俺に届かない。

それを見て、レイは不満そうではあるが、どこか納得したような表情で苦笑いを浮かべている。

「……やっぱり、凄いや。ボクはこれで、ターンエンドだよ！」

「俺のターン、ドロウ！」

手札を確認し、俺は即座にとるべき選択を決定していった。

「俺は《死者蘇生》を発動し、墓地のジャンク・ウォリアーを復活させる！ 更に《ジャンク・シンクロン》を召喚！ そしてその効果を発動し、墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚する！」

《ジャンク・ウォリアー》      ATK/2300      DEF/1300

《ジャンク・シンクロン》      ATK/1300      DEF/500

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

「レベル1レベル・ステイラーに、レベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は4だが、これから召喚するモンスターもまた、新しく調整した時に投入したモンスターである。

飛び立った2体が、光に包まれていく。

「集いし闇が、冥府の扉を開け放つ。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 現れよ、《漆黒のズムウォルト》！」

光が徐々に黒く染まっていき、やがてその闇の中から現れる魔法使いのような出で立ちのモンスター。

闇色のマントが身体をすっぽりと覆い隠し、頭から肩にかけては赤い頭巾をかぶっているため全身がどうなっているのかを知ることができない。

顔も切れ長の目の形だけを残した仮面に隠されており、唯一肌が見えるのはマントから出て、巨大な杖を握っている手だけである。

《漆黒のズムウォルト》 ATK/2000 DEF/1000

攻撃力は2000であり、ジャンク・ウォリアーとともにスクラップ・ドラゴンには敵わない。

だが、ズムウォルトの効果で、その結果は覆すことができるのだ。

「いくぞ、レイ！ 漆黒のズムウォルトでスクラップ・ドラゴンに攻撃！」

え？ と驚きの表情を浮かべるレイに、にやりと笑って言葉を続ける。

「そしてこの瞬間、漆黒のズムウォルトの効果発動！ 攻撃対象モンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力よりも高い場合、攻撃対象モンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時までこのカードと同じにする！ よって、スクラップ・ドラゴンの攻撃力は2000までダウン！」

「ええ！？」

ズムウォルトが杖を一振りすると、闇がスクラップ・ドラゴンに取りついていき、その攻撃力を下げていく。

《スクラップ・ドラゴン》 ATK/2800 2000

相手が自分より攻撃力の高いモンスターで、そこにどれほどの差があるかと戦闘破壊できる優秀なモンスターだ。闇属性チューナーと昆虫族モンスター1体、とシンクロ素材に制限はあるが、シンクロンデッキでは比較的容易に召喚可能である。

ジャンク・シンクロンとレベル・ステイラーでいいのだから、それも当然と言えるだろう。

さて、これで攻撃力は同じだ。伏せカードもないし、安心して攻撃できる。

「いけ、漆黒のズムウォルト！ 《ダーク・ドラッグ・ダウン》！」

ズムウォルトから放たれる漆黒の波動と、スクラップ・ドラゴンの電撃の波がぶつかり合う。

攻撃力は同じであるため、互いの攻撃は拮抗し、やがて爆発を引き起こす。そして2体はその爆発に巻き込まれるが、フィールドから消えていったのはスクラップ・ドラゴンだけである。

「漆黒のズムウォルトは戦闘では破壊されない！ 更に漆黒のズムウォルトが相手モンスターを戦闘で破壊して墓地に送ったため、相手のデッキの上から3枚を墓地に送る」

レイはその通りにデッキから3枚のカードを取って墓地に送る。

これでズムウォルトの処理はすべて終わりだ。

結果として、レイのフィールドには攻撃力400の恋する乙女だけが残った。

「これで最後だ！ ジャンク・ウォリアーで恋する乙女に攻撃！  
《スクラップ・フィスト》！」

俺の言葉に頷いてジャンク・ウォリアーは拳を握りこむ。だがしかし、それを振りぬくことはしなかった。

恋する乙女の前に立ち、その拳を恋する乙女ではなく地面に打ち付ける。

それだけでも恋する乙女にとっては大きな衝撃を与えることになったようで、恋する乙女は思わず後退して倒れてしまう。

それを見届けて、ジャンク・ウォリアーはゆっくりと俺のフィールドに戻ってきた。

レイ LP：1500 0

恋する乙女は効果により破壊されないが、ダメージは通る。2体の攻撃力差分1900ポイントをレイのライフに与え、ついにデューエルは決着したのだった。



デュエルが終わったことで、ソリッドビジョンも消えていく。曲がりなりにも惚れていた相手に攻撃させてしまったことをジャンク・ウォリアーに詫びつつ、俺はレイのもとへと歩いていく。

レイは負けたはずなのに悔しそうにしてはいなかった。それよりも、どこかすつきりとした表情で、どちらかといえば嬉しそうにしていたのである。

「あーあ、負けちゃった。まさかライフを1ポイントも削れないなんて、ちょっとシヨックだよ」

そう言って笑うレイに、俺は声をかける。

「なんだ、あんまり悔しがつてないな」

「あはは、ちょっとは……その、悔しいけど。でも、それ以上に遠也さんとデュエルできたことが嬉しいんだ!」

そう言って、レイは言葉通りに笑ってみせる。

まあ、俺もあのイベント以来知名度だけはあるからなあ。シンク口召喚がまだ俺しかまともに使えないこともあって、デュエルを試みたかったのかもしれない。

俺はそれに、そうかと答えてレイの頭をぐりぐり撫でる。

「うわっ、と驚きつつも俺の手をどかそうとしないレイ。マナと同様、俺もどうやらそれなりに受け入れてくれているらしい。イベントで会っていたという、クッションがあるからかね。」

「そうでなかったら、同性であるマナはともかく、俺はこうまで親しくできなかっただろう。カイザーみたいに片思いの相手でもないんだから。」

俺はレイの頭から手を離し、見学していたマナを手招きして呼ぶ。その間、レイは乱れた髪を直していた。怒られるかと思ったが、むしろ楽しそうにしていたので、まあいいか。

「とりあえず、部屋に戻るか。レイはどうする？ 十代たちの部屋に戻ってもいいし、それとももう少し俺たちといるか？」

隣に来たマナを伴いながら、俺がそう問いかけると、レイは僅かに迷った様子を見せる。

やはり、元々の所属がレッドであるから、そちらのことも気になるのだろう。

「えっと……遠也さんたちは、ボクがいても迷惑じゃない？」

探るよつに訊いてくるレイに、俺とマナは思わず目を見合す。

そして、すぐに相好を崩してレイに向き直った。

「迷惑なわけないだろ。よし、それじゃ部屋にいたらデッキ調整だな。マナも協力してくれよ」

「うん、任せて!」

元気よく手を挙げて答えたマナと共に、ブルー寮に向かって歩き出す。

そのまま後ろを振り返り、一歩遅れたレイにも手を伸ばした。

「ほら、レイ!　いくぞ!」

「あ……う、うん!」

それに首肯してレイが俺たちに走り寄る。

マナの隣に並んだレイは、マナと手を繋いで非常に打ち解けた様子を見せてくる。二人で仲良く話しているのを隣から見て、微妙な寂しさを感じる俺の男心。

まあ、俺も嫌われてはいないみたいだし、別にいいけど。同性で年上のマナをレイが頼りにするのは当たり前のことだし。

しかし、どうにも腑に落ちない俺は、ふうと溜め息をこぼす。

もし俺に妹がいたらこんな感じなのかもしれないな、とそんなことを考えながら。

## 第18話 乙女（後書き）

なぜかこのSSで最初のラッキースケベが小5相手、という事態にどうしてこうなった。

そして十代もカイザーも出てこない始末。

そこらへんは次回から出せたらいいなあ、と思っています。

そしてちよこちよこ変わっていつている主人公のデッキ。

遊星デッキをベースにしつつ、エクストラ含めて色々やっています  
たいと思います。

しかし、レイの性格とかどんな感じだったのか自信がない。

まあ、筆が乗ってくれている間は、それを信じて書きますが。

あと、風邪がつらいんで、早く治したいです。

## 第19話 恋情（前書き）

活動報告にも書いていますが、なかなか書く時間が取れなくなってきました。

休みが欲しいです……。

さて、今回で恋する乙女編は終了です。  
そして書いていて思いました。

レイも可愛いなど。

## 第19話 恋情

あのデュエルのあと部屋に戻った俺たちは、レイのデッキを広げて三人によるデッキ調整会を開いた。

レイのデッキの主力となっている恋する乙女は、OCGでは存在しないモンスターだ。もともとそのカードに興味があったことに加え、それを生かすために四苦八苦するレイに、俺は力を貸してやりたくなっただのである。

そのため、いくつか俺が持っているカードをレイに渡してデッキに組み込んだりもした。レイは恐縮してせめてトレードにしようと言っていたが、そこは年上からのプレゼントということで押し通した。

それに俺がカードをもらっても恐らくデッキに入れないうし、それならレイがそのまま持っていたほうがいいだろう。最後にはレイも納得してくれたし、問題ない。

とまあ、そんな感じでレイのデッキは恋する乙女を更に生かすことができるようになったと思う。思う、という曖昧な表現なのは、試しにデュエルをする前にレイがレッド寮に戻る時間になったためだ。

まあ半日ほど俺の部屋にいたわけだから、それぐらいの時間にな

っついていても不思議ではない。レイはよほどこの部屋が気に入ったのか渋っていたが、そこは仕方がない。

もちろん俺はレイを送っていった。さすがに小学5年生だとわかってる女の子を一人で帰すほど、甲斐性がないわけではない。

レッド寮の部屋を開けた途端、十代が「おつ、レイ！ 探してたんだぜ！」と言って、レイの肩を叩く。小柄なレイはちょっと痛そうである。俺に助けを求めるように見てくるが、俺は肩をすくめて付き合っただけでくれと無言で示す。

十代もこう見えて心配していたんだ。今は明るく笑っているが、レイの姿を見た瞬間にホッと安堵したような表情を見せたのに、俺は気づいていたからな。

もともと人情味のある性格をした十代だ。同室かつ身体の小さいレイを、何かと気にかけてはいたんだろう。

バシバシと景気よく叩いているのも、そういう気持ちの裏返しっただけだ。

まあ、それでも冗談とはいえ高校生男子の張り手は小学五年生のレイには、やはり重荷かもしれない。

さすがに表情をしかめてきたレイを見て、俺は軽くレイの手をつかんでこちらに引いた。

その途端、さっと俺に寄ってきて背中に隠れるレイ。

それを見て、十代が不思議そうな顔をした。



「レイはどうも身体が弱いらしくてな。お前の愛が痛かったんだとさ」

俺が笑ってそう言えば、十代は一度叩いた手を見つめて、それから苦笑いを浮かべた。

「はは、そうだったのか。悪かったな、レイ！ それより遠也、お前レイと随分仲良くなったみたいじゃないか」

「まあな。偶然会って、色々話したりしたんだが……ウマが合ったみたいだ」

言って、後ろのレイの肩をポンポンと軽く叩く。

それにびくりと反応を返す姿はまるで小動物のようで、自然と笑みがこぼれていた。

「じゃあな、レイ。また明日会おうぜ」

「あ……」

俺がその言葉と共にレイを背中から引っ張り出して十代たちのほっぺに軽く押す。

不安そうな目で見てくるが、俺は問題ないと笑い返した。

「3人とも、俺の友達だ。困ったときは頼ってやってくれ」

「おう！任せとけ！」

「せっかく同室になったんだしね。仲良くしようよ」

「だな」

口々に明るく口を開く3人。その毒気のない姿に多少は緊張を和らげられたのか、レイも表情を僅かに崩して頷いた。

それを見届けて、俺は扉を開けて外に出た。

「じゃあな。十代、そういうわけで、あまりレイを無茶につき合わせるなよ」

「おい遠也！お前、俺をなんだと思ってるんだよ」

無然とした十代に「冗談だ」と返して、俺は室内にいる他の3人にも手を振る。

振り返される手を気持ちよく受け、俺は扉を閉めた。

そのままレッド寮を離れ、ブルー寮へと戻る。その道すがら、横で浮いているマナがレッド寮のほうを見て呟いた。

『大丈夫かなあ、レイちゃん』

「大丈夫だろ、十代たちがいい奴らだったのは、わかってるだろ？」

余程のことでもない限り、問題は起きないだろう。

俺はそう信頼を込めて返すが、マナは微妙に呆れ顔だった。

『もう、レイちゃんは女の子なんだよ？』

「知ってるよ。それがどうしたんだ？」

その答えは、マナには非常に不評だったようだ。マナは、これだから男の人は、と呟いてから俺に話しかけてくる。

『いい、遠也。レイちゃんはまだ小さくてもレディなんだよ？ それなのに、男しかない部屋なんて、気が休まらないに決まってるでしょ』

「……でも、十代たちだぞ？」

あいつらなら、たとえバレたとしてもそついう方向に話がいくとは思えないんだが。

『そついうことじゃないよ。性別が違う、っていうこと自体が問題なの』

「……はあ、そついうもんか？」

『そついうものだよ。女の子 特にあれぐらいの子は繊細なんだからね』

俺にはよくわからないが、同じ女の子であるマナが言っただから、そつなのかもしれない。

ふーむ、だとすれば、明日にでも大徳寺先生に話してみるかな。あの人なら、多少の無茶ぐらいなら聞いてくれそつだ。迷惑をかけるよつで少し気は引けるけど。

マナの言葉からある対策を考えつつ、俺は自分の部屋へと戻っていくのだった。

翌日。

さっそく昨日思いついたことを大徳寺先生に話し、渋る大徳寺先生をどうにか言いくるめた後。俺は十代の部屋を訪れた。

扉を開けると同時に、一斉にこちらを向く4人。十代と翔は部屋の隅でデュエルをし、隼人は自分のベッドで寝転んでいた。レイはデッキの調整をしていたのか、カードがベッドに広げられている。

そんな八対の目にさらされる中、俺はつかつかと入って行ってレイの両肩に手を置いた。

びつくりした顔になるレイに、俺は笑顔で口を開く。

「レイ、引っ越しだ」

「ふえ？」

思わず気の抜けた声を出すレイだが、周りの十代たちも突然俺が告げた言葉に泥気を隠せないように詰り寄ってくる。

「いきなりどうしたんだよ、遠也。レイが引越すだって？」

「レッドの生徒なのに、どこに行くっていつんすか？」

十代と翔の言葉に、俺は自分を指差す。

それが示すことに気が付いた隼人が、ぎょっとして声を上げた。

「まさか、遠也のブルー寮なのか!？」

「そのとーり」

にやりと笑えば、面白いぐらいに驚きの声を上げてみせるその他の面子。

まあ、レッド所属なんだし、驚くのは当然だろう。

ちなみに、昨日思いついた対策というのがこれ。男子だと偽装しているので女子寮に行くことはできないが、俺の部屋ならばマナがいる。まだマシだろうと思って大徳寺先生にお願いしに行ったのだ。

もちろん、普通なら認められるわけもないので、ある程度理由はつけた。

いわく、俺とレイはレイが学園に来る前からの知り合いであり、人見知りの激しいレイはレッド寮で精神的に疲弊している。

デュエルも俺を驚かせるほどに上手いし、レッド所属ではあるが、特例として一時期でいいので俺の部屋に住まわせてやってくれないか、と言ったのだ。

さすがにずっと、と言えば即座に否定されていただろうから、レイが慣れるまでの一時期と限定した。

渋っていた大徳寺先生も、俺が拝み倒したことで一週間だけなら、と許可してくれたのだ。

そのことを十代たちに伝えると、大徳寺先生が許可したなら、と納得していた。

レイには俺が「マナが女の子が男だけのところでは居づらいたらうからって言ったからさ」と伝えると、驚いて俺の顔を見てくる。

それを見て、迷惑だったか、と俺は不安から問いかける。しかし、それに対する答えは肯定ではなく否定であり、レイは肩に置かれた俺の手を取って、笑顔になった。

「ありがとう、遠也さん！」

そう素直に感謝されれば、俺も悪い気分にはならない。

どづいたしまして、と返して、俺はレイのために運び込まれたベッドは暫くこのままで頼む、と十代に告げる。

それにげっ、という顔を見せる十代たちを尻目に、広げられてい

たレイのカードをまとめて、俺とレイは部屋の入口に立った。

「じゃ、そういうことで」

「あ、ま、またな」

しゅたつと手を上げて言う俺と、ぎこちなさの残る男言葉で告げるレイ。

そんな俺たち二人に、三人は揃って笑顔だった。

「おう、またなレイ！」

「まあ、教室でまた会うだろうしね」

「その時にまたよろしくなんだな」

それぞれそんなレイを不審に思うこともなく、普通に別れる。

まあ、レッド所属なんだから、授業に出るのはいつも通りなのだ。翔が言うように、部屋が変わったからといって、全く会わなくなるわけじゃない。

だからこそ、特に思うこともなく十代の部屋を離れた俺たちは、そのままブルー寮に向かう。



マナが待つてるぞ、と告げて、嬉しそうにするレイを、微笑ましく見つめながら。

「レイちゃん、おかえりー！」

「きゃあっ！」

部屋の扉を開けた途端、レイに飛びつくマナ。そして、それに驚いて思わず悲鳴を上げるレイ。

飛びついたマナは、身長差のあるレイを腕の中に抱えて、そのまま部屋の中に戻っていく。それについて俺も部屋に戻ると、マナがレイを抱きしめたまま楽しそうに笑っていた。ちなみに帽子は衝撃で落ちたのか、床に転がっている。

レイはレイで、驚きは最初だけだったのか、今では苦笑いでその状態を受け入れていた。

俺は、溜め息をついてマナに声をかける。

「おい、マナ」

「あはは。ごめんね、レイちゃん。でも、なんだか私に妹ができたみたいで嬉しくってね」

悪びれない笑顔で言うマナの言葉に、俺は内心で思わず同意する。

俺もまたレイのことを、妹がいたらこんな感じかもしれないと感じていた身である。マナの気持ちがわからないと言えば嘘になる。

その言葉を受けたレイはきょとんとしていたが、しかし次第にその表情を和らげていく。

そして、照れくさそうに笑って口を開いた。

「えっと……私も、一人っ子だから。お姉さんがいたら、こんな感じじゃって……」

頬をかいて笑うレイに、マナが更にかわいい！ と叫んで抱き着く。レイもどこか嬉しそうなのは、やはり男ばかりの環境にいきなり入り込んで気を張っていたからだろうか。

思えば、昨日マナと接している時は驚くほどリラックスしていたな。それを考えると、マナが言った通りだったわけだ。

まあ、言われてみれば、そうかもしれない。俺だって、いきなり女だらけの中に一人放り込まれたら、嬉しさよりも先に混乱と緊張

が身体を支配するに違いない。

若いレイにとっては一層、というわけか。それでも、カイザーのこと 自分の望みのために一人でここまで来たってんだから、大したもんだよな。

俺はレイに近づき、頭を撫でる。

きよとんとしたレイが俺を見上げた。

「えっと……なに？」

「いや……すごいなあ、と思って」

マナの腕の中で一層首をかしげるレイに、俺は笑って言葉を続ける。

「カイザーのことだよ。一人でこの島まで来たってことがな。よくご両親も許したもんだ」

「え？」

「え？」

……おい、なんで不思議そうな顔してるんだ、レイさんや。

そして、何故気まずそうに視線をそらす。

……ふむ。

「マナ、そのまま確保」

「アイサー」

「ちょ、ちょっとマナさん!?!」

ぎゅっと抱く力を強めるマナに、レイが抗議するも時既に遅しである。

俺はしゃがみこんでレイの目線に合わせて、にっこり笑った。対して、冷や汗を流すレイ。

「さて、どうやらまだ話していないことがあるようだね。……教え  
てくれると、お兄さん嬉しいんだけど」

「……あ、う、その……う、ごめんなさい」

諦めたようにうなだれたレイを連れて、テレビの前にソファまで移動する。そして、俺たちはそこでレイが昨日話していなかった部分  
を聞くことになったのだった。

「よし、レイ。さくぞ」

「う、うん……」

「3、2、1……」

ゴッソ。

「痛いっ！」

俺が拳を落とした頭を押さえて、思わずといった感じで声を上げ

るレイ。

しかし、俺は謝るつもりはない。そもそも、レイに殴っていいか確認を取ったうえにカウントダウンまでしたのだ。むしろ甘いぐらいだと思う。

「我慢しろ。……まさか、親に何も言っただけだとは……あまりに基本的すぎて確認しなかった俺も俺だけだ」

そう、なんとレイは親に何も言わずに昨日ここに来たらしいのだ。

俺はてっきり両親には話して来ていると思い込んでいた。普通、この年齢の子が一人でこんなところに黙って来るとは思わないだろう。当然誰かの許可があるものだと思っていた。

まさか、本当にここまで危ない橋を渡っていたとは。もはや呆れてものも言えんぞ。

俺がそう思っていると、マナがレイの殴られた頭を撫でている。その光景を見つめ、俺は痛さのあまりに座り込んだレイに合わせて腰を下ろす。

「なあ、レイ。とりあえず電話しろ。お前だって、お父さんとお母さんを心配させたいわけじゃないだろう？」

俺がそう言うと、レイは顔を伏せてしゅんとした雰囲気になる。

勢いでどうにか自分を誤魔化していたところに、俺が現実を突きつけたからか。自分でもあまり考えないようになっていることに直面し、レイはレイで思うところがあるようだった。

そして、ゆっくりとレイは立ち上がった。

「……うん。ごめんね、遠也さん」

「謝るのは、俺にじゃないだろ？」

だが、レイはふるふると首を振った。

「嫌な役、やらせちゃって……」

その発言に俺は驚く。頭がいいとは思っていたが、本当に聡明だな。

誰かがいずれレイに加えるべき罰。それを俺に行わせてしまったことへの申し訳なさか。俺が昨日から色々とレイに便宜を図っているのに、それを仇で返すような気持ちを抱いたのかも知れない。

しかし、俺は気にしていない。むしろ、この状況でも人を思いやれるその心に、俺は感心すら覚えた。

そんなことを内心で思いつつ、かき混ぜるようにくしゃりとその

頭を撫でる。

「気にするな。それに、俺も謝らないとな。殴って悪かった、痛かったろ?」

レイはそれに、うん、と頷いた。次いで、でも、と付け足す。

「ありがと、遠也さん」

それに俺は何も返さず、ただ電話のほうを示す。

そしてレイは電話の前に立ち、番号を入力し始めた。

数秒、そのまま電話口で硬直する時間が続き、繋がったのだろう、レイが「もしもし、あの、レイ、です」と恐る恐るといった様子で話し始めた。

途端、離れているこちらまで聞こえるかのような大きな男性の声。そして、同じく聞こえてくる涙声になっている女性の声。

間違いなく、両親なのだろう。心配と、無茶なことをしたことへの怒りと、そして無事でいてくれた安堵。それらが交ぜになった、聞いたことがないほどに切迫しつつ、そして複雑な声だった。

レイはひたすらそれに真摯に向き合い、謝ったり現状を説明したりして時間が過ぎていく。



途中、俺とマナも電話口に出た。一応、俺たち二人はレイの事情を知って、色々と便宜を図っているから、俺たちから見たレイの様子を聞いたかったのだろう。

本来俺一人で済むことだが、マナも出したのは、男一人に娘を任せていると思われてはご両親が不安がるだろうと思つてのことだった。

結果として、レイは次の定期便で帰ることが決まり、これから校長にも説明に向かうことが決定された。その定期便には、両親も迎えとして乗り合わせるようだ。

ひとまず、話がついてよかった。ご両親はこれから警察に捜索届を下げてもらいに行くらしい。まあ、丸一日以上連絡がなかったんだ。そうなってるわな、普通。

そのようなやり取りをすべて終え、ようやく今後のめどが立ったところで、レイは二人に電話越しで頭を下げながら受話器を置く。

そして、ふう、と息をついた。疲れを含んだものであったが、どこかすっきりと肩の荷が下りたかのような軽快さがあった。

やはり、心の中ではしこりとなって溜め込まれていたのだろう。その悩みが当面なくなり、気が楽になったといったところか。

まあ、単純に両親の声を聴いたということも関係しているかもしれない。まだ小学五年生の女の子なんだ。家族から離れて一人なんて、どんな状況だとしても寂しいに決まっている。

「お疲れさん」

「ふわっ!？」

だから、俺は勇気を出して電話を掛けた労いと、ここでは俺たちが力になってやるという気持ちを入れて、レイの頭に手を置く。

そして、思いっきり髪が乱れるように撫でた。

それに、わっ、ちょっ、やめっ、と言いながらどうにか俺の手をどかさうと苦心するレイ。その表情がどこか笑っているのは、まあ「愛嬌」ということで。

「次の定期便は、一週間後だっけ。なら、それまで一緒にいられるね」

マナがそう言って、レイの手を握る。

それに、レイも嬉しそうにうん、と頷いた。

その様子を微笑ましく見つつ、俺は期限が定まったことで浮き上がってきたある問題について考える。

とはいえ、考えるといっても俺に出来ることは一つだけ。あとはレイが頑張るしかないわけだが。

「さて、レイ」

「はい？」

俺に向き直るレイに、その問題突きつける。

「カイザーの件はどうする？　ここまできたら、早いほうが何かといいと思うが……」

ギリギリになればなるほど、思考というものは狭まっていき散り散りになるものだ。それに、帰る準備など、することも増えてくる。

期限ができた以上、あまり悠長に構えてはいられない。レイもそれはわかってはいるはずだ。

「……………」

返ってきた反応は無言。だが、それがただの放心ではないのはすぐにわかった。

レイはマナと握り合っていた手をそつと離すと、緊張に彩られつつも真剣な表情で、俺に小さく頭を下げたのだ。

「遠也さん……その、お願いします!」

目的語が抜けていたが、言いたいことは分かる。カイザーと会う機会を作る、という俺が最初に提案したソレ。間違いなく、そのことだろう。

おそらく緊張のあまり、本人としてもいろいろ限界だったのだ。だから、俺はそのおかしな日本語には突っ込まず、ただレイに顔を上げさせる。

そして、こちらを不安げに見つめる視線に対して、笑みを浮かべた。

「任せとけ!」

当然のようにそう答えた俺に、レイは目に見えてほっとしていた。

俺はしゃがみこみ、レイに対して拳を向ける。

初めはその意図がわからず、レイはきよとんとするだけだ。しかし、マナに何事かを囁かれると、なんだか照れくさそうにしながら、自分の小さな拳を俺の拳にコツンと合わせる。

それに満足げに俺は頷き、ポケットからPDAを取り出す。

もちろん、かける先は決まっている。丸藤亮、と表示されたそれを選択し、俺は通話ボタンを押すのだった。

少々時間が過ぎ、夕方。

俺とマナとレイの三人は、連れだつて寮を出た。

緊張と不安のためか表情をこわばらせているレイに請われ、レイの右手は今俺と繋がれている。そして、左手は同じようにマナと繋がれていた。

本人いわく、こうしていたほうが安心するのだということらしい。まあ、俺自身経験はないことだが、告白というものはやはり相当な勇気を振り絞るものなのだろう。

そうだろうと思うからこそ、俺は何も言わずに手を繋いでいる。マナも同じくその気持ちはわかるのか、ぎゅっと安心させるように

その手を握っていた。

寮を出た俺たちが向かっているのは、以前に明日香とカイザーが立っていた崖の間にある小さな灯台である。

俺はそこに、用事があると言ってカイザーを呼び出している。普段から何かと親しくしている俺だからだろう、カイザーは特に理由も聞かず頷いてくれた。

だから、今から行くソコにはすでにカイザーが待っているはずである。

目的地に近づくにつれ、繋がれた手から伝わってくる力が強いものになっているのは、レイもそのことを承知しているからだ。

だが、今更なにも言うことはない……いや、言うべきではないと思っっている俺たちは、レイに言葉をかけることはしない。

あとは、レイがその気持ちをカイザーにぶつけるだけだからだ。それはレイとカイザーだけで行われるべきことであり、俺たちはおまけのようなものなのだ。

だが、それでも。やはり多少ともに時間を過ごしたことで、情というものは移っていたらしい。灯台の傍までたどり着き、俺たちの姿をカイザーが捉えた、その時。

俺はレイの頭から帽子を取ると、ぱん、と軽くレイの背を押した。

「わっ」

軽くとはいえ、身体を緊張で固くしていたレイは、僅かにバランスを崩して前に一步踏み出す。

帽子がなくなったことで露わになった長い黒髪を翻してこちらを振り返ってくるレイに、俺は一言だけ投げかけた。

「頑張れ！」

繋がれていない方の手で拳を作り、それをぐっと小さく突き出して見せる。

それを受けたレイは、小さく嘖き出す。

そして、固くなっていた表情を緩めて、繋がれていた手をことさから強く握り返してきた。

「うんっ、いつてくるね！」

そう言うのと、レイは俺とマナの手を離し、灯台のもとへと歩いていく。

俺たちはそれを見届け、一拍の時間をおいてレイの後を追いつ、その後ろに立った。

そして、訝しげにこちらを見るカイザーに、片手をあげて声をかける。

「よ、カイザー。わざわざ来てもらって、悪いね」

「それは構わないが……用事とは何だ？」

俺に目を向け、カイザーは言う。

レイを一瞥したことから、その用事が目の前の少女に関することだとカイザーも予想しているだろう。

そして、俺はその予想に違わぬ事実を口にする。

「用事があるのは、俺じゃなくてこの子だね。俺は、協力しただけなんだ」

俺がそう言ってレイを見ると、つられるようにカイザーもレイに視線を移す。

憧れの人物に目を向けられたレイは、ぴしっと姿勢を正して、その目を真っ直ぐに見つめ返した。

「ぼ、ボク、早乙女レイっていいいます！　そ、その……亮サマに、伝えたいことがあって、遠也さんをお願いしたんです」



上気した顔で、ガチガチになりながらも、レイはカイザーに正面から向き合い言葉を紡ぐ。

それを受けて、カイザーの顔が驚きに染まる。どうも、レイの見た目に驚いているのだと、察せられる。

レイは小学五年生なうえ、女の子だ。身長はお世辞にも高くなく、はつきり言ってしまうえば低い。

どう見ても高校生には見えないし、中学生でも厳しいだろう。

だから俺は、カイザーに聞こえるように口添えを行った。

「レイは、本当は小学五年生だ。けど、どうしてもカイザーに会いたかったらしくてさ。無理してここに来てる。近いうちに、帰らないといけないんだ」

「……そうか」

俺の知らせた内容に、カイザーは一つ頷いてみせる。

そして、おもむろに一歩前に出ると、その目をしっかりとレイに合わせた。

真正面から見つめられ、一層レイの身体がこわばる。それを見つ、カイザーはレイに声をかけた。

「伝えたいことがあると言っていたな。……レイ、君の話の聞こう」

そう言うと、カイザーは意外にも笑みらしきものをその表情に浮かべた。十代に負けず劣らないデュエル馬鹿と言っても過言ではないカイザーが、レイの緊張を見てとって気を利かせることができるなんて……。

我ながら変なところで感心していると、そんなカイザーの態度に少しは身体力を抜くことができたのか、レイが意を決したように口を開く。

「ボク……ずっと、亮サマに憧れていました！ 亮サマのデュエルを見て、その姿を見て、本当にカッコいいと思ったんです！ だから、そ、その……ボクは、亮サマのことが好きです！」

最後には叫ぶようになっていたが、レイは気持ちをはっきりと口に出した。

一度呼吸をして、更にレイは続ける。

「だ、だから……ボクと、付き合ってください！」

言い切り、レイは真っ赤な顔でカイザーに向き合う。

言葉はどこか足らず、余裕のなさからかどもりは隠しきれない。しっかりとした文章ではなかったことは間違いない。だが、だからこそレイの真剣さが伝わるというものだろう。

それに、最後の肝心なところは間違いなくカイザーにも伝わったはずだ。

だから、あとはカイザーがどう応えるのか。それだけのはず。

それがわかっているから、俺とマナは二人を見つめる。

大仕事を終えたレイは、一杯一杯なのだろう、僅かにその肩が震えている。緊張と、返ってくる答えに対する恐怖と、あるいは照れや羞恥もあるのかもしれない。

そんなある種の極限状態にありながら、しかしレイは視線だけは決して逸らすことはなかった。

自身の中で荒れ狂う様々な感情を抑え、ただ一途にカイザーからの答えを待つその姿は、レイの精一杯の姿である。

それを見て、俺たちもまた思わず身構える。果たして、レイの告白が受け入れられるのか。固唾を吞んで見守る。

すると、カイザーが一度目を伏せる。

そして、数秒の後に目を開き、再びその視線をレイに合わせた。

「……レイ」

名前を呼ばれ、レイの肩が跳ねる。

俯きそつになった顔を、どうにか押し留めて、レイはカイザーを見た。

「こんな島まで、その一つの思いを抱いて来てくれたこと。その気持ちは、本当に嬉しく思う。ありがとう」

「え？」

カイザーが穏やかに述べた言葉に、レイが希望を込めた目を向ける。

しかし、カイザーの言葉はまだ終わりではなかった。更に続けられる。

「……だが、すまない。俺は、君の気持ちに伝えることができない」

「……っ！」

さすがに言いにくいのだろう、申し訳なさそつにその言葉を告げるカイザー。その表情は、告げるカイザーも辛いのだと言わずとも伝わってくるようだった。

そして、その言葉を聞いてゆつくりとレイは顔を伏せる。そのまま、掠れたような声でカイザーに問いを発した。

「……り、ゆうを……理由を、教えてくれますか？」

顔を伏せたレイにはわからないだろうが、その問いを受けたカイザーは一つ頷いて口を開く。

「……俺は、今は誰とも付き合う気がない。俺はデュエルが好きで、そして、その道を極めていきたいと思っている。そのために、俺はデュエルに我武者羅に向かって行きたいのだ。レイ、君の気持ちは本当に嬉しい。だが、俺はデュエルが第一になってしまったという男だ。今の俺では、きつと恋人ができてても大切にすることはできない。……だから、すまない……」

そこまで言い切った後、カイザーはレイに対して頭を下げた。

その姿を見れば、カイザーがレイに対して真剣に向き合ってくれたことがわかる。

小学五年生の告白など、と軽んじず。自分の考えもしっかり明かし、そのうえでレイの気持ちに伝えられないことを、きつちりと態度で示す。

子供のことと思わず、頭まで下げるその姿を見れば、文句を言う

ことなどできなかった。

それは、レイも同じだったのかもしれない。

僅かに顔を上げると、レイは明らかに無理をしているとわかる声で、頭を下げるカイザーに対した。

「か、顔を上げてください、亮サマ！ う、嬉しかったです、その、ぼ、ボクの気持ちに、きちんと応えてくれて……そ、その……っ」

最後に声が掠れ、レイは思わず口を噤む。

「っ……あ、ありがとう……」ぎゅ、ました……ッ！」

涙交じりに早口で言い終え、レイはカイザーに背を向けて走り出す。

俺とマナに目を向けることなく、レイは泣きながらこの場所から離れていった。

「マナ！」

「っんっん！」

名前を呼び、それだけで俺が言いたいことを察したのだろう。あるいは、俺が言わずともマナはそうするつもりだったのか。

返事に対してタイムラグなしで駆け出したマナ。レイを追って行ったその姿を見送り、俺はカイザーに一歩ずつ歩み寄っていく。

「ありがとな、カイザー」

「……遠也」

「アイツに、ちゃんと向き合ってくれて。デュエルにしか興味がな  
いと思ってたから、手酷く拒否するんじゃないか、ってちょっと不  
安だった」

俺が本心を隠さずにそう言うと、カイザーは気が重そうに息を吐  
いた。

「……俺とて、木石ではないんだ。恋愛が全く分からないわけじゃ  
ない。告白するという行動に、どれだけの勇気が要るかも……」

「カイザーも、誰かに告白したことがあるのか？」

それを聞き、俺は思わず尋ねた。

しかし、カイザーはそれに首を振る。

「いや……だが、それでも想像はできる。そして、想像である以上、本当はそれ以上に勇気が要るのかもしれない。そう思ったら、適当な対応なんて出来るはずもない」

そして、そんな決断を真つ向から打ち砕かざるを得ないカイザーは、本当に複雑そうな表情をしていた。

カイザーが語った言葉は、すべて本心からのものだったのだろう。だからこそ、カイザーに出来ることはあれが全てだった。その結果、レイは涙を流した。

それはもうどうしようもないことであり、しかしそうしなければいけないという葛藤は、あるいは告白を断られたレイとはまた違う意味で、断ったカイザーにも苦しみを与えているのかもしれないかった。

なんとというか、カイザーも真面目な奴だ。だからこそ、レイの告白も間違いではなかったと思えるわけだが。

少なくとも、子供の言葉だと馬鹿にせず真剣に対応してくれた点だけでも、レイにとっては良かったと思う。

そのことだけは、感謝しておこう。

「やて、と」



マナー人に任せっぱなしというわけにもいかない。

それに、レイのことはやはり気になる。カイザーに言いたいことも言えたことだし、俺も急いでレイのもとに向かうとしよう。

そう思って足を踏み出すと同時に、「遠也」とカイザーから呼びかけられる。

足を一度止め、俺はカイザーに振り返る。

カイザーは、どこか迷いのある顔で俺を見た。

「俺が言っていることなのかはわからないが……遠也、あの子のことを頼む。泣かせてしまったのは俺だが、それでも……」

言いつらそうに言うカイザーに、俺は「おう」と応える。

カイザーは悪いことをしたと思っているようだが、それは本来気にしても仕方がないことだ。答えは必ず、是か否に分かれ、それは他人がどうこう言うことではないのだから。

カイザーの答えは否だった。それは、レイが受け入れなければいけないことであり、カイザーが必要以上に罪悪感を感じる必要はない。

むしろ、いつまでもそうでは、レイのほづが気にして気まづくなってしまう。

俺がそうカイザーに返すと、カイザーは自嘲するようにふつと笑った。

「そうか。行ってくれ、遠也。後を任せるようで、すまないが」

「気にするな。俺はレイの兄貴分みたいなものだからな。むしろ望むところだ」

俺はそう最後に告げて、カイザーから離れていく。

いくらか距離が開いたところで、俺はちらりと後ろを振り返った。

まだ灯台に一人で留まっているカイザーは遠目ではいつも通りに見えるが、それでもどこか無理をしているように感じられる。

やはり、堪えていたのだろう。改めてそう思いつつも、それ以上は何も言わず。

俺はただブルー寮の自室に向かって走る。レイとManaがそこに帰っているだろうことを、何となく予想しながら。

部屋に戻った俺は、やはり自分の予想が正しかったことを知る。

そこには、レイを抱きしめるマナの姿があったからだ。

「あ、遠也」

「……遠也、さん？」

マナがこちらを見て上げた声に、レイもマナの胸に埋まっていた顔を上げてこちらを見る。

その目は赤く充血しており、今の今まで泣いていたのだということが否応にも伝わって来る。

手酷く……というわけではないが、振られたのだ。それも当然というものか。まして、一人でこの島まで突撃してくるような思いで来ていたのだから、その落差もひとしおなのかもしれない。

俺は二人に近寄り、マナの隣に腰を下ろす。

そして、慰めになるかはわからないが、と思いながらレイの頭を撫でた。

「ん……」

いつものように髪を乱れさせるような撫で方ではなく、慰めるた  
めなのだから優しさを意識して撫でた。

その成果か、レイは泣き顔ではあるものの気持ちよさそうに目を  
細めた。

「よくやったな」

「……え？」

「告白なんて勇気が要ることに、レイは逃げずに立ち向かっただろ。  
それだけでも、十分凄い」

そんな勇気が持てない俺だからこそ、なおさらそう思う。ヘタレ  
な俺とは、比べるべくもない勇気である。

「で、でも……ボク……ふられ……っ」

「そうだな。それは、まあ、あれだ……事実だけど」

そう言った途端、レイの顔がくしゃりと歪み、マナにジト目で睨  
まれる。

「こ、言葉を間違えたか？ いや、しかしこんな状況初めてなんだから、何から何まで正しい対応なんて出来るはずないだろ。」

そう内心で言い訳しつつ、言葉が続ける。

「けど、それはレイのせいじゃない。カイザーのせいさ」

「……ふえ？」

見上げてくるその視線に、俺は当然だろうと返す。

「だって、レイは精一杯やっただろ。それに、俺から見てもレイは十分可愛いし、魅力的な女の子だと思う。だから、それを断ったカイザーがどうかしてるって、それだけのことだろ？」

実際、これほどまでに一途に誰かを思い、更にそのために一切の躊躇いもなく行動できる人間はそういない。

良いことばかりではないが、それでもその気持ちの強さという点においては、感心するぐらい素晴らしいことだと思う。

この世界に来ていきなり気持ちがダウンしてしまった俺には、到底無理なことだ。それに、告白とか本当に尊敬する。自分ができないだけに、俺はレイのことを高く評価しているのかもしれない。

「あ……………」

そして言われたレイはというと、顔を真っ赤にして照れていた。

意外にも、そういう褒め言葉を言われたことがないらしい。その混乱する様子を見て小さく笑みを浮かべながら、俺は撫でる手に少しだけ力を込めた。

「今は、そうやっていっばい泣けばいい。その間、俺とマナがずっと傍にいるからさ。けど、そのあとはまた笑って、もう一回デュエルでもしようぜ」

最後に冗談交じりにそう言い、マナに視線を向ける。

後は任せた、と訴えようとしたのだが…………なぜかものすごい目で俺を見ていた。ジト目どころか半分睨みが入ってるぞ、それは。

すると、マナが小声で「私にそんなこと言ってくれたことないのに……………」と呟いていた。

お前に言うわけないだろ、そんなこと。当たり前のことすぎるし、なにより恥ずかしいだろうが。

そう思っていると、不意にレイが抱き着いてきた。といっても、俺だけにじゃない。マナの身体にも変わらず細い腕が回されており、レイが俺たち二人に抱き着いた、という表現のほづが正しいだろう。

何事かと思っただが、レイは顔を俯かせて泣いていた。いつぱい泣く、という俺の言葉で、また涙があふれてきたのかも知れない。

俺とマナは目を合わせて苦笑すると、二人してレイを慰め始める。

俺はレイの頭を撫で、マナはレイの背中をさすり。

三人固まってそうしている様は、周りから見たら奇妙に映ったかもしれない。けれど、今この部屋には俺たちしかないんだから問題はない。

十分後、緊張の糸が切れたことと泣き疲れからかレイが静かに眠るまで、俺たちはただレイに寄り添って彼女を慰め続けたのだった。

\*

それから幾らかの時間が過ぎて、夜。

ふと目を覚ましたレイは、ベッドから起き上がった。

それにあわせてかけられていた布団がずり落ちるが、それよりもレイは自分がベッドで寝ていたことに小さな驚きを示す。

おそらく、寝てしまった自分を遠也かマナがベッドに運んだのだろう。そう判断し、レイは心の中で二人に感謝する。

その優しさと、思わず抱き着いてしまったレイに文句も言わずに付き合ってくれたことを。

二人の前で盛大に泣いてしまったことは、今思えば恥ずかしく思う。あの時は気持ちが高ぶっていて抑えられなかったが、やはり人前で泣くという行為は幼いレイにしても羞恥を感じることであった。

そこでふと、レイはベッドに寝ているのが自分ひとりであることに気付く。

このベッドの持ち主は遠也であり、その本人がこの時間にベッドの中にいないとはどういうことだろうか。

レイはベッドから降りて、部屋の中で唯一ベッドの代わりになりそうな場所……ソファのほうに向かう。

覗き込めば、そこには予想した光景がある。ソファに寝ころび、目を閉じて眠る遠也の姿がそこにあった。



こうなっているのは、ベッドを自分に譲ったためだろう、とレイは考える。その気遣いに申し訳なく思いつつ、同時になんだか嬉しさを感ずるレイだった。

自分をベッドに寝かせ、遠也自身は別の場所で寝る。それは、レイが他人だからという遠慮もあるかもしれないが、それと同じくレイを一人の女の子として見てくれているからだ。レイは思った。

まだ短い付き合いではあるが、遠也のそういった優しさをレイは知っていた。そしてそれが、とても好ましいものであることも。

ブルー生徒の部屋に備え付けられたソファは、エリートの寮だけあってそれなりに大きい。男子一人が寝ころんで、まだ僅かに余裕があるぐらいには。

レイは、きよろきよろと周りを見回す。部屋の中にマナの姿はない。自分の部屋に戻ったのかもしれないとレイは思う。さすがに夜に異性の部屋に泊まることを、教師が許可するとは思えなかったからだ。

ならば、とレイはひっそりとソファの表側に回り、座り込む。ちょうど遠也の正面に顔を向けたレイは、じつとその寝顔を見つめた。

初めは、シンクロ召喚のイベントだった。弱いモンスターを駆使し、力を合わせて大きな敵に立ち向かう姿に衝撃を受けた。それまで当然のようににはびこっていた、ステータス絶対主義とも呼べる風潮が、崩れる音を聞いたからだだった。

低ステータス、低レベルがメリットとまで言い切った姿に、驚い

た人間は多かつたはずだ。それはこれまでの常識に、真つ向から反する概念だったからだ。

レイもそんな一人だった。むしろ、低ステータスのカードを主力に据えていた彼女にしてみれば、他の人間よりも衝撃的だったと言つていいかもしれない。

その後わずかに話した時に受けた助言は、今でもレイにとって大切な言葉だ。それがあつたから、レイは一層自分のデッキを信頼し、更なる努力を怠らないようになったのだから。

だからこそ、遠也はレイの中で特別だった。カイザーのように、一目で心が燃え上がったわけじゃない。だが、じんわりと染み込んでくるかのような憧れが、レイの心に生まれたのである。

(まさか、その人と同居することになるとは思わなかったけど……)

苦笑し、レイは思う。

憧れの存在だった。ただそれだけだったのだが、こうして実際に触れ合い、その人柄に触れ、レイはすっかり遠也のことを好きになつていた。

それはカイザーに対するそれのように、激しい感情を伴うものではない。だからこそ、レイはそれを恋愛感情だと思わなかった。それは……例えるなら、妹が兄に向けるような、そんな好意だとレイは感じた。

遠也もまた、自分に対して妹分ぐらいには思ってくれているんじゃないか、とそんな期待を込めての気持ちだったが、あながち外れてはいないだろうとレイは思っていた。

けれど……。

(うーん……よくわからないや)

カイザーに告白して振られ、恋に破れたからだろうか。レイは、自分の気持ちがどういうものなのか自信が持てなくなっていた。

カイザーに向けていた気持ちは、恋だったのか。それとも、熱烈な憧憬を相手が異性だったことで誤認したのか。そのあたりが、レイにはよくわからなくなっていたのだ。

だからこそ、遠也に対する自分の気持ちもまた揺らいでいた。

兄に向ける好意だと思っていたが、本当にそうだったのか。こうして実際に触れ、生活し、レイは遠也の生の姿を知った。

それでも、憧れた時以上に遠也に対して穏やかな気持ちを抱くことは、一体何なのだろう。

恋、なのかもしれない。レイは僅かに疑問の混じる思考ながら、そう考える。

少なくとも、レイは遠也に対してカイザーと同じかそれ以上の好意を抱いている。それは間違いないことだ。それが兄に対するも

のどどう違つかと言われると自信がないが、これからも一緒にいたいという気持ちは間違いない。レイの中にある。

触れられたら恥ずかしいながらも嬉しいし、笑いあうときは胸の中が温かくなる。その気持ちが恋というのなら、きっとこれもまたそうなのかもしれないと思える。

カイザーの時とは違う感触を持つ感情に、レイは自身の中でそう結論づけた。カイザーに対しての感情は、今でもわずかにしこりがある。たとえそれがどんな感情だったとしても、レイは間違いなくカイザーに好意を持っていたのだから、仕方がないことだった。

しかし、よく泣いたのがよかったのだろう。後を引くほどに残っているわけではなかった。

そして、自覚したレイはそっとソファの背もたれを倒す。実はこのソファ、リクライニング機能つきのもだったのだ。それを、レイは遠也から聞いて知っていた。

これで、僅かだった余裕は広がり、十分にもう一人が寝れるスペースが出来上がった。

満足げにそれを見たレイは、眠る遠也の横に、その身体を滑り込ませる。

(いじめんね、マナさん)

やはり遠也と同じく姉のように感じる女性に、心の中で詫びる。

レイから見ても遠也とマナはお似合いであり、また互いに好意を持っていることをレイはしっかり察していた。むしろ最初は恋人同士だと思っていたのだ。違うと聞かされた時も、まだなんだ、と思っただけである。

だからこそ、レイには僅かに罪悪感がある。だが、それでも実行をやめないのは、レイが持つ生来の行動力がそうさせるのだろう。

一人で島まで突撃してきた行動力は伊達ではない。自分の気持ちに素直になる、という一点において、レイは誰よりも突出しているのだった。

遠也の身体に寄り添い、その心臓の鼓動を感じる。その感覚に安らぎを覚え、レイはほっと息をついた。

撫でられた感触も、かけられた言葉も、レイはしっかりと覚えていく。

だから、レイは遠也の身体に遠慮がちに抱き着き、小さく呟いた。

「……ありがとう、遠也さん」

そして、レイはそのまま眠りに落ちる。人肌という、これ以上ない安心を得られるそれに、心と体を埋めながら。

翌朝。レイは「あああー！」という誰かの驚きの声で目を覚ました。

そして、レイは見た。マナに詰め寄られ、たじたじになっている遠也を。

どうやら、遠也の隣で自分が寝ていたことに、朝やって来たマナが気が付いたらしい。だが、それはレイが勝手にやったこと。身に覚えのない遠也は、必死に言い訳をしている。

どうもマナが見たとき、寝返りの関係か遠也はレイを抱きしめる形で寝ていたようだ。それがマナの怒りに触れた、というか嫉妬させているのだろう。

そんなやり取りを聞きながら、その感触を寝ていたために覚えていないことをレイはちよっぴり残念に思った。

そして、レイが起きたことに気付いた遠也が縋り付くようにレイを見る。事情を説明してくれ、と言っているのだろう。その視線を追って、マナもレイを見た。

その二人の視線を受けて、レイは笑う。昨日振られたばかりとは思えない、眩しい笑顔で。

「おはよう、遠也さん！ マナさん！」

やけにすっきりした顔で、元気よく挨拶をするレイ。そのあまりの明るさに、遠也とマナは争いを忘れて僅かに呆ける。

そんな二人を見て、レイは一層その笑みを深くするのだった。

\*

次の定期便が来るまでの一週間。俺はその間を、ひたすらレイと過ごす時間に充てていた。

十代や皆とも引き合わせ、出来るだけ楽しい思い出にしようと思時には大騒ぎをし、時には穏やかに過ごし。

もうすぐいなくなってしまうのだから、と考えれば、いささかい

つも以上に無理をするのも酷ではなかった。この場所の思い出が、恋に破れた場所、というだけになるのは忍びない。他にも楽しい思い出をこの場所に見出してほしかったのだ。

そんな俺の努力の甲斐あってか、レイはずっと楽しそうにしてくれていた。時折、マナとレイが微妙な感じにあることもあったが……。

いや、あれは余裕たっぷりのレイに、マナが唸ってそんなレイを見ている、というだけだった気がする。レイが腕を組んできたり、胡坐をかいた俺の上に座ったり。子供なんだから、それくらい別にいいだろうに。

そんな俺たちの様子を見た明日香が、俺に「あなた、いつか刺されないといいわね」と言ってきたり。それはヤンデレ的な何かなのか？ ヤンデレは確か十代の方に何かあったはずなので、俺は大丈夫だと思っただが。

そんな俺の様子を見て、明日香はため息をつく。失礼な、と言えば、明日香は不意に俺の手を握ってきた。

突然、柔らかな感触に包まれた手に、俺は少々驚く。しかし、その手はすぐにレイが俺を後ろに引っ張ったことで、ほどかれた。

むっと明日香を見るレイと、それを受けて苦笑している明日香。そして、明日香は俺を見て言った。「こういうことよ」と。

どういうこと？ それでもわかっていない俺に、明日香は呆れ顔で去っていった。よくわからないが、とりあえずこの腕に組みついてきたレイをどうにかしないといけないことだけはわかった。明日



香め、面倒なことを。

そんなこんなで時間が過ぎ、今日はいよいよレイが帰る日。

迎えに来た両親にひとまず怒られ、その後準備をしてあった荷物などを持って、港へと移動する。

無論、俺やマナ、十代や明日香たちに、あとカイザーも見送りに来ている。

レイも何か吹っ切れたのか、カイザーに対してそれなりに普通に接することができるようになっていた。後を引きずるかと思っただが、意外だった。まあ、そのほうがこちらとしては心配がなくていいが、定期船はすでに港についている。

荷物と共にレイのご両親はすでに乗り込んでおり、今はレイ一人が港に残って俺たちに向き合っているところだ。

最後の挨拶、ということだろう。レイは笑顔だったが、やはりその中にある寂しさは隠せないようで、複雑な表情をしていた。

そんなレイにまずは十代が声をかける。

「じゃあな、レイ。またいつでも来いよ、そんでもう一回デュエルしようぜー!」

にかつと笑って言う十代に、レイは苦笑いだ。この短い期間ではあったが、レイも十代のデュエル馬鹿っぷりを理解したようである。

この一週間の間に、十代とレイはデュエルをしている。結果は十代の勝ちであったが、レイが使うデッキが珍しいこともあって、十代はまたレイとデュエルがしたいようだった。

そして十代を皮切りに、やたらマナに絡もうとしていた翔、それから隼人に三沢、ジュンコにももえ、とそれぞれがレイに声をかけていく。レイはそれぞれに笑顔で応え、別れを惜しんでいた。僅かな間だけの付き合いだったが、それでも友達であることに変わりはない。

それゆえ、そこに年齢の差があるうと関係ない。友達との別れを惜しむのは、当たり前のことだからだ。

そして次に明日香がレイに声をかけ、「向こうでも元気だね」と握手をしている。それに対して、レイが「うん、明日香さんにも負けないよ」と返している。

それに明日香は驚いた顔になり、何やら必死に否定していた。会話は聞こえないが、楽しそうではあったので、きつと何か言いたいことでもあったのだろう。

続いてカイザーが、「ありがとう、息災でな」と簡素な言葉を投げかける。それにレイは驚きの表情になり、次いで元気よく「はい！」と答えた。

さて、こうして残るは俺とマナの二人だけ。一番長くレイと接し

ていた俺たちを、みんなも気を使って最後に回してくれたのだろう。出発の時間いっぱいまで話せるように。

「うう、レイちゃん……元気だね。私のこと、忘れちゃダメだよ」

そう言って、マナがレイに抱き着く。ぎゅっと抱きしめられたレイは苦しそうだが、それでもそれ以上に嬉しそうだった。

「もちろん、忘れないよマナさん」

レイもマナの背に腕を回し、抱きしめ返す。

時折、変な空気になることがある二人だったが、基本的にはやはり二人はお互いのことが好きなのだ。マナはレイのことを妹同然に見ているし、レイもまたそんなマナを姉のように思っている。

そんな二人が、別れを悲しむのは当然のことだ。二人は抱き合っていて、お互いの思いに身を浸す。本当に仲の良い姉妹のように見える二人に、俺も近づいていった。

「レイ」

呼びかけると、レイはマナの身体から身を離し、こちらに向き直る。そして、笑顔を見せた。

「遠也さん……。遠也さんには、本当に感謝してる。この島に来て、ずっとボクを助けてくれて、ありがとう」

正面から真っ直ぐお礼を言われ、さすがに俺も照れる。

頬をかき、誤魔化すように口を開いた。

「気にするなよ。俺も楽しかったから。まるで、妹ができたみたいだよ」

本心からそう言えば、レイはちょっと思案するような顔になる。

そして、曖昧に笑って時計を確認する。もう少して、出発の時間だ。

「ありがとう、遠也さん。……お礼に、これを受け取ってもらえる？」

レイはそう言って一枚のカードを取り出す。裏側で出されたそれは、何のカードなんだかわからない。

俺は更にレイの傍まで寄って腰をかがめる。そして、そのカードを手に取った。

「……あと、これもお礼だよ」

「え？」

その囁きが聞こえた瞬間、俺の頬に感じる温かい感触。

それは一瞬のことであつたが、思わず思考が停止する。対して、目の前のレイは顔を真っ赤にしているものの楽しそうに笑っている。

「えへへ、ボクの初めてのキスなんだから、感謝してね」

黒髪を翻し、照れたように微笑むその姿は、思わず見とれるほどに可愛いものだった。

だが、そんな感傷は数秒の間だけ。「あー！」という叫び声にかき消された。

「レイちゃん！ な、なにを！」

「マナさん、ボクだって真剣なんだから、これぐらいはね！」

マナの叫びに悪戯気にそう返し、レイは船の乗り込み口へと駆けていく。

その途中、一度だけ振り返ると、レイは笑顔で大きく手を振った。

「じゃあね、みんな！ 遠也さん！ またボクはここに来るから！  
今度は、遠也さんに会いに！」

そう言い残し、レイは今度こそ振り返ることなく駆け去っていく。

それを呆然と見届けて、俺は受け取ったカードに視線を落とした。

表側に見れば、そのカードは《恋する乙女》。レイ自身何枚も持っているカードだから、それをもらうことに大きな抵抗はない。

だが、あんなことをされた状況で、このカード……。それに、あの最後の言葉。そこから導き出される答えは、一つしかない。

俺は思わずみんなを振り返り、曖昧に笑った。

「えっと……これって、そういうこと？」

俺が発した言葉に、真っ先に返答をしたのは、翔だった。

笑顔で、翔は口を開く。

「もげろっす」

「いきなり酷いな、お前は！」

だが、そのセリフが出るということは、確定とみていいだろう。

まあ、俺がレイとこの島で一番長く接した異性であることに間違いはないが、まさかそういう感情を向けられる対象に思われていたとは。

俺はてつきり、レイも俺のことを兄のように思ってくれているとばかり……。

「兄とはいっても、血は繋がっていないでしょ。なら、そういうこともあるわ」

明日香は、俺が考えていることを察したのか、そう口にする。

けど、まさかと思うだろう。俺はカイザーとは似ても似つかないんだし。

俺が一人動揺していると、十代たちはそれぞれ俺に一言声をかけてこの場を去っていく。

「じゃあな、先に帰るぜ遠也」

「もげる」

「果報者なんだな、遠也は」

「しっかり見送りをしておいでくれ」

「ロリコン」

「愛に年齢は関係ありませんわ」

「後は任せた」

「じゃあ、また教室で会いましょう」

それぞれ誰のセリフであるかは、推して知るべし。

そして取り残された俺は、ちらりと横を見る。

そこには、ぶっすーとわかりやすく機嫌を損ねているマナの姿。だが、どこか無理にそのポーズをとっているように感じるのは気のせいではないだろう。

そもそもマナはレイのことが大好きなのだ。そうそう、嫌うことができないはずもない。

だから、文字通り今の姿はポーズというわけだ。

「はあ……マナ、帰るか」



徐々に港から離れていく船を見ながら、俺はそう促す。

それに、マナはあからさまに驚いた顔になる。

「ええ！？　ここは遠也が私にキスしてくれるところじゃないの！  
？」

「なんでそうなる」

いったいどんな発想をすればそうなるのか。

全く読めない思考を持つ相棒に溜め息をつき、俺はマナの手を握る。

短い期間ではあったが、レイはいつも一緒にいる存在だった。そのレイがいなくなったことを、俺は心のどこかで寂しく思っている。

だから、躊躇いもなくこうしてマナの手が握れたのかもしれない。その寂しさを誤魔化すために。

それはマナにとっても同じことだったのか。マナは繋いだ手をたどり、俺の腕に自らのそれを絡ませる。

普段なら慌てて取り乱すその仕草にも、今はむしろ安心感のようなものを感じる。やっぱり、結構寂しいのかもれない。それを感じているのか、マナもまたその顔に寂しげな笑みを浮かべていた。

「……帰るか」

「うん、そうだね」

俺たちはそのまま歩きだし、寮への道を進んでいく。

そこに、昨日までは共にいたレイがない。

この短い間に、随分馴染んだものだ、と苦笑いを浮かべながら俺は帰って行ったレイのことを思う。

また、いずれ会う日が来る。その時を、今から楽しみにしておく  
としよう。

そして、俺は寮へと戻っていく。隣のマナと、レイと過ごしたこの数日間の思い出を語り合いながら。

## 第19話 恋情（後書き）

これにて、恋する乙女終了です。

やっぱりレイの話は特別なんですかね。二話も使ってしまった。中には恋する乙女だけで何話もいつてしまつSSもあつたりしますよね。きつと、そのSSはレイへの愛があふれているに違いありません。

さて、次のお話はいつになることやら。

まだ1文字も書いていないので、予想もできません。

仕事に休みがもっとあれば、と思いますがそれは仕方ありませんからね。

待っていてくださると嬉しいです。

それでは！。

第20話 対抗（前書き）

ああ、時間かかりました。

仕事が忙しくてきつついっす。

それにしてもゼアルのアンナ可愛いかった。

関係ない前書きですみませんm（）（）m

## 第20話 対抗

ところで。俺が通っているこのアカデミアだが、正確には“デュエルアカデミア本校”と呼ぶのが正しい呼び方だったりする。

そして本校ということは、つまり分校が存在するわけ。いくつもある分校の中で、とりわけ本校生徒の認知度が高いのが“アカデミア・ノース校”である。

何故かというと、アカデミア本校とノース校は、毎年“学園対抗試合”という形で、両校それぞれの代表者同士がデュエルするというイベントが開かれているからなのだ。

普段は横の繋がりが薄いアカデミアなのだが、ことノース校に関しては、そういうわけで本校生徒にもよく知られた分校なのである。

そしてその件の対抗戦だが、いよいよ間近に迫ってきている。

昨年は学園最強と名高いカイザーが代表を務め、見事ノース校の代表に勝利を収めたそうだ。

今年は誰が代表になるのか。それは今、学園の中で最もホットな話題と言っていいたろう。

まあ、大半の予想は今年もカイザーだろうというものだったが。

昨年勝った実績があるし、俺もそれで決まりだと思っ。わざわざ他を選ぶ理由がない。

そう思って余裕をぶっこいていたのだが……どうも、他人事ではなくなりそうな今日この頃である。

なんと、教師陣の会議で今年の代表者が俺に決まったらしいのである。

突然校長室に呼ばれ、鮫島校長、クロノス先生、カイザーの三人を前にして告げられたその言葉に、俺が思わず呆けたのは仕方がないと思う。

「……なんで俺なんです？ カイザーが出た方がいいんじゃない……」

去年も勝ってるんだし。

そんな思いを込めて俺が言えば、鮫島校長が笑顔で口を開いた。

「いやね、今年はノース校が代表者を一年生にするみたいなんだよ。だから、我々も一年生を代表に選ばうとなっただけだ」

「はあ」

「それで候補を聞いたところ、君の名前が出てね。丸藤君に勝ったこともあるというし、君は一年生だ。全教師が妥当だろうと頷いたんだよ」

「シニヨールはオベリスクブルーの誇りでスーノ！ ぜひとも、我がデュエルアカデミア本校の力を、見せつけてやって欲しいノーネ！」

「ご機嫌で言うクロノス先生は、やはりオベリスクブルーから代表者が出るのが嬉しいのだろう。」

本当なら面倒だし、好き好んで受けたくはない。

十代あたりはこういうお祭りのことは好きそうだし、アイツなら二つ返事で了承するに違いない。本当なら任せたいぐらいだが……。

たぶん、無理だろうなあ。すでにカイザーにも勝っているという俺がいる以上、わざわざオシリスレッドの十代を担ぎ出そうとする教師がいるとは思えないし。

けど、さすがに強制ではないはずだし、今ならまだ断れるはず。さて、どうしたものか。

「遠也」

「ん？」

受けるか受けないかを考え、若干断ろうかなという方向に思考が傾いていた時。

不意にカイザーが俺に声をかけてきて、俺は思考からそちらへと意識を向ける。

すると、カイザーは真っ直ぐ俺の目に視線を合わせてきた。

「実は、お前の名前を出したのは俺なんだ。お前は、俺にとって後輩であると同時に友であり、良きライバルでもある。だからこそ……」

そこで、カイザーはふっと小さく笑みを見せた。

「だからこそ、お前にもアカデミア代表としてのデュエルをして欲しくてな。俺のライバルであるお前だからこそ、俺は信じてこの役を託すことができる。受けてくれないか、遠也」

「カイザー……」

まさか、カイザーがそんな気持ちで俺を推してくれたとは。

正直、面倒くさいことに巻き込みやがってコノヤロウと思っていたんだが、そんな俺を許してくれカイザー。

だが、そうだな。そうまで言ってくれたんだ。俺がその信頼から逃げるわけにはいかないだろう。そうだと。



「わかった、カイザー。代表の話、受けるぜ！　そして、俺も必ず勝ってみせる！」

「ああ、楽しみにしている、遠也」

互いに笑みを浮かべ、がっちりと握手を交わす俺たち。

そんな俺たちを、校長とクロノス先生がそれぞれうんうん、と頷いて見ているのだった。

「そんなわけで、今度の対抗戦の代表は俺になりました」

「すっげえじゃん、遠也！　くっそー、俺も出たかったのになあ！」

校長室の呼び出し後。どうやら俺の帰りを教室で待っていてくれたらしいみんな、さっきのことを報告する。

すると、十代がくーっ、と悔しがってみせる。だが、その顔は悔しそうでありながらも楽しそうである。大方、自分が出れないのは悔しいが、そのデュエルを見るのは楽しみ、といったところか。変なところで器用な奴だ。

「そうか、さすがは遠也だな。元同僚として鼻が高い」

「そうね。反対意見が出なかった、というのが遠也の実力を物語っているわ」

三沢と明日香も笑顔で俺の代表決定を祝ってくれている。

また、ジュンコとももえ、隼人に翔も、驚きながらも納得したような表情だった。

「まあ、確かにカイザーを除いたらアンタぐらいかもね、代表になれるのは」

「カイザーと引き分けたところなら、私たちも見ていますから、文句なしですわ」

「俺も友達として誇らしいんだな」

「お兄さんじゃないのは、ちょっと残念だけど……遠くくんなら、納得だよ」

実に温かい言葉をかけてくれる友人たち。

最初は気乗りしなかった代表という立場だが、こうして喜んでくれる人が周りにいるのなら、引き受けてよかったと思えてくる。

まったく、俺はいい仲間を持ったよ。全員に向けて、俺は感謝を述べた。

「ありがとう、みんな！ ……ところで」

それはそれとして、俺はじろりと彼らに感謝とは程遠い目を向ける。

呆れと疑問に彩られたそれは、みんなの手元に向けられていた。

「どうして、カードを俺の方に向ける」

各人それぞれ1枚。なぜか手にカードを持って、それを俺に向けてアピールするかのように見せつけてきている。

そのことを指摘すると、全員があははと苦しい笑いを見せた。

そんな中、不意に三沢がキリツとした顔つきになる。

「遠也、俺たちは仲間だ」

「……ああ、そうだな」

何となく展開が読めるが、一応は付き合っただけ。

三沢は頷き、言葉を続ける。

「俺は、いや俺たちは。お前のことを大切な仲間だと思っている。だからこそ、いついかなる時でも、俺たちは仲間としてお前を支えたいと思っている。そう、いついかなる時でもだ」

そこで一度言葉を切り、三沢は「だから……」と勿体つけるようにして、己が手に持っていたカードを俺に差し出した。

「デュエル中も、お前を支えたい！ というか、俺のカードが活躍する姿が見たい！ というわけで、さあ俺のカードを使え遠也！」

「最後に本音が出たな、お前！？」

あれだけ建前並べて、結局それかよ。いや、そんな気はしてたけ

ども。

そして三沢がそんな行動に出れば、その後どうなるかはわかりきっているわけで。

「やだなあ、三沢くん。それよりも遠也くんには僕のカードを……」

「俺のカードもおすすめなんだな」

「ど、どうしてもっていうなら、あたしも貸すわよ?」

「私のカードもぜひ使ってほしいですわ」

お前らもか。

手にカードを持つてる時点でわかってたけどさ。

俺がため息をつくと、それと同時に別の声が上がった。

「まったくもう。遠也が困ってるでしょう、みんな」

そう言って前に出てきたのは、明日香である。よく見れば、手にカードを持っていない。

これは、捨てる神あれば、というやつだろうか。そう思っていると、明日香がにっこりと笑って俺を見た。

「遠也、私のカードをよろしくね」

「お前もかよ！」

結局同じことを言い出す明日香に、呆れた俺が思わず突っ込む。

すると、明日香はちよつとバツが悪そうに頬を染め、「いいじゃない別に。亮の時には言い出しづらかったし……」と目をそらしながらゴニョゴニョ言っている。

カイザーが代表になった時は、やはり仲が良くても先輩であり気後れがあったのか。だが、俺の場合は友達だし気兼ねがないということかね。

だが、デッキってというのは枚数に制限がある関係上、かなり細かい調整がされていることは、デュエリストであるならば分かっているはずだ。

それこそ、数枚コンセプトと異なるカードを入れるだけで、まったく動かなくなるぐらいには。

だというのに、この場にいる全員のカードを入れるなんて冗談じゃないぞ。やる以上は俺だって勝ちたいんだ。

「まったく、お前らいい加減にしろよ。それより、俺は遠也と遠也のデッキを信じてるぜ。応援してるからな！」

「十代……ああ！」

にかつと笑って嬉しいことを言ってくれる十代に、俺も笑顔で応えてがっちりと手を握り合う。

そうだ、こいつらがこんなだろうと、俺には十代がいたじゃないか。ありがとう、親友。やはりお前は一味違っぜ。

そしてそんな俺たちの姿を見て、ちょっとした冗談だよ、と言いながらカードを仕舞っていくその他友人たち。絶対冗談じゃなかっただろ、お前ら。

ジト目を向けていると、明日香がコホンと咳払いをする。

「ともあれ、私たちも応援しているわ。頑張ってね、遠也」

「ああ。……今更、真面目ぶられてもなあ」

「う、うるさいわね」

自分でも無理があったかと思っっているのか、明日香の顔が赤い。

やれやれだが、応援してくれている気持は本物だ。誰の顔を見ても、俺が代表になることを喜んでくれている。

なら、俺に出来ることはその期待に応えてみせること。

カイザーにも勝つと約束してるんだ。見事期待に応えて、ノース校の代表にも勝ってみせるさ。

俺はそう決意すると、デッキを広げて思案に耽るのだった。

そんなこんなで夜。俺はいつも通り自分の部屋でカードを弄っていた。ちなみにマナはソファのほうで何やらぼーっとしている。

と、その時。

「あ、まただ」

「ん？」

突然マナが声を上げた。



それに反応して思わずそちらを振り向くと、マナは窓に向かって何故か人差し指を向けていた。そして、「うん、これでよし」と一人で勝手に頷いてから指を下ろす。たぶん、何かをしたと思うのだが、いったい何をしたんだろう。

疑問に思った俺はカードを弄っていた手を止め、マナのほうに寄る。

「どうした、魔貫光殺砲でも撃つたのか？」

「うーん、そんな感じかな」

なん……だと……。

冗談で言ったのに、まさかの肯定という事態に、俺の思考が一瞬止まる。

そんな俺に、マナは「えっとね」と前置きをして話し始める。なんでそんな物騒なものをぶっ放したのかの説明をしてくれるらしい。

俺としても、いきなりそんな攻撃にさらされる危険は回避したいので、しっかり聞くことにして姿勢を正した。

「実はね、どうも誰かがこの部屋を覗こうとしているみたいなんだよ」

「……は？ どういうことだ？」

予想もしていなかった言葉に、気の抜けた声が出る。しかし、いきなりそんな話を聞けば驚きもする。

この部屋に覗き？ 女子寮でもないのに、そんなことをする意味があるんだろうか。

「ちなみに、今ので2回目。あ、私が気付いてからね。ひよっとしたら、前にも何度かあったかもしれないけど」

「どついう意味？」

問いかけると、マナがあははー、と殊更明るい顔になった。怪しい。

いわく、マナがマハードに怒られた日。あれ以降、マナはきちんとマハードに言われた最低限行うように、という魔術の修業をしているらしい。その過程で、この部屋を見つめる魔の視線に気が付いたのだとか。ちなみに、媒体は蝙蝠コウモリだったそうだ。

それが最初の一回目で、今日が二回目。だから、その修業を始める前にも覗かれていたとしたらマナにはわからない、ということらしい。

「なるほど、つまりマハードがいなかったら覗かれ放題だったのか」

「うぐ……遠也の意地悪」

俺の指摘に、マナが拗ねたように唇を尖らせる。

それにはいい悪かったと返し、軽くポンとマナの頭を撫でた。

「しかし、蝙蝠の覗きねえ。明らかに堅気の匂いがしないな」

蝙蝠で覗きとか、どう考えても精霊とか魔法とかの関係である。明らかに、一般的な覗きの手法とは一線を画している。

「私も、最初の1回目は軽い警告を部屋に残しておくだけにしたんだけどね。さすがに2回目となると見逃せないから、破壊したってこと」

こう、指から魔力を撃つて。と、さっきのように人差し指を構えてみせるマナ。

一体ここはいつからジャンプの世界になってしまったのだろう。  
……あ、元からか。

「とりあえず、部屋に私の魔術で壁を作っておくね。外からの干渉を防ぐ奴」

「頼む。俺は門外漢だからな。任せるよ」

俺が言うと、マナはにっこり笑って「任せました」と小さく敬礼をして見せる。

そしてそのまま窓の方に向かうと、愛用のワンドを取り出して囁くような声で呪文のようなものを唱え始める。

どれぐらいかかるのか、と俺がその様子を眺めていると、三十秒経ったかどうかというところで「はい、おしまい」と気の抜けた声が耳朶を打った。

「はやつ、もう終わったのか？」

「うん。これで、もう覗きなんて真似はできなくなったはず」

マナは自信たっぷりだが、あまりの早業に俺はちょっと胡散臭げに見てしまう。

それに、マナは心外だとばかりに眉を寄せた。

「あのね、遠也。私はこう見えても、あのお師匠様の弟子なんだよ。並みの魔法使いよりも、ずーっと力があるんだからね」

ぶんすか怒っているのは、魔術師としてのプライドが傷つけられ

たからだろうか。

言われてみれば、マハードは最上級魔術師とも称されるほどの存在なわけで。そんな人物から長い時間に渡って手ずから指導されているマナが、並みであるはずがない。

その結論に至った俺は、すまんと素直に謝った。

もともと、マナも本気で怒ったわけではない。俺が謝れば、わかればよろしい、と満足げに頷いていた。

それに苦笑し、俺は口を開く。

「ま、何にせよ助かったよ。それでも続くようなら、また考えよう」

「うん、了解」

そう今後の対応も簡単に決め、俺は放りっぱなしになっていたカードのほうに戻る。

そしてカードを整理してケースに戻していく。すると、ちょうどしまい終わったところで不意にPDAから着信音が流れてきた。この着信音は、メールだ。一体誰からだろうと開いてみれば、そこに表示されていたのはここ最近ですっかりお馴染みになった名前だった。

「あ、レイちゃんからのメール？」

「ん、ああ」

PDAを弄っている俺を見て、マナが何気なく訊いてくる。そして、俺はそれに頷いて答えた。

そう、お馴染みの相手とは他ならないレイのことだ。あの日にアカデミアから去ったレイは、会えない代わりにこうして頻繁にメールを送ってきてくれるのである。

頻繁と言っても、その頻度は一日に一回程度で、内容もその日何があったのか、今どうしているのか、なんてたわいもないことだ。

最初は小学生とはいえキスマでされた相手からのメールに戸惑ったが、レイとしてはこうして俺と繋がりを持っていたい、ということらしい。最初のメールでそう書いてあった。

ちなみに電話にしないのは、声を聴くと緊張してしまいそうだから、だそうだ。そういえばカイザーに告白した時はえらく緊張してたもんな。

港でのあれは、帰り間際になって時間が切迫していたのと、気持ちが高ぶっていたのがうまいことプラスに働いた結果だったのだろう。このメールは、緊張せずにいられるよう、慣らしの意味もあるのかもしれない。

また、告白に対する俺からの返事は書かないでほしいということ、俺はそういったことには一切触れていない。

正直、いったいどんな対応をすればいいのかわからなかったので、レイのその提案にはホツとした。ヘタレとか言うな。

まあそういうわけで、今や俺とレイはメル友の間柄というわけだ。

お互いの近況報告のようなものだが、それでもこうしてメールをしているのは意外と楽しい。妹だと割り切って付き合えば、それはそれで微笑ましい気持ちになるからだった。

「私にも見せてー」

「あ、こら」

肩にのっかかってきたマナに形だけの注意をして、二人してレイのメールに頬を緩める。

そして返事を俺とマナそれぞれの言葉で書いて、送信する。

その後は暫く二人でダラダラしていたが、再びPDAにメール着信が入る。

差出人はやはりレイ。内容は、俺がさっき伝えた学園対抗戦の代表に選ばれたということについてだった。

それを我がごとのように喜び、凄いと素直に言ってくるその言葉に、思わず相好が崩れる。そして、読み終えたところで、俺はマナに「そろそろ寝るぞー」と告げる。

はい、と返事を返したマナが精霊化し、同じくして俺も布団に入る。

そして、レイのメールの末尾に添えられた言葉を思い出す。

「頑張つてね！」と記されたそれにやる気を刺激される俺は、やはり単純な性格なのだろう。

そんな自分自身に苦笑を浮かべながら、俺は負けられない理由が増えたな、と対抗戦に向けて気持ちを新たにするのだった。

\*

学園対抗試合当日。

俺はギリギリまで自分の部屋でデッキを組んでいた。それという



のも、やはり学園の代表としてデュエルをするのだから、情けないところは見せられないと思ったからだ。

代表である俺の醜態は、そのまま学園の株を下げることに直結する。まだ一年も経っていないが、この学園で暮らし、愛着もある。やはり、いち生徒としてそれなりに感じるものはあった。

この学園に住む全生徒に代わって出るといってもあるし、否応なしに気合も入ろうというものだ。

『遠也、そろそろじゃない?』

マナに促され、時計を見る。

確かに、そろそろ移動したほうがいい時間になっていた。

俺は教えてくれたマナにサンキューとだけ告げ、デッキケースとデュエルディスクを持つ。

そして、よし、と小さく呟いた。

「じゃ、行くか」

『うん、頑張ってね遠也!』

それに頷きを返して、俺は部屋から会場となるデュエル場に向か

う。

現場に着いた俺は、一応用意されていた控室らしきところで待機する。ちなみにマナは傍にいない。昨日の夜にあんなことがあったし、一応まわりに怪しいものがないか見ておくつもりのようなのだ。

そんなわけで、俺は一人ではーっと座っていた。そして、ノース校の代表者ってどんな奴だろうと何とはなしに考え始める。

その瞬間、ふとある記憶が脳裏に蘇った。

「あ

「遠也！ 大変だ！」

俺が思わず声を上げたと同時に、十代が騒ぎながら控室に入ってくる。

俺は思考を一時中断し、そっちに顔を向けた。

「どうしたんだ、十代。そんなに慌てて」

「こ、これが慌てずにいられるかよ！ 驚くなよ、ノース校の代表は、あの万丈目なんだ！」

「……なるほど」

やっぱりか。

さっき思い出したのは、今まさに十代が言ったことだ。そういえば、ここで万丈目がアカデミア本校に戻ってくるんだった。

まあ、思い出したところで俺がすることに変わりはないわけだが。

「……あれ？ あんまり驚かないんだな」

「いや、驚いてるよ。ちょっと、驚きすぎただけだって」

意外にも俺の反応が淡泊だったことに首を傾げる十代に、俺はそれらしいことを言っただけでどうにか誤魔化す。

それで納得してくれたのか、十代はそのことについて触れることはなかった。

「けど、油断はできないぜ。万丈目は、今までの万丈目じゃない。ノース校で勝ち上がったのは、間違いなくアイツ自身の強さだ」

「十代？」

こいつにしては珍しい、複雑そうな表情に、俺は疑問を抱く。

万丈目に関する何かを、十代は知っているのだろうか。俺もあま

り詳しいことは覚えていないから、何があったのかはわからない。

確かに、ノース校という新しい環境でゼロから始めたというのに、この短期間でトップに君臨したことは、今までの万丈目では難しいことだっただろう。

だが、十代の表情はそういうことを言っているわけではないように思える。

そんな俺の訝しげな目に気付いたのか、はっとした十代は「いや、なんでもないさ！」と一度頭を振って、にかっと笑った。

「そうそう、それと今日のデュエルはテレビで放映されるらしいぜ！　なんか万丈目の兄貴たちがそうしたんだってよ！　すっげえよなあ！」

「マジか、テレビで流れるのかよ」

マナが再び録画しないことを祈っておこう。

「なあ、遠也！　やっぱり、今日のデュエル俺と代わってくれない？」

と、十代がいきなり手を揉みながらそんなことを言ってくる。

「テレビにさ、俺も映ってみたいんだよなあ！　なあ、頼むよ遠也！」

この通り、と拝む十代。

まあ、好奇心も旺盛な十代なのだ。テレビ放映までされると聞けば、その持ち前の行動力も相まって興味の向く方に傾くのは自明の理か。

代わってやりたい気持ちもなくはないが、しかし、俺の答えは決まっている。

「ダメだ。俺もカイザーに任されてる立場だし、そう無責任なことできないからな」

「ちえ、やっぱりダメか。んじゃ、俺は精一杯応援のほうに回らせてもらっぜ！」

断られるや否や、未練を見せずに即座に切り替えられるところは、羨ましいほどの十代の長所だな。

明るく笑う十代に、俺も表情を緩める。

「ま、応援よろしく頼むぜ。お前の分も、頑張ってくるからさ」

「おう！　負けんなよ、遠也！」

互いに拳を突き出し、コツンと合わせる。

そして、俺は控室を出て対戦の場となるデュエルフィールドへと向かっていく。

万丈目にどんな事情があろうと、俺は俺で俺に出来ることをやるだけだ。こつちもお遊びでデュエルをしているわけじゃない。やるからには、本気で相対するぞ。

俺は会場に入り、そしてそのままデュエルフィールドに上がる。周りにはテレビカメラを構えたクルーが何人もいるが、それも今は気にならなかった。

既にクロノス先生は進行役としてフィールド上に立っている。そして、万丈目は俺の向かい側でノース校の生徒だろう人間と待機していた。

俺がフィールドに上がっていることに気が付いたのか、万丈目もまた同じく上がってくる。そして、距離はあるものの俺たちは互いの視線をついに絡ませた。

「久しぶりだな、遠也」

「ああ、万丈目」

万丈目は話しかけてくるが、それ以上は何も言わない。そして、

ただ始まりを待つかのように落ち着いて目を閉じて佇むのだった。

あの目立ちたがりで高飛車だった人間が、こうも変わるとは。今の万丈目は、確かに今までの万丈目じゃない。十代に言われたその言葉の意味が、こうして目の前にするとよくわかるぜ。

その時、頃合いと見たのか客席にいる本校の鮫島校長とノース校の市ノ瀬校長が立ち上がった。

「では、ここに！ デュエルアミア本校、ノース校対抗デュエル大会の開催を宣言する！」

二人がそろってそう宣言し、進行役であるクロノス先生に主役が移る。ついでに、テレビカメラもまたフィールドの俺たちのほうにレンズを向け始めた。

テレビの前ということ緊張しているらしいクロノス先生は、少々固くなりながらもマイクを構えた。

「そそ、それではこれヨーリ、デュエルアミア本校とノース校、対抗デュエルを始めるノーネ！ まず紹介するノーハ……アカデミア本校代表、皆本遠也！」

名前を呼ばれたので、一応小さく手を上げて応える。

アカデミアからの応援の声が、多少ならずともありがたい。十代

をはじめとする友人たちの声は、特に。

そしてクロノス先生は次に万丈目を紹介しようとするが、それは万丈目自身の声で遮られた。

クロノス先生をフィールド上から追いやり、万丈目はクロノス先生からではなく自分の口から自分の名を口にする。

それはまるで、自分がこれまでの自分とは違つと、明確に周囲に知らしめる宣言であるかのようだった。

「俺の名は！ 一、十！」

百、千！ と万丈目の後にノース校生徒の掛け声が続く。

「万丈目さんだ！」

そう高らかに万丈目が宣言すると、それに呼応してノース校のポルテージが上がっていく。

万丈目サンダー！ 万丈目サンダー！ と大きな声で叫んでいるが、あれはどう考えても万丈目の「さんづけしろ」という言葉を聞き間違えただけのような気がするんだが、気のせいだろうか。

まあ、万丈目本人は気に入っているのか、訂正していないみたいだから、俺が何か言うことではないのだろうか。



万丈目はそうして自身の紹介を終えると、俺に向き合ってデュエルディスクを構えた。

「いくぞ、遠也！ あのとときの屈辱、この場でお前に返してくれる！ そして、必ず俺が勝つ！」

その闘志あふれる真剣な言葉に、俺もまた真摯に言葉を返す。

「ああ、受けて立つ！ だが、今回も俺が勝たせてもらっぜ！」

そして俺も同じくディスクを構え、互いの準備が整ったところで同時に開始の合図を口にした。

「デュエルッ！」

皆本遠也 LP：4000

万丈目準 LP：4000

「先攻はこの俺！ ドロー！」

万丈目はカードを引き、そして手札からカードを選んでディスクに置く。

「俺は《マスケド・ドラゴン仮面竜》を守備表示で召喚！ そしてカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」

《マスケド・ドラゴン仮面竜》 ATK/1400 DEF/1100

「俺のターン、ドロー！」

カードを引き、手札に加える。

しかし、仮面竜か。リクルーターとして非常に有名なモンスターだ。そしてその効果は戦闘破壊をトリガーに発動する。それを考えると、できれば効果で除去したいモンスターだが、手札的に難しいか。

それにしても、ノース校の連中の盛り上がりがすごいな。まだ戦闘も起こっていないというのに、万丈目がモンスターを召喚しただけで歓声が上がるとは。

それだけ、万丈目は連中に受け入れられているということなのかかもしれない。かつての孤独だった万丈目とは違うということか。

となると、前回のように簡単にはいかないだろうな。一層気を引き締めていかなければ。

「俺は魔法カード《おろかな埋葬》を発動！ デッキから《ボルト・ヘッジホッグ》を墓地に送る」

この俺の行動に、ノース校の人間は自分からモンスターを墓地に送るなんて、と小馬鹿にした野次を飛ばす。

対して、俺の戦術に慣れ親しんだ本校の人間は、野次を飛ばす連中に対して澄まし顔だ。ようやく、墓地肥やしという概念について理解してきたらしい。

同じく、俺と対戦したこともある万丈目は苦い顔でこちらを見ている。俺のデッキは、墓地が潤沢になってこそ真価を発揮すると言っても過言ではないからな。

「そして《ジャンク・シンクロン》を召喚！ 更にその効果を発動！ 墓地のレベル2以下のモンスターを効果を無効にして特殊召喚する！ 蘇れ、ボルト・ヘッジホッグ！」

お馴染み、眼鏡をかけたオレンジの戦士族チューナーが俺の場に現れ、次いで名前の通りにボルトを生やしたネズミが墓地からフィールドに移ってくる。

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《ボルト・ヘッジホッグ》 ATK / 800 DEF / 800

しかし、やっぱりジャンク・シンクロンって機械族な気がするんだが……。一体どこを基準に戦士族にしたんだろう。まあ、関係ないけどさ。

「さあ、いくぞ万丈目！ レベル2ボルト・ヘッジホッグに、レベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

俺のフィールドにカメラが寄ってくるのを見て、この前のイベントの苦い経験が蘇る。だが、今更どうしようもない。開き直って気にしないことにした俺は、それを意識の外に放ってデュエルに集中する。

「集いし英知が、新たな未来の扉を開く。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 導け、《TG テック・ジーナス ハイパー・ライブラリアン》！」

光の中からゆっくりと歩きながら現れる、学者風でありながら科学的な装備も纏った男。そいつは手に電子ブックのようなものを持ち、バイザー越しに万丈目のフィールドを見据えた。

そして、俺のフィールド上に現れたそのモンスターの姿に、会場中 特にシンクロ召喚を見慣れていないノース校からの視線が集中する。

やはり、世間的にはシンクロ召喚はまだ滅多に見れないシステムなのである。

《TG ハイパー・ライブラリアン》      ATK/2400    DEF  
/1500

そして俺がライブラリアンを選んだ理由は簡単。このデッキに組み込まれているレベル5シンクロの中で、一番攻撃力が高いからである。

かつての万丈目のデッキを考えると、仮面竜はシナジイのないカードだ。つまり、今のデッキは前とは異なるということ。

相手の出方がわからない以上、ひとまず攻撃力が高いものを選んでおく、というのは然程間違った戦法でもないだろう。

「バトル！ ライブラリアンで仮面竜に攻撃！ 《マシンナイズ・リーダー》！」

ライブラリアンが手に持った電子ブックを展開し、その画面を仮面竜に向ける。そして、浮かび上がる様々な情報が書かれたウインドウが、そのまま波動となって仮面竜に襲い掛かった。

当然、仮面竜は破壊。それにしても、ライブラリアンの攻撃は、なんなんだろうか。そこに書かれた情報を読んで勉強しろ、ということだろうか。司書的に。

「ふん、予定通りだ。破壊された仮面竜の効果発動！ このカードが破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族を特殊召喚する！」

リクルーターの本領発揮か。

手札に効果破壊する手がなかったのは残念だったが、前向きに考えれば、ここで呼び出すモンスターによって万丈目のデッキの傾向はある程度読めるはず。

そういう意味も込めて、俺は万丈目の行動に注目する。

無論、注目しているのは俺だけでなく会場中の皆とテレビカメラもだ。そんな中、万丈目は高らかに声を上げた。

「来い、伝説の一角！ 《アームド・ドラゴン レベル3》！」

カードを置くと同時に、呼びかけに応えるようにフィールドに現れる、小柄なドラゴン。

幼生体のようなでありながら、しかしどこか厳つい面持ちは、さすがにドラゴン族といったところか。

そいつは両拳をボクサーのように構えると、そのままフィールドで静止した。

《アームド・ドラゴン　LV3》　ATK/1200　DEF/900

アームド・ドラゴンか。万丈目の奴、そんなカード手に入れてたんだな。

俺が呑気にそう考えていると、会場からワツと大きな歓声が上がった。突然のそれに思わず驚く。い、一体なんだってんだ。

「レベルアップモンスター……！　LVを上昇させていくことで、より強力な能力と効果を手に入れていく特殊なカード群の一種だ！　伝説ともいわれる非常に珍しいカードだが、万丈目はいったいどこで……」

三沢の説明くさいセリフが聞こえてくる。が、そのおかげで俺の疑問は氷解した。

この世界では、どうやらレベルアップモンスターというのは、非常に珍しいレアカードのようだ。どつりで、ここまで盛り上がるわけである。

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

これで俺のターンは終了だ。

さて、LV3のアームド・ドラゴンが場にいる状態で向こうにターンが移った。ということは……。

「俺のターンだ、ドロー！　そしてこのスタンバイフェイズ、アームド・ドラゴン　LV3は更なる進化を遂げる！　現れる、《アームド・ドラゴン　LV5》！」

万丈目のスタンバイフェイズを迎えたことにより、アームド・ドラゴンの姿がより凶悪に変貌していく。

身体の色は淡い紫から赤黒く染まり、至る所に円錐型のトゲが生えている。無論その相貌も強面になり、体格も比べ物にならない。

まさに進化した、というべき姿でソイツは万丈目の下に現れた。

《アームド・ドラゴン　LV5》　ATK/2400　DEF/1700

「そして俺はアームド・ドラゴン　LV5の効果を使う！　手札からモンスターカードを墓地に送り、そのモンスターの攻撃力以下の相手モンスター1体を破壊する！　俺は攻撃力2400の《ヘルカイザー・ドラゴン》を墓地に送る！」



ヘルカイザー・ドラゴン……デュアルモンスターか。そういえば、この時期にもうデュアルって出てるんだよな。まあ、登場したのが一年前ということから、俺の影響という可能性大だが。

「ライブラリアンを効果破壊だ！ 喰らえ、《デストロイド・パイ  
ル》！」

宣言を受け、アームド・ドラゴンの身体中についた鋭いトゲがミ  
サイルのように飛び出し、その全てがライブラリアンへと降り注ぐ。

ライブラリアンの攻撃力は2400。ぎりぎり以下のラインに入  
るので、防ぐ術はないままライブラリアンは破壊された。

「くっ……！」

まさか、攻撃力2400のライブラリアンを破壊できる攻撃力の  
カードが手札にあったとはな。さすがのドロー力か。

「バトルだ！ アームド・ドラゴン LV5で直接攻撃！ダイレクトアタック 《ア  
ームド・バスター》！」

「畏発動！ 《ガード・ブロック》！ 戦闘ダメージを0にし、俺  
はデッキからカードを1枚ドローする！」

俺に向かって振り下ろされた豪腕は、見えない壁に阻まれて届かない。攻撃を止められたアームド・ドラゴンはそのまま自陣へと戻っていった。

「ちっ、防がれたか。ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

カードを引き、手札に加える。これで手札の合計は5枚。だが、場には何も無いという極めて危険な状態だ。

それに加え、あちらには単体除去能力に非常に優れたアームド・ドラゴンがいる。まったくもって、厄介な状況である。

だが、一つはつきりしたことがある。

あいつのエースがアームド・ドラゴンだというのなら、今回のデュエルで俺の切り札となるカードはあのドラゴン。

そいつをいかに早く呼び出すかが、勝敗を分ける重要なポイントになる。そう、俺は確信した。

「モンスターをセット。更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

俺のターンが終わり、万丈目にターンが移る。

見るからに守りを固めてきた俺に、万丈目が鼻を鳴らしてカードを引く。

「俺のターンだ、ドロー！ そして、バトルだ！ アームド・ドラゴン レV5でセットモンスターに攻撃！ 《アームド・バスター》！」

アームド・ドラゴンがその両腕を合わせ、両拳が上から裏側表示のカードに叩きつけられる。

それにより、カードが反転。現れたモンスターの畳まれた翼に拳が直撃するが、そのモンスターはびくともせず、その場に存在したままだった。

《シールド・ウィング》 ATK/0 DEF/900

その事態に、万丈目が驚いた様子で目を見開く。

「なに！？ なぜ破壊されない！」

「シールド・ウィングの効果だ。こいつは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されないのさ」

俺の説明を聞いた万丈目は、悔しそうに唇をかむ。

アームド・ドラゴン　LV5は相手モンスターを戦闘で破壊した時にレベルが上がる。万丈目としてはそれを狙ったのだろうが、戦闘破壊耐性を持っているとは予想していなかった、ということだろう。

そのように戦闘破壊には滅法強いシールド・ウイングだが、今回の相手はアームド・ドラゴン。本来の相性は最悪である。シールド・ウイングは効果破壊に対しては無力だからだ。

今回は防ぐことができたが、恐らく次のターンで確実に対処してくるだろう。

「ちつ、忌々しい。だが、レベルモンスターがレベルアップするために必要な手段は、何も一つだけではない」

万丈目はにやりと笑ってそう言い、手札から1枚のカードを手に取りつた。

「魔法カード《レベルアップ!》を発動! 「LV」を持つモンスター1体を墓地に送り、そのカードに記されたモンスターを召喚条件を無視してデッキ・手札から特殊召喚する! ……つまり、アームド・ドラゴンはモンスターを破壊することなく更なる力を得るということだ! 来い、《アームド・ドラゴン　LV7》ッ!」

天高くカードを掲げ、それをディスクに置く万丈目。

そしてその瞬間、アームド・ドラゴン LV5の身体が光に包まれ、その中で徐々にその体躯がより巨大なものへと変化していく。

成人男性を一回り上回る程度だった大きさは、十数メートルはあろうかという巨躯へ。そしてその身体には更に鋭利な刃物がさながら鱗のように存在し、その巨大さと相まって、もはや全身が武器と言っても過言ではない。

アームド・ドラゴン。その名に相応しい凶悪なモンスターが、万丈目のフィールドで産声を上げた。

《アームド・ドラゴン LV7》 ATK/2800 DEF/1000

威圧感たっぷりのその姿に、さすがに気圧される。

だが、《レベルアップ!》は正規の手順で召喚されたとは見なされない。そのため、《レベルダウン!?》を使ったとしても、墓地からLV5を復活させられないというデメリットがある。

それでもなお実行してきたということは、正規でのレベルアップを成すタイミングを逃したが、ここでどうしても召喚しなかったのか。あるいは、それだけ自信があることの証左だろうか。

そして、まるでそれを肯定するかのように、アームド・ドラゴンの足元で腕を組んでこちらを見据える万丈目の姿がそこにあった。

「どうだ、遠也！　これが伝説のレベルモンスターだ！　この圧倒的な力で、俺は……俺自身の力を証明し、貴様に勝つ！」

万丈目は、自分に言い聞かせるかのように言い放つ。

周囲は万丈目のそんな言葉に盛り上がっているが、どうにもそれを言う万丈目自身の表情が暗いのが気になる。ここは本来、自信満々に宣言する場面だ。少なくとも、俺が知る万丈目の性格ならそうするだろう。

だが、万丈目はそうしない。絞り出すように言った今の言葉は、あくまで俺の主観でだが、万丈目らしくないと感じられるものだった。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

そんな思考のさなか、万丈目がターンを終えて俺にターンが回ってくる。

「俺のターン、ドロー！」

手札は4枚……だが、まだ上手く揃わないか。

「俺は《カードガンナー》を守備表示で召喚！そして効果を発動し、デッキトップからカードを3枚墓地に送り、エンドフェイズまでその枚数×500ポイント攻撃力をアップさせる！ターンエンドだ」

《カードガンナー》    ATK / 400    1900    400    DEF  
/ 400

アームド・ドラゴン    LV7を倒せるモンスターを呼び出せないなら、今はこうして耐えるしかない。攻撃力2800ってのは、意外と厄介だな。

「俺のターン、ドロー！ふん、どうした遠也。防戦一方じゃないか！」

「さてね。俺はここから逆転するから、問題ないさ」

俺がそう軽口を叩くと、万丈目はちつと舌打ちをした。

「その強がりも、ここまでだ！俺はアームド・ドラゴン    LV7の効果を発動！手札からモンスターカードを墓地に送り、その攻撃力以下の相手モンスター全てを破壊する！俺は手札から攻撃力1400の《ドラゴンフライ》を墓地に送る！さあ打ち砕け、《ジエノサイド・カッター》！」

その命令に応えるように、アームド・ドラゴンの腹部についた刃状の突起が激しく上下に動き始める。そして、アームド・ドラゴンは突進し、その巨体で俺のフィールドのモンスター2体全てをその腹部に押し付けた。

その高速振動する刃に2体は耐え切れず、共に破壊されて消えてしまう。

そして、後に残ったのはがら空きの俺のフィールドだけである。

「くっ……カードガンナーが破壊されたことにより、俺はデッキからカードを1枚ドロウする！」

「無駄な足掻きだ！ いけえ、アームド・ドラゴン L V 7 ! 》  
アームド・ヴァニッシャー》！」

アームド・ドラゴンが腕を振り上げ、その腕が凄まじい速さで回転を始める。生物にあるまじき動きだが、アームドの名の通り身体が武器と化しているからこそその芸当なのだろう。

そして、その腕を俺に向かって容赦なく振り下ろしてくる。

「畏発動！ 《くず鉄のかかし》！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、このカードは再びセットされる！」

「それで防いだつもりか、遠也！ 畏発動、《リビングゲデッドの呼



び声《！ これにより、墓地からアームド・ドラゴン L V 5を復活させる！ そしてL V 5の追撃！ 喰らえ、《アームド・バスター》！》

「ぐあああつ！」

くず鉄のかかしが防げるのは、あくまで1回の攻撃のみ。リビングデッドの呼び声でバトルフェイズ中に蘇ったアームド・ドラゴン L V 5の攻撃を防ぐ術は、どこにもなかった。

遠也 LP：4000 1600

一気に俺のライフが削られ、ノース校側がわっと盛り上がる。

そしてそれにあわせて大きくなる本校からの応援の声と、校長の必死な呼びかけ。

やれやれ、なかなか厳しい状況だ。手札にチューナーがない、というのはやはりこのデッキにとっては本当に死活問題だな。まさに今、それを実感している。

だが、こういう状況もあるからこそデュエルは面白いのだ。予想もできない逆境。そうさせる強い相手。それがあから、俺たちはデュエルをするのだ。

それをどう覆すか。その相手にいかに勝つか。そのドキドキ感とワクワク感。これがあるから、やはりデュエルは面白い。

そう考え、自然と口元に浮かぶ笑み。そしてその気持ちの赴くままに、俺はデッキに指を添える。万丈目がエンド宣言をした後、すぐに引けるように、だ。

……だが、万丈目はその前に何事かを小さく呟いていた。

注意深く聞かなければ、決して聞き取れない。そんな音量。

「俺は、負けられない。勝って、勝って、勝って、兄さんたちに証明するんだ。俺が無価値ではないことを。万丈目家の恥さらしではないことを。だから、この勝負……何が何でも、俺が勝つ！俺はこれで、ターンエンドだ！」

「万丈目……」

最後まで力は強く口にし、俺を強く睨みつける万丈目。それに、俺は何とも言えない視線を返す。

きつと、万丈目は俺が今の言葉を聞いたとは思っていないだろう。それほどまでに、小さな声だった。ただ、偶然にも俺の耳に届いた、それだけのこと。

確か、このテレビ放映を企画したのが万丈目の兄貴たち、だったか。なるほど、つまりこの場はその兄貴たちが整えた万丈目を活躍させる場。

そして、察するに万丈目は家での地位が低いのだろう。だからこ

そ、こうして家族の中での居場所を守るため、兄たちの顔を汚すまいと必死になっている。

何ともやりきれない話だ。俺のように、家族に会いたくても会えない奴がいる一方で、万丈目のように会えるのに心が通じ合っていない奴もいる。

同情か、憐憫か。万丈目に対して、そんな気持ちが全くないと言ったら嘘になる。

だが、当たり前のことかもしれないが、それはそれ、これはこれだ。

デュエルにそういった事情を持ち込み、手を抜いて勝ちを譲ったとして、果たして万丈目は喜ぶだろうか。

もし俺なら、喜ばない。そして、万丈目もまた一人のデュエリストだ。その誇りがある以上、決して喜ばないだろう。その程度には、万丈目のことをわかっているつもりだ。

だからこそ、俺がやることは変わらない。全力でデュエルをする。ただそれだけだ。

「俺のターン、ドロー！」

来たか。

さっき引いた1枚と合わせ、最高のカードが来てくれた。

「俺は《シンクロン・エクスペローラー》を召喚！ 更に、効果により墓地の「シンクロン」と名のつくチューナー……ジャンク・シンクロンを蘇生する！ そして《死者蘇生》を発動！ カードガンナーを復活させる！」

《シンクロン・エクスペローラー》 ATK/0 DEF/700

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《カードガンナー》 ATK/400 DEF/400

「カードガンナーの効果で、デッキから3枚のカードを墓地に送る」

《カードガンナー》 ATK/400 1900

ここで落ちたのは、レベル・ステイラー、クイック・シンクロン、異次元からの埋葬……。よし、悪くはない。

だが、カードガンナーの効果はおまけだ。本来の狙いは、無論シンクロ召喚にある。

「くるか、シンクロ召喚……！」

「ああ、いくぞ万丈目。反撃開始だ！ レベル2シンクロン・エクスプローラーとレベル3カードガンナーに、レベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は8になる。

さあ、まずはこいつからだ。

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》    ATK / 2600    DEF / 2500

お馴染み、スーパーロボットにしか見えない外見を持つ戦士族モンスターである。最近思ったんだが、こいつはきつと、戦隊物のロボットなのだ。だから戦士族なのだろう。たぶん。

それはさておき、早速デストロイヤーの頼れる効果を俺は使う。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ シンクロ召喚に成功した時、チューナー以外の素材としたモンスターの数まで、フィールド上のカードを選択して破壊できる！ 素材としたチューナー以外のモンスターは2体！ よって2枚まで破壊できる！ 俺は万丈目のアームド・ドラゴン    LV7と伏せカードを選択する！ 《タイ

「ダル・エナジー！」

デストロイヤーの胸部装甲から放たれるビームのような光。それによって万丈目の場のカードが2枚墓地へと消えていく。

アームド・ドラゴン LV7も消滅し、伏せてあった《攻撃の無力化》もその役目を果たさぬままフィールドから去る。

これで、万丈目の場にはアームド・ドラゴン LV5が残るだけとなったわけだ。

「バトル！ ジャンク・デストロイヤーでアームド・ドラゴン LV5に攻撃！ 《デストロイ・ナックル》！」

「ぐうっ……！」

振りぬかれた鉄の拳がアームド・ドラゴンを直撃し、破壊する。

そしての差分が万丈目のライフから引かれた。

万丈目 LP：4000 3800

まだまだ掠り傷といえるようなダメージ。だが、アドバンテージは完全に上回った。我が方の反撃成功せり、といったところかね。

そして、俺のターンはまだ終わりではない。バトルフェイズが終わり、メインフェイズが再び訪れる。その瞬間、俺は1枚のカードを手に取っていた。

「メインフェイズ2に、魔法カード《シンクロキャンセル》を発動！ フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を融合デッキに戻し、そのモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、その一組を自分フィールド上に特殊召喚することができる！ ジャンク・デストロイヤーをデッキに戻し、シンクロン・エクスプローラー、カードガンナー、ジャンク・シンクロンを特殊召喚！」

《シンクロン・エクスプローラー》 ATK / 0 DEF / 700

《ジャンク・シンクロン》 ATK / 1300 DEF / 500

《カードガンナー》 ATK / 400 DEF / 400

再び俺の場にチューナーと素材モンスターが揃う。

もちろん、レベルの合計は8。そしてこれから召喚するのは、アームド・ドラゴンの持つ効果によって天敵ともなりうるモンスターである。

「そして再びシンクロ召喚を行う！ レベル2シンクロン・エクスプローラーとレベル3カードガンナーに、レベル3ジャンク・シン

クロンをチューニング！」

3体のモンスターが飛び上がり、ジャンク・シンクロンが形作つた3つの光の輪を5つの星と化した2体が潜り抜けていく。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！」

瞬間、光が溢れてフィールドを白く染め上げる。

そして、その中から1体のドラゴンが徐々にその姿を見せ始めた。

「シンクロ召喚！ 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

直後、光の中から輝く粒子を伴って飛び立つ白銀のドラゴン。ドラゴンとしてはスマートな体格に、青白く光を照らすその身体は、幻想的の一言に尽きる。

シグナーの竜が1体。その美しさは、会場中が思わず注視するほどに鮮烈だった。

《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500 DEF/2000

そしてスターダスト・ドラゴンはゆっくりと俺のフィールド上で



静止する。滞空する様を表現しているのか、時折小刻みに動く翼が何ともリアルである。

そして、万丈目は俺のフィールドに現れたスターダストを見て、鼻を鳴らす。だが、それは嫌味の気配がしない、純粋な感嘆からくるもののようにだった。

「ふん……スターダスト・ドラゴン。ペガサス会長がシンクロ召喚の開発と並行して手ずから作り上げたという、世界にそれぞれ1枚しかない六竜。その1体が」

万丈目が自分の知識を確認するかのように言う。すると、その言葉がきっかけになったのか、途端にそこかしこから歓声が上がった。

そのどれもが、世界に1枚しかないカードをこの目で見られるなんて、というスターダストのレア度からくる興奮のようだった。

やはり、あのイベントの後に放送されたテレビの特集なんかの影響しているのだろう。ホント、どこから情報が漏れたのか知らないが、厄介なことをしてくれたものだ。

ふう、と一息をつき。俺は改めて万丈目に向き直る。

熱のひかぬ会場の声を背に受けながら、手札からカードを手に取ってディスクに差し込んだ。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

さあ、来い万丈目。

俺が挑発的に目を向ければ、万丈目は鋭い視線を返してくる。その目には、何が何でも勝つ、そんな強迫観念にも似た強い意志を感じさせる迫力があつた。

「俺のターン、ドロー！」

万丈目がカードを引く。

次に万丈目がどんな手を打ってくるか。それによって、このデュエルは思いもよらぬ方向へと動くかもしれない。

スターダスト・ドラゴンを召喚したからといって、俺が勝てるというわけではない。そんな単純なデュエルを、今の万丈目がするとは思えなかつた。

だから、俺は万丈目がとる行動に目を光らせた。

何をしてきても、必ず勝つ。万丈目の決意に負けないよう、そう強く思いながら。



## 第20話 対抗（後書き）

どうにか投稿できたー。

デュエルの決着は次回に持ち越しです。書いていたら、長くなってしまうので^^；

しかし、デュエルシーンにかなり苦労しました。

どうにも上手く書けず、消しては書いての繰り返しでしたね。やはり時間が空くと、どうしても感覚が鈍ってしまうようです。

おかしな点があったらゴメンナサイ。

そしてやっと来ました、万丈目さん。

さんをつけないとデコ助野郎と呼ばれてしまう万丈目さんですが、サンダーならOKという独特の感性の持ち主です。

この万丈目戦、つまり対抗試合ですが、これが終われば一年生も佳境に入ってきてますね。

正直今は書く時間が心もとない状態ですが、ゆっくりでも書いていきたいと思います。

それでもお待ちいただけると嬉しいです。

それでは。

## 第21話 帰還（前書き）

対抗デュエル編完結です。

前回のデュエルの続きから始まります。

どうにか一週間以内に投稿できた……。

## 第21話 帰還

遠也 LP：1600

手札1 場・《スターダスト・ドラゴン》、伏せ2枚

万丈目 LP：3800

手札4 場・なし

俺の場にはスターダストと伏せカードが2枚。対して、万丈目は手札こそ4枚あるが、場には何も無い。

間違いなく万丈目がピンチであるこの状況で、向こうにターンが移り、万丈目は引いたカードを手札に加えた。

さて、どういう手で来るのか。俺は油断なく万丈目の動向に注意を向けた。

「俺は《強欲な壺》を発動し、2枚ドロ！そして墓地の風属性モンスター《ドラゴンフライ》を除外し、手札から《シルフィード》を特殊召喚する！」

《シルフィード》 ATK/1700 DEF/700

長身で白い装束に身を包んだ男性が降り立つ。手に持った芭蕉扇は、風で連想される天狗を意識したものでだろうか。

天使族ではあるが、風属性というアームド・ドラゴンと同じ属性。そしてその効果ゆえにアームド・ドラゴンとは抜群の相性を誇る。リリース要因、またもう一つの効果である戦闘破壊された際のハンデス効果も併せて使いやすいモンスターだ。

「更に、俺はシルフィードを生贄に捧げ《アームド・ドラゴン LV5》を召喚！」

《アームド・ドラゴン LV5》 ATK/2400 DEF/1700

シルフィードが光の粒となって消え、代わりに再び現れるアームド・ドラゴン LV5。その姿に、ノース校のほうから大きな声が上がリ、一層の盛り上がりを見せた。

しかし、やっぱりこの短期間でここまでノース校の人間の心を掴んでいるとは。改めて思うと、凄いな万丈目。心の中でこの状況の中心にいる万丈目に感嘆しつつ、俺は万丈目の行動を見据えた。

「更に《サイクロン》を発動！ お前の場の《くず鉄のかかし》には消えてもらおう！」

「くっ……！」

攻撃力を1度だけ、しかし何ターンも防いでくれる防御の要がここで破壊されるか。

自身が信頼するモンスターを呼び出し、かつその攻撃を防ぐ術まで除去してくる。このあたりは、やはり流石と言うほかない。

そして、アームド・ドラゴンを出して、くず鉄のかかしを除去したということは、ここで決めるつもりか万丈目。

「いくぞ、遠也！　いかに貴様が上級モンスターを呼び出そうと、俺が何度でも破壊してくれる！　アームド・ドラゴン　LV5の効果発動！　手札からモンスターカードを墓地に送り、その攻撃力以下の相手モンスター1体を破壊する！　俺は手札から攻撃力2800の《可変機獣　ガンナードラゴン》を墓地に送り、スターダスト・ドラゴンを破壊する！　《デストロイド・パイル》！」

アームド・ドラゴン　LV5が身体中のトゲが発射させようと、ぐっつと身体に力を込める。

それを見て、ああっと思わず声を漏らす本校生徒。同じく絶望的な表情になる鮫島校長。

これが通れば俺の場にはモンスターがいなくなり、更にくず鉄のかかしという防御カードもすでに破壊されてしまっている。



もう1枚の伏せカードがあるとはいえ、それが攻撃を防ぐ類のものでなかった場合、ゲームセットが確実となる状況である。

確かに、それだけ見れば絶望的といえる中にいると言っていいだろう。

しかし、俺の場にいるのは他にもない、スターダスト・ドラゴンである。ゆえに。

「それを待っていた」

「なに!？」

「確かにアームド・ドラゴンの効果は強力だ。除去効果に加えその攻撃力。容易に勝てるものじゃない。だが」

単体制圧能力という意味では、屈指と言ってもいいだろう。こちらの世界で伝説と呼ばれるのも分かるかもしれない。

だが、しかし。

「スターダスト・ドラゴンの効果はその上を行く! この瞬間、スターダスト・ドラゴンの効果発動!」

俺がそう宣言すると、応えるようにスターダストが嘶いた。いなな

「フィールド上のカードを破壊する効果を持つ魔法・罠・効果モンスタアの効果が発動した時、このカードを生贄に捧げる事でその発動を無効にし、破壊する！ 《ヴィクテム・サンクチュアリ》！」

「な、なんだとおツ！？」

万丈目の驚きを余所に、スターダストが先程以上に甲高い声を響かせ、身体中が発光していく。

そして、やがてその身体が徐々に光の粒子となって消えていくと同じくして万丈目のフィールドのアームド・ドラゴン レV5もまたフィールド上からその姿を霞のように消していくのだった。

「なっ……くっ……！」

これで、万丈目のフィールドには何もなく、ただ手札が1枚あるのみとなった。

アームド・ドラゴン レV5を召喚した時点では予想もしていなかっただろうこの状況に、万丈目は悔しげに歯を噛んで、絞り出すように声を出した。

「……ターンエンドだッ！」

そしてエンド宣言をしたその瞬間、俺が再び声を上げる。

「この瞬間、スターダスト・ドラゴンの効果発動！ 自身の効果で墓地に送られたターンのエンドフェイズ、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する！ 再度飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

「なあっ……！？」

《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500 DEF/2000

墓地から光に包まれて飛び出し、再び俺のフィールド上へと舞い戻る星屑の輝き。

その光景を前に万丈目は驚きのあまり声もないのか、ただ目を見張ってスターダスト・ドラゴンを見つめていた。

\*

そして、同じく驚いているのは、万丈目だけではなかった。

会場にいる誰もが、スターダスト・ドラゴンのその効果に、程度の差はあれ驚愕を隠せないでいたのだった。

それは遠也の友人たちも例外ではなく、観客席で一塊になっていた彼らは、初めて見るスターダストの効果に揃って声を失っていた。

そんな中、三沢が不意に口を開く。

「……前にペガサス会長とのデュエルで出した時は、ただフィニッシュャーとして出てきただけだった。だが、あの遠也が信頼を寄せるほどだ。当然、何かしらの効果を持っているだろうと思っただけが……」

三沢はそう言いながらフィールドに向ける視線を外さない。遠也の姿と、その前に彼を守るようにして浮かぶスターダスト・ドラゴン。それを見て、一筋の汗が三沢の頬を伝った。

三沢の隣に座る明日香も同じような感想を抱いたようで、彼女もまた真剣な表情で三沢の言葉に首肯した。

「ええ。でも、まさかあれほどの効果だったなんて……」

「破壊効果の発動そのものを無効にし、更に破壊。その上、エンドフェイスに自己蘇生する効果まで持っているとはな……」

強い。

明日香に続いて効果を確認するように述べたカイザーは、最後にそう簡潔にスターダスト・ドラゴンを表現した。

そしてその言葉に異を唱える者はそこにおらず、誰もが無言でその言葉に頷く。

実際、遠也が元々暮らしていた世界においても、スターダストはその優秀な効果により、エクストラデッキには必須とされていた時代もあつたほどだ。

様々なカードの登場等により、後に必須とまでは言われなくなつたが、それでも高い採用率であることに間違いはない。

この時代よりもはるかにカードプールが豊富であり、かつ戦術も洗練されていた遠也の環境。その中でそこまで評価されていたカードが、この時代において優秀と評価されないはずがなかった。

「これで、万丈目のフィールドは空っぽになつちまつたな」

おもむろに、十代がフィールドに目を向けてそう口にする。

それに、隣の翔が頷いた。

「ライフポイントにはまだ差があるっす。けど……」

「ああ。流れが変わってきたぜ」

十代はそう言うと、遠也に目を向ける。

白銀に輝く竜に守られるようにそこに立つ遠也。そして、向かいに立つ万丈目にも視線を移す。その姿に、十代は先程トイレに行った際に万丈目がその中で口にしていたことを思い出していた。

勝たなければ。勝たなければ、自分は評価されない、認めてもらえない。そんな言葉を吐露し、悩みに人知れず押し潰されそうになっていた万丈目。

しかしそれを悟らせず、アカデミアにいた頃から自分に絶対の自信を持って振る舞ってきた万丈目に、十代は純粹なる敬意を抱いていた。

すげえ、と素直にそう思う。崩れ落ちるようなプレッシャーを受けながら、万丈目は逃げずに立ち向かっているのだ。だからこそ、十代は凄いとそれを思う。

だから、十代の心境は遠也にも万丈目にも頑張っしてほしいという

実に欲張りなものとなっていた。

どちらを応援すればいいかなんて、十代にはわからない。そんな小難しいことを考えるのは苦手なのだ。なら、どうすればいいのか。簡単だ、自分がやりたいようにすればいい。

十代はたいして悩まずに即座にそんな結論を出す。すなわち。

どっちも応援したい。なら、どっちも応援すればいいだけだ。

そう答えを出した十代は、ごく普通にフィールドに向かって応援の声を上げた。

「いっけー遠也！ 万丈目も、気合見せろー！」

何故か万丈目まで応援する十代に、周囲の人間がぎょつとして十代を見る。

なんで敵の応援してるんだこいつは、と言いたげなその視線に、しかし十代はまったく堪えない。

その声が届いたのか、遠也と万丈目まで十代を見ている。それに気づいた十代は、にかつと笑ってガツチャの決めポーズを二人に見せる。

それが十代なりの、二人のライバルに対する気持ちだった。

\*

「ふん……万丈目さん、だ！ 馬鹿が！」

万丈目が、十代の応援の声を受けて舌打ちと共にそう吐き捨てる。

その姿に苦笑しつつ、俺は十代の応援にやれやれと肩をすくめる。十代が万丈目の何を知っているのか俺には分からないが、きっと十代にとって万丈目は敵ではないのだろう。

万丈目は敵視しているが、十代にとってはいいところライバル、もしくは気難しい友人、といったところか。まったく、平和かつ羨ましい性格だよ。

「俺のターン、ドロー！」



さて、万丈目込とはいえ応援された身としては頑張らないとな。

「バトル！ スターダスト・ドラゴンで直接攻撃！<sup>ダイレクトアタック</sup> 響け、《シユ  
ーディング・ソニック》！」

「ぐああッ！」

万丈目 LP：3800 1300

スターダストの口から放たれた真空の砲撃が、万丈目を呑みこんでそのライフポイントを大きく削り取る。

これでライフ差はほぼなくなった。ここで追撃ができれば勝ちが決まっていたのだが、残念ながら手札は2枚しかなく、その中にこれ以上攻撃を行うことのできるカードは存在していなかった。

ゆえに、このターン俺にこれ以上出来ることは何もない。

「ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

万丈目はカードを手札に加えると、その中の1枚を手にとった。

「魔法カード《トレード・イン》を発動！ 手札からレベル8モン  
スター《闇より出でし絶望》を墓地に送り、デッキから2枚ドロ  
ー！ 更に《天使の施し》！ 3枚ドロし、2枚捨てる！」

単なる手札交換。だが、確かに手札がその2枚じゃあ、交換しな  
ければ何もできないだろう。しかし、ここでトレード・イン、その  
うえ天使の施しまで手札に来るとは。

そして最終的に残った2枚のカードを見て、万丈目はその顔を擽  
猛な笑みで彩った。余程いいカードを引いたらしい。

「くく……貴様がせっかく出したエースも、これで終わりだ！ 俺  
は《死者蘇生》を発動！ 墓地のアームド・ドラゴン LV5を復  
活させる！」

《アームド・ドラゴン LV5》 ATK/2400 DEF/1  
700

三度その姿をフィールド上に晒すアームド・ドラゴン LV5。  
万丈目のデッキがこいつを中核にしているのはわかるが、一度のデ  
ュエルで三度も出すとは、なかなか出来ることじゃない。

しかし、それでもその効果はスターダストによって封じられ、攻  
撃力も届かない。これでは万丈目がああまで自信ありげにするには

足りないだろう。

つまり、決め手はあの残り一枚となった手札。そして、この状況でスターダストを突破する手段といえば……。

「更に手札から《レベルアップ!》を発動! 再び進化、アームド・ドラゴン レV7ツ!」

《アームド・ドラゴン レV7》 ATK/2800 DEF/1000

LV5の身体が光り、その身体が更なる巨体へと変貌していく。そうして再び現れる、アームド・ドラゴンの完全体。さすがに手札も尽きたため究極体であるLV10までは出てこなかったものの、それでもこの状況でLV7まで出てくるとは思わなかった。

そしてスターダストの攻撃力2500を上回る数値を持つLV7。こつも早くスターダストを超えてくるとは、感嘆するほかない。

「いけ、アームド・ドラゴン レV7! スターダスト・ドラゴンに攻撃! 《アームド・ヴァニッシャー!》!」

アームド・ドラゴンがその腕を回転させ、その圧倒的な膂力でもつてスターダストを粉碎せんと迫ってくる。

それを受けて、俺は攻撃が直撃する前に口を開いた。

「この瞬間、墓地の《ネクロ・ガードナー》を除外し、効果発動！  
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

「ちっ、防がれたか。俺はこれで、ターンエンド！」

最初のカードガンナーの効果で墓地に行っていたカードだが、上手く助けてくれた。破壊されなければ、まだ次に繋げることもできる。

「俺のターン、ドロー！」

来たか、このデュエルを終わらせることのできるカードが。

万丈目の場にはアームド・ドラゴン レV7が1体。そして手札は0で伏せカードもない。ならば、こちらの攻撃を防げる道理もない。

「いくぞ、万丈目！俺は《ジャンク・シンクロン》を召喚！そしてその効果で墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚する！」

《ジャンク・シンクロン》 ATK/1300 DEF/500

《レベル・ステイラー》 ATK/600 DEF/0

レベルの合計は4となり、キーカードの召喚条件は満たされた。

「レベル1レベル・ステイラーに、レベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし勇気が、勝利を掴む力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 来い、《アームズ・エイド》！」

《アームズ・エイド》 ATK/1800 DEF/1200

鋭く鋭利な爪を持った籠手のようなモンスター。その召喚に成功し、そしてすぐさま俺はその効果を発動させる。

「アームズ・エイドの効果、1ターンに1度、メインフェイズにこのカードを装備カード扱いとしてモンスターに装備できる！ そして装備したモンスターの攻撃力が1000ポイントアップ！」

アームズ・エイドが光の粒子となり、スターダスト・ドラゴンに降り注ぐ。星屑の名を冠するドラゴンが光を纏っていく様は、何とも言えない神秘性を感じさせる。

そしてその光がスターダストの全身を包み終わった時。その攻撃力はアームド・ドラゴンを上回る値へと上昇していた。

《スターダスト・ドラゴン》 ATK / 2500 3500

「いけ、スターダスト・ドラゴン！ アームド・ドラゴン L V 7  
に攻撃！ 《シューティング・ソニック》！」

スターダスト・ドラゴンが再び口から圧縮空気の砲弾を発射させる。

アームズ・エイドには、装備したモンスターが相手モンスターを破壊した時、その破壊されたモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える効果がある。

スターダストがアームド・ドラゴンを破壊しただけではライフが600残る計算になるが、その効果により、万丈目のライフは0を刻む。

これで、俺の勝ちだ。

俺がそうして勝利を確信していると、万丈目が大きな声を出した。それも、こちらが全く予想もしていなかった内容の。

「この瞬間、墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果発動！」

「っな！ なにい！？」

「このカードをゲームから除外し、相手モンスターの攻撃を1度だ

「無効にする！」

墓地のカードから闇が広がり、それが壁となってスターダストの攻撃を受け止める。

攻撃を止められてしまったスターダストは、止む無く俺のフィールドに帰ってきた。……が、それよりもまさか止められるとは思っていなかった俺は、思わず一瞬呆けた。

まさか万丈目のデッキにもネクロ・ガードナーが入っているとは、さっきは俺も使ったし、それに十代も使っているカードだ。その便利さは元の世界で制限カードにまでなっていたこともあることから折り紙つきである。

その有用性から万丈目が使ってもおかしくはないが、なんつータイミングで発動してるんだ。これ、逆転フラグになったりしないだろうな。嫌な予感しかしないんだが。

畜生、こんなことなら《ダブル・アップ・チャンス》でも入れておくんだった。そんなことを考えつつ、俺は仕留めきれなかった悔しさを隠しきれぬまま口を開いた。

「……ターンエンド！」

「俺のターンだ！ ドローッ！」

万丈目は場にアームド・ドラゴン Lv7こそいるものの、手札

が0で伏せもない状態であり、余裕はないと言っていていいだろう。

そのためか、心なしか声にも力が入ったドロ―であった。そして、それを行った万丈目は、手元に来たカードを見て口角を上げて笑みを見せる。

たった1枚の手札。一体万丈目が何を引いたのか。それはすぐに明らかになった。

「俺は魔法カード《スタンピング・クラッシュ》を発動！ このカードは自分フィールド上にドラゴン族モンスターが存在する場合のみ発動できる！ 魔法、罫カード1枚を選択して破壊し、そのコントロールに500ポイントのダメージを与える！ 俺は、装備カードとなっているアームズ・エイドを選択して破壊！ そして500ポイントのダメージを受ける！」

「ぐっ……」

俺の場のアームズ・エイドが破壊され、更にライフも削られる。それだけではなく、スターダストの攻撃力まで元に戻ってしまった。

《スターダスト・ドラゴン》 ATK / 3500 2500

遠也 LP : 1600 1100



これは、まずい。

「バトル！ アームド・ドラゴン レV7でスターダスト・ドラゴンに攻撃！ 《アームド・ヴァニッシャー》！」

「くっ……スターダスト！」

攻撃力の差は300ポイント。たったそれだけとはいえ、こちらが下回っている事実は変わらず、スターダストは破壊されて墓地に行ってしまった。

遠也 LP：1100 800

「ターンエンドだ！」

くそ、ついにライフポイントが1000を切ったか。

俺が追い詰められていることに、喜びの声でもって万丈目の声援とするノース校。対して最早なりふり構ってられないのか、立ち上がって俺に檄を飛ばす鮫島校長。

本校の生徒みんなも応援してくれているのだが、それよりも校長の熱狂っぷりがやばい。一体何がそうさせているのかわからないが、俺としてもその声には応えるつもりだ。

何より俺の勝ちを信じている友人たちがいるのだ。その前だからこそ、勝ちたい。向けられた信頼に、応えてみせるために。

「俺のターン！ ドロー！」

カードを引き、確認する。

そして、俺はそのカードをそのままディスクに差し込んだ。

「魔法カード《星屑のきらめき》を発動！ 自分の墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター1体を選択し、そのモンスターのレベルと同じレベルになるように、選択したモンスター以外の自分の墓地に存在するモンスターをゲームから除外し、選択したモンスターを墓地から特殊召喚する！」

ドラゴン族シンクロモンスターを、墓地アドの損失だけで完全蘇生させる優秀な魔法カードだ。無論蘇生制限を満たしていなければならぬが、シンクロ召喚したモンスターであるならば問題はない。

「俺は《スターダスト・ドラゴン》を選択！ 墓地のシンクロン・エクスプローラー、カードガンナー、ジャンク・シンクロンを除外し……三度飛翔<sup>みたひ</sup>せよ！ 《スターダスト・ドラゴン》！」

《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500 DEF/2000

輝く光の雫を散らせながら、再び墓地より現れるスターダスト・ドラゴン。

それを見て、万丈目の顔が苦々しげに歪む。

「更に伏せカードリバーオープン！ 罨カード《ロスト・スター・ディセント》！ 自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する！ ただし、この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは1つ下がり守備力は0になる。また、表示形式を変更する事はできない。デッキ・ジーナス」

《TG ハイパー・ライブラリアン》を守備表示で特殊召喚！  
《TG ハイパー・ライブラリアン》 ATK/2400 DEF  
/1800 0

片膝をつき、身を守る姿勢を取るライブラリアン。

本来のレベルは5だが、ロスト・スター・ディセントの効果により現在のレベルは4。それは、この状況においては大きなメリットになる。

「そして、チューナーモンスター《エフェクト・ヴェーラー》を通常召喚！」

《エフェクト・ヴェーラー》 ATK/0 DEF/0

まるで羽衣のような質感を持つ半透明の大きな翼。その不思議な羽を広げ、青い髪に白装束を纏った少女が降り立つ。

手札から捨てることで相手モンスター1体の効果をエンドフェイズまで無効にする効果を持つカードだが、同時にレベル1のチューナーでもある。シンクロデッキにとって、とても有用なカードの1枚だ。

そして、チューナーとそれ以外のモンスターが揃った以上、やることは決まっている。

「レベル4となっているライブリアンに、レベル1のエフェクト・ヴェーラーをチューニング！」

2体が飛び上がり、光の中へと消えていく。

そのレベルの合計は5。そして、素材指定がないという条件かつこの状況では、呼ぶのはもちろんアイツである。

「集いし狂気が、正義の名の下動き出す。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 殲滅せよ、《A・O・J アーリー・オブ・ジャスティス カタストル》！」

《A・O・J カタストル》 ATK/2200 DEF/1200

白銀の体躯に、金の縁取りで囲われた一つ目のレンズ。こと戦闘においては絶大な力を持つ戦闘兵器である。

これで俺のフィールドには、スターダストとカタストルの2体が並んでいることになる。

俺はまず、カタストルを指定して指示を出した。

「バトル！ カタストルでアームド・ドラゴン レV7に攻撃！」

「馬鹿な！ 攻撃力はこちらのほうが上だぞ！？」

万丈目の言うとおり、彼我攻撃力差は600ポイントあり、カタストルの攻撃力は及ばない。

だが、こと戦闘においてなら、カタストルに心配はいらないのだ。

「この瞬間、A・O・J カタストルの効果発動！ このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘をする場合、ダメージ計算を行わず、そのモンスターを破壊する！」

「な、なんだと！？」

「いけ、A・O・J カタストル！ 《デス・オブ・ジャステイス

《「！」

俺の言葉に従い、カタストルがその身を僅かにのけぞらせる。

そしてその一つ目のレンズに集束していくエネルギー。それは一筋のレーザーとなって解放され、一瞬でアームド・ドラゴン L V 7を貫いた。

その一撃で、消えていくアームド・ドラゴン。これで、万丈目のフィールドはがら空きになった。

「くっ………！」

「これで終わりだ、万丈目！ スターダスト・ドラゴンで直接攻撃ダイレクトアタック！ 響け、《シューティング・ソニック》！」

スターダストの口腔から、再び不可視の砲撃が万丈目に向けて放たれる。それを正面から見据えながら、万丈目は無念の咆哮を上げるのだった

「く、くっそおおお！」

万丈目 LP：13000

万丈目のライフポイントが0になり、それと同時にフィールド上に映像化していたビジョンが消えていく。

ショックのあまり、膝をついている万丈目と、立ってそれを見ている俺。その二人を交互に見てから、クロノス先生が対戦台の下からぴよんとフィールドに立ち、マイクを片手に俺に手を向けた。

「勝者！ デュエルアカデミア本校代表、皆本遠也なノーネ！」

クロノス先生がそう告げた瞬間、本校生徒たちから喜びの声が一気に爆発した。

拍手、歓声、口笛、などなど。それぞれが思い思いの方法で俺の勝利を祝ってくれている。

非常に嬉しいことではあるが、それが全て俺に向けられていると思うと、些かならずとも気恥ずかしい。

だから、俺は控えめに片手を上げることで、それらの声に応えるのだった。

そして、対するノース校だが、こちらは俺の勝ちが決まった瞬間、静まり返ってしまった。

だが、その中の大多数は万丈目の敗北に涙しており、また崩れ落ちた万丈目に拍手を送っている者が大勢いる。

この光景を見ると、万丈目がノース校の人間に本当に慕われている

るのだと実感する。全校生徒のほとんどが万丈目のために泣いてくれているのだから、本当に凄い。

そう感心していると、不意にこのデュエルフィールドと観客席を繋ぐ入口から、見知った顔が走ってきているのが見えた。

「遠也！」

走り寄ってくるのは、十代に翔、隼人、それから三沢か。明日香とジュンコにももえ、それからカイザーはいないようだ。

そう思ってみんなが座つていたところを見ると、明日香がこちらに笑顔で手を振り、カイザーが相変わらずのカッコつけた笑みをしているのが見えた。

ジュンコ、ももえも大歓声で聞き取れないものの、何か祝いの言葉を言ってくれているのが動いている口からわかる。

だから、俺はその四人に向かってサムズアップを返すのだった。

そうこうしている間に、十代たちは気づいたら勝手にフィールドに上がってきていた。

テレビカメラが回っているのに、そんなことしていいのか。と思つたが、周りを見ると、カメラは既に下ろされている。理由は分からないが、どうも既に撮影は終わっていたようだ。随分急な話である。



そんな風に周囲を見ていると、俺の視界に突然十代が顔を出す。そして、その表情は満面の笑顔であった。

「遠也、やったな！ 最高のデュエルだったぜ！」

そう言って手のひらを掲げる十代に、俺は応と答えて自分の手のひらをそこに合わせた。

パシン、と鳴った甲高い音。それに続けて、翔たちも口を開く。

「うん、見ていて楽しかったよ！」

「さすが遠也なんだな」

二人の言葉にも、サンキューと返す。そして、三沢も苦笑を浮かべて声をかけてきた。

「スターダスト・ドラゴン……まさかあれほどの効果を持っていたとはな。効果破壊も効かないとなると、ますますお前の攻略が難しくなるな」

肩をすくめるように言われ、俺もまた苦笑いを返すしかない。

スターダストの優秀さは元の世界でも認められていたほどだ。こ

うしてこの世界でも評価されるのは当然なのかもしれないが、それでも自分のカードのことなだけにそう言われるのは嬉しかった。

「でも、万丈目は強かったよ。あれだけ」

「準！ まったく、なんてザマだ！」

言葉の途中、突然聞こえてきた怒鳴り声に、思わず声を詰まらせる。

そして、半ば反射的にそちらのほうへと顔を向ける。その声を聴いた十代たちもまた気になったのだろう、共にその発生源に視線を移していた。

俺とのデュエルに負け、膝をついた万丈目。その横に二人の成人男性が立ち、厳しい表情で万丈目を見下ろしている。その目に親しみはなく、苛立ちと怒りが万丈目に対して注がれていた。

「に、兄さん……」

万丈目が、その目にたじろいだのか弱々しく彼らを呼ぶ。

……なるほど、あれが万丈目の兄たちか。家族と上手くいつていないのでは、という予想は当たっていたというわけだ。まったく嬉しいことではないが。

そして万丈目の声に、二人の兄は舌打ちと溜め息で応えた。

「失望したよ、準。やはりお前は俺たち兄弟の中でも出来が悪かったようだ」

「期待し、こうして金をかけてやった結果がこれとはな。俺たちがせっかく用意してやったカードも使わず負けるとは、呆れて物も言えんぞ！」

「くっ……」

その容赦ない叱責に、万丈目が目を伏せて苦しげに声を漏らす。

あからさまに万丈目を侮蔑する言葉に、俺は自分の目つきが鋭くなっていくのがわかった。万丈目は正々堂々と戦い、そこに責められるべき点は何一つなかった。そんな万丈目が、何故こつまで言われなければならぬんだ。

文句を言ってやろうと俺は口を開きかける。が、その前に十代が一步踏み出していた。

「おい、アンタら！ 万丈目の兄だか何だか知らないけどな！ 万丈目は精一杯戦ったんだ！ アンタらのくだらないプレッシャーにも負けずにな！ それを貶すなんて、俺が許さないぜ！」

十代が珍しく怒りを込めた声で二人を睨む。

その言葉から察するに、試合前に十代が万丈目のことを気にかけていたのは、こういった兄からのプレッシャーが万丈目にあることを何処かで知ったからだだったのだろう。

怒りの言葉と失望の感情を家族から受けるかもしれない恐怖、それは確かに想像を絶する。その恐怖を常に背負ったうえでこれまでデュエルに臨んできていたのだとすれば、万丈目は尊敬に値する精神の持ち主だ。

ノース校で万丈目が慕われる理由が、少しわかったかもしれない。そういう心が根元にある人間を、本気で嫌える奴はそういないだろう。

だが、兄たちにとってはそうではないらしい。十代の怒りを、鼻で笑って返してきた。

「ふん、部外者は黙っていてもらおう。これは我ら兄弟の問題だ！」  
「それに、物事は結果が全てだ！ 我ら万丈目家に生まれながら、その能力のない準が悪いのだ！」

その高圧的かつ独善にすぎる物言いに、普段はオシリスレッドを馬鹿にするクロノス先生すら不愉快気に表情を歪ませる。

いち教師としては、やはりそういった思考は受け入れがたいのだろう。そう感じる心を自覚して、いずれはオシリスレッドに対する嫌がらせも控えてほしいものだ。

そして、二人が言い放った言葉に、万丈目は一層うなだれる。家族からお前は能無しだと告げられたその心情は、推し量るに余りある。

……しかし、この兄たちは馬鹿なのだろうか。万丈目は、滅多にない稀有な才能があることを自分で、しかもこの場で証明してみせているのに。

俺には間違いなく無く、カイザーと十代にあるいはあるかもしれないその才能。持っていない人間の方が圧倒的に多いその才能に気付かないとは。

「馬鹿じゃないの?」

「なに、貴様誰に向かって言っている!」

あ、思わず口に出た。

兄の一人、なんか睫毛が濃いほうがそれに反応して睨んでくる。

まあ、いいや。俺も腹が立ってたのは事実だし、こいつらに気付かせてやるのもいいだろうさ。弟の凄さをな。

「いや、だってアンタら、万丈目の才能に気付いてないだろ。こんなに珍しい才能持ってるのにさ」

「何を馬鹿な」

「準に才能だと？ ふん、デュエルの才能がないことは、この場で証明されたわ！」

俺の言葉に、兄二人は揃って否定的な態度でそれを一蹴する。

対して俺は、そんな二人に溜め息をついた。理解していないな、と暗に示すそれに二人の表情が険しくなる。

そして、俺のその反応に、周囲の面々も視線を向けた。いったい、俺が言う才能とは何なのか、ということだろう。むしろ、なんでわからないかな。こんなにわかりやすいのに。

「あるだろ、才能。万丈目はノース校に半年もいなかったんだぜ。なのに、こいつのために泣いてくれる生徒が、こんなに大勢いるんだ。これって、結構凄いことだぞ」

なにしろ、一学校そのものなのだから、生徒数は三ケタに届いているのだ。そのほぼ全てから慕われるというのは、並みのことではない。

「言い換えようか。こいつにはカリスマっていう欲しくても得られない才能がある。この場で、万丈目のことを心から応援していたノース校の生徒たちがその証拠だ」

そこまで言って、俺は二人に指を突きつけた。

「金と結果が全てだと思っているアンタら二人には、絶対に無い才能だぜ」

最後にそう断言した瞬間、会場中からワツと声が上がった。

本校、ノース校関係なく。全ての生徒が兄たちの横暴すぎる言葉に対して、帰れ、引つ込めと、さんざんに言い始める。だがしかし、万丈目に対しては、よくやった、いいデュエルだったぞ、カッコよかったぜ、と賞賛の声ばかりだ。

それは、俺が今言ったことをまさに証明するかのような光景だった。

「くっ……!!」

「不愉快だ！ 帰るぞ、正司！」

「ま、待ってくれ長作兄さん！」

そして、非難轟々となつてその空気に耐えられなくなった二人は、忌々しげに俺たちを見てから足早に会場を去って行った。

まったく、それに万丈目にはデュエルの才能もあるぞ。あのドロ

「力と今日のデュエルを見ていればわかるはずだろうに。弟だからって過小評価しすぎだ。」

そんな彼らが姿を消すのを見届けてから、俺たちは万丈目の方へと駆け寄った。

膝をついていた万丈目も立ち上がり、その姿を認めた十代が彼らの去って行った方を見ながら不満を漏らす。

「ちえ、なんだよアレ。万丈目のデュエルを馬鹿にしてるぜ。それに」

「そこまでにしとけ、十代。万丈目にとっては兄貴なんだ、馬鹿にされていい気分はしないだろ。俺もさっきは好きに言い過ぎたよ。悪かったな万丈目」

自分のことを棚に上げ、謝りつつも十代にそう忠告する俺。

まあ、自分で言っちゃったからこそ気を付けようと思ったわけだし、それを他人に促すのも間違いではないだろう。

「あ、そうか。悪い、万丈目」

「ふん……」

謝られた万丈目は、その不遜な態度とは裏腹に、口元には小さな



笑みを浮かべていた。

それを見てとったのは俺だけだったようだ。こいつも、素直じゃない奴である。

そのまま徐々に騒ぎ始める友人たちを見ながら、俺は観客席にいる明日香たち女子とカイザーのほうに視線を移す。

そこでこちらを楽しそうに見ている連中に、一度肩をすくめてみせる。そして俺は友人たちの輪に加わるため、「次は俺とデュエルだ!」「いいだろう、お前にも雪辱を果たす!」と言い合い始めた十代と万丈目のもとに歩み寄っていくのだった。

対抗試合が終わり、ノース校の人間はみんな帰って行った。

その折、優勝校の校長に渡す賞品とやらも発表されたのだが……それがなぜにトメさんのキス？　っていうか、そんなもののために代表生徒は必死こいて戦わなきゃいけないのかよ。

あまりにも馬鹿らしくなった俺は、ふと俺を代表に誘い込んだ元凶であるカイザーの姿を探した。だが、その場にカイザーは既におらず、その日一日会うことはなかった。

(あの野郎、知ってやがったな)

俺がそう確信し、面倒事を押し付けられたただだったと知り憤るのは、当然のことであった。

以後しばらく俺はカイザーにデュエルに誘われても軒並み断り、それに地味に嫌な顔をしたカイザーを見て、俺はひとまずの溜飲を下げたのだった。

ちなみに万丈目はアカデミア本校に残った。やはり本人としては、アカデミアに思い入れもあったようで、再び通いたいという意味を校長に示したのだ。

校長は快くそれを受諾した。尤も、勝手に学校を離れていた関係で出席日数が足らず、出席日数が単位に関係しないオシリスレッド所属になってしまったのは笑ったが。

それでも大して不満も言わずにいるところを見ると、本当に変わ

ったのだと思う。ノース校、それからあの対抗試合で兄貴たちと対したことが、いい切っ掛けになったのかもしれない。

そして、今。俺は十代と万丈目という三人でブルー寮の俺の自室に集まり、顔を突き合わせていた。

ちなみに万丈目はレッド所属でありながら、ブルー生徒に嫌われていない稀有な例だ。先日の対抗試合で好印象を持たれたのが原因らしい。

まあそれは置いておいて。こうして集まっている理由は、俺と十代が万丈目にかけてある言葉が原因だった。

「なあ万丈目。そいつってお前の精霊か？」

「お、遠也も気づいてたのか。俺も気になってたんだよねー」

「なに！？ 貴様らこのザコが見えるのか！？」

その後俺たちも精霊が宿るカードを持っているという話になり、互いの精霊を確認しようと万丈目が言い出して比較的スペースのある俺の部屋に集まったわけである。

そして、まずは言い出しっぺの万丈目が一枚のカードを手にとった。

その瞬間、万丈目の指示を待たずに飛び出してくる黄色く小さな人型のモンスター。

目は頭部から伸びた二つの触角の先にあり、その姿はカネゴを連想させなくもない。唯一の衣服であるパンツが、どこことなく哀愁を感じさせる。

まごうことなき、《おジャマ・イエロー》だった。

『あー、アニキアニキ！この人たち、オイラのことが見えてるんすかー？』

「ええい、鬱陶しい！大人しくしている！」

身体をクネクネさせながら顔に近づいてきたイエローをわずらわしそうに見て怒鳴ると、イエローは素直に万丈目の横に座った。

やっぱり、こいつが万丈目の精霊だったのか。

「まあ、なんとというか……個性的な精霊だな」

デッキ的にもあまりシナジーはないだろうに。まあ、おジャマシリーズが揃えば、一気に凶悪カードと化すけれども。特に万丈目のようなドロー力があれば、おジャマカントリー、おジャマジック、おジャマデルタハリケーン……のコンボが普通にやってきそうて怖い。

この世界におジャマカントリーは今のところ存在していないのが、唯一の救いか。万丈目にとっては痛手だろうけど。

そんな思考をしているとは露知らず、万丈目はその言葉に「ただのザコだ！」と断言してイエローに泣かれている。まあ、これはこれでいいコンビなのかもしれないな。

ちなみに俺たちが精霊を見ることができると知り、イエローは兄弟の行方を尋ねてきた。恐らく、おジャマ・ブラックとおジャマ・グリーンのことだと思うが、残念ながら心当たりはない。

十代も同じく首を横に振ると、イエローはがっくりを肩を落としていた。なんか、すまん。見つけたら知らせるよ。

「よし、次は俺の番か。来い、相棒！」

『クリクリ〜』

十代の呼びかけに応えて出てきたのは、お馴染み《ハネクリボー》だ。

イエローより少々サイズが大きいが同じく小型モンスターであるため、ハネクリボーはイエローに興味を持って、その大きな目でイエローを見つめていた。

「ふん、そいつか。精霊だったとはな」

「おう！ 頼りになる俺の相棒だぜ！」

万丈目に対して、自慢げに十代が答える。

実際、十代のピンチを何度も救っている相棒というのは間違いない。俺とのデュエルでも何度かハネクリボーにダメージを消されているし、それだけでなくその可愛さは傍にいと癒されるだろう。羨ましい。

しかし、俺がさつきある程度は教えたとはいえ、万丈目の口から普通に精霊なんて言葉を聞くことになるとはな。しかもこんなに和やかな雰囲気です。初めて会ったころには考えられなかったことだ。

そう思っしてしみじみしていると、万丈目が若干羨ましそうにハネクリボーを見ていた。

万丈目いわくザコカードだが、それでも優秀な効果モンスターである分イエローよりもマシだと思っしているのだろうか。その視線に気づいたイエローが、シヨックで顔色を青くしているんだが。

まあ、捨てられることはないだろうから大丈夫だろう。ハネクリボーは十代のカードだから、諦めるしかないしな。

さて、十代のハネクリボーも出てきたことだし、次は俺の番か。二人の目もこちらを向っしていることだし、さつさと紹介するとしてよう。

あらかじめ姿を消してもらっっていた相棒に呼びかける。

「もういいぞ、マナ」

『はいはい！ ああ、窮屈だったー』

「姿を消してただけだろ？」

『もう、気分的な問題なの』

そういうもんか？

ともあれ、姿を現したマナに、ハネクリボーが早速とばかりに飛びつき、それを抱きとめたマナがその毛を梳くように撫でまわす。

クリクリ言っただけで笑うその姿を横目で見ながら、俺はデッキからカードを一枚取り出し、あんぐりと顎が落ちんばかりに口を開けている万丈目に見せた。

「そういうわけで、俺の精霊はこいつ。《ブラック・マジシャン・ガール》のマナだ」

『よろしくねー』

ひらひらと万丈目に対してマナが手を振る。

初対面の印象は決してよくなかったが、今の万丈目を見てマナも

気持ちを切り替えたのだろう。普通に笑みを浮かべての対応だった。

それを受けた万丈目は、落ちかけていた顎を強引に手で持ち上げると、驚きの声でもってそれに応えた。

「ぶ、ぶぶブラック・マジシャン・ガールだと！？ 武藤遊戯しか持っていないカードを、なんでお前が持っている！？」

あー、そこからか。

俺は以前に神楽坂とデュエルした時にした説明と同じことを万丈目に話す。それを聞いて万丈目はなるほどと頷いた。考えてみれば当たり前のことだし、納得は容易だったようだ。

しかし、今度は万丈目は真剣な眼差しをマナに向け始めた。じつと自分を見る視線に、マナは苦笑い。

なんだ、可愛いから見惚れているのか？ 確かにマナは可愛いが……やらんぞ、俺のだ。

そう無駄に対抗心を燃やしていると、万丈目は次いで自分のおジヤマ・イエローを見る。それにイエローはウインクをして返す。

そして万丈目は十代のハネクリボーを見て、その視線は再びマナへ。最後にもう一度おジヤマ・イエローを見た後、万丈目の身体がふるふる震えだした。

そして、直後一気に爆発する。



「な、納得いかああん！　なんでお前らの精霊がそんなに上等なもので、俺の精霊はこのザコなんだあッ！」

『アニキひどいよ〜』

泣き出すイエローにイラツときたのか、万丈目が「黙れこのっ！　」と言いつつイエローを掴もうとする。しかし、イエローは身の危険を感じたのか、ひょいっとかわす。

それにまたイラツときたのか、万丈目はむきになってイエローを捕まえようとするが、イエローはそのたびに泣きながら回避する。

そうして次第に部屋の中をドタバタと動き回り始めた二人に、俺と十代はやれやれと肩をすくめた。

普段の万丈目は落ち着きのある奴なんだが、たまにこうしてはっちゃけることがあるようなのだ。まあ、ずっと落ち着き払っていても気持ち悪いし、これぐらいのほうが万丈目は親しみがあっていいのかもしれない。

「ホント、あいつら仲がいいぜ」

『クリクリ〜』

「本人は否定しそうだけだな」

『喧嘩するほど仲が良くなって言うのにな』

そして、俺たちはそんな万丈目をこうして生温かく見守るのだった。

結局。二人の追いかけてこは俺が部屋で暴れるなど万丈目に注意したところで終わり、精霊発表の場もそこでお開きとなった。

レッド寮に帰っていく二人に手を振りながら別れ、自室に戻る道の途中。俺は万丈目とこうして普通に話せるようになっていことに思考を傾ける。

以前はあんなに険悪だったのに。そう思えば対抗デュエルに出たのも悪いことではなかったか。その点は、カイザーにも感謝しておくしよう。

ま、何はともあれ。友人がまた増えたことは、喜ばしいことだよな、うん。

俺は誰ともなしに一人頷き、そんな感慨にふけるのだった。



## 第21話 帰還（後書き）

対抗デュエル、完結！

今回はとりあえず、アームド・ドラゴンが相手ならスタダを出すだる常考、という思考の下に作られたデュエルでした。

しかし出すまでにライフを削られ、最終的に800まで減らされているという。さすが万丈目。

万丈目は結構好きです。アニメのギャグっぽいところもいいですが、漫画のカッコいい万丈目もいいですね。ドラゴン族デッキリってのが、シビれます。

おジャマもある意味で斬新で面白いですけどね。

さて、これでようやく万丈目さんアカデミアに帰還です。

今回のタイトルは万丈目がいなくなったお話との対比ですね。主役は万丈目なので。

さて、それじゃ次のお話を書き始めますかー。

## 第22話 大切（前書き）

活動報告には更新はまだ先と書きましたが……、

すまん、あれは嘘でした。

いえ、書いていたらなんだか最後まで書いていたんですよ。  
デュエル内容は今回ちょっと微妙ですけどね。上手く書けないんで  
すよねえ、ずっとシンクロ書いてたせいかな。

ともあれ、今回のお話はマナとのお話。

この物語の正ヒロインですからねー！。

あ、あとPVが100万を突破いたしました。  
皆さん、ありがとうございます！

## 第22話 大切

「悪いけど、十代。俺はパスだ」

部屋に訪ねてきた十代の言葉に、俺は至極簡潔にそう答えを返した。

だが、十代は納得いかないのか唇を尖らせて更に言い募る。

「なんでだよ。せつかく大徳寺先生が企画してくれたんだぜ！  
遠也も一緒に行こうぜ、遺跡探検！」

目をキラキラさせて言う十代は、その探検を本当に楽しみにしているのだと一目でわかる。

突然部屋に来たと思ったら、いきなり「遠也、探検に行こうぜ！」  
だったからな。本当に高校生とは思えないほどに子供心にあふれたやつである。

流石にその一言だけでは何のことだか分らなかったので、詳しく聞いてみた。

すると、どうも大徳寺先生が自身の受け持つ錬金術の授業で、日曜に島の中のある遺跡を見学に行こうという企画を生徒たちに告げたらしかった。

つまるところ、ちょっと変わった社会見学……いや、もう遠足と言ってしまったてもいいかもしれない。大徳寺先生は、あまり堅苦しい勉強をするつもりはないようだし。

だからこそ、十代もこうして純粹に楽しみにしているんだろう。勉強が主だった場合、こいつはきつと意地でも参加しなかったに違いない。

とはいえ、そんなこんなで十代と翔、隼人は参加決定だそうだし。そして、十代は俺にも声をかけに来たということらしい。

単純に、楽しいことはみんなで共有したい、ということだろう。何とも十代らしい思考だと、俺はうんうんと頷く。

そしてその後に出てきた言葉が、最初の言葉というわけだ。

俺の返事を聞いて不満たらたらな顔をする十代。まあ、俺だって興味がないわけじゃない。ただ、行けない理由があるだけで。

「一つ。俺は錬金術の授業を取っていない」

その授業を取っていない俺が、勝手に参加していいものかということ。大徳寺先生なら許可してくれるかもしれないが、部外者であるのは事実なのだし、自重はするべきだろうというのが一つ。

そして、もう一つ。

「そしてこれが最大の理由だが………俺は見ての通り、マナの機嫌を取らないといけないから忙しい。悪いが、諦めてくれ」

「あー、気になってはいたんだけどな」

そう言って、十代が部屋の隅に目を向ける。

そこには十代と一緒に来たハネクリボーを抱き、ただ黙ってこちらをじつとりと睨むマナの姿があった。

昨晩から全く変わっていないその態度に、俺はもう溜め息しか出てこない。

「なんだ、どうしてこうなったんだよ？」

「いや、それが………翔と三沢と三人でアイドルカードについて話していたんだが………」

そう、昨日の夜に話していたそれが原因なのだ。

俺たち三人は互いにアイドルカードについて意見を交わし、あいだこーだ言った後に、互いにどんなカードが好きかを話していた。



翔は「当然僕はブラマジガールっす！」で、三沢は「俺は、ピケクラかな。可愛く、バランスの取れた効果がいい」と言った。

そして俺は、その時その場にマナがいなかったこともあり、油断していたのだろう。拳を握り、声を張り、高らかにこう言ったのだ。

「断然、大人のお姉さんであるサイマジLV8だ！」と。

そして、その瞬間にタイミング悪く戻ってくるマナ。まあ、今思えばお約束ですよ。……あとは、わかるな。

何と言っても、その時のマナの表情が忘れられない。明るい笑顔のままだったが、どう考えても雰囲気が怒っているという、漫画のような状況だった。「へえ……」ってなんだよ。怖すぎるだろ。

笑顔が元々は相手を威嚇する行為だったっていうのは、本当なのかもしれない。俺はその真実の一端を昨日知ったのだ。

とまあそんなわけで、こうしてマナは俺に恨めしげな視線をじーっと超越し続けているのだ。さすがに何とかしないと、居心地が悪い。いや、むしろ胃心地が悪い、という表現の方が合っているかもしれない。罪悪感的な意味で、こうキリキリと。

とはいえ、今のところは優しく接して、どうにか機嫌を直していてもらうぐらいしか思いつかないのだが。むしろ、それ以外にどうしろと。

と、そんな事情を十代に話す。そしてそれを聞いた十代は、そう

か、とこぼした後で、よし、と声を出した。

「なら、俺とデュエルしようぜ！」

「わけがわからないよ」

まさか素でこのセリフを言う時が来るとは。

しかし、そんなにべもない俺の言葉にもめげず、十代は言葉を続ける。

「デュエルをすれば、マナもきつと怒りがほぐれてくるって！ それに、俺はまだマナの入ったデッキと戦ったことなかったしな！」

「後者が主たる、お前の場合」

思わず突っ込むと、十代は否定せずに「へへっ」と笑った。

だけどもあ、何もしないでいるよりは行動した方がいいのも確かか。それに、そっぴえは十代の言うとおりシンクロ以外のデッキで十代とデュエルしたことはなかった。

一度そうしようと言ったこともあったが、直前でおじゃんになったし、それ以後はなんかこう、ずるずるとシンクロのほうばかりだったからな。

十代とデュエルするのは楽しいし、断るというのももつたいない。マナには悪いが、こうして気分を晴らすというのも俺の精神を守るためには必要かもしれない。

無論、マナのことを忘れたわけじゃないぞ。それに何より、挑まれたデュエルから簡単に逃げるわけにもいくまいよ。

「やるか、十代」

「おう！」

その結論に至った俺たちは、デュエルディスクを片手に外に向かう。さすがに室内でやるわけにはいかないからだ。

テーブルでデュエルすればよかったかもしれないが、十代が外に行こうと指で示したので、こうしている。俺としても、そのほうが気分もノるし望むところだ。

そして外に向かうべく俺たちが部屋を出た後。部屋の中で溜め息が一つ空気を揺らした。

『はあ………どーせ私は子供っばいですよーだ』

『……クリ〜』

そんなことを言いつつも、結局遠也の後を追って部屋を出るマナ。

ふよふよと移動していくその姿に、ハネクリボーは素直じゃないなあとはかりに声を漏らすのだった。

さて、そんなこんなで外に出て適度に距離を開けて立った俺と十代。

もちろん互いにデュエルディスクは装着済みで、デッキも既にセツトしてある。つまり何が言いたいかというと、準備完了ということである。

となれば、することはもう一つしかない。

「いくぞ、十代！」

「おう、負けねえぜ遠也！」

につ、と笑みを交わして、同時に開始の宣言をする。

「デュエル！」

皆本遠也 LP：4000

遊城十代 LP：4000

「先攻は俺からだぜ！ ドロー！」

まずは十代のターン。さて、初手はどう来るかな。

「俺は《E・HERO クレイマン》を守備表示で召喚！ カードを1枚伏せて、ターンを終了するぜ！」

《E・HERO クレイマン》 ATK/800 DEF/2000

十代の場に姿を現す、丸く大きな身体を持ったHERO。

なるほど、まずは守備力2000のクレイマンか。十代が先攻だった時によく見られる配置だな。

「お次は俺だ、ドロー！」

さて……今のところ手札にマナはいないか。しかし、本当に仲直りできるかな。微妙に不安を感じる繊細な男心である。

それはさておき、このデッキはシンクロデッキではないため、いきなり速攻するのには向いていない。手札から見ても、ここはこつちも無難に終わらせるしかないな。

「俺は《魔導騎士 ディフェンダー》を守備表示で召喚。召喚に成功したことにより、このカードに魔力カウンターを1つ置く。更にカードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

《魔導騎士 ディフェンダー》 ATK/1600 DEF/2000

青い鎧を着込み、大きな盾を持った騎士。片膝をつき、その巨大な盾を構えて防御の態勢をとる。

その名と姿が示す通り、防御に真価を発揮するモンスターだ。守備力2000という値もそれを裏付けている。

「クレイマンと同じ守備力か。固い奴を出してくるなあ。俺のターン、ドロー！」

引いたカードを見て、十代は口元に笑みを見せた。

「いくぜ、遠也！俺は《E・HERO エアーマン》を召喚！」

《E・HERO エアーマン》 ATK/1800 DEF/300

エアーマン……俺が渡した2枚のHEROの1枚か。

「そして俺はエアーマンの効果発動！自分の場にいる他のHEROの数だけ相手の魔法・罫カードを破壊できる！右の伏せカードを破壊だ、《エア・サイクロン》！」

エアーマンの翼についたファンが回り、そこから吹き荒れる風が俺の伏せカードに迫る。その効果はまさに《サイクロン》そのままである。

そしてその効果は正しく処理され、俺の場の伏せカードは墓地に送られた。

「くっ……」

「更に俺は《融合》を発動！手札の《E・HERO スパークマ

ン』とクレイマンを融合！ 現れる、《E・HERO サンダー・ジャイアント》！」

クレイマンとスパークマンが光の渦に吸い込まれるように一つになり、やがてそこから巨大な黄色の鎧を付けたモンスターが現れる。

クレイマンの名残を残す丸みを帯びた鎧で上半身を固めたその男が、ゆっくりと十代のフィールドに立つ。

《E・HERO サンダー・ジャイアント》 ATK/2400  
DEF/1500

「いくぜ！ サンダー・ジャイアントの効果発動！ 手札のカードを1枚捨て、相手の場の元々の攻撃力がサンダー・ジャイアントより低いモンスター1体を破壊する！ デイフェンダーを破壊しろ！  
《ヴェイパー・スパーク》！」

「させるか！ 魔導騎士 デイフェンダーの効果発動！ 魔法使い族モンスターが破壊される場合、魔力カウンターを1つ取り除くことでその破壊を無効にする！ 《マナ・ガード》！」

デイフェンダーがその盾を掲げ、襲い来る雷を防ぎきる。

「ちえ、ならサンダー・ジャイアントでデイフェンダーに攻撃！  
《ボルティック・サンダー》！」



「くっ……!!」

すでに魔力カウンターを使い切ったディフェンダーに、攻撃力2400の攻撃を防ぐ術はない。

降り注ぐ雷撃に、今度こそディフェンダーは破壊された。

「よし、更にエアーマンで直接攻撃だ！ いけ、エアーマン！ 《エア・スラッシュ》！」

「畏発動！ 《くず鉄のかかし》！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、このカードは再び場にセットされる！」

エアーマンが繰り出した鎌鼬のような風の刃を、曲がりなりにも金属で構成されたかかしは難なく防ぎきる。

そしてかかしは再びカードの絵柄へと戻り、再び俺の場にセットされた。

こいつがなければ大ダメージは必至だったが、何とか防げてよかった。まあ、代わりに俺の場にはモンスターが1体もないという相手の場に高攻撃力モンスターが揃っている現状において、なかなか怖い状況になってしまっているが。

……あ。っていうか、さっきサンダー・ジャイアントの攻撃をくず鉄先生で防いでいれば、ディフェンダー残ってたじゃん。なんて

こつたい。

まあ、全くミスのないデュエルばかり出来るわけではないし、過ぎてしまったことは仕方がない。マナのことか気がかりがあったことなど言い訳にもならないが、ここはそう気持ちを切り替えて続けていくしかないだろう。

とはいえ、このミスのツケは高くつきそうだ。今後ミスをしないことで何とかカバーしていくしかないだろうな。ガツデム。

そして思惑を崩された十代は、しかし表情に何の変化もない。さつきと同じ、楽しげに笑っているだけであった。

「ま、遠也だしこれぐらいは防がれるよな。ターンエンドだぜ！」

「買い被りだぞ、それは。俺のターン、ドロー！」

十代のこれぐらい当然という変な信頼に苦笑しつつ、俺はカードを引く。

さて、さすがにモンスターがいないのはかなりまずい。くず鉄のかかしはあくまで1体の攻撃しか無効に出来ないのだから、守りが万全とは言えないのだ。

そういうわけで、こちらにも上級モンスターに出てきてもらおうじやありませんか。

「俺は魔法カード《古のルール》を発動！ 手札のレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する！ さあ来い、お師匠様！ 最上級魔術師、《ブラック・マジシャン》！」

魔法カードがソリッドビジョンとなって眼前に展開され、その後それを破るようにしてフィールドに降り立つこのデッキの要の1体。

この世界においてはレアリティも最上級として分類されている超有名カード。遊戯さん愛用のモンスターとして一躍名を馳せた、ブラック・マジシャンの登場だった。

《ブラック・マジシャン》      ATK/2500      DEF/2100

「うおー！ ブラマジきたー！」

闇色の装束を身に纏い杖を構えるその姿を見て、十代が目を輝かせてそんなことを叫んだ。

神楽坂戦の時に見ているはずだし、これは十代が憧れる遊戯さんのブラマジではないのだが、そんなことは関係ないようだ。

やはりこの世界ではブラック・マジシャンはかなり特別な立ち位置に置かれているらしい。それだけ遊戯さんの影響が大きいということだろう。

「さて、いくぞ十代！ ブラック・マジシャンでサンダー・ジャイアントに攻撃！ 《ブラック・マジック黒・魔・導》！」

ブラック・マジシャンがその手に持った杖をバトンのようにくるくると回し、その後力強く掴んでその先を十代の場に向ける。

そして瞬時に形成された魔力の塊が、漆黒の稲妻と化してサンダー・ジャイアントに襲い掛かった。

攻撃力で劣るサンダー・ジャイアントにそれを防ぐことができるはずもなく。サンダー・ジャイアントはそのまま場から姿を消した。

「ぐっ、さすが……！」

十代    LP：4000    3900

掠り傷にもならないレベルだが……ま、先手は俺がもらったってことで良しとしよう。

「ターンエンドだ！」

「よっし、俺のターン！ ドロー！」

十代は手札にカードを加えるものの、現在の手札は2枚のみ。そ

の中がいいカードがなかったのか、十代は手札のカードに触れないままだった。

「エアーマンを守備表示に変更！ ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは……おお、《ブラック・マジシャン・ガール》か。マナが来てくれたことは嬉しいが、この状況ではどうしようもないな。ブラマジをリリースして出しても無意味だし。

となれば、このままバトルフェイズに入るしかないか。

「バトル！ ブラック・マジシャンでエアーマンに攻撃！ 《黒<sup>ブラック</sup>・魔<sup>ク・マジック</sup>・導》！」

ブラック・マジシャンから放たれる黒い閃光がエアーマンを貫き、破壊する。

ダメージこそ負わないものの、破壊されたことで十代の場はこれでがら空きである。

しかし、十代の目はむしろ希望に輝いていた。

「くっ……だが、エアーマンの犠牲は無駄にしないぜ！ 畏発動、

《ヒーロー・シグナル》！ モンスターが戦闘で破壊され墓地に送られた時、自分の手札がデッキからレベル4以下のHEROを特殊召喚する！ 俺はデッキからコイツを呼ぶぜ、《E・HERO バブルマン》を守備表示で召喚！」

《E・HERO バブルマン》 ATK/800 DEF/1200

現れるのは全身水色で小柄ながらガタイのいい、アメリカンコミックから飛び出してきたようなHEROの1体だ。

「げっ、そいつかよ」

そしてその効果を知る俺にしてみれば、厄介極まりないモンスターだ。こいつがアニメ効果なのは反則に近いと思う。

「俺の場には、バブルマン以外のカードは存在しない！ よってバブルマンの効果により、2枚ドロー！」

一気に十代の手札が回復する。これだ、これだよ、これですよ。たった1枚で2枚のドローを行う強欲な壺と全く同じ効果。しかも今回は手札からの召喚ではないので、手札消費は0である。

OCGの効果では、場に何も無いことに加えて手札も0であることが条件なのでバランスは取れているが……アニメ版はひどい。場

に何も無い状況なんてデュエルではザラだろうに。

さすが強欲なバブルマンの異名を持つだけのことはある。

そしてバトルフェイズを終えた俺に、もう出来ることはない。伏せるカードも特にないし、この状況でターンエンドをするしかないのだ。

「ターンエンドだ！」

「俺のターンだぜ！ カードドロー！」

デッキからカードを勢いよく引き抜き、十代が手札に加える。これで十代の手札は5枚。この状況をひっくり返すには十分な選択肢があると見ていいだろう。

事実、十代の顔はにやけているのだから。

「へへ、いくぜ遠也！ 俺は《融合回収》フュージョン・リカバリーを発動！ 墓地の《E・HERO スパークマン》と《融合》を回収するぜ！ そしてそのまま《融合》！ 手札のスパークマンと《E・HERO エッジマン》を融合し、現れる《E・HERO プラズマヴァイスマン》！」

《E・HERO プラズマヴァイスマン》 ATK/2600 D  
EF/2300

「プラズマヴァイスマンの効果発動！ 手札を1枚捨てることで、相手の攻撃表示モンスター1体を破壊する！ 当然、俺が指定するのはブラック・マジシャンだ！」

その言葉に追従し、プラズマヴァイスマンから雷撃が放たれ、ブラック・マジシャンに直撃する。

さすがの最上級魔術師も効果破壊には無力である。残念ながら破壊され、俺の場にモンスターはいなくなってしまった。

「いっけえ、プラズマヴァイスマン！ 遠也ダイレクトアタックに直接攻撃！」

「《くず鉄のかかし》を発動！ その攻撃を無効にする！」

「ならバブルマンで追撃だぜ！ 《バブル・シユート》！」

「ぐあっ！」

遠也 LP：4000 3200

「よし、俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

どうだと言わんばかりに満足げにターン終了宣言をする十代。



確かにライフこそまだかなり残っているものの、あちらの布陣はかなり手強い。プラズマヴァイスマンも効果が強力なうえに攻撃力が2500ラインを超えているからなあ。

だが、そのぶん手札が一気に消費されている。すぐに起死回生はできないだろうというのが、救いではあるか。

「俺のターン、ドロー！」

ふうむ、なるほど。

心の中で頷きを一つ、そして俺はカードに手をかけた。

「モンスターをセット。更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

十代はカードを引き、1枚の魔法カードを発動させた。

「俺は《E エマージェンシー・コール》を発動！ デッキから《E・HERO バーストレディ》を手札に加え、そのまま召喚！」

《E・HERO バーストレディ》 ATK/1200 DEF/  
800

来たか、十代のデッキの主力の1体。E・HEROの紅一点、バーストレディの登場である。

「バトルだ！ プラズマヴァイスマンでセットモンスターに攻撃！」

「畏発動！ 《くず鉄のかかし》！ プラズマヴァイスマンの攻撃は無効だ！」

「なら今度はバーストレディでセットモンスターに攻撃だ！ 《バースト・ファイヤー》！」

「セットされていたのは《見習い魔術師》だ！ そしてその効果が発動！ このカードが戦闘で破壊された時、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスターをセットできる！ 俺は2枚目の見習い魔術師を選択！」

「バブルマンで攻撃！」

「なんの、再び《見習い魔術師》！ デッキから《水晶の占い師》をセット！」

これにより、見習い魔術師は一気に2枚が墓地行きである。ありがとう、見習い魔術師。サーチ&デッキ圧縮&貪欲のコスト確保まで行える頼もしいモンスターだ。魔法使い族には欠かせないカードの1枚である。

そして3体全ての攻撃権を使い切った十代に、これ以上出来ることは何もない。十代は呆れたような、感心したような、そんな不思議な表情で俺を見ていた。

「まさか全部防がれるなんてなあ。ターンエンドだ！」

「ま、見習い魔術師が手札に来たのは僥倖だったよ。俺のターン、ドロー！」

カードを引き、手札に加える。

「まずはセットモンスターを反転召喚！ 水晶の占い師の効果により、デッキの上から2枚をめくり、その中の1枚を手札に加える。うーん、俺は《魔術の呪文書》を手札に加え、《ワンダー・ワンド》をデッキの一番下に戻す」

両方とも装備カードとかひどい。

けどまあ、これで一応は手札も揃った。そして場には見習い魔術師のおかげで水晶の占い師というリソース要員も確保してある。

となれば、やることは一つ。出番だけ、相棒。

「いくぞ、十代！ 俺は水晶の占い師を生贄に捧げ、《ブラック・マジシャン・ガール》を召喚！」

手札から引き抜いたカードをディスクの上に置き、そのカードを読み込んだディスクがソリッドビジョンとしてモンスターを立体映像化させる。

現れるのは黒魔術師の少女にしてマイパートナー。ブラック・マジシャン・ガールのマナである。

《ブラック・マジシャン・ガール》     ATK / 2000     DEF /  
1700

そしてマナの場合は精霊であるため、ソリッドビジョン越しとは思えないリアルな反応を示す。

そう、感情すら目に見えてわかるのだ。

『……………』

「……………あのー、マナさん？」

そんなわけで、召喚したはいいがマナの不機嫌っぷりがやばい。

何故か敵である十代のほうに向かずにこっちを向いていることは突っ込むまい。腕を組んでこちらをじっと睨むその視線は怒っていることを明確に表しているが、それよりもマナは自分のスペック

と恰好をきちんと認識するべきだと思っ。

なんといつても、マナは今腕を組んでいるのだ。つまりどういことかというところ……強調されているのだ。ただでさえ大きい胸が。あ、いや、おっぱいが。

さすがに絶賛お怒り中のマナにそんな目を向けたら、きっと怒りの目が虫でも見るかのような冷たさに早変わりすることであろう。

だから俺は、お怒りのマナの視線を正面から受け止めつつ、つついソコに行きそうになる意識をぐっところえなければならぬという苦行を強要されているのだった。

そんな実に余裕のない状態で無言のマナと視線を合わせていると、不意にマナが口を開いた。

『……そういえば、マスターがサイレント・マジシャンを召喚した時、妙に嬉しそうだった』

「う」

『レベルアップした時、「サイマジきたー！」って叫んでたよね』

「いや、その……」

事実だった。

『アイドルカードは私じゃないって言うし……』

「ぐ」

『レイちゃんのメール見てにやにやしてるし』

「うおーい！」

ありや別にロリ的な意味のことではないぞ！ 兄妹がいなかった俺に妹のような存在ができたんだから、そのメールぐらい喜んでもいいだろうが！

『それに、なんか私の扱いがぞんざいになってるしさ……』

そんな突っ込みはしかし無視され、次々に唇を尖らせて不満を述べていくマナ。その大部分が俺に対するものであるのは当然なんだろうが、非常に居心地が悪いぞ。

しかし、聞いているとその不満の大半は、俺のマナに対する対応が問題になっているようだった。要するに、自分はあまり大切にされていない、とマナは思っているらしい。

そのことに気が付いた瞬間、俺は一瞬気が抜けた。

だってそうだろう、俺がこの世界で一番気を許しているのはマナだ。断言してもいい。だというのに、俺がマナを大切に思っていないなんて、ありえない。

確かにそんなことを言葉にしたことはないから、マナがそう勘違いすることもあるのかもしれない。けど、そんなこと普通は言わないだろう。だって、恥ずかしいし。そんなこと言うの。

だがしかし、このままではマナの不満は一向に解消されず、微妙な空気を残すことになってしまっただろう。それは避けたい。

改めて言うが、マナは俺にとって特別なのだ。なのに、そのマナとそんな空気になるなんて、御免ごうむる。

そういうわけで、俺は恥ずかしながら自分の本心をきちんとマナに言う決心を固めたのだった。

「マナ」

『……なに？』

私怒ってます、というポーズを崩さず、しかし話は聞いてくれるらしい。

俺はなるべく真剣な顔で、マナを正面から見つめて胸の内を素直に吐露した。

「俺にとって、この世界で一番大切なのはお前だぞ」

『……………はえ？』

マナがとんでもなく間抜けな声を出して固まったが、それよりも今は自分の言葉をしっかりと最後まで言い切るほうが先決だ。

そういうわけで、とりあえず言葉を続ける。

「だから、俺がお前をぞんざいに扱うなんてありえない。何を言っただって、俺の中の一番はお前なんだ。信じてほしい」

そうとも、色々大変だった俺に明るさをくれたのは、他でもないこのマナだ。

マナがいたから俺はこうしてられるし、今も笑っていられるのだ。こいつがいなかったら、俺はひょっとしたら今も暗いままだったかもしれない。

だから、俺はマナにきつとマナが思う以上に恩と感謝と好意を抱いているのだ。これは俺の中では何物にも侵しがたい確定事項であり、変化することは絶対に無いと断言できる。

その気持ちだが、他でもないマナに通じていないというのは、やはりどうにも悲しいじゃないか。その気持ちだが、今のセリフを俺に言わせたのかもしれない。



……なんだ、つまり俺が最初から素直になつてればよかつたってことか。

それだけの問題だったとは、なんとも呆気ない。自分の馬鹿さ加減に思わず笑みすら浮かんでしまうほどだ。

『……な、なっ……な、なんてことをいきなり言うの!?!』

しかし、件のマナがこれだけ動揺しているのはいったい何事だ。

「いや、サイマジのあれだろ？ 確かに俺はサイマジが好きだが、あくまでアイドルカードだ。カードなんだよ。俺がこの世で一番大切なのはお前だ。間違いない」

『あ……っ……っ』

顔を真っ赤にして狼狽するマナ。

おい、そこまで動揺するなよ。言ってるこつちに羞恥心がないわけじゃないんだぞ。そんな反応されたらこつちも釣られるだろうが。せつかく気合入れて照れやら何やら抑えてるのに。

だというのに、好き勝手に赤くなって照れやがって。ちくしょう、可愛いじゃないか。これ俺も絶対頬とか赤くなってるわ。隠しきれぬわけないもん、こんな感情。

「だ、だからほら！ 昨日のことは悪かったよ！ だから、機嫌直してくれ！」

自分でもう隠しきれないと悟った俺は、とりあえず照れ隠し込みでそう懇願するように言い放つ。

いきなりの強い口調に驚いたマナは俺を見て、次第にその表情を緩めていく。きつと、俺が照れて言っていることに気が付いたのだろつ。

くっそう、やりづらいつたらありゃしない。

『えへへ、もう気にしてないよ。こっちこそ、ごめんね。あんな態度とって』

「ああもつ、いいよ。それよりほら、デュエルデュエル！」

これ以上この話題を長続きさせては、俺の男としての沽券に関わる。こんな照れまくった男、カッコ悪いに決まってるわ。

そう思って俺は手で十代のほうを示す。すると、マナは最後に俺の近くまで寄ってきて、頬に温かい感触を残してからフィールドに戻った。

「なっ………！」

『うふふー。さあ、頑張りましょうか!』

何を、と言いかけたところでマナは背を向けて杖を十代のほうに  
向けていた。

わざわざこっちから聞くのも恥ずかしいし、そんな態度をとられ  
ては俺はもう何も言えない。というか、言いづらい。

結果、俺は何とも言えない感情を胸に押し込めて、ガシガシと自  
分の頭をかくことになるのだった。

「くっそ……! ああもう、いくぞ、マナ!」

『了解、遠也!』

このことはとりあえず置いておいて、今はデュエルだ。

ある意味この仲直りのお膳立てをしてくれた十代に應えるために  
も、本気で臨まなければ失礼というものだ。

「お、やっと仲直りしたのか」

待っていてくれた十代が、気持ちのいい笑顔と共にそう言うてく  
る。距離もあるし、近づいた俺たちが何をしてたかなんて見えてな

いだろう、その顔は含むものもなく朗らかである。

それに俺もまた笑みを返す。ちょっとまだ赤みが残る顔も、まあこの距離なら問題ないだろう。

「おう。悪かったな、手間をかけさせて」

「なーに、友達のためなんだ。遠慮はなしだぜ！」

「まったく……」

心の底からそう言えることが、お前の凄いところだよ。

俺はその清々しさに、感嘆と感謝を抱く。それを口に出さないのは、まあ野暮ってものだろう。

「んじゃ、ここからデュエル再開だ！」

「おう、来い遠せ！」

再び互いに思考をそちらに切り替える。

ターンは俺。途中で終わってしまった俺の行動を、ここから繋げていく。

「ブラック・マジシャン・ガールの効果、墓地にブラック・マジシャンが1体いるため攻撃力が300ポイントアップ！」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK/2000 2300

墓地に存在する師から魔力がマナに注がれる。

敗れた師の魂を受け継ぎ、その攻撃力が上昇していく。

「更に装備魔法《魔術の呪文書》をマナに装備！ これでマナの攻撃力は700ポイント上昇する！」

《ブラック・マジシャン・ガール》 ATK/2300 3000

「そして魔法カード《賢者の宝石》を発動！ 場に「ブラック・マジシャン・ガール」が存在するとき、手札かデッキから「ブラック・マジシャン」を特殊召喚する！ デッキから来い、二人目の魔術師！」

その呼びかけに心えるように、俺の場にブラック・マジシャンが再び姿を現す。

マナの隣に並び立つその姿は、マハードほどではないにしても、やはり最上級魔術師としての貫録があるように思えた。

《ブラック・マジシャン》 ATK/2500 DEF/2100

「げっ、ブラマジの2枚目!?!」

「おうとも。……バトルだ! ブラック・マジシャン・ガールで  
ラズマヴァイスマンに攻撃! 《ブラック・ハーニング黒魔導爆裂波》!」

「ちよつと待ったあ! 畏発動、《ヒーロー・バリア》! その攻  
撃を無効にするぜ!」

「ツクならブラック・マジシャンでバブルマンに攻撃だ! 《ブラック・マジ黒・魔・  
導》!」

「くっ……!」

十代 LP:3900 2200

バブルマンはこれで消えたが、プラズマヴァイスマンを残してし  
まったか。

残念だが、こればかりは仕方がないことだな。そして手札も1枚  
しかなく、それも何かできるカードじゃない。そういうわけで、こ  
れ以上出来ることは何もない。

「ターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

カードを引いた十代は、そのカードを見て悩むそぶりを見せる。

その目は俺の伏せカード2枚に向けられているため、狙いは丸わかりだ。恐らく除去カードを引いたんだが、どちらを除去しようかといったところだろう。

確かに俺の手札は1枚だけだし場にもそれを阻止できるカードはないが、もう少しポーカーフェイスを意識した方がいいと思う。

「よし、決めたぜ！俺は《サイクロン》を発動！遠也の場の《くず鉄のかかし》を破壊だ！」

サイクロンから放たれた風がくず鉄のかかしのカードを破壊し、墓地に送る。それを見届けて、十代はよし、と頷いた。

「プラスマヴァイスマンの効果発動！手札を1枚捨て、ブラック・マジシャン・ガールを破壊するぜ！いつけえ！」

放たれる雷。これが決まってしまうえば、俺の場はかなり危険な状態になるだろう。だが、俺がそれを考えていないと思ったら、大間違いだ。

マナ自身に何の耐性もない以上、こちらでそれを用意してやるのは当たり前のことだ。

「その効果にチェーンして、畏発動！ 《ガガガシールド》！」

「ガガガシールド？ なんだ、そのカード？」

聞いたことない、とばかりに首を傾げる十代。まあ、勉強があまり得意ではない十代が知らないのは今に始まったことではないが…このカードについては仕方がないだろう。

なにせ、こちらではまだ販売されていないカードだ。

まあ、そうトンデモ効果というわけではないので、ペガサスさんあたりが作っているかもしれないけど。

さて、発動宣言と共にマナの前に現れたのは一枚の盾。青を基本とし、金と赤で彩られた縦に鋭く伸びるその盾は、その中心に漢字の「我」の字が刻まれているのが特徴である。

それを掴み、マナは雷に向けて構えた。

「ガガガシールドは、発動後装備カードとなり自分フィールド上の魔法使い族モンスター1体に装備される！ そして装備モンスターは1ターンに2度まで戦闘およびカード効果では破壊されない！」



「なんだって!?!」

プラズマヴァイスマンの雷はマナに向かうが、しかしその攻撃は構えた盾によって止められてしまう。

無論マナは無傷であり、つまり十代は手札を1枚無駄に捨てただけになるわけだ。

「そんなのありかよお……くっそー、俺は2体を守備表示に変更してターンエンド!」

十代としては、あのサイクロンでもう片方のカードを破壊していれば少なくともマナは倒されていたはずだったのだ。それは悔しくもなるだろう。

くず鉄のかかしの再利用効果を厄介だと判断したのも間違いじゃないけどな。

「俺のターン、ドロー!」

手札にカードを加え、そしてそのまま口を開く。

「バトルだ! ブラック・マジシャン・ガールでプラズマヴァイスマンに攻撃!」  
《ブラック・バーニング黒魔導爆裂波》!」

マナの杖から迸る黒い魔力の波動。それは今度こそプラズマヴァイスマンに命中し、プラズマヴァイスマンを破壊した。

「更にブラック・マジシャンでバーストレディに攻撃だ！　《黒・ブラック魔・導》！」

「ぐああつ」

2体が破壊された際に発生した爆風のような演出に、十代は腕で顔を覆って耐える。

共に守備表示だったため十代にダメージこそないものの、これで十代の方はすっからかんになったわけだ。いわゆるピンチってやつである。

「俺はこれで、ターンエンド！」

さあ、ここからどうする十代。

俺はそんなちよつとしたワクワク感を味わう。コイツがこんなに簡単に終わるはずがない、まだ何かしてくるに違いないという確信があるのだ。

十代といつもつるんでいるからこそ、それぐらいはわかる。

「俺のターン、ドロー！」

いま引いたカードが十代の手札の全てだ。一体何を引いたのか……。

「俺は《強欲な壺》を発動！ デッキから2枚ドローするぜ！」

やっぱり、ここで引くか。

けどまあ、それでこそ十代だ。そうこなくちゃ。

「そして《ミラクル・フュージョン》を発動！ 墓地の《E・HERO バーストレディ》と《E・HERO フェザーマン》を融合し、《E・HERO フレイム・ウィングマン》を融合召喚する！ 来い、フレイム・ウィングマン！」

「フェザーマン！？ …… プラズマヴァイスマンのコストか！」

「へへ、正解だぜ」

一度も見ていないモンスターだから思わず驚いてしまったが、そういう墓地に送る機会は確かにあった。

しかし手札にミラクル・フュージョンがあつたわけでもないのに、よく墓地に送つたもんだ。まあフェザーマンも1枚だけじゃないし、墓地利用のカードは十代のデッキにもあるからおかしなことではないが……そこらへんも、さすがってところか。

そして現れるフレイム・ウィングマン。十代がマイフェイバリットと呼ぶ、最も信頼するカードの1枚である。

《E・HERO フレイム・ウィングマン》 ATK/2100  
DEF/1200

「更に《摩天楼・スカイスクレイパー》を発動！ E・HEROが攻撃力が上の相手と戦闘する時、その攻撃力を1000ポイントアップさせる、HERO専用の戦いの場だぜ！」

次々と地面から生えるようにして出てくるビルの群れ。その中でもひとときわ高い建物の細くとがったアンテナの上。この場で最も高いそこに、フレイム・ウィングマンは静かに佇んでいた。

「こりゃあ……まずい。」

「いくぜ遠也！ フレイム・ウィングマンでブラック・マジシャンに攻撃！ この時摩天楼の効果でフレイム・ウィングマンの攻撃力が1000ポイントアップする！」

《E・HERO フレイム・ウィングマン》 ATK/2100  
3100

摩天楼の効果により、攻撃力がブラック・マジシャンを上回った。

ガガガシールドを装備しているのはマナなので、ブラック・マジシャンを守るものは何もない。

「いつけえ、《スカイスクレイパー・シュート》！」

「ぐあっ！」

フレイム・ウィングマンが右手の竜頭から吐き出した炎によって、ブラック・マジシャンが破壊される。

そしてその差分が俺のライフポイントから引かれていった。

遠也 LP:3200 2600

「まだまだ！ フレイム・ウィングマンの効果発動！ 戦闘で破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！」

その言葉に従い、フレイム・ウィングマンは右手の竜頭を俺に向けて直接構える。そして、そこから吐き出される炎。ソリッドビジ

ヨンだとわかってても、結構怖いぞこれ。

そして、今度はブラック・マジシャンの攻撃力がそのままライフから引かれた。

遠也      LP：2600      100

そして同時にブラック・マジシャンが墓地に送られたため、マナの攻撃力がアップする。

《ブラック・マジシャン・ガール》      ATK / 3000      3300

それにしても、残りライフ100とか……。十代と初めてデュエルした時みたいだな、これ。

俺がそんなことを感慨深く思っていると、十代が可笑しそうに笑っていた。

「なんか、初めて遠也とデュエルした時を思い出さず。あの時も遠也のライフを100まで追い詰めたんだったよなあ」

どうやら、俺と同じことを思い出していたらしい。

それを理解して、俺は思わず嘖き出した。

「はは、俺も同じこと思ってたよ。けどまあ、今回もあの時と同じように勝たせてもらっせ」

「そうはいくかよ！ 今度は俺の勝ちだぜ！ ターンエンドだ！」

互いに笑い合ってから、俺のターンになる。

はてさて、口ではああ言ったがどうしたもんかね。俺の手札は1枚しかない。この状況を打破することはできるが、決定打ではない。なかなか難しいが……すべてはこの引き次第か。

「俺のターン、ドロー！」

おっ、これは……いけるか？

「俺は《魔導騎士 ディフェンダー》を守備表示で召喚！ 召喚に成功したことにより、このカードに魔力カウンターを1つ乗せる。そして、バトルフェイズ！ ブラック・マジシャン・ガールでフレイム・ウィングマンに攻撃！ 《ブラック・パーニング黒魔導爆裂波》！」

マナの放つ魔力の波動がフレイム・ウィングマンに襲い掛かる。

この摩天楼はアニメ効果のため、攻撃対象にされたバトルでもH

ERROの攻撃力は増加する。よって、マナによってフレイム・ウィングマンは破壊されたが、その差分は僅かに200ポイントに留まった。

十代 LP：2200 2000

「ターンエンドだ！」

「俺のターンだ、ドロー！」

十代がカードを引き、にやりと口角を上げる。

「俺は魔法カード《ホープ・オブ・フィフス》を発動！ 墓地のクレイマン、スパークマン、バブルマン、バーストレディ、フェザーマンをデッキに戻し、2枚ドロー！」

十代の手札が2枚に回復するが、しかし俺の場にはモンスターが現在2体いる。防ぐには一手足りない、といったところだろう。

そして、十代は引いたカードを見て少し肩を落とした。いったいなんだ？

「俺は《E・HERO バブルマン》を守備表示で召喚！ カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」



《E・HERO バブルマン》 ATK/800 DEF/1200

あー……なるほど。手札に来たのがバブルマンだったのか。

摩天楼さえなかったら追加で2枚ドロウできたわけだし、肩を落とすのも無理からぬこと、かな？

そして十代のことだ。もし更に2枚引いたとしたら、それは確実に融合だったろうに。俺としては助かったわけだが。

「俺のターン、ドロウ！」

よし、いくぜ十代。これで終わりだ。

「俺は魔導騎士 ディフェンダーを生贄に捧げ、《ブリザード・プリンセス》を召喚する！」

《ブリザード・プリンセス》 ATK/2800 DEF/2100

水色の髪を短く切り、白と青で構成されたドレスが光を反射し輝きを放つ。頭に乗せられたティアラも相まってプリンセスに相応しい可憐な容姿を持っているカードである。

ただ、その手に持ったあまりにも巨大すぎる氷塊と繋がる鎖付きハンマー……要するに馬鹿デカイモーニングスターが、王女様にし  
ては物騒である。

まあ、ツンデレよろしく強気にフンと鼻を鳴らしている姿から、  
気性の強さは窺えますが。

「レベル8のモンスターを生贄1体で召喚だって!？」

驚く十代に、俺はそれがブリザード・プリンセスの効果だと説明  
する。

「ブリザード・プリンセスは魔法使い族を生贄にする場合、生贄1  
体で召喚できる効果があるのさ。さて……」

これで俺の場には攻撃力3300のマナと、攻撃力2800のブ  
リザード・プリンセスが並んでいることになる。

実に壮観である。目の保養的な意味で。

とはいえ、そんなことを言っている場合でもない。これで勝利の  
方程式は揃った、ってところである。そういうわけで、いかせても  
らおう。

「バトル！ ブリザード・プリンセスでバブルマンに攻撃！」

「待った！ その瞬間、畏発動！ 聖なるバリア ……げ、なん  
で発動しないんだ!？」

「ブリザード・プリンセスの召喚に成功したターン、相手は魔法・  
畏カードを発動することはできない! ……っていうか、伏せてた  
のミラフォかよ！ なんて危ないもん伏せてやがる！」

俺の説明に、「ホントだ、凍り付いてんじゃん！」と伏せカード  
を見て驚いている十代。

しかし危ない。さっきのドローでミラフォ引いたのかよ。更に  
2枚引いていたらとか言ったけど、しっかり勝負を決めるカード引  
いてたわけだ。

なんていうかまあ、恐ろしいな、ホント。

「けどまあ、これで怖いものなしだ！ バブルマンを破壊しろ！  
《ゴールド・ハンマー》！」

「ぐっ……!」

バブルマンが巨大な氷塊に押しつぶされ、墓地に送られる。

これで、十代までの道を塞ぐものは何もなくなった。

「これで最後だ、十代！ ブラック・マジシャン・ガールダイレクトアで直接攻撃タック！ 《黒魔導爆裂波》！」

俺の指示を受け、マナが杖先に魔力を溜め始める。

そして、それを『せーの！』の掛け声とともに十代に向けて一気に放出した。

当然ながら十代にそれを防ぐ術は最早なく。その攻撃は容赦なく十代のライフポイントを削り取っていったのだった。

十代 LP：20000

デュエルに決着がついたことで、ソリッドビジョンも解除されていく。

摩天楼の効果で現れていたビル群も消えていき、ブリザード・プリンセスもまた同じように消えていった。

マナは……いつの間にか制服姿で実体化して隣にいた。いつの間

「くっそー！ あそこまで追い込んでこれかよお！」

そして十代は芝生に寝転がり、悔しさを露わにする。

俺はそれに苦笑するしかない。実際、かなりのピンチだったのは間違いない。最後のミラフォが決まっていたら、俺の場は空っぽになっていた。そうだったら、バブルマンの攻撃でジ・エンドである。綱渡りだったのだ。

ブリザード・プリンセスが来てくれて助かった形だ。やはりリリース1体でありながらあの攻撃力と効果は強い。頼りになるカードである。

「けどまあ、サンキューな十代」

「ん？」

「お前のおかげで、マナとも仲直りできたしな」

隣のマナを見て、笑みを交わす。

十代がデュエルをしようと言わなかったら、今日一日俺はマナの機嫌を取るために四苦八苦するという、大変な一日になっていたことだろう。

それをデュエルを通じて解決してくれたのだから、十代には感謝してもしきれない。

「へへ、気にするなって、友達だろ！ それより、もう一回デュエ

ルしようぜ！ それに、これで明日の予定は大丈夫だろ？ 一緒に探検に」

「無理を言うものじゃないわ、十代」

突然会話に入ってきた声に、俺たちは反射的に声が聞こえた方向を向ける。

そこには、しょうがないなあと言いたげな表情で十代を見る明日香の姿があった。

「明日香！？ いつからそこに……」

「そうね、十代がヒーロー・バリアを使ったあたりからかしら」

ということとは、俺とマナが会話していたところは見られていないと。

ふう、危ない危ない。もし目撃されていたら、俺はソリッドビジョンに一方的に話しかける変人ということになってしまう。精霊が見えない明日香には仕方がないことだが、俺の社会的立場のピンチだったぜ。

ん？ ということは、デュエルが終わってマナが実体化したところは見られてたのか？ 何も言っていないところを見ると、摩天楼が消える演出に隠れて、明日香には見えなかったのかもしれない。

まあ、バレてないならいいや。それより。

「なんでだよ、明日香。俺はただ遠也を探検に誘ってるだけだぜ」

「そのことだけど、十代。あなた、もっと空気を読みなさい」

「だから、いったい……」

「ほら」

明日香がそう言って俺たちを指さす。

そこには当然俺と、俺の腕に引っ付くマナがいる。当社比2倍ほどに眩しい笑顔を見せているマナが。

「わかるでしょう？」

「ああ、相変わらず遠也とマナは仲がいいな！」

明日香が確認を取るように十代に振れば、十代は笑顔でそう答えた。

しかし、それは明日香にとって期待するものではなかったのか、返ってくるのは溜め息である。それに十代は首をかしげているが、やはり理由は分からないようだった。

すると、このままでは埒が明かないと思ったのか、明日香は強引に十代の手を掴むとこちらに背を向けて歩き始める。

「お、おい。なにすんだよ、明日香！」

「遠也、マナ。明日はあなたたちは来なくても平気よ。ゆっくりしていてちょうだい」

笑顔でそう言う明日香に、俺は十代と同じように困惑するしかない。「はぁ」と気の抜けた返事が出てしまったのは、まあだから許してほしい。

しかしマナはその意味を正しく受け取ったようで、満面の笑みで明日香に「ありがとう！」と返している。

その後、「でも明日香さんは」と続いたマナの言葉は何を言おうとしていたのか。それは、明日香が首を振ったことで俺がついぞ知ることはなかった。

ただ、マナはそんな明日香に寂しげにくくと頷き、それを見届けた明日香は十代を連れてそのまま俺たちの下から去って行った。

微かに聞こえてくる、「私も行くから、それで我慢しなさい」とか「え、そうなの？ 珍しいな」という二人の声が、なんとも平和である。

そして残された俺たち二人は、さてどうしようかということだ。明日の遺跡探検も行かなくてよくなったようだし、そうなる何を



すればいいのか。翔と隼人もいないみたいだし……万丈目のところにでも行くか？

そんなことを考えていたその時、俺の腕に引っ付いていたマナが、俺の正面に回って下から俺の顔を覗き込んでくる。

それに思わず面喰らったのけぞった俺に、マナはにっこりと笑ってこう言った。

「明日、デートしようよ！」

朝の様子とは一転、すこぶるご機嫌で言われた言葉に、俺は二つ返事で頷いた。

そうだ、十代たちがいなくなるんなら、俺たちは俺たちの時間を過ごそう。マナもこうして乗り気だし、確かにそれはいい考えかもしれない。

「よし、するか。デート」

「うんっ」

マナは元気よく頷いて俺の腕を再び取った。俺もそれに悪い気はしない、というかむしろ高校生男子としては歓迎すべき状態に若干鼻の下を伸ばしつつ、笑顔で許容する。

そして腕を組んだまま俺たちは自室に戻るべく歩き始める。

さて、明日は何をして過ごそうか。そんな予定を、二人であーだこーだと話し合いながらの道のり。何とも青春くさい、気恥ずかしさすら感じる時間だ。

しかし同時に、そうしてマナと笑顔で明日の予定を立てていく瞬間は、俺にとって実に心弾む一時であったりもしたのだった。

## 第22話 大切（後書き）

とりあえず、セブ すた編に入る前の一幕でした。

次回からはおそらく、そちらに入ることができると思います。  
これで一年生も佳境ですね。頑張ってください。

明日香を恋愛的な意味でのヒロインにする件についてですが、アンケートを行ったときは軽い気持ちで出来るだろうと思っていたんですが、予想以上に明日香ヒロインは厳しいことに気が付きました。

何というか、単純に性格的に明日香はハーレム要員に近づいていらずね、個人的見解ですが。

やはり明日香はピシッと筋の通った凛々しい女性というイメージがあります。

そんな女性がいくら恋愛とはいえ、そういう関係になるとするのは、どうにもキャラクターを壊してしまうような気がして……。

それでもどうにか自然に持っていけないかと考えているんですが、現状では明日香ヒロインは厳しいというのが正直なところですよ。

アンケートで希望してくださった皆様には、本当に申し訳ありません。私の力量不足により、表現できる自信がありません。

まだ確定というわけではないですが、厳しいということだけをどうかご理解いただければと思います。

私から言い出したことですから、本当に顔から火が出る思いですが、どうかその点だけご理解いただければ幸いです。

それでは、また次話にて。

そのような変更があるかもしれない拙作ですが、それでも読んでくださればこれに勝る喜びはありません。

図々しいお願いではありますが、拙作をどうかよろしくお願いいたします。

つていうか、ホントに明日香の扱い……！

あああ……安易に、書けるよこんなの、なんて思うんじゃない

……！

## 第23話 先生（前書き）

せぶ すた！

ついに一年生も佳境に入りました。  
セブンスターズ編突入です。

## 第23話 先生

デュエルアカデミアは、いわゆるデュエルモンスターズを指導する学校である。

しかし決して専門学校というわけではなく、あくまで“デュエルモンスターズという科目がある学校”だということを忘れてはならない。

つまり何が言いたいかというと、当然普通の高校と同じように五教科に始まる通常の授業も存在しているということなのだ。

普段は錬金術など奇天烈な授業も取り扱っているが、それはあくまで選択授業なのである。五教科のように国から教育課程として指定されているものは、当たり前前の話だが強制参加の必修科目となっている。

というわけで、俺は今レッド・イエロー・ブルーの一年生全員と一緒に授業を受けている。

今の科目は大徳寺先生の教える化学である。錬金術の講師だけあって、化学も担当しているんだとか。本人は冗談交じりに「本業は錬金術だけにやー」と言っていたが……さすがに担当科目がそっちで採用されてはいないだろうから、冗談だろう。……冗談だよな？

まあ、いいや。ともかく、そういうわけで俺たちは今化学の授業を受けている。普通は理科の中で生物とかと選択になると思うんだが、この学校、化学は必修である。なんでも、錬金術に通じるからとか。おいおい。

そんなに錬金術大事か、現代で。大徳寺先生いわく「デュエルモンスターズでも重要な要素だにゃ」だそうだが。

そんなよくわからない理屈で受けている授業だが、必修である以上手を抜くことはできない。

せつせとノートを取り、内容の理解に努めていく。そうしているうちに、教室の中に響くチャイムの音。

化学の授業の終わりを告げる音だ。同時に、今日の授業の終わりでもある。

教科書とノートを片付けながら、俺は思考に耽る。さて、今日も十代たちのところに行くか。それともカイザーとデュエルでもするかな。この前カタストルで完全封殺してやった時以来、カタストルを目の敵にしているカイザーに付き合うのもいいかもしれない。

「あと、皆本くん」

「……はい？」

と、そんなことを考えていたところ、不意に大徳寺先生に名前を呼ばれる。

何かと思つて視線を動かすと、十代、三沢、明日香、万丈目の四人も呼ばれたのか立っているのが見えた。話が見えないが、とりあえず俺も立つ。

そして五人が立ち上がったのを見て、大徳寺先生が再び口を開いた。

「それじゃあ、このあと五人は先生と一緒に校長室まで行くのだにやー」

……え、俺なんかしたんだろうか。

そこはかたなく不安をあおる校長室にお呼ばれという事態に、俺は内心で動揺する。心当たりはなくてもないが、やはり校長に名指しで呼ばれるのはちょっと怖い。

とりあえず、心の中で鮫島校長に謝る。「校長の頭がナチュラル地毛コーディネーターが剃髪なので、十代たちと冗談半分で語り合っていました、ごめんなさい」と。

本当にこの話題だったらどうしよう。そんな不安を抱きつつ、俺は大徳寺先生率いる四人と一緒に教室を後にするのだった。



結論から言えば、俺の心配は杞憂だった。

というかむしろ、そんなアホなこと考えていてごめんなさい、と謝ったほうがいいレベルの重たい話が校長室では待ち受けていたのだ。

「三幻魔……このデュエルアカデミアの地下に古より封印されし魔のカードです。このカードの封印が解かれると、天は荒れ、地は乱れ、世界を闇に包みこみ破滅に導くと云われています……」

これが鮫島校長が話した言葉である。

“三幻魔” 《神炎皇ウリア》 《降雷皇ハモン》 《幻魔皇ラビエル》の三体からなるレベル10モンスターカードのことだ。

しかし、それは俺の世界での……OCGでの話だ。この世界では三幻魔とは遊戯さんが持つ三幻神と対を成す存在として語られ、真実世界を歪める力を持った凶悪なカードなのである。

そして、鮫島校長からその話が出たことで、俺もようやく思い出した。

これはGXで一年生の最後に起こった事件の話だ。三幻魔の復活を阻止するため、学園から選ばれたデュエリストたちが、復活の鍵を賭けたデュエルに挑んでいくという……リアルに世界の命運がかかった出来事である。

(そうか……やっぱり、この世界でも起きるんだな)

いくらここがアニメの通りの世界ではないとはいえ、共通点が多いのも事実。

やはりその大事件もまた、こうして起こってしまうようだ。何もないなら、それが一番よかったんだけどな。

GXの記憶が薄い俺でも、さすがにこれほどの大事件は忘れない。正確な時期や内容までは、ちょっと怪しいけど……。

けど、そんな場に俺が呼ばれているということはひょっとして……。

俺がそんなことを考えている間に、鮫島校長の説明は既に佳境を迎えていた。

「セブンスターズ……そう呼ばれる者たちが、三幻魔復活を目論み、その鍵を奪わんと向かってきています」

そう言うと、校長は机から小ぶりの木箱を取り出し、「これがそ

の鍵です」と告げた。

それほどまでに絶大な力を持った存在を解き放つ鍵が、目の前の箱の中にある。そう知らされ、誰もが息を呑んだ。

この場にいるのは、俺、十代、万丈目、三沢、明日香、カイザー、クロノス先生、大徳寺先生の八人。……あれ、一人多くね？

と思つたら、校長いわくこの中には保険もいるのだとか。ああ、だから一人多いのか。

「あなたたちは、この学園でも屈指の実力を持つデュエリストです。その力を見込んで、この鍵を託したい。そして、セブンスターズからこの鍵を守ってもらいたいのです」

鮫島校長が真剣な表情で言うが、ひとまず俺は手を挙げる。

「質問いいですか？」

「もちろん。何でも聞いてください」

「では遠慮なく。そんな危険なものなら、さっさと処分した方が早いと思うんですが、何故そうしないんですか？」

俺の当たり前と言えば当たり前前言葉に、周囲の面々はうんうんと頷き、鮫島校長も深く頷いた。

「皆本くんの言うとおりで。出来るならば、そうするのが一番良いのでしょっ」

「……つまり、出来ない理由があると」

その確認に、校長ははいと答えた。

「この鍵は三幻魔の封印を解き放つためのもの、と言いましたね。言い換えれば、三幻魔の力がこの鍵によって抑制されているということなのです。つまり、破壊してしまうと抑える力が弱まり、三幻魔は復活します。また、この地から遠く離れた場所に移動させた場合も同様です。三幻魔から離れるほど鍵の効力はここまで届かなくなり、復活してしまいます」

「なるほど」

確かに、それじゃあ処分は無理か。

要するに三幻魔を復活させるには、その二通りの手段と、正規の手段　鍵を揃えて三幻魔を復活させるための手順を踏む、という方法以外にないわけだ。

しかし……。

「でも、なんで守る方法がデュエルなんです？ 相手が力尽くで来たらどうしようもない気がするんですが。それに、それなら嚴重に金庫にでも入れておけば……」

「お答えしましょう。前者の場合ですが、そちらは問題ありません。古代エジプトでは精霊を石板に宿し、必要な時に呼び出して今でいうデュエルをし、事の取り決めを行ったと云います。三幻魔はその精霊の化身ともいわれ、その身はカードという石板に閉じ込められている状態です。ゆえに、復活のためには古代と同じデュエルという方式を踏まねば、彼らは現世に召喚されないのだとか」

「……なるほど。相手は三幻魔を復活させるといふ目的上、デュエル以外の手を使うことはないということですか」

「ええ。それに、デュエルを通じての復活が、三幻魔の力を最も引き出す手段だと聞いています」

つまり鍵を持った者がデュエルをしなきゃいけない、あるいは鍵がデュエルの場に無いといけないということらしい。なんだろうその超理論。ゆで理論といい勝負だぞ。

だがしかし、ここはカードが全ての根幹をなす世界なのだ。まあ、そういうこともあるのだろうと納得しておく他ない。

とはいえ、一度デュエルという過程を経験した鍵なら、盗むだけで事足りそうな気がするけど。まあ、これは予想でしかないし、現時点ではどうでもいいことか。

俺が言葉の後にそんなことを考えていると、校長は頷き、更に続

ける。

「そして後者ですが、その……理事長が儉約家なためかこの学園の金庫は新型ではあっても最新ではなく、更にセキュリティも島全体をカバーできるほどではなく、防犯が完璧とは言えません。そのうえ情報では、盗み出すことに関してのエキスパートが仲間にいるとも聞いています。なので、目を離すよりは信頼できる方に持つてもらおうほうが良いと判断しました」

つまり、理事長がケチなうえに、セキュリティは不完全。かつ向こうには盗みのプロがいるので、いまいち安心できないと。っていうか、セキュリティは理事長の意図的なものだろ、間違いなく。

理事長にとっても大切なもののはずだが、デュエルを通じての復活が一番。となると、ただ大事にしまっておくだけというわけにもいかない。なら、誰かの手に渡らせるためにセキュリティを緩めたとも考えられる。

そもそもアカデミアは孤島なのだ。盗んですぐさま逃げられるというわけでもない。

警備員もデュエルをふっかけるこの世界。鍵を盗んだ不埒者がついでにデュエルしてくれば儲けもの。その後鍵を取り戻せばいいという考えなのかもしれない。

というか、侵入は出来ても逃がさないためのセキュリティは万全とかありえそうだ。なんか明日香が侵入してきた記者の人がいたとか言ってたし。ちなみにその人は普通に定期便で帰ったらしいが、

無理矢理出ようとしたらどうなっていたことが。

そう考えると、きたないな、さすが理事長きたない。……ただの推論だけだ。

それはともかく、校長としては目を離してその隙に盗まれるリスクを負うより、デュエルで勝てばいいという単純かつ明快な対策を以って目の届く範囲に置かれた鍵を守ろうというわけね。

まあ、それが出来れば確かにそれが一番なんだろう。理事長の思惑とかは別にして。

そんなわけで、俺はひとまず納得したと校長に告げ、それを受けた校長が再び口を開く。

「話は以上です。無理強いはしませんが、もしその覚悟を持っていただけるなら、この七星門の鍵を受け取っていただきたい」

そう言って、校長は箱を開けて中にある鍵を露出させた。

パズルのピースのように、様々な形で分かれながらも一枚の四角い板を形作っている独特の鍵。

その一つを、まず十代が手に取った。

「面白いじゃん！ デュエルときたら、俺がやらないわけにはいかないぜ！」

そして鍵につけられた革紐を首に回して首から下げる。ペンダント状になっているらしく、なるほどこれなら肌身離さず持っているというわけだ。

そして十代が鍵を受け取ったのを見て、万丈目、三沢、カイザー、明日香、クロノス先生と続々鍵をそれぞれ箱から取り出していく。

これで、箱の中に残る鍵は一つ。俺はちらりと大徳寺先生を見た。

「あ、私は遠慮するのにや。実力がはつきりしている皆本君のほう  
が確実ですし、先生は保険のほうがいいんだにやー」

顔に面倒事はごめんです、と書いてある気がするが……まあそれ  
なら俺が受け取るとしよう。

っていつか、大徳寺先生ってこの件の関係者じゃなかったっけ？  
敵側だったような記憶があるんだけど。

まあでも、その後も十代と一緒にいた気がするし……悪い人じゃないのは確かだろう。そう判断したから、俺も大徳寺先生に対して  
普通に接してきたわけだし。

なら、そう深く考えることもないだろうさ。そう心の中で呟きつ  
つ、俺は最後の鍵を手にとって首から下げた。

これで、七人全員に鍵が行き渡ったわけだ。



そして、七つの鍵を持った俺たち七人を前に、校長が一度深く頷く。

「生徒諸君まで巻き込んでしまい申し訳ないが、無理を承知で頼みます。御武運を祈っておりますぞ、皆さん」

その鮫島校長の言葉に、俺たちは揃って「はい」と答える。

この瞬間、俺たちはこの学園……いや、この世界の命運を担う立場に立ったのだった。

その後自室に戻った俺は、ごろりとベッドの上に寝転ぶ。

そして、首から下がっている七星門の鍵を掴んで目の前に持ってきた。

「セブンスターズか……」

白い天井を背景に、鍵をじつと見ながら、考える。

臆気なこの世界に関する記憶をたどっても、もはやほとんど答えは出てこない。さすがに細かな内容までは覚えていないからだ。

せいぜい覚えているのは、相手はその名の通り七人で、仲間と共に十代が活躍していき、最後は三幻魔を操る理事長に勝った……という内容だったはず、という程度の情報である。

これぐらい、最後の黒幕の正体以外はこちらの勢力の勝利を信じていればおのずと導き出される答えでしかない。

だとすれば、やはりそんな知識に頼るべきではないだろう。いつも通り、今できることをやっていくしかない。

俺も今では当事者なのだ。油断なく、今回の事件に臨む。この間、十代とのデュエルでプレイミスをしたが、そんなことは今回に限っては許されない。近々にそつしたことがあったからこそ、一層気を引き締めようと思う。

なにせ、ことは俺だけに留まらず、世界にすら波及するのだから。

そう決心し、俺は今回の事態に備えて、デッキをしっかりと見ておこうと机に向かう。

しかし、その途中。首から下げていた鍵が、風も吹いていないのに微かな振動を放ち始めた。

『遠也！』

その不可思議な現象に驚いていると、離れていたマナが俺の傍に寄ってくる。

かなり焦燥を覚えているのか、その表情には余裕がない。そして、その口から出てきた言葉に、俺の表情もまた余裕をなくすことになる。

『誰かが、闇のデュエルをしてる！』

「なに！？」

その言葉に、俺は瞬時にそれが示す危うさを悟る。

三幻魔、セブンスターズが襲ってくるかもしれない状況、それらを考えれば、闇のデュエルをしているのが何者かなど簡単に想像がつく。

間違いなく、セブンスターズの人間と俺たちの中の誰かが戦っているのだろう。

俺はそう確信を深めると、すぐさま部屋を飛び出した。マナもそれに続いて精霊状態のままついてくる。

すると、ちょうどこちらに来ようとしていたのか、道中でカイザーと鉢合わせた。

「遠也！」

「カイザー、お前もか！」

俺が簡潔に問えば、カイザーは無言で頷いて鍵を見せてきた。カイザーの鍵も同じく振動しており、カイザーもまた俺たちの中の誰かに異状があったことを察したのだろう。

ならば、これ以上言葉を交わす余裕などない。誰が戦っているのかは知らないが、まずはその場に駆けつけなくては。

「行こう、カイザー！」

「ああ！」

互いに最低限の言葉だけで済ませ、俺たちは一心に走る。どこに行くかなど、考える必要はない。

まるで鍵が行き先を指し示してくれているかのように、どこに行けばいいかは何故か理解している。

向かうはアカデミア校舎の裏側　そこにそびえる火山である。

そこで最初に戦っているのは誰なのか、想像はついている。恐らくは、間違いないだろう。

あいつが負けるなんて思っていない。絶対勝つとは言い切れないが、それでもあいつが持ついつそ理不尽なほどの強運と土壇場の強さは並ではない。だからこそ、勝つと信じている。

だが……。

それでも、胸騒ぎがするのだ。嫌な予感が拭えない。

それを振り切るように、俺はひたすら走る。今は一秒でも早く、その場にたどり着くことが先決だと心底から理解しているから。

無事でいてくれよ、十代……みんな！

ただそれだけを願いながら、俺は火山のふもとへと近づいていくのだった。

そうしてたどり着いた先。途中で三沢や万丈目とも合流して行き着いたその目的地では、ジャージ姿の翔と隼人と、二人に抱えられている火傷と裂傷が目立ち意識のない十代の姿があった。

「十代！」

俺は思わず駆け寄り、他の面々も同じく駆け寄る。

近づいて覗き込めば、その顔に細かな傷が多くつけられており、服も汚れただけではない明らかな損傷が見られる。

なにより、ぴくりともしない姿は、どれだけ体力と気力を消耗したのかを如実に語っている。間違いなく、十代が闇のデュエルを行ったのだらう。

「い、生きてるのか？」

その普段の十代からはとても想像できない物言わぬ姿に不安を駆られたのだらう、万丈目が恐る恐る口にする。

それに対して、翔は声を荒げた。

「当たり前だよ！ アニキが死ぬはずないじゃん！」

そして隼人が言うには、脈拍も正常で命に別状はないというらしい。それを聞き、思わず俺たちの間から安堵の息が漏れる。

「やはり、闇のデュエルか」

「そうなんだな。けど、十代は勝ったんだな！」

続けて万丈目が口にしたそれに、隼人が頷いてその結果を俺たちに伝える。

十代が勝ち、鍵も無事。結果だけ見れば俺たちの勝ちだが、十代のこの姿を見ればとても喜ぶ気にはなれなかった。

そして、離れたところにいる明日香にカイザーが気付く。

明日香は一人の人物を抱きしめて、泣いていた。

……そうだ。十代の心配ばかりで思い出せなかったが、この時の十代の相手が操られていた天上院吹雪　行方不明になっていた明日香のお兄さんだったはずだ。

あてもなく探し続け、恐らくは心のどこかで諦めも混ざっていただろう明日香にとって、この再会は心から望んでいた喜ばしいことのはずだ。

明日香が兄を探していたことは、俺たちにとってよく知ることだ。ゆえに、俺を含む全員が念願となった明日香を見て、思わず涙腺を緩ませる。

吹雪さんのことは、本当に良かったと思う。それに、吹雪さんは操られていただけだ。責めるつもりは全くない。

しかし、その一方で。俺はこの三幻魔事件の黒幕に対して、怒りを感じていた。

俺の親友を、ここまで痛めつけてくれたこと。それは、やはり許しがたい。

必ず、叩き潰す。

俺は崖の向こうから上ってくる朝日の光を浴びながら、改めてこの世界に生きる当事者として今回の件に立ち向かうことを誓った。

\*



と、勢い込んだ方がいいのだが。

「相手が出てこない以上、どうしようもないよなあ」

アカデミア内の保健室。そこで十代が体を横たえているベッドの脇に座りながら、俺はぼやくように口にする。

そう、セブンスターズの人間が誰で何処にいるのかわからない以上、俺たちに出ることは出てきてから対処する、という後手にならざるを得ないのだ。

そのため、俺は決意したもののその決意を示す機会なく、こうしてお見舞いに来ているというわけだ。

さっきまでは翔もいたんだが、現在保健室にいるのは俺と十代、明日香と吹雪さん、そして鮎川先生だけである。

「仕方ないって。俺としては、俺が治るまで待つてほしいけどな、ははっ！ ついつつ！」

「急に笑うからだ。やっぱり大人しく寝てたらどうだ？」

何もせず寝ているほうが身体に悪いと言い張るから話につき合っているが、これぐらいで痛みが走るとはな。やっぱり無理はさせない方がよさそうだ。

そう思う俺とは裏腹に、十代は心配ないとばかりに笑顔を見せる。

「大丈夫だつて。鮎川先生も、話したりする分には何も問題ないつてよ。数日で普通の生活に戻れるみたいだし」

「そうか。でもまあ、無理はするなよ。お前が倒れてるのを見たときは、心臓止まるかと思っただぞ」

「いやー、悪かったな遠也。でも、こうして話につき合ってくれるのは助かるぜ」

「ま、それぐらいはな」

互いに何でもない会話をしながら、時間を過ごす。

ちなみに現在は平日の午後になったばかりの時間であり、本来なら授業中である。

しかし校長がそこらへんは気を利かせてくれたのか、鍵を持つ俺たちは授業に出ていない時は公欠扱いになっっているらしい。まあ、そうでもないとデュエルに渾身で向かっていけるはずもなし、妥当と言えばそうなんだろう。

そういうことになっているため、保健室にはよく人が訪れる。十代と吹雪さんの様子を見るためだ。特に明日香はこれ幸いとばかりに吹雪さんにつきつきりである。ずっと探していたお兄さんが戻ってきたのだから、その気持ちを察して明日香が入り浸っていてもみんな何も言わないでいる。

そうして訪れる中には、クロノス先生の姿もあった。そして寝ている十代を一瞥し、「闇のデュエルなんてあるわけないノーネ！」と吐き捨てて帰っていった。相変わらずである。

とはいえ、実際そのデュエルによって十代が傷つき、ましてそれが自分が人質に取られたせいだと気にしている翔と隼人はその態度に憤慨していた。

あれでクロノス先生も今回の件で気が立っているのだからと二人を宥めすかしたのは、つい昨日のことである。

「しかし、寝てるだけだと暇だぜ。……そういや、セブンスターズの二人目はまだ来てないんだろ？ 他になんか変わったことはないのか？」

欠伸をかみ殺しつつ言う十代。まあ、風邪の時とか、恐ろしいほどに暇を持て余した記憶があるからわからなくもないが……。

しかし、変わったことねえ。あるっちゃあるか。隣で明日香もなんか聞き耳立ててるし、保健室の住人は話題に飢えていると見える。

なら、話すか。ひよつとしたら、俺たちにも関係がある話かもしれないしな。

「変わったことと言えば、今アカデミアの中は吸血鬼の話題で持ちきりだな」

「吸血鬼い？ このご時世にか？」

いきなりファンタジーな単語が出てきて、さすがに十代も訝しむ。

まあ、吸血鬼なんて物語の中だけの存在。それよりも現実に危機に直面している俺たちを試してみれば、そんな娯楽に気を向けている余裕はない。

だが、学園中に広まっているこの噂。俺たちは今回の件に無関係ではないと思っている。

「確かに眉唾な話だよ。けど、それは闇のデュエルも一緒だろ。実際に体験するまでは、お前もあるとは思ってなかっただろ？」

「それはまあ……」

あの廃寮探検の時。あの時まで、十代は闇のデュエルなんて存在しないと思っていたはずだ。それを引き合いに出され、十代は確かにと頷く。

「つまり、あなたは……いえ、みんなはその吸血鬼がセブンスターの可能性があると考えているのね」

「そういうこと。それもあって、みんな一応警戒している」

本当に吸血鬼かどうかなんて、実際のところ誰も気にしていない。

だが、この時期にそんな噂が流れ始めるということ自体が怪しすぎる。そのため、全員がすぐに対応できるよう気を付けているのだ。

十代と明日香は知らなかったようだが、保健室にこもっていても噂など知りようがない。十代の怪我、明日香の兄との再会という状況を考えて、俺たちも気を利かせていたところがあるからな。

とはいえ、知らないというのも問題だろうから俺が今こうして話したわけだ。これで、何かあっても件の吸血鬼が怪しいと思えるだろう。

そして、こうして話したのがフラグだったのかと後になって思わないでもない。直後、保健室の扉を勢いよく開けて隼人が入ってきたからだ。

「た、大変なんだな！ クロнос先生がセブンスターの一人と戦うことになったんだな！」

「クロнос先生が!?!」

「そんな……闇のデュエルは本当に存在するのに、危険だわ！」

闇のデュエルなんて存在しないと、この保健室でも言っていたクロノス先生だ。明日香がそんな先生を心配するのも分かる。

有るものを無いと決めつけて誤認しているのは、勝負の場においては致命的な隙でしかないからだ。

「クロノス先生……。隼人……案内してくれ！」

「十代！？ お前は寝てた方がいいんだな！」

「先生が戦うつていうのに、呑気に寝てられるか！ 俺は這つても行くぜ！」

言うが早いかベッドから降り、やはり力が入らないのか体勢を崩した十代を、近くにいた俺が慌てて支える。

その姿に、十代が本当に這つてでも行くと悟ったのだろう。隼人と明日香は諦めの溜め息をついた。そして、せめて負担が最小限になるよう、隼人が十代を背負って現場に向かうことになった。

闇のデュエルでの敗北は、死あるいは罰が科せられる。クロノス先生がそんな目に遭っていないよう、俺たちは先生の勝利を願いながら走っていく。

隼人が示した湖。最短の距離をひたすらに駆け抜けた俺たちの目

に飛び込んできたのは、緑色の長髪と赤いドレスに身を包んだ女性。そして、それと相対しているクロノス先生の姿だった。

だが、そのクロノス先生は相手の攻撃によってダメージを受けたのか、地面に倒れている。それを、大徳寺先生を含むカイザーと三沢、万丈目に翔といった面々が心配そうに見ていた。

「ふん、このような弱小デュエリストが、この私、吸血鬼カミュラに挑もうとするからこうなるのよ」

そして、カミュラと名乗った女が倒れ伏したクロノス先生を嘲る。

それに怒りを覚えたのは俺だけではないだろう。事実、背負われてきた十代は、痛む体を押して大声でそれを否定した。

「それは違うぜ！ 戦った俺だからわかる。クロノス先生は、強いんだ！」

その声に、全員の視線が俺たちを集まる。

「見せてくれよ、クロノス先生！ 先生のターンを！」

十代が叫ぶ。

普段あまりいい印象を持っていないはずのクロノス先生に対して、しかし十代はカミューラの嘲りを良しとはできなかった。

十代にとって、デュエルとは楽しいものであり、そしてデュエルを通じて沢山の人と繋がっていけるものである。

そして、クロノス先生はそんなデュエルを通じて知り合った一人だ。加えて、今はこうして一つの目的に向かって共に戦う仲間である。十代にとって、クロノス先生を応援する理由はそれだけで十分だったのだろう。

そして、その声を受けたクロノス先生は、その声に応えるかのように立ち上がる。

若干よろめきながらもカミューラを見据え、そして決意を込めた表情と声で力強く宣言した。

「このクロノス・デ・メデイチ、断じて闇のデュエルなど認めるわけにはいかないノーネ！ 何故なら、デュエルとは本来、青少年に希望と光を与えるもの！ 恐怖と闇をもたらすものではないノーネ！」

それは、デュエルアカデミアに勤める教師としてクロノス先生が持っている信念なのだろう。それを聞いたカミューラは鼻を鳴らし、小馬鹿にするが、俺たちは違う。

クロノス先生のその言葉に感じ入るものがあったのは、その場に



いる全員だった。

「それで、闇のデュエルは存在しない、してはいけないと教諭は言  
い続けていたのか」

「ああ。その通りだって思うぜ、先生！」

「そうだ。先生の言う通りデュエルは光だ。だからこそ、俺たちは  
こうして友達になってるんだからな」

三沢の得心がいったとばかりの言葉に、十代と俺が同意して声を  
上げる。それに続き、隼人、翔、カイザー、万丈目、明日香、大徳  
寺先生も、次々にクロノス先生の言葉を支持し始める。

「ちっ、争いとは本来闇のもの！ そんなこともわからないとは、  
群れるしか能がない人間はこれだから！」

その流れを不快に感じたのか、カミューラが吐き捨てるように言  
い放つ。

何とでも言え。だが、俺たちはクロノス先生の言葉が間違ってい  
ると思えない。たとえ本来が闇だとしても、だからといっていつ  
までもそうである必要はどこにもないのだから。

そして、それらの言葉にクロノス先生が僅かにこちらを見る。そ  
して、俺たちに対して小さく笑みを見せたのだ。オシリスレッドの

人間も含まれているというのに、だ。これまでの先生の態度からは考えられないことである。

しかし、それも一瞬のこと。クロノス先生は再びデュエルに戻っていた。

クロノス LP：1700

カミュラ LP：3200

「私のターン、ドロー！ 私は《アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人》を召喚する Nope！」

クロノス先生のある永続魔法《アンティーク・ギアヤッスル古代の機械城》を生贄の代わりにし、呼び出されるクロノス先生のエースモンスター。

《古代の機械城》は発動してから通常召喚されたモンスターの数まで「アンティーク・ギア」と名のつくモンスターの生贄の代わりに出来る効果を持つカード。これまでのターンで、2体以上のモンスターが通常召喚されていたということだろう。

《アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人》 ATK/3000 DEF/3000

そして相手となるカミュラの場合には《ヴァンパイア・バツ》と伏せカードが1枚。それにフィールド魔法《不死の王国 - ヘルヴ

アニア」か。

ヴァンパイア・バッツは場のアンデッド族を強化する効果と、自己蘇生の効果を持ったカード。

そしてヘルヴァニアは通常召喚権を放棄する代わりに、手札のアンデッド族モンスターを捨てることで、場のモンスターを一掃する効果がある。なかなか厄介なカードたちだ。

《ヴァンパイア・バッツ》 ATK/800 1000 DEF/  
600

だが、攻撃力で圧倒的にクロノス先生が有利。そのため、クロノス先生も迷わず攻撃に移った。

「アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人！ ヴァンパイア・バッツに攻撃するノーネ！  
《アルティメット・パウンド》！」

無論その攻撃にヴァンパイア・バッツが敵うわけもなく、そのまま破壊されてカミュラのライフが削られた。

カミュラ LP:3200 1200

「くっ……！ ヴァンパイア・バッツの効果で、デッキから同名カ

ードを墓地に送りこの破壊を無効にする！　そして、ヘルヴァニアとのコンボで、あなたの場のモンスターは破壊されるわ！」

「甘いノーネ！　手札より《大嵐》を発動！　場の魔法・罠カード全てを破壊しますーノ！　その伏せカードとヘルヴァニアは破壊なノーネ！」

先生が発動した大嵐によって、フィールドに強風が吹き荒れる。

そしてその風は伏せられていたカードとフィールド魔法を破壊し、カミューラの場を蝙蝠1体だけにした。だが、その状況においても、カミューラの不敵な笑みは消えない。

「ふふ、やはりあなたは弱いわ、クロノス先生！　破壊された《不<sup>ヴァ</sup>死族の棺<sup>ンパイア・ヘッド</sup>》の効果発動！　墓地のアンデッド族モンスター1体を特殊召喚する！　私は《不死のワーウルフ》を特殊召喚！」

フィールドに石造りの古めかしい棺が現れ、その中からカミューラが指定してモンスターが眠りから覚めるかのようにゆっくりと姿を現す。

《不死のワーウルフ》　ATK/1200　1400　DEF/600

破壊された時に効果が発動する罠……俺の持つ《リミッター・ブ

レイク』と同じような効果だ。確かにそれだと、大嵐はただ相手を助けるだけのカードでしかない。

「ぐぬっ……！ カードを1枚伏せて、ターンエンドなノーネ！」

「私のターン、ドロ！ 私は『生者の書 - 禁断の呪術 - 』を発動！ 墓地の『ヴァンパイア・ロード』を復活させ、あなたの墓地のアンティーク・ギアピースト『古代の機械獣』をゲームから除外！」

『ヴァンパイア・ロード』 ATK/2000 2200 DEF  
/1500

これで相手の場には3体のモンスター。攻撃力だけならいまだクロノス先生の古代の機械巨人が上回っているが、流れが向こうにいつているような気がしてならない。

「更に私はヴァンパイア・ロードを除外し、『ヴァンパイアジェネシス』を召喚する！」

ヴァンパイア・ロードが姿を消し、代わりにフィールドに降り立つ巨躯の魔人。紫に染まった身体と、青黒く染まった背中 of 蝙蝠と似た作りの翼が非常に禍々しい。

『ヴァンパイアジェネシス』 ATK/3000 3200 DE

まずい、ジエネシスの攻撃力は古代の機械巨人より上だ。もし倒されてしまった場合、総攻撃を受けてクロノス先生は負ける！

それがわかってしているのだろう、カミューラは浮かべていた笑みを一層深くして意地悪く笑う。

「ふふ、これでおしまいよ、クロノス先生！ ヴアンパイアジエネシスアンティーク・ギアコーレムで古代の機械巨人に攻撃！ 《ヘルビシャス・ブラッド》！」

その身を血のような赤き旋風に変え、クロノス先生の古代の機械巨人に攻撃を仕掛けるヴアンパイアジエネシス。

それを見て俺たちの口から、あっ、と思わず声が漏れる。しかし、クロノス先生の表情に焦りはなく、ただ笑いだけがそこにあった。

「この瞬間を待っていたノーネ！ 伏せカードリパースオープン！ 《次元幽閉》！ これは攻撃してきたモンスターをゲームから除外する罠カード！ ヴアンパイアジエネシスには退場してもらいますー！」

「なっ!？」

クロノス先生が発動した罠カードによって、古代の機械巨人の前に次元の裂け目が現れる。血の風となったジエネシスは、目標にた

どり着く前にその裂け目から次元の彼方へと消えていき、クロノス先生の場には何も被害がないままフィールドは静寂を取り戻す。

カミューラは最高攻撃力のモンスターが場からいなくなったことに唇を噛み、対照的にクロノス先生は得意げな笑みを浮かべていた。

「ふふん、普段はあまり投入しないカードでスーガ、生徒でもないシニョーラに遠慮は無用ですノーネ。尤も、さっき入れたカードが、まさかこの場で役に立つとは思いませんでしターノ」

なるほど、確かに次元幽閉はその強力な効果ゆえ投入すれば強いが、生徒相手の指導には向かない。元の世界でもガチカードとして有名だったうちの1枚でもあるし。

だが、十代が怪我を負うような事態、更に自身が戦うこととなったクロノス先生は、万全を期してこの場で投入したのだろう。

それをこの状況で引くあたり、さすがは実技指導最高責任者である。

「さすがです、クロノス教諭！」

「やるじゃないか、クロノス！」

「素晴らしい戦術です、教諭！」

決着に希望が見えてきたこともあって、俺たちは一斉にクロノス

先生に声援を送る。

「ほっほ、当然でスーノカプチーノ。やはり闇のデュエルなどで、このワタクシ、クロノス・デ・メデイチに挑もうということが、所詮間違いだったノーネー！」

そして、背をそらし、自信満々に高笑いし始めるクロノス先生。

さっきの姿に触れてクロノス先生を見直した俺たちだったが、その調子者っぷりと今の姿には苦笑を浮かべるしかなかった。

「……調子にい、乗るんじゃないわよッ！ この人間どもがアアアッ！」

しかし、そんな和やかな空気がカミューラの叫びによって一変する。

口を大きく開き、もはや口の端が切れるほどに開かれたそこから人間にはあり得ない鋭く尖った牙が並ぶ。そして異様に長い舌を外気に触れさせながら、見開いた目でクロノス先生を睨みつけている。

その美女然としたさっきまでの姿から大きく変わった異形の姿に、俺たちは言葉を失った。



「手加減してあげていればつけ上がった……！ 気が変わったわ！ あなたには必要ないと思っていたカードだけど、特別にこのカードで闇に葬ってくれる！」

そう言って、カミューラは手札のカード1枚を手取る。

そして、すぐさまそれを発動させた。

「私は魔法カード《幻魔の扉》を発動ッ！」

カードがディスクにセットされた、その瞬間。

カミューラの背後に現れる石造りの門。そこに備え付けられた扉は固く閉ざされているが、そこから漂う雰囲気也得も言われぬ恐怖感を俺たち全員に感じさせる。

思わず後ずさる俺たちに気を良くしたのか、カミューラの笑い声が響く。

「ほほほ……、それでは幻魔の扉の効果処理に移りましょうか。幻魔の扉、このカードはまず相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「なんでスト！？ それでは禁止カードの《サンダー・ボルト》と同じ効果になってしまうノーネ！？」

クロノス先生の驚きも尤もだ。サンダー・ボルトは、ノーコストで相手の場をがら空きにするという凶悪性から禁止カードとなり、今後二度と使用許可は下りないだろうといわれるほどの強力カード。

十代が持つアブソルートZEROも同じ効果を内蔵するが、あちらは融合召喚した後に自身をフィールドから離すという必要があるため、そこまでではない。それでも強力な効果であることに変わりはないが。

だというのに、魔法カードでその効果は最早反則だ。先生の言う通り、サンダー・ボルトそのままじゃないか。

俺たちの驚愕をよそに、発動した幻魔の扉はその冷たく閉ざされた扉をゆっくりと開いていく。

扉の向こう側は、黄ばんだ歯と赤く充血した肉によって囲まれ、まるで人間の口であるかのようだ。そしてそこから溢れた光に晒された古代の機械巨人は為す術なく破壊され、クロノス先生の場ががら空きになる。

これで次のターン、クロノス先生がモンスターを場に出さなければ、そのまま負けになる。確かに厳しいが、無理というわけでもない。まだ希望は残っているといえるだろう。

そう思っていると、カミューラが再び小さく笑った。

「幻魔の扉の効果は、これだけではなくってよ。更に幻魔の扉の効果、このデュエル中に使用したモンスター1体を、あらゆる条件を

無視して私の場に特殊召喚する！」

幻魔の扉。言うなれば、サンダー・ボルトと死者蘇生を一纏めにしたような効果を内蔵した魔法カード。俺たちは、その出鱈目な効果に愕然とした。

「……な、なんなノーネその効果は！ インチキ効果も甚だしいノーネ！」

クロノス先生が憤りを露わにして食って掛かる。

当然だ。デュエルモンスターズは明確なルールの下に行われるものである。だというのに、こんなゲームバランスを一枚で崩壊させてしまうようなカード、存在してはいけない。

そんなデュエルに悪影響しか出さないカードが禁止カードにならないはずなのに、こうしてデュエルで使用されている事実。デュエルを愛する人間にとって、一気にそれを壊すカードの存在を、認めるわけにはいかなかったのだ。

しかし、カミューラはそんな怒声も涼しい顔で受け流す。そして「当然代償はあるわ」と言葉を発した。

それは当たり前だろう。あの効果で何もないとか、目も当てられない。

「このカードは私自身の魂を生贄にすることで発動する。このデュエルに負けたら、私の魂は幻魔に捧げる供物となってしまうのよ」

「おい、それじゃ実質ノーコストじゃないか！」

予想の斜め上をぶっ飛んでいったカミューラの示す代償に、俺は思わずそう叫んだ。

このライフポイント4000の世界において、このカードを使う状況で勝ちに持つていくことは簡単なことだ。つまり、負ける可能性の方が低いのである。なら、負けた時に魂を奪われるというそれは、ノーコストに等しい。

「ふふ、威勢のいい坊や。……そうね、せつかくの闇のカードなのだから、闇のデュエルらしく使うとしましょう」

そう言うと、突然カミューラの身体が分裂してもう一人のカミューラが現れる。それに驚く間もなく、そのもう一人の姿が掻き消えた。

何をしようとしているのか。そう考えた、その時。

『逃げて、遠也！』

「っ！？」

「きゃ!?!」

マナの忠告に従い、俺はすぐさま身をよじる。しかし、隣に明日香がいたため身体がぶつかり、その行動は明日香を弾き飛ばす結果となっただけで、俺の身体はその場から動けなかった。

その結果、俺の身体はもう一人のカミューラに拘束されて引きずられていくことになった。

『遠也! このお!』

マナが戒めを解こうと分身体に魔力をぶつけているが、しかしあまり効果がない。マナの攻撃はかなりの威力があるというのに、それは何故か。その理由はすぐに分かった。

幻魔の扉だ。その開かれた扉から溢れているエネルギーがカミューラ本体と俺を捕えている分身体を覆っているのが見える。いくらマナが上級魔術師であっても、さすがに神に匹敵する力を持つ存在には敵わない。本体ではない欠片とはいえ、同じことだ。

マハードでも、この拘束を解くことは恐らくできないだろう。それでもあきらめずに攻撃を続けてくれているマナに何か言っていたいが、首をうまく絞められて話すことができない。

今の俺は、このまま黙っていることしかできなかった。

「遠也！」

「遠也くん！」

「おのれ……！ シニョール皆本をどうするつもりなノーネ！」

俺が囚われたのを見て、全員が思わずと言ったように俺の名前を呼ぶ。そしてクロノス先生はその表情を怒りに歪ませてカミューラに怒鳴った。

それに対して、カミューラは余裕をもって微笑むだけである。

「ふふ……このカードのコストは私の魂。でも、せつかくですもの。私の身代わりをこの子にお願いしようと思ってね。それにしてもこの坊や、変わった存在を連れてるわね……」

「な、なんでスト！？ それでは……！」

「ああ、そういうことよ。私に勝つということはこの坊やを殺すということになるわ、クロノス先生！ 私はこの子の魂を生贄に、《アンティーク・ギアゴレム古代の機械巨人》を召喚！」

「ぐうっ……！」

『遠也！』

全身から徐々に力が抜かれていくような感覚。思わず膝をつきた

くなるが、信じられない力で首を抑えられているため、強制的に立たされたままだ。

人間じゃないってのは、どうやら本当らしい。そんなどうでもいい感想がなぜか脳裏によぎった。

《アンティーク・ギアゴレム  
《古代の機械巨人》

ATK / 3000 DEF / 3000

そして、カミューラ場に現れるクロノス先生のエースモンスター。つい先ほどまでクロノス先生を守る力だったそいつが、今度は牙を剥いてクロノス先生に向き合っている。

「私はこれで、ターンエンド！ さあ、どうするのクロノス先生！ 大事な生徒を助けたくないの!？」

「くっ……私のターン、ドロー！ ……ターンエンド、なノーネ！」

引いたカードを確認することすらせず、すぐさまエンド宣言するクロノス先生。

明らかに勝つつもりがないその姿に、俺は目を見開いてクロノス先生を見る。すると、目があつたクロノス先生が、ふっと笑みを見せた。

「私は教師でスーノ。断じて生徒を犠牲にすることなど、出来ませ

ノー！ 諸君、たとえ私が負けたとしても、闇に屈することだけはしてはいけないノーネ！ 闇は光を凌駕できない。そう信じて、決して心を折らぬこと！ それを忘れてはいけません！」

胸を張り、そう言い切るクロノス先生の姿に、俺たちは何も言えず頷くことしかできない。

先生はすでに覚悟を決めている。俺のために、自分が犠牲になるという覚悟を。

「先生……！」

「クロノス教諭……！」

十代、カイザー、この場にいる他の面々からの声を受けながら、クロノス先生はカミューラの前に立つ。その姿に、何も言えない、ただの足枷である自分が情けない。俺はただその姿を見ていることしかできなかった。

そんなクロノス先生を、嘲笑を浮かべて見るカミューラ。まるでそんな決意など取るに足らないとばかりにデュエルを再開する。

「私のターン、ドロー！ ふふ、最後の授業も終えて、思い残すことはないでしょう。《アンティーク・ギアコレクション古代の機械巨人》でクロノスにダイレクトアタック直接攻撃！ 《アルティメット・パウンド》！」



クロノス先生にとって頼れる味方だったカード。その繰り出される攻撃が、主人であるクロノス先生を襲い、その残りライフポイントを根こそぎ奪い取っていった。

「ぐぬううつつ！」

クロノス LP：1700 0

闇のデュエルのダメージは現実のものとなる。

ライフポイントを0にされたクロノス先生は、力なくその場に倒れこむ。まるで糸の切れたマリオネットのように地面に崩れ落ちたその姿に、不安を抱かずにはいられない。

幻魔の扉が消えていき、それと同時に俺を拘束していた分身体も消えていく。支えがなくなり膝をついた俺に、精霊状態のmanaがすぐさま寄ってきて、魔法による回復をしようとしてくれている。

そしてそんな俺たちをよそに、カミューラはクロノス先生のところへ歩み寄ると、その首から下げられていた七星門の鍵を奪っていく。

そして次に、布で作られたシンプルな人形を取り出した。

「それでは約束通り、負けた者の魂をもらっていくわ」

そう言うや否や、人形とクロノス先生の身体が紫色の不気味なカラーに包まれていく。そしてクロノス先生の身体が消えていき、代わりに人形の方にクロノス先生の特徴が装飾のように浮き出始めていた。

「く、クロノス先生が人形に……！」

翔が恐れを抱いた目でカムイラを見る。

その視線を受けながら、カムイラは完成したクロノス先生の人形を一瞥する。そして「やっぱり不細工、いらないわ」と呟いてその人形をその場に捨てた。

それを見て、瞬時に頭に血が上る。

「てめえっ……！」

しかし、怒りとは裏腹に身体が動かない。力を吸い取られたうえ、首を絞められて酸素が足りなくなっているのだ。思い通りにならない身体に、思わずイラつく。

「ふふ、怖い怖い。それでは、今宵はこのあたりで。いずれ、素敵な招待状を出させていただきますわ。ふふ、ふふふ……！」

その言葉と同時に背後の湖の上に現れる巨大な西洋の城。

そこに身体を霧のようにして飛び去っていったカミューラ。

俺たちはそれをただ黙って見送ることしかできなかった。

ようやく少しは動くようになった身体で歩く。そして捨てられていったクロノス先生の人形を拾い上げて、人形についた土汚れをきれいに払いのけた。

俺のために、犠牲になったクロノス先生。大きな感謝と、深い申し訳なさが同時に俺の心を締め上げる。

「くっ……！」

人形を持っていない方の手を、力いっぱい握りこむ。

そして、城の方を睨みつけるようにして見据えた。そこにいるであろうカミューラを貫くほどに、真っ直ぐ視線を投げつける。

自然みんなに背を向けて立っていた俺は、そのまま後ろのみんなに声をかけた。

「……みんな。次は、俺が奴と戦う」

短く告げたその言葉に、反論を唱える者は誰もいなかった。そのことに、少しだけ感謝を心の中で述べる。

俺のせいで、クロノス先生はこうなってしまったんだ。なら、その尻拭いは自分でしてみせる。そして、クロノス先生を必ず元に戻してみせる。

隣にマナが寄り添ってくる気配を感じながら、俺はそう決意するのだった。

### 第23話 先生（後書き）

セブンスターズ編、第一話。

書いていたらほとんど原作をなぞる形になってました。

というのも、クロノス先生を書きたくして仕方がなかったからなんです。

セブンスターズ編、カムミューラとの初戦でのクロノス先生のカツコよさは異常だと思うのは私だけではないはず。

だというのに、原作では改心したあとはカムミューラのやられ役だと？それはクロノススキーとしては許せん。

よろしい、ならば改変だ。と、こういうわけである。

とはいっても、大きく変えるわけにもいかないんでこの程度です。

それでもクロノス先生は幻魔の扉を使わせるまでになりました。

やったね、タエち（ry

そういうわけで、クロノス先生のところを書きたくてやっていたら、こんな形になってました。

次回からはもう少しオリジナリティも出せると思っているので、どうか今回だけはご勘弁を。

ORCSのクリボルトの残念感に肩を落とす葦束良日でした。

## 第24話 敵討(前書き)

V S カミューラです。

ようやく主人公もセブンスターズと対戦しました。

## 第24話 敵討

クロノス先生とカミューラの戦い。

その後、俺たちは言葉少なに帰路をたどり、それぞれの寮へと戻っていった。

口数が少なくなるのは当然だろう。クロノス先生は最高指導責任者という立場もあり、生徒にとつて比較的よく接する教師である。その近しい人間が、物言わぬ身体に変えられてしまったのだ。

それを目の前で見ていたのだから、その辛さは一層深い。闇のデユエルは、一度始めれば誰であろうと介入できない。だから見殺しにしてしまったのは、仕方がなかった。

そんなことを本気で思える人間は、あの場には一人もいなかった。だからこそ、誰もが多かれ少なかれ自責の念と己の無力さを感じ、口を噤むしかなかったのだ。

そんな感情を表に出したところで、何もいいことはない。それがわかるほどにはみんな大人であり、そして、そんな感情を超えるほどに怒りを感じていたからこそ、誰も何も言えなかったのだ。

「……………」

そうして自室に戻った俺は、早速デッキの構築に努めていた。

カミュラのデッキは、OCGカードが比較的少ないカードで構成されたアンデット族。なかでも、主力であるヴァンパイアジェネシスをサポートすることを主眼に置いた構成ではば間違いないはずだ。

いうなれば、【ヴァンパイア】デッキといったところか。そして、それだけならば対策など容易だ。それどころか、俺が通常使うデッキでも油断さえしなければ十分倒せる。

だから、真の問題はそこではない。

魔法カード《幻魔の扉》。これが最も警戒しなければならない問題だ。

己ではなく他者の命を糧にしても発動させることができる、サンダー・ボルトと死者蘇生の両方の効果を持ったトンデモカード。

これを封じられなければ、再び誰かの魂を人質にとられて終わるだ。

……クロノス先生のように。

「……これで、40枚」



思わず手に力がこもる。俺のためにその身を差し出したクロノス先生、そうさせてしまった自分への憤りのためだ。

あの人は、あの時本当に教師の鑑だった。闇ではなく光を信じ、そして子供たちを導くためにこそデュエルは存在すると説いた。

そんな素晴らしい人の犠牲の上に、俺はこうして過ごしている。

なら、俺はクロノス先生の示したその信念に沿って、カミューラに勝つ。それがクロノス先生の生徒として、そして助けてもらった身として俺がすべきことである。

「……よし」

完成したデッキをケースにしまう。

すでに夜遅い。カミューラに挑むのは明日に持ち越しである。

明日、万全でデュエルに臨めるよう、今日はさっさと寝るに限る。寝不足でミスをしたなんてことになったら目も当てられないからな。

というわけで、俺が身を横たえるべきベッドを視界に収める。

そして、変わらずそこにあつた相棒の姿に、俺は少しだけ嘆息した。

背を丸め、両膝を抱えるようにしてベッドの上に座っているマナ。その顔は膝の上に伏せられており、表情を見ることはできない。

ひとまず今はデッキの構築を優先させたため後回しになってしまったが、帰ってきてからずっとこうである。

……何故、と聞くほど馬鹿ではないつもりだ。十中八九、俺が捕まった時のことだろう。

そう確信に近い予想を持った俺は、ベッドに近づき、その横に腰を下ろす。ぎし、とスプリングが沈み、マナの身体も合わせるように小さく跳ねた。

今ので俺が横に来たことは分かっただろうに。それでも、マナは一向に顔を上げようとしない。

「……はあ」

溜め息を一つ。俺は膝を抱えて丸くなっているマナの身体を強引に自分側に倒し、その頭を抱えるようにして胸に押し付けた。

さらさらの金髪が広がり、その上からあやすようにゆっくり撫でる。もう片方の手は、マナの背中に回してポンポンと軽く叩く。

「気にするなよ。相手は神に匹敵する力を持つてたんだ。たとえマハードでも、どうしようもなかったさ」

これは恐らく事実である。マハードがいかに力のある魔術師とは

いえ、さすがに神には敵わない。ゆえに、神と同格……あるいは迫る力を持つ幻魔にも、それは同じことだろう。

だから、仕方がない。これは俺の本心である。

しかし、マナには納得がいかないらしい。顔を胸に押し付けたまま、小さく反論する。

「……確かに、遠也の言う通り……そうかもしれないよ。けど、私はそれでも、遠也を守りたかった」

言っつて、マナはその手をゆっくり俺の背中に回す。俺の無事を確かめるようにそっと触れたその手に、マナの抱いた恐怖が滲み出るようだった。

危うく幻魔に魂ごと奪われかけた俺。きっと、その立場がマナだったら……俺は、今のマナと同じように感じるに違いない。

だから、マナの気持ちはわかる。けど、実際に生贄にされそうだったのは俺であってマナじゃない。だから、たとえ気持ちはわかってても、俺がマナにかけられる言葉は一つしかないのだ。

「ありがとう。諦めずに何度も攻撃してくれてたのは、わかってたから。それだけで十分だって」

俺は少しの笑みと共にそうマナに返して頭を撫でる手を止め、身

体ごと胸の中に抱きしめる。

「俺も、クロノス先生を助けられなかった。それに俺が捕まらなければ、マナがこんな思いをすることもなかったのにな。……悔しいよ、自分の無力が。だから、二人できつちりこの借りは返してやるう。ぐうの音も言わせないほどにさ」

明日、俺はカミューラに挑む。

そこで、俺を怒らせたことを後悔させてやる。マナを悲しませた怒りをぶつけてやる。俺が捕まらなければよかったという気持ちは確かにあるが、知ったことか。そもそも襲ってきたのは向こうなのだから、あいつが悪い。

なら、この怒りは全部元凶である奴に持っていつてもらおう。

「マナが気にしてくれるのは嬉しいけど、だからといってマナに悲しんでほしいわけじゃない。俺は、ほら、その……笑ってるマナのほうが、まあ、好きだからさ。あんまり気にしすぎるな！ な」

俺は若干気恥ずかしい言葉も交えつつ、抱きしめたマナの背を軽く撫でる。

すると、一拍置いて返ってきた「……うん」という小さな返事。

それを聞いた俺は、マナを抱きしめたままベッドに横になる。

必然マナも一緒に倒れ、二人してベッドに寝転ぶ形となった。マナの顔は見えない。さっき胸に顔を押しつけたままだからだ。

とはいえ、そこまで強く押さえつけているわけでもないのです、すぐに腕の中からは出られるはずだが……マナのほうから離れる気はないらしい。

そんな中ふと感じる、もぞもぞと胸のあたりで動く感触。たぶんマナが顔を上げたのだとわかったが、俺はこの状況の恥ずかしさから下を見ることをしなかった。

顎の下からじっと見られていると感じながら、俺は極力意識しないようにして目をつぶる。そして一言だけマナに告げてから身体のを抜いた。

「…………おやすみ」

マナの返事も聞いたことで、俺はもう寝ることに抵抗がなくなっていた。

人肌に触れながらの就寝とは少々恥ずかしいが、こつという精神的にキツイことがあった時は何よりも安心できる手段の一つでもあるのも事実。

まあ、これは俺のわがままなので、マナが嫌なら当然拒否してオーケーだ。俺はすでに力を抜いているため、抜け出そうと思えば容易になっている。だから、あとはマナの意思に任せて完全に寝るス

タンスへと移行する。

すると、緩めた腕の中でマナが一層身体をくっつけてきたのを感じた。ドキツとするが、今日の出来事が出来事なので、気持ちがあるという欲望に向かうことはなかった。

そして俺の顔の下、胸のあたりで呟かれた「……おやすみ、遠也」という小さな声。俺の名前を呼ぶその声が、すっと子守唄のような安心感を伴って耳に届けられるのを感じながら、俺は明日に備えて意識を落としていくのだった。

\*

翌日。

俺はカミューラがいるであろう城が浮かぶ湖の前に立っていた。

昨日、クロノス先生が倒され、人形にされた場所だ。

我知らず身体に力が入り、筋肉が強張る。もちろん、怖いわけじゃない。カミューラに対する怒りと、この一戦にクロノス先生の命がかかっているという事実によって、どうしても緊張というものは出てきてしまうのだった。

だが、だからといって自信がないわけではない。むしろ、俺は負けるとは露ほども考えていない。奴が何をして来ようとも、完膚なきまでに叩き潰す。それだけのことはできると、確信していた。

今行くから、首を洗い忘れてるなら早く洗っとけ。そう心の中で毒づき、一步踏み出す。

その時。

「相変わらず不気味だぜ」

「なんか霧も出てるっすよ」

「まあ、吸血鬼らしい佇まいと言えるな」

「ふん、陰気なだけだ」

「それに趣味も悪いわ」

「同感だ」

「……な、なかなか雰囲気があるんだにゃー」

「お、俺の後ろに隠れないでほしいんだな」

俺の背後から聞こえてくる声。

それに対して、俺はいい感じに高ぶっていた気持ちに水を差され、溜め息をついた。

「……おいこら、ギャラリー。もうちょっと緊張感持てや」

振り返ってじろりと全員に視線を向ければ、彼らは揃って気まぐげな顔をした。さすがに本人たちにも自覚はあったらしい。

クロノス先生の命がかかってんだぞ、という責めも含まれたそれに晒され、しかし十代は明るく笑った。

「悪かったけど、でも俺にとっちゃ何も気負うことがないから、ついな。遠也が戦うんだ。負けるはずがないだろ？」

それがまるで当然のことであるかのように言い放ち、「ま、俺がやっても絶対勝つけどな」と付け加える十代。

そのあまりにあっけらかんとした物言いに、俺は一瞬言葉をなくす。



しかし、それが俺に対しての信頼から発せられている言葉だと理解したところで、俺もまた笑みを見せて十代に返した。

「当たり前だろ、親友。俺を誰だと思ってるんだ」

「へへ、そうでなくちゃな。クロノス先生のことは任せたぜ、親友」  
「！」

安心したように、肩の力を抜く十代。

ひよっとして、十代なりに俺が緊張しているかもしれないと考えて気を使ってくれたのかもしれない。

なら、俺はその信頼に応えるだけだ。

「ああ、任せとけ！」

そう力強く言い、俺はみんなに背を向ける。

そして向かうのはカミューラが待つ湖上の城。湖の上に敷かれた赤い絨毯の上を歩き、城内へと侵入する。

石造りで天井が高く作られた、いかにも中世の城。時おり照明代わりに光を放つたいまつ火に目を向けながら、その中を進むことしばし。

俺たちは光が差し込む広い空洞に出た。

ガラスのない窓から漏れた明かりが照らすそこは、全方位がやはり石で囲われているものかかなりの広さを持っている。二階まで吹き抜けの作りとなっており、壁に沿うようにして通路がある。

恐らくここはダンスホールのようなもので、通路は二回から一回のパーティーを見下ろす物見席のような役割なのだろう。

そうしてこの場の考察をしていると、不意にその通路から高い声が響いてきた。

「フッフ、逃げずに来たなんて偉いわね。それで、今宵はどなたがお相手になってくださるのかしら？」

赤いドレスに緑色の長髪。そこに挑発的な表情を加えて、カミューラが余裕綽々の態度でこちらを見やる。

問いかけのような言葉でありながら、その視線は俺に向けられている。昨日のあのやり取りから、俺が向かってくると予想できていたのだろう。だというのに、回りくどい演技をするものだ。

俺はすつと前に出て、一言だけ簡潔に述べる。

「俺だ」

そして、カミューラはわかっていたとばかりに頷いた。

「ええ、ではその変わった坊や。上がってきなさい。楽しいデュエルをしましょう、闇という名のね……」

そう告げて、物見通路の中で僅かにスペースがせり出した部分にカミューラが立つ。その反対側に同じようなスペースがあることから、そこで向かい合って対戦しようということだろう。

その意図を察し、俺は二階に上がるための階段に向かう。みんなも近くで見るためか一緒に上がってくる。そして俺は持っていたクロノス先生の人形がデュエルの余波に晒されないよう万丈目に渡してから、カミューラの対面へと移動する。みんなは階段を上がったところで立ち止まった。

向かい合う俺とカミューラ。そしてそれを横合いから見ているみんな。そんな図式が出来上がったところで、カミューラはくすりと口元に笑みを浮かべた。

「ふふ、いいのかしら。こんなにお友達を連れてきて。また昨日のあなたみたいになるかもしれないわよ」

「……………」

安い挑発だ。そんな言葉で、俺が感情を動かすとも思っただ

ろうか。だとしたら、なめられたものである。

俺は隣に浮かぶマナに目を配り、小さく笑みを交わし合う。それだけで心が落ち着く。負ける気が全くしない。

だから、俺は余裕たつぷりに笑ってカミューラに返す。

「安心しろ。お前ごときに苦戦なんかしないから」

「なっ………！」

その俺の対応が癪に障ったのか。カミューラは一転して険しい表情で俺を見た。

「可愛げのない子………！ いいわ、そこまで言うのならあなたも私のお人形にして差しあげましょう！」

「出来もしないことを言うもんじゃないぜ！」

「減らず口を………！」

互いにデュエルディスクを起動させ、準備は万端。

さあいくぞ、クロノス先生の魂は返してもらおう！

「デュエルッ！」

皆本遠也 LP：4000

カミューラ LP：4000

「私の先攻、ドロー！」

カミューラがデッキからカードを引き、手札に加える。

幻魔の扉はあちらが先攻である以上、気にしなくていい。今考えるべきは、カミューラがどう場を整えてきて、それにどう対処するかだ。

「私は《不死のワーウルフ》を守備表示で召喚！ カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

《不死のワーウルフ》 ATK/1200 DEF/600

なるほど。手堅く、オーソドックスな始まり方と言える。同時に、俺のデッキの性質をよく知っているとも言えるな。

俺が最もよく使うシンクロデッキは、最初のターンでも高攻撃力を何体も並べることができる。俺が後攻となっているうえに出せる

モンスターがワーウルフしかいなかった場合、こうして守備を固めてくることは後攻ワンキルを防ぐ重要な手だ。

シンクロデッキはそれがごく普通に可能なデッキだからこそ、警戒するのは理解できる。

ま、今日使うデッキは違うほうだけでも。

「俺のターン、ドロー！」

ターンが俺に移り、それを見た三沢が発する声が聞こえる。

「カミューラの幻魔の扉は強力なカード……遠也は、いったいどう対処するつもりなんだ」

そしてそれは他の面々にとっても気になることだったのだろう、その言葉に頷くようにして俺の方に目を向けている。

確かに幻魔の扉は強力だ。発動すれば一気にデュエルを決着にまで持っていくだけの出鱈目さを持っている。

だが、どれだけ強力でも所詮は魔法カードでしかない。なら、取れる手段はいくつもある。

俺は手札のカード1枚を手に取った。

「俺は《熟練の黒魔術師》を召喚！ そして更に魔法カード《テラ・フォーミング》を発動！ デッキからフィールド魔法を1枚手札に加える！ 魔法カードを発動したことで、黒魔術師に魔力カウンタ―が1つ乗る」

《熟練の黒魔術師》     A T K / 1 9 0 0     D E F / 1 7 0 0     C O  
u n t e r / 1

テラ・フォーミングの効果により、デッキを抜き取ってその中から目当てのカードを手札に加える。そしてデッキをデュエルディスプレイに戻し、オートシャッフル機能によってデッキが自動的にシャッフルされた。

「今回の遠也のデッキは魔法使い族か！」

「けど、フィールド魔法？ 遠也がフィールド魔法を使うのを見るのは、初めてだわ」

「ああ、俺も見たことがない」

明日香の驚きにカイザーも同調する。

それはこの場にいる誰もがそうだった。それも当然、俺はこれまで一度もフィールド魔法をデュエルで使ったことがない。だからこそ、この戦法はこの島に来てからは初公開となる戦術だ。

「いくぞ！ 俺はフィールド魔法《魔法族の里》を発動！」

フィールド魔法ゾーンにカードを置き、それによって古めかしい古城の石壁から周囲の景色は変化していく。

現れたのは大樹が根を張り、陽光が差す森の中。青々と緑が茂る大自然と、その中に溶け込むようにして見える木と土で構成された住居のようなもの。

まるでファンタジー映画に出てくるエルフの里のようなイメージがぴたりと当てはまる。そんな景色がそこにあった。

「魔法カードの発動により、熟練の黒魔術師に2つ目のカウンターが乗る」

《熟練の黒魔術師》 counter / 1 2

「俺は更に《闇の誘惑》を発動。デッキから2枚ドロし、手札の闇属性モンスター《見習い魔術師》を除外する。魔法カードの発動により、熟練の黒魔術師に3つ目のカウンターが乗る」

《熟練の黒魔術師》 counter / 2 3



魔力カウンターが3つ溜まった。これにより、熟練の黒魔術師の効果が発動する。

「熟練の黒魔術師の効果発動！ 魔力カウンターが3つ乗ったこのカードを生贄に捧げることで、手札・デッキ・墓地から《ブラック・マジシャン》1体等特殊召喚する！ デッキから現れる最上級魔術師！ 《ブラック・マジシャン》！」

熟練の黒魔術師がその身に満ちる魔力を糧に祈りを捧げ、徐々に光の粒子となってその姿が消えていく。

そしてその光はやがて黒く染まり、人の形へと集束していく。そして完全に人間の姿をかたどった時。その黒い光は1体の魔術師の姿となって俺のフィールドに姿を現した。

《ブラック・マジシャン》 ATK/2500 DEF/2100

「1ターン目からブラック・マジシャンが……遠也は本気だ！」

決闘王の相棒としても名高いモンスターの登場に、場の視線が集中する。それを受け止めながら、ブラック・マジシャンは器用にチツチツと指を立てて振った。

「バトルだ！ ブラック・マジシャンで不死のワーウルフに攻撃！  
《ブラック・マジック黒・魔・導》！」

黒い魔力が杖の先に集まり、そこから闇色の波動が放たれてワーウルフに襲い掛かる。

守備表示のワーウルフの守備力はわずか600ポイント。拮抗する間もなく、一瞬でワーウルフは破壊された。

「くっ……！ けれど、不死のワーウルフは不死身のモンスター！ その効果により、デッキから同名カードを攻撃力を500ポイントアップさせて特殊召喚する！」

《不死のワーウルフ》    ATK / 1200    1700    DEF / 600

そんなことは言われるまでもなく理解している。だが、攻撃力1700程度なら、警戒するほどでもない。

「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

終わってみれば、なかなかのターンだったといえる。

まさか3枚積みしてある里が来ずにテラフォのほうが来るとは予

想定だったが、結果的には同じことなので問題はない。

それに黒魔術師にカウンターを乗せきり、ブラック・マジシャンを召喚できた。高攻撃力のモンスターの召喚に成功したのだから、まずまずのスタートである。

みんなも俺の優勢を見て、わっと盛り上がる。しかし同時に、俺の場を見て首をかしげてもいた。特に、カードについては先生並みかそれ以上に詳しい三沢が顕著である。

「魔法族の里……聞いたことがないカードだ。場の魔法使い族が強化されているわけでもないし、魔法使い族を特殊召喚する効果があるわけでもなさそうだ。一体……」

そしてその疑問はカミューラも感じていたのだろう。訝しげにこちらを見ている。まあ、あつちはそれ以上に自分の知らない手を使っていることに驚いているのかもしれないが。

「残念だったな、カミューラ。俺には頼もしい相棒がいるからな、偵察は無意味だったろう」

「……やっぱり、あの小娘の仕業だったのね」

「まあな。それにしても蝙蝠とヴァンパイアとは、わかりやすいもんだったよ」

「……遠也くん、何の話っすか？」

俺とカミューラのかわす言葉に違和感を持った翔が、訪ねてくる。

俺はそれに、カミューラは蝙蝠を使って俺たちの偵察をしていたと告げる。俺たちがどんなカードを使い、どんなデュエルをするのか。カミューラはそれを覗き見て、対策を練っていたのだ。

それを知った翔たちは、姑息な手を使うカミューラに憤慨した。

「そんな！ 卑怯だぞ、カミューラ！」

そうカミューラを責めるが、カミューラは涼しい顔である。

「ふん、勝つために行う努力を卑怯とは言わないわ。あなたたちのそれは負け犬の遠吠えって言うのよ、おわかり？」

小馬鹿にした物言いに、更に怒りを募らせる翔。

だがまあ、この件だけに関して言えば俺はそこまでカミューラを責める気にはならない。強い敵相手に対策を練るのは当然だし、それが勝負というものだ。

覗きは確かに犯罪なので責められるべきだが、普段のデュエルを見ていても大体カードの使用率は分かる。それで対策を練られるのは、当たり前のことだ。

その本人への対策を用意してくることは、カミューラが言うように勝つための努力であって、そこは特に責められる点ではないだろう。

「私のターン、ドロー！」

カードを引いたカミューラが、にやりと笑う。

「ふふ、せっかくブラック・マジシャンを召喚できたのに、残念だったわね。あなたの命運は、ここまでよ」

その自信にあふれた言葉に、カミューラが引いたカードが何であるのか全員が察する。

「引いたのか、幻魔の扉を……」

カイザーが忌々しげに口にする。クロノス先生があまりにも卑怯な手で敗れた姿を思い起こしたからだろうか。

そして、カイザーの言葉にカミューラは機嫌よさそうに頷く。

「ええ、そう、その通り！ このカードの効果でブラック・マジシ

ヤンを破壊し、私の場に特殊召喚する……するとどうなるか、わかるでしょう？」

カミューラの場には攻撃力1700の不死のワーウルフ。そして俺の場のブラック・マジシャンがこちらに移れば、総攻撃力は4200となる。

つまり……。

「2体のダイレクトアタックで、遠也のライフは尽きるわけか……」

万丈目がその単純すぎる計算によって導き出される未来に、歯噛みしながら答える。

そう、いかにライフが満タンであろうと、それを上回る攻撃を受ければひとたまりもない。そしてそれを実行するためのキーカードは既にカミューラの手の中にある。

それを悟り、他の皆も俺を心配そうに見てくる。……ただ一人、十代を除いて。

「そのよくわからないフィールド魔法も、意味がなかったようね。これで、あなたも私のお人形……」

陶醉するように言うカミューラだが、俺はもうそんな言葉に付き合っ気はさらさらなかった。

「御託はいい。早くターンを進めろよ」

「ふふ、最後の強がりぐらい許してあげるわ。さあ、これで終わりよ！ 魔法カード《幻魔の扉》を発動！」

カミューラが声高く宣言し、示したカードをディスクに差し込む。周囲の皆もあの禍々しい扉の出現を予期し、思わず身構える。

……しかし、予想に反して場には何も変化がない。そのことに、誰よりもカミューラが驚いていた。

「な、ぜ……なぜ発動しない!？」

カミューラはカードを引き抜き、もう一度セットする。しかし、やはりディスクは反応せず、当然ながら幻魔の扉が現れることもない。

その不可思議な事態に驚きの表情を見せているこの場の全員に原因を説明するため、俺は口を開いた。

「フィールド魔法《魔法族の里》の効果だ。俺の場にのみ魔法使い族が存在する場合、相手は魔法カードを発動できない。尤もお前が

魔法使い族を召喚すればこのロックは抜けられるが……」

その説明を聞き、こちらを睨みつけているカミューラに、にやりと笑みを見せる。

「そのデッキはアンデット族で構成されているはずだ。魔法使い族がいるとしても恐らくかなり少数……違うか？」

「くっ……このガキがああ！」

凶星、あるいは魔法使い族が全く入っていないのか、カミューラが牙を剥き出しにした恐ろしい顔で罵倒してくる。

まあ、俺の場に魔法使い族がいないと、俺の方が魔法カードを使えなくなるというデメリットもあるが……魔法使い族主体のこのデッキでは大きな問題じゃない。

つまるところ、これで幻魔の扉は破られたということだ。

「魔法カードの発動そのものを無効にってしまうフィールド魔法か。遠也のあのデッキが使えば、まさに鬼に金棒」

三沢の言葉に、うんうんと頷く面々。デメリットもあるし、効果で除去されることも多いからそこまで強力なカードというわけでもないんだが……まあ、効果だけ見れば強力と言えなくもない。



効果の発動には対応していないとはいえ、こうして最初の方で発動してしまえばそれもあまり関係がなくなる。魔法使い族にとってかなりの追い風となるフィールド魔法なのだ。

「へへ、俺は信じてたぜ！ 遠也がこれぐらいで負けるわけないってな！」

十代がそう屈託なく言い、つられるように俺も笑みを浮かべる。

その様子を憎々しげに見てくるカミュラが、己のターンを続行していく。

「くっ……！！ ならお前の場の魔法使い族を破壊すればいいだけよ！ 私は不死のワーウルフを生贄に捧げ、《ヴァンパイア・ロード》を召喚！」

《ヴァンパイア・ロード》     ATK / 2000     DEF / 1500

こいつが来たということは、来るかカミュラのエースが。

「そしてヴァンパイア・ロードを除外！ ヴァンパイア一族の誇りを今ここに！ 特殊召喚、《ヴァンパイアジェネシス》！」

《ヴァンパイアジェネシス》 ATK / 3000 DEF / 2100

攻撃力3000の大型モンスター。これなら俺の場のブラック・マジシャンを倒すことができる。更に、俺の場に魔法使い族がいなくなるため、魔法族の里の効果で俺は魔法カードを封じられることになる。

それを見越してか、カミューラの顔に若干の余裕が戻る。

「くられ、ヴァンパイアの一撃を！ ブラック・マジシャンに攻撃！ 《ヘルビシャス・ブラッド》！」

「畏発動、《くず鉄のかかし》！ 相手モンスター1体の攻撃を無効にし、このカードは再びセットされる」

「くっ……忌々しい！ 私はこれでターンエンド！」

カミューラが苛立たしげにターンを終える。

それを俺は冷めた目で見つめる。自分の思い通りにいかないことに憤りを感じているらしいカミューラだが、そんな怒りは子供の癪と一緒だ。何も怖くなんてない。

クロノス先生の魂を取り上げ、命の危険にまで晒したこと。そのことに対して俺が抱くこの怒りに比べれば、そんな自分勝手な理由で苛立つカミューラ滑稽にさえ感じる。

だからこそ改めて確信する。油断なく、容赦なく。このデュエルは俺が制すると。

「俺のターン、ドロー！」

……その気持ちをカードたちも汲んでくれたのだろうか。

手札と場に揃ったカードは、このデュエルに決着をつけるに十分なもの。応えてくれたカードたちに心の中で礼を言い、俺は勝利への道を形作っていく。

「俺は《召喚僧サモンブリスト》を召喚！ 効果により守備表示となり、そして手札から魔法カード《賢者の宝石》を捨て、デッキからレベル4モンスター1体を特殊召喚する！」

《召喚僧サモンブリスト》 ATK/800 DEF/1600

かつてシンクロ召喚が登場したばかりのころ。化け猫こと《レスキュー・キャット》と共に環境を大いに引っ掻き回した準制限カードだ。

その効果はまさに驚異的で、魔法カード1枚をコストに、即座にレベル8シンクロとランク4エクシーズに繋がられるという恐ろしい性能を持つ。

今回コストにした賢者の宝石は少々惜しいが、このターンで決着をつけるために必要なカードではないため躊躇なく墓地に送る。そして、俺はデッキから一枚のカードを手にとった。

「俺はチューナー・モンスター《フレムベル・マジカル》を選択し、特殊召喚！ そしてレベル4召喚僧サモンプリーストとレベル4フレムベル・マジカルをチューニング！」

《フレムベル・マジカル》      ATK/1200    DEF/800

共に魔法使い族の2体。シンクロ召喚にお馴染みのエフェクトによって空中に飛び上がり、光の輪と星になった2体は眩い輝きの中に消えていく。

呼び出すのは、シンクロデッキにおけるエースモンスター！

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

陽光に包まれた森の中で現れるスターダスト・ドラゴンの姿は、まるでファンタジーの世界に迷い込んだかのように幻想的である。

更に言えば、ブラック・マジシャンとスターダスト・ドラゴン。この2体が並んだ姿は、この世界では俺にしかわからないだろうが、

感動さえ呼び起こすものであった。

《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500 DEF/2000

さて、これでカミューラは魔法族の里によって魔法カードを、スターダストによって破壊をもたらす効果モンスターの効果と罠カードまで封じられたことになる。

これで《王宮のお触れ》でも張れば完璧なのだろうが、そこまで悠長に付き合ってやる理由もない。

クロノス先生の魂を取り戻すため、勝てるなら確実に勝ちに行く。エンターテイメントじゃないんだ。見ているみんなもそんなデュエルを望んでいるわけじゃない。

カミューラの場の伏せカードだけが気になるが、立ち向かって、打ち破る。そう決意し、手札のカードに手をかけた。

「更に魔法カード《千本サウザンナイフ》を発動！ ブラック・マジシャンが場にいる時、相手モンスター1体を破壊する！ ヴァンパイアジエネシスを破壊！」

ブラック・マジシャンの背後に現れた無数のナイフ。

それらが一斉にヴァンパイアジエネシスに向かって放たれ、その巨体を次々に抉っていく。

さすがにそれだけの猛威に晒されて耐えきれなかったのか、ヴァンパイアジェネシスは破壊されて墓地に送られた。

「ば、馬鹿な……！ 私のヴァンパイアジェネシスが……！」

呆けるカミューラには付き合わず、俺はスターダストに視線を向ける。

相手の場は空っぽ。ならば、することなど一つだ。

「バトル！ スターダスト・ドラゴンでカミューラに直接攻撃！」  
ダイレクトアタック

「くっ……！ 畏発動、《リビングデッドの呼び声》！ 墓地から《不死のワーウルフ》を特殊召喚！」

《不死のワーウルフ》    ATK/1200    DEF/600

あの伏せカードはリビングデッドの呼び声か。ここにきて壁モンスターが出てくるとは。

だが、リビングデッドの呼び声ぐらいならば問題ではない。

「なら不死のワーウルフに攻撃対象を変更する！ いけ、スターダ

スト・ドラゴン！ 《シューティング・ソニック》！」

スターダストの口から放たれる音速を超えた空気の弾丸。それは当然のように不死のワーウルフに直撃し、呆気なく再び墓地へと逆戻りさせる。

そして同時に、その攻撃力の差分1300ポイントがカミューラのライフから引かれていった。

カミューラ    LP：4000    2700

「くっ……！」

これで再びカミューラの場合はゼロ。今度は伏せカードも何もない本当にまっさらな状態だ。

そして俺の場にはブラック・マジシャンがいる。カミューラのライフは残り2700ポイント。計算では200ポイント残る計算になる。

それがわかっているからだろう、こちらを睨みつけるカミューラの目には次のターンで必ず見返してやるという強い意志が見える。

ここに来て勝負を諦めず勝ちに貪欲なあたり、ひよっとしたらカミューラにも譲れない何かがあるのかもしれない。

だが、それは俺には何の関係もないことだ。カミューラから話を聞いたわけでもない。

ただ、あいつはクロノス先生の命を脅かした。そして今もその命はあいつの手に握られている。そこからクロノス先生を解放する手段がこのデュエルに勝つことならば、俺はたとえどんな理由があろうとそれを実行する。それだけである。

「いくぞ、カミューラ！ ブラック・マジシャンで直接攻撃！」  
ダイレクトアタック

ブラック・マジシャンが杖を構える。その瞬間、俺は再び声を上げた。

「そしてこの瞬間、罨発動！ 《マジシャンズ・サークル》！ 魔法使い族の攻撃宣言時に発動し、お互いのデッキから、攻撃力2000以下の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する！」

「なっ………なんですってえ!?!」

ここに来て、魔法使い族専用の罨カード。それも、ダメ押し of 追撃を行う存在を場に呼ぶためのカードだ。

もちろん、俺が呼ぶのは一人しかない。

「待たせたな、相棒！ 《ブラック・マジシャン・ガール》！」



フィールドに描かれた六芒星の魔法陣。そこから飛び出してくるのは、どこかコミカルな服装に身を包んだ黒魔術師の少女。

常には明るいその表情も、思うところがある相手に対してはなりを潜める。マナにしては珍しく、睨むようにカミューラを見つめて杖を構えた。

《ブラック・マジシャン・ガール》     ATK / 2000     DEF /  
1700

この罫カードは相手にも特殊召喚の機会を与える。そのため、カミューラのデッキに魔法使い族がいるなら、特殊召喚可能である。

だが、一向にカミューラがカードを触る気配がない。そして、吐き捨てるようにカミューラの口から言葉が紡がれた。

「私のデッキに、魔法使い族はいない……ッ！」

唇を噛みながらそう告げ、ぎろりと恐ろしい形相でこちらを見る。

結果として、カミューラの場合にモンスターが出てくることはなかった。つまり、カミューラへの攻撃を遮るものは、何もありません。ということである。

「マナ」

『うん！ 決めよう、遠也！』

その声に俺は当然とばかりに頷き、最後の宣言をするべく口を開く。

「これで終わりだ、カミューラ！ ダイレクトアタック ブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガールで直接攻撃！ ブラック・バーニング・マジック 《黒爆裂破魔導》！」

横に並んだ二人のマジシャン。互いの杖先に集った魔力を混ぜあい、それは一層大きな魔力の塊となって二人の頭上に集束する。

そしてマナはそのまま視線をカミューラに向ける。挑むような目つきで目標を見据え、頭上の魔力を解放すべく行動する。

『せーのぉー！』

そんな掛け声とともに杖が一気に振り下ろされる。

二人のマジシャンが集めに集めた魔力が指向性を持ってカミューラへと殺到し、圧倒的なまでの波動の中にカミューラの身体は瞬間に呑み込まれていった。

「ぎゃああああッ！」

断末魔の叫びをあげ、カミューラが身をよじりながら崩れ落ちる。

闇のデュエルによる副作用、現実の痛みがカミューラを襲っているのだろう。しかし、それは自業自得というもの。カミューラは、結局自分の手で自分の首を絞めることになったのだ。

カミューラ   LP：27000

カミューラのライフポイントが0を刻み、決着がつく。

そして最後の攻撃のダメージで息も荒くへたり込んだカミューラに、俺は対面から大声で宣言した。

「俺の勝ちだ、カミューラ！ クロノス先生を元に戻してもらおうか！」

精霊状態になったマナが隣に戻ってきたのを感じながら、俺はカミューラの返答を待つ。しかし、一向に返事がない。

それなりに声を張っているのだから、いかに距離があろうと屋内で聞こえないはずがない。訝しみつつ、俺は再度声をかけた。

「おい、カミューラ！」

呼びかけると、不意にカミューラの肩が揺れる。

小刻みに上下に揺れる肩。そして、漏れ聞こえてくる微かな声。それに気づいて俺は眉をしかめる。

そう、カミューラは笑っていたのだ。

「ふ、ふふはは、戻せですって？ ふふふ！」

俯き座った状態のままそう呟いたカミューラは、下に向けていた顔を上げて、口の両端が切れるほどに口角を持ち上げて、にいと笑った。

「イ・ヤ・よ」

はつきりとした拒絶、そして何よりその人を食った態度に、怒りよりも前に感情が止まって絶句する。

言葉を失った俺たちを見て、カミューラは更に笑った。

「私は、負けたとしても勝てるのよ。なにせ、クロノスの魂を元に

戻せるのは私だけなんだからねえ」

ゆらりとダメージの残った身体を持ち上げ、幽鬼のごとく立ち上がる。

そして、更に言葉を続ける。

「まったく、どうして負けたら私が素直に元に戻してあげるなんて思えるのかしら。いい子ちゃん達の考えることは分からないわあ。ふふふ！」

その言い分に、思わず齒噛みする。

そうだ、俺たちは心のどこかで「負けたらクロノス先生を戻してくれるに違いない」と考えていた。それは相手にもそれぐらいの善意はあるだろう、と無意識のうちに信用していたからだ。

たとえば、ジャンケンをする時。俺たちは相手は最初に「グー」しか出さない、あるいは後出しはしてこないと無意識のうちに信用している。そうすれば簡単に勝てるに決まっているのだ。

言葉には出さずとも、それが最低限守られるべきルールだと互いに理解しているから、その暗黙の了解は通用する。

だが、相手がそんなものなんて意にも介さない外道なら？ そんなルールに欠片も価値を見出せないほどに切羽詰った人間なら？

当然、そんなものを守るはずがない。つまり、カミューラはそのどちらかの存在であり、俺たちはクロノス先生を救う術を失ったと同義なのだ。

「貴様……！ 貴様にはデュエルで向かい合う相手への敬意はないのか！」

カイザーが怒り心頭とばかりにカミューラに噛みつく。

互いに本気で戦い、そして勝っても負けても、共に相手への敬意を忘れないこと。それがカイザーの理想とするデュエルだ。それを真っ向から汚したカミューラが、カイザーには許せないのだろう。

だが、きっとその理想はカミューラのような存在には理解されないものだ。案の定、カミューラは小馬鹿にしたように笑った。

「敬意？ そんなもの、負けた奴の言い訳でしょう。そんなもの、持ち合わせているわけないわ」

あまりにあっけらかんと言い放つその姿に、誰もが言葉を失う。それは本気でそう思っているに違いなかったからだ。

「なんてこと……これではクロノス先生は……」

「クロノスは、このままだっただけか！」

明日香と万丈目が悔しそうにそう口にし、みんなにも絶望感が漂う。

そんな中、カミューラが笑顔で俺に向かって手を差し出した。

「……さあ、鍵を渡さない！ そうすれば、クロノスを元に戻してあげる気になるかもしれないわよ？ ふふ、ふふふははは！」

「くっ……!!」

笑いながらそんなことを言われても、信用できるはずがない。鍵を渡したところで、本当に元に戻してくれる保証はどこにもない。いや、これまでの言動を考えれば、そんな面倒なことをわざわざしてくれるはずがないとさえ思える。

そしてこの考えは恐らく間違っていない。カミューラは、クロノス先生を元に戻すつもりはさらさらないのだろう。

……だが、しかし。それがわかっていても、俺に選択肢はない。

人形になってしまった人間を元に戻す方法なんてものが、そこらに転がっているはずがないのだ。カミューラに頼る以外に、クロノス先生を元に戻す方法はない。

だから、俺は鍵を渡すしかないのだ。それが、どれだけ愚かな行為だとわかっていても。

「……………ッ！」

『遠也……』

首から下げていた鍵を外す。あまりの悔しさに、油断すれば叫びだしそうだ。

それでも、そんな激情は抑えて鍵を持った手をカミューラの方に差し出した。

それを見て、カミューラが得意げに笑う。鼻につく笑いだった。

「ふっふふふ……！ そう、それでいいの！ お利口さんは嫌いじゃないわ！ 思わず人形になった先生を元に戻してあげたくなっちゃうぐらいにねえ！」

白々しいことを！

そう思うものの、口には出さない。そうなれば、ごくごく僅かながらにある“本当に元に戻してくれるかもしれない可能性”をなくすことになってしまう。

それぐらいは、わかっている。俺も、みんなもだ。

誰もが努力して口を噤み、何も言わないようにしている。機嫌を



僅かにも損ねてしまえば、そんな可能性すら無に帰すのだ。しかし、そんな努力を見て、カミューラは嘲笑う。

それでも、俺たちに来ることはこれだけだった。

「ふふ……それじゃあ、その鍵をこっちに放つてもらおうかしら。嫌とは言わないわよね？」

確信を込めたその問いに、俺は無言で鍵を投げる体勢をとる。

腸が煮えくり返る思いだが、ここで耐えなければクロノス先生を助けられないのだ。だから、俺は屈辱を感じながらも鍵をカミューラの方に放り投げようとした。

その時。

「……………え？」

それは、突然のことだった。

カミューラの身体が徐々に闇に覆われていっているのだ。腕を伝わり、身体へ。そこから足へ、と全身に闇が広がっていく。

「な、なにこれは！？ デュエルディスクから！？」

そう、それはカミューラの左腕に取り付けられた、蝙蝠の羽を象ったような独特のデザインのデュエルディスクから発せられていたのだ。

闇はそのデュエルディスクから溢れ出し、カミューラを食い潰そうとしている。

「な、何故こんな！ これはアムナエルの自信作だと……！ つまさか、アムナエルが！？」

カミューラは突然の事態に混乱の極致にあるのだろう。

半狂乱でこの事態を引き起こした原因であろう人物の名を呼び、呪詛を吐く。

「あ……アムナエルウウウ！ 裏切り防止のつもりか！？ 私は裏切っていない！ 裏切っていないのに何故、ふざけやがってえええ！ 我ら一族の悲願を、貴様なんぞに！ 貴様なんぞに！ アムナエルウウウッ！！ ……！！」

最後は闇に口を覆われたため、言葉になっっていなかった。だが、最後までカミューラが口に使っていたのは、間違いなく呪いの言葉だ

ったのだろう。

やがて闇に全身を侵されたカミューラの身体は真っ黒に染まり、それは地面に溶けるようにして影と一体化して消えていった。

カミューラが立っていた場所には、あいつが身に着けていた金色のチョーカーが残るだけだ。

「……………」

その、唐突に過ぎる結末に、咄嗟に言葉が出てこない。

だが、結果としてカミューラは消え去った。それは事実だ。何故そうなったかはわからないが、事実は事実として受け止めておくべきだろう。

と、その時。万丈目の「のわっ!？」という声が聞こえてきて、そちらに目を向けた。

すると、そこには万丈目の腰に抱き着くクロノス先生の姿があった。

「あれ？ ここはどこなノーネ？ なんでシニョール万丈目がいるノーネ？ どうなっているノーネ？」

「ええい、いいから！ 早く離れんかあ！」

クロノス先生の人形を万丈目が持っていたためだろう。元に戻ったクロノス先生は、そのまま万丈目に引っ付いてしまっているようだった。

しかし、その姿を見て心から安堵する。そして同時に喜びが胸に満ちる。それは他の皆も同じだったようだ。

「クロノスせんせえ！」

「よかったんだな！」

「……無事で何よりです……！」

それぞれ喜びの声を上げ、万丈目から離れたクロノス先生の下に集まる。

俺も今いる場所から駆け出し、皆の下に行く。

「そうか、カミューラがいなくなったことで、クロノス先生にかかっていた術も効果が切れたんだ。……本当に、良かった」

三沢がそう分析しつつ、安堵の息とともに心からの言葉を口にする。

そして生徒に囲まれているクロノス先生は、戸惑った様子だった

が次第に調子を取り戻しているようだった。

「な、なんだかわからないでスーガ、急に人気者になってしまった  
ノーネー！ オホホホ！」

やれやれ、とその姿に思わず苦笑するが、そのお調子者な姿も下  
手したら二度と見れなかったかもしれないと思うと、許せてしまう。

そんなふう喜びを噛みしめながらいると、突然城を大きな揺れ  
が襲った。

それどころか、壁や柱から細かな破片が降り注いできている。ま  
るで城が崩れようとしているかのようだ。

「まずいな……主がいなくなったことで、城が崩れているんだ！」

「あわわ……みんな、早く逃げるんだにゃー！」

カイザーの言葉に大徳寺先生が続き、俺たちは即座にこの場から  
の離脱を試みる。

俺たちは一目散に来た道を戻り、ひたすらに外を目指す。走り出  
したところでマナがカミューラのつけていたチョーカーを回収して  
いたみたいだが、それは置いておいてまずは脱出が先決だ。

全速力で駆け抜けた俺たちは、どうにか城が崩れる前に脱出に成

功。そのまま湖の岸まで走っていき、地面の上にたどり着いたことでようやく人心地つく。

そして、少々乱れた息を整えながら振り返る。そこには脆くも崩れていく城の姿がある。急速に姿をなくしていく古ぼけた城は、やがて数分もしないうちに全てが湖の中へと消えてしまう。

あたりを覆っていた霧もそれに伴って晴れていき、太陽と青い空が俺たちの目に飛び込んでくる。

さっきまでの光景が嘘のように、のどかな景色がそこにはあった。

「……まるで、悪夢を見ていたようね」

明日香のその言葉には同感だ。まさしく、あれは悪夢のようだった。人間が人形になり、闇のデュエルによって身を削っていく。真つ当じゃない。

「けど、悪夢はおしまいだ。勝ったんだからな」

そう、今回の悪夢は終わりだ。次はまたきつと、厄介な敵がやってくるのかもしれない。だが、それまでは英気を養っていてもいいだろう。

そういうわけで、俺は肩から力を抜いて全員の顔を見た。

「それじゃあ、帰るとしますか！」

明るく言い放った俺に、全員が小さく笑って頷いてくれる。

そして俺たちは湖を後にし、それぞれの寮へと戻っていった。さつきこの城に向かった時とは違い、誰の顔にも安堵と笑みがある。そして、クロノス先生の姿もあることに確かな喜びを感じていた。

『よかったね、遠也』

「ああ」

答えつつ、俺はちらりと大徳寺先生を見る。そこには、隼人や翔と楽しそうに話している先生の姿がある。

それを見はしたものの、俺は何も言わずに歩を進めた。

『ほら、えらいえらい』

「やめるバカ。頭を撫でようとするんじゃない」

『え、じゃあ、チューがいい？』

「……そ、それもやめる」

『間があつたけどな』

言いつつ、触れもしない癖に俺に引つ付いてくるマナ。殊更に明るく振舞ってくれているのは、カミューラが最後にああなつてしまったことを気に病む俺の内心を察しているからなのかもしれない。

そのことに、声には出さずとも感謝する。そして、このやり取りをちょっと鬱陶しく思いつつも楽しみながら、俺は皆と共に湖から立ち去って行った。

こうして、俺にとって初のセブンスターズ戦。カミューラとの戦いは幕を閉じたのだった。



## 第24話 敵討（後書き）

アムナエル……一体何者なんだ……。

さて、今回のお話で言うべきことはあれです。カミューラファンのみなさん、ゴメンナサイ。なんだかうちのカミューラさんが大変な悪党キャラになってしまいました。

おかしいな、他の方の作品では結構助けられたりしているはずなのに……。なんでこうなったんだろう。

そして今回のデッキは魔法使い族で、里ロツクです。

かなり最初のほうのターンで決着したのでギミック全てが出てきたわけではありませんが、この時点で大分予想はついていると思います。

完全に里ロツクに特化しているわけでもないですが、なんかこんな感じになりました。

スタダの進化系にしようかとも思っていたんですが、それはまた今度ということぞ。

それでは、また次回にお会いしましょう。

## 第25話 魔物（前書き）

活動報告に遅れるかもと書きましたが、そう書いた途端なぜかタイピングが進み始めた天邪鬼な私です。  
どうもすみません。

今回は、タイタンの代わりとなるセブンスターズがご登場です。  
うちはタイタンが闇に取り込まれてないですからね。そのため、このようになりました。

正確にはセブンスターズというわけでもないのですが……。  
あとは本編でご確認ください。

それでは、お楽しみいただければ幸いです。

## 第25話 魔物

……さて。

こう見えて俺は普通の人間である。トリップなんてものを経験しているし、精霊という存在を見ることは出来るものの、それでも俺自身は一つも異常な点はない一般人だ。

超能力があるわけでも、素手で岩を割れるわけでもない。たとえこの世界の人間ではないとしても、そんな能力なんて一つも持たない俺は普通という括りに入れて問題ないと思う。

そしてそんな普通である俺は、ごくごく当たり前にその日に出会った出来事を受け入れて生きている。予知なんて出来ぬ身である以上、襲い掛かってくる出来事はいつだって唐突に決まっているのだ。そして突然である以上、避ける術がないのは必然である。

そんなことはそれこそ当然のことで、意識にすら上らない無意識の中で誰もが、俺自身も認めていることにすぎない。

だがしかし、同時にこうも思うのだ。

いくら避けられない出来事と言っても限度があるだろう、と。

目の前に立つ一人の男を見ながら、俺は冷や汗と共にそう思う。

俺の前に立っているのは、色黒の肌に古めかしい金色の装飾を着飾った男。その身に纏う服は白いローブのようなものだけという薄着であり、その姿はデュエルモンスターの《墓守の長》そのものでもあった。

いや、サラの口から聞いた話では、実際にそうなのだろう。精霊の世界に実在する墓守の一族の住まう場所。彼はそこを治めるリーダー、墓守の長自身なのだ。

つまり、いたって普通の精霊ではない。問題は、彼の身体の中に入っているモノなのである。

「……十代。ひとまず、現実世界そっちの問題セブンスターズは任せたぞ」

瞳と白目の色が反転したおぞましい目でデュエルディスクを構える長を前に、俺は心配そうにこちらを見るマナとサラの視線を背中に受けながら、カードに手をかける。

それを見るソイツも口元を歪め、同時に開始の言葉を宣言する。

「『デュエルツ！』」

\*

事の始まりは、カミューラを退けた翌日であった。

マナが回収してきたカミューラのチョーカー。金色に輝く金属で作られたそれを、マナは非常に気にしていた。それというのも、そのチョーカーには若干デフォルメされているものの、間違いなく“ウジャト眼”が刻まれていたからだ。

そう、闇のアイテムの代表格……千年アイテムに共通して象られているデザイン。そして、カミューラは闇のデュエルを行っていた。そこに、マナは嫌なものを感じて回収したのだ。

そしてその感覚は正解だったらしく、実際にマナはそのチョーカーから闇の力を感じたらしい。ゆえに、マナは即座に自身の力で以ってその力を封印。闇の力は抑え込まれ、それはただのチョーカー

と化した……はずだった。

しかし、後から思えばチョーカーを俺の部屋に持ち込んだことがいけなかったのだろう。封印される前のチョーカーから僅かに漏れ出た闇の力。それに、俺の持つあるカードが反応してしまったらしいのだから。

\*

どうやら精霊界に行きカイバーマンと戦ったらしい十代たち。

更に、万丈目の兄たちによるアカデミア乗っ取り計画を万丈目自身が撃退。ちなみにその時、万丈目の精霊であるおジャマ・イエロの兄弟が見つかったりもした。実にいいことだ。

そんな事件が起こりながらも日々を過ごし、そしてついに現れた三人目の刺客。

セブンスターズの一人、タニヤ。

最初は三沢が挑み、負けた上にどうやらタニヤに惚れてしまったらしいのだが、次のデュエル相手は十代となった。

闇に属しながらも正々堂々と戦う相手。そんな話を聞かされて、デュエル大好き十代が黙っていられるはずもなかったのだ。

次の対戦相手に名乗りを上げたのは必然だったといえる。すっかりタニヤに骨抜きにされた三沢は、それを羨ましそうに見ていたが三沢っち、タニヤっちなんて呼び合うぐらいだったらしいから、よほど惚れ込んだんだろう。

そして十代は戦いを挑み、タニヤは喜びともとれる獰猛な笑みと共にそれを受けた。

「いい面構えだ。いいだろう、お前が相手だ」

「ああ、俺は遊城十代！ 遊城っちって呼んでくれ！」

「……最低」

十代としてはニックネームと同じ感覚だったのかもしれないが、三沢っちの前例があるため、タニヤに気があるように取れなくもない。

だからかどうかは知らないが、明日香がぼつりとそんなことを呟いていたらしい。

そんな感じでセブンスターズ戦でありながら、幾分平和に始まっ

たデュエルは、予想通りというか十代の勝利で終わった。相も変わらずライフを大幅に削られての勝利だが、それでも安心して見れるあたり十代ならではのデュエルだったといえる。

十代とセブンスターズの一人タニヤとの勝負が終わり、タニヤが身に着けていたグローブが回収される。こちらもうジャト眼がついていたことから、闇のアイテムだろう。その力で、虎のタニヤが人間に化けていたと考えられる。

こちら俺が一時預かり、マナに見せてみた。

そして先日のチョコーカーと併せてマナが調べた結果、やはりいづか予想通りの結論に行きついたのだった。

「間違いないよ、これは闇のアイテム。でも、千年アイテムとは別系統だね」

「やっぱり。どう見ても怪しいと思ったんだよ、デザイン的な意味で」

9割がた闇のアイテムだろうと思っていたが、こうしてマナが断言することで確信を得ることが出来た。自身も闇の魔力を扱えるマナは、こういうことについてつけなのだ。

「けど、千年アイテムとは別系統？」

「うん。たぶん、ファラオの時代より後、千年アイテムの話を知り



た誰かが作ったものなんじゃないかな。千年アイテムほど現実を歪める力はないみたいだし……」

「千年アイテムは手に入れられないから、代わりのものを作っちゃまおうってことか。欲深い奴がいたもんだな」

千年アイテムは、所有者と認められた者には莫大な恩恵を与える。未来を見通す力や、他者を操る力……。加えて、強運すらも与えられるという。

使いようによっては、巨万の富を築くことすら可能な伝説のアイテム。その魅力に取りつかれる人間は、それこそ星の数ほどいるだろう。

だから、あるいはこういったモノが出てくるのは必然だったのかもしれないな。

「でも、凄いよこれ。私やお師匠様でも、ここまで力を持ったアイテムを作り出すことは出来ない。とてつもない才能と、技術と、時間がかかってるはず」

「つまり、これを作ったのはマジモンの天才だってことか」

世の中には凄い奴がいたもんだ。製作者については興味をそそられなくもないが、まあ、それはこの際置いておくとしよう。

「それじゃ、このグローブも封印だな」

「うん。闇の力は私の方で抑えておくね」

言うと、マナはグローブに向けて杖を構え、ぶつぶつと小声で何語かわからない呪文を唱え始める。

そうすること一分ほど。それだけで、グローブから僅かに漂っていた嫌な気配が、ふっと消えてなくなった。

それを確認し、マナがふうつと息を吐く。

「終わったよー」

「おお、おつか」

ドクン。

「……………れ？」

ふと奇妙な言い表せない何かを感じ、俺は不自然に言葉を切る。

なんだ、今の嫌な感じは。わりと近くから感じたように思っけど……………。

「遠也？」

俺は立ち上がり、部屋の中を見回してからクローゼットの方へと向かう。突然立ち上がった俺にマナは疑問を含んだ声をかけるが、それよりも俺は今の感覚が気になって仕方がなかった。

俺はクローゼットを開き、その奥の壁……その上にわざわざ作った棚を見つめる。そして棚の引き出しを開き、そこからケースを取り出すとその鍵を開けて、中に入れられた幾つかのカードを取り出した。

さつき感じた気配はよくわからないが、可能性を考えるならここが一番あり得る。そう曖昧に感じた故の、選択だった。

一枚一枚、カードを検めていく。しかし、異常を感じられるようなカードは何もなかった。もう一度最初からカードをじっくり見ていくが、やはり先程のような感覚を感じることはない。

……気のせいだったのだろうか？　ここのところ気を張るデュエルばかりしていたから、少々気が立っていたのかもしれない。それに、闇のアイテムなんてものを見ていたばかりだし。

ともあれ、俺の勘違いであったのなら何も問題はない。

俺は自分が思うよりもどうやら余裕のない自分に溜め息をつきながらカードを戻し、クローゼットを閉める。そして再びマナの下へと戻った。

「どうしたの遠也。あれって、確か遠也が“危険かもしれないカード”って言ってたやつだよね？」

「ああ、まあな。この世界のカードなら危険確定だけど……俺の世界では単なる沢山あるうちの一枚にすぎないから、確定じゃないカードたちだ」

「何かあった？」

「いや……気のせいだったみたいだ」

マナの言葉に俺はそう返し、それからしばらくこのことを忘れていた。

闇に閉ざされた棚の中、一枚のカードがぼんやりと黒い霧に包まれたことには気が付かずに。

そのとき同時に、学園の地下に安置されたある石板が小さな振動を起こして崩れ落ちた。しかし、そのことに気付く者は誰もいなかった。

その石板をそこに置いた人物以外には……。

\*

貿易商のアナシスとかいう男に何故か十代が海のデュエルとやらに引っ張っていかれ、彼の潜水艦に乗ったまま姿を消した翌日。

翔が、めっちゃくちゃわかりやすく落ち込んでいた。

どうやら翔は十代とケンカしていたようで、仲直りをしたいのに肝心の十代がいなくなったことにひどく落ち込んでいたのだ。

きっかけは十代にエビフライを食べられたから腹が立った、という程度のものらしいが、喧嘩どころかそもそも話す機会がなくなっただとなれば、心穏やかではいられないだろう。

怒っているとは言っても、十代のことを嫌いになつたわけじゃない。翔としては、早く仲直りしたいのだ。だというのに、十代がいなければどうしようもない。仲直りをする対象もおらず、翔の気持ちには沈んでいくばかりのようだった。

さっき話をしたときは「僕がエビフライなんて小さなことにこだわるから、アニキはいなくなっちゃったんだ……」とか言っていた。どれだけ卑屈になつてると言いたいが、裏を返せばそれだけ翔にとって十代は大きな存在なのだろう。

俺と隼人、万丈目で声をかけていはいるのだが、やはり本調子に戻すことは出来ていない。十代当人が来てくれないことには、翔の復帰は難しそうだった。

「まったく、十代もどこに行ったのやら」

『明日香さんの話では、海の中……らしいけど』

「海の中ねえ……まあ、あいつのことだ。自力で帰ってくるまで待つしかないな」

場所がわかれば迎えにも行けるが、さすがに潜水艦なんてもので移動されてはこの広い海のどこにいるかなんて見当もつかない。

セブンスターズ絡みではないようだし、十代ならそのうち自分で帰ってくるだろう。

だとすればいま俺に出来ることは、その時に翔と十代がすぐ仲直りできるように翔の気持ちを整えてやることだろう。

たった今レッド寮で見てきた沈んだ翔の顔を思い浮かべながら、俺はそう考える。

ブルーの自室へと向かう途中、さてどうやって気持ちを上向かせてやるかと思いを巡らせていた　その時。

『遠也、あれ!』

マナの鋭い声が俺の耳に届き、すぐさま意識をそちらに向ける。

マナは険しい顔でブルー寮の外から寮の一室を指さしている。示す先は……。

「俺の部屋?」

何故、わざわざそこを?　と疑問に思った、次の瞬間。

その閉め切られた窓ガラスを通り抜けて、一枚のカードが飛び出してきた。

「なに!?!」

驚く俺をよそに、外に出てきたカードは黒い霧に包まれていずこかへ飛び立っていく。

霧に包まれる直前、僅かにカードの絵柄が見えた。そしてその絵柄を持つカードが何なのか脳内で理解した、その瞬間　俺の顔から一気に血の気が引いた。

「まさか……嘘だろ？　この世界にもいるのかよ!？」

『ど、どうしたの遠也?』

いきなり大声を出した俺に、マナが戸惑い気味に声をかけてくる。

しかし、今の俺にそれに応える余裕はなかった。

「くっ……!　マナ、追うぞ!」

そう言いつつ、俺は返事を聞く前に走り出す。後ろからマナがついて来ていることを感覚として察しながら、俺は黒い霧に包まれたカードをひたすら追いかける。

危険かもしれないと判断はしたが、まさか本当に危険だとは思っていなかった。この世界にも存在しているとは、思っていなかった。とんだ勘違いだ。この前、部屋で感じた違和感はきつと間違いじゃなかったのだ。



あの時気が付いていれば、と忸怩たる思いが胸によぎる。しかし、今はそれを抑え込んでひたすら走る。

あのカードを好きにさせてはいけない。三幻魔の復活を待つより早く、世界が危ない。

俺は運動による汗とは明らかに違う汗を冷たく感じながら、ただ危惧し続ける。そして俺の予想が正しければ、あのカードが行きつく先には……。

俺はある可能性を考えながら、我武者羅に足を動かすのだった。

……。

……。

たどり着いたのは、山の中にある遺跡だった。

十代いわく、墓守の一族とデュエルをした場所。精霊界に繋がっていると言われる、ここ現実世界との境界線である。

俺たちが追っていたカードは、この中に入っていた。古ぼけ、崩れ落ちた石造りの建造物から覗く奥は、暗く深い。アーチ状に組まれた石の門の先に入れば、きっとあのカードの正体とぶつかり合うことになるのだろう。

なにしろ、あのカードが遺跡に入ってしまった直後から、この周辺はどうも空気がおかしくなってしまうているようだから。

「……………マナ」

『うん。まだ門の前だけど、ここは既に向こうに通じているよ。ただ一歩進むだけで、向こうに行けるはず』

じんわりと感じる異質な気配。俺ですら肌で感じるその奇妙な感覚に、精霊であるマナが気付いていないはずがない。

そう思って声をかけてみれば案の定というわけだ。既にここではどちらかといえば精霊界に近くなっているらしい。一歩進めば、ということは相当だろう。

しかし逆に言えば、一歩戻れば現実世界に戻れるということ。カードが飛んでいったとはいっても、所詮は一枚。なくともデッキを構築することは可能である。

そういう意味では重要度は高くない。なにせ、デュエルをする分には何の影響もないのだから。

だが……。

「よし、いくぞマナ」

俺は進む方を選ぶ。

確かにカード単体としてみれば、そんなに重要視はしていない。だが、実際にカードによって現実さえ浸食されるこの世界では、話が別だ。

飛んでいったカードは、とびっきりの闇に属するもの。そんなものをこのまま放置した結果、まかり間違って事件が起きてもしたら目も当てられない。

俺はあのカードの持ち主なのだ。なら、そういった人様に迷惑をかける可能性を摘むのは、俺の役目である。

俺がそう決意して前進を告げた言葉に、マナは一つ小さな息をついた。

『……そう言つと思つたよ。もう、あんまり心配させないでね』

「悪いな」

そう複雑な顔で言うマナに、俺は謝罪と感謝を込めて簡潔な言葉を口にする。

それに開き直ったように笑みを見せて頷いてくれるマナに、俺も首肯で応えて遺跡の方を見据える。

そして、一歩……その場から足を踏み出した。

瞬間　目に映る景色が一変する。

ただの朽ち果てた岩場とでも表現した方が確だった遺跡は、見上げねば全貌を見渡せぬほどに巨大なピラミッドとなり、人の身長を超える巨大な岩がそれを形作っている。

それだけ巨大でありながら四角く綺麗にカッティングされており、そのうえそれがビルよりも高い高さまで規則的に積み上げられているのだから驚きだ。工業機械もなしにどう作ったのか疑問が尽きない。

そんな不思議な光景だが、こつもいきなり現在地の印象が変わってしまえば、もはや疑いをはさむことはない。

いま俺は間違いなく、精霊界に足を踏み入れたのだ。

「よつと……。やっぱり、こつちだと身体が楽だね」

そんなことを言いつつ、マナが浮いていた状態から地面に降り立つ。

精霊化していたマナだったが、どうやら精霊界ではその状態こそが実体になるらしかった。

「それで、どうするの遠也？」

「そうだな……とりあえず、情報かな。カードがここにあるのは間違いないだろうけど、転移するときに見失っちゃったし」

そうマナに答えつつ、人を探す。すると、門からそう離れていないところに一人の女性がいるのが見えた。

「ちようどいいや。おーい！」

相手に聞こえる程度には声を大きくして近づいていく。

すると、声に反応して振り向いたその女性の顔が驚愕に染まる。そして、すぐさま尋常ならざるスピードでこちらに接近してきた。

「なっ！?？」

いきなりなのに、俺は何も反応できない。

そしてそのスピードを保ったまま彼女は俺の身体めがけてその手を伸ばし、

次の瞬間、その手はマナの杖を掴んでいた。

「いきなり何するの!？」

俺を狙うその手を見て、マナが咄嗟に杖を挟んでくれたらしい。そのことに感謝しつつ、俺はマナの声を受けた相手の反応を見る。

相手は、マナの剣幕に驚きつつ、慌てたようにその手を引いてくれた。

「ち、違う。今ここは危険だから　ッ来い！」

「おわっ!?!？」

「ち、ちょっと!?!？」

言うのが早いか、その女性は俺とマナの手を取って素早く移動し、俺たちはピラミッド側からは影となる柱の陰に連れ込まれる。

その時、巡回なのだろうか兵士らしき装いの男が二人槍を持ちながら歩いてくる。彼女は、あの衛兵たちに見つかるのを防いでくれ

たよつだ。こつして庇ってくれたところを見ると、悪い人ではないらしい。

ちらりとマナを見ると同意見なのか、緊張していた表情を緩めて小さく頷いた。

「ッ近づいてくる……!」

「づぶッ!?!」

「ッ!」

衛兵がこちらの傍を通るのを見たのか、より身を縮めて柱の陰に隠れようと女性が俺の身体を自分に押し付ける。

その時、俺の顔は偶然にもその女性の胸へと埋まってしまった。マナにも負けず劣らず大きな柔らかい感触に、状況を忘れて思わず意識を傾けてしまう俺。

彼女自身は気にしていないようだが……思春期の男子高校生にこれはかなり……キツイ。いや、それは呼吸的な意味であって心情的にはめっちゃくちゃ嬉しいですけどね!

「ッッ!」

しかしそんな俺を貫かんとばかりに鋭い視線を投げかけている我

が相棒。

その表情はこの現状から声を出せないためなんとも難しい顔で、言いたいことをかなり我慢しているのがすぐにわかる。

俺としてもそんな顔をマナにさせるのは忍びないが……俺が望んでこうなっているわけじゃない。あくまで不可抗力、不可抗力なのだ。仕方ないね。

と、そんなことをしていると、どうやら衛兵が去っていったのか押し付けるように俺の身体を押さえていた彼女の腕から力が抜かれる。

それを見計らい、即座に俺の腕を引くマナ。そしてその腕を抱き、その女性のほうへと敵意を込めた目を向ける。向けられた女性は、助けたのにそんな態度を取られることに困惑しているようだった。

「あー……こっちは気にしないでいいよ。それより、助けてもらったみたいで、ありがとう」

最初にマナに指を向けてからそう言っただけ軽く頭を下げると、向こうも気にしないことにしてくれたのか快い笑みを見せてくれた。

「いや、気にしなくていい。それより、こつも短期間に続けて人間が来るとは。尤も、そちらの子は精霊みたいだが……」



そちらの子のほうへと女性が目を移す。相変わらず威嚇しているマナの肩を小突き、機嫌を直してくれと言外に伝える。

とりあえず今がそんな余裕のある状況でもないことはわかっれてきているようで、マナは表情を険しいものから和らがせていく。それでも、微妙に半眼だったが。主に俺に対して。

帰ってからがなんか怖い。

「それで、いったい何の用があるのだ？」

「えっと……実はあるカードを探してるんだ。ぶっちゃけ禍々しいカードなんで、すぐにわかると思うんだけど……」

「ッお前、まさかあのカードを知っているのか!？」

俺がそう答えた途端、身を乗り出してくれる女の人。

予想外の食いつきように、俺だけでなくマナも思わず驚きを露わにする。

すると、そんな俺たちの様子から我を失った様を思い返したのか、いささか気まずそうにしながら彼女は一步身を引いた。

「……すまない。まさか、人間の口からアレについて聞けるとは思わなかったものだから。長を一夜で豹変させたあのカードのことを……」

「一夜で？」

唇を噛みながら言う女性だが、俺はその中の言葉に疑問を抱く。

一夜では言うが、俺はカードが遺跡に入ったほぼ直後にこちらに来たはずだ。だというのに、既に一日以上経過しているというのだろうか。

まさか、時間の流れが違うというのだろうか。あるいは……あのカードの影響で、微妙に何かズレている可能性も否定できない。

気にはなるが、その考察はあとでもいいだろう。今は彼女の話の間ごと。その情報は、俺にとっても大事だ。

「ああ。ある日、長は拾ったと言って一枚のカードを手に入れられた。しかし、その日以降長は人が変わったように他人との接触を拒み、このピラミッドの中の一室に籠るようになられた。その変化に、我々は今も戸惑っている……」

その変化に気付いたのは、近くに侍っていた彼女だったという。それ以後、徐々に皆が気付いていき、今では長のことを誰もが心配し、同時に恐れているらしい。

「長が拾ったというあのカード……恐らくは、あれが原因。だから、何かを知っているのなら教えてもらいたい。この通りだ」

そう言って、頭を下げる。

俺はそんな彼女に慌てて声をかけた。

「そ、そんな頭を下げなくても。言われなくても、協力する。俺たちの目的は、そのカードを取っ捕まえてしっかり管理することなんだから」

まったくもって、あんなカードがどこかにいったなんて心臓に悪すぎる。人様に迷惑をかけるそんなカードは、早々に手元に戻しておきたいのだ。

俺の返事を聞き、顔を上げた彼女はほっと安心したように息をつく。

そして、彼女は笑顔で右手を差し出してきた。

「協力を感謝する。私はサラだ」

「こちらこそ。俺は遠也、こっちはマナ」

「よろしくー!」

いつの間にか普通の態度に戻っているマナと共に、その手を握り

返す。これにより、俺たちは一時の協定を結んだ。

彼女　サラは長を元に戻すため。俺とマナは傍迷惑なカードを回収するため。

現実世界では今頃セブンスターの件で大変だと思うと申し訳ないが、俺たちもある意味差し迫った脅威を挫くためだ。こちらも手を抜けない以上、どうにか許してもらいたいところだ。

そんなことを思いつつ、俺はその元凶が居座っているであろうピラミッドを仰ぎ見るのだった。

さて、俺は墓守の一族の住処でもある建造物をピラミッドと表現したが、どちらかといえばエジプト方面よりはマヤのそれに近い印象がある建物である。

四角錐といえるほど天頂が尖っておらず、どちらかといえば台形といったほうが正しい辺りがその理由だ。

また、どうやらここは一族をはじめとした人々の墓らしいのだが、建物の中央部分はその墓があるであろう地下へと続く大穴が空いて

おり、いわゆる吹き抜けのような非常に凝った造りになっている。

もし落ちれば奈落の底まで真つ逆さま。文字通りお墓に一直線とは、なんとも洒落がきいているものである。

そしてそんな墓がある穴の底に向かって、俺たちは今歩いている。

サラの先導によって兵士たちの目をかいくぐりながら進む。目的地は長が籠っている、地下にあるという儀式部屋だ。

そこは魔術の儀式に関することを行う部屋らしく、それなりに大きな部屋らしい。そして、魔術関連の部屋であるため地下深くに造られたという。

何故わざわざ地下に造ったかというと、墓守の一族はアヌビスなどに代表されるエジプトの神々。今で言うエジプト神話を信仰しており、魔の術を神の目が届く太陽の下で行うことが躊躇われたからなのだとか。

大っぴらに神と魔の術を同時に使っていることを喧伝するような真似は、謹んでいるというわけだ。一応神を信仰している彼らであるが、神に隠れてやるなら問題ないらしい。あくまで彼らの考えではだが。

まあ、そこらへんは日本人の俺にはよくわからない概念だ。正直「ふーん」の一言で終わらせられる。説明してくれたサラには悪いけど。

ともあれ、俺たちはそんな話を間に挟みつつ下へ下へと向かっていく。内部を知り尽くしているサラによって、今のところ兵士たち

には見つかっていない。

時々兵士を見かけるが、その誰もが表情に精彩を欠いているのがわかる。リーダーである長の豹変が、彼らに不安や不信などの影響を与えているためだろう。

ここに住む者たちにとって、長がこのままでいるというのは相当な悪影響なのは間違いない。

何故カードがいきなり飛び去ったのかはわからないが、この人たちのためにも早く回収しなければいけない。その気持ちを、俺は改めて強く持つのだった。

「……ここだ」

カツン、と石畳を靴が叩く音が響き、同時にサラが足を止める。

俺たちも続いて足を止め、サラがここだと言ったこの周囲を見回す。しかし、何の変哲もない壁が続くばかりで、部屋らしきものはどこにもない。

「……何も無いけど？」

仕方ないので素直にそう尋ねると、サラは苦笑して彼女の横にある壁をコンコンと叩いてみせた。

「さっき言っただろう。儀式の部屋は、隠すために地下に造られたのだ。当然、その部屋も普通に探しては見つからない。我ら一族の者でなければな」

そう言って、サラは何か呪文らしきものを唱え始める。

日本語しかできない俺には到底理解できない語句が出来る悪いラップのように紡がれ、間断なく長い文章を形作っていく。

そしてそれが不意に止まり、サラが口を閉じた時。

石と石が擦れる独特の音を出しながら、壁の一部が下に降りていき、人が二人並んでギリギリ通れる程度の大きさの入口が姿を現した。

「なるほどね」

その凝った仕掛けに素直に感心を示した俺に、サラは少しだけ笑みを向ける。しかし、その表情をすぐに引き締まったものへと変わった。この先に長がいるというのだから、そうなるのも当然だ。

俺とマナも同じく気持ちを引き締め、こちらを見ているサラに頷きを返す。

それを見てとってから、サラは指で中を示した。

「……いくぞ」

それに無言で首肯し、俺たちは三人でゆっくり部屋の中に侵入していく。

中は真っ暗かと思いきや、松明が焚かれているのかオレンジ色に部屋の中は染め上げられている。そのため明るさは十分すぎるほどに確保されており、しっかりと中の様子を見ることが出来た。

中は意外と広く、小学校の体育館ぐらいの大きさは優にある。その中で部屋の中央部分には階段が設えられており、数十段あるそこを登った先には、比較的大きめの踊り場らしきものが見えた。

恐らくあれは祭壇に属するものになるのだろう。

そして、松明の明かりに照らされた人の影が天井に揺れていた。それはつまり、誰か。この場合は間違いなく長がその祭壇の上にいると見ていいはずだ。

サラもマナも同じ結論に至ったのか、祭壇の方に目を向けている。

そして一度三人で顔を合わせて頷き合つと、一気に階段を駆け上っていった。

階段を踏みつけるたびに鳴り響く石を叩く音を耳に入れながら、俺たちはそのまま階段を登り切つて祭壇へとたどり着いた。

そして、俺たちが視線を向ける先。そこには、目に見えるほどの



黒い瘴気を身に纏い、こちらに背を向ける男の姿があった。

まともに対してもいないというのに、まるで身体ごと押し出されそうなプレッシャー。しかもどこことなく息苦しささえ伴うそれに、俺は我知らず冷たい汗を肌には浮かべていた。

「お……長……」

サラにも、その空気は感じられたのだろう。いや、精霊であることを考えれば、俺よりもそれは影響が強いかもしれない。

しかし、それでもサラは己が敬愛する長に声をかける。だが、それに長が何か反応を返すことはなかった。

「マナ、お前は大丈夫か？」

「うん、私は自分の力で……。けど、遠也。アレは、本当に危険だよ。遠也は一体なんのカードを……」

マナの心配げな声に、俺は視線を長に向けたまま答えた。

「それは、すぐわかるさ」

額に浮かんだ嫌な汗を袖で拭い、俺は二人より一歩前に出て気圧

されないように声を大きくして呼びかけた。

「おい、家出カード！ 迎えに来てやったぞ！」

すると、サラの声には反応しなかった長がゆっくりとこちらに振り返る。

日に焼けた肌に、髭を蓄えた精悍な顔つき。黒いフードをかぶり、金細工の首飾りをかけた白いローブの男。俺が知るカードの絵柄ともある程度一致する。間違いなく、墓守の長本人だろう。

だが、目の前の男は明らかに正気を保っていない。

なにせ、瞳と白目の部分が反転し、本来白いはずの目が黒く染まり、瞳の方が白に染まっているのだ。真つ当な状態でないのは一目瞭然だった。

その奇妙な目を持った長にたじろぐと、長は口の両端を持ち上げ、にやりと粘っこさを感じさせる嫌な笑みを浮かべてみせた。

『ほう……誰かと思えばオレの身体の提供者殿ではないか。ククク……』

その口から漏れた、老いを連想させる掠れた言葉に、俺は疑問を返す。

「身体の提供者だと？ なんのことだ」

『おや、覚えていないか？ 貴様がオレの身体の失われた心臓を埋めてくれたのではないか。ほら、コイツのことだよ』

長はそう言うと、懐から一枚のカードを取り出す。

それは紛れもなく俺のカード。危険かもしれないと判断して人の目に触れないように仕舞い込み、そして何故か今日部屋からひとりで飛び出していったカード。

しかし、どうしてそれが心臓がどうこうという話になるのかわからない。

納得がいていない俺を見て、長は更にクツクツと笑う。

『クク……オレは心臓をある精霊に取り込まれていてな。その精霊がこの近くにいることは分かっていたが、石板に封じられていたオレは身動きが取れずもどかしい日々だった』

もどかしいと言いつつ、その声には隠し切れない喜悦が混じる。不気味に思うが、せつかく自分から喋ってくれているのだ。それを邪魔する理由ないとして、俺たちは黙ってその続きに耳を傾ける。

『だが、そんなある日。突然オレの身体そのものが外の世界に現れ

たのだ。わかるか？ 貴様が持っていたオレのカードだ。あれは欠損もなく完璧に1枚のカードとして成り立っていた。身体の代わりとしては十分なものだった』

そこで、一度言葉を切り、しかしまたすぐに続ける。

『とはいえ、身体の代わりはあれど魂はまだ石板の中。どうすることもできなかつたが、これまた偶然の産物によって魂と身体カードの間に道を通じたのだ！』

長に取り憑いたソイツは、長の身体を操りその両腕を広げてその際の喜びをアピールする。

『ククク……オレの身体の代わりとなる、貴様のカード！ そして闇の魔力を備えたアイテム！ それらが同一の場所に集ったことにより、闇の魔力は一筋の道となって闇の世界から貴様のカードへと干渉する機会をオレに与えたのだ！』

「まさか……あのアイテムか……！」

カミューラのチョーカー、タニヤのグローブ。あれら闇のアイテムを俺の部屋に置き、封印されるまでの間は闇の魔力を垂れ流しにしていたのがよくなかつたらしい。

その魔力に、近くにあったカードが反応をしたということだろう。

『加えてオレの石板がアカデミアにあったことも要因だ。比較的近くにそれらが全て揃ったからこそ、俺は今こうしていられる。クク、感謝するぞ小僧』

「くっ………！」

なんてこつた、完全に俺のせいじゃないか。

そんなことになるとは想像もできなかったとはいえ、切っ掛けが俺だったことに変わりはない。そう自覚し唇をかむ俺を、ソイツは愉快気に見ている。

『そういえば、貴様らは今面白い遊びをしているな。クク、なかなか良い趣向だ。ここは貴様の鍵を奪い、三幻魔とやらを手に入れてみるか。オレをこの島に持ち込んだ輩はオレをその立場に仕立てあげるつもりだったようだからな。尤も、手に入れたとて虫にくれてやるはずもないが』

「虫？」

『わからんか？ 貴様ら人間どものことよ。脆弱かつ矮小、それでいて数だけはおお、鬱陶しい。まさしく虫だとは思わんか？』

にやにやと笑みを浮かべて言うてくるが、思うわけないだろうに。

人間は人間、虫は虫だ。ちょっとばつか元の図体がでかいからって、調子に乗るんじゃないぞコノヤロウ。

そう言いたいのが、口は全く動かない。真正面から受けるプレッシャーが身体に絡みつき、抵抗の意思を奪い取っているかのようだ。それだけ、目の前のコイツという存在はデカいということだろう。

既に顔には何筋もの汗の跡が残り、いかに俺が精神を消耗させているかがよくわかる。

マナが手を握ってくれていなければ、プレッシャーに押されて倒れていたかもしれなかった。

俺は、マナの手を握り返す。これで少しは勇気も出た……気がする。

だが、今は気がするだけでも大いに結構。俺は精一杯胸を張ると、持ってきていたデュエルディスクを左腕に装着した。

『ほづ……？』

「そんなの、素直にやらせるわけないだろう。俺とデュエルしろ！ お前を倒してカードに戻してやる！」

『威勢のいい小僧だ！ よかろう、死に急ぐというのなら引導を渡してやる！ それが身体を提供してくれた恩返しよ！ ハハハハ！』

傲慢にすぎる自信を見せながら、ソイツは長の身体に入ったまま

デュエルディスクを装着する。

長の身体を操り、デュエルを行うのだろう。そして状況的にこれは闇のデュエル。だが、闇のデュエルだとするなら、勝てば少なくとも長の身体からは出ていかざるをえなくなるはず。ダメージを負った状態で他人に取り憑く余裕はなくなるからだ。

そこから更にカードに封印できるかは……分の悪い賭けかもしれないけどな。

「すまない……長のことを……どうか、どうか助けてやって欲しい……」

サラが不意にそう言って頭を下げてくる。

自分が言葉をかけても何の反応もなかったが、しかし俺ならということだろうか。どのみち、このデュエルで勝てば長は解放される。そして、俺に負ける気はない。

だから、俺はサラの顔を上げさせて笑顔を向けた。

「任せろ！」

それに「ありがとう」と言って小さく笑みを見せたサラを下がらせ、そして次にマナと向き合う。

魔術師として力があり、そして遊戯さんの下で戦ってきたマナには、相手の恐ろしさがわかるのだろう。その表情は苦しげなほどに俺を案じているのがわかる。

そのことに、俺の心にも申し訳なさが募った。

「遠也……無茶するんだから、もう」

「ははは、まあな。でも仕方ないだろ？ あいつを放つといたら大変なことになる。なら、俺は持ち主としての責任を果たすさ」

努めて明るく言う。そしてそんな俺の気持ちを汲んでくれたのか、マナはそのことには何も突っ込まなかった。

そして、表情にこそ俺への心配が透けて見えるものの、それでもマナは俺に忠告をしてくれる。決して、戦うなどは言わない。それがまるで気持ちに通じているようで、少し嬉しかった。

「アイツは凄い力を持つてるよ。神ほどじゃないにしても、十分化け物としての力がある。ホントは、危ないことをしてほしくはないし……心配だけど……でも……！」

マナは俺に抱き着き、頬に唇を寄せる。

一瞬の後に離れたマナは、最後にこう俺を励ました。



「勝つて、遠也！」

無論、それに俺が返す答えは決まっている。

好きな女の子にこんなことされて、そのお願い事を破る男なんているものか。

「おう！」

少々虚勢交じりではあったが、それでも絶対に勝つという気持ちに乗せて応えると、マナは少しだけ微笑んで僅かに下がる。

それを見届けてから、俺は改めて元凶なるソイツに向き直った。

『クク、お別れは済んだのか？』

「待っててくれたのか。律儀な奴だな」

挑発的な笑みを浮かべ、精一杯の意思を込める。

相手は古代エジプトで憎悪から実体となった恐るべきモンスター。一つの村そのものの怨嗟、無念、妄執、悪意、それら負の感情全てが形を持ったとも取れるほどに禍々しい存在である。

ただか十七年しか生きていない俺など、それこそ取るに足りない相手であり、俺にしてみれば巨大すぎる敵である。

だがしかし、それでも退くわけにはいかない。ゆえに、俺は虚勢でもなんでも張って、向かっていくだけだ。

「いくぞ、《トラゴエディア》<sup>悲劇</sup>！ せいぜい吠え面かきやがれ！」

『ハハハ！ やってみる！ では、闇のデュエルだ！』

互いにデュエルをするには十分なスペースがある祭壇の上で距離を取って向かい合う。

そして開始する前に、俺は小さく呟いた。

「……十代。ひとまず、そ<sup>現実世界</sup>ちのセブンスターズは任<sup>問題</sup>せたぞ」

俺がこの世界に来るときには行方不明状態だったが、時間のずれを考えると戻ってきている可能性もある。

そしてその場合、恐らくは現実世界でセブンスターズを相手取っているだろう友に対してそう呼びかけ、俺はディスクのボタンに指を添える。

現実世界にいるであろうセブンスターズは、とりあえず十代に任せる。その代わり俺はコイツを絶対に倒してみせる。それから、十

代や皆と共にセブンスターズ戦に戻ってやる。

そして、最終的には楽しい学園生活を過ごしてやるのだ。

そのためにもこのデュエル、負けるわけにはいかない！

その決意と共に開始ボタンを押し、カードに手をかける。

息を吸い込み、そして声を張り上げて叫ぶように宣言した。

「『デュエルッ！』」

## 第25話 魔物（後書き）

タイタンの代わりとなるセブンスターズは、トラゴエディアさんでした！

いきなりハードルが上がったぜ、ヒッハー！

タイタンをナツパとするなら、トラゴエディアさんは初期フリーザ様。

きっとそれぐらいの差があるに違いありません。悪役の器的な意味で。

そんなわけで、漫画版GXのラスボスの登場です。

今回のお話の中でも触れられていますが、これは主人公がこの世界に来たから起きた出来事ということになっています。

ただでさえカードが力を持つ世界に、完成の《トラゴエディア》を持ち込んだ結果がこれだよ！ というわけです。

主人公のデッキはシンクロ、そしてシンクロデッキは遊星デッキ。遊星デッキはジャンルにもなるわけで……トラゴさんはそこに入っていたという設定だったり。

要するに第四話の最初のほうでちょこつと出てきた、遠也がマズイと判断して抜いたカードの中の1枚です。

トラゴさんが出てくるまでの話、本当はもう少し引っぱりたかったんですが……そうするとかかなり冗長になりそうだったので仕方なく一気に行きました。

詰め込んだ感は拭いきれませんが、勘弁してもらえると助かります。

さて、次はデュエルです。

次話もどうかよろしくお願いします。

## 第26話 終劇（前書き）

トラゴエディア戦です。

お話のほぼすべてがデュエルですので、少々長いかもしれませんが。

そんな中、トラゴエディアとの戦いがどうなるのか、お楽しみいただきたいと思います。

## 第26話 終劇

皆本遠也が行方不明。

この情報は、セブンスターズと戦う者たちを大きく動揺させた。

十代もまた行方知れずだったが、あちらはアナシスに連れて行かれたということがわかっている。セブンスターズ関連でもないし、少なくとも身命に関わる事態にはならないと考えることが出来る分心配せずにすんだ。

だが、遠也は違う。誰にも知られぬままの失踪。そこにセブンスターズの影を見出すのは、彼ら 万丈目、明日香、三沢、カイザー、クロノス、大徳寺といった実際に事を構えている面々と、事情を知る翔や隼人にとっては自然なことであった。

幸いと言っているのか、まだ鍵は奪われていないようだが、しかしだからといって遠也の身が無事であるという保証にはならない。安心できる要素はどこにもなかった。

そして、遠也は彼らの中でもトップクラスの實力者だ。カイザーに対して勝ち越すことが出来るデュエリストである遠也がいなくなつたという事実は、あるいは遠也を破る程の者が敵にいるとも考えられる。

そういった意味でも、彼らにとって遠也の失踪は動揺を大きく誘うものであったのだ。

捜し続けている十代の行方。そこに遠也の捜索も加わり、また安否の保証もない遠也の捜索は十代よりも優先して行われた。

彼ら仲間たちも遠也の捜索に全力で臨んだ。

しかしそれでも、遠也の姿を見つけることは出来なかったのだ。

それでも捜索を続け、遠也がいなくなってから四日後。この島に帰ってきた男がいた。

そう、行方不明になっていた十代である。

アナシスに連れられて行った先で、どうにか船を借りて………というか分捕ってアカデミアまで帰ってきたのだ。

翔や隼人、明日香といった面々に迎えられて若干の疲労を見せながらも笑顔になる十代だったが、それも万丈目から聞かされた情報によってその表情は驚愕へと一変した。

「なんだって!? 遠也が行方不明!?!」

「ああ。貴様がいなくなった次の日だ。その日以降、遠也を見た奴はいない」

十代の帰還を聞き、集まった鍵を守るデュエリストたち。

その場で遠也の行方が分からないと聞いた十代は、驚いた後に遠也の身を案じて心配そうな顔になる。

十代の場合とは明らかに違う失踪。そこに不安を覚えないほど、十代は楽観的ではなかった。

しかし、鍵はまだ奪われていないらしい。それというのも、門の封印が弱まっただけではないからだそうだ。つまり、少なくとも鍵は健在であるということ。

そこまで聞いて、十代は決心する。

鍵は必ず遠也が守っているはず。なら、俺たちは遠也の分までセブンスターズを倒し、島を……世界を守らなければいけないと。

遠也が帰ってきた時に、何も心配がないように。俺たちが遠也の分まで頑張り、そして遠也を迎えてやろうと。そう決めたのだ。

だから十代はこう提案する。「遠也の搜索を続けつつ、セブンスターズを倒す」と。

はじめは遠也をないがしろにしてしまうのはどうかという意見も出たが、それも続く十代の言葉によって立ち失せていく。

「遠也は強い。あいつがそんな簡単にやられるわけがないぜ！だから、俺たちは遠也を信じて、俺たちが出来ることをやるんだ！」



十代は遠也がいたら、自分のことよりセブンスターズとの戦いのことを気にするだろうと思っていた。そしてそれは、十代は知らぬことだが遠也が精霊界で十代に対して呟いた内容と全く同じだった。

遠也は十代にしばらく共に戦えないことを詫び、後を託した。そして十代は、それを知らずとも自然とその言う通りに動こうとしている。

それは二人の間にある友情の為せる意思の繋がりがったのかもしれない。

こうして、彼らは遠也の行方を捜しつつも、自分たちの目前に迫った脅威を叩くことに決めたのだった。それに、そうすればいずれ遠也の所在に行き着くという考えもあった。そういう意味でも、セブンスターズを倒すことは悪いことではなかったのだ。

彼らは決意も新たにこの事件に立ち向かう。遠也の無事を祈りながら、そうしていくことで遠也を助けることができる信じて……。

皆本遠也 LP：4000

トラゴエディア LP：4000

『ターンはオレからだ。ドロー！』

互いの命を懸けた闇のデュエルが始まり、先攻であるトラゴエディアがカードを引く。

飛び立つカードの絵柄を見た時から、こうして闇のデュエルになる可能性は考えていた。まして、トラゴエディアという漫画版遊戯王GXではラスボスだった相手だ。そうならないと考える方がどうかしている。

だから、俺はカードを追いかける際、マナにカードの行方を確認してもらいながらデッキを弄っていた。

弄るといつても、数枚のカードを抜いて新たに入れたただけだ。一応、セブンスターズとの戦いが始まった時から持ち歩いている、俺本来のデッキのカードたち。そのいくつかを入れたのだ。

果たしてそれが吉と出るか凶と出るか……。俺は知らず顔から流れる汗を拭いながら、向こうのターン経過を見守る。

『ほう……いいカードが来た』

笑みを浮かべながら、トラゴエディアはカードを手にとった。

いったい、どんなカードが手札に来たんだ。息を呑んで、そのカードを見つめる。

『オレは手札から《墓守の司令官》を墓地に捨て、効果発動！ デッキから《王家の眠る谷・ネクロバレー》を手札に加える！』

「なッ　　!？」

いきなり手札にソイツだと!？

憑依している相手が墓守の長であることから予想してはいたが、やはり相手のデッキは【墓守】デッキか！ 本音を言えば当たってほしくない予想だったが、見事に当たっちゃった……。

フィールド魔法《王家の眠る谷・ネクロバレー》は、墓地のカードに効果が及ぶ魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし、更に墓地のカードを除外する事を禁止する効果を持つ。墓地を多用する俺のデッキにとって、スキルドレインなみに厄介と言っいいい。

加えて、「墓守の」と名のつくモンスターの攻守を500ポイント強化する効果まで併せ持つ、元の世界の環境においても非常に強力なカードだ。

だというのに、そのキーカードを先攻ターンで手札に加えられるとは……。

正直に言っつて、かなりマズイ。

『ククク……俺は手札に加えたフィールド魔法《王家の眠る谷・ネクロバレー》を発動！』

トラゴエディアがデッキから手に取ったカードをそのまま発動させる。

それにより、薄暗く仄かな明かりに頼るだけだった周囲の風景は一変。ピラミッドを望む荒野の中、せり立つ岩壁の間に夕陽が差しこむ情趣に富んだ景色へと場を変貌させた。

ピラミッド傍に存在する岩壁に挟まれるように俺たちは立つ。両側に立つ壁は天辺が見えず、十代が使う摩天楼よりもはるかに高い。

例えるなら大きな渓谷　　グランドキャニオンのような渓谷の谷間にいるかのような錯覚を抱きながら、俺はトラゴエディアの行動を見据えた。

『更にモンスターをセット！ カードを1枚伏せてターンエンドだ！』

裏側表示のカードが場に2枚。そこで奴のターンが終わる。

なんてこった……。【墓守】にとって理想的ともいえる始まり方じゃないか。

恐らくあの伏せカードは、セットモンスターやネクロバレーを守るカード。ただでさえ墓地を指定する効果は封印されているんだ。わかっていたことだが……。これは一筋縄ではいきそうにないな。

「俺のターン、ドロー！」

最初のターン。大きく動くことが出来る手札ではない、か。

だが、手札にはライコウがいる。上手くいけば、これでネクロバレーを破壊することも可能だろう。

「俺はモンスターをセット！」

『その瞬間、畏発動！ 《誘惑のシャドウ》！』

「なッ……！？」

誘惑のシャドウ!?　なんて限定的なカードを入れてるんだ!

確かにリバー効果モンスターは低攻撃力であることが多いし、そこにネクロバレーで強化された墓守をぶつけければ大ダメージが期待できる。だが、そうそう入れるカードでもない。

この世界でも採用率の高い《メタモルポッド》へのメタか?　墓守の長のデッキがどうなっているのかは知らないが、いずれにせよこの状況では最悪のカードだ。

『これにより、貴様のセットモンスターは表側攻撃表示になり、リバー効果も発動しない。クク、さあその姿を晒してもらおうか』

「くっ……」

《ライトロード・ハンター　ライコウ》　ATK/200　DEF  
/100

当然、セットモンスターはライコウだ。リバーした時、相手の場のカード1枚を破壊する優秀なリバー効果モンスターだが、それもリバーさせなければ意味がない。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンドだ!」

もはや、俺はターンを終えるしかない。

次のターンで受けるダメージを覚悟しながら、俺は闇のオーラに包まれた墓守トラゴエディアの長の姿を見つめた。

『オレのターン、ドロー！』

カードを引いたトラゴエディアは、にやりと笑みを見せる。

『まずはセットモンスターを反転召喚！ 《墓守の偵察者》のリバース効果により、オレはデッキから攻撃力1500以下の「墓守の」と名のつくモンスター1体を特殊召喚する！ 出でよ、《墓守の長槍兵》！』

《墓守の偵察者》      ATK/1200      1700      DEF/2000  
0      2500

《墓守の長槍兵》      ATK/1500      2000      DEF/1000  
0      1500

共に墓守に属するモンスター。当然、ネクロバレーの効果により攻撃力・守備力ともに500ポイントアップする。

『バトル！ 墓守の長槍兵で《ライトロード・ハンター ライコウ》を攻撃！ 喰らえ、《長槍速撃突》！』

「畏発動、《ガード・ブロック》！ 戦闘ダメージを無効にし、カードを1枚ドロウする。ドロウ！」

鋭い槍の一突きが、ライコウの身体に突き刺さり破壊される。だが、ガード・ブロックの効果によりその穂先は俺に届くことはなかった。

だが、攻撃はこれで終わりではない。

「<sup>トアタック</sup>まだ墓守の偵察者が残っているぞ、ククク。墓守の偵察者で直接<sup>ダイレク</sup>攻撃！」

墓守の偵察者が瞬時の俺の目の前に移動し、不気味な笑みを浮かべたまま手に持ったナイフを振るう。

それは俺の肩口からざっくりと身を切り裂き、肉を抉る。それがあくまで幻なのだとしても、その時に生じる痛みは間違いなく本物だった。

「ツぐ……あああッ！！」

遠也      LP：4000      2300



「遠ぜッ！」

あまりの痛みにも、俺はたまらず膝を折ってナイフが走った右肩に手をやる。右肩は……繋がつている。だが、本当に肉ごと消し飛ばされたかのような激痛だった。

息を切らせながら、立ち上がる。そして、叫ぶように俺の名前を呼んだマナに小さく手を振って見せた。隣のサラも心配げに見ている。

女の子二人の前で、格好悪い姿は見せられないだろ、男として。

そんなふうに関自分をどうにか納得させ、トラゴエディアに向き直る。しかしその間も、痛みにも表情が引きつるのを懸命にこらえなければならなかった。

『ククク……どうした、随分と痛がつているみたいじゃないか。オレはカードを1枚伏せて、ターンエンドだ』

しかし、奴にはそんな痩せ我慢もお見通しらしい。当然か、あれだけ痛がつちまったんだから。

舌打ちを一つし、俺はカードを引いた。

「ぐっ……俺のターン、ドロー！」

引く動作で、痛みが走る。だが、そんなことを気にしていられる状況でもない。

この状況を抜け出したいのなら、奴に勝つことが最短の道。ならば多少の無理を押ししても、そのために全力を尽くすことが最善だ。

「俺は手札から《レベル・ステイラー》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！ 更にレベル・ステイラー自身の効果で、クイック・シンクロンのレベルを1つ下げて特殊召喚！」

レベル・ステイラーの効果は墓地で発動する効果だ。よって、「墓地を対象にした効果を無効にする」という効果を持つネクロバレーには引つかからない。

《クイック・シンクロン》     ATK / 700     DEF / 1400

《レベル・ステイラー》     ATK / 600     DEF / 0

さて、ようやく場にチューナーとそれ以外のモンスターが揃った。

「レベル1レベル・ステイラーに、レベル4となっているクイック・シンクロンをチューニング！」

レベルの合計は5だ。

一発お返ししてやるぜ、この野郎！

「集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ！ シンク  
口召喚！ 出でよ、《ジャンク・ウォリアー》！」

《ジャンク・ウォリアー》 ATK/2300 DEF/1300

俺の場に現れる、青い鋼鉄の身体に包まれた拳闘士。その姿を、  
というよりはそこに至るまでの過程を見て、トラゴエディアは眉を  
ひそめた。

『シンク口召喚だと？ なんだ、それは』

ここ数か月でようやく認知度も上がってきた新しい召喚方法。そ  
れゆえ、長の知識の中にもなかったのだらう。

このまま進めて不都合が生じても面倒くさい。そう思った俺は、  
素直に説明を施す。

「シンク口召喚とは、場のモンスターのレベルを合計し、それに等  
しいレベルを持つシンク口モンスターを融合デッキから特殊召喚す  
ることだ。お前が眠封印されているっている間に、時代は変わったってことだよ」

尤も、多少の皮肉をアクセントに添えることは忘れないが。

だが、そんな俺の皮肉にも、トラゴエディアは不遜な態度で返す。

『フン、それがどうした。それでも、虫ケラに負けることなど有り得ぬ』

「なら、負ければお前は虫ケラ以下だ！ バトル！ ジャンク・ウオリアーで墓守の長槍兵に攻撃！ 《スクラップ・フィスト》オ！」

ジャンク・ウオリアーが跳び上がり、勢いをつけて上から長槍兵を殴りつける。

鋼鉄の拳に、ただの人間が対抗できるわけもなし。長槍兵はそのまま破壊されて、その分のダメージがトラゴエディアに与えられる。

『ぐっ……』

トラゴエディア LP:4000 3700

ジャンク・ウオリアーが粉碎した岩の欠片が長の身体を打つ。だが、今は黒い霧にしか見えないトラゴエディアにも痛みはあるようで、苦悶の声が聞こえた。

「更にカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

『こつでなくてはな。オレのターンだ、ドロー！』

カードを引いたトラゴエディアは、手札から1枚のカードを取ってディスクに置く。

『オレは墓守の偵察者を生贄に捧げ、《墓守の長》を召喚する！  
そしてこのカードの召喚に成功したため、墓地の墓守の長槍兵を特殊召喚する！』

《墓守の長》      ATK / 1900      2400      DEF / 1200  
1700

《墓守の長槍兵》      ATK / 1500      2000      DEF / 1000  
0      1500

現在俺が相対している相手にそっくりな男がフィールドに現れた。その精霊に憑依しているのだから、当たり前か。

そして、さっきも出てきた長槍兵が再びフィールドに戻ってくる。貫通効果持ちかつ攻撃力2000は地味に厄介だ。

墓守はネクロバレーがあると、途端にどのモンスターも面倒くさ

くなるから本当に困る。

『バトル！ 墓守の長でジャンク・ウォリアーに攻撃だ！ 《王家の怒り》！』

「喰らうかよ！ 畏発動、《攻撃の無力化》！ その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

ジャンク・ウォリアーの前に現れた次元の渦に飲み込まれ、長の攻撃はこちらに届かない。

攻撃は完璧に防がれたというのに、それを見てトラゴエディアが特に表情を変えることはなかった。

『防いだか。ならば、俺はこれでターンエンドだ』

「俺のターン、ドロー！」

トラゴエディアはあまり積極的に動く気がないのだろうか。

そう思えるほどに、行動と態度が淡々としている。もしくは、何かを狙っているのか。だとすれば、キーカードはやはり……。

だとすれば、その前に出来ればネクロバレーを破壊し、こちらのペースに持っていきたい。ネクロバレーの影響下であちらの望む状況になるのは、さすがにマズイ。

「俺は《ジャンク・シンクロン》を召喚！」

《ジャンク・シンクロン》     A T K / 1 3 0 0     D E F / 5 0 0

これで、再び場にシンクロ素材が全て揃った。今回のレベルの合計値は8である。

「レベル5ジャンク・ウオリアーに、レベル3ジャンク・シンクロンをチューニング！ 集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 粉碎せよ、《ジャンク・デストロイヤー》！」

《ジャンク・デストロイヤー》     A T K / 2 6 0 0     D E F / 2 5  
0 0

光の中から現れる、全身が鋼で構成された巨大なロボット。その外見に見合い、攻撃力・守備力共に高いモンスターだ。

そして何より、その効果が強力である。

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！ シンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで場のカードを破壊できる！ 素

材は1体、よって1枚のカード　ネクロバレーを破壊する！　《  
タイダル・エナジー》！」

ジャンク・デストロイヤーより放たれるエネルギー波がフィールドを襲い、俺が指定したカードを押し流す。

それによってそのカードは破壊され墓地に行き、あの鬱陶しかったフィールド魔法はこれで消え去った。

『ぬう……』

そしてフィールド魔法がなくなったことにより、場の墓守の攻守から補正值である500ポイントがそれぞれ引かれる。

《墓守の長》　ATK/2400　1900　DEF/1700  
1200

《墓守の長槍兵》　ATK/2000　1500　DEF/1500  
0　1000

よし、十分にダメージが期待できる値に戻った。なら、俺が出す指示は一つ。

「バトルだ！　ジャンク・デストロイヤーで墓守の長槍兵に攻撃！



《デストロイ・ナックル》！」

デストロイヤーの巨大な拳が、さながら岩塊を落とすかのように叩きつけられる。

長槍兵は、さっきよりもなお一瞬でフィールドから姿を消した。

『ぐぐっ』

トラゴエディア      LP：3700    2600

そしてその攻撃の余波がトラゴエディアを襲い、やはり依り代である墓守の長の身体が傷つけられる。

闇のデュエルである以上仕方ないが、それでも利用されているだけの人物を傷つけていることに心が痛んだ。トラゴエディアを倒した後には誠心誠意謝るから、今はどうか許してほしい。

そう心の中で長に引け目を感じつつ、メインフェイズ2に移行する。

「魔法カード《戦士の生還》を発動。墓地のジャンク・シンクロンを手札に戻す。これでターンエンドだ！」

『オレのターン、ドロー！』

奴がカードを引く。そして、意地悪く口角を上げて笑った。

『オレはモンスターをセツト。そして再び《王家の眠る谷・ネクロバレー》を発動！』

「なッ！？」

『クク、なにも手札に無いとは誰も言っていないだろう？ なにせデッキには3枚入っているのだからな』

その言いように、俺は臍を噛む。

その通りだ。デッキに同名カードは3枚まで投入できるのだから、もう1枚がすでに手札に来ていたとしても何の不思議もない。

そこまで考えていなかった俺の浅はかさが、再び奴に有利な場を作らせることになってしまった。

《墓守の長》      ATK / 1900      2400      DEF / 1200  
1700

『最後に《天よりの宝札》！ 互いに手札が6枚になるようにドロ―する。ドロ―！』

「ここで原作最強のドローカードだと？」

奴の手札はこれで6枚。もちろん俺の手札も6枚に回復した。大量ドローは確かに自身のターンである以上有利に働くが……すでに召喚権は使っているはず。ここからどうする気だ……。

『そして畏カード《降霊の儀式》を発動する。自分の墓地の「墓守の」と名のつくモンスター1体を特殊召喚する。このカードはネクロバレーの影響を受けないカードだ……《墓守の司令官》を蘇生！』

《墓守の司令官》	ATK/1600	2100	DEF/1500
0	2000		

『更に《強欲な壺》を発動。2枚ドローする』

これでトラゴエディアの手札は7枚。基準である6枚を超えるまでに手札が増えている。

そして、トラゴエディアは俺の場のジャンク・デストロイヤーを指さした。

『バトル！ 墓守の長でジャンク・デストロイヤーに攻撃！』

「なに!?!」

墓守の長の攻撃力は2400、デストロイヤーは2600だ。つまり、自爆特攻になる。

俺をはじめマナとサラもその暴拳に驚いている。そして驚く間に、墓守の長はジャンク・デストロイヤーに攻撃を仕掛け、その鋼の身体に攻撃を弾かれて自身が消滅した。

手札増強、そして自爆特攻……。考えられる可能性は、一つだ。それに思い至った瞬間、俺は無意識に喉の渇きから唾を飲み込んだ。

トラゴエディア LP：2600 2400

そう、奴は持っている。元々は俺のカードである、あのカードを。戦闘ダメージを受けることが特殊召喚条件として記載された、レベル10の最上級モンスター……！

『ククク……オレが戦闘ダメージを受けたこの瞬間、特殊召喚条件は満たされた……』

そう言いつつ、トラゴエディアは手札から1枚のカードを抜き取って掲げてみせた。

その特殊な召喚条件、更に手札を増強してからの召喚となれば、該当するモンスターなど、1体しか存在しなかった。

そう、いま俺と向かい合っている敵……ソイツ自身である。

『我が憎悪と絶望の中に沈め、小僧……。《トラゴエディア》を特  
殊召喚！』

そう奴が宣言し、1枚のカードをディスクに置く。そして、ディスクがそれを読み取った瞬間　長の体を覆っていた闇が、爆発的にその密度を増した。

ズズ、とそんな擬音が聞こえてきそうなほどにゆったりと、しかし確実に闇は長の身体から噴き出し、それはやがて重力に逆らって立ち上がり、奇妙な形を象っていく。

それは天井に届くほどの巨体。下半身は昆虫の下腹部のような膨らみを持ち、そこから身体を支える六本の足が生えている。さながら節足動物のようだ。

上半身は人間的であり筋肉質、しかし両腕は歪で、右腕は鋭い鋏、左腕は五本指……と、節操がない有様だ。

顔つきは鬼のように恐ろしく、その身体はところどころに棘のような突起が見えており、一層その不気味さを際立たせている。

古代エジプト、千年アイテム作成の犠牲となった村を出身地に持ち、アイテムを有する王と神官に復讐を誓った男の成れの果て。

悲劇  
トラゴエディアの顕現であった。

《トラゴエディア》 ATK/? DEF/?

「攻撃力と守備力が、決まっていない……?」

その圧倒的な迫力と闇の魔力は禍々しくも実体の重さを伴う重圧となつて周囲を覆い尽くす。それに当てられたのか、サラが意識を失つて崩れ落ちるが、それを隣からマナが支えた。

だが、トラゴエディアから発せられる威圧感は一級魔術師であるマナにもキツイ。そのプレッシャーに耐えながら、クエスチョンで示されるカード表記を見てマナが首をかしげた。

『フフ、トラゴエディアの攻守は、手札の枚数によつて決定される。その値は手札の枚数×600ポイント！そしてオレの手札は6枚！ つまり』

《トラゴエディア》 ATK/? 3600 DEF/? 3600

「こ、攻撃力と守備力が3600のモンスター！」

攻撃力3000が最高基準値であるこの世界において、基本攻撃力がそれというのは破格と言つてもいい数値である。

俺もそれほど初期攻撃力はなかなか出せない。だからこそそのマナの驚きの声に、トラゴエディアは気を良くしたのかにやりと笑った。

『クク、そしてバトルフェイズ中の特殊召喚のため、追撃が可能だ……』

はつとした顔で、俺を見るマナ。

俺はそれに少しばかりの笑みを返し、再度奴に向き直る。そして、ぐつと腹に力を入れた。

『ゆけ、我が憎しみの化身よ！ あの鉄細工の木偶を薙ぎ払え！』

トラゴエディアの口が開き、そこにどろりとした魔力が集束していく。

くる……ッ！

『 《ディスヘア・プレス絶望の殺息》 ！ 』

瞬間、俺の視界は魔力によって塞がれ、そして身体は得も言われぬ激痛によって蝕まれる。

耐えがたい苦痛が全身に走る。まさに、地獄の時間と化した。

「ッが……ぐああああッ！！」

「遠也っ！！」

遠也 LP：2300 1300

魔の奔流が過ぎ去ったのち、俺は地面に崩れ落ちる。

これは……かつて経験したカミューラなどの闇のデュエルの比じゃない。曲がりなりに、ラスボスを張るモンスター……神の撃と間違っかのような威力だった。

「冗談じゃ、ない……こんなの、まともに喰らったらマジで死ぬ……！」

俺は余裕など全くなく、そう思う。だが、奴はそんな俺を見て、心底可笑しそうに笑っていた。

『ハハハハッ！ 更に墓守の司令官で攻撃だ！ 死ぬッ！』

「ぐ……！ て、手札から、『速攻のかかし』！ ッ……」  
効果により、バトルフェイズを、終了するッ……！」



痛みにより声が上手く出ない。だが、それでも震える手でカードを墓地に送る。

そして場に現れた1体のかかしが、墓守の司令官の攻撃を受け止めてダメージを殺してくれた。

『ほう……。ならばオレはこれでターンを終了する』

トラゴエディアがエンド宣言をし、ターンが俺に移る。

だが……。

「くっ……はっ……！」

全身に走る痛みに、やはりまだ調子が整わない。

それでもどうにか身体を気力で支え、一度深呼吸をして呼吸も元に戻していく。

「俺の、ターン……ドロー！」

後ろで見ているマナに心配させないためにも、せめて普段通りの姿に見えるようにデュエルを続けてみせる。

「俺は《チューニング・サポーター》を召喚！ 更に《グローアツプ・バルブ》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！」

《チューニング・サポーター》 ATK/300 DEF/200

《クイック・シンクロン》 ATK/700 DEF/1400

トラゴエディアの攻撃力3600は強力な値だ。だが、これから召喚するモンスターならば、その効果により戦闘破壊が可能になる。

「チューニング・サポーターはシンクロ素材とする時レベルを2として扱える！ レベル2となったチューニング・サポーターに、レベル5クイック・シンクロンをチューニング！ 集いし思いが、ここに新たな力となる。光差す道となれ！ シンクロ召喚！ 燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/2800 DEF/1800

攻撃力は2800。一般的なレベル7モンスターとしては最大値に近い攻撃力である。そして何より、こと戦闘においてこれほど頼りになるモンスターもいない。

「チューニング・サポーターの効果で1枚ドロ！ 更に魔法カード《闇の誘惑》を発動。デッキから2枚ドロし、手札の闇属性モンスター《ジャンク・シンクロン》を除外する！」

奴の場のトラゴエディアを倒す算段はこれだった。ならば、あとは実行するのみ！

「バトル！ ニトロ・ウォリアーでトラゴエディアに攻撃！」

『攻撃力が劣るモンスターで攻撃だと……？』

訝しむトラゴエディアに、俺は噛みつくように言葉を返す。

「侮ると痛い目を見るぜ！ ニトロ・ウォリアーには魔法カードを使ったターンのダメージ計算時に、攻撃力を1000ポイントアップさせる効果がある！」

こちらから行う戦闘において、無類の強さを発揮するニトロ・ウォリアー。その源泉がこの能力だ。

そしてその効果を使用したニトロ・ウォリアーの現在の攻撃力は。

《ニトロ・ウォリアー》 ATK/2800 3800

『3800か……!』

「これで、トラゴエディアは倒される! いけ、《ダイナマイト・ナックル》!」

ニトロ・ウォリアーの拳に炎が宿り、身体の後部からジェットエンジンのように煙と噴き出しながら、相手に迫る。

瞬時に近づいたニトロ・ウォリアーは、その燃える拳を振りかぶり、一気にトラゴエディアに叩きつけた。

『ぬう……!』

それにより、攻撃力で200ポイント劣るトラゴエディアは破壊。奴のライフポイントは更に下がる。

トラゴエディア LP:2400 2200

よし、と内心でガッツポーズをとった。しかしその瞬間、一瞬だけ身体がふらつく。

攻撃が上手く決まり、相手の切り札級モンスターを倒したからか。

気が緩んだところを、我慢している痛みを持つていかれたらしい。

「ツグ……！俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

だが、まだそれに屈するわけにはいかない。何が何でも立ってやる。そう決めた俺は足に力を込めて大地を踏み、ただ強く相手を見据えた。

『なかなかやる……。オレのターン、ドロー！』

変わらず余裕を滲ませた不敵な笑みを浮かべたまま、トラゴエデ  
イアは手札に目を向ける。

『オレは永続魔法《生還の宝札》を発動！墓地からの特殊召喚に成功するたびに、デッキからカードをドローする！クク、オレは墓守の司令官を生贄に、《墓守の長》を召喚！更に効果により、墓地から《墓守の長槍兵》を特殊召喚する！』

《墓守の長》      ATK / 1900      2400      DEF / 1200  
1700

《墓守の長槍兵》      ATK / 1500      2000      DEF / 1000  
0      1500

再び場に現れる墓守の2体。ネクロバレーが存在するため、その効果によりともに強化されている。

既に下級モンスターでは相手にならないステータス。加えて生還の宝札もあることで、ドロー補助も行われている。すぐに手を講じてくると見ていいだろう。

『生還の宝札の効果でドロー！ そして墓守の長の永続効果により、オレの墓地はネクロバレーの効果を受けない。よってオレは《死者蘇生》を発動！ 蘇れ、我が半身！ 更に生還の宝札の効果によりドロー！』

《トラゴエディア》     ATK/?     3600     DEF/?     3600

「くっ……」

やはり、手札に状況打破のカードがあったか。

再び出現したトラゴエディアに、俺の頬を一筋の汗が伝う。

『バトル！     トラゴエディアで二トロ・ウォリアーに攻撃！     《絶<sup>デ</sup>望の殺息》<sup>イスペア・ブレス</sup>！』

「畏カード発動、《くず鉄のかかし》！ 相手モンスターの攻撃を

1度だけ無効にし、このカードを再びセットする！」

起き上がった罨カードからガラクタで作られたかかしが現れ、トラゴエディアのプレス攻撃を防ぐ。これで行きか凌げたか……。

『ならば墓守の長で攻撃！ そしてこの時、手札から速攻魔法《収縮》を発動！ ニトロ・ウォリアーの攻撃力をエンドフェイズまで半分にする！』

「なッ……!?!」

《トラゴエディア》    ATK / 3600    3000    DEF / 3600

《ニトロ・ウォリアー》    ATK / 2800    1400

ここで収縮だと!?! まずい、墓守の長の攻撃力は2400。攻撃力が半減したニトロ・ウォリアーでは対抗できない!

『クク、さあこれで戦闘破壊が可能になったぞ。喰らえ、《王家の怒り》!』

「があああッ!?!」

遠也 LP：1300 300

再度俺の身を襲う激痛。残りライフ300まで追い込むその攻撃は、確実に俺の身体にダメージを残し、俺はその痛みに耐えきれずに両膝をついて座り込む。

『更に墓守の長槍兵で直接攻撃！ダイレクトアタック これで貴様は終わりだ！ 八八八八！』

「ブツ……！ 手札から《クリボー》を捨て、効果発動ッ！ ……この戦闘によるダメージを、0にする……ッ！」

膝をついた状態から、手札を1枚墓地に送る。緩慢な動きで行ったそれは、しかし問題なくその効果を發揮して俺を助けてくれた。

サイドデッキに稀に忍ばせていた、初代遊戯王の代表的なカード。その効果は現在でも優秀なカードとして評価されていて、俺はそのカード自身が好きなこともあって持っていたのだ。

ダメージをなくすカードは闇のデュエルでは重要になる。そう思っ  
て入れてみたカードに、助けられるとは……ありがとう、クリボー  
！。

『ほう、まだ凌ぐか。ターンエンド』



だが、クリボーのおかげで助かったとはいえ俺のライフはこれで300ポイント。

もはや風前の灯と言ってよかった。

「ぐ……」

立ち上がろうと身体を起こす。だが、上手く足に力が入らず、逆に尻餅をついてしまふ始末。その衝撃だけで痛みが走り、表情が歪んだ。

「遠也……ッ！」

『おっと、その小娘……近づくなよ。これは闇のデュエル。勝敗が定まるまで、誰にも邪魔することは出来んのだからな、ククク……』

サラに肩を貸しながら、マナがいきり込んで俺のもとに向かおうとする。しかし、トラゴエディアはそれを許さず、近づくことが出来ず悔しげに唇をかむマナを愉快そうに見ていた。

「遠也にひどいことするのは、もうやめて！ やるなら私が相手になる！ 私だって元々は古代エジプトの神官の精霊カ！ 相手に不足はないはずだよ！」

『……なに？ 神官だと？』

トラゴエディアがマナの言葉に片眉を上げ、その表情を徐々に憎々しげなものに変えていく。

まずい。トラゴエディアはかつて古代エジプトの王と神官によって出身の村を滅ぼされ、その憎しみと怨みによって魔物となった存在。

当時の神官の関係者を匂わせるマナの発言は、トラゴエディアの興味の対象を俺からマナに移すには十分すぎる！

「ま……待て、トラゴエディア！ どっち、向いてるんだよ……！」

『む……』

「遠也！？」

震える身体に鞭を打ち、どうにか立ち上がってトラゴエディアに呼びかける。

そして、俺はデュエルディスクを構えた。

「デュエルの途中だ……逃げ出すなら、止めはしないけどな……」

『ふん、そんな身体でよく言う。だが、まあいい。あの神官の娘には、あとでこの憎悪の捌け口となってもらおう』

「誰が……ッ、そんなことさせるか……！」

俺はやはりマナに憎しみの感情を見出したトラゴエディアを、精一杯の意思を込めて睨む。

そして再び相対する俺たちに、マナが心配そうな視線を送っていた。

「遠也……」

「心配、するなって。大丈夫……勝つさ」

マナに顔を向けて、にっと笑う。そして、すぐに背を向けた。さすがに、痛みを歪む顔を見せるわけにもいかないだろう。

目の前の相手を見る。トラゴエディアはマナにも手を出さなかった。これで、負けられない理由が増えた。なら、負けてやるわけにはいかない！

「俺のターン、ドロー！」

だが、今の俺の手札に状況を脱する手はない……。天よりの宝札

の時に引いた《死者蘇生》さえ使えば、まだ手はあるのだが、ネクロバレーの効果がそれを邪魔している。

もしくはジャンク・シンクロンの効果で墓地のモンスターを蘇生できれば、それだけでだいぶ楽になるのだが……。

まあ、うだうだ出来ないことを言っただけでも仕方がない。ひとまず手札にきたカードで凌いでいくしかないだろう。

「いくぞ……！ 俺は《ダーク・アームド・ドラゴン》を特殊召喚！ このカードは墓地に闇属性モンスターが3体のみ存在する場合、特殊召喚できる！ 俺の墓地の闇属性モンスターは《ジャンク・ウリアー》、《レベル・ステイラー》、《クリボー》の3体のみだ！」

《ダーク・アームド・ドラゴン》     ATK/2800     DEF/1000

万丈目が好んで使うアームド・ドラゴン。そのLV7の状態で闇に染まった姿が、このダーク・アームド・ドラゴンである。

その身体は黒く、滲み出る闇の力はかつてのアームド・ドラゴンLV7の時よりもその効果を強力なものにしている。

『面白い、そんなカードがあったとはな』

トラゴエディアもその特殊な召喚条件によって現れたモンスターに、興味を持ったようだった。このカードの効果を見れば、そうも言ってられないだろうが。

しかし、ネクロバレーのせいでダーク・アームド・ドラゴン最大の利点であるその効果、破壊効果が使えない。

こいつは「墓地の闇属性モンスター1体を除外し、フィールド上のカード1枚を破壊する」という効果を持っている。3体のみ闇属性モンスターが存在することが召喚条件なのだから、その時点で3枚の破壊が確定しているという極めて強力な効果なのだ。

だが、それも墓地に干渉する効果であるため、現状では使えない。それさえ出来ればここで勝つことも可能なのだが……どこまでもついで回るフィールド魔法である。

とはいえ、攻撃をする分には問題ない。いや、正確にはそれしか出来ないのだが……それでも、何もしないよりはマシだ。

「バトル！ ダーク・アームド・ドラゴンで墓守の長槍兵に攻撃！  
《ダーク・アームド・ヴァニッシャー》！」

ダーク・アームド・ドラゴンが腕を振り上げ、その腕ごと回転させながら、長槍兵に突進する。

そしてその拳は圧倒的な脅力と巨体から繰り出され、長槍兵を一瞬で叩き潰した。

『クク、いい一撃だ』

トラゴエディア LP:2200 1400

ライフは更に減少した。

だが、己の有利を悟っているトラゴエディアは表情を変えない。逆に、これでも劣勢のままにいる俺の方が厳しい顔つきになっていた。

「……………ターンエンド！」

『どっした、最初の威勢がなくなったな？ オレのターン、ドロ―』

《トラゴエディア》 ATK/3000 3600 DEF/3000 3600

これで再びトラゴエディアのステータスが上昇。

どうにかして、トラゴエディアやネクロバレーへの対抗手段を見つけないければ、このままじゃジリ貧だ。

『ふむ……手札から《サイクロン》を発動し、《くず鉄のかかし》を破壊する。そのカードは厄介そうなのでな』

《トラゴエディア》      ATK / 3600      3000      DEF / 3600

く。 確実に1度の攻撃を防いでくれる防御の要が俺の場から消えていく。

「くっ……」

「まずい、場のモンスターはダーク・アームド・ドラゴンが1体だけだ。」

『さて、今度こそ終わりだな小僧。      バトル！』

「ぐっ……待て！ バトルフェイズに入る前、お前のメインフェイズに俺は手札の《エフェクト・ヴェーラー》の効果を使う！ 手札から墓地に送ることで、エンドフェイズまでトラゴエディアの効果は無効にする！」

青い髪で、翼を広げた少女が降り立ち、その手から光を放ってトラゴエディアにぶつける。その後、その子はゆっくりとフィールド

から消えていった。

《トラゴエディア》 ATK/3000 DEF/3000

トラゴエディアの攻守は効果に依存している。なら、それを無効にしてしまえば攻守ともに0のモンスターでしかない。

コントロール奪取効果も厄介だが、そっちの効果は墓守デッキと俺のシンクロデッキではレベルが合うモンスターなんてそうそう居ないから、問題はない。

『みつともなく足掻く様もまるで虫だな。墓守の長を守備表示に変更、更にカードを1枚伏せて、《壺の中の魔術書》を発動！ 互いのプレイヤーはデッキから3枚ドロウする。これでターンエンドだ』

《トラゴエディア》 ATK/0 DEF/0

これで俺の手札も補充された。だがそれでも、まだ欲しいカードは来ない。

「俺のターン、ドロウ！」

ッ！ ようやくきたか、これでネクロバレーを潰せる！



「俺は手札から速攻魔法、《サイクロン》を発動！ お前の場のネクロバレーを破壊する！」

『甘いな、カウンター罠《魔宮の賄賂》。その魔法カードの発動を無効にして破壊し、お前はカードを1枚ドローする。クク、残念だったな。さあ、遠慮せずカードを引け』

「ぐっ……！」

俺は歯噛みしつつカードをドローする。

「なら、ダーク・アームド・ドラゴンで墓守の長に攻撃！ 《ダーク・アームド・ヴァニッシャー》！」

『クク、痛くも痒くもない』

長は守備表示であったため、トラゴエディアにダメージはない。それでも、相手の場をトラゴエディア1体にしたのには意味があるはずだ。

「《シンクロン・エクスプローラー》を守備表示で召喚。カードを2枚伏せて、ターンエンドだ……！」

《シンクロン・エクスペローラー》 ATK/0 DEF/700

『オレのターン、ドロー！』

《トラゴエディア》 ATK/3600 4200 DEF/3600

今だ、そう思考すると同時に素早く伏せカードの使用を行う。

「この瞬間、畏発動！ 《威嚇する咆哮》！ 相手はこのターン、攻撃宣言をすることが出来ない！」

『くっ……いい加減に煩わしさが勝ってきたな。手札から《墓守の長》を墓地に送り、手札を6枚に戻す。ターンエンドだ！』

《トラゴエディア》 ATK/4200 3600 DEF/4200

思い通りにいかない現状にイラつきを感じ始めたのか、トラゴエディアの表情に余裕の笑みがなくなる。

こうまで俺が攻撃に耐えるとは思わなかったんだろ。だが、俺にだって負けられない理由があるんだ。そう簡単にやられてたまるか！

「俺の、ターン」

逆転の一手は、まだない。しかし、何より厄介なあのネクロバレ  
ー……あれさえなければ、まだ凌ぐことはできる。そうなれば、逆  
転に必要なカードを引く機会も出てくるだろう。

だから、何よりもあのカードを破壊することが、俺の勝利につな  
がる。

後ろで俺の心配をして、泣きそうになってる奴のためにも、俺は  
負けられない……。十代、翔、隼人、明日香、三沢、カイザー、万  
丈目、レイ、ジュンコ、ももえ、クロノス先生、大徳寺先生……。

あの学園には俺を待っていてくれる奴らが、こんなにいるんだ。  
ペガサスさんも、海馬さんたちだって、俺のことを気にかけてくれ  
ている。一年前は、誰一人として知り合いすらいなかったこの俺に、  
今ではこんなに友達が出来たんだ。

俺のことを友達だと呼んでくれる皆、俺のことを大切だと思っ  
てる皆が、俺にはいる。

だから、絶対に負けられない。

頼む俺のデッキ！俺に、どうか応えてくれ！

「ドローッ……！」

ドローしたカード。それを見て、俺は取るべき手を瞬時に判断して行動に移す。

「モンスターをセット！ 更にダーク・アームド・ドラゴンを守備表示に変更して、ターンエンドだ！」

『オレのターン、ドロー！ ……ほっ』

《トラゴエディア》 ATK/3600 4200 DEF/3600

一瞬引いたカードに意外そうな表情を見せ、その後トラゴエディアは喜悦の混じる声で話し出した。

『やれやれ、呆気ない幕切れで申し訳ないな。オレは《墓守の呪術師》を召喚！ このカードが召喚に成功した時、相手に500ポイントのダメージを与える。少々面白みに欠けるが、虫にはこの程度の末路がお似合いだろう、ハハハハ！』

《墓守の呪術師》 ATK/800 1300 DEF/800  
1300

《トラゴエディア》 ATK/4200 3600 DEF/42

00 3600

得意げに笑うトラゴエディア。

確かに、俺の残りライフは僅か300ポイントだ。普段ならば500ポイントのバーンなど何ともないが、今の状況ではそれだけでも決め手になってしまう。

だが、しかし。

「まだまだ！ カウンター罠《神の宣告》！ ライフの半分を支払い、その召喚を無効にし、破壊する！」

遠也 LP:300 150

伏せカードが起き上がり、同時に天から降り注いだ雷が墓守の呪術師に直撃。

天から与えられた神の一撃に耐えられる者など存在しない。当然ながら呪術師は破壊され、墓地に送られた。

何度も何度もあと一步で防がれる。その事実にはさすがにトラゴエディアも我慢の限界が来たようだ。あからさまに表情を歪ませ、怒りを滲ませた。

『ちっ、虫ごときが煩わせおって！ ならばバトルだ！ トラゴエディアでダーク・アームド・ドラゴンに攻撃！ 《フェイスベア・プレス絶望の殺息》！』  
「ぐうっ！」

ダーク・アームド・ドラゴンの守備力は1000ポイントと低い。抵抗すら意味をなさず、トラゴエディアの一撃によりダーク・アームド・ドラゴンは破壊された。

その攻撃の余波だけで、身体が揺らぐ。だが、それでも倒れることはないよう足に力を込めた。

……これで、俺の場にはセットモンスターが1体と守備表示モンスターが1体、そして伏せカードが1枚。対してあちらの場には攻撃力3600のトラゴエディアがいる。

『オレはこれでターンエンドだ！』

状況は変わらず絶望的。

ここでキーカードを引けなければ、俺は恐らく負ける。

……いや、負けるなんて考えてはダメだ。……俺は勝つ！ 必ず勝って、マナの、皆のところに戻るんだ！

そのために、ここで必ず引く。このドローで必ず引いてみせる！ 祈るように、それでいて確定事項を宣言するかのように俺は強く

強くそう心の中で言い続ける。

「俺のターン……！」

その決意を全て指先に込め、俺はデッキトップのカードに手をかけた。その瞬間、背中にこれまでの痛みとは異なる熱い感覚が生まれる……だが、それすら感じられなくなるほどに、俺はただただ集中した。

願うことは一つ。あのカードを必ず引き当てて、アイツに勝つ！

「ドローオオオオッ！」

引いたカードは……！ よしッ！

「セットモンスターを反転召喚！ セットしていたのは2枚目の《ライトロード・ハンター ライコウ》だ！ そしてそのリバー効果が発動！ フィールド上のカード1枚を破壊する！ 俺が選択するのは当然《王家の眠る谷・ネクロバレー》！」

『くっ……！』

ライコウの目が光り、遠吠えのような鳴き声によってフィールドが脆くも崩れ去っていく。

俺を長く苦しめたネクロバレーも、ついに終わりだ。

「これで墓地への干渉を制限するものは何もない！」

「だが、オレの手札には3枚目の《王家の眠る谷・ネクロバレー》が存在している。残念だが、その自由は僅か1ターンだけのことだ。ハハハハ！」

「なら、このターンで決めればいいだけだ！俺は手札から《死者蘇生》を発動！墓地の《二トロ・ウォリアー》を特殊召喚！」

《二トロ・ウォリアー》 ATK/2800 DEF/1800

「更に墓地の《グローアップ・バルブ》の効果発動！デッキトップのカードを墓地に送ることで、デュエル中1度だけ特殊召喚できる！来い、《グローアップ・バルブ》！」

《グローアップ・バルブ》 ATK/1000 DEF/1000

チューナーと、それ以外のモンスターが俺の場に揃う。

ならばもちろん、することなど一つしかない！



「俺はレベル7ニトロ・ウォリアーにレベル1グローアップ・バルブをチューニング！」

2体が飛び上がり、グローアップ・バルブが作る光の輪の中を7つの星となったニトロ・ウォリアーが潜り抜けていく。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！ シンク口召喚！ 飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》ッ！」

《スターダスト・ドラゴン》 ATK/2500 DEF/2000

現れる星屑の竜。このデッキで、俺が最も信頼するカードの1枚。

だが、まだこれだけじゃない！

「更に伏せ<sup>リバース</sup>カードオープン！ 畏カード《エンジェル・リフト》！効果により墓地のレベル1モンスター《速攻のかかし》を蘇生する！」

《速攻のかかし》 ATK/0 DEF/0

「最初から伏せられていたカードが何かと思えば……。攻守0の雑魚モンスターをわざわざ蘇生とはな。どうやら貴様の命運も尽きた

「ようだ、クク」

「なんとも言えよ。けど、これからお前は俺に……お前が虫ケラと呼んだ存在に、負けることになるんだ！」

叫ぶように奴に言い返し、俺は1枚のカードに手をかける。

このターンのドローで引いた、このデュエルに終止符を打つ決め手となるカード。

それを指で掴み、勢いよくデュエルディスクに叩きつけた。

「俺は手札からチューナー・モンスター《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》を通常召喚！」

《救世竜 セイヴァー・ドラゴン》 ATK/0 DEF/0

淡く桜色に輝く小さなドラゴン。しかし、その身体からはまるで恒星のような眩い光が溢れ、トラゴエディアはその光を浴びて思わず腕で顔を覆っていた。

『ぐっ……なんだ、この光は！ 忌々しい！』

「こいつが……俺の希望の形だ！ レベル8スターダスト・ドラゴンとレベル1速攻のかかしに、レベル1救世竜 セイヴァー・ドラ

ゴンをチューニング！」

スターダスト・ドラゴン、速攻のかかしが宙に浮かび、その2体を巨大化したセイヴァー・ドラゴンが包み込む。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す！ 光差す道となれ！」

そして、その3体から爆発的な光が放たれ、その瞬間、俺のフィールドに新たに現れるのはこのデュエルにエンドマークをつける最強の竜の1体！

「シンクロ召喚ッ！ 光来せよ、《セイヴァー・スター・ドラゴン》ッ！！！」

《セイヴァー・スター・ドラゴン》     ATK / 3800     DEF / 3000

神々しい輝きを放つ、2対4枚の翼を持った純白のドラゴン。スターダスト・ドラゴンの姿を色濃く残す姿だが、その体躯はスターダストよりも一回り以上大きい。

翼を僅かに折りたたみ、そして広げる。その動作だけで辺り一面が一気に照らし出され、その輝きは確かな力強さと大きな信頼を俺

の心に強く感じさせた。

『な、なんだそのモンスターは……！　これは、マアトの羽よりも輝きが強い……！？』

闇のデュエルで受けたダメージで身体が痛み、思わずよろける。余裕はない……一思いに決めてやる。

動揺を見せるトラゴエディアを睨みつける。その視線を感じ取ったのか、奴もまた俺に向き合った。しかし、その表情には先ほどの動揺が見え隠れしている。

『くっ……だが攻撃力が上回ろうとも、我が憎悪の化身の攻撃力は3600！　オレの残りライフ1400ポイントは削り切れまい。そしてオレの手札は6枚ある。態勢を整えるには十分な枚数だ！』

その声には、どこか自らに言い聞かせるような響きがあった。ならば、その認識を改めてもらおう。

「今度は……俺が言ってやるつか。甘いぜ、トラゴエディア」

『なんだと！？』

「こいつを舐めるなよ。いずれ神さえ打倒するこのドラゴンをな……」

……」

いつかの未来、地縛神と呼ばれる神の系譜に連なる者をも倒してみせる存在なのだ。

なら、今ここで奴に負ける理由など、どこにもない！

「セイヴァー・スター・ドラゴンの効果発動！ 1ターンに1度、エンドフェイズまで相手モンスター1体の効果を無効にする！ 《サブリメーション・ドレイン》！」

「な、なにッ！？」

セイヴァー・スター・ドラゴンの身体から光が溢れる。

本当なら更にそのモンスターの効果をこのカードの効果として1度だけ使用できるが、この場合は使うことはないので説明を省く。

この状況で役立つトラゴエディアの効果といえば、手札枚数による攻守増加効果だが、あれは永続効果なのでセイヴァー・スター・ドラゴンの効果として使用することが出来ないのだ。

故に、必要なのは相手の効果を無効にするという能力だ。これにより、トラゴエディアの持つ全ての効果はエンドフェイズまで無効になる。

それはもちろん、攻守増加効果にも影響する。

《トラゴエディア》      ATK / 3600      0      DEF / 3600      0

さっきのエフェクト・ヴェーラーの時と一緒だ。効果に頼りきりの攻守を持つトラゴエディアは、効果を無効にされれば0ポイントの低ステータスをそのまま晒すことになる。

『ば、馬鹿な……！』

そして、奴の場には現在攻守0のトラゴエディアが1体だけ。伏せカードもない。

あのトラゴエディアは奴自身が半身と呼び、身体そのものと言いつつカードだ。ならば、それを完膚なきまでに破壊すれば、確実に奴自身にもその影響は及ぶ。

「      セイヴァー・スター・ドラゴン！」

俺の呼びかけに、セイヴァー・スター・ドラゴンは高く嘶いて応えてくれる。

そして今度は俺がその声に応えるように、トラゴエディアに鋭い視線を向けた。

『ぐッ！ まさか……貴様のような小僧に、このオレがッ……！？』

「そう、俺みたいなお僧に、お前は負けるんだ！ いくぞ……！  
セイヴァー・スター・ドラゴンでトラゴエディアに攻撃！」

俺の指示を受け、セイヴァー・スター・ドラゴンはその身体をトラゴエディアへと向ける。

『こ、コゾウオオッ！』

「光の中に消え去れ、トラゴエディア！ 《シューティング・ブラスター・ソニック》ッ……！」

光がセイヴァー・スター・ドラゴンへと集束していく。

そしてその光を束ねた純白の輝きがセイヴァー・スター・ドラゴンを包み込み、莫大な輝きを伴ってトラゴエディアに直進する。

セイヴァー・スター・ドラゴンの姿が奴の背後に現れた時。その時、トラゴエディアは既に光に包まれて消滅を始めていた。

『……………ッ……！』

奴の断末魔の声ですら、もはやその光の中に包まれる。

最後に何を言ったのか、それすら誰にも知られないまま、ついに  
トラゴエディアは倒されたのだ。

トラゴエディア LP:14000

光が過ぎ去ったあと、そこには墓守の長が倒れていた。また、トラゴエディアが倒されたことで闇の魔力による重圧もなくなったのか、マナの傍でサラも目を覚ましたようだ。

サラは目を凝らして周囲の状況を確認すると、倒れこむ長を見つけてすぐに走り寄る。

「長！」

抱きかかえ、長の肩が僅かに揺れているのを見ると、どつちやら息はあるようだ。そのことにサラも、俺自身もほっとして、俺はどおりとその場に腰を下ろした。

が、その瞬間。

『ぐ…………グ…………貴様、許さんぞ…………こ…………オレを、よくも…………』

まだ完全に消滅させるには至っていないかったのか、トラゴエディアのものであるう黒い霧が俺に近づいてくる。



今、度重なるダメージで俺は動くことが出来ない。それを狙い、今度は俺の身体を奪うつもりなのか。

だが、俺に恐怖はない。奴が徐々に近づいて来ても、それより早く駆けつけてきてくれる相棒が、俺にはいるのだから。

「これ以上、遠也は傷つけさせない！ このおっ！」

『ぐ、が……神官の、娘エエツ！』

マナが放った魔法が、黒い靄に取り憑いて動きを止める。

しかし、同じ闇の魔力を扱うものとしてそれ以上のことは出来ないのか、それともそれだけ奴の抱える憎悪が凄まじいのか、マナの攻撃は奴の動きを止めただけだった。

なら、あとはこの場にいるもう1体の相棒に任せるとしよう。

「……ッセイヴァー・スター・ドラゴン！」

俺が声を振り絞って呼びかけると、セイヴァー・スター・ドラゴンはその意を汲んで目も眩むような強い輝きを解き放つ。

それはしかし温かさすら感じさせる優しいもので、俺は気分が和らぐ感覚さえ覚えていた。

だが、憎悪と闇そのものであるトラゴエディアには毒でしかない。その光に当てられた霧は、徐々にその姿を薄めていく。

『こ、んな……馬鹿な……オ、レ……が……』

その直後、霧は完全に消え去り、もはや何の声も聞こえなくなっ  
た。

光が収まり、トラゴエディアの霧が存在していた場所には、1枚のカードが落ちてている。這うように身体を動かして、それを拾って手に取った。

《トラゴエディア》のカード……。既にトラゴエディアの本体が消滅した以上、本当にただのカードとなった1枚だ。

俺はそれをデッキケースの中にしまい、一息つく。これで、本当に終わったんだ。そう思うと力が抜けて、俺はあおむけに地面に倒れこんだ。

「遠也!？」

慌てたように俺の身体を抱き起こすマナ。その表情には確かな焦りが見えて、俺は実に不謹慎ながら笑ってしまった。

いやはや……やっぱり、心配してくれる人がいるってのは幸せな

ことなんだな。

「な、なに笑ってるの！ 本当に心配したんだからね！」

「わ、るい……」

気づけばマナの目には光るものがあつた。

泣きながら怒るなんて、器用なことをするもんだ。そんなことを思いながら、やはり心配をかけてしまったことに、申し訳なさが募る。

そのことを謝ろうと思うが、しかし、どうやら俺の身体はもう限界らしかった。

あの憎悪と害意にまみれた攻撃に耐え、最終的には残りライフ150まで追い詰められたのだ。こうして意識を繋ぎとめておくだけでも、実を言つとかなり辛い。

その証拠に、徐々に脳が考えることを拒否し始めているのか思考が鈍ってきた。

それを感じて、俺は完全に思考がシャットダウンされる前にか口を開き、マナに声をかけた。

「す、まん……限界だ……。あと、頼む……」

「あつ、と、遠也!？」

更に焦りを強くさせたマナに、もう一言何か。

そう思いつつも、俺の身体はその意思に反して一気に自由を失っていく。

その感覚に逆らうことを諦め、俺はマナの腕の中にいる安心感に包まれながら身体から力を抜いた。そしてついに意識は途切れ、俺は安堵と共に眠りの中へと落ちていくのだった。

## 第26話 終劇（後書き）

トラゴエディア戦、完！

わずか1話のデュエルでしたが、書いていたら普通に20000文字超えていました。

分けることも考えたんですが、ここは勢いを大事にして一気に持っ  
ていきました。

今回のキーカードは、《トラゴエディア》と《セイヴァー・スター・  
ドラゴン》です。

やはりあれぐらいの相手になると、セイヴァーでないと倒しきれな  
いと判断しました。

次のお話は、この戦いが終わり、遠也が現実世界に戻った時の話で  
す。

果たして現実世界ではいったいどれだけ時間が過ぎているのか、あ  
るいはそんなに過ぎていないのか。

次話もどうか、よろしくお願いします。

そしてオシリスOCG化おめでとう。

召雷弾もあるとか胸熱すぎます。

なぜラーの時に今回のような調整ができなかったのか……。

ラーのOCG化マダー？

## 第27話 学祭（前書き）

学園祭のお話です！

シリアス一転、学園生活へ。

トラゴエディア戦のその後から、話は始まります。

## 第27話 学祭

今、アカデミアの学生たちは誰もが浮かれて楽しげな空気に包まれている。

俺が今いるここ、ブルー寮の傍では何人もの生徒が忙しそうに行ったり来たりだ。レッド、イエロー、ブルー……どの生徒もそれぞれ笑顔であり、中にはブルー生がイエロー生と行動を共にしている姿さえ見ることが出来た。

普段なら、絶対にお目にかかれないだろう光景である。そう、普段なら。

つまるところ、今日はその普段には当てはまらない。なんといいても、今日は一年に一度しかない特別な日　学園祭なのだから。

仲のいい友達とワイワイやったり、ちょっと気になるあの子とラブコメしたりと、思春期の少年少女には欠かせないビッグイベント。無論、俺も意気揚々とその場に繰り出す。

「　　はず、だったのになあ」

「もう、文句言わないの。本当なら、安静にしていほしいんだからね」

車椅子に座る俺と、それを押す制服姿のマナ。

後ろから聞こえてくる声に俺は嘆息と共に「はいはい、わかってるよ」と返す。

それに「むう、ちっとも反省してない……」と不満そうに呟く声を聴きながら、俺は自分の腕を見る。服の隙間から覗くそこに俺自身の肌は見えず、代わりに真っ白い包帯が痛々しく巻かれていた。

\*

トラゴエディアを倒した後、積み重なった闇のデュエルによるダ



メージのため、俺はそのまま気を失ってしまった。

その後何があったのかはマナや周囲の皆に聞いた話になるのだが、どうも《セイヴァー・スター・ドラゴン》が俺を精霊界から現実世界に戻してくれたらしい。

本来、太陽が重なる時とかそういう限定された時間にしか精霊界からの脱出は出来ないらしいのだが……俺は闇のデュエルにより怪我を負ってそもそも動けない状態。更に、いくらマナでも世界を越えるほどの力はない。さて、どうしようかと思っていたところに、突然セイヴァー・スター・ドラゴンが俺とマナを翼に乗せて飛び立ったのだとか。

まさかセイヴァー・スターも精霊だったのだろうか。そういえばトラゴエディアとのデュエルの中、一度だけ背中に熱を感じた時があった。まさかとは思うが……赤き竜が何かしたのか？

しかし俺はシグナーではないはず。なら、何故力を貸してくれたのか。理由としては、スターダスト・ドラゴンを後世に残すために助けた、とかだろうか。あるいは単純に俺の勘違いだったか。

いずれにせよ、セイヴァー・スター・ドラゴンはそうして俺とマナを精霊界から連れ出し、いきなり十代たちの前に出現したらしい。

その時、十代たちはデュエルの神と称された古代エジプトのファラオの一人と戦った後だったようだ。もちろん、セブンスターズである。……なんか、古代エジプト関連多いな。

それはさておき、金ピカに輝く船に乗ったそのファラオが船ごと

天に向かって旅立ったのを、十代たちは見送っていたそうさ。

そしてその船も姿が見えなくなって夜の闇が戻ってきた時。さあ帰るかと思を返そうとした段に、再び闇を照らす光が現れたのだとか。

それがセイヴァー・スター・ドラゴンだったというわけだ。

突然空に現れた光る巨大なドラゴンに皆は見惚れつつも警戒し、注意を向けていた。すると、突然そのドラゴンが嘶き、そしてゆっくりと姿を消していったのだとか。

それに呆然としてみると、そのドラゴンから光に守られた人間が二人ゆっくりと地面に降りていくのが見えたらしい。

駆け寄ってみれば、そこには傷だらけで意識のない俺と、それに寄り添い回復魔法をかけ続けているマナの姿。

ブラック・マジシャン・ガールの格好そのままのマナだったが、それに翔が反応することはなかった。なぜなら、それよりも俺の身体が見るからにポロポロだったからだそうさ。

一瞬言葉を忘れて立ち尽くした皆を、元に戻したのはマナだった。「早くお医者さんのところに！ 遠也を助けて！」と叫んだのだとか。……嬉しいけど、恥ずかしい。

しかし、それによって皆は我に返り、そこからの行動は早かった。以前、十代もセブンスターズ戦で怪我を負っていたのが、言い方は悪いが為になったのだらう。

俺はすぐさま保健室に担ぎ込まれ、鮎川先生たちによって治療を受けて、即刻ベッドに送られて、あとはそのまま絶対安静となったわけだ。

なんといつても、裂傷、擦過傷、打撲、火傷と怪我のオンパレード。中でも打撲は相当ひどいものがあつたらしく、しばらく無理に動かないようにと言いくるめられてしまった。

足にも実は火傷があり、できれば車椅子でいてくれと言われていゝる。たぶん、トラゴエディアのプレスを受けた時だろう。あれ、身体全体が包まれてたし。頭はどうか守ってたけどさ。

そんなわけで、一人では上手く生活できなくなつてしまつたわけだ。そのため、俺は保健室に訪れた校長先生から直々の謝罪と、今後のセブンスターズとの戦いには参加せずしっかり休んでほしいという旨の言葉をもらった。

首から下げていた鍵はとりあえず十代に渡し、後は頼むと告げている。それを受けた十代は少し心苦しそうではあつたが、最後にはしっかり「おう！」と笑つてくれたから良しとする。

そして俺が十代に続いて保健室の住人となつたことで、来るわ来るわお見舞いの奴らが。

明日香や翔、隼人をはじめ、セブンスターズの件の関係者は皆来てくれた。カイザーの言葉が「良くなるまでデュエルはお預けだなんだ」だったのには思わず笑つた。どこまでデュエル第一なんだよ、つてさ。

本人は無意識に出た言葉なのか、笑い出した俺を不思議がっていたのがまた面白かった。

クロノス先生もお見舞いに来て、心底俺の身を心配し、「あとのこととは我々に任せるノーネ」と言って帰っていった。なにあの先生、カッコいいんですけど。

だが、大徳寺先生は来ていなかった。十代たちいわく、俺に続いて大徳寺先生も行方不明になったらしいのだ。

それを聞いて、しかし俺は納得していた。大徳寺先生がセブンスターズ側の人間だというのは覚えていたからだ。

俺たちが倒したセブンスターズは、ダークネス、カミューラ、タニヤ、俺がいない間の黒蠍盗賊団、デュエルの神ことアドバイス3世。そして、俺が倒したトラゴエディア。あれも一応、セブンスターズの要員にするつもりでアカデミアに石板を持ってきたみたいだし。

つまり、計6人。既にあと1人だけとなっているのだ。

ここまで追い込まれているのを鑑みて、大徳寺先生は向こうに戻ったと考えるのが妥当だろう。

親しくしていただだけに寂しいものがあるが、今はそれも気にしないようにする。みんなに何処か元気がないのも、それが原因だったみたいだし、ここで俺まで暗くなっても仕方がないからな。

と俺個人が思っけていても、状況に大きな変化があるわけはなく。いや、そもそも俺は自由に動けないのだから行動も起こせなかった。

しかし、皆の空気は微妙に暗いまま。どうしたものかと考えている時にやって来たのが、そう　学園祭だったのだ。

\*

腕に巻かれた包帯からこの状態に至るまでの経緯を思い起こしつつ、俺は腕を下ろして車椅子の背もたれに身を預けた。

キュルキュルと車輪の音を鳴らしながら、土の上を進む。押しているマナと共に向かうのは、オシリスレッドの寮だ。

本当ならブルーの喫茶店を手伝わなければいけないのだろうが、車椅子に乗っている俺にそんなことを強要してくる奴は誰もいなかった。よって、俺はブルー生公認で自由に過ごして良しとなったの

である。

そんなわけで、俺は皆が集まっているというレッド寮に向かっているのだ。ちなみに集まっているというのは翔からの情報である。さつきPDAにメールが来たのだ。

舗装されていないため揺れる道を、専用の車輪（オフロード仕様）に付け替えた車椅子で俺たちは行く。

そうして見えてきた木造モルタル二階建て。その階段部分に、何故かみんなが集まっているのが見える。俺はマナに振り向き、そこに指を向ける。マナは頷くと、すぐに階段の下まで車椅子を運んでくれた。

「おーい、なにやってんだそんなところで！」

俺が声をかけると、全員の視線が俺に向く。そして一番手前で階段に座り込んでいた十代が、驚いた顔をして立ち上がった。

「遠也！？ お前、寝てなくていいのかよ！」

「大丈夫大丈夫。鮎川先生に許可はもらってるからさ」

俺が軽く笑いながら言うと、後ろで車椅子を押していたマナが俺の前に顔を出して心配げな表情を見せる。

「でも、無理はしないでね。遠也はすぐに無茶するんだから」

「了解、わかってるって。悪かったよ、ホントに」

その無茶をした結果が今の状態なので、俺はもう謝るしかない。平謝りの俺に、マナは少しだけ笑みを見せて俺の後ろに戻った。

マナとそんなやり取りをしていると、階段の上にいた十代、三沢、カイザー、明日香、吹雪さんの五人が下に降りてくる。

そして俺とマナの前に集まって、じつと車椅子に視線を向けていた。

そうそう日常で見かけないものに乗っていることに、驚いているのかもしれない。とはいえ、自力で歩かせてくれないのだから仕方がない。

ま、実際はそんなに大ごとでもないよ。そう皆に言おうとした時ドドドドと地鳴りのように何か近づいてくる音が耳に届いた。

そちらに目を向けると、そこにはこっちに向かって全力疾走してくる翔の姿が。

必死の形相で走ってきた翔は、土煙を引き連れたまま俺たちの前で立ち止まる。

そしてマナに目を向けると、途端に顔を赤らめて腰砕けのようにその場に崩れ落ちた。

「ああ……何度見ても夢じゃない。本物のブラマジガールが今僕の目の前に……。ああ、制服のコスプレも天使のように可愛い……」

夢見心地で言う翔。

しかし制服がコスプレとか言うな、こら。ある意味その通りではあるが、なんか卑猥に聞こえるだろ、それじゃあ。

そんな態度の翔に、さすがのマナも苦笑を浮かべる。ブラマジガールをアイドルカードと言う男性は多いが、ここまで熱烈なものも珍しいだろうからなあ。

トリップしている翔に少々呆れながら、俺は車椅子の上から地面に座り込んでいる翔に声をかけた。

「で、翔。お前の頼みだけど、OKだってさ」

「え、ホントに!？」

俺がかけた言葉に、一気にテンションを上げて立ち上がる翔。

翔がマナに目を向ければ、笑顔で頷きが返される。それを見て、翔は感動の涙を流していた。



「うわー！ まさかOKももらえるなんて！ 最高だよ、これなら盛り上がることも間違いなしだよ！」

言いつつ翔は、バンザイバンザイと一人で喜びを露わにしている。

そんな実の弟の奇怪な行動に、兄であるカイザーが困惑した表情で俺に寄ってくる。

「遠也。翔の頼みとはいったいなんだ？」

その質問に、周囲の十代たちも俺に注目する。やっぱり皆にも翔の喜び具合は異常に映ったのだろう。

俺はマナと顔を見合わせ、小さく笑う。そして、カイザーの問いに答えた。

「レッド寮のイベントだよ。マナにゲストとして出てくれてさ」

「イベント？ そんなのあったのか？」

レッド寮所属の十代が首を傾げて口にする。

……自分の寮の出し物なんだし、十代も把握してると思った。普段の十代ならこういってお祭り騒ぎは自分から進んで参加しそうな

ものだから、余計に。

よっぽど、大徳寺先生のこと余裕がないんだろう。翔たちが心配して色々企画するわけだ。確かにこれは、一度リフレッシュさせた方がいいかもしれない。

「あるんだってさ。隼人いわくレッド寮の伝統的なイベントで、その名も『コスプレデュエル』だ」

「『コスプレデュエル』？」

「そ。なんでも自分の好きなデュエルモンスターズに扮して、デュエルを楽しむイベントらしい。いくつかの衣装はもう用意してあるって話だ」

「なるほどな。それでマナさんに依頼したというわけか。確かに、本物ともなれば盛り上がるのは間違いない」

三沢が得心がいったとばかりに頷く。それに、俺もまた言葉を返した。

「ま、他の皆はマナが本物のブラマジガールだとは知らないわけだけどな」

その言葉に、この場の全員がうんうんと頷く。みんな、マナがブラマジガールの精霊だと知った時は一様にありえないって否定して

きたからなあ。同様にいくら似ていても精霊という考えには誰も至らない、と考えて頷いているんだろう。

この時点で気が付いていると思うが、セブンスターズに関わる者（鮫島校長、クロノス先生を除く）は、既にマナが精霊であるということを知っている。

というのも、俺がセイヴァー・スター・ドラゴンによって現実世界に戻された時。マナがすぐ横にいて、俺に回復魔法をかけつつ彼らに助けを求めたからだ。

当然実体化しており、その姿はブラック・マジシャン・ガールそのもの。その後すぐに制服姿に衣装替えし、保健室に同行してきたマナだったが、それで誤魔化しきれぬわけもなく。

あそこまで似ていて、かつ不思議な力を俺にかけていた姿を皆は見ているのだ。もはやただの一般人で通じるわけもなかった。

そういうわけで、目を覚ました俺によってマナが何者なのかの説明されたわけだ。最初は精霊という存在に懐疑的だった皆だが、十代と万丈目が精霊は実在すると断言。

更に追い打ちとしてマナがハネクリボーとおジャマ兄弟を魔力で実体化させてみせると、さすがに皆も納得していた。その納得には、多分に驚きが含まれていたの言わずもなである。

そして、マナがブラマジガール本人であると知った皆の中で、翔の行動は早かった。どこに持っていたのかサインペンと色紙を取り

出し、「サインしてください！」と言いだしたのだ。

その順応力に、その場の誰もが思わず言葉を失ったのは当然と言えるだろう。

マナもまた呆けていたが、とりあえずペンを受け取って自分の名前を書いてあげていた。サインなどしたことがないらしく、それはごく普通の楷書体に近い文字だったが、それでも翔にとっては何物にも勝る価値があるようだった。

色紙を抱きしめ、「これうちの家宝にしよう……」と陶然と呟いたぐらいだ。無論、勝手に我が家の家宝にされそうなカイザーの顔は「なん……だと……」を体現していたが。

とまあ、そんなわけで。実はマナについては周知のことなのである。だからこそ、これだけ馴染んでいるわけだ。お見舞いとして来た保健室で、皆もう何度も会ってるからな。

まあ、それはさておき。俺はマナに翔が話を持ってきた時のことを思い出す。

保健室のベッドで上半身を起こしている俺に、翔はこう言ったのだ。「最近、みんな元気がないから学園祭にかこつけて何かやりたいたい」と。

その結果がこのイベントであり、マナの勧誘については俺が本人に聞いておく、としておいた。その時、マナはタイミング悪く保健室を出ていたためだ。

尤も、マナも話を聞いて即賛成だったが。翔の何とも友達思いな

その提案を、マナが断るわけがなかったのだ。

それがつい先日のこと。そして今日、本番を迎えているというわけである。

「ホント、翔も上手いこと考えるよ。本物とは思わなくても、そっくりさんが出てくるだけで盛り上がりも違うだろうしな」

「そうね。それだけ、十代のことの心配なんでしょう」

俺の言葉に明日香が反応を返し、十代と隼人と笑い合う翔に目を向ける。

この学園に入学して、既に十か月ほどになる。その間いろいろなことがあったが、その中で最も変わった……いや、成長したのは、あるいは翔なのかもしれないな。

「いい弟を持ったじゃないか、カイザー」

「……………」

「あれ、照れてるのかい亮？」

「うるさいぞ吹雪」

むすっとした顔のカイザーに、吹雪さんが意地悪く笑って詰め寄

る。

そんな二人の姿に、俺とマナ、明日香と三沢は揃って苦笑を浮かべるのだった。

「……………あ。ところで……………万丈目くんは？」

そんな和やかな空気が広がる中。ふと何事かに気が付いたマナが声を上げる。

そしてその言葉に、俺たちは一様に顔を合わせて首を傾げるのだった。そういえば、万丈目の姿が見えないぞ、と。

いや、俺たちは来たばかりだからいいが、ずっとここにたむろってたお前らが知らないのはどうなんだ。考え込む三沢やカイザーたちの中に突っ込む。

影が薄いわけでもないのに、この扱い。明日香にまで「そういえば、どこにいったのかしら？」なんて言われていると知ったら……………。……………万丈目、強く生きろよ。

と、そんな風に噂をしていたからか。

遠くから大声が近づいてくるのがわかった。それは間違いなく聞き慣れた万丈目のものであり、いったいどこに行っていたのやらと俺たちはその発信源に目を向ける。

「まったく探したぞ、遠也！ 貴様、保健室を抜け出してこんな所にいたのか！」

「あ、遠也さん、マナさん！ おひさし　　って、ええええええッ！？」

万丈目が神経質に尖った表情で言った言葉のあと、かぶせるように俺たちに花咲く笑顔を見せたその子は、その笑顔を一瞬で驚愕のそれに変えると、こちらに向かって駆け出してきた。

その際、前に立っていた万丈目を置き去りに走り出したため、万丈目が「貴様！ 誰がここまで案内してやったと　！」と憤っている。

だが、それよりも俺たちはその子がここにいることに何より驚いていた。

唯一驚いていないのは吹雪さんだけで、揃って固まった俺たちに、「え、誰あの子。知り合い？」と誰ともなしに問いかけている。

驚愕が抜けぬため心の中での返答になるが、吹雪さんの問いに返すならば、知り合いも知り合い。かつては共に授業を受けた仲間であり、一時期とはいえカイザー含めて色々あった関係だ。

だが彼女は本土の方に戻ったはずであり、また来るにしてもここに入学を果たしてからだろう。そう思っていただけに、俺たちはこの突然の再会にフリーズしてしまったのだ。

「遠也さん！？ いったいどうしたの、これ！ 包帯だらけで車椅子なんて聞いてないよ！？」

駆け寄ってきたその子が、あわあわと動揺しながら俺の頭や腕に巻かれた包帯に恐る恐る触れてくる。

心配げにこつちを見るその大きな瞳に、俺はようやく驚愕を抑えてこの事態を飲み込んだ。

俺の怪我を見て自分のことのように慌てている姿に、逆に落ち着かされたとしても言おうか。ともあれ、心配させたままというのは居心地が悪い、とそんな感情の方が先立ったのだ。

というわけで、俺は近距離で見つめてくるその子の頭に手を置いて、軽く撫でる。

わぶ、と言いながらその手を受け入れるそいつを、俺は笑みを添えて迎え入れた。

「久しぶり。元気そうだな、レイ」

「えへへ。うん、遠也さん！ って、それよりこの怪我だよ！ 本当に大丈夫なの！？」

一瞬相好を崩したものの、すぐさま元のテンションに戻ったレイの姿を見て、俺は一層笑みを深める。



そして俺の怪我が既にだいぶ落ち着いていることを知っている面々も、やがて驚愕から抜け出して、懐かしい顔に表情を和らげている。  
った。

だというのに、一人変わらず慌てているレイ。その温度差というかギャップによる奇妙な空間は、置いて行かれた万丈目が「結局誰なんだ、コイツは！」とイライラしながら介入してくるまで続いたのだった。

さて。

まず万丈目と吹雪さんにレイの説明を行ったわけだが、万丈目は「ならレッド寮の場所は知ってたんじゃないか！」と叫んだ。どうも、レイは万丈目に俺のところに来て行ってほしい、と案内を頼んだらしかった。

なんで万丈目？ と思ったが、どうも学園対抗試合をテレビで見ているため、俺と万丈目が知り合いなんだと思ったかららしい。まあ、実際そうだけど。

そして意外に面倒見のいい万丈目は、それを断れずに保健室へ案

内。しかしそこに俺はおらず、ブルーに行くもまた空振り。最後にレッド寮に向かったところで、ああなったようだ。

いきり立つ万丈目に、レイは手を合わせて「ごめんなさい！でも、助かりました！」と謝罪アンド笑顔。万丈目は舌打ちしつつ、しかしそれ以上文句を言うことはなかった。やはり可愛い正義なのか。

対して吹雪さんのほうは、以前にレイが来た経緯を聞いて即座にカイザーのところへ。そして何事か話しかけるが、カイザーの顔がすごく不機嫌そうになっている。さすがは吹雪さん。人をからかうのが大好きな人だ。

そんな中、レイに問答無用で飛びかかった奴が一人。

「レイちゃん！久しぶりー！」

「わっ！ マナさん！？」

笑顔でレイを抱え込むように飛びついたマナは、腕の中にレイを押し込めてご満悦そうである。

レイもレイで初めは驚いたようだが、抱き着いているのがマナだとわかると安心したように力を抜いて、されるがままだった。

そしてそのままガールズトークに移行する二人。当然そこに割り込む度胸はなく、俺は置き去りである。

「でも、驚いたわね。レイちゃんが来てるなんて……」

そんな二人を見つつ、明日香が話しかけてくる。

「まあな。でも、学園祭は一応一般人の往来もOKだし、可能性はあつたんだよな」

「そういえばそうね。ここが孤島で、学園祭といってもあまり外来の人は来ないのが通例だったから、忘れてたわ」

まあ、ちよつと行ってみるか程度の気持ちで来るには辺鄙すぎるしな、ここは。

「でも、メールとかはなかったの？」

「なかった。驚かせるつもりだったんだろ。だとしたら大成功だな」

実際、俺たちはかなり驚いた。尤も、レイも俺の状態に驚いたみたいだから、意図せずトントンになっているけども。

二人でそんな話をしていると、不意に翔たちが準備しているデュエルステージが目に入る。

地面に白線を引いただけの簡素なものだが、デュエルをするには

充分なものだ。隼人が描いていた宣伝&目印用の看板も完成したよ  
うだし、いよいよレッド寮の出し物も始まるわけか。

ブルーの喫茶店とイエローの出店は既に始まっていたが……ここ  
らへんの緩いところは、レッド寮ならではかね。

おっと、それよりも。もうデュエルステージの準備も終わったと  
いうのなら、ゆっくりしているわけにもいかない。いや、俺ではな  
く、マナがね。

「マナ！」

レイと二人でキヤイキヤイ話しているマナを呼びつつ、自分で車  
椅子を動かして近寄っていく。

それに気づいて話をやめた二人の傍に寄り、どうしたの、と少し  
屈んで俺に視線を合わせるマナに告げた。

「コスプレデュエル。もうステージは完成したみたいだし、準備し  
た方がいいんじゃないか？」

「え？ あ、ホントだ。じゃあ、すぐに行ってくる。ごめんねレイ  
ちゃん、また後でね！」

「う、うん」

俺の言葉にデュエルステージに目を向けたマナは、それが既に完成していることに目を剥いてレッド寮の方へと走っていった。

中で十代たちも着替えているはずだし、そっちの別部屋で制服を脱いで元の格好に戻るつもりなんだろう。

その後ろ姿を見送る俺に、レイがどういふことなのかと困惑した目を向けてくる。

俺はレッド寮名物というコスプレデュエルと、それにマナが参加することを伝える。それでレイは納得したようで、うんうんと頷いていた。

そして、そのあとなぜか俺の後ろに回り、何をするのかと思えば車椅子を押すための取っ手を掴んだ。

いったいなんだと後ろを向くと、そこには満面の笑みを見せるレイがいた。

「えへへ、それじゃあ暫くは私が遠也さんのお世話をするね」

俺の世話、といっても車椅子を押すだけだろうに。

そののどこにそれほど喜びを感じられるのかはわからないが、久しぶりに会った妹分のせつかくのご機嫌に水を差すこともない。

そう判断した俺は、小さな笑みとともに「じゃあ頼んだ」とそれに返した。

そしてニコニコとそれに頷いて俺の後ろにいるレイから僅かに視線をずらし、周囲を見る。

さっきまでいた万丈目の姿がどこにもない。気になり、三沢に尋ねてみる。

「万丈目は？」

「ああ、なんでも着替えてくるそうだ」

ということとは、万丈目も参加するのかコスプレデュエル。まあ、もともとお祭り騒ぎはなんだかんだで好きそうな性格してるからな。それもありがたか。

「明日香は？ 参加しないのか？」

「私は……いいわよ。ああいうの、ガラじゃないしね」

そう言う明日香の視線の先には、気が早いのか既にコスプレをして騒いでいるレッド生の姿がある。

確かに、ああやって騒ぐような性格ではないだろうな、明日香は。だがしかし、お祭りの中において常識的な視点は無粋というものだ。

「いいじゃないか。せつかくのお祭りなんだし、何かやってみたらどうだ？ 翔なんかは踊り狂って喜ぶと思うぞ」

「で、でも……」

「何か衣装がないか聞いてみて、気に入ったのがあればやってみたらいいって。マナみたいにデュエルしなくても、気分は味わえるだろうしね」

「……そうね。マナの様子を見がてら、行ってみることにするわ。どうせ、他にすることもないしね」

俺の勧めに、明日香はマナに続いてレッド寮へと向かっていく。もともと、明日香も祭りの空気に当てられていたのかもしれない。普段なら頑として拒んだらうに、こうして妥協したのがその証拠である。

本人的にもそう悪い気はしていないのだろう。心なしか表情も柔らかいものになっていたみたいだし。

「……やれやれ。気づいたら残っているのは、俺たちだけか。遠也、俺もしばらく時間を潰しに行くよ。デュエルが始まるまでには戻ってくる」

「了解。じゃあな、三沢」

ひらひらと手を振りながら去っていく背中を見送り、これでこの

場に残ったのは俺とレイだけか。

コスプレデュエルが始まるまで、看板の開始時間を見るとおよそ30分。みんなの着替えの時間も含めてのことだから、まあそれぐらいはかかるだろう。

俺も他の誰かのところに行って時間を潰してもいいが……。

「レイ」

「なに、遠也さん」

せつかくこんな辺鄙な島にまで来てくれた妹分がいるんだ。時間があるのなら、その子のために使ってやりたい。

というわけで。

「どうか適当に場所借りて、時間つぶすか。積もる話もあるだろうし、デュエルしたっていいしな」

俺がそう提案すると、レイは目を輝かせる。

「いいのー!？」

「当然。俺にだってそれぐらいの甲斐性はあるぞ。あ、でも悪い。」



出店とかは無理。今から行ったんじゃ、デュエルまでに余裕を持って戻ってこれないかもしれないからさ」

「そんなの気にしてないよ。だって、ボクは遠也さんがボクのために時間を使ってくれるだけで、すっごく嬉しいから！」

心の底からそう思っていると一目でわかる、そんな顔。

ここまで好意を真っ直ぐに示されると、俺としてもなんだか照れてしまう。しかしそんな感情を妹分に知られては、兄の面目丸つぶれ。そんなチャチなプライドから、俺はレイから視線を外す。

そして、まったく動揺していない体を装って口を開いた。

「わ、わかったから。そ、それじゃあっちの方にも行くぞ！」

指さした先を示しつつ、自分の頬が熱いことを自覚する。全然動揺を隠せていないのは、もう仕方がないと諦めた。

こう見えて、俺はこういうストレートな言葉に慣れていないのだ。マナとは……もう恋とかそういうの超越したような感じがあがるしなあ。好きなことに変わりはないけど。

そしてレイは、そんな俺に気づいているのか、小さく笑ったのが聞こえた。

「うん！ じゃあ、動かすねー」

言いつつ、レイは車椅子を押す。デュエルステージを囲うように張られたロープ。その外側に敷かれたゴザを指して。そこならレイも座れるし、レッド寮からあまり離れなくても済む。

レイに押され、そこにたどり着いた俺たちは、そこで互いの近況について話し出す。ゴザの上に座ったレイと、車いすに座ったままの俺。視線は少々レイが見上げる形になるものの、それも気にならないのかレイは楽しそうに話す。

時折、立ち上がって俺の手を取ったり、身体を寄せてきたりと甘えてくることはあったが、俺は苦笑してそれを受け入れていた。

そもそも車椅子状態の俺にはされるがままの選択肢しかないわけだが、それでなくともレイのそういうた行為を俺が拒むことはなかっただろう。

なにせ、俺だってレイと会って話せることは嬉しいことなのだから。

だから、俺たちはそんな風にスキンシップを取りながら笑顔で会話を続ける。

周囲の男連中がそんな俺たちをどう見ていたかは……まあ、考えないようにながら。

そして迎えたコスプレデュエルの時間。

既に着替えを終えて外で話したりしている生徒もいたが、そのま  
ま中で過ごして時間になつたら出ていく、という道を選択した生徒  
もいる。ぶつちやけ、俺の仲間たちなわけですが。

そういうわけで、開始時間が近づき、レッド寮の中からぞくぞく  
とキャラクターに扮した知り合いたちが出てくる。

……なぜかレッド寮とは異なる方向から無駄に精巧な造りをした  
《XYZ・ドラゴン・キャノン》を着た万丈目がやってきていたが、  
それはこの際スルーしよう。

というわけで、出てきたのはまず十代。《魔導戦士ブレイカー》  
や《切り込み隊長》などの衣装がごっちゃになったたよくわからん扮  
装だが、まあお祭りだし。そういうノリもなくはないだろう。

そして明日香扮する《ハーピィ・レディ》。これはなかなかにかに工  
口い。普通に胸元から肩にかけて露出してるし。しかも耳が長いと  
いうのがポイント高いぞ、エルフみたいで。実に素晴らしい萌え要

素といえるだろう。

と、そんな邪な心で見ていると、後ろからレイが腕を首に回して俺にもたれかかるとような姿勢を取ってきた。

「どうした、レイ？」

「……なんでもない」

言いつつ、不機嫌そうな様子は隠していない。……ああ、そうかさすがに好意を示した相手が他の女の子に目を向けていればそうもなるか。

何故かマナが相手だと気にならないらしいが、よくわからん。まあ、自意識過剰かもしれないが、そうだとしたら気恥ずかしいが同時に何だか嬉しくもある。

俺はとりあえず体勢の関係上俺の顔の横に来ているレイの頭に手をやり、撫でる。それだけで機嫌は多少上向いたようで、俺はほっと一息ついた。

と、急に「おおおおおーッ！」という大歓声が鼓膜を打つ。それは例外なく男子の声ばかりであったが、何があったのかと気になって十代たちの後に目を向けた。

「ああ、なるほど……」

「うわー、マナさんそっくり!」

そして、瞬時に納得した。

そこには俺にとって非常に見慣れた姿 《ブラック・マジシャン・ガール》の衣装に身を包んだマナが立っていたのだから。

「ね、ね、遠也さん! マナさん、すっごく可愛いよ!」

「ああ、まあなあ。っていうか、あれ衣装じゃないだろ」

「え?」

「いや、なんでもない」

間違いなく自前のはずである。用意されていたものではなく、単に元の格好に戻っただけなのだろう。まあ、そのほうが確かにリアルではある。

俺はそんな内情を知る者特有の生温かい目で。そしてレイは興奮しきりにマナを可愛い可愛いと連呼していると、ふとマナの視線がこちらを向いた。

そして、なんだか眉をきりりと上げて、ズンズンとこちらに歩いてくる。

その途中、何人もの男子生徒がマナに声をかけているが、故意な

のか聞こえていないのか、完全にスルーである。尤も、それを可哀想とは思わない。俺のマナに粉かけようっていうのだから、そんな輩は無視でいいのである。心狭いとか言うな。

そんなことを思っていると、男子生徒の肉の壁を一直線に突破したマナが、俺の前に立つ。そして、レイと俺を見比べて、うー、と唸り始めた。

「……ずるい。ずるいよ、レイちゃん！ 私がいない間に仲良くするのはいいけど、抱き着くのはさすがにダメでしょ！」

なんだかよくわからない理論を振りかざして抗議するマナ。それに、レイはきょとんとするものの、すぐににやりとした笑みを浮かべた。

「でも、遠也さんも許してくれたもん。ねー？」

「うん、まあな」

「遠也ー！」

レイの言葉に肯定を返せば、今度はマナの矛先が俺に向いた。

「なぜ俺。いいじゃん、レイに会うのだって久しぶりなんだし、甘えさせても」

「う……それは……」

俺の言葉に、口をとがらせてマナは俯く。それを苦笑しながら見つつ、俺は更に言葉が続けた。

「とはいえ、せつかくのお祭りにマナの機嫌を悪くする理由もない。レイ、悪いけど……」

「はい」

俺が何か言う前に、レイは俺の首に腕を回し、もたれかかった身体を起こすと、普通に俺の後ろに立った。

それを見て、マナは顔を上げた。

「えへへ。私はマナさんだって大好きなんだからね。そんな顔をしてほしいわけじゃないんだ。ごめんね、マナさん」

「レイちゃん……！ 私こそ、ごめんね！ あとでいっぱいお話しようね！」

「うん！」

そう言って、今度は笑い合う二人。勢い余ってマナは間に俺がい

るにもかかわらずレイを抱きしめる始末。仕方なく、俺は上体を僅かに下に潜らせてマナの体当たりを避けた。

しかし、そのために少々困った事態に。というのも、位置関係上マナの胸が俺の顔の前に来ていて非常に眼福なのである。さすがにこの場でどうこうするつもりはないが、これは生殺しに近いぞ。わざとか？ わざとなのか？

そして、そんな俺の気持ちも知らず、俺の頭上で抱き合い、楽しそうにしている女子二人。その笑い声を聞き、俺は溜め息をついた。まあ、本人たちが楽しいならそれでいいけどさ。俺は俺でガン見するだけだし。

と、そんなことをしていると。俺たち（というか俺だけ）に射殺さんばかりの視線を飛ばす男子生徒諸君。そこに、レッドもイエローもブルーも関係ない。完全なる協調がそこにはあった。

十代、隼人など俺の友人たちを除く全員の視線が集中しているため、さすがに俺も冷や汗が出てくる。翔が「ゲストが出るよー」と宣伝して回ったためか、意外と人がいるのである。

その中でこの視線は、なかなかキツイ。逆に女子は女子でキヤーキヤー言いながらこっち見てるし……。なんだこの空間は。

今現在の俺を取り巻く状況に慣れていないと、不意にマイクを通じた機械音声周囲に響いてきた。

『あー、あー、テストス。こんにちは、僕は丸藤翔です。今日はレツド寮主催、コスプレデュエルに来てくださって、誠にありがとう



「ごぞいます」

声の方を見れば、そこにはレッドの制服の上に、大きな蝶ネクタイをつけた翔が、マイクをもって話していた。あいつ、上がり症なんじゃなかったっけ？

「間もなく、コスプレデュエルを始めます。なので、その爆発した方がいいリア充が気に入らない気持ちにはよくわかりますが、まずは皆さん落ち着いて座席のほうへどうぞ」

「おい」

翔のあんまりな言い方に思わず声を上げるが、奴は完全にスルーした。

「それでは、ただいまを持ちまして、レッド寮主催コスプレデュエルを開催いたします！ 進行は司会の僕、丸藤翔と、解説の万丈目」

「フン、俺はXYZ・ドラゴン・キャノンだ」

「と言っている万丈目準くんでお送りします」

「おい、貴様！ 俺の言葉を無視するな！」

翔……あいつ、なんか凶太くなってきたな。これは成長とみていいんだろつか？

俺が内心でそんなことを思っていると、時間を潰してくると言っていた三沢が会場に戻ってきたのが見えた。その後ろにはカイザーと吹雪さんもいる。三人とも、何とか間に合ったみたいだな。

『それでは、まずは前哨戦。皆さんにコスプレデュエルを楽しんでもらう前に、こちらで用意したプレデュエルを行います！ ぜひ楽しんでいってください！』

なるほど、マナがゲスト扱いというのはこういうことか。コスプレデュエル大会は、当然希望者に体験してもらうイベントだ。ゆえに、そこにゲストとして置かれるなら、不特定多数と多くのデュエルをすることになる。

さすがにずっとそれでは疲れるし、大変だ。それでも付き合わせるといふのなら、折を見て抜け出そうと思っていたが、そうする必要はなさそうだ。

翔も、そこまで拘束するつもりは最初からなかったってことだろう。

『それでは、選手紹介です！ まずはレッド寮代表、遊城十代いー』

よくわからん格好の十代が、やる気に満ちた表情でデュエルステージに現れる。

それなりに気合の入った表情なのだが、いかんせん服装があまりにも意味不明すぎて、まったく凛々しさが感じられなかった。

「ねえ、遠也さん。十代さんのあれは、何の格好？」

「さあな。十代オリジナルのモンスターなんだろ」

とはいえ、さすがに両腕の籠手はやりすぎだろ。それじゃあデュエルディスクの装着もできないじゃないか。

しかし、十代はそれに気づいていないのか 観客に手を振ったりなんてしている。

はあ、仕方ない。

「十代！」

「お、遠也か。レイも、久しぶりだな！」

朗らかに言う十代に、レイも小さく笑って会釈を返す。それを見ながら、俺は再び声をかけた。

「それより十代。お前、それじゃあデュエルディスクも着けられないだろ！　せめて籠手は外しておけ！」

「ん……？　げっ、ホントだ。サンキュー、遠也！」

俺の助言を受けて、十代は装備していた籠手を外していく。そして、実は邪魔に思っていたのかマントなどの必要ないパーツまで外し始めてしまった。

これでは、本当に何のモンスターなのかさっぱりわからない。あいつ、これがコスプレデュエルだってこと忘れてるんじゃないだろうな。

「ねえ、遠也さん」

「言いたいことは分かるが、気にするな。ああいう自由なところが、十代のいいところだからな」

「……そういう問題？」

俺の友に対する認識に疑問符を浮かべるレイだが、それを置き去りに状況はさらに進んでいく。

十代の紹介を終えた翔が、大きく息を吸い込んでマイクに向かってそれを吐き出した。

『そしてえ！ 対するはこの日のために参加をお願いした特別ゲストオッ！ ブラック・マジシャン・ガールの登場だあああッ！』

「いってくるね、遠也」

「おー」

呼ばれたマナが、軽い足取りでデュエルステージに入っていく、十代と相對する形でその場に立つ。

ニツコリ笑顔で手を振れば、それだけで湧き上がる感動の声（男子のみ）。そして始まる「あの手は俺に振ったんだ！」「いや、俺だ！」「違う、僕だ！」「いや、自分だ！」という醜い争い。

そこに、レッドもイエローもブルーも関係ない。完全なる協調が、以下略。

それに対して、女子の反応はというと。「あの子そっくり」「すごいよねー」「可愛いー」というごく一般的な反応でした。男子との温度差が凄い。

そしてその原因にして中心であるマナはというと、ボルテージの上がる男子勢に苦笑しつつ、更に笑みを深めて手を振った。

「みんな、今日は来てくれてありがとう！」

翔主催、コスプレデュエル。別名、最近元気がない兄貴たちを励

まそのの会。それが成功するためには、観客が来てくれなければ意味がない。

だからこそ、マナはこうしてこの場に来てくれたことに感謝するのだ。翔の実に気持ちいいその企みが、成功に近づいているのは彼らのおかげでもあるのだから。

だが、そんなことは何も知らない彼らは、ただブラック・マジシャン・ガールそのものにはしか見えない女の子に、笑顔で声をかけてもらえたというその一点で大歓喜なのであった。

「うおおー！ あんな可愛い子に笑顔で手を振ってもらえるなんてー！」

「可愛いだけじゃなくて、いい子だとお！」

「あんな子、ブルーにいたか！？」

「俺は知らないぞ！ もし知ってたら、速攻コクってるのに！」

「俺もだ！」

「俺も俺も！」

その連鎖反応的な男連中の言葉に、思わず片眉が上がる俺。心が狭いと言っなかれ。男なんて、大抵の場合は独占欲が強いものなのである。

「あはは、遠也さん落ち着いて」

そんな俺の気配を察してか、後ろから俺の肩をポンポンと叩く。  
イ。

その妹分の気遣いに、俺も大人げなかったかと思ひ直して気持ちを落ち着かせる。

ふう、やれやれ。ここはひとつ男としての格を見せつけるためにも、どっしりと構えているべきだったか。そう考えを改めて姿勢を正したところで。

「みんな、ありがとう！ でもごめんなさい！ 私はもう遠也のものだから、告白されても付き合えないのー！」

と、はつきり宣言する声が聞こえてきた。

……おい、待て。俺も確かにマナのことを誰かに渡す気なんてものはさらさらないわけだが、そういうことは密かに囁く類のものであって、こつもあからさまに主張するようなものでもないだろう。

俺が一瞬でそう思考すると同時に、周囲の男から突き刺さる視線、視線。それは最早睨みつけるとか、そんなレベルではない。むしろ睨み抉るとでも表現した方が確なほどに、物理的な威力を持った

視線だった。

もちろん比喻表現であるが、それほどまでに視線が強い。そんな中ふと、紙に何かを書いている一人の男子生徒が目に入った。いったい何をしているのか。思わず目を向けると、書き終わったのかその紙を俺に向けてソイツは広げた。

『呪ってやる』

……なんとも感情が籠った、入魂の一筆であった。

思わず汗が一筋頬を流れ、後ろのレイがごく自然にハンカチでそれを拭う。その瞬間、更に重圧を増した周囲からの目力に、一層汗が噴き出した。

それに対してはさすがの俺も、ただ身を固くして極力意識の外にそれらを放り投げることしか、出来なかった。

『……えー遠也くん爆発しろ。それでは、早速デュエルの方に移りたいと思います！』

「お前、さらっと最初に何言った!？」

しかし、翔はこれまた完璧にスルー。おのれ、あんちくしょう…

…!



歯ざしりする俺だが、それに構わず、デュエルステージでは着々とデュエルに臨む姿勢が出来上がっているようだった。

「ようやくデュエルか。そういえば、マナとデュエルするのは初めてだな！」

「あはは、まあそれはそうかも。私は遠也と十代くんがデュエルしているのをいつも遠也の後ろで見ているだけだったし」

……おい、男連中。言葉の端々に反応していちいち俺を見るんじゃない。

「へへ、いったいどんなデュエルになるのか、今から楽しみだぜ！」

「私もだよ。このデッキを遠也から託されたからには、情けないところは見せられないしね！」

二人はデュエルディスクを構えて、向かい合う。

そして、マナが言ったようにあのデッキは俺の魔法使い族デッキである。尤も、マナが使いやすいように調整してくれていいと言っているから、俺のものとは多少異なっているだろうが……。

それでも、基本は俺のデッキ。何度かそれと対戦している十代が、どう対応してくるかが鍵だな。

「よし、いくぜマナ！ やるからには俺が勝つぜ！」

「私だって！ 勝って遠也に何かご褒美を要求するんだから！」

「なにい！？ おい、マナ！ それ初耳だぞ！？」

聞き捨てならない台詞を吐いたマナに、俺は思わず声を上げて突っ込む。

すると、マナはこちらにくるつと振り返り、「てへっ」と可愛く笑って誤魔化そうとした。

おい、こら。俺がそんなことで誤魔化されると思ってるのか！

『ブラマジガール可愛いっす……。遠也くん！ ここで女の子のお願いを断るなんて、男のすることじゃないっすよ！』

「そっだそっだ！」

「断れるやつは男じゃない！」

「まったく、男の風上にも置けん！」

「鬼！ 悪魔！」

「なんでそこまで言われなといけないんだああああ！」

俺はあっさりマナの味方となって理不尽なことを言いまくる連中に異を唱えるが、結託した男どもにそんな正論が通じるはずもなく、むしろ一層ぶーぶー言い続けてくるので、俺はもうやけになって叫んだ。

「わかった、わかったよ！ マナ！ お前が勝ったら、なんでも言うことを聞いてやる！」

「ホント!?!」

「ただし、俺が出来る範囲のことだぞ！ そうじゃなかったら聞かないからな！」

「うん、全然それでいいよ！ ありがとう、遠也！」

笑顔で頷いたマナは、よし！ と気合の乗った声と共に再び十代に向かい合った。

「いくよ！ 勝たせてもらうからね、十代くん！」

「させるかよ！ 勝つのは俺だぜ！」

互いに不敵に笑い合う姿を視界に収めつつ、俺は車椅子の背もたれに体重を預ける。

なんかもう、どっと疲れた……。

「た、大変だったね、遠也さん」

「まっただ。……まあ、だからって嫌なわけじゃないんだけどな」

レイの言葉に苦笑し、俺は周りを見る。俺をあれだけ責め立てた連中も、今ではデュエルステージに目を向けて、声を上げ、手を振り、応援に余念がない。

そしてその表情に悪意はなく、ただ純粹にこの時間を楽しもうという気持ちだけが溢れていた。

今の俺に対するあれこれも、このお祭り騒ぎ特有の空気に当てられた小さなイベントみたいなものだったのだ。彼らにとっても、俺にとっても。

だから、俺はそんなに気にしていないし、彼らも後に残さない。ま、こういうその場のノリっていうのも学園祭の醍醐味ってことだな。

「デュエル！」

十代とマナの掛け声が重なる。

背もたれに預けていた身体を僅かに戻し、俺も二人の戦いを観戦する態勢をとった。

デュエルが始まり、一層盛り上がる周囲の声を耳にしながら、俺はとりあえず心の中でマナに向けて声援を送る。

せっかくなんだし、楽しんでデュエルしてくれよ、と。

しかし、それは相手が十代だという時点で、いらぬ心配なのかもしれない。あの誰よりもデュエルを楽しんでいる十代が相手なら、誰だって楽しくなるに違いないんだから。

そう考えると、この場は本当に凄い空間だ。デュエルをする二人が楽しみ、それを見る皆が楽しみ……この場にいる誰もが他人なのに、ただ楽しさだけは同じく共有している。

これも、学園祭ってやつの魔力だろうか。そんなことを考えながら、俺はこの心地よい空気に身を任せ、始まった二人のデュエルに意識を傾けていくのだった。



## 第27話 学祭（後書き）

おかしいな。

学園祭の話なんて、一話分にまとまるぜ！　なんて息巻いて書いた  
ら、全然収まらなかった。

な、何を言ってる（ry

そんなわけで、このお話は次回に続きます。

まさかここまでで18000文字を超えてしまつとは……。さすが  
にこれ以上詰め込むわけにはいきませんでした。

次回、十代VSマナ。

遠也VSマナもやりたかったです、遠也くんはドクターストップ  
のため出場断念です。

というわけで、また次話にてお会いしましょう。  
それでは。

## 第28話 特別（前書き）

今回は前回に続き学園祭！

そして十代VSマナのデュエルとなっております。

どうぞ、最後までお付き合いください^^



## 第28話 特別

遊城十代 LP：4000

マナ LP：4000

「先攻は俺だけ、ドロロー！」

十代がカードを引き、手札に加える。

それをニコニコと見ているマナと、負ける負けると念を送っている男子ども。ホント、学園祭を心の底から楽しんでいる連中である。

「俺は《E・HERO エアーマン》を召喚するぜ！ そしてその第2の効果発動！ デッキから《E・HERO バーストレディ》を加え、手札の《E・HERO フェザーマン》と融合！ 来い、《E・HERO フレイム・ウィングマン》！」

《E・HERO エアーマン》 ATK/1800 DEF/300

《E・HERO フレイム・ウィングマン》 ATK/2100

2体のHERO……それぞれ攻撃力がそれなりに高いうえ、1体は戦闘破壊した相手モンスターとの攻撃力と同等のダメージを相手に与えるという強力な効果を持つ。

特にフレイム・ウイングマンは十代がフェイバリットと呼ぶモンスター。初手融合はもう十八番と言ってもいいが、その中でも今日の十代は調子がよさそうだ。

十代自身、満足げな顔で自分のフィールドを見ている。実況たる翔と万丈目も今のプレイにそれぞれコメントを寄せている。

まあ、デュエルに集中するためにそっちはあまり気にしないことにしよう。

だが、十代。いきなりのガチ攻勢はちょっとまずいぞ……。なぜなら、この場にはブラマジガールに現を抜かす男子生徒が多数いるんだからな。

「こら、遊城ー！」

「女の子相手に何本気出してんだー！」

「男らしくないぞー！」

案の定、そんな十代の全力姿勢は周囲の男子から非難轟々であっ

た。

なにせ、十代が調子がいいほどマナの負ける確率は高くなり、そのぶんマナを見ていられる時間も減る。そう考える彼らにとって、十代の好調は歓迎されるものではないのだ。

というか、男と可愛い女の子なら、可愛い女の子を応援したいのが男の性である。誰だってそうする、俺だってそうする。

そして、こつも露骨に責められれば十代も自分がアウエイであることを悟る。心なしか、その表情は困惑気であった。

「な、なんか調子狂うなあ。俺はこれでターンエンドだ！」

男子の睨みに引き気味ながらエンド宣言をする十代。

それにより、ターンはマナへと移った。

「さすが、十代くん！ 私も負けてられない……私のターン、ドロ  
ー！」

そしてマナがカードを引いた瞬間に上がる歓声。そこに翔の声も交じているのはお約束だが……しかし、単にカード引いただけだろつに。

周囲の熱狂ぶりにさすがに呆れつつ、マナを見る。

今回俺はマナにデッキ……正確には俺の持つカードを貸したが、それらでどんなデッキを組んだのか俺は知らない。

マナいわく、当日のお楽しみだそうだ。俺が持つ5D's以降に販売された魔法使い族のカードを中心に見ていたようだが……いったいどんなデッキに仕上げていることやら。

どんな展開になるのかわからない期待感を抱きつつ、俺はマナのプレイングに注目した。

「うーん……私はモンスターをセット。そしてフィールド魔法《魔法都市エンディミオン》を発動し、更に魔法カード《魔力掌握》を発動。その効果により魔力カウンターを置くことが出来るカード……魔法都市エンディミオンに魔力カウンターを1つ置く。そしてデッキから《魔力掌握》を手札に加えます」

《魔法都市エンディミオン》 counter / 0 1

ほう……エンディミオンか。ということは、マナが今回組んだデッキは魔力カウンター軸か？

「魔法都市エンディミオン？ 初めて聞くカードだ」

「そうかもねー。これは遠也のカードだけど、遠也はあんまり使わないし」

だから男連中。マナの口から俺の名前が出るたびに舌打ちするのをやめろ。

「それでエンディミオンの効果だけど……相当長いけど、聞く？」

確かに、エンディミオンの効果は長い。

具体的には、「自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを1つ置く。魔力カウンターが乗っているカードが破壊された場合、破壊されたカードに乗っていた魔力カウンターと同じ数の魔力カウンターをこのカードに置く。1ターンに1度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを取り除いて自分のカードの効果を発動する場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを取り除く事ができる。このカードが破壊される場合、代わりにこのカードに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事ができる」である。

ちなみに俺もソラで言えるほど覚えてはいない。ただ重要なおこるは覚えているし、いきなり渡されて使うこともできる。

なんといつても、効果が長すぎるのである。

そして、勉強苦手な十代がそんな説明を悠長に聞くはずもなく、予想通り、

「んー、まあいいや。とりあえず魔力カウンターのカードなんだから、それよりもデュエルの続きをやるっぜ！」

「っつである。」

まあ、最悪デュエルディスクの機能で確かめられなくもないけどさ。けど、たぶんそうはしないんだろっなあ。

マナも同じことを思ったのだろう、苦笑しつつ説明は避けるようだった。

「じゃあ、続きからね。私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「よっしゃ！俺のターン、ドロー！」

カードを引いた十代は、そのまま手札に加えてメインフェイズを素通りした。

「バトルだ！ フレイム・ウィングマンでセットモンスターに攻撃！ 《フレイム・シュート》！」

フレイム・ウィングマンが右腕の竜の喙から炎を吐き、マナの場の裏側守備表示のカードに襲い掛かる。

そしてその瞬間、カードが翻って金髪の男性魔術師が飛び出した。

「セットしていたのは《見習い魔術師》！そしてその効果が発動！デッキからレベル2以下の魔法使い族をセットできる！私は《水晶の占い師》を選択するよ！」

そして戦闘によって破壊された見習い魔術師は墓地に送られた。

「まだまだ！ フレイム・ウィングマンには戦闘で破壊したモンスターズの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える効果がある！ いけ、フレイム・ウィングマン！」

見習い魔術師を葬ったフレイム・ウィングマンは、再び右腕を構えてマナに直接焔を浴びせる。

「きゃあっ！」

マナ LP：4000 3600

それにより、マナのライフが400ポイントダウン。それを見て、後ろのレイが「うーん、十代さんの先制かぁ」と呟いていた。

「更にエアーマンで攻撃！ 《エア・スラッシュ》！」

エアーマンが風の刃を放ち、セットされていた水晶の占い師が破壊される。

「あたた。けど、水晶の占い師のリバース効果が発動だよ。デッキの上から2枚をめくり、その中の1枚を手札に加える。 やった！ 私は《マジカル・コンダクター》を手札に加え、《一族の結束》をデッキの一番下に戻すよ！」

喜びの声を上げるマナ。そしてその原因はマジカル・コンダクターか。これは、結構いい感じに回ってきたんじゃないか？

「俺は、カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！」

カードを手札に加え、その中の一枚を手にとった。

「私は《魔力掌握》を発動！ エンディミオンに魔力カウンターを乗せて、デッキから魔力掌握を手札に加える。更に《マジカル・コンダクター》を召喚！ 召喚に成功したことで、このカードに魔力カウンターを2つ置くよ」



《魔法都市エンディミオン》 counter / 1 2

《マジカル・コンダクター》 ATK / 1700 DEF / 1000  
0 counter / 0 2

「更に伏せカード<sup>リバース</sup>オープン！ 罨カード《漆黒のパワーストーン》  
！ これによりこのカードに魔力カウンターを3つ置き、更に1ター  
ーンに1度、魔力カウンターを1つ他のカードに移し替える。私は  
マジカル・コンダクターを選択！」

《マジカル・コンダクター》 counter / 2 3

徐々に溜まっていく魔力カウンター。そして3つ目のカウンター  
がマジカル・コンダクターに乗った瞬間、マナが再び口を開いた。

「マジカル・コンダクターの効果発動！ 自身に乗っている魔力カ  
ウンターを任意の個数取り除き、同じ数値のレベルを持つモンスター  
を手札から特殊召喚できる！ 私は3つ全て取り除き、レベル3  
のチューナー《氷結界の風水師》を特殊召喚！」

《マジカル・コンダクター》 counter / 3 0

《氷結界の風水師》 ATK / 800 DEF / 1200

現れるのは、陰陽師を連想させる和装に、顔を隠すほどの大きさを  
持つ鏡をお面のようにつけたツインテールの少女。

ソリッドビジョンでは初めて見るが、その鏡の隙間から見える顔  
は可愛らしいものだった。カードにも顔が描かれていれば、それだ  
けで高値カードの仲間入りだったに違いない。

と、そんなズレた感想を抱く俺とは裏腹に。戦っている十代は、  
マナが口にしたモンスターの区分にぎよつとした顔を見せた。

「チューナー!? ってことは、マナも遠也みたいに!？」

「えへへ、実は私もやってみたかったんだよね。じゃあ、いくよ!  
レベル4マジカル・コンダクターに、レベル3氷結界の風水師を  
チューニング!」

飛び立つ2体。風水師の身体が薄くなっていき3つの輪を形作る  
と、その中を4つの星と化したマジカル・コンダクターが潜り抜け  
ていく。

「集いし神秘が、今新たな魔導の力となる。光差す道となれ!  
シンクロ召喚! 輝いて、《アーカナイト・マジシャン》!」

強い光が一瞬で場を満たす。

そしてその中から現れるのは、白い布地に青いデザインが施され

たローブを纏う一人の魔術師。ゆったりとしたローブから覗く手にはぼんやりと光る宝玉を乗せた杖を握っている。

《アーカナイト・マジシャン》 ATK/400 DEF/1800

レベル7シンクロモンスター、アーカナイト・マジシャン。シンクロ召喚に場が盛り上がるが、そのステータスには誰もが驚いていた。

「攻撃力400!? レベル7にしては低すぎじゃないか？」

十代もまた素直に突っ込みを入れてくる。

しかし、それに対してマナは笑みを崩さない。当然だ、アーカナイト・マジシャンの真骨頂はそこではないのだから。

「大丈夫だよ、十代くん。アーカナイト・マジシャンの効果、シンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを2つ置く。そしてそのカウンターの数×1000ポイントこのカードの攻撃力はアップする！」

アーカナイト・マジシャンの周囲に漂っていた光の残滓が、やがて杖先の宝玉へと集まる。それは身体全体を覆う光となってアーカナイト・マジシャンの魔力を強化していった。

《アーカナイト・マジシャン》      ATK / 400      2400      CO  
U n t e r / 2

「げ、一気に2400!？」

2000ポイントもの攻撃力上昇。更に、マナは言葉を続ける。

「まだまだよ、アーカナイト・マジシャンの効果発動！ 自身の魔力カウンター1つにつき1枚、相手の場のカードを破壊できる！ けど、私はアーカナイト・マジシャンのカウンターじゃなくてエンディミオンのカウンターを使う！」

「どっついうことだ？」

「魔法都市エンディミオンには、魔力カウンターを取り除いて発動する効果を使用するとき、肩代わりする効果があるんだよ。つまり、アーカナイト・マジシャンの攻撃力を下げずに効果を使えるってこと」

「ま、マジかよ!？」

マジである。魔力カウンターの補助カードとして、エンディミオンはとても優れたカードなのだ。

「私はエンディミオンの魔力カウンターを1つ消費し、十代くんの伏せカードを破壊する！」

《魔法都市エンディミオン》 counter / 2 1

「うわっ！」

エンディミオンから魔力供給を受けたアーカナイト・マジシャンが、杖から一筋の光を紡いで伏せカードを破壊する。

破壊されたのは、《ヒーローシグナル》か。

「じゃあ、いくよ！ アーカナイト・マジシャンでフレイム・ウィングマンに攻撃！」

その宣言と同時に、マナはの場の伏せカードが起き上がる。

「この瞬間に畏発動！ 《マジシャンズ・サークル》！ デッキから攻撃力2000以下の魔法使い族をお互いに特殊召喚！ 私はもちろん、私自身 《ブラック・マジシャン・ガール》を特殊召喚するよ！」

ポン、と音を立てて飛び出すマナとური二つの姿をした少女。

当然と言えば当然だが、寸分違わぬ人物が並んで立っているのは、なんだかひどく違和感のある図でもあった。

《ブラック・マジシャン・ガール》     ATK / 2000     DEF /  
1700

だが、そう思ったのは俺だけだったようである。

「う、うおお     ツ！     ブラマジガールだあ！」

「皆本の気が向いたときじゃないと見れなかった幻のカード……！」

「それだけでも珍しいのに、ブラマジガール自身がブラマジガールを召喚……！」

「イイ！     すっごくイイ！」

「ブラマジガール最高おおおー！」

そんな男子勢の叫びに、マナは機嫌よく手を振って応える。それによって、更にボルテージの上がる男ども。

そしてそんな男子を冷めた目で見ている女子たち。

……早くその視線に気づけ、お前ら。今後の学校生活に支障をきたすことになるぞ、恋愛的な意味で。

そんな周囲のあれこれがありつつ、しかし意に介しないままデュエルを続行していくマナと十代の二人であった。

「ちえ……俺のデッキに魔法使い族はいないんだよなあ」

「なら、バトルフェイズを巻き戻して攻撃続行！  
アーカナイト・マジシャンでフレイム・ウィングマンを攻撃！  
《秘奥魔導波》！」  
アーカナイト・マジック

アーカナイト・マジシャンの杖からひととき強い輝きが閃光のように鋭く飛び出して、フレイム・ウィングマンを貫いた。

「くっ……フレイム・ウィングマン！」

十代    LP：4000    3700

破壊され、ダメージを受ける十代。だが、攻撃はそれだけでは終わらなかった。

「更にブラック・マジシャン・ガールでエアーマンに攻撃！  
《黒<sup>ブ</sup>ラック・バーニング  
魔導爆裂波》！」

エアーマンもまた破壊され、これにより十代のライフはさらに削られる。

十代 LP：3700 3500

「私はこれでターンエンド！」

「俺のターン、ドロー！」

カードを引いた十代は、「おっ」と声を出した後に笑みを見せた。

「俺は《ハネクリボー》を守備表示で召喚！ ターンエンドだ！」

『クリクリー！』

俺や万丈目、十代のように精霊を見ることが出来る人間にしかわからないだろうが、ハネクリボーが力強い鳴き声と共にフィールドに召喚される。

《ハネクリボー》 ATK/200 DEF/300

マナもまた、旧知の間柄のモンスターの登場に頬を僅かに緩ませる。しかし、すぐに引き締めて自身のターンへと移っていった。



「私のターン、ドロー！ 漆黒のパワーストーンの効果、魔力カウンターを1つ魔法都市エンディミオンに乗せる」

《魔法都市エンディミオン》 counter / 1 2

これで漆黒のパワーストーンに残った魔力カウンターはあと1つである。

続いて、マナはバトルフェイズへとフェイズを進行させる。

「バトル！ アーカナイト・マジシャンでハネクリボーに攻撃！  
アーカナイト・マジック  
《秘奥魔導波》！」

「くっ……」

先程と同じ閃光がハネクリボーを貫き、破壊する。

これで十代の場はがら空きとなった。だが……。

「ハネクリボーが墓地に送られたターン、俺に対する戦闘ダメージは全て0になるぜ！」

これこそ、ハネクリボーの本領である。これにより、例えまだ攻

撃可能なモンスターがいたとしても、このターンで十代にダメージを負わせることは出来なくなったのである。

「うーん……さすがハネクリちゃんは強いなあ。私はこれでターンエンド」

「相棒が繋いでくれたこのターン、無駄にはしないぜ。ドロー！」

手札に引いたカードを見て、すぐさま十代はそのカードを公開した。

「よっしゃあ！ 俺は《融合》を発動し、手札の《E・HEROクレイマン》と《E・HERO スパークマン》を融合！ 現れる、《E・HERO サンダー・ジャイアント》！」

《E・HERO サンダー・ジャイアント》    ATK/2400  
DEF/1500

現れたのはでかい図体を持つ雷のHEROである。ごつい体を揺らしながら登場し、その手に雷を発生させて集束させていく。

「サンダー・ジャイアントの効果発動！ 手札1枚を墓地に送り、相手の場に存在する元々の攻撃力がこのカードよりも低いモンスター1体を破壊する！ 俺が選ぶのは、アーカナイト・マジシャンだ

！ 《ヴェイパー・スパーク》！」

「……魔法都市エンディミオンの効果により、魔力カウンターが乗っているカードが破壊された場合、それと同じ数のカウンターをこのカードに乗せる。アーカナイト・マジシャンの2つのカウンターが乗るよ」

《魔法都市エンディミオン》 counter / 2 4

「更にサンダー・ジャイアントでブラック・マジシャン・ガールに攻撃！ 《ボルティック・サンダー》！」

そして今度はさっきよりも大きな雷をその手に作り出し、サンダー・ジャイアントはおもむろに振りかぶるとそれをブラック・マジシャン・ガールに向けて投擲した。

雷は過たずブラマジガールに直撃し、破壊する。そしてその超過ダメージがmanaのライフから引かれることとなった。

「きゃあっ！」「3・1

mana LP : 3600 3200

そしてmanaの場のブラック・マジシャン・ガールが破壊された瞬

間、周囲からこぼれる絶望の声。

それはそのまま怨嗟の声となって十代に向けられた。

「遊城い！ なにやってんだ、おまえええええ！」

「ブラマジガールをどうして倒した！」

「むしろなんで攻撃した！」

「っていうか、負ける！」

「無茶言つなよ、お前ら！」

さすがの十代も思わず言い返してしまうほどに、なんとも理不尽な周囲の声であった。いくらなんでも、負けるは直接的過ぎるだろ。

そしてそんな彼らの応援の対象であるマナはというと、苦笑いと共にそれを見ていた。

「まったく、俺はこれでターンエンドだ！」

仏頂面の十代がエンド宣言をする。

「なんかごめんね、十代くん。私のターン、ドロー！」

さて、十代の攻撃によってマナの場合は空っぽである。ここからどうするの……。

既にあのデッキは俺の知らないデッキとなっているだけに、俺は楽しみを込めてそのプレイングに注目していった。

「私は漆黒のパーストーンに乗っている最後の魔力カウンターをエンディミオンに乗せるよ。更に《王立魔法図書館》を守備表示で召喚！」

《魔法都市エンディミオン》    c o u n t e r / 4    5

《王立魔法図書館》    A T K / 0    D E F / 2 0 0 0

「王立魔法図書館の効果発動！ このカードに乗っている魔力カウンター3つを取り除き、デッキから1枚ドロウできる。私はエンディミオンの効果で使用するカウンターをエンディミオンから取り除いて、1枚ドロウ！」

《魔法都市エンディミオン》    c o u n t e r / 5    2

マナがデッキからカードを引く。

そして、その表情を一気に明るなものへと変化させた。

「きたっ！ 十代くん、このデッキの切り札を見せてあげるよ！」

意気込んで言うマナ。それに、十代はにかつと笑って応えた。

「おもしれえ！ 見せてくれよ、マナ！」

マナはそれに頷き、たった今ドロしたカードをそのままディスプレイにセットした。

「いくよ！ 私は手札から《ミラクルシンクロフュージョン》を發動！」

「ミラクルシンクロフュージョン？ 《ミラクル・フュージョン》とは違うのか？」

十代が己の持つカードと似た名前のカードに、疑問符を浮かべる。

十代の言う《ミラクル・フュージョン》は墓地の「E・HERO」を除外し、それを融合素材とする融合モンスターを特殊召喚するカードだ。

ミラクルシンクロフュージョンも、似たようなカードだ。ただ、

シンクロとつくだけあって明確な違いもある。マナは疑問顔の十代に対して口を開いた。

「ちょっと違うかな。《ミラクルシンクロフュージョン》の効果、自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する！」

そう、ミラクル・フュージョンとほぼ同じ。ただ、「シンクロモンスターを融合素材とする」という部分が明確に異なっているのだ。

そしてその文言に、十代が驚きを露わにする。

「シンクロモンスターを融合素材にした融合モンスター！？ そんなのいるのかよ!?!」

十代の言葉は尤もだ。なにせ、シンクロモンスター自体特殊な融合モンスターと言えなくもない存在なのだから。

だが、シンクロモンスターを融合素材とする融合モンスターは存在する。とはいえ、OCGでさえその数は少ないのだが。

そのうえ、アーカナイト・マジシャンとくれば出すモンスターなど分かり切っている。

「私は墓地の《アーカナイト・マジシャン》と魔法使い族の《水晶の占い師》をゲームから除外して融合！ 魔導を極めたその叡智をここに示せ！ 《覇魔導士アーカナイト・マジシャン》！」

墓地からアーカナイト・マジシャンの姿が場に現れ、その身が莫大な魔力に包まれていく。

それにより、徐々に白かったローブが深い青に染まっていき、そのデザインもローブよりも鎧のような重厚感が見て取れる作りへと変化していく。

そして杖先の宝玉から放たれる緑色の光は、塵気楼のようにゆらゆらと揺らめいている。それはさながら、有り余る魔力がその解放する場所を探し求めているかのようにであった。

《覇魔導士アーカナイト・マジシャン》     ATK / 1400     DE  
F / 2800

《魔法都市エンディミオン》     counter / 2     3

《王立魔法図書館》     counter / 0     1

「召喚に成功したため、このカードに魔力カウンターを2つ乗せる。そして、その数×1000ポイント攻撃力がアップ！」



《覇魔導士アーカナイト・マジシャン》 ATK/1400 34  
00 counter/2

「攻撃力3400だって!？」

元々の攻撃力が先程より1000ポイント多い分、上昇後の数値もそれに合わせて高くなっている。

攻撃力3000を超える大型モンスターの出現に、観客もわっと盛り上がりを見せた。

「更に《魔力掌握》を発動! 王立魔法図書館にカウンターを1つ乗せる。魔法カードの発動により、もう1つ。エンディミオンにも1つ乗るよ」

《魔法都市エンディミオン》 counter/3 4

《王立魔法図書館》 counter/1 3

「そして王立魔法図書館のカウンター全てとエンディミオンのカウンター3つを取り除き、王立魔法図書館の効果で合計2枚ドロ！」

《魔法都市エンディミオン》 counter/4 1

《王立魔法図書館》 counter / 3 0

手札が徐々に回復していく。そして、マナは一枚のカードを手にとった。

「魔法カード《闇の誘惑》を発動！ カードを2枚ドロース、手札の閻属性《執念深き老魔術師》を除外！」

《魔法都市エンディミオン》 counter / 1 2

《王立魔法図書館》 counter / 0 1

これで打ち止めか。マナは手札をざっと見て確認すると、一つ頷いた。

「うん、よし！ いくよ、覇魔導士アーカナイト・マジシャンの効果発動！ このカードの魔力カウンターを1つ取り除き、相手の場のカード1枚を破壊できる！ 私はエンディミオンのカウンターを1つ取り除き、十代くんの場のサンダー・ジャイアントを破壊！」

アーカナイト・マジシャンの杖から先程よりも巨大な魔法が解放され、それはサンダー・ジャイアントを丸々覆いこんで、そのまま破壊した。

「く……！」

《魔法都市エンディミオン》

counter / 2 1

見通しの良くなった十代の場を見て、マナが得意げな笑みを見せた。

「これで今度はそっちが空っぽだね。いって、ダイレクトアタック 覇魔導士アーカナイト・マジシャン！ 十代くんジ・アーカナイト・マジックに直接攻撃！ 《真秘奥魔導撃》！」

サンダー・ジャイアントに向かって撃ち出されたそれよりも更に大きな魔力の塊が作り出され、まるで隕石のように十代の頭上に降りかかる。

「ぐうっ……！」

そんな攻撃に晒された十代はたまったものではない。そのライフポイントは、一気に危険域まで削られてしまうこととなった。

十代 LP : 3500 100

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンドだよ！」

今ので一気に100まで十代のライフは減少した。

学園でも実力者として名を上げている十代の追い込まれた姿に、男子はこれまでの流れるに当然として、女子勢からも歓声上がる。

それは十代がやられているのが面白いのではなく、単純に実力者をマナが……というより、女子が圧倒しているのが新鮮だからだろう。

そして俺のすぐ後ろにも、マナの活躍に喜んでいる子がいる。

「うわぁ！ マナさん、強い！ ね、遠也さん！」

「そうだなあ。魔力カウンターとブラマジガールの併用とか、よくやるよマナも」

普通ならブラマジガールは抜くところだろうに。そこらへんはこたわりなんだろうな。気持ちはわかるけど。

「このまま十代さんに勝ったら、いったい何をお願いするつもりなんだろう、マナさん」

「さあな。無茶なものでもない限りは、聞いてやるつもりだけど…」

「…」

日頃お世話になっているのは事実だし、それでなくてもマナがわざわざ口にするほどのお願いなんだ。あえてそれを断る理由もない。

俺の言葉に、そっかあと頷くレイ。しかし、レイよ。それはいわゆる皮算用つてもんだぞ。

「レイ、お前は十代が負けると思っているみたいだけど……まだわからないぞ」

「え？ でも十代さんの場合は空っぽだし、手札も0枚だよ」

レイはきょとんとした顔で言うが、それは十代に対する認識が甘いと言わざるを得ない。

「あいつは、たとえ手札が0でも逆転する時はしてみせるさ。そういう奴だからな」

俺はそう笑い交じりに答えて、再び視線を二人に向ける。レイはそんな俺の言葉に首を傾げるが、俺が視線をデュエルステージに戻したのを見て、自らもそうする。

ちょうどマナがターンの終了を宣言したところだ。つまり、次はフィールドと手札が0で迎える十代のターンである。

そしてそんな劣勢でありながら、十代は笑っていた。そこに諦めも絶望も存在していない。ただでキュエルを楽しむ姿がそこにあった。

それでこそ、十代である。

「へへ……まだまだ！　いくぜ、俺のターン！　ドロー！」

手札は今引いたカードだけ。ゆえに、十代はそのカードをすぐさま使用する。

「魔法カード《ホープ・オブ・フィフス》を発動！　墓地の《E・HERO サンダー・ジャイアント》《E・HERO フレーム・ウイングマン》《E・HERO スパークマン》《E・HERO クレイマン》《E・HERO フェザーマン》をデッキに戻し、場と手札が0のため3枚ドロー！」

これで、手札は3枚。

「更に《強欲な壺》で2枚ドロー！　そして《E・HERO バブルマン》を召喚！　場にバブルマン以外カードが存在しないため、2枚ドローするぜ！」

《E・HERO バブルマン》　ATK/800　DEF/1200

更に1枚と1枚がプラスされ、十代の手札が0から一気に5枚まで回復する。ハンドレスから手札の規定枚数に迫るところまでドロ―するとは、よくやるよ。

そしてそれを見たレイの反応はというと……。

「……………」

見事なまでにぼかーんである。宝札シリーズも使わずに、ここまで一氣に手札を回復する光景はなかなか見れるものじゃない。しかも、残りライフ100という土壇場だ。それはこんな顔にもなるうというものである。

そして相對しているマナは苦笑い。十代の持つ驚異のドロ―能力は、誰もが認める出鱈目さなのである。

「更にフュージョン・リカバリー《融合回収》を發動！ 墓地の《融合》と《E・HEROバーストレディ》を手札に加えるぜ！ そして《E・エマーゼンシ―コール》を發動し、デッキから《E・HERO フェザーマン》を手札に加える！ そしてバーストレディとフェザーマンを融合！ もう一度来い、《E・HERO フレイム・ウィングマン》！」

《E・HERO フレイム・ウィングマン》 ATK/2100  
DEF/1200

「今度は《融合賢者》を発動！ デッキから《融合》を手札に加える！ 更に《死者蘇生》を発動し、墓地の《E・HERO エアーマン》を特殊召喚！」

《E・HERO エアーマン》 ATK/1800 DEF/300

「そしてエアーマンの第1の効果発動！ 自分の場のエアーマン以外のHEROの数だけ場の魔法・罠カードを破壊できる！ 俺の場のHEROはバブルマンとフレーム・ウィングマンの2体！ よって2枚の伏せカードを破壊するぜ！」

「うう……ここにきてエアーマンなんて……」

破壊されたのは《マジシャンズ・サークル》と《ガガガシールド》か。共に魔法使い族を相手取る時には厄介なカードだ。十代にとっては僥倖。マナにとっては痛手だな。

「そして《融合》を発動し、エアーマンと水属性のバブルマンを融合！ 現れる極寒のHERO！ 《E・HERO アブソルーツ zero》！」

《E・HERO アブソルーツ zero》 ATK/2500 DEF/2000 D



「更に速攻魔法《融合解除》！ アブソルトZeroを融合デッキに戻し、バブルマンとエアーマンを特殊召喚！ この時エアーマンの第2の効果発動！ デッキから《E・HERO スパークマン》を手札に加える！」

《E・HERO バブルマン》 ATK/800 DEF/1200

《E・HERO エアーマン》 ATK/1800 DEF/300

この十代のプレイングに、周囲の観客は揃って「は？」といった様子。つまるところ、何故わざわざ融合召喚したモンスターを即座に融合解除？ ということだろう。

その疑問はレイも同じようで、困惑した目で十代のプレイングを見ていた。

対して、俺は純粹に驚きの顔。ホント、よくやるよ十代の奴は。

そして実際に相対しているマナはというと、もう諦めきってどこか達観した顔だった。……まあ、ほんの1ターンでこうきたらねえ。思わずしみじみと頷く俺だった。

そんな周囲をよそに、十代は言葉を続けていく。

「アブソルトZeroの効果発動！ このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」《

絶対零度 - Absolute Zero - ！」

十代の言葉通り、マナの場の覇魔導士アーカナイト・マジシャン、王立魔法図書館の2体が凍り付いて氷像と化したのち粉々に砕け散る。

そのアブソルートZeroの効果が炸裂した瞬間、周囲の観客は揃って「はあ!?」となった。それはもちろん、レイも例外ではない。「ええ!? なにその効果!?」と驚きまくりである。

まあ、フィールド上から離れた時、なんていう緩い条件でサンダー・ボルトが飛んでくるって言うんだから、普通は驚きだろう。俺なんかは元いた環境が環境だったし、他の十代に近い皆はもう慣れたから気にしていないが。

「バトルだ！ フレイム・ウィングマン、バブルマン、エアーマンダイレクトアタックでマナに直接攻撃！ いっけえ！」

フレイム・ウィングマンが右腕についた竜の喙から炎を、バブルマンが水の放射を、そしてエアーマンが風の刃をそれぞれ同時に繰り出す。

伏せカード、およびモンスターなし。場には魔法都市エンディミオンしかないマナにそれを防ぐ術はなく、それらの攻撃全てをマナは無防備に喰らうこととなった。

「きゃあああっ！」

マナ LP:32000

攻撃力2100、800、1800の合計4700ポイント。それはマナのライフポイントを一気に削り切って余りある威力であった。

っていつか、ホント凄いな十代。あの状況から僅か1ターンで大逆転とか。あいつのことだから、このまま簡単に終わるはずはないと思っただけだが……。ここまでやるか。

ドローだけ見れば、十代って世界最強なんじゃないか？ そんな気さえするほどだったぞ。

「う、うそ……あそこからマナさん負けちゃった……？」

そして土壇場からの大逆転劇に、自分の目を疑っているレイ。

その気持ちはよくわかる。まさかあの状況から1ターンのうちに勝利にまで持って行けるとは誰も思っていなかったに違いない。

これが十代の恐ろしさよ……。エアーマンとZeroだけでこれなんだ、漫画版HERO全部持ってたらどうなっていたことが……考えたくないな。

エアーマンなんて1枚しか入ってないのに3回も召喚されてるんだぞ。順調に過労死組に近づいているなアイツ……。

『じ、十代選手の勝利です！ 兄貴が勝ったのは嬉しいけど、ブラマジガールが、ブラマジガールがあ……』

『ええい、うるさいぞ貴様！ 鬱陶しいから泣くな！』

放送席に座る翔と万丈目がマイク越しに漫才を始めている。

それを横目で見つっ、俺はフィールドの二人に視線を戻した。

「ガツチャ！ 楽しいデュエルだったぜ！」

「もう、最後のはやられちゃったなあ。勝ちたかったのに……」

言っ、マナの目がこちらを向いて視線が変わる。だが、マナはすぐにその視線を俺から外して十代の方へと戻した。

「でも、私も楽しかったよ十代くん。また機会があったらデュエルしてね！」

「おう！ いつでも大歓迎だぜ！」

マナは十代の言葉に満足げに頷き、次いで観客席の方に笑顔を見せて手を振った。

「みんなも応援ありがとう！　すごく嬉しかったよ！　この後はみんながコスプレデュエルを楽しんでね！」

ニツコリ笑ってそう言えば、単純な男子連中は興奮しきりで「おおおー！」と叫び声をあげて応えている。

興奮のあまり言語になっていないが、まあそれだけブラマジガルというのはこの世界においては特別な立ち位置にあるということなのだろう。下手なアイドルよりも人気があるというのだから、凄まじい。

マナはそんな彼らの反応にもう一度大きく手を振ると、その後はそのまま俺たちの方に一直線にやって来た。向こうでは、翔が『これにてプレデュエルは終了です！　皆さんもコスプレデュエルを楽しんでください！』とアナウンスを行っている。

マナはそのまま俺の前まで来て、正面から俺にもたれかかるように抱き着いてきた。

「うー……負けたよ、遠也。最後のあれは正直ないよ、勝ったと思っただのにー」

「はいはい。確かにあれは予想できなくても仕方ないよ」

泣きつく真似を見せるマナの頭を抱えるようにして撫でつつ、俺はとりあえずはそう慰める。

そしてそんな俺たちに向くられる視線、視線、視線。

そりゃさつきまで注目のど真ん中にいたマナがこうして抱き着いていれば、耳目を集めますわな。

俺は居心地の悪い思いをしながら、とりあえず撫でていた手を離して立つように促す。

それに従って俺から離れたマナに、俺はこの場からの脱出を提案する。

「それじゃ、イエローの出店でも見て回るか？」

言いつつ、要するにこの衆人環視の中を早く脱したかっただけである。男子どもの鋭い眼光が俺の背中に嫌な汗を量産しているのだ。

「うん！ でも、鮎川先生が言っていた時間になったら保健室に戻るんだからね」

「わかってるって」

俺の言葉に賛同しつつ、しかし釘を刺すことも忘れないマナ。そ

のまるきり保護者のような役回りに、俺は思わず苦笑した。

マナは一度寮の中へと戻り、制服姿に戻って再び俺たちの元に駆けてくる。そして俺の後ろにいたレイが場所を譲り、そこにマナが収まった。マナは車椅子の取っ手を持つと、くるりとその場で180度方向転換を行う。

向かう方向はイエロー寮。レッドのほうは十代や翔たちが何とかするだろう、たぶん。俺も手伝えたらよかったが、何分この身体では満足に動くこともできない。

セブンスターズのことあつて本心から気を抜くことが出来ない皆には悪いが、今日ぐらいは羽目を外して楽しませてもらおう。せっかくのお祭りなんだし、それにレイも来てくれているんだしな。

俺はマナが帰ってきたことで少し距離が開いたレイに顔を向ける。

「レイ」

「遠也さん？」

「腹も減ったし、とりあえず焼きそばあたりを買いに行くか？」

「あ……う、うん……」

俺がそう声をかけると、レイは嬉しそうに頷いて俺の隣に並ぶ。

「じゃあ、いくよー」

マナが車椅子を押して、俺の身体がそのまま前進していく。

レイは俺の横に立ち、自分の近況やこれからどうするのかといったことを、楽しそうに俺たちに話してくれる。

俺とマナはそれに頷きを返し、時に突っ込み、時に逸れていく会話を楽しみながら三人でイエロー寮までの道を歩いていく。

既にレッド寮で感じていた男子の視線（爆発しろ光線）は感じられない。まるで重荷から解放されたかのような感覚を安堵と共に感じながら、俺たちは祭りの定番　出店へと向かっていくのだった。

その後、俺たちはさんざん買い食いやらデュエルやらを楽しんだところで保健室へと戻っていった。



ベッドに戻った俺と、ベッド脇に座るマナとレイ。既に今日だけでかなり話しているが、不思議と話が尽きることはなく、俺たちは三人でずっと何でもない話に夢中だった。

それはレイが帰らなければならぬ夕方になるまで続き、ベッドから動けない俺は保健室での見送りとなった。

最後にぎゅっと抱き着いてきたレイの背中を撫でてやり、俺はレイを解放する。マナにも同じく抱き着いて別れを惜しんでいたレイだったが、最後には笑顔で俺たちに手を振っていた。

「それじゃあ、遠也さん、マナさん！ またね！」

そう言って明るく去っていくレイに、俺たちの方こそ寂しくなってしまうほどである。

三人で話していた時は、あれほど狭く感じた保健室だが、一人いなくなるだけで受ける印象はだいぶ違う。

夕陽の赤色も寂寥感を増幅させているのか、なんだか物寂しい気分になる俺だった。

そうして、今現在保健室にいるのは俺とマナの二人きりである。鮎川先生はレイを含めた俺たちに気を使って、席を外してくれているからだ。

マナはベッド脇の丸椅子に腰を下ろして、レイが出ていった扉の方を見ている。その姿を何とはなしに見ていて、俺は今日のコスプ

レデュエルを思い出していた。

そうしていると、ふと俺はあることが気になりだした。こういうことは一度気になってしまつと、どうしても心の中からそれが拭いきれない。

まるで小骨が引つかかったかのような違和感。それに押される形で、気づけば俺は口を開いていた。

「そういえば、お前が十代に勝ってたら、何を俺に頼むつもりだったんだ？」

それは結局十代に負けたため、その後もずっと触れないでいたことだった。

レイと三人で楽しんでいる間は特に気にもならなかったことだったが、こうして落ち着いて今日のことを振り返ってみると、そのことがどうも気になってしまった。

俺にお願いするつもりだった“ご褒美”とは何なのか。

俺はそれをマナに尋ねる。

「うーん、何って言っても……」

俺の言葉を受けたマナは、そう曖昧に言葉を濁して困った顔にな

った。

何をそんなに困ることがあるのか。俺はそんな疑問を抱くが、しかし、それもその次にマナが取った行動で霧散する。

ベッドで上半身を起こしている俺に、立ち上がったマナが覆いかぶさるように顔を近づけてきたのだ。

近い距離に見える綺麗な顔に、思わず思考が止まる。そしてその一瞬の空隙の間に、俺とマナの唇は確かに重なったのだった。

数秒。時間にしたら、たったそれだけの短い時間。

しかし俺にとっては数分にも数十分にも感じられた長い時間は、マナがゆっくりと唇を離して身を引くその時まで、俺の身体を硬直させたままだった。

たぶん、呆気にとられているだろう俺と、赤い頬で照れ笑いを浮かべているマナ。ちよつとアンバランスな顔で黙ってしまった二人だったが、先に口を開いたのはマナだった。

「あ、あはは。本当は勝ってないけど……とりあえずご褒美ありがとうございます、遠也」

照れ隠しなのかわざとらしい笑いを混ぜながら、マナがそう言うて自分の唇を指さす。

その仕草に、お互いにさっきまで触れ合っていた箇所を意識して

しまい、俺は今更ながら顔が熱くなってくるのを感じた。

そして、俺はその本調子とは程遠い揺れ動く心のまま、何かマナの言葉に返さなければと気持ちを焦らせる。そしてその状態のまま口を開いた。

「……ど、どういたしまして？」

結果、俺の口から出たのはそんな言葉。焦るあまり、何か言葉のチヨイスをミスった気がしてならない。

俺の額から一筋の汗が伝わり、そして言われたマナのほうも黙ってしまふ。

これは……やらかしたか？

俺が自分の中でその結論に達し、一層焦燥感を募らせようとした、矢先。

「……ぷっ、あはははっ」

不意に、マナの口から笑い声が漏れた。

こらえきれないとばかりに響くその笑い声に、俺は再び呆気にとられる。馬鹿にしたようなものではなく、単純におかしいとばかりに笑うマナは、目尻に浮かんだ涙を光らせながら、俺の横、ベッド

にぼすんと腰を下ろした。

「ふふ……変なの、どういたしましてなんて。たまにちょっとズレてるよね、遠也は」

「う、うるさいな」

からかうような物言いに、俺は照れもあつて無然となる。

しかし、そんな俺の態度もマナの笑みを一層深くさせるだけだった。

そして、マナはそのまま身体を傾けさせ、頭を俺の胸辺りに預けてくる。

たったそれだけの動作、これまでよくあつた触れ合いと変わらぬのに、さっきの出来事が脳内に再生される。それだけで、俺の心臓がひときわ強く跳ねた。

「……なあ、マナ」

「なに？ 遠也」

俺は身体を寄せているマナの肩を掴み、そのまま抱き込むようにして更に俺の方へと引き寄せた。

「ごく自然に、そうしていた。」

「やっぱり、俺はお前が好きだ」

「うん、私も好きだよ遠也」

気が付けば、当たり前のようにその言葉を口にしていて。

そしてマナも、当然のように受け止めて同じ言葉を返してくれる。

この「好き」は友愛としてのそれではない。多分に男女の色を含んだ、もっと別のものである。

俺はその意味を込めて言ったし、マナもそう受け取ってくれただろう。そうだという根拠のない確信が俺の中にはあった。

それでも、俺たちの態度に恋が叶ったという達成感はなかった。いや、それどころかむしろ、この「好き」を俺たちは既に持っていたという再確認でしかなかったのだ。

マナに「好き」と告げ、そして「好き」と返された瞬間。俺たちは、確かにお互いを恋人としての意味で好き合うことになった。しかし、それはこの時が始まりではなかったのである。

きつと、マナと出会ってからの一年……いや、もうすぐ二年か。その間に、マナの存在は俺にとって大切なものになりすぎたのだろ

う。

俺はマナをこの世界で一番大切に思っている。その気持ちの中に、マナを異性として好く気持ちも含まれており……結局俺は、恋も、友情も、家族愛も、それら全部ひっくるめてマナが「大切」なのである。

だからこそ、俺にとってこの気持ちは既に自身の内で通り過ぎていたものだった。ただ、明確に区切りをつけていなかったから、こうして今日その区切りをつけただけにすぎないことだったのだ。

この「好き」でさえも通過点でしかないほどに、俺にとってマナの存在は大きなものになっていた、というわけなのである。

俺と同じ気持なのかはわからない。けれど、マナにとっても、この「好き」は恋の終着というような意味合いのものではなかったのだろう。既に抱いていた気持ちを、マナもまた再確認したにすぎなかったのだ。

だからこそ、ごく自然に紡がれた言葉だった。俺たちはきっと、俺たちが思うよりもずっとお互いのことをこの二年弱で大切な存在として認識しているのだ。

気づいてみれば、それだけのこと。

俺は確かにマナを相棒だと思っているし、家族だと思っている。それが、これまでのこと。そして今日、俺はマナを恋人として思う。これが、今回の「好き」という気持ちだ。

更に、それらの気持ち全てをひっくるめて俺はマナが「大切」で、

俺にとって唯一無二の「特別な存在」なのだと思う。

それが、俺のマナに対する気持ちの全てだった。

「あー、なんか恥ずかしい」

「あはは、それは私も同じだよ。だって、私なんか自分からキスしたんだよ？」

ま、既に持っている「大切」という大きな気持ちの中に含まれていた気持ちを自覚しただけとはいえ、一般常識が俺たちに無いわけではないのだ。

つまり、世間的に言う「告白」をした俺たちは、互いに今更ながら恥ずかしさがこみあげてきていた。

それを、俺たちは軽口を交わすようにすることで誤魔化する。

ははは、と笑い合い、下から覗きこむマナの顔を見る。

その時、マナもまた俺を見ており、ふと俺たちの目線が絡まった。

ホント、何の気もなしに目が合っただけ。だというのに、俺の顔はどういうわけか勝手にマナに接近していた。

……夕陽の差し込む保健室。そのベッドの上で、二つの影が重なり合う。その時感じた唇、その感想としては、とても気持ち良かったただけ言っておく。



\*

後日。

俺たちはそれまでとほとんど変わらない関係のまま生活していた。今まで通りに一緒に過ごし、俺はベッドで、マナはその横で俺を手伝ってくれたり話をしたりしている。

つまり、本当にそれまでと同じ生活であった。表面的には何も変わっていない。

だが、あの日以来少し変わったことがある。

それは……。

「あー……」とつぶつぶしていると落ち着く」

「お前なあ、一応怪我人なんだぞ、俺」

俺の腕を抱え、ぎゅっと抱き着いているマナ。それに、呆れ気味で返す俺。

そう、あの日以来少し変わったこと。それは、触れ合い……とい  
うか、ボディタッチ型のスキンシップがとも増えたことである。

ちなみに、キスなんかもその一つだ。

それ自体は喜ばしい。こんな可愛い女の子とイチャイチャできて、  
喜ばない奴はいない。

だから、問題はただ一つ。

俺の理性、いつまで持つかなあ。

俺の腕を取り、リラックスしているマナの顔を見て、思う。

マナの豊富な胸に挟まれた自分の腕、そこから伝わる感触などに、  
俺はかなりの神経を使って対処していた。

目下、俺の敵は自分の本能ということになりそうだ。

俺は自由の利かない腕を一瞥し、心の中で溜め息をつくのだった。



## 第28話 特別（後書き）

十代VSマナ。

使用カードはアーカナイト・マジシャンです。魔法使いシンクロっていったらコイツですよね。

そして見どころは十代の逆転劇w エアーマンとZero強いっす。

そして残り三分の一……やっぱり学園祭と言えばイベントシーン！

（違

書いていたら自然とこの流れに収束していきました。面白いものですね。

遠也とマナ、二人の関係にもほんの少しの変化……のようなものが起こりました。

リア充、ぐきぎ。

さて、次はセブンスターズに戻る……と思います。

それでは、次回もぜひよろしくお願いします。

……眠い……。

意識が朦朧としながら書き上げました。

一度寝て、起きたら見直さないと……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6097w/>

---

遊戯王GXへ、現実より

2011年12月18日05時50分発行